收容書目

三貨圖彙

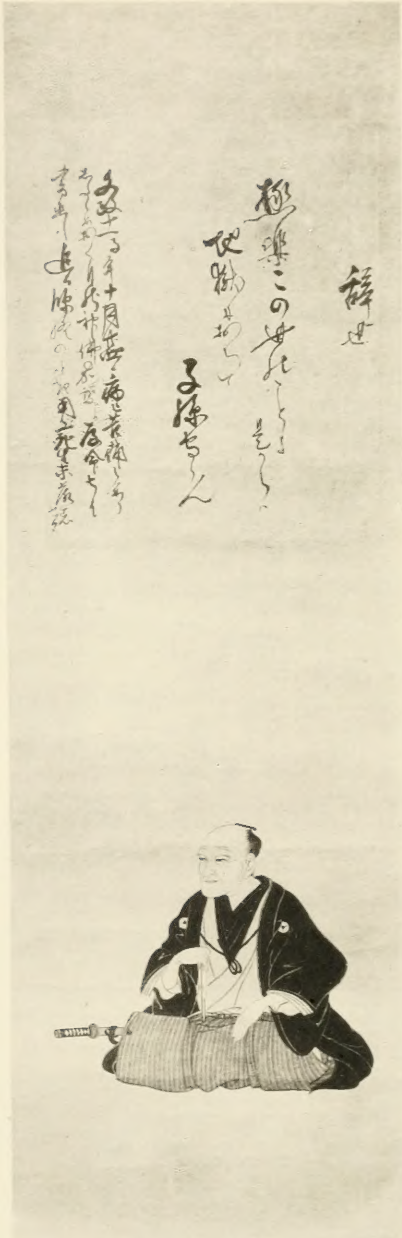
乾卷

Takimoto, Seiichi (ed.)
Nihon keizai sōsho

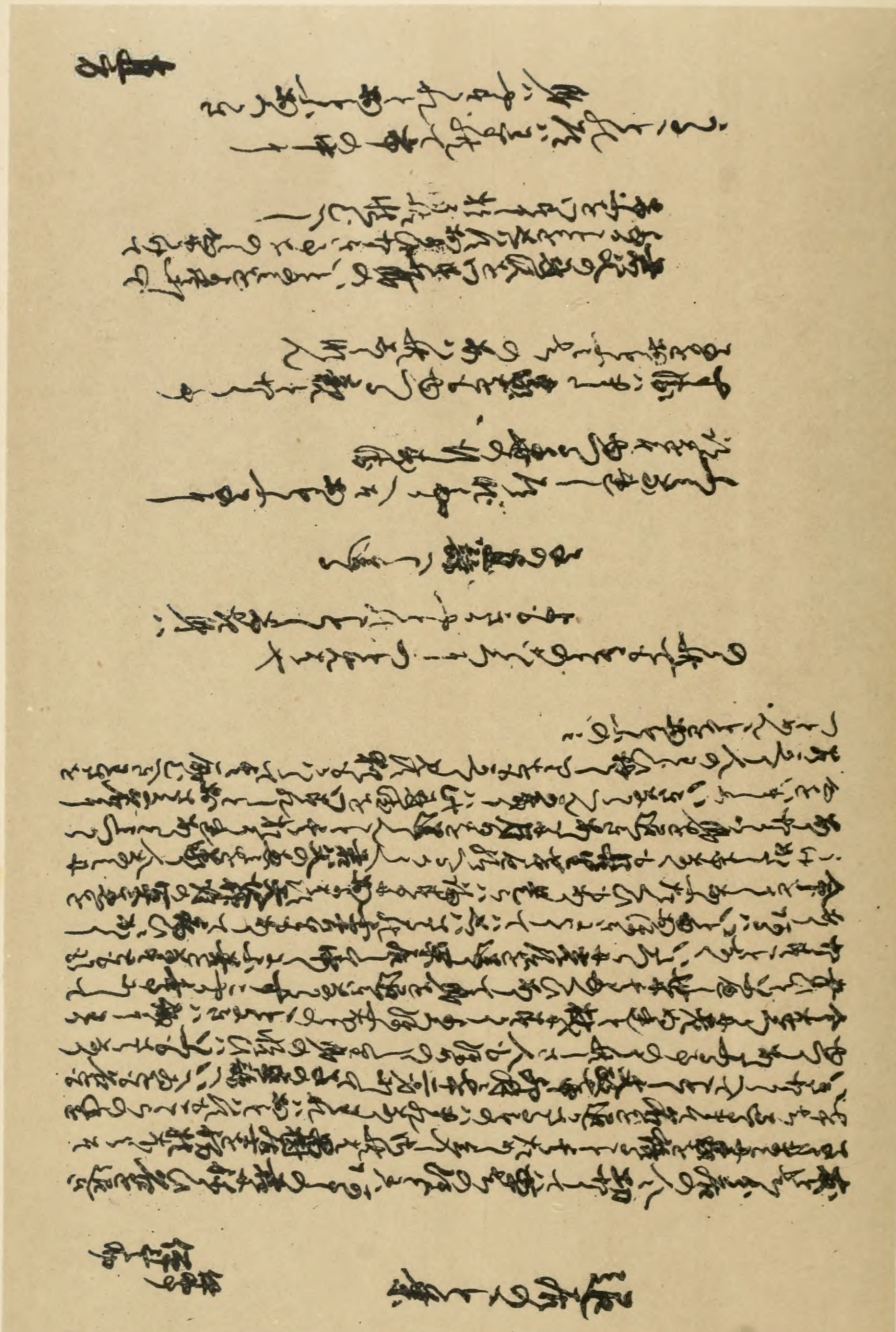
日本經濟叢書

卷二十七

日本經濟叢書刊行會



草間直方肖像幷筆蹟



草間直方眞蹟

日本經濟叢書卷二十七目次

目次終

解題

三貨圖彙

本書は我國金銀錢三貨の鑄造、及通用に關する、古今の沿革を詳細に記述し、且一々精確なる貨幣圖を掲げて、其の形狀色合量目等を考證したるものにして、此の類の著作中、比較的最も完備したるものなり、著者は書中に往々近藤重藏氏の「金銀圖錄」を引證し、同書を重視すること、殊に甚だしきが如くなるも、是れは勿論著者の謙遜に出でたる言にして、其の實近藤氏の「圖錄」は、單に所謂弄錢家の玩具たるに過ぎざるが如くなるも、本書は殆ど儼然たる大貨幣史にして、經濟史を研究する者の爲めに、缺く可らざる重要のものなれば、固より尋常「錢譜」の類と同視すべからざるなり、明治八九年の交、大藏省紙幣寮に於て「大日本貨幣史」を編輯するに當り、本書を參考して、得

る所少なからざりしと云ふは、決して偶然にあらざるなり
著者の凡例にも記せるが如く、本書は寛政五六年頃より、文化十二年に至る
二十餘年間に渉りて、漸く脱稿したる大事業なれども、著者は當時公私繁忙
の實務に當り、勿論學究的に著作のみに懸り居たるものにあらず、此の長き
年月間、本業の暇に、或は諸書を渉獵し、或は舊記を考證して倦まず怠らず、
丹精を凝らして編述したるものなり、故に著者の自白の如く、書中處々に「文
續の前後、或は重言、又は書寫の誤り等」之れなきにあらざるも、それは所謂
白璧の微瑕にして、固より本書の爲めに疾むに足らざるのみならず、斯くの
如き小缺典は、偶〻以て著者が本業多忙の際、心血を濺いで身自ら著作した
る、眞面目を推知するに足るものあらん、之を要するに、本書は一の成書と
しては多少の不備缺典あるに拘らず、材料豐富にして、經濟史の資料とすべ
き記事多く、就中次卷に收容すべき「物價ノ部」の如きは、全く「錢譜」の形式を
脱し、物價殊に米價の沿革、并に之に關する雜記等を蒐集したるものにして、

吾人の參考とすべきもの鮮少に止まらざるなり、唯惜らくは、本書に於ては、德川時代に於ける、三貨流通の額、いつも甚詳明ならず、又其の位・品質に關する事は、多く之を缺如し、金銀貨の含有純金銀の割合等を記載せざるは、凡例にも見ゆるが如く、著者憚る所ありて、故らに缺如したるものなるべきも、筆を下して此等の點に及ばざるは、宛も龍を畫きて睛を點せざるの憾なきにあらず、然れども是れ寔に時勢の罪にして、著者の過にあらざる事を忘る可らざるなり

著者草間直方は、通稱を伊助と云ふ、初め文次郎、又仲我と稱す、京都の人、枡屋唯右衞門の子なり、寶暦三年、綾小路烏丸通の家に生れ、十歲にして、大阪の鴻池家に仕へ、精勤怜悧にして、主人の信用厚く、遂に尼ヶ崎同家の女壻となり、鴻池を名乘つて一門に列し、今橋二丁目に屋敷を得て之に移り、日々本家に出勤して店務を管理し、文化五年、勤務の傍ら、自分新たに家業を營むことを許され、翌年は本家の勤仕をも免ぜられ、全く獨立して本家同樣、

両替商を營み、家業日を逐ひて繁榮に赴き、鴻池伊助の名、四方に聞ゆるに至りしかば、肥後侯・南部侯を始め、諸大名中、之を信任して、其の財政の整理方を託したる者少なからざりしと云ふ、文化七年、家督を其子伊作に讓り、退隱して自ら伊三之助と稱し、風流茶事を以て、其の餘生を送り、天保二年、年七十九にして、家に歿せり、著す所は、本書の外に、茶器名物圖彙、麓之栞、草間遺稿及御買米に關する記錄等數種あり、編者曾て草間家に就き、茶器名物圖彙の草稿を一見したる事あり、大册八十餘卷の大著作にして、所謂名物茶器は、奇を盡くし、珍を究めて、悉く網羅せざるはなく、其の圖は形狀、何れも精巧を極め、色彩欝蒼として、紙上に溢るゝを覺ゆ、編者の如き沒風流漢と雖も、之が爲め楚々として食指動くの感なくんばあらざるなり、乃ち著者が畢生の心血を濺ぎたるは、寧ろ此の書にありたりと云ふも、失言にあらざるべしと信ず

著者は平生俗事を管し、錙銖の利を爭ふの業務を經營しながら、其の人と爲

り溫藉風流、毫も一般商人の根性を有せざりしは、最も感ずるに餘りありと云ふべし。有栖川韶仁親王、曾て著者を殿中に召させられ、若宮殿下其の他、御一門御同座の上、御側近く拜謁を仰付られ、茶事及和歌などの御物語あり、やがて御自作の茶杓に、御引歌を添へて賜はり、其の外厚く御物を下賜せられたるが如き、格別の御待遇ありたるは、商家に破格の光榮なりとし、著者自ら「參殿之記」なるものを認めて、今尙其の家に傳へて、子孫の誇とせり、著者の心志の高潔なるにあらずんば、安んぞ斯の如き事あるを得んや、然れども今日吾人が著者の爲人に付き、特に大に仰景欽慕する所のものは、著者が富有にして、善行を爲すに吝ならざりし一事にあり、蓋し著者を以て「天稟の善人なり」と公評したるは、肥前平戶の城主、松浦壹岐守(名は淸、靜山と號す)にして、同人の著せる「甲子夜話」を見れば

今大坂ニ鴻池伊助ト云ル富商アリ、學文ハナカリシガ、天稟ノ善人ナリ、一年子ヲ失シトキ、人來リ弔シテ、陰德ノアル人。カヽル事ニ逢ヒ玉フハ、如

何ナルコトヨト云ケレバ、伊助申スニハ、我輩不徳ノ者、云マデモナシ、世ニスグレタル好人モ、果報惡シキ日ニ逢フコト、珍ラシカラヌコトナリ、善事ヲ爲セバ、天之レニ善報ヲナス、惡モ亦惡報アリトハ、定マリタル理ト存ジ候、然レドモ善ヲナセドモ、不仕合セナル者モアリ、惡モサノミ、天責ナキモアリ、是ハ天ノ間違ト存ジ候ナリ、何事モ間違ヲ當テニシテハナラヌコトユヱ、只々定リタル理ヲ、守ルベキコトヨ、ト申シタリトナリ、此ノ人塙檢校ト懇交ニテ、塙多クノ書ヲ買ヒ、種々ノ書ヲ彫刻スル費ナド、常ニ助力セリ、前後ノ金數、少カラザルコトナレドモ、聊カ厭フ色ナシ、塙歿後、其家內困難ナルベシトテ、又助力セリトナリ、總テ人ノ善事ヲ行フコトニ、金銀ヲ費スハ、露塵イトフ心ナク、必ズ力ヲ合セシト云、商家ニハ稀ナルモノナリケリ(甲子夜話卷二一)

と記しあり、此の一事を以てしても、著者は啻だ商家に稀れなるのみならず、幕末澆季の世の中、士分以上にあつてすら、容易に見出し難き大人物たりし

や、明なりと云はざる可らず、本叢書第二十五卷に收容したる「夢の代」の著者、山片蟠桃と、著者草間直方とは、同時代に、同業を以て、同じく大阪の商界に雄飛し、其の出身は共に丁稚小僧より、一躍して大家の別家となりたるなど、不思議にも兩人全く其の經歷を同くし、蟠桃は儒學に志して、多少漢學臭味を帶び、直方は和學を嗜んで、國學者流の趣あり、此の一點だけは兩者相異なりと雖も、共に學を好んで、筆まめなりし事は同一にして、「夢の代」と「三貨圖彙」とは、共に兩著者の精力を竭したる、一大著作たるを失はず、而して尙ほ一ッの酷だ似寄りたる一美事は、蟠桃も亦直方の如く、頗る善行家にして、其の慈善的事業の實例は、枚擧に遑あらずと云へば、此の兩人は此の點に於ても、正さに其の軌轍を同くするものなり、由來大阪商人は上方贅六の綽名あつて、只だ眼前の私利私欲にのみ、仮々たるもの丶如く、思惟する者あるも、此の兩人の如きは、東西兩京に於ても、容易に得難き模範的人物にして、大阪の商人が、永久に誇るべき君子商たらずんばあらず、編者

は兩川前に於て既に「夢の代」を出版し、今又此に本書を收錄するの機會を得たるを喜ぶと同時に、聊か所感を記して、著者に對する尊敬の意を表すること是くの如し

本書の底本は、著者同族の後裔草間繁藏氏（現に鴻池銀行員たり）の家に傳へたる正本を、借寫したるものなれども、此の正本は、著者が他人に命じて、謄寫せしめたるものにして、書中儘ま或は誤寫なきにあらず、然れども本叢書の主意は、相成るべく原本の眞面目を存するにあるが故に、其の疑はしきは、其の儘になし、又明かに誤寫と認めらるゝものにして、之を訂正したる所には「原本ニ何々トアリ」と附記して、訂正の箇所を示せり、又卷首に掲げたる著者の肖像筆蹟、及皆川淇園・中井竹山兩人の自筆序跋は、何れも皆草間家に所藏せらるゝを、寫眞銅版に付したるものなり

編者は數年前、佐野某氏の謄寫本と稱する、本書の寫本、數部を閲覽したることあり、皆何れも內容同じく、筆蹟亦同一にして、而かも大阪造幣局の藏

印まで、皆同樣に朱墨を以て謄寫しあり、蓋し其の原本は、造幣局の藏本なるが如し、依て草間家の正本と、對照校合するに、互に長短出入ありて、一概に其の是非を判定し難しと雖も、之を要するに草間家の正本は、本文に於ても、又貨幣圖に於ても、比較的完備して、著者が最終の校定本らしく思はれ、佐野某氏の謄寫本の原本は、全く著者の最初の草稿本かと、推測せらるゝ廉なきにあらず、而して坊間稀れに流傳する謄寫本は、大概皆佐野本にして、草間家の正本を寫傳したるものは、編者の未だ曾て寓目せざる所なり

本書の刊行に就きては、前記草間繁藏氏は家藏の正本、及肖像幅并筆蹟等を貸與せられたるのみならず、重要なる傳記材料の謄寫を許されたり、草間氏の厚意微りせば、編者何を以て、此の大著作の刊行を、完うすることを得んや、又編者は日本經濟叢書刊行會理事佐藤卯兵衞・同高木範之丞兩氏に向つて、聊か謝意を表せざるを得ず、卽ち本書の性質上、最も重要なるは云ふ迄もなく、貨幣圖なるが、草間家の正本の圖は、著者が實物を、其の儘墨刷となし、切

抜張付けたるものなれば、中には圖樣字畫すら、甚だ不分明なるもの鮮なからすと雖も、此の正本の眞面目を存せんが爲めに、兩氏は悉く之を寫眞版にする事を快諾せられ、書中一千二百八十餘個の貨幣圖を、一切皆撮影し、著者の肖像・筆蹟及淇園・竹山兩氏の自筆序跋を併せて、之を石版に付し、之が爲めに莫大の費用を吝まざりしのみならず、又正本の謄寫校合の爲め、特に編者の助手として、數名の技工を雇用する事を承認せられ、其の他彼此互額の負擔に應ぜられたるは、編者の頗る多とする所なり、茲に此の機會を利用して、一言を謝す

大正五年七月　　瀧本誠一

解題終

編者曰く左の一編は著者が本書編纂の主意を記して子孫に遺したるものなれば解題の補足として特に此に掲げて參考に供す

金銀錢の儀は、往昔和銅年より文化十二亥年迄、千百有餘年之間之通用事跡、又御當代に至り數度之金銀吹替交易、幷天正・慶長年已來三百年來の米價高下年々大略、其外御買米御用金之一件、往古之事は日本紀六國史を始め、保元源平之時代より、御代に至る迄の家々之記錄數百卷、都て金銀米穀に拘り候實錄、凡悉く細見の上、猶愚考を以評を加へ輯錄する所

三貨圖彙　四十卷

御買米御用金一件略記　六　冊

右子孫へ書殘置ものなり、御本家の儀は乍レ恐凡海內へ聞へ申候御舊家にて、古き事は公邊より御尋の儀も前々より有レ之儀にて其度々古き事は知れ不レ申と御斷申上候ても、町家の事故其儘に相濟可レ申候得共、大抵金銀兩替賣買に相拘り申候儀は、しらでも相濟不レ申、別て仲間の御筆頭に御座候故、新規の兩替屋とは格別の事なり、知りてしらずと申候は耻にあらず、又乍レ憚御舊家にて別家支配も數軒歷々有レ之候に、新家の如く何もしらぬ〳〵と申ては、御舊家の詮も無レ之心外成ものと存込、古老の衆にも相尋連々若年より相考、右の書物取立置申候、尤元來愚鈍の性にて根氣も無レ之、右記

し置といへども誠に九牛が一毛なり、然れども我心ざしの本意は捨不レ申、何事もおよばざる事ながら、後來の爲に控置なり、右宗逸様御在世の節御噺し申上候處、不レ怪御ほめ被レ下、我等も兼て其心得も有レ之候得共、右等の存付世話致候もの一人も無レ之、皆文盲にては我等は甚心外なり、よくこそ存立候とて、殊の外御滿悦被レ下候て、則右圖彙之御序文御直筆にて御認被レ遊候て被二下置一候、依レ之我等も乍レ不レ及昔より申候甲斐も有レ之、誠に右の御一言にて滿足致難レ有存候事に御座候、實以年々人情薄く古き事などしらべ申もの無レ之、氣計り高上に相成數は數ものに候、大阪に舊家豪家は數軒有レ之といへ共、右等舊記有レ之家は一軒も有レ之間敷候

右書物取立候も、全くは結構なる御家に御奉公申上候故、御蔭を以の故なり、又一ッには親昌樹様元祖惣兵衞殿（是は元文吹替之時分相庭役なり）作兵衞殿、（俳名村經、是も元文時代店勤なり）九兵衞殿、（戒名俊利、是は吉左衞門様に勤居なり）右の人々皆存生中別て心安く致候、我等の志奇特成事とて感心せられ、此人々より口傳を受け申事共も又多く有レ之候、段々右の人々も死去致され、今又尋問ふべき人壹人も無レ之候、後來右等の事考候は入らざる無益の事と嘲弄するものも可レ有レ之候得共、やはり右等の事も奉公の内にて、主家の威をかゞやかす道理なり、新家も同様何事もしらぬ〱と計にては、御舊家の詮も無レ之心外成ものに候間、此已後我等相果申候とも、わが志を繼右書物の類に抱り候儀は手控搾置、随分夫れへ記し置連々後編を取立、店の御用の間に合ひ候様可レ被二心掛一候、左候へば全く忠孝の道も相立、金銀の冥加に御座候、然し病身にて

は忠ㇾ孝も勤り不ㇾ申、只々身に養生を加へ長壽して、我等志を繼可ㇾ申身の養生はわが爲には無ㇾ之候、皆忠孝のうちに籠り候也、此書死後にても本家に見申度被ㇾ望候人有ㇾ之候はゞ、隨分御かし可ㇾ被ㇾ成候、容易に他家へ出し申事は遠慮可ㇾ有ㇾ之候、既に圖彙之本先年京都皆川先生見申度由、金山氏を以被ニ仰越ニ遣し申候處、書生共先ッ方にて皆寫取、作者を替へ題號を改め、京地本屋へ一部代金貳歩ヅヽにて賣出申候、全く犬骨おりて鷹にとらるゝ里諺の通りに御座候、其心得を以容易に他へ御かし被ㇾ成間敷候、天王寺屋五兵衛殿・平野屋五兵衛殿方、兩替の舊家に御座候得共、一切控無ㇾ之趣、依ㇾ之天王寺屋方右圖彙之趣聞傳、直に御賴被ㇾ成候故、無ㇾ據かし遣し御寫取に相成り申候、其外へはかし遣し不ㇾ申候、右之通舊家の天五方にさへ不案内に御座候、勿論外新家兩替等に舊記は決而無ㇾ之候、中々かやうに舊記等集りしものに無ㇾ之候、隨分大切に被ㇾ成御所持可ㇾ被ㇾ成候、右等爲ニ後來ニ記し置申候、秘すべし〳〵

文化十二亥年正月吉日

伊助

直方

伊兵衛直道殿

伊作　直諒殿

三貨圖彙

草間直方著

三貨圖彙序

惟金三品之為幣其來尚矣我邦上古坑冶啓端其所淘採鑄造往〻具于舊史傳記歷代之

幣又有治革興廢之不
同而品類寔繁中葉喪
亂海內分裂群雄各擅
鼓鑄之利以濟一時者
形模錯雜低昂紛然或

作或輟孰得而究之慶長初年寰區一新民始仰泰平則坑冶亦大興諸山之礦歲額鉅萬豈富之運前代無比爾後

殆二百年三幣並廢良
苦匪一但二寬泉布元
文銀錠輕重獲宜公私
俱便到于今天下賴其
慶矣付下鴻池氏之隷

人草間子德博考國史
旁涉和夏群籍近世之
事上自官府文書下至
先儒言議采而輯之閒
見所接事聞二三賢者遂

羅搜抉遺餘力間亦斷以己意形模輕重之可徵者咸圖而列之彙而分之凡鑄造之沿革興廢千載之故得坐而

致焉功亦勤矣既勤為
三卷命曰三價圖彙价
而請序于予予曰善矣
人各有職有其具者其
用必周矣長國家者有

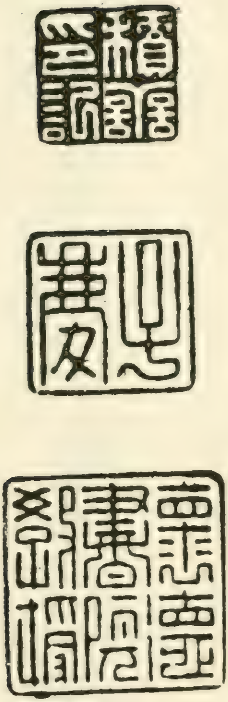
往雅經訓有祖宗典章
祈以御世治民可考而
知也守一官者必有一
官記籍農有畊穜之方
工有矩矱之法以至醫

卜家枝之流莫不各有其書焉苟留心於其具則用豈有窮哉大阪之爲府萬貨所輳其殷富固冠一世而鴻池氏之殖

獨拔乎其萃乃三貨之
源委惡得茫然無所稽
歟子德之業實不容於
己蓋可謂不忝於職也
已閱者或視以為好事

一癖手則非知模者若
心者也是爲序
寛政六年歳次甲寅
秋七月

竹山居士中井積善
撰并書



三貨圖彙は、吾黨の直方がつくれるものなり、ことのよしは、諸名師の筆につくされたり、我家かならずしも、此三のたからのくらゐをきはめ、其しな〴〵をわかつことを業とはせざれど、此事にかゝはれば、彼事もしらずばあらじとて、舊をたづね新らしきを引て、しるし集めたるは、身の程をしりたる餘りのつとめともいふべし、ひとたび卷をひらきて、其勞を感じ、いさゝか筆をそへ侍る、誰もたからのたからたるおもむきに深からずば、ながくその用を用とすることはかたかるべし、是をおもへこれをおもへ

嘯月

あめつちのあひだに、なり出るもの數しらず多かる中に、水火木金土の五つを、なに事にもあげいふめるは、これぞ人の世に、用ゆる事の大なるものなればなるべし、つちはもとより天とむかへいひて、あめのおほふかぎりは、地のする所なれば、いふもさらなり、水よ火よ是又いづれのところにかなからん、木は土より生て、おほいにしては宮殿を作り、うつはものともなしてもちゆれども、年をへては破れそこなひ、やけもし朽もすべし、されば其生出るも又おほし、ただ金は、したがひあらたまるをもてさがとして、かたちはさま／＼にかはれども、とし月をへて終にきえうする事なし、されば其出るも又おほからず、人のとりもちゆる所もおもしとす、神代よりも鏡劍などをぞ、神寶とは定めさせ給ひける、人の代となりても、和銅を年の號とせさせ給ひ、陸奥山にこがね花さくとよろこばせ給ひて、みてぐらをさゝげ神にも告させ給ひけん、それより此方、金銅をもて、錢を鑄させ、民の用ゆるたよりあらしめ給ひ、それをたからとして、よろづのものをうりかふ事とはなりぬ、其時其所によりて、もとむる事のゆるきせはしき、おほきすくなきに隨ひ、さまざまにわかるめれば、此三のたからもそのよろしきにつき、おほやけよりをきて給ひて、つくりあらため、さゝはりとゞこほる事なからしめ給ふ、是金はもとよりしたがひあらたまるさがのあればなり、こゝに難波なる草間直方、とし頃この三の貨の、むかしより今に至るまで、つくりあらためられし、そのかたをうつし、其時代のしかありしゆへよし、もののあたひのたかきひきゝ、うつりかはれるさままで、委しくかんがへあは

せ、三貨圖彙と名づけて、三そぢあまり五巻の書をあらはせり、ふるきを尋ねあたらしきをしりて、その時共所のこゝろを得、民のうりかひの道に便あらせんとて、をきて給へる廣きおほんめぐみの、天地と共に極りなきをあふぎ、三つの寳をおろそかにせず、かしこみ奉るべきをおもへる也、此比遠くよせきて、ところ〳〵あやまりあらんをばたゞし、かつこれがはじめにことくはへよとこはるゝにこのこゝろざしの淺からぬをめでゝ、えいなびあへず、つたなき言の葉をそふるになん

文政三庚辰年六月

檢校保己一

三貨圖彙跋

むかしあかりたる世には、すへらきの御代さかへんと、あつまなるみちのく山にこかね花さくといひ、又きひの中山の流れのをとにまかねふく谷川をさとり、伊勢の海ちひろの濱に、ひかりことなる玉を見出て、王侯のかしらのかさりをつくり、妃嬪の身のかさりとして、まことのたまこかねを用る事は、まれなりけらし、かくかぎりある物の中に、かきりなき用をなさんとしける程に、あらぬ貝石の光を、まことの玉こかねにかりなすらふる奇効いてきにけり、此三貨もとをあきらめしるまなこなくては、見るまゝにまきれなく、みさためんとかたし、たとへはかの雨夜の品定めに、一人の女を生涯のいもとせと、契るはかりなる、いと稀なるかとし、もとをよく明らめすは、まとはしき事多かるへし、三貨のもとを明らめて、奇効のためにあさむかれさらんをむねとす、是草間か心とする所なるへし、かのなすらへものゝ世にひろくなかれわたり、遠きからやまのおくまて、かよひみちぬるさまをも、しらしめむとて、世々の圖彙をもかそへあらはさるなり、こゝにして草間氏の功、世にひろしといふへし

加藤かけのりしるす

三貨圖彙跋

三金之幣黃金為上銀次
之銅又次之而銅錢每世
改鑄者漢土固然我邦
亦倣其法如黃金銀二幣

我土産多而漢土希少
以是故我中世喪亂之際
大抵每國以意鑄造則
其濫亦極矣二百年來
有司權時視宜屢復

變改而其制始定則民
間所藏舊幣漸出就
革鑄而舊物之存餘
僅若晨星矣今而不
搜索摸傳則物亦可復

睹而舊制無可由考矣
草澗氏所以積年留
意勞收輯俾斯書之
志也其考索之精博與
敘事之詳備讀者自

知之焉則豈待于稱
贊之之言哉然以其請之
殷也為書此數字於
其後尾云
寬政己未孟春

皆川愿題





凡例

一　此書三貨圖彙ト名ヅクルユヘンハ、金銀錢古今通行沿革ノ跡ヲアツメ、カネテ其圖ヲシルスニ依テ也、モトヨリ本邦ノ事實ヲ專トシ、國史ノ文ヲアゲ、御當代ニ至テハ、御觸ノ文ヲ載セテ、改造ノ年月、幷ニ其時々ノ物價ノ高低等ヲ悉ク記シ、商家ノ幼稚ノ者通覽ノ便リトス、故ニ異朝上古通用貨幣ノコトハ、漢書ヲ初メ歷代ノ史ニ見エタリト雖ドモ是ヲ不レ載、余モトヨリ無智不學ナレバ、迂遠ノ漢文ヲ知ラズ、且ツ今ノ三貨通行ノ事ニ與ラザレバ、愚意ノ主トスル所ニ與ラザルヲ以テ也

一　錢ノ事、異國ノ錢數品アレドモ、本邦ノ行貨ニ拘ハラザレバ載セズ、中谷・宇野兩氏、近クハ芳川氏ノ著ス錢彙ト云ヘル書、誠ニ微細ヲ盡セリ、然レドモ弄錢家ノ書ニシテ、歷代ノ國史ニ載スルモノハ少ク、多ク珍錢ノ品目ヲ擧グ、金錢・銀錢或ハ繪錢ヲ始メ、本邦ノ鑄錢モ數品ヲ出セリ、然レドモ此品錢ノ內、本邦ノ鑄ル所ト雖ドモ、國史ニ見エズ、元和已後ノ御觸等ニ載セザルモノハ、皆私鑄ナルベシ、疑ラクハ御當代所々鑄錢ノ座ニテ、古錢ヲ好ム者コレヲ鑄ル歟、錢彙ニ所謂座錢ノ類ナラン歟、然レバ珍錢ニ新古眞僞ノ別有リト雖ドモ、國史ニ載ザルモノハ論ズルニ足ラズ、又寬永年以後新錢ヲ鑄ルノ前、手本錢ト稱スル類モ、又通用ノ貨ニ非ズ、總テ是ヲトラズ、寬永以來鑄ル所ノ公錢、其年月又鑄場ノコトハ、老人ノ傳說等ヲ考合セテ之ヲ載ス、歷代ノ錢是又國史ト照シ考フ

ベキモノハ是ヲ記ス、其餘幷錢家ノ珍トスル和錢ノ類モ、正史ニ載ザルモノハ取ラズ（但六條錢・無文錢・伊勢宮錢・縮錢ノ類）

一　古金銀ノコト本文ニイヘル如ク、亂世ノ時諸侯其國ニテ之ヲ鑄ルモノハ、其年月及ビ交易ノ儀モ皆知ルベカラズ、慶長年ヨリ已後鑄ル所ノ金銀、年月ヲ記ストイヘドモ、其精密ナルコトハ局官ノ秘トスルコトニテ、人知ルベカラズ、又古代ノ金銀圖ヲ以テシルストイヘドモ、官家ヲ始メ他ノ珍藏故ニ、其名ヲ顯ハサズ、又強テ墨ヲアツルモ憚リ有テ、其大率ヲ記スモアリ、モトヨリ圖ニ依テ金銀ノ眞僞ヲワカタントニハアラズ、且ツ金位ノ高下ハ是又局官ノ秘トスルコトニテ、他ノ知ルベキコトニアラズ、依テ詳ニセズ

一　物價ノコトハ天正年ヨリ文化年ニ至リ、凡二百五十年ノ間ヲ記ストイヘドモ、年々高下アリテ委ク記コトアタハズ、天正年ノ事ハ年暦久シク、其上治世ナラザル故ニ、舊記多分散失シ、古文書ノ類コレナキ故ニ、尚ホ以テ委シカラズ、金銀ノ通用又知ルベカラズ、慶長年後トイヘドモ、タヾ治世ノ恩澤ニ誇ルノミニテ、米金交易通用ノ有ガタキ善政ヲシラズ、其委シキコトヲ記シ置モノ亦希ニシテ、古代ノ物價ヲ考ルニ據ナシ、コレニ依テ京都寺院ノ古文書、幷舊家ノ雜記等考ヘ合セテ、米金高下ノ大概ヲ記ス、金銀相庭ノコトハ、尚其改鑄ノ條下ト幷セ考フベシ、物價ノ部ノミニテハ精密ナラズ、又米穀ノ相庭、諸國其々ノ高低有リトイヘドモ、大阪濱方年々ノ建米ヲ以テ、海內米相庭ノ本トスル故ニ、今記ス所肥後・筑前・加賀等ノ米價ヲ專トス、然レドモ寸陰ノ間ニ高下有テ、一

概ニハ論ジ難シ、茲ニハ其年中ノ平均ヲ以テ大率ヲ記スノミ、强テ論ズベカラズ、寛察ヲ願フ（但シ建モノ米ヲ以テ、相庭ヲ立替ルコト、夏米ハ毎年五月七日ニ始リ、冬米新穀相庭ハ、例年十月十七日ニ始ル、然レドモ茲ニハ夏米ヲ多分省キ、其年ノ新米ヲ專トス）

一 古金銀ノ圖ヲ摸寫シ、三貨ノ事跡ヲアツメシモノ、青木氏ノ金銀錢譜ヲ始メ、黄白志・寶貨錄等アリ、其圖ハ皆金銀錢譜ニ出セルト同品ニシテ、今加補スル所ハ小數ナレドモ、適カレニ漏セルモノアリ、尤青木氏ノ撰ハ、眞貨ヲ以テ摸寫セラレシナルベシ、其後ノ書ハ皆金銀錢譜ノ圖ヲ又傳寫シテ、眞貨ヲ摺シモノトハ見エズ、先年銀座ノ手本金銀ト云モノヲ見シニ、種々ノ古金銀ヲ集メタリ、是ハ銀座世盛リノ時、人ノ耳目ヲ悅バセン爲ニ假作セシ弄モノト、或老人云ヘリ、元祿・寶永年ノ頃、古錢流行セシカバ、珍錢多ク僞鑄シテ人ヲ惑ハセシモ同事ニテ、（輪裟製作・谷川作・東條作等アリ）金銀ノ僞作モ又多カルベシ、（此事ハ第十四卷・第二十卷ニ出ス、依テ略ス）國初ヨリ通用銀ノ外、古代ノ珍貨ハ、人口ニ殘ル臆說ノミ多クシテ、詳ナラザルモノナリ、依テ圖品ノコトハ此書ニ强テトラズ、又金銀錢譜ニ摸寫セシ眞貨ハ、何國ニ隱レシヤ、一覽願ハシク年頃思ヒシニ、文化八未年、東都近藤君金銀圖錄ヲ著シ、寳貨通考ヲ作ラル、先圖錄ナリテ是ヲ見ルニ、其圖品金銀錢譜ニ載スル處悉ク盡セリ、其精密ナルコト見テ知ベシ、是ニ依テ眞貨ハ江戶ニ現存スルコトヲ知レリ、後世ノ大幸也、依テ近藤君ヘコヒ、印刻圖品ヲ此書ニ顯ハシ、是迄傳寫ノ誤アルモノ悉省ケリ、惣論ニオイテハ、少シク同異アルニ依テ、通考トハ齟齬ノコトアラン、然ドモ商家ハ商家ノ書アリ、醫ト家技ノ業モ銘々ノ書アリテ、又小シク不同アルガ如

シ、此書ニオケルヤ、元祿已來金銀多品ノ煩ヒ、改鑄ノ興廢、交易ノ損益、市民ノ惑亂等、元文中又改鑄ノ善政ニヨリ、多品三品ニ皈シテ、萬民惑亂ノ事ナク、昔ノ產業不便利ナルコヲ知ズ、サルニ依テ商家幼稚ノ者ノ心得べキ爲ニ著ス、仍テ俗ニ隨ヒ、聊モ文ヲ飾ラズ、見ルモノ國恩ノ有難キコトヲ謹デ思フべシ、此書ハ寛政五六年ノ頃、筆ヲトリ初シニ、其後物價惣論ノ情態、愚考ニ合フコト間々之アリ、依テ文化年ニ至テハ、其時ノ事實ヲ以テ記セルヤウニ見ユルコトアレドモ、聊シカルニ非ズ、全ク天然ニシテ不思議ト云フべシ、且ツ金銀圖錄世ニ行ハル、ニヨリ、又是ヲカリ用ヒ、事ヲ潤色セルモアリ、是等ハ愚ノ及バザル所ナルヲ以テナリ、罪スルコトナカレ

一 當御治世以來、金銀吹替ノ儀、御觸書ヲ以テ、年月且通行ノ荒增記スト雖ドモ、凡金銀一紙ノ御觸書故、三貨ノ文面續キノ宜シキニ從ヒ、金ノ事ヲ銀ノ部ニ出シ、銀ノ事ヲ又金ノ部ニモ出シ但シ南鐐朱銀ノ類ニ、或ハ文段ノ續キニヨリ、御觸年月ノ前後モ之レ有ルニ依テ、三貨ノ部倶ニ合セ見ルべシ

一 古慶長金幷元祿金ノ量目四匁七分六厘ト雖モ、今四匁八分ト記ス處間々之有リ、是ハ通例世人ノ聞知量目ナレバ也

一 國史ニ往々私ニ錢ヲ鑄モノアレバ、國宰是ヲ捕テ官ニ訴ヘ、流罪抔セラル、コトアリ、大赦ノ砌モ私ニ錢ヲ鑄モノハ免サズ、是等ノ事多クアレ共、今茲ニ略ス、其餘制令數多アレ共、委ハ載セズ

一 公聞ヲ憚べキコトモアルべシ、然レドモ余モトヨリ愚蒙ニシテ是ヲ辨ヘズ、或老人ノ云シ儘ニ其

恐レヲ顧ミズ記スコトアリ、聊モ私ノ意ヲ加フルニアラズ

一 應仁・文明ノ頃、砂金ヲ錢ニテ取扱、亦量目ニ京目・田舍目等ノコト有テ、臆說ニテハ考ヘ過ツコトアルベキニヨリ、官家ノ古文書・記錄等ヲ以テ考ヘ定メタク、多年願フトイヘドモ、未其時ヲ得ズ、然レドモ余年々老衰ニ及ビ、死生計リガタシ、故ニ先ヅ寬政年ヨリ文化十二亥年迄、連々考ヘ集メシコトヲ筆記ス、依テ此圖彙六七歩ニシテ止ム、尚官家幷ニ寺社ノ古文書得ルニ隨ヒ再考シ、漏ルモノハ追テ續編ニ出スベシ

一 此書往々見聞ノ儘筆記シ、前後ヲ綴ルトイヘドモ、建武・應仁ノ亂ニ、國史悉ク散失シテ、殘篇モ又蠧蝕塵埋ス、天正・文祿年ニ至リテハ、彌々國郡騷亂シ、諸侯國政ノ暇ナク、食貨ハ政事ノ根本タリトイヘドモ、誰カ是ヲ後世ニ記シ殘サントス云モノナシ、依テ事實存セズ、慶長・元和以來、治世ノ恩澤ニヨリ、文華ヒラケ、世々制令家々ノ記錄、車ニ積ミ棟ニ充ツ、然レドモ無智不學ニシテ、讀ムコトアタハズ、且ツ產業ニ暇ナク、此書ニノミ心ヲ用ヒズ、依テ文續ノ前後、或ハ重言又ハ書寫ノ誤リ等多カルベシ、唯其儘前後ヲ綴リテ世ノ誹謗ヲ顧ミズ、金銀錢ト部ヲワカチ、都テ三十五卷ヲ著ハス、定メテ相違多カラン、疑シキハ以テ疑ハシキヲ傳フト、愚ノ及ザル所ハ罪スルコト勿レ

文化十二亥年季冬　　　　草間直方誌之

三貨圖彙目録

第一

第　二

第　三

一 鹿苑院殿明朝ヘ聘問ノ事
　并明朝ヨリ封爵ヲ受ラルヽ事

一 後花園帝御宇足利家ヨリ明朝ヘ永樂錢ヲ乞求メ國用ヲ償フ事
　并相州三浦ヘ永樂錢漂着ノ事

一 關八州永樂錢通用ノ事
　并精鐚撰錢ノ事
　　關東筋永錢ノ說
　　田地古名之事

一 後陽成帝御宇錢ノ事
　并永樂錢興廢ノ事
　　可禁鑄錢潰ス事說

一 永樂鐚錢ノ說
　并通用ニ付元和年ヨリ寛永迄ノ制令

第四

第五

第六

第九

第十

第十一

第十二

第十三

第十七

第十八

三貨圖彙物價之部目錄

幷精錢ノ外中錢・下錢名目有ル事

第四

一 常平義倉・社倉儲蓄ノ大略

一 元和年ヨリ天和三年迄ノ物價ノ事

第五

一 大阪堂島米市ノ濫觴
幷諸藏屋敷藏元掛屋ト云略記

一 貞享元年ヨリ正德五年迄ノ物價ノ事
幷文昭院殿御德行ノ事

第六

一 正德六年ヨリ享保十七年迄ノ物價ノ事
幷西國九州筋米穀不熟飢饉ノ事

第十

三貨圖彙附錄之部目錄

三貨圖彙遺考之部目錄〔原本ニハ是ヨリ以下目錄ナシ、〕

第一

第二

第三

一　文政七年ヨリ同八年迄物價ノ事
　　幷南鐐二朱判吹替ノ事

一　一朱金ノ事
　　金銀引替所新規ニ十五軒被仰付事
　　日光御社參御延引附金相庭高直ノ事

三貨圖彙卷之一　錢之部

草間直方輯錄

古今原始云、錢始ニ女媧氏鑄ニ棘幣一、又禹五年水、民之無レ糧賣レ子者、禹以ニ歷山之金一、鑄レ幣贖レ之、湯七年旱、民之無レ糧賣レ子者、湯以ニ莊山之金一、鑄レ幣贖レ之、然太公爲レ周立ニ九府圜法一、函方輕重以レ銖、後魏高謙之、以爲堯遭ニ大水一鑄レ錢、故馮鑑謂、錢起ニ於堯一也、周ニ流四方一、故曰レ泉、後轉爲レ錢、體圓應レ天、孔方效レ地、此乃鑄錢法也、則其形象ニ陰陽一云

按ニ史記平準書ニ、「虞夏幣金、爲ニ三等一」漢書食貨志ニ、「秦幷ニ天下一、幣爲ニ二等一、黃金以レ鎰爲、名ニ上幣一」師古曰、「黃金爲レ上、而錢爲レ下也、」鎰トハ二十兩ノ金ヲ云トナリ、管子ニ夏商ノ世、珠玉ヲ上幣トシ、黃金ヲ中幣トシ、刀布ヲ下幣トス、然レドモ上代ノコトシルベカラズ、刀布トハ刀ノ形ノ如ク、布ハ方ニシテ長シ、何レモ長サ二三寸アリ、皆錢ノ如クニ、遣ヒ用ユル幣ナリ、漢ノ王莽ガ時、多クコレヲ鑄ル、是ヲ契刀ト云、秦ノ始皇、半兩ヲ鑄ル、重サ八銖、此時十六銖ヲ以テ一兩トス、八銖ハ則半兩ナリ、錢ニ銘ヲ鑄ルコトハ、周ノ景王ヨリ始ル、其文寶貨ナリ、錢名替ルコト、杜氏通典ヲ考ルニ、大具氏ヨリ以來錢アリ、時代ニヨリテ名替レリ、大具氏・高陽氏ハ金ト云、有

熊氏・高辛氏ハ貨ト云、陶唐氏ハ泉ト云、商周ハ布ト云、齊莒ハ刀ト云、漢書ノ食貨志ヲ始メ、歴代ノ史・三才圖會・本艸綱目・泉志・古今原始・事物紀原、其餘漢土ノ書ニ往々見タリ、今コレヲ略ス

本朝錢始ル事

和漢三才圖繪云、本邦錢始、未レ知二何世一

或記云、「反正天皇二年、木菟宿禰・大前宿禰、議曰、上古以來買レ物、今則求レ玉買レ物、其無二由仍一、著二文於銅一、通レ六貫レ緒、用レ之則安、勅曰、龍能布レ雨、馬能負レ物、龍至靈不レ輙、以レ馬爲二文佳一、此時始造二此珍一、世用大足、百民皆喜、人云二龍足一、而後勅令定、錢高下以二金錢一文一、買二銀錢十文一、以二銀錢一文一買二銅錢十文一、銅錢一文、以買二米一升一」ト見エタリ、然レドモ是說後人ノ附會ニシテ、信ズルニ足ラズ

日本紀顯宗天皇紀云、二年十月、戊午朔癸亥、宴二群臣一、是時天下安平、無二民傜役一、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、馬被レ野

天武天皇紀云、十二年四月、戊午朔壬申、詔曰、自今以後、必用二銅錢一、莫レ用二銀錢一、乙亥又詔曰、用レ銀莫レ止

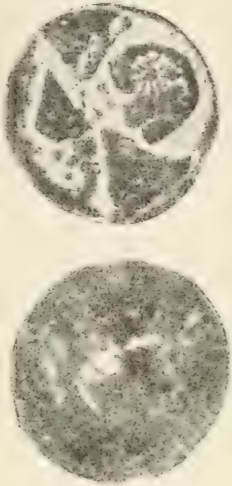
持統天皇紀云、八年三月、甲申朔乙酉、以二直廣肆大宅朝臣麻呂・勤大貳臺忌寸八島・黄書連本實等一、拜二鑄

錢司一

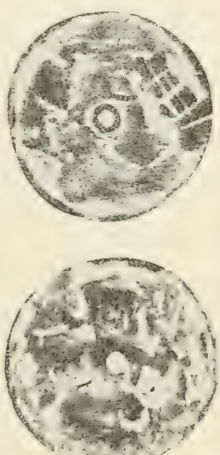
續日本紀文武天皇紀云、三年十二月庚子、始置二鑄錢司一、以二直大肆中臣朝臣意美麻呂一爲二長官一

錢譜云顯宗帝朝、无二鑄錢之事一、而本邦出レ銀、白鳳三年、對島貢レ銀爲レ始矣、則所レ謂稲斛銀錢一文者、疑修史日淮二後世之物價一追記耳、非二當時實銀錢一也、未レ知二是非一云々

日本史ニ持統天皇ノ時、有二鑄錢司一、此ニ始テ置ト云未レ詳トアリ、此後鑄錢司ノコト、國史ニ往々出タリ、天武・持統・文武等ノ朝ニ鑄シ銀銅ノ錢文、形製ヲ見ズ、仍テ其圖ヲ記スコト能ハズ、コヽニ記スハ、前ニ云顯宗天皇ノ御宇ノ銀錢ト云者ナリ、寶曆十一年十月七日、攝津國天王寺村ノ南、平野町糖屋茂兵衛ト云モノ、所持ノ畠（字眞寶院ト云）ヨリ掘出スト云、詳ナラズトイヘドモ、後ノ考ニ誌ス



徑一寸餘
重三匁



徑九分五厘
重二匁九分

按ニ靑木氏錢譜云、近年大隅ヨリ掘出ス、金尺ニテ一寸三分計、各有二極印一、右顯宗帝ノ御宇ノ銀錢ト、同ジキヤ知ラズ

銀ハ天武天皇ノ御宇始テ出、金ハ聖武天皇ノ御代始テ出ヅ、其以前ハ銅モ是ナク、鑄ル所ノ錢ハ、ミナ異國ノ金銀銅ナランカ、新羅ヨリ金銀ヲ貢コトハ、日本紀所々ニ見エタリ、其後元明天皇ノ御宇、慶雲五年ニ、武藏國ヨリ始テ銅ヲ奉レリ、ヨッテ年號ヲ和銅ト改ム

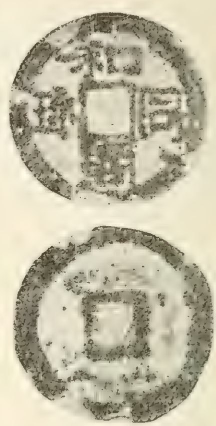
元明天皇紀云、和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻二和銅一、詔曰、食國中乃東方、武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、此物者天坐神・地坐祇乃相[于豆奈比]奉、福[波倍]奉事爾依而、顯久出[多留]寶爾在[羅之止]神隨所念須、是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號止定賜久、故改二慶雲五年一而和銅元年爲而、御世年號止定賜云々、二月甲戌、始置二催鑄錢司一、以二從五位上多治比眞人三宅麿一任レ之、五月壬寅、始行二銀錢一

日本史ニ、日本紀顯宗紀ヲ引テ云、粟俳銀錢一文、然則先レ是既有二銀錢一、據二天武二年對馬始出一レ白金一、顯宗紀所レ謂銀錢、蓋異域所レ貢、而至レ是始鑄レ之

又云、七月丙辰、令二近江國鑄一レ銅錢一、八月己巳始行二銅錢一

和銅元年正月、獻ル所ノ銅ヲ以テ、錢ヲ鑄サセラル、則文ハ和同開珎ナリ、コレ唐ノ中宗景龍二年ニ當レリ

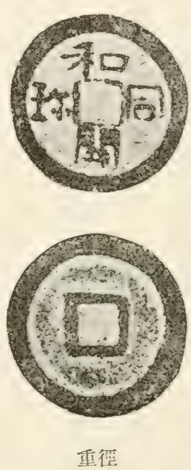
芹眞幹錢譜云、此錢實有二黃褐二色一、形有二濶緣・細緣二種一、又一種有二銅質黑濁輕小不レ精者一、疑史所レ謂濫錢破レ之道二市司一者矣



径九分
重一匁四分



径八分
重一匁



径八分
重一匁五分

後世錢座免許ノ時、先和銅錢ヲ鑄ルコトヲ例トスト云ヘリ、因テ新錢ノ和銅錢多ク、古代ノ錢ハ至テ希ナリ、錢文ハ魚養ノ筆ト云但シ錢文筆者和朝十二錢ノウチ、乾元大寶ノ外ハ、國史ニ不レ見、仍已下錢彙ノ儘出ス

續日本紀云、和銅二月正月壬午、詔國家爲レ政、兼濟居レ先、去レ虚就レ實、其理然矣、向者頒ニ銀錢一、以代ニ前錢一、又銅錢並行、比奸盜逐レ利作ニ濫鑄一、紛ニ亂公錢一、自今以後、私鑄ニ銀錢一者、其身沒官、財入ニ告人一、行濫逐レ利者、加ニ杖二百一、加役常徒、知レ情不レ告者、各與同罪、三月甲申制、凡交關雜物、其物價銀錢四文已上、即用ニ銀錢一、其價三文已下、皆用ニ銅錢一

按ニ銀錢四文ハ、下、養老五年ノ文ニヨルニ、銀一兩ノコトナリ、銀一兩ヨリ以下ハ、皆銅錢ヲ用ユ

又云、八月乙酉、廢銀錢、一行銅錢、太政官處分、河內鑄錢司官屬賜祿考選一准察焉、三年正月丙寅、太宰府獻銅錢、戊寅、播磨國獻銅錢

近江・河內・太宰府・播磨等獻銅錢」ト有ヲ以テミレバ、一所ニテ鑄ラレシトモミエズ、其錢ノ質制、今夫夫辨識スベカラズ、以下ノ同錢、乾元大寶ニ至ル迄、皆同ジ

又云九月乙丑、禁天下銀錢

銀錢禁ゼラレシ後、元正ノ朝、養老五年ニ、又銀錢行ハレシコトアリ、別錢ナリヤ不詳

又云、四年五月己未、以穀六升當錢一文、令百姓交關各得其利、冬十月甲子、勅依品位始定祿法、職事二品二位、各絁三十疋、絲一百絇、錢二千文、王三位、絁二十疋、錢一千文、臣三位、絁十疋、錢一千文、王四位、絁六疋、錢三百文、五位絁四疋、錢二百文、六位七位、各絁二疋、錢四十文、八位初位、絁一疋、錢二十文、番上大舍人、帶劍舍人、兵衛史生省掌召使門部物部主帥等、並絲二絇、錢十文、女亦准此、又詔曰、夫錢之為用、所以通財貨易有無也、當今百姓、尚迷習俗、未解其理、僅雖賣買、猶無蓄錢者、隨其多少節級授位、其從六位以下、蓄錢有一十貫已上者、進位一階叙、二十貫以上、進二階叙、中略或借他錢、而欺為官者、其錢沒官、身徒一年、與者同罪、夫申蓄錢狀者、今年十二月內錄狀并錢申送訖、太政官議奏、令出蓄錢勅有進位階、家存蓄錢之心、人成逐繦之趣、恐望利百姓或多盜鑄、於律私鑄猶輕罪法、故權立重刑禁

斷未然一、凡私鑄レ錢者斬、從者沒官、家口皆流、五保知而不レ告者、與同罪、不レ知レ情者減ニ五等一罪レ之、其錢雖レ用、悔過自首、減ニ罪一等一、或未レ用自首免レ罪、雖ニ容隱人知レ之不レ告者一與同罪、或告者同ニ前首法一、十一月甲戌、蓄錢人等、始敍レ位焉、十二月庚申、又制ニ蓄錢敍位之法一、无位七貫、白丁十貫、並爲ニ入限以外如レ前

錢ヲ蓄ル者ニハ、位ヲ授ケラル、是蓄ヘ難キモノニテ、百姓ニ產業ヲ勵スノ謂カ、官ニ納ル錢ノ價ニ准ジテ、官ノ米ヲ給フコトミエタリ、延曆ノ官符併セミルベシ、利ヲ貪ル者ハ、竊ニ盜鑄シテ、官ヲ欺クモノモアリシトミユ、又五保ニ賄賂ナドシテ、邪意ヲ搆ヘ、官ヲ僞ル者モアリシ成ベシ、五保ハ今ノ五人組ナリ、戶令ニ「凡戶皆五家相保、一人爲レ長」トアリ

又云、五年十二月辛巳、諸國所レ送調庸等物以レ錢換、宜下以ニ錢五文一准中布一常上、六年三月壬午、詔曰、任ニ郡司少領以上一者、性識淸廉、雖レ堪ニ時務一、而蓄錢乏少、不レ滿ニ六貫一、自今以後不レ得ニ遷任一

元正天皇紀云、養老五年正月丙子、令ニ天下百姓一、以ニ銀錢一一當ニ銅錢二十五一、以ニ銀一兩一當ニ一百錢一、行ニ用之一、六年二月戊戌、詔曰、市頭交易、元來定價、比日以後、多不レ如レ法、因レ茲本源欲レ斷、則有ニ廢業之家一、末流無レ禁、則有ニ姧非之侶一、更量ニ用錢之便宜一、欲レ得ニ百姓之潤利一、其用ニ二百錢一、當ニ一兩銀一、仍買レ物貴賤價錢、多少隨レ時平章、永爲ニ恒式一

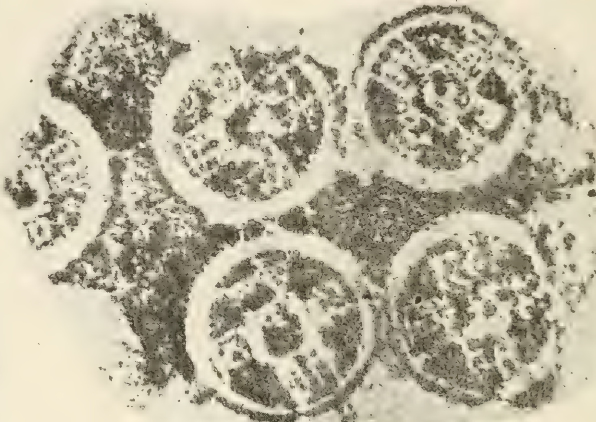
銀錢一文ニテ、銅錢二十五文、然レバ銀錢四文ニテ、銅錢百文ナリ、銅錢百文、是ヲ銀一兩ニ通行

ス、此銀一兩ノ量目十匁ナルベシ、（唐武德四年ニ鑄ル開元錢ニ效フ）然レバ銀錢一文ノ量目、二匁五分ナルベキヤ、此二匁五分ハ、拾芥抄ニ、六銖ニシテ一分ナリ、四分ハ則一兩也トアリ、又雜令ニ、二十四銖ヲ兩ト云モ、量目ハ十匁ナリ、右ノ銀錢一文、量目二匁五分ナルヤ、其委キコトハ知ラズ、銅錢百文ヲ以テ銀一兩、又ハ二十五文ヲ以テ、銀錢一文ニカヘ通行セシ處、民私ニ其法ヲヤブリ、銀ヲ貴ビ銅ヲ賤メ交易融通、滯リシト見エタリ、其頃モハヤ贋錢ヲ以テ、官錢ニ紛亂スル故、民彌惑ヒ自ラ銅錢ヲ賤ミシナラン、仍テ前法ヲ止ントスル時ハ、又産業ノサハリトナリ、末々ニ至リ輕キ者ハ、又イカナル奸計ヲナサンモハカリ難シ、然レバ今百姓ノ潤利アランヤウハ、銅錢ノ位ヲ引下ゲ、銀一兩ノ價ヲ銅錢二百文ニ當テ、其物ノ價ハ又其時々ノ多少ニ隨ヒ交易シ、永ク恒例トセヨト云ナラン

聖武天皇紀云、天平二年三月丁酉、周防國熊毛郡牛島西汀、吉敷郡達理山所レ出銅、試加二冶練一、幷堪レ爲レ用、便令二當國採冶一、以充二長門鑄錢一

右和銅錢、始ハ近江國ニテ鑄ラレ、又太宰府播磨等ニテ鑄ラレシト見エタリ、其後長門ノ國ヲ、鑄錢ノ場所ト定メラレケルハ、周防播磨因幡備中備後ヨリ多ク銅出デ、便利宜キ故ナルベシ、近頃寛政年、長門國府、毛利甲斐守殿家中小川瀨平ノ宅地ヨリ和銅錢ノ鑄形ヲ掘得タリ、先年城州伏見ニテ、鑄ル所ノ法ニ同ジク、精密ノ士ヲ以テ製セシモノナリ、其摺形ヲ得テコヽニシルス

和銅錢鑄形



又云、三年十一月庚戌、冬至、天皇御二南樹苑宴一、五位以上、賜レ錢、親王三百貫、大納言二百五十貫、正三位二百貫、自外各有レ差

此從宴興、或ハ的ノ賭等ニ賜レ錢事アマタアリ、今コレヲ略ス

又云、七年閏十一月庚子、更置二鑄錢司一、九年十一月甲戌、加二置鑄錢司一、史生六員、通レ前十六員

孝謙天皇紀云、天平勝寶五年九月戊戌朔、无位板持連眞釣、獻二錢百萬一、授二外從五位下一

稱德天皇紀云、天平神護二年正月庚午、正六位上伊吉連眞次、獻二錢百萬一、授二外從五位下一、二月庚寅、外從八位下橘戸高志麻呂、獻二錢百萬一、授二外從五位下一、九月壬申、攝津國武庫郡大領從六位上日下部宿禰淨方、獻二錢百萬・榻榑一千枚一、授二從五位下一、十二月壬寅、因幡國博士少初位上春日部村主人足、獻二錢百萬・因幡國稻一萬束一、授二共父從六位下、大田外從五位下、人足從六位下一

又云、神護景雲元年四月癸巳、伊勢國多氣郡人、外正七位下敢礒部忍國、獻二錢百萬・絹五百疋・稻一萬束一、授二外正五位下一、八月庚子散位正七位上奏忌寸眞成、獻二錢二千貫・牛十頭一、授二外從五位下一、十月癸巳、伊豫國宇摩郡人、凡直繼人、獻二錢百萬・紵布一百端・竹笠一百蓋・稻二萬束一、授二外從六位下、其父稻積外從五位下一

此ノ如ク皆位ヲ授ラル、右ノ外、國史ニ往々ミエタレドモ、コヽニ略ス、凡此事天平勝寶五年ヨリ、神護景雲二年マデ、十六七年ノ間、シキリニコレアリ、其後ハ甚稀ナリ

和銅ノ事

神代紀一書云、伊弉諾尊、吾欲レ生二御寓之珍子一、乃以二左手一、持二白銅鏡一云々、又以二石凝姥一、採二天香山之銅一、以作二日矛一云々、又于レ時諸神憂レ之、乃使二鏡作部遠祖天糠戸者造レ鏡云々

右鏡ノ事、所々ニミエタリ、和銅ナクシテ、鏡ヲ鑄ルコトアルベカラズ、然レドモ神代ノコトハ知ルベカラズ

推古天皇紀云、十三年四月辛酉朔、天皇詔二皇太子大臣及諸王諸臣一、共同發二誓願一、以始造二銅繡丈六佛像各一軀一、乃命二鞍作鳥一爲二造佛之工一、是時高麗國大興王、聞二日本國天皇造二佛像一、貢二上黄金三百兩一

按ニ高麗ヨリ所貢ノ銅ヲ以テ造ルカ

文武天皇紀云、二年三月乙丑、因幡國獻二銅鑛一、九月壬午、周芳國獻二銅鑛一

按ニ是和銅ナランカ、然レドモ鍛錬ノ術ヲシラズ、无用トナレルカ、其後鍛錬ノ術ニ通ジ、元明帝ノ朝ニ至リ、武藏ノ國ヨリ錬銅ヲ獻ズ、依テ此時始テ出ルト云ハ、熟銅ノ始ナリ、詔ニ云フ、武藏國ニ、自作リ成ル和銅出タリトアルハ、自ラハ銅鑛ニシテ、ナリナルハ鍛錬ノコトナルベシ、此後銅ト云ハ、皆熟銅ナリ、日本史ニ、「後朱雀天皇、長曆元年四月十三日乙卯、攝州能勢郡始貢レ銅」ト見タリ、扶桑略記ニハ、三月一日、攝津國銅金ノ獅子ヲ獻ズ、掘出ストアリ、此頃諸國ヨリ出レドモ、攝州ヨリ出シハ始テト云ノ義ナランカ、和銅元年、武藏國ヨリ始テ出、其後國々ヨリ夥シク出デテ、萬國ニスグレ、我國ノ財用豐ナルモ、全ク神國ノ慈恩、仰グベク尊ブベキモノナリ、聖武帝ノ時、和州奈良ニ大佛ヲ創ラル、コレ和銅ヨリ天平年マデ、僅カ三四十年ノ間ナルニ、諸國ヨリ盛ンニ出デケルニヤ、大佛ノ像ヲ鑄ラレシニテ思ヒ量ルベシ、朝野群載ニノスル大佛ノ記、今略シテ其用途ヲアグ

熟銅　七十三萬九千五百六十斤

白鑞　一萬二千六百十七斤 但シ鑞ノコトハ奥ニ出ス

錬金　一萬四百三十六兩 但シ錬金ノコトハ金ノ部ニ出ス

右大佛ノ丈尺、コレヲ略ス、其餘塔二基アリ、東塔ハ高サ二十三丈八寸、西塔ハ高サ二十三丈六尺七寸、露盤ノ高サ各八丈八尺二寸ナリ、此塔ノ九輪ヲハジメ銅ノ入用

熟銅　五萬五千五百二斤五兩　白鑞四百九斤十兩　錬金一千五百兩
鐘一口高サ一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三歩、厚サ八寸　熟銅五萬二千六百八十斤　白鑞二千三百斤
大佛師從四位下國上麿
大鑄師從五位下高市眞國
　從五位下高市眞麿
　從五位下柿本男玉
大工從五位下猪名部百世
　從五位下繩手
右熟銅ノ入用凡八十六萬八千斤、此銅十三萬八千百八十貫目ナランカ、其餘聖武帝ハ、興福東大兩寺ヲ始トシテ、多クノ伽藍ヲ建立アリシカバ、其費用擧テカゾヘ難シ、夫ヨリ當御代ニ至リテ、凡ソ千百年來、處々ヨリ出ル銅ハカルベカラズ、當時其出ル處、大抵左ニ記ス
一出羽　秋田小澤銅　同板木銅　同三枚銅　同槇澤銅　永松平銅　同床銅　同錫銅
　此外
　秋田二銅　同初石澤銅　同黑瀧銅　同一銅　同大澤銅　同大葛銅　同赤松銅　永松幸床銅　同幸平銅

右九品ハ、當時大阪ヘ廻ラズ

一 陸奥　尾太銅　熊澤銅　鹿瀬銅　谷澤銅

此外

日向倉銅

右ハ當時大阪ヘ廻ラズ

一 但馬　生野銅　明延銅　甲淵銅　瀬谷銅

此外

多々良木銅　中金木谷銅　平野銅

右三品ハ、當時大阪ヘ廻ラズ

一 播磨　柏木銅　寺谷銅　小畑銅　勝浦銅　椛坂銅

此外

立岩銅　小家谷銅　金堀銅　八重畑銅　相山銅　銅物師銅　大天銅　相之尾銅　小炭釜銅

粟賀銅　新口粟賀銅　小畑新敷銅　尺城銅　新炭見銅

右十四品ハ當時大阪ヘ廻ラズ

一 攝津　能勢谷寺銅　大重銅　多田銅

此外

出野銅　卯之戶銅　多田多喜間步銅　多田黑門銅

右四品ハ、當時大阪へ廻ラズ

一　備中　吉岡銅

此外

小泉銅　高折銅　足守山之上銅

右三品ハ、當時大阪へ廻ラズ

一　石見　大上銅　笹ケ谷銅

此外

白味銅　赤封印銅　赤谷大上印銅　喜部銅　笹ケ谷幸銅　同佐伯銅　新山仌印銅

右七品ハ、當時大阪へ廻ラズ

一　紀伊　永野銅　平野元山銅　尾[illegible]上鉄銅

當谷銅　尻見銅　平野北山銅

右三品ハ、當時大阪へ廻ラズ

一　長門　藏目喜銅　大吉印銅　阿部郡藏目喜銅
此外
長登白山銅　金目新山銅　於福銅　拾浦銅　阿武鉛拵銅　丸印銅　仁保山銅
右七品ハ、當時大阪へ廻ラズ
一　丹波　佐々木谷銅　二ツ尾銅
此外
佐々木鉢銅　細谷銅
右二品ハ、當時大阪へ廻ラズ
一　飛驒　山野口銅
此外
德銅　上山銅
右二品ハ、當時大阪へ廻ラズ
一　越前　大野銅
此外
角野銅

右ハ當時大阪ヘ廻ラズ

一　伊勢　治田銅

此外

西畑銅　尺坡銅

右二品ハ、當時大阪ヘ廻ラズ

一　若狹　三幸銅

一　因幡　平澤銅　大洲銅　大洲哥次銅　大洲豐茂銅

一　上野　利根山銅

一　阿波　東山銅　神銅

一　近江　甲津畑銅

一　備後　時安銅

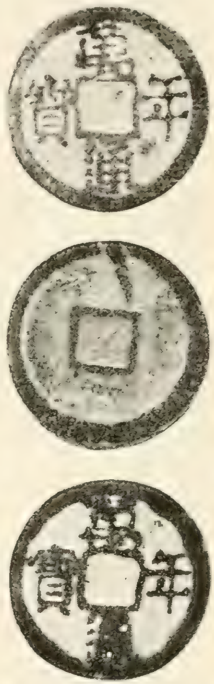
一　佐渡　佐州山鋑銅

右柘植氏ノ寶貨事略追加ニ見エタリ

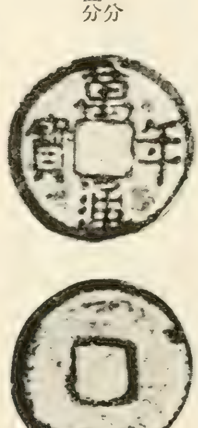
廢帝紀云、天平寶字二年八月甲子、以紫微内相藤原朝臣仲麿任大保、中略自今以後、宜姓中加惠美二字、禁暴勝強、止戈靜亂、故名曰押勝、朕舅之中、汝卿良尚、故字稱尚舅、更給功封三千

戸、功田一百町一、永爲二傳世之賜一、以表二不常之勲一、別聽三鑄錢擧稲及用二恵美家印一

又云、四年三月丁丑、勅錢之爲レ用、行レ之已久、公私要便、莫レ甚二於斯一、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將二禁斷一、恐有二騷擾一、宜下造二新樣一、與レ舊並行上、庶使下無レ損二於民一、有上レ益二於國一、其新錢文、曰二萬年通寶一、以レ一當二舊錢之十一、銀錢文、曰二太平元寶一、以レ一當二新錢之十一、金錢文、曰二開基勝寶一、以レ一當二銀錢之十一



徑九分
重一匁五分





錢譜云、質有二黄白一、形有二濶緣細緣大小一、又一種銅質制倶麁惡、輕小者決係二盜鑄一、又一種年字下點用二横筆一者、銅質制作、皆不レ同也

右廢帝紀ニイハユル、新錢ノ一ヲ以テ、舊錢ノ十ニアツルコトハ、其頃遣唐使屢々行テ、彼國ノ時

世ニウツルコト多シ、是モ亦唐ノ制ニヨルナルベシ、唐書ノ食貨志ニ、「乾封元年、改ニ鑄乾封泉寶錢一、徑寸、重二銖六分、以レ一當ニ舊錢之十一、乾元三年、使ニ第五琦鑄ニ乾元重寶錢一、徑一寸、毎緡重十斤、與ニ開元通寶一參用、以レ一當レ十、亦號ニ乾元十當錢一」トアリ、乾元三年ハ、本邦天平寶字四年ニアタル

廢帝紀云、天平寶字四年八年己卯、賜ニ新京諸大小寺、及僧綱大尼諸神主、百官主典已上新錢一、各有レ差、五年正月壬寅、外從五位下茨田宿禰牧野、爲ニ鑄錢次官一

稱德天皇紀云、天平神護元年二月庚寅、左右京籾各二千斛、糶ニ於東西市一、籾斗百錢、四月丁丑、左右京穀、各一千石、糶ニ於東西市一、以ニ米價踊貴一也

此時籾（玄米ナルベシ）一斗百文、一斛一貫文ナリ、是和銅ノ舊錢ナルベシ、新錢ノ萬年通寶ニテ、一斗十文、又金銀ノ錢アリテ、トモニ並ビ行ハル

錢譜云、萬年錢有ニ年字點用横筆者一、形製又異、存者至少、疑押勝所レ鑄矣、未レ知

錢文ニ以ニ年號一、後魏孝文大和十九年ニ大和五銖ノ錢ヨリ始ル、又事物紀原ニ、「孝莊用ニ楊福計一、永安二年、福吏鑄文曰、永安五銖、自レ是始、以ニ年號一鑄ニ於錢文一」本邦年號ヲ用ルハ、和銅ニ始レリ、又通寶ノ文ハ、唐ノ開元通寶ニ始リ、我邦ハ萬年通寶ニ始ル、右三品ノ中、銅錢ノ萬年通寶ハ、今世ニ存セリ、金銀ノ二品、未コレヲ見ズ、按ニ此時代、本邦金銀出デ、年數久シカラザル故、公私共ニ金銀ヲ用ルコトナシ、是少ケレバ也、此時有ノ三錢鑄サセラル、トハ雖ドモ、金銀ノ二品ハ、數多

鑄ザルトミエタリ、此後國史ニ、金銀ノ二錢用ヒラレシコト見エズ、朝野群載ニ、銀錢トアルハ、和名抄ニ、「紙錢和名勢邇加太」トアルモノニテ、實ノ銀錢ニアラズ

朝野群載云、謹上泰山府君都狀南閻浮州大日本國天子親仁、獻二上冥道諸神一十二座銀錢二百四十貫文、白絹一百二十疋一云々、永承五年十月十八日、天子謹狀

又云、謹上泰山府君都狀日本國從四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣、獻二上冥道諸神一十二座銀錢二百四十貫・白絹一百二十匹一云々、永久二年十一月二十三日

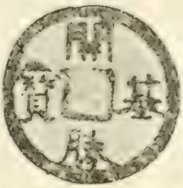
又云、謹二上閻羅天子・銀錢二十貫文・絹十疋一云々、永久二年十一月二十三日、從四位上行右中辨兼備中介藤朝臣謹狀

右永承ハ、後冷泉院、永久ハ鳥羽院ノ年號也、又金錢ノコト、盛衰記ニ、治承二年十一月十二日、中宮御產ノ時、小松內大臣、金錢九十九文ヲ、御枕ノ上ニ置ト云コトアリ、是モ疑ラクハ擬錢ナルベシ、銀ハ天武天皇白鳳三年、對馬ヨリ始テ出ヅ、廢帝ノ天平寶字四年迄ハ、年數八十七年ナリ、金ハ聖武天皇、天平勝寶二年、奥州ヨリ始テ貢ス、廢帝ノ四年迄ハ、纔十一年ニテ、金銀ノ出ルコト少ク、銅錢萬年通寶ト、並行ハルヽ程ノコトハ有ベカラズ、其時代寺社ヲ始メ、百官ニ賜フ錢、或ハ米價ノコトニ至ル迄、皆銅錢ヲ用ヒ行ハレ、金銀ノ兩錢ヲ用ヒラルヽコトハ、惣テ見エズ、全ク其數少キ故ナルベシ、但シ大安寺伽藍緣起資財帳ニ、「銀錢壹阡伍拾參文」トアリ、天平十九年二月

十一日ナリ、天平ハ聖武天皇ノ年號ニテ、此銀錢ハ、元明紀ニ云、和銅元年夏五月ニ始テ行ハルト云銀錢ナリ、玆ニ云孝謙帝ニ鑄ラル銀錢ニアラズ、此外國史ニ金銀ノ二錢用ラルヽ事、見アタラズ、

右金錢世ニタエテ無レ之所、去ル寛政六年甲寅四月二十九日、南都西大寺西塔ノ跡ヨリ掘出ス處ナリ、外ニ萬年通寶・神功開寶ノ錢アリ、則官ニ奉ル、其後又西大寺ヘ給フ、右押形ヲ得テ玆ニ出ス、銀錢太平元寶未レ見

開基勝寶





徑八歩
重一匁





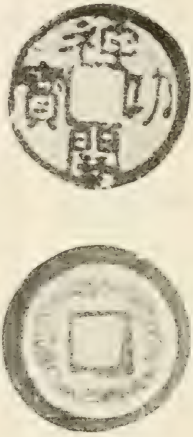
今以テ古錢ヲ土中ヨリ掘出スコト間々アリ、尤土中ヘ錢ヲ埋メ置コト、往古ヨリ有コトニテ、日本紀略ニ、永延元年三月十六日、上加茂ノ社頭、鳥居ノ側ニオイテ掘出ス古錢、七百八十二文、献二公家一、其文有レ三、和銅開珍・萬年通寶・神功開寶也、神祇官陰陽寮ヲ召テ令レ占二卜之一ト見エタリ、此事扶桑略記ニモ出タリ

稱德天皇紀云、天平神護元年九月丁酉、更鑄二新錢一、文曰、神功開寶、與二前新錢一、並行二於世一



徑九步
重一匁九分





徑八步
重八分强



錢譜云、此錢質有黄白、郭有大小・輕重、一種有功字從刀、開字从門、不从二戶者、人甚愛重、又一種有獨開字从門、功仍舊从刀者、又一種有穿下有甲文者、至尠矣、今所存銅色黑濁、型極麁惡者、疑皆民間私鑄矣

稱德天皇紀云、天平神護二年十二月辛亥、是年民私鑄錢者、先後相尋、配鑄錢司駈役、並皆著鈴於其駄、以備逃走、聽鳴追捕焉

又云、神護景雲元年二月丁未、從五位下吉備朝臣眞事、爲鑄錢員外次官、十二月乙酉、從五位上河部朝臣三縣、爲田原鑄錢長官、十一月丙寅、私鑄錢人主淸麿等四十人、賜姓鑄錢部、流出羽國

右私鑄錢ノコト、本文ニヨツテ按ルニ、皆長門國鑄錢所ノ官人ノ盗鑄ニテ、鑄錢司帳外ノ私モノナルベシ、然ルヲ公錢ニ紛ラシ、司ノ駈役ニ配シ、京ヘ運送スルナラン、仍テ都テ私用ノ駄ニハ、鈴ヲ付テ、公用ニハ鈴ニ及ザルニヤ、又私ニ錢ヲ鑄ル人四十人ニ、鑄錢部ノ姓ヲ賜ヒ、遠流セラルト云ヲ以テミレバ、前ニ云如ク、官人ノ盗鑄ニテ、贋錢トハ少シ異ナリ、承和年、伊勢國、貞觀年、大和國等ニテ、私ニ錢ヲ鑄者往々有テ、國宰ヲシテ追捕セシムト云、是等ハ贋錢ナリ、元明紀ニ、私鑄錢者、其身ハ沒官シ、財ハ告ル人ニ入レヨト云ハ、私鑄ノ贋錢ナランカ、何レニモ鑄錢部ノ姓ヲ賜ヒ、遠流セラルヽヲ以テミレバ、公錢ノ中ノ私鑄ニテ、錢ハ官庫ヘ納リシナルベシ

又云、三年三月戊寅、從五位上阿部朝臣清成、爲ニ兼田原鑄錢長官一

田原ハ鑄錢ノ場所ノ鄕名ナラン、其所不レ詳、神護年前後、史ニ田原ト云所ニテ、鑄錢ノコトミエズ、又田原ノ鑄錢司ト云コト是ノミナリ、此時ノ皇都ハ、大和ノ奈良ナレバ、其頃添上郡田原ニテ、暫ク鑄錢ノコトアリシニヤ、考ル所ナシ、今田原村アリ、則光仁天皇ヲ、延喜五年ニ改葬有シ地也、依テ所ヲ田原ノ陵ト云フ、猶後ノ考ヲ竢ツ

光仁天皇紀云、寶龜三年八月庚申、太政官奏、去天平寶字四年三月十六日、始造ニ新錢一、與レ舊並行、以ニ新錢之一一、當ニ舊錢之十一、但以ニ年序稍積、新錢已賤一、限以ニ格時一、良未ニ安穩一、加以百姓一人間償ニ宿債一者、以ニ賤日新錢一貫一、當ニ貴時舊錢十貫一、依レ法雖ニ相當一、計レ價有ニ懸隔一、因レ茲物情擾亂、多致ニ喧訴一、望請

新舊兩錢、同レ價施行、奏可、五年九月庚子、外從五位下丹治比宿禰眞繼、爲ニ鑄錢次官一、八年十月辛卯、從五位下紀朝臣門守、爲ニ鑄錢次官一、十年八月壬子勅、去寶龜三年八月十二日、太政官奏、永止ニ舊錢一、全用ニ新錢一、今聞百姓徒蓄ニ古錢一、還憂レ无レ施、宜レ聽ニ新舊同レ價並行一コト 但シ天德ノ新錢論奏ニ、此コト出ヅ、仍テ之ヲ略ス

桓武天皇紀云、延暦元年二月庚申、從五位下中臣朝臣鷹主、爲ニ鑄錢司長官一、四月癸亥、詔曰、朕君ニ臨區宇一、撫ニ育生民一、公私彫弊、情實憂レ之、方欲下屛ニ此興作一、務ニ茲稼穡一、政遵ニ儉約一、財盈中倉廩上、今者宮室堪レ居、服翫足レ用、佛廟云畢、錢價既卑、宜下且罷ニ造宮。勅旨二省、法花。鑄錢兩司一、以充ニ府庫之寶一、以崇中簡易之化上、造宮勅旨、雜色匠手、隨ニ其才幹一、隷ニ於木工內藏等寮一、餘者各配ニ本司一、九年十月甲午、復置ニ鑄錢司一、己酉、從五位下多治比眞人乙女、爲ニ鑄錢長官一

按ニ延暦元年ヨリ九年マデ、暫ク鑄錢司ヲ停メラレシニヤ、茲ニ復トアルヲ以テ見ルベシ

三貨圖彙卷之二　錢之部

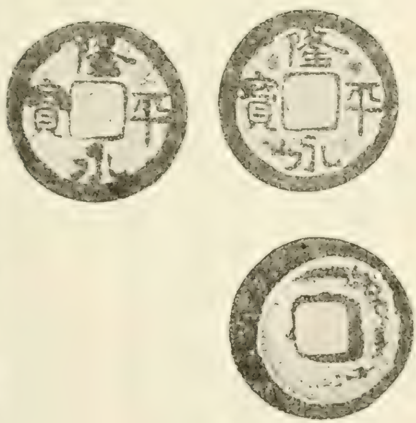
草間直方輯錄

桓武天皇、延暦十五年十一月、隆平永寶ヲ鑄ル



徑九步　重一匁

徑八步　重八分



錢譜云、此錢貨有ニ黄白三色一、而制作輕重、一如ニ神功錢一、一種有ニ永字稍小者一、又一種有ニ濶緣一、又一種有ニ永字、从レ二从レ水者一、俱不レ易レ得

日本後紀云、延暦十五年十一月乙未、八日詔制二新錢一、爲二隆平永寶一、詔曰、周朝撫レ曆、肇開二九府之珍一、漢室膺レ期、爰設二三官之貨一、用能遷二有無一、以均レ利、通二□夷一而得レ宜、濟民之要須、乃益二國之嘉策一、然而□機適レ時、賢哲可二以成一下務、權レ輕作レ重、母子於レ是並行、頃者私鑪滋起、奸鑄紛然、施二之交關一、既爲二輕賤一、宛二之貯蓄一不レ堪二費用一、即欲二禁止一、卒誰懲淸、事須三平量以救二流弊一、是以更制二新錢一、仍增二其直一、文曰二隆平永寶一、宜下以二新錢一一、當二舊錢十一、新舊兩色、兼使中行用上。但舊錢者始レ自二來歳一、限以二四年一、然後停廢、辛丑始用二新錢一、奉二伊勢神宮・加茂上下二社・松尾社一、亦施二七大寺及野寺一、賜二皇太子親王已下、職事正六位已上、僧都律師等一、各有レ差

舊錢ハ神功開寶、又金銀ノ錢、和銅・萬年ノ類ナラン、尤モ此頃市民錢ヲ多ク貯フル由、續日本紀・類聚三代格等ニ見エタリ。此故ハ和銅四年ノ頃、錢ヲ蓄フル者ニハ、爵位ヲ授ラル、和銅四年ヨリ、寶龜三年マデハ、六十一年、延暦十五年迄ハ、八十六年ニナレドモ、自然ト民錢ヲ蓄ル餘風殘リ、寶龜年ヨリ延暦年ニ至リ、益々市民錢ヲ蓄ル故、都鄙彌錢乏シク、又奸鑄多シトミユ、コレニ依テ民錢貨ヲ貯フルコトヲ、キビシク嚴禁セラル

又云、十六年二月庚辰、二十四從五位下田口朝臣息繼、爲二鑄錢次官一、甲申、二十八勅、租稅之本、備二於水旱一、錢帛之財、飢而不レ食、今聞京職多有レ收レ錢、事須三賤レ末貴下本、一絕二收錢一、但恐民有二貧富一、不二必蓄穀一、宜レ聽二貧乏之徒進一レ錢、通計不レ得レ過二四分之一一

類聚三代格云、太政官符、禁ㇾ斷貯錢一事、右被ニ右大臣宣一偁、奉ㇾ勅、用ㇾ錢之道、取ニ於輕便一、有無均ㇾ利、彼此得ㇾ宜者也、如ㇾ聞外國吏民多有ニ貯蓄一、京畿士庶、還乏ニ資用一、既乖ニ均利之義一、亦失ニ得宜之方一、宜ㇾ下ニ嚴制ニ不ㇾ得ニ更然一、所有之錢、盡皆納ㇾ官、仍用ニ正税一、准ㇾ價給ㇾ之、送ㇾ京之功、亦用ニ正税一、如有ㇾ藏而不ㇾ進、爲ㇾ他被ㇾ告、不ㇾ論ニ蔭贖一、科ニ違勅罪一、五ニ分其物一、一分給ニ告者一、四分沒ㇾ官、但伊賀近江若狹丹波紀伊等國、不ㇾ在ニ禁限一、延暦十七年九月二十三日

右ノ通、錢ヲ貯フルコトヲ禁止セラル、民蓄シ錢ノ爲スベキ様ナク、夫ヲ以テ爵位ヲ求ムト見エタリ、仍テ又是ヲ禁斷セラル菅文時封事三ケ條ニモ見ユ

又云、太政官符、禁ㇾ斷民蓄ニ錢貨一以求中爵位上事、右大納言正三位壹志濃王宣、奉ㇾ勅、頃年納ㇾ錢例叙ニ五品一、今聞殷富之民、多貯ニ錢貨一、藏ニ緡萬計一、或至ニ腐爛一、是以官符、信力無ㇾ報、於ㇾ錢作ニ京畿之錢一、未ㇾ布ニ於民間一、其百姓納ㇾ錢以求ニ爵位一、自今以後嚴加ニ禁止一、更莫ㇾ令ㇾ然、延暦十九年二月四日

右ノ通リ、爵位ヲ求ムルコトヲ禁止セラル、殷富ノ民ハ、錢多ク蓄フル故、徒ニ腐ラカス、夫故錢ヲ以爵位ヲ賣買ス、爵位アル家ニハ、夫々ノ祿アル故、自ラ錢貨アツマリ、京畿ノ錢、不融通ニシテ、民間錢乏シ、仍テ舊錢廢スルコトモナク、彌延暦ノ末、弘仁年ニ至リ、アラタニ又追々錢ヲ鑄サセラレケルニヤ、尤其頃民間奸鑄錢多ク、公錢ニ紛亂スル故ニ、民錢ヲ貯積テモ、奸鑄ハ實ニ寶ニアラザレバ、是ヲ禁止シテ精錢バカリ行ハシメント欲スレドモ、奸錢モ又世ニ多キ故、精麁ヲ分ツ

コト成難シ、都テノ舊錢ヲ止メ、此度ノ新錢バカリヲ行ハントスレドモ、夫ニテハ民間彌錢乏シクナルベシ、之ニ依テ舊錢ハ、延暦十六年ヨリ同十九年ヲ限リ通用シ、其後ハ停廢スルナラン

日本後紀云、大同三年五月己丑、勅去年□用□□□百姓之間、新錢未レ多、宜三新舊列用暫濟二民乏一

後紀延暦十五年ノ文ニヨルニ、舊錢ノ通用、十九年マデニテ、二十年ヨリ停メラレシヲ、コヽニ至リテ、又新錢ト共ニ用ユルコトヲ免サレシト見エタリ、弘仁九年、富壽神寶ヲ鑄ラレシ時モ、又新舊ノ分ナシ、延暦二十年ヨリ承和二年マデ、三十五年、右ノ通行ハレケルニヤ、又按ニ弘仁十二年ノ符ニ、掘採銅乏シキ趣見エタリ、依レ之新錢ノ數モ少キ故、民又新錢ヲ吝ミ、蓄ヘカクシテ世ニ乏ク、舊錢ノミ世ニ流布スル故、是モ亦不自由ナルコト勿論ナリ、承和元年ノ符ニ、舊錢既ニ盡キ、銅又乏キ趣見エタリ、是ニヨリテ新舊ノ分チナク通行スル時ハ、新錢モ舊錢ノ如ク一文ナル故、錢ヲ蓄ル者モ、新錢ノ功ナクシテ、自ラ新錢世ニアラハレテ、新舊潤澤ナラン、而シテ又承和二年ニ、新錢承和昌寶ヲ鑄テ、以テ舊例ニマカセ、一ヲ以テ舊錢ノ十ニアテ、世ニ行ハル、近クハ正德四年ノ頃、新金銀ヲ吹出サレシト、同意ナランカ詳カニ金ノ部ニ出ス

類聚國史云、延暦十六年十二月乙未、加二鑄錢司史生二員一

日本後紀云、大同四年七月壬子八日、新錢百貫、賜二從四位下橘朝臣常子一

又云、弘仁元年十二月丙戌二十日、鑄錢司用二乘銅一、鑄二進新錢一千四十貫一、因レ玆鑄錢長官從五位上三島眞人

年嗣、授正五位下、次官從五位下大枝朝臣繼吉、從五位上、自餘六位已下、容作兒已上、叙位賜祿有差

按ニ和名抄工商部、楊氏漢語抄云容作兒、和名、豆久乃比々止

又云、三年七月壬午（二十六）、賜山城・攝津・河內三國、新錢各二百五十貫、出擧取利、宛隄防用

又曰、四年正月己卯（二十五）、外從五位下林宿禰眞永、爲鑄錢次官

類聚國史云、弘仁四年八月丁酉、賜鑄錢官人祿有差、以進利錢也

日本後紀云、弘仁五年八月甲子（二十一）、免囚人日下部土方、補木工長上、土方者攝津國武庫郡人、以私鑄錢、着鎌役於堀河、頗善工巧、仍赦取才

國史ニ往々大赦ノコトアリ、犯八虐、又私鑄錢ノモノハ常赦所不免ナリ、然ルニ右ノ土方其罪ヲ犯シナガラ罪ヲ赦サレ、木工長上ニ補セラル、全ク妙工ノ才ヲ以テノ故ナリ、所謂才ハ身ヲ助クルト云ナラン

日本紀略云、弘仁七年七月戊寅（十六）、廢鑄錢司

類聚國史云、弘仁九年三月庚寅、改長門國司、爲鑄錢使、定長官一員・次官一員・判官二員・主典三員・鑄錢司二員・造錢型師一員・史生五員

右弘仁七年、鑄錢司ヲ廢セラレ、同九年、富壽神寶ヲ鑄ラルヽニヨリ、三月長門ノ國司ヲ改メテ又

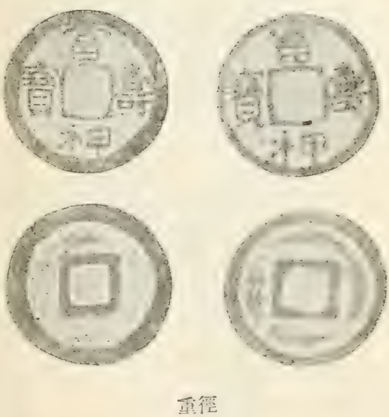
鑄錢使ヲ置ル、ナラン、鑄錢司ハ周防守兼任ニテ長門ハ鑄錢ノ場所ナリ、其後貞觀十二年、貞觀永寶ヲ鑄ラレ、同年十一月、伊勢ヲ始メ諸社ヘ早穗ヲ進ゼラル、此時山城國ノ葛野郡宗像ノ社ヘモ進ゼラル、其告文ニ常ノ鑄錢司ハ路遠ク妨ゲ多キニ依テ山城ノ國葛野郡ニテ錢ヲ鍛シ鑄作ル趣見エタリ、又同所相樂郡岡田山ノ銅ヲトラシムト、貞觀十一年七月ニ見ユ、如レ此銅モ出ル故山城國ニテハ鑄錢ノ便利宜シク、其以後ハ此所ニテモ鑄サセラレシ成ベシ

又曰、同年八月戊午、（七日）勅長門國部内、不レ要ニ驛家十一町馬五十五疋一、朝使无ニ往還之要一、公民有ニ守飼之費一、宜ニ毎驛置レ匹、自餘充ニ鑄錢料鉛駄一

嵯峨天皇弘仁九年十一月富壽神寶ヲ鑄ル



徑八步
重一匁



徑七步半
重一匁

錢譜云、此錢予所レ見者、有二三種一、其大者細緣、徑八分强、重一錢、其小者、有二濶緣一、皆徑七分半、其重者一錢輕則七分、雖レ有二字樣輕重之異一、然銅質制作俱精

日本紀略云、弘仁九年十一月辛巳朔、詔改二錢文一、曰二富壽神寶一

類聚國史云、弘仁十一年二月丙戌（十四日）、省二鑄錢使・判官一員。主典一員一

三代實錄、貞觀七年六月十日下云、弘仁十一年六月己卯（九日）、下二知大藏省一曰、鑄錢司所レ進新錢、雖二文字頗不明一、而不レ失二體勢一、又有二小疵一、行用无レ妨、宜二猶撿納一

類聚國史云、弘仁十二年七月丁巳（二十三）、新錢二萬施二空海法師一

類聚三代格引二弘仁十二年七月符一云、被二太政官、今月十六日符一偁、得二鑄錢使解一偁、依二弘仁九年六月十一日、申レ官支度帳一、件錢毎年鑄作所レ進、而始レ自二九年一至二于今年一、掘採之銅乏少、作物之數有レ欠、望請五千六百十七貫文之内、減定二三千貫文一、毎年作貢、但豐銅之年、隨即倍作、不三必限以二此數一者

類聚國史云、弘仁十三年七月丙申（八日）、以二新錢一百貫一班二給諸國貧者一

日本紀略云、弘仁十四年正月丙子（二十）、新錢一百貫賜二大和國一宛レ築二益田池一、二月丙戌賜二錢左右京飢民一

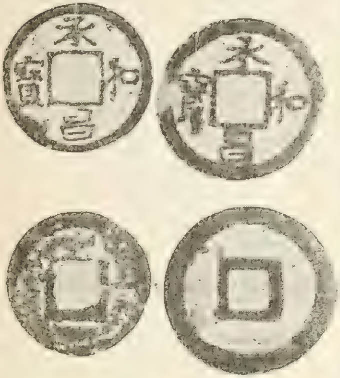
類聚國史云、弘仁十四年七月辛未、長門國鑄錢勞異二他國一、連年旱疫、人民乏レ絶、仍免二當年庸一

又云、天長八年三月癸卯（五日）、鑄錢司秩期、一准二諸國一

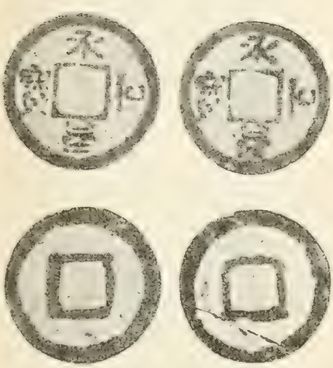
右富壽神寳、弘仁九年ヨリ年々五千六百十七貫文ヅツ鑄ラレケルヲ、同十二年ニ至リテ銅ノ出ルコト少シ、依レ之其內三千貫文減ゼラレ、天長五年マデハ三千五百貫文宛鑄ラレ、翌年ヨリ承和元年迄ハ千八百三十貫文宛鑄ラレケルニヤ

類聚三代格云、太政官符、應下依ニ一萬一千貫文支度一鑄中作年料錢上事、右得ニ鑄錢司解一偁、撿案、內鑄錢支度、有ニ先後二卷一、一卷自ニ弘仁十一年一迄ニ天長五年一、作ニ三千五百貫文一、一卷自ニ天長六年一迄ニ今年一、作ニ一萬一千貫文一、今被ニ太政官去六月二十二日符一偁、太政官同月二十三日、下ニ長門國一符偁、司解偁、舊錢既盡、无ニ銅可レ錢、仍言上者、左大臣宣、依レ舊充レ之者、支度有ニ先後一、未レ知レ所ニ准據一、謹請ニ處分一者、同宣奉レ勅依レ件作レ之、承和元年十月九日

仁明天皇承和二年正月、承和昌寳ヲ鑄ル



徑七步半
重九分



徑七步
重九分

錢譜云、此錢旹有黃白大小凡四品、大者徑七分半重九分、小者徑七分重七分

續日本後紀云、承和二年正月丁未朔、戊辰（二十二）、令鑄新錢下詔曰、懋遷之軌、標自昌言、交貿而退、取諸噬嗑、則知鑄文人幣、興於曠時、鵝影柄纘、彰於舊術、姬王圜法、有無以之化居、漢室泉刀、歛散由其不匱、斯固邦家所要、配地馬而无疆、公私攸宜、擬天龍而自達、然而權輕作重、沿世或悛、子去母隨、適時開務、況年祀浸久、資幣已賤、不有平革、何救流弊、是以今制新錢、以叶適變、文曰、承和昌寶、以新錢之一、當舊錢之十、新之與舊、宜令並用

拾芥抄ニハ、二月五日鑄ルトアリ、承和十四年迄、十三ヶ年行ハル、子母ハ、舊錢曰母、新錢曰子」、母ノコト、色々ノ說アレドモ、不信用之

又云、同年三月辛酉（十六）、鑄錢司言、被給俸料一分之人、唯一千束、僅支朝夕、不足衣服、遷替之日、无糧還京、右大臣處分、班鎔正稅十六萬束於備後・安藝・周防・長門・豐前等國、各三萬二千束、以其息利每人倍給之

又云、三年十一月庚辰（十五）、仰石見國、選幹了百姓四人、習採銅、免其雜徭

又云、六年四月癸丑（二日）、遣右近衛將監正六位上坂上大宿禰當宗、近衛及俘夷等於伊勢國、索捕名張郡山中、私鑄錢群盜凡十七人、進鑄錢作具及錢等（按ニ伊勢伊賀ニ作ルベシ）

錢譜ニ、今承和錢、銅質。製作麁惡輕小ナルモノ、蓋シ是ナリト云

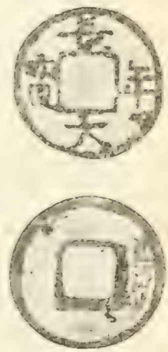
類聚三代格云、太政官符、定採送鑄錢司年料銅鉛數事、銅一萬六千三百三十三斤五兩一分二銖、鉛八千一百六十六斤十兩二分四銖、右得長門國解偁、撿案內、太政官去承和元年六月二十二日符偁、去天長三年九月二十一日、下民部省符偁、相轉舊錢鑄送新錢之間、宜停鑄錢料銅令進年料熟銅千斤者、今得鑄錢司解偁、舊錢既盡、无銅可鑄者、右大臣宣依舊充行者、宜待司、支度依件採送者、當時之吏移彼司請支度、而報云年料可造錢、一萬一千貫文、料銅五萬一千三百三十三斤、鉛一萬五千六百六十六斤十兩二分四銖者、今案民部省、去弘仁十二年七月二十八日符偁、被太政官、今月十六日符偁、得鑄錢使解偁、依去弘仁九年六月十一日、申官支度帳、件錢每年鑄作可進、而始自九年至于今年、掘採之銅、乏少作物之數有欠、望請五千六百七十貫文之內、減定三千貫文、每年作貢、但豐銅之年隨即倍作、不必限以此數者、左大臣宣奉勅、爲定三千五百貫文者、仍可採送、年料銅一萬六千三百三十三斤五兩一分二銖、鉛八千一百六十六斤十兩二分四朱、雖然、當于其時、未有採足、而彼鑄錢司、自去承和元年以來、一萬一千貫文用度、令送銅七萬七千斤、今覆舊例、銅七萬七千斤、是錢送古錢之用度、非掘採新銅所以爲、自非神力、何及件數、望請銅鉛各萬斤、定爲年料者、右大臣宣奉勅宜、依三千五百貫文用度、令採送之、承和八年閏九月二十九日

續日本後紀云、承和十四年二月乙未(二十九)、周防國鑄錢司言、遷立司家東方潟上山者、許之

仁明天皇嘉祥元年九月、長年大寳ヲ鑄ル



徑七步
重八分



徑六步半
重六分

錢譜云、此錢大者、徑七分、重八分、小者、徑六分半、重六分

續日本後紀云、嘉祥元年九月乙亥、[十九]令ㇾ鑄ニ新錢一、下ㇾ詔曰、觀ニ大洞八連三一、重ㇾ規疊ㇾ矩、莫ㇾ不ニ交易一、以ニ強ㇾ國代還以利ㇾ民、故鷹揭神文、立ニ九府圜徑ニ龍如相ニ天人一、施ニ五銖之異製一、象ニ乾坤之方圓一、同ニ川岳而流積一、无ㇾ遠不ㇾ往、無ㇾ深不ㇾ臻、便用輕通、家國同ㇾ利、但輕重有ㇾ異、子母相通、影入ニ星楡一、形圓ニ水若一、用捨之端無ㇾ定、小大之變隨ㇾ時、今者天賜ニ嘉祥一、厤改ニ年號一、若使ニ銖文貨制、仍ㇾ舊不ㇾ悛、恐乖ニ變通之旨一、或罹ニ流弊之咎一、宜ㇾ改ニ舊貫ニ於兎纈一、磨ニ新彩於金刀上、文曰ニ長年大寳一、一以當ニ舊之十一、新之與ㇾ舊並用雜行、將ㇾ令ニ用而不ㇾ倦、既富ㇾ之而敎ㇾ之

拾芥抄ニ、長平永寳、天安二年迄八ヶ年行フトアリ、如何、嘉祥元年ヨリ天安二年迄八十一ヶ年ナリ、且長平トアルモ誤ナリ

又云、二年四月癸卯、[二十]周防守從五位下丹墀眞人弟梶、爲ニ兼鑄錢使長官一、十月癸卯、嵯峨太皇太后、遣ㇾ使奉ㇾ賀ニ天皇四十寳算一、中略 復以ニ錢五十萬一、賑ニ恤京中飢民一、又以ニ新錢十四貫文一、誦ニ經七大寺及梵釋・崇

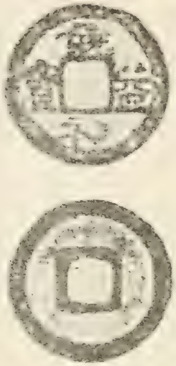
福・延暦寺等ニ、爲ニ復祈ニ冥翊ニ也

又云、三年三月丙戌、八日遣レ使誦ニ經兩京及畿內・近江・丹波等國一百寺ニ、各綿一連爲ニ布施ニ、又圖ニ畫帝釋像百鋪ニ、安ニ置件百箇寺ニ、各以ニ承和錢一千文ニ、爲ニ燈料ニ

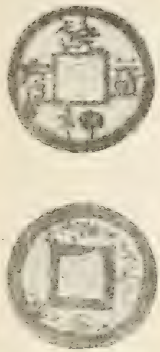
前ニ云フ、百姓ヘ給フ六萬錢（六十貫文ナリ）ト、又コヽニ云、太后ヨリ給フ五十萬錢（五百貫文ナリ）ハ、舊錢ニテ、七大寺延暦寺等ヘ給フト、畿內國々ヘ給フハ新錢ナルベシ

文德實錄云、齊衡元年二月辛未、伴宿禰河男、爲ニ鑄錢長官ニ、周防守如レ元

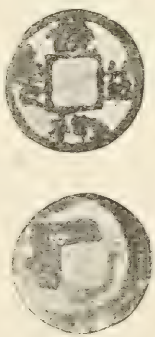
清和天皇貞觀元年四月、饒益神寶ヲ鑄ル、同十一年マデ行ハル



徑七步
重七分



徑六步
重七分



錢譜云、此錢有ニ大小二品ニ、大者徑七分、重七分、小者徑六分、重六分

拾芥抄ニ、「自二六年一至二十一年一、經二十三年一」トアリ、如何

三代實錄云、貞觀元年三月二十二日、周防守從五位下藤原眞道、爲二鑄錢長官一、周防守如レ故、四月二十八日詔曰、昔稱科斗篆籀之訓、斯彰二簡號革編一、交易之方日遠、是以姜公通二市井之貨一、齊國大彊、鵰夷善貨殖之居、陶業愛盛、遠則赤側白金、近則鵝眼綖環、頓レ世而異レ名、逐レ時而興レ利、但權レ輕作レ重、子母相隨、蓋是歷年之漸深、遂知二行用之彌賤一、宜下改二舊幣一、更制中新錢上、勤二此變通一、救二彼流弊一、文曰饒益神寶、一以當二舊之十一、卽舊之與レ新、並令二雜用一

又云、三年四月九日、周防守從五位下丹墀眞人弟梶、爲二鑄錢長官一

又云、五年十月二日、制長門國採銅所、雜色四人、預二於勘籍一

又云、七年三月十九日、周防守從五位下安倍宗行、爲二鑄錢長官一

又云、十年六月二十八日、周防守兼任鑄錢司長官者、四年爲レ秩

右鑄錢司ノコトハ、持統紀ニ始テ見エテ、其後長門ノ國ニ置ル、弘仁七年七月、鑄錢司ヲ廢セラレ、九年長門ノ國司ヲ改テ、鑄錢使トナサル、其後ハ周防守ヲシテ、長官ヲ兼シメ、鑄錢ノ場所ヲ支配セサセシナラン

又云、貞觀元年四月八日、內殿灌佛如レ常

此事凡毎年四月八日、天子於二內殿一灌佛ヲ執行シタマフ、此時親王公卿及殿上六位以上、各奉レ錢事

アリ、尤夫々多少アリテ、當元年ノ條ニ奉ニ新錢一トアルハ、ヤハリ長年大寶ナルベシ、饒益神寶ノ新錢ハ、今年四月二十八日世ニ行ハルノ制令アリテ、右灌佛ノ時ヨリ二十日バカリモ以前ノコト故、右新錢トアルハ長年大寶ノ古錢ト思ハル、貞觀二年三月二十五日、公卿以下辨大夫以上へ、錢七百四十四貫ヲ賜リ、又五月淳和ノ太后ノ爲ニ、齋會ヲ修セラル、時、新錢一十二万五千文ヲ僧尼ニ賜フ、右新錢トアリ、又錢トバカリモ有、此頃新錢ト舊錢トハ、大ニ通行ノ違ヒアリ、新錢一文ハ、舊錢ノ十文ニテ十搶倍ナリ、是天平寶字四年、萬年通寶ヲ鑄ラレシ時ヨリ始ル、其以後國史ニ錢ヲ賜フコト、悉ク記難シ、今都テ略レ之、新舊推テ知ルベシ

又云、同年十月二十八日、鑄錢司進ニ鑄錢一、奉ニ諸名神幷諸山陵一、及頒ニ賜親王已下一、各有レ差

是ハ饒益神寶ナリ

又云、八年二月六日、太政官處分、定ニ左右京一、白米一升直錢四十文、前二十六文、今加ニ十四文一、黑米三十文、前十八文、今加ニ十二文一、是年穀價騰踊、東西津頭、白米一斛七貫二百文、黑米四貫百文、由レ是增ニ定京邑沽價一

是ハ舊錢ナラン

又云、九年四月二十二日、東西京始置ニ常平所一、出ニ官米一而糶レ之、米一升直新錢八文、京邑之人、來買レ物如レ雲、是時穀價騰踊、內外飢饉、米一斛直新錢一千四百、由レ是官糶以救ニ俗弊一焉

此頃、東西米穀不熟ニテ價貴ク、左右京ノ人民困究ス、依レ之米價定メラレ、黑米一斛四貫百文ノ所、三貫文ニ定ラル、（前ハ一貫八百文、今一貫二百文増加フ）今白米一斛七貫二百文ノ所、四貫文ニ定ラル、（前ハ二貫六百文、今一貫四百文増加フ）如レ斯制令ヲ出サル、（但和銅ヨリ、長年大寶マデノ舊錢）然レドモ九年ニ至リ、彌高直ニテ、民飢饉スルニヨリ、常平倉（但天平寶字年始テ建ヒ）ヲ開キ官米ヲ出シ、又始テ常平所ト云ヲ置テ是ヲ賣シム、此時新錢饒益神寶一貫四百文ヲ以、米一斛ノ價トス、一升ニ付十四文ノ所、今八文ニ價ヲ減ジ、究民ヲ救ハル、（但舊錢ニテハ、一升八十文ニ當ル、前年四十文、今年貴キコト、一倍セリ）

又云、貞觀七年九月二十六日、勅ニ木工寮ニ、採ニ銅於山城國相樂郡岡田鄕ニ、舊鑄錢司止、十一月二十六日、勅、以ニ山城國相樂郡、舊鑄錢司地二十餘町ニ、爲ニ採銅之地ニ

按ニ山城國相樂郡岡田山ハ、木津ノ里ヨリ巽、加茂村ト云鄕ノ東ノ山ナリト云ヘリ、猶可レ尋

又云、九年六月九日丙子、勅、以ニ山城國相樂郡、舊鑄錢司地二十町ニ、（貞觀ノ上脫字アラン、原本モ此通リ）貞觀七年、爲ニ採銅之地ニ、今返ニ賜左大臣源朝臣信ニ、但採銅事、依レ舊行レ之

又云、十一年七月十日、以ニ前筑前守從五位下淸原眞人眞貞ニ、爲ニ採山城國岡田山銅使ニ、判官一人主典一人

類聚三代格云、太政官符、應レ禁ニ制貯錢ニ事、右延暦十七年九月二十三日格偁、右大臣宣、奉レ勅、用レ錢之道取ニ於輕便ニ、有無均レ利、彼此得レ宜者也、如レ聞外國吏民、多有ニ貯蓄ニ、京畿士庶、還乏ニ於資用ニ、旣乖ニ均利之義ニ、亦失ニ得宜之方ニ、宜ニ下ニ嚴制ニ、不レ得ニ更然ニ、所有之錢、盡皆納レ官、仍用ニ正税ニ、准レ價給

レ之、送レ京之功、亦用ニ正税一、如有ニ藏而不レ進、爲レ他被レ告、不レ論ニ蔭贖一、科ニ違勅罪一、五ニ分其物一、一分給ニ告者一、四分沒レ官、但伊賀・近江・若狹・丹波・紀伊等國、不レ在ニ禁制限一者、而今畿外諸國、富豪之輩、不レ愼ニ格旨一、猶事ニ貯積一、聞ニ其由緒一、非レ充ニ資用一、徒耆ニ富强之名一、各爭ニ聚集之夥一、邊鄙既无ニ通用之理一、朝家永增ニ鑄作之費一、靜論ニ其費一、誠須ニ懲革一、右大臣宣奉レ勅、宜下天下嚴制、一切禁ニ所有之錢一、依ニ先格一行上レ之、若隱藏不レ進、科レ罪亦如ニ先格一、唯告言者三分給レ一、國司仍須下勅到之後、三四十箇日內、勘錄緡數、專脚言上上、夫搜勘无レ私、言上合レ期、不レ論ニ多少一、特加ニ褒擢一、若乖ニ違符旨一、延行无レ申、及許容不レ勘、爲レ他被レ告、同處ニ違勅罪一、不ニ曾寬宥一、又伊賀・近江等五箇國、先格已稱レ不レ在ニ禁限一、宜下聽ニ其資用一禁中貯蓄上、貞觀九年五月十日 三代實錄是ニ同ジ

貞觀十二年正月、貞觀永寶ヲ鑄ル、寬平元年マデ、二十ケ年行ハル



徑六步半
重七分


徑六步
重六分

拾芥抄ニハ、寬平元年マデ、八ケ年行フトアリ、如何、八ケ年目ハ、元慶元年ナリ

三代實錄云、貞觀十二年正月二十五日、詔曰、夫古先哲王、所下以立ニ鐵官一設中圜法上者、以ニ其能權歛散通、有无遠近同施、公私共利レ也、但始終難レ一、興廢有レ時、非レ因ニ變通一、何激ニ風化一、是以輕重不

レ定、大小无レ常、沿レ世而分レ形、適レ時而異レ稱、朕冀ニ政令之簡要一、嫌ニ貨之頻改一、歳序雖レ積、錢文不下新、今聞流弊尤甚、交貨多レ妨、囊裡貯而難レ資、杖頭懸而乏レ用、既非ニ泉流之喩一、還作ニ竿許之煩一、宜下變ニ舊色於青蚨一、驚ニ新聽於黔首一、文曰ニ貞觀永寶一、一以當ニ舊之十一、母子相隨、並共通用、庶傳下下民之得上レ宜、將招ニ上天之冥祐一、二月二十五日、令ニ備中備後兩國、採進ニ鑄錢料銅一、八月五日、鑄錢司進ニ新錢一、貞觀錢一千一百十貫文、勅進ニ獻太皇后及淳和院ニ各五十貫文、賜ニ東宮二十貫文、須ニ賜親王以下五位以下、見參者ニ各有レ差、十月十三日、勅收ニ山城國葛野郡百姓地、六段三百五十二歩一、賜ニ鑄錢所一、以ニ乘陸田一、相轉給ニ本主一、十一月八日、遣ニ大舍人頭從五位上礒江王一、奉ニ常幣幷鑄錢司、及山城國葛野郡鑄錢所等新鑄錢一、十七日、分ニ遣使者諸社一、奉ニ鑄錢司及葛野鑄錢所新錢ニ云々、告文曰、天皇我詔旨止、宗像神乃前尓申賜倍止依、年序漸積、貨幣已賤天、改ニ饒益神寶一、爲ニ貞觀永寶一、常乃鑄錢司路遠妨多尓依天、加太之於ニ山城國葛野郡一天令ニ鑄作一、今神社仵鑄錢所尓近久坐須、仍所ニ鑄作ニ之早穗二十文乎、左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差遣天令ニ奉持一天、奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安志、貨幣豐足米之賜陪止申須

又早穗十五文ヲ、櫟谷清水小社ニ奉ルトアリ、山城國葛野郡ノ鑄錢所ハ、洛西嵯峨嵐山松尾ノ邊ナランカ、嵐山ノ麓ニ、今櫟谷ノ小社殘レリ、則松尾七社ノ內ニシテ、櫟谷ノ名殘レリ、宗像ノ社モ、七社ノ內ニシテ、今松尾社ノ傍ニ小社アリ、又堰神都テ五社ハ、皆七社ノ內ナラン、鑄錢所、何レトモ不レ詳

又云、十四年九月二十五日、新鑄ニ貞觀錢ノ文字破滅、輪郭無レ全、凡在ニ賣買ニ、嫌弃ニ大半ニ、譴ニ責鑄錢司ニ令レ分ニ明鑄作ニ

又云、十七年十二月庚戌朔、大和國私鑄レ錢者、往々而在、令ニ國宰追捕ニ

又云、十八年六月二十七日、元興寺僧德操、元右京人長背村主與ニ日奉春岑ニ、同謀私鑄レ錢、推ニ問事跡ニ、德操不ニ承伏ニ、雖レ然衆證灼然、眞格着鈦役仕、有レ勅曰、村主本是緇徒、殊處ニ中流ニ、是故配ニ流伊與國ニ

又云、元慶四年八月十五日、檢非違使丹波宗雄、坐ニ私鑄錢人刑部永淵之事ニ、隱避不レ出

錢譜云、今貞觀錢一種、銅質黑濁、制作麁惡、而輕小者、蓋是矣

按ニ長門周防ハ、代々鑄錢ノ場所ニテ、長官ハ周防守兼職ナリ、然ルニ此貞觀永寶錢ヨリ、又山城葛野郡ニテ、多ク鑄ラレシト見ユレドモ、鑄錢司ハ、周防守一人ト見エ、別ニ其職見エズ、貞觀十一年、筑後守淸原眞人眞貞ヲ以テ、岡田山ノ採銅使トシ、判官主典ヲ置ルヽ趣見エタリ、是等ヨリ葛野郡ノ鑄錢ノコトハ、差配有シナルベシ、又岡田山ノ銅モ、盛ニ出ル趣ハミエズ然ラバ美作・備前・備中等ノ銅モ差加ヘラレ、葛野郡ニテ鑄ラレ、又長門周防ニテモ、鑄ラレシナルベシ

三代實錄云、元慶元年閏二月二十三日、美作國進ニ銅大十兩ニ、備前國二斤九兩ニ、先レ是從七位上伴宿禰吉備麻呂言、美作國眞島郡加夫良和利山、大庭郡比智奈井山、備前國津高郡佐々山有レ銅、故吉備麿掘採

進二其撰銅一、勅遣内匠大允正六位上布勢朝臣安岑一、與二國宰一監レ地掘採、令三安岑還向進二所レ採之銅一

又云、二年三月五日、詔令三太宰府採二豐前國規矩郡銅一、充二彼郡傜夫百人一、爲二採銅鎔作一

又云、五年三月七日、散位從五位上陽侯忌寸永岑言、石見國美濃郡都茂鄉丸山、巖石峥嶸、綿數十里、銅工膳伴案麻呂・眞髮部廣世等言曰、此山出レ銅、依採二礬石一、試以鼓鑄、遂得二眞銅一、於レ是勅遣二木工少屬從七位上紀朝臣眞房・史生從八位上眞髮部安雄等檢察一焉、六月丁丑朔、勅停三廢採二山城國岡田銅一、使三其屋舍什器、付二國令守護一、八月二十日、去六月停レ採二山城國岡田銅一事、採銅使正六位上巨勢朝臣文王、返二進伊賀國庸米三百八十斛七斗五升五合一、以二伊賀國庸米一充二採銅之資粮一故也

又云、仁和元年三月十日、太政官處分下知、長門國造銅手一人、掘穴手一人、於二豐前國採銅使許一令下豐前國民未レ習二其術一、十月十一日、令三鑄銅使作二錢梳百五具一、其五十二具半、新作五十二具半、修二理舊梳一（錢梳類史錢型ニ作ル）

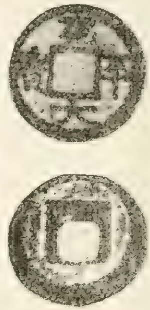
按ニ錢梳ハ、錢型ニテ、鎔鑄ナルベシ、然バ土ヲ以テ製セシモノナラン、寛政年長門ノ府中ヨリ掘出ス、和銅錢ノ鑄形モ、土ヲ以テ製セシモノナリ

又云、二年二月十五日、新鑄二銅印一、賜二備中國採銅使一、二十一日周防守從五位下小野當岑、爲二鑄錢長官一

按ニ諸國銅ノ出ル土地ヲ、奉行スル官人ヘハ、太政官ヨリ銅印ヲ給フト見エタリ、山城國岡田鄉ニ

此印アリ

宇多天皇寛平二年五月、寛平大寶ヲ鑄、延喜六年マデ十七ケ年行フ



重五分

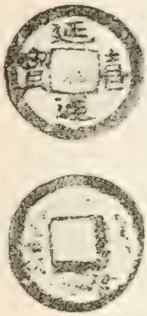


徑六步
重七分

錢譜云、此錢大小二品アリ、徑六分半、重七分、小者徑六分、重五分、又一種有下平字左右點、不レ粘ニ
上畫一者上

右寛平大寶鑄ラレシコト、正史ニ未レ見、拾芥抄ニ所レ載如レ斯、本朝世紀ハ、寛平御一代ノ國史ト云、此書ニ載セアルベキヤ、又寛平御記ニ有可キカ、右ノ二書、當時絕テナキ由、今本朝世紀ト稱スルモノハ、多分外記局ノ日記ニテ、少納言信西ノ作ニハ非ズ、宇多帝ヨリ以後ノ國史ハ、絕テ無レ之、水戶光圀卿、日本史編集シ玉ヒシ時、普ク諸國尋ラレシカド不レ出由、安藤氏打聞ニモ見タリ

醍醐天皇、延喜七年十一月、延喜通寶ヲ鑄ル、天德元年マデ、五十一年行フ



重四分餘



徑六步
重七分

拾芥抄ニハ、天徳元年マデ、三十四ヶ年行フトアリ、三十四ヶ年目ハ、天慶三年ナリ、如何

日本紀略云、延喜七年十一月三日、改ニ寛平大寶一、爲ニ延喜通寶一、一以當ニ舊之十一、新與レ舊並相通用

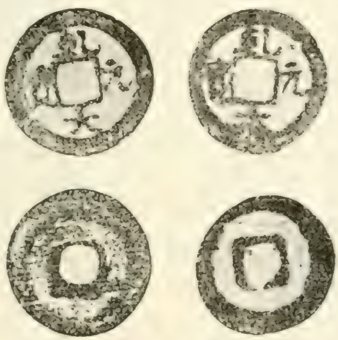
錢譜云、鉛錢之事、按此當時趨レ利惜レ銅之所レ鑄矣、模狀同ニ銅錢一

日本紀略云、天慶三年十一月七日、周防國飛驛言、鑄錢司爲レ賊被レ燒

村上天皇天德二年三月、鑄ニ乾元大寶一



徑六歩
重五分



徑六歩半
重八分

錢譜云、此錢銅質數品、製作有ニ精粗一、大者徑六分半、重八分、輕者六分、小者徑六分弱、重五分、一種有ニ元字端楷者一、至勘矣

日本紀略云、天德三年四月五日、賜ニ新錢於親王以下、諸司官人以上一、天皇并中宮東宮奉レ之、親王以

下於二軒廊南一給レ之、七日奉二新錢於諸社諸寺一使、可二差進一之由、仰二神祇官中務省一、十七日奉二新錢於
伊勢大神宮以下十一社一、以二神祇官人一爲レ使

西宮記裏書云、應和三年七月二十八日、民部卿令二延光奏一、公卿請下停二舊錢一用中新錢上論奏狀中云、以來十月爲二禁止之始一者
書レ聞下給

禁秘抄云、應和三年七月、公卿請レ停二並行舊錢一、用二新錢一論奏、書二聞字一返給

按ニ拾芥抄ニ、今年ヨリ應和三年七月十五日ニ至ル迄通用トアリ、此事不レ詳、天德二年三月ニ、乾元錢鑄始メ、此年ヨリ應和三年七月五日迄、追々鑄終リ通用セシヤ、右禁秘抄・西宮記裏書ニ、應和三年七月ニ、是迄新舊並行ヒシヲ、舊ヲ停メテ新ヲ用ヒント請フ、然レバ舊錢ハ通用ヤミテモ、乾元ノ新錢ハ、通用ヤムコトミエズ、制度通ニ、應和三年七月五日迄通用スト云フハ誤ナラン、天德二年ヨリ應和三年迄ハ、六年也、新舊並行フコトバカリ止ミシニヤアラン、又論奏ノコト、正史ニ委シク見エザレドモ、既ニ寶龜三年八月、太政官ノ奏ニ、天平寶字四年、万年通寶ノ新錢ヲ鑄ラレシトキ、舊錢ノ和同十文ヲ以テ、新錢ノ一文ニアテヽ、民間通用スレバ、其萬年通寶ノ貴キコト、舊錢ノ和同ニ九文ノ違アリ、其貴キ萬年通寶モ天平神護元年、神功開寶ヲ鑄ラレケレバ、忽賤クナリテ、十文ヲ以テ神功開寶ノ一文ニアツ、百姓ノ宿債ニモ、今迄ハ萬年通寶一貫文ヲ以テ償シモ、今十貫文ヲ以テ償フ、此萬年通寶モ、天平年新錢ノトキハ貴ク、和同ノ十文ヲ、一文ニ替テ通

用セシナリ、尤モ御法ニヨレバ、其通ノコトナレドモ、カヤウニ懸隔有テハ、民間擾亂シ、喧訴ヲ致サン、新舊兩錢トモ價ヲ同ウシテ通用スルカ、永ク舊錢ヲ止メテ、新錢バカリ用ント奏ス、コレニ依ルニ其頃ハ新錢神功開寶バカリ通用セシト見エタリ、其後寶龜九年八月ニ、右新錢バカリ民間通用スル故、皆古錢ヲ蓄ヘ持テ、却テ世間通用ナキコトヲ憂フニヨリ、新舊ノ分チナク價ヲ同ウシテ、世ニ行ハシメント奏ス、寶龜九年ヨリ延暦十五年迄、凡ソ十八九年ノ間、新舊ノ分チナク、通用アリシト見ユ、其後桓武天皇延暦十五年十一月ニ、新錢隆平永寶ヲ鑄ラレ、此錢ヨリ又價ヲ增シ、一文ヲ以テ、舊錢ノ神功開寶十文ニアテ行ハル、併シ前ニモ見エシ如ク、夫ニテハ民ノ騷動ナラン、然レドモ此新錢造鑄スクナキヲ以テ、暫ク錢ノ價ヲマサン爲ニ、新錢ノ一文ヲ以テ舊錢ノ十文ニアテ、翌延暦十六年ヨリ十九年マデ、四ケ年ヲ限リ通用シ、其後ハ停廢セシ由、日本後紀ニ見エタリ、弘仁九年富壽神寶ヲ鑄ラレシ時ハ、新舊ノ分チミエズ、承和二年、承和昌寶ヲ鑄ラレシヨリハ、又新舊兩錢ノ分チアリテ、代々ノ改鑄皆同ジヤウナリ、天德二年ニ、乾元大寶ヲ鑄ラレシ迄ハ、新舊兩錢通用ノ分チアリト見ユ、但シ九暦・日本紀略・西宮紀裏書・禁秘抄ニモ、其分チハ知レザレドモ、新錢論奏ノコトアレバ、全ク前ニ云ル、寶龜三年太政官ノ奏ニ見エシ通ノコトニテ、民間擾亂スルノミニモアラズ、其上東國ニ將門謀反シ、西國ニ純友起リ、東西國々穩ナラズ、又延喜聖朝ノ遺風アリテ、何トナク貴賤奢侈ニ矜リ、不時ノ費用モ夥シク、貧究ノ官人ハ、官ヲ賣物ト

シ、富者ハ錢貨ヲ以テ爵位ヲ求メ（菅文時封事ノ三ケ條ニ見ユ）或ハ悋者ハ、萬緡ノ錢ヲ蓄フ、依テ下民困究シ、自然ト其頃新舊ノ兩錢モ不融通ニテ錢乏シク、公卿ヲ始メ衰微セシト見エタリ、其上東西穩ナラザレバ、銅ノ出方モ少ク、鑄錢モ數ナシトミユ、鉛錢迄モ鑄ラレシ程ノコト故、今新舊ノ分チ有テハ錢乏シク、世上困衰ノ上ハ、彌以騷動セン、仍テ分チナク共ニ世ニ行ハント奏シ、或ハ古例ノ儘ニ通行センニ、何ノ子細カアラント奏シ、又ハ舊錢ヲ止テ、新錢バカリ用ヒント奏シテ、論議區々ナリシトミユ、依レ之民新舊論奏アルコトヲ聞テ大ニ惑ヒ、新舊トモ自然ト通用ヤミ、貨物交易甚不便利ニテ、民ノ騷動大方ナラズ、依レ之永延元年十月二十七日、於二諸寺一祈レ可レ用レ錢之由、又十一月一日、仰二有司一制二上下不レ用二錢貨一事ト、百練抄ニミエタリ、右天德二年ニ、乾元大寶ヲ鑄ラレ、其後六百年程改錢ノコトナシ、和同開珎ヨリ乾元大寶ニ至テ、本朝ノ十二錢ト稱ス、但シ太平元寶・開基勝寶ノ金銀錢ヲ除ケリ

三貨圖彙　卷之三　錢之部

草間直方輯錄

天德二年ヨリ元享三年迄、凡三百六十六年ノ間、鑄錢ノコトナシ

新安手簡云、應和の後錢文見え候はぬ事に付、蒙ㇾ仰候、此時公卿論奏と見え候は、更鑄新錢の事は停められ、たゞ〳〵歴代の舊錢、並行の事に決候故に、其後錢文の事は、見え候はぬやらん、夫に付日本紀略天德の紀御記るし被ㇾ下、用も有ㇾ之間敷候へ共、被㆓仰下㆒候由に御座候、手前藏本には因幡介廣兼・圖書允行保懷之と有ㇾ之候に付、三人の事に候哉、何れも姓の見へ候はぬは、必ず脫誤に候はんと存じ候得共、別本とても存じ候方の內に、不ㇾ及ㇾ承候て、疑を殘し置候處に、廣兼懷之の姓初めて承り候、又富壽神寶錢の事も見及ばず、疑なきにもあらず候處に、正宗寺椽ノ下より、出で候錢どもの事しるされ候、御書付被ㇾ下候內に拾一錢まで見え申候、是等二條は、思ひがけざることにて、御敎示忝候

右ノ通白石ノ文通ニモ見エタリ、西宮記・禁秘抄ニモ、公卿論奏ノコトアリ、天德錢以後應和ヨリ元享迄、三百餘年改鑄ノコト聞エズ、尤天德ヨリ保元迄、百九十年ノ間靜謐トイヘドモ、內裏炎上六ヶ度ナリ、其餘奧州前九年後三年ノ戰等有ㇾ之、鑄錢アルベキ時節モナシ、保元ヨリ源平ノ亂打續キ、夫ヨ

リ天正・慶長ニ至ル迄、天下靜カナラザレバ、制度通ニモ、乾元錢迄ニテ、夫ヨリ以後ノコト不レ聞ト云々、九十五代後醍醐天皇、建武元年二月ニ、乾坤通寶ヲ鑄サセラル

建武年間記云、改錢事、建武元年三月廿八日、有ニ御沙汰一云々、詔居ニ聖人之大寶一、理究ニ變通一、天地之洪規事ニ沿革一、察レ時制レ法、事拘ニ一途一、國家有レ錢其來尚矣、周武闢レ基、九府之圜法、肇興ニ漢文隆業一、四銖之形制、更彰ニ金鐵之品龜龍之類一、衆物雖レ區、同歸ニ節用一、本朝垂レ範、上世以來、屢改レ官、文載傳ニ簡牘一、所謂自ニ天平寶字一至ニ于天德十有余度一、綿歷寔詳、降及ニ近古一、求ニ之外聞一、擅敷ニ俗間一、官法如レ忘、頗違ニ彝典一、復枉ニ政令一、今以ニ新化一爲レ除ニ舊弊一、始造ニ官錢一、須下頒ニ天下一、濟レ世便上レ民、孰謂レ不レ爾、仍文曰ニ乾坤通寶一、銅楮並用、交易莫レ滯、仁義所レ原、定樂厥成、告以ニ宸衷一、若稽ニ天理一、主者施行、建武元年三月日

右ノ通ナレドモ、亂國故世ニ行ハレザルカ、今其錢ヲ不レ見、專ラ異國歷代ノ錢ヲ、用ヒシト見エタリ、隨唐ヨリ、宋元明ノ代ノ錢多シ、善隣國寶記ニ、元史ヲ引テ、「日本遣ニ商人一持レ金來、易ニ銅錢一許レ之」トアリ、商人此時代、異國ヘワタリ持歸リシ錢、又多カルベシ、本邦ノ金、異國ヘ渡リシコト量ルベカラズ、寶貨事略ヲ考フベシ

永樂ノ事　大明永樂ノ天子ヨリ、鹿苑院義滿公、彼國ノ封爵ヲ受ラレシカバ、其頃本邦ヘモ、永樂錢多ク送ラルヽトナリ

大明ヘ聘問ノ事

康富記云、草、菅相公秀長卿、清書、宮内卿行俊卿、日本准三后書上ニ大明皇帝陛下一、日本國開闢以來、無レ不通聘問於上邦一、道義幸秉ニ國鈞一、海内無レ虞、特遵ニ往古之法一、而使ニ肥富相副祖阿好一獻ニ方物一、金千兩・金馬十疋・鎧一領・筒丸一兩・劍一腰・刀一柄・扇百本・薄樣千帖・屛風三双・硯筥一合・文臺一箇、搜ニ尋海島漂寄者幾許人一還レ之、道義誠恐頓首謹言、應永八年五月十三日

明ノ大祖、洪武三十四年ニ當ル、永樂元年ノ前々年也、道義ハ義滿ノ法名ナリ、此時代ヨリ、東山殿ニ至リ、兩國通信ノ書頗數通アリ、今略レ之

應永十五年、明大祖賜書云、奉天承運皇帝制、曰、朕祇膺ニ大命一、統ニ御萬方一、體ニ天地之仁一、衍ニ生民之福一、若有ニ賢哲材智一、敦ニ敬天事大之懷一、重ニ保土恤民之心一、則恩寵之隆、昭ニ于無極一、斯帝王旌勸之大公也、故日本國王源道義、慈惠恭和、聰明特達、持レ身有レ禮、處レ事有レ義、好レ善惡レ惡、始終一志、敬レ天事レ上、表裡一誠、負ニ弘偉之度一、懷ニ卓犖之才一、仁厚洽ニ於國人一、賢惠昭ニ于遠邇一、自ニ朕御レ極以來、忠敬之心愈隆、職貢之德有レ加無レ替、遵ニ奉朝命一、斯須ニ不稽一、竭レ力殫レ心、惟恐レ不レ及、殄ニ寇盜於海島一、安ニ黎庶於邊隅一、並海之地、鷄犬得レ寧、烽警不レ作、皆王之功也、蓋王忠順之誠、皎若ニ日星一、堅若ニ金石一、上通ニ於天地一、幽徹ニ於鬼神一、跡其有國以來、未レ有ニ如レ王盛一、何昔レ終レ之、奄及ニ諒悼一、悳之難レ忘、稽行易レ名、宜レ隆ニ恤典一、今特賜レ謚曰恭獻、於戲人以レ悳貴、德因レ謚顯、國家之寵命、人

生之至榮、王之生也、賢周ニ於身一、昭ニ於上下一、殁也美名揚ニ於此世一、流ニ於無究一、豈非ニ光明□偉傑然大丈夫一哉、靈若有レ知、服ニ茲嘉命一、永樂六年十二月二十一日

右封爵ノコト、舊章錄殊號事略、日本國皇ト云中ニ、鎌倉ノ右幕下ヲ以テ始トス、京都代々ノ公方ノ御事ヲ、皆日本國王ト記セリ、其中ニ鹿苑院殿ハ、正シク明ノ太祖ノ時、日本國王ニ封ゼラレ、薨逝ノ後、恭獻王ト云謚ヲモ賜ハリキ、此事ヲ南方紀傳ニ、應永十三年夏、大明ノ使者來ル、道義ヲ日本ノ國王ト稱ス、帝王道義ニ冠服ヲ贈ル、南軍笑テ曰、日本小國トイヘドモ、神皇相續、獨立天下皇帝タリ、人皇百餘代、異國ノ王號ヲ受ケズ、今源義滿代武臣タリ、誠ニ日本ノ耻辱、異朝ニ及タリト有、其後明ノ神宗ノ時、豐臣太閤ヲ以テ、日本國王ニ封ゼラレシヲ、我本ヨリ日本ノ王タリ、異朝ノ封ヲ受ベキニ非ズトテ、其使ヲ還サル、此時東照神君ヲモ、大都督ト云官ニ封ゼラレテ、冠服マデ贈ラレキ、太閤其封爵ヲ退ケ玉ヒシコトハ、誠ニ日本ノ面目ト云ベシ、又慈照院義政公、其奢強ク、其上兵亂打續キ、國用乏シク、鑄錢ノ沙汰ニモ不レ及、依レ之寬正五年・文明七年・同十五年、都テ三ケ度使ヲ立ラレシカバ、大明ヨリ永樂錢十萬貫ヲ送ル

善隣國寶記、寬正五年（明英宗、天順八年ニ當ル）

遣大明表云、書籍銅錢、仰ニ之上國一、其來久矣、今求ニ二物一、伏希奏達以滿ニ所欲一、書目見ニ于左方一、永樂年間、多給ニ銅錢一、近無ニ此擧一、故公庫索然、何以利レ民、欽待ニ周急一

又文明七年、（明憲宗成化十一年ニ當ル）表云、抑銅錢、經レ亂散失、公庫索然、土瘠民貧、何以賑施、永樂年間、多有ニ此賜一

又文明十五年（明憲宗成化十九年ニ當ル）表云、抑弊邑、久承ニ焚蕩之餘一、銅錢掃レ地而盡、官庫空虚、何以利レ民、今差ニ使者一、入朝所レ求有レ此耳、聖恩廣大、願得ニ一十萬貫一、以滿ニ其所レ求、則賜莫レ大レ焉

右ハ義政公・義尚公時代也、如レ此、明ヨリ請テ國用ヲ償フ、此時神事佛事、四方拜平座等公事、幷將軍家ノ御元服、任官拜賀等ニ至ル迄、無ニ用脚一、容易ニ行フコト成難シ、至テ難澁ノ趣ハ、元長記・二水記・親長卿等ノ記ヲ以テ、其衰微推テ知ルベシ、但シ應永年ノ季ヨリ、永享・文安年ノ頃ハ、銀一匁ニ、錢百五十五文位トミユ、康富記、文安四年六月廿五日、西隼人町夏地子銀ノ條ニ見エタリ（夏地子銀七匁、代錢一貫百五十五文、冬地子銀七匁分、一貫二百七十文ニテ、銀貴ク錢賤シ、此頃ヨリ早撰錢ノコト起シナラン）

武家盛衰記云、後小松院御宇、應安十年癸未秋八月二日、大風吹テ、神社佛閣民屋等、コトゴトク顚倒シ、無爲ナルハ希ナリ、二日未刻ヨリ吹キ立テ、翌三日巳ノ刻マデ、夥シク吹キケリ、三日申下刻ニ、唐舟一艘、相州三浦ノ崎ヘ漂着シタリ、當時鎌倉公方足利滿兼朝臣下知トシテ、東二郎右衞門貞次・梶原能登守景宗・三浦備前守義高ヲ奉行トシテ、被レ遂ニ僉議一ケルニ、惡風ニ放ナタレ着岸スルヨシヲ申ス、則チ舟中ノ雜物已下、悉ク點撿アルニ、永樂錢百萬貫ヲ積ミ乘セタリ、依レ之其唐船ヲ押留メ、使者ヲ京都ヘ上セ、前將軍義滿入道道義、新將軍義持公ヘ委細ヲ告ゲラレシニ、唐船關東ヘ着岸

スル上ハ、是滿兼ノ德分タルベシト、仰下サレシカバ船、中ノ財寶殘ラズ押留メ、唐船ニハ可二皈國一其日數ヲ積リテ、餘分ニ兵糧ヲ與ヘ、鹽味噌薪等ヲ施シ、唐朝ヘ被二追歸一

案ズルニ和漢合運ニモ、應永十年八月三日、唐船來ルトアルハ、此事ナルベシ、又永樂通寶錢ハ、明史ニ所レ載、成祖永樂九年鑄レ之トアリ、永樂九年ハ、本邦應永十八年ニ當レリ、然レバ永樂通寶ヲ鑄シ年ヨリ、八年前ニ、永樂錢本邦ヘ渡ルベキ謂レナシ、又百萬貫ト云モ、甚大數ナリ、疑ラクハ永樂年ノ初ヨリ、追々鑄レ之、九年ヨリ天下ニ行ハレシニヤ、右大數ノ永樂錢、彼ノ地何レノ國ニテ鑄シヤ知ラザレドモ、洛陽ナドヘ運送ノ船、難風ニ逢ヒテ、當地ヘ漂着セシニヤ、何レ不審、今又永樂錢ノ多キヲ以テミレバ、此錢ニ相違有マジ、洪武通寶ハ、永樂ヨリ以前ナレドモ、洪武ニテハ有マジ

又云、其後滿兼ノ下知トシテ、關東ハ此錢ヲ以、賣買致スベシト法ヲ定メ、皆々永樂錢ヲ用ヒタリ、其後天文十九年頃、關八州、北條氏ノ領國トナリシ頃、關東ノ諸民、鐚ト云ヘル惡錢ヲ相交ヘ、永樂ト同直段ニ用ヒシ故、賣買ノ輩モ是ヲ嫌ヒ、所々ニ爭論タエズ、因レ玆天文十九年庚戌歲、北條ノ家臣、山角信濃守定信・笠原越前守康朝、其外奉行頭人等ヲ招集シテ、氏康評定セラレシハ、夫鳥目ニ品品ノ替リアレドモ、永樂ニハシカズ、自今以後、關東ニテハ永樂錢ヲ用ヒツカヒ、他錢ヲ用ヒザルヤウニ下知スベシト思フ也、一ツニハ錢ノ善惡、日ヲ同フシテ謂ベカラズ、二ツニハ民ノ鬪諍ヲ止メンガ

爲、三ツニハ賣買ノ隙ヲ弊ヤサンガ爲ナリ、面々如何思フゾト談ジケルニ、一座ノ輩皆尤ト同ジケリ、コノ故ニ、辻々町々郡莊郷村里ニ、右ノ趣ヲ高札ニ書テ立ラレケル、夫ヨリ後ハ、關八州ノ輩、市町ヲ初メ、皆々永樂錢バカリヲ用ヒシカバ、近國遠郷ノモノ迄モ、永樂ノ中ヨリ、鐚ヲ撰ビ出シ、惡錢ヲ除キシカバ、自然ト鐚ハ廢リ、上方ヘノミ登リ、永樂錢ノミ關東ヘ留リケル、此時ヨリ鐚錢ヲ京錢ト云シトカヤ、其後時代遙ニ經テ、天正八年七月十一日、北條左京大夫氏政、子息新五郎氏直ノ時ニ至リ、豐臣秀吉公、小田原ノ城ヲ攻テ、氏政ハ自害シ、氏直ハ高野山ニ蟄居シケレバ、關八州ヲバ、德川神君領セサセ玉フ、中略其後慶長五年、關ケ原御利運ニヨツテ、天下一統ニ、神君ノ御下知トナリシカバ、慶長九年ノ正月ヨリ、天下等シク永樂錢ヲ用ヒタリ、然レドモ一向鐚ヲ弃ベキニ非ズトテ、永樂ノ代ニ鐚四錢ヲニソ遣ヒケル、サレドモ其錢ノ善惡ヲ撰ビ論ジ、賣買ノ妨トナリシカバ、商夫共迷惑スルコト多カリケリ、　神君又此由ヲ聞シメサレ、慶長十一年十二月八日ニ、御家老大久保相模守忠隣・本多佐渡守正信等ニ仰テ、永樂錢ヲ制禁アリ、鐚ノ一錢ヲ用ユベシト、武州江戸日本橋ニ高札ヲ立ラレシカバ、是ヨリシテ又永樂錢ハ廢リケリ、天文十九年ニ、永樂錢ハ鐚ニ秀デ、既ニ五十七年ノ暦數ヲ經タリシニ、此時又廢捨セラレケリ、非常ノ財寶スラ猶盛衰ノ理アリ、況ンヤ有常ノ人間ニ於テヲヤ下略

建武式目追加云、セイセンノギ、京錢ウチヒラメヲノゾク、其外ノトタウ錢、エイラクコウブセン、ト

クワレ錢（但ワレトチラザル錢）以下、トリ合テ百文ニ三十二錢、（ケリヤウ三分一可レ有レ之）於ニ向後一トリ可レ渡事

一　アク錢賣買儀一切可ニ停止一事

右ノ條々堅ク被ニ制止一訖、若背ニ此旨一族アラバ、權門勢家ノヒクワンヲイワズ、於ニ其身一者處ニ嚴科一、至ニ私宅一者闕所ニオコナハルベキ由處被ニ仰下一也、仍テ下知如レ件

永正五八七　沙彌信祐　近江守三善朝臣貞運

一　撰錢事、近年令レ超ニ過先規一之條、爲レ世爲レ人、不レ可レ不レ誡、所詮於ニ古今一、渡唐錢者、悉以可レ取ニ用之一、決惡錢賣買義停止事、被レ定ニ御法一、被レ打ニ高札於洛中一訖、可レ令レ存之由、被ニ仰出一也

永正五年八月七日　信祐　貞運

一　撰錢事、近年令レ超ニ過先規一條被レ定ニ御法一、被レ打ニ高札於洛中一之上者、守ニ彼札一於ニ古今渡唐錢一可ニ取用一之趣、堅可レ被ニ相觸一、洛中被官人、同分國中所々之由所レ被ニ仰下一也、仍執達如レ件

永正五年八月七日　沙彌　近江守

商賣輩以下錢撰事（明德九十）

一　近年恣ニ撰錢之段太不レ可レ然、所詮於ニ日本一新撰料足者堅不レ可レ撰レ之、到ニ根本一渡唐錢（永樂・洪武・宣德）等者、向後可ニ取渡レ之、（但如ニ自余之錢一可ニ相交一）若有ニ違背之族一者、速可レ被ニ嚴科一

松田丹後守長秀

蜷川親俊記、天文十一年閏三月十二日下云

一 撰錢之事任二先例一執事代々被レ仰二出之一

同年四月廿二日下云、松田丹後守殿撰錢事ニ付而、上下京酒屋土倉中質物之事申間□□□賦

遣之書狀案文

撰錢之事今度被レ定二御法一被レ打二高札一訖、於二向後一者守二彼札一可レ致二商賣一之、但至二質物一者、借

主約諾次第、可レ被レ渡之由、諸土倉酒屋中へ可レ被レ成二御下知一候

卯月十二日

松田丹後守殿

同年五月四日下云

一 今度撰錢之儀御下知爲二御禮一貴殿へ御馬代三百疋□□賦百疋□□五百疋□□五十疋百疋

何レモヘ遣也

多門院日記永祿八年十二月二十五日下云

一 今般以之外精錢候間制札之外世上定レ之

一 新　錢　　　一 ワレカケ

一 コロロ　　　一 宣　德

一　ウラニ字ノアル　　一　文字不見

以上六錢ヲ札ニ書レ之被ニ打置一に、依レ之惣別之賣買一向不レ成、又少々は心安し

右永正ハ京都將軍義植公、明應ハ義澄公、天文ハ義晴公、永祿ハ義榮公ノ時代ニテ、洛中ハ勿論、上方モ專ラ撰錢ノコトアリシトミユ、依テ制令有シナルベシ、多門院日記ニ新錢トアルハ、天文・永祿頃ニ私ニ鑄シ贋錢ニテ、水戶ノ永利手、隅州ノ加治木錢ト云ノ類ナリ、コロヽト云ハ、承和・昌寶以來、乾元大寶錢ノ小形ナルベキ歟、此錢銅質粗惡ニシテ、和同・萬年・神功等ノ錢質ニ比シテハ甚劣レリ、永祿ヨリ天正ノ頃、うちひらめトアルハ、右等ノ小錢ヲ打ヒラメシモノニテ、コロ錢ハ、打ヒラメザル小錢ノ類ナルベシ、又裏ニ字ノアル錢ト云ハ大中・洪武錢、其外漢土ノ錢、裏ニ文字アルモノ多シ、永樂ニモ稀ニハ文字アルモアレドモ、永樂錢ヲ專ラ貴ビ、其餘ノ漢錢ハ、撰嫌ヒシトミユ、建武式目ニアル、渡唐錢ノ內、永樂ハ勿論、洪武・宣德等、皆トリ合テ通用セシモ、後ニハ又宣德錢ヲ嫌ヒシニヤ、是等ハイカナル故ト云事ヲシラズ、又撰錢制令ノ中ニモ、心得難キ事多シ、其頃商民ノ云出セシ俗言ニヤ、今贋錢ヲカンツト云ノ類ニシテ解セザル事、間々アリ

天王寺古文書云、定精選條々　　天王寺境內

一　ころせんとくやけ錢　下しの古錢　以二一倍一用レ之　一　ゑみやう　おほかけ　われすり　以二五倍一用レ之

一　うちひらめ　なんきん　以二十倍增一用レ之

此外不レ可レ撰事

一 段錢・地子錢・公事錢并金銀・唐物・絹布・質物・五穀以下、此外諸商賣如ニ有來一時の相庭をもて、定の代とりかはすべし、付ことを精錢によせ、諸商買物高直になすべからざる事

一 諸の事とりかはし、精錢と增錢と半分宛たるべし、此外は其者の挨拶にまかすべき事

一 惡錢賣買かたく停止事

一 精錢未決の間に其場へ押入於ニ狼藉者一に其所の人として相支可ニ注進一若見除之輩に至ては可レ爲ニ同罪一事

右條々若有ニ違犯之輩一者速可レ被レ處ニ嚴科一之由候也、仍攸レ被ニ定置一如レ件

永祿十二年三月一日　彈正忠在判

右等ノ内ゑみやう・なんきん等ノ事今解シ難シ、奥ニ記ス元和二年ノ制令ヲ以テ推セバ、ヱミヤウト云ハ形ナシ錢ノ類ニテ錢質全カラズ、今ノカンツト云モノ、タグヒニシテ、正錢ニアラズ、依テコレヲ卑ミ、穢ト唱ヘシニヤ、又ナンキント云ハ、其頃卑民鉛ナドヲ南銀ト云ヒテ鉛錢ノコトニテハナキヤ、何レヱミヤウ・ナンキン事知ベカラズ、今カヤウノコトニ强テ理ヲ付ルハヨロシカラズ、古代ノ事情ヲ誤ル事アリ、知レザル事ハ其マヽニ置モ可ナリ、又精鐚撰錢ニ付テ東國筋ハ精永樂一錢ヲ以テ鐚四錢ニ易ル趣、連々玆ニ記ストイヘドモ、右永祿十二年、天王寺ノ古文書ニ依テ推セバ、其頃又鐚

ノ通用モ交易ニ増減アルヤウニ見ユ、ころ又せんとく下しの古銭本邦和同以後ノ十二銭、又唐ヨリ渡リシ精銭ノ類ナラン足等ハ、永樂ノ精銭一文ヲ以テ二文ニ替シナラン、形ナシ大かけわれ銭、文字スレ滅シタル銭ナドハ、永樂精銭一文ヲ以テ五文ニ易シトミユ、打ヒラメナマリ銭ノ類ハ、永樂精銭一文ヲ以テ十文ニ易シナラン、コレニ依テ諸物ノ賣買代銭モ時ノ相庭ヲ以テ、譬バ貨物ノ代銭一貫文ナレバ、五百文ハ永樂ノ精銭ヲ渡シ、殘リ五百文ヲ、コロ宣徳ノ類ニテ一貫文トシテ、代一貫文ノ所ヘ都合一貫五百文渡セシナルベシ、其ノ外中銭但シ中銭ノ事ハ物價ノ部ニ出ス等ノ事アリテ、今人ノ知ラザル事数多アリ、都テ古文書ノ中、制令ハ今ノ觸書ノ如ク下民ノ解シヤスキヤウニ、俗言ヲ以テ記セシ事多シ、依テ多分假名書ナリ、右撰銭ノ事ハ關八州ヨリ起リ、五畿内邊迄ノ事ニシテ、西國筋ハ多クキコエズ、又國所ニヨリ、其交易モ一列ナラズ、然レドモ私ノ貸借證書等ノ定メハ皆精銭ニテ、凡鐚ノ分六銭ハ除シト見ユル事間々アリ、東寺執行日記、文明六年五月ノ古借状ニモ永樂ノ下ハ、コレヲ撰テ返辨スベキノ定メアリ、大光院、天正年ノ古文書ニモ見エタリ、昔奥州津輕・南部ノ境馬門村南部領場澤村津輕領右兩境ノ間ニ、山論有リテ京ヨリ檢使コレアリ、公裁ノ上、津輕領ニ決ス、然トイヘドモ此所秣ヲ刈所ナル故、南部領ノ民迷惑ス、コレニ依テ南部ノ領主ヨリ、毎年永樂銭三貫文ヲ出サレテ秣ヲ刈ラシム、今ニ異變コレナキ由ナリ、尤永樂通用ノ時、鐚銭ヲ代リトシテ渡サル、其以後今以寛永銭拾二貫文ヲ渡サルヽトゾ、右鐚銭ハ永樂一貫文ニ付四貫文ナリ、津輕ヨリ受納ノ證文ニ永樂銭三貫文、此鐚十二貫文トアリ、永樂一銭ニ、鐚銭四銭

通用明ケシ、又當時京都・關東御佛事コレアル時、諸宗ヘノ御布施先例アリテ、夫々甲乙コレアリトイヘドモ、御布施百貫文ト云ハ錢四百貫文、五十貫文ハ二百貫文、コレヲ被レ下、是永樂通用ノ時ノ遺風ナルベシ、其實否ハシラズ、此鐚錢ト云ハ、永樂・洪武・宣德ナドノ文字全カラズ、或ハワレカケ、又ハ薄ク、其余和錢ヲ打ヒラメナドセシ錢ノ事也但此事奥ニ記ス右鐚錢ハ皆私鑄ノ贋錢也、私鑄ノ事和同元年鑄錢ノ時、私ニ濫錢ヲ作リ公錢ニ紛亂セリ、然ルニ翌年正月私鑄錢ノ事ヲ禁ゼラル詳クハ和同錢ノ條ニ出ス天平寶字四年ニモ私鑄錢禁斷ノ事ミエタリ、扨前ニ云如ク、異朝ノ錢甚多シ、コレニ依テ鑄錢ノ沙汰ナシ、京都始國々皆異朝ノ錢ニ本邦ノ錢ヲ交ヘテ遣フ、其後天正・慶長ニ至リ神君御代トナリ、金小判關八州通用アリテ、凡小判一兩ニ永樂錢壹貫文ヲ當ルト云、當時關東筋ニテ金子貸借ノ利足ナド金ノ端ヲ永何十文ト云、是レ永樂通用ノ餘風ナリ、仍テ永一貫文ヲ金一兩ト立テ永二百五十文ヲ一歩ト立ル此謂ナリ、又關東筋田地ノ賣買ニモ昔ハ皆永樂錢ヲ以テ極ムト云フ、コレニ依テ諸士ノ祿ヲ定メシニモ、何千貫・何百貫ナドアリ、是天文・永祿年ヨリノ定メナレドモ今ハ用ヒズ

伊勢貞丈隨筆云、知行幾貫ト云ハ、俗說贅辨續編云、中古地方ノ知行ヲ計ルニ、百貫・千貫ト云數目アリ、今モ仙臺ニハ其數名アリト云、此數西國ニテハ明ニ知ル人ナシ、武家系圖、相模入道平高時ノ下云、領地二十八萬七千貫、當代知行百四十三萬五千石、是五段ヲ一貫トシタルモノ也、又アル人奥州ノ人ニ聞タルトテ語リケルハ、古永樂十文ニ米四合八勺ヲウル故ニ、百文ハ四升八合、一貫ハ四斗八

升、十貫ハ四石八斗、百貫ハ四十八石ニ當レバ、知行百貫ト云ハ、今ノ知行百石ト同ジ、後世家ニヨリテ、知行ヲ藏米ニテ遣スニ、四ツ八分ノ免ナラシトテ、米四十八石ヲ百石ト名ヅケテ遣ス、此古法也ト、今按ニ我友人古證ヲ以テ、決レ之曰、右ノ兩說皆非也、土佐國幡多郡中村鄉不破村八幡宮寶藏ニ一條家ノ古文書アリ

於本鄉中村

八幡へ御寄進田之事

一 中ノ前田 所壹貫　有間之内　光任小作 珍五郎

一 ハシナ松 壹貫分　目黑之内　泉□□

一 大ホトケ 七百五十分　藏橋分

一 貳百五十分　立石分

合而參貫分歟

永祿二年己未三月吉日　康政印

右ノ文書ヲ按ズルニ、田千步ヲ一貫トス、今ノ三段三畝十步ナリ、是錢千文ヲ一貫トスルガ如シ、然レバ百貫ハ田十萬步、今ノ法ニシテ、三十三町三段三畝十步也、知行三百三十三石三斗三升三合トスベシ、恐ラクハ奥ニテ申スモ如レ此ナラン歟、徂徠先生鈐錄曰、武士ノ知行、幾十貫・幾百貫ト云、田

一坪ニ、苗一把種ユル事ニテ、百坪ニハ百把ウユル、是ヲ百目ト云、千坪ニ千把ウユル、是ヲ一貫目ト云、此積ニテ大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニ當ルトモ、其上中下ノ地面ニヨリ一定シ難シ、是古法也、貞丈云、俗說贅辨續編ニ所謂、武家系圖ハ近世ノ人ノ作ト見エテ、當代知行百四十三萬五千石トアリ、サレバ高時ガ領地二十八萬四千貫ト云ヘル、貫ヅモリ信ジガタシ、鎌倉時代ノ所領ハ、何ノ地ニ於テ、幾十町賜ルナドト云ヒテ、町段ツモリ也、貫ヅモリモ、石ヅモリモナシ、室町家ニ至ツテ、明國ト通商シテ、大明ノ永樂錢多ク渡リ來テ、此ノ方ニテ通用シケル故、所領ノ高モ永樂錢ニテ、永幾十貫・幾百貫ト云、永トハ永樂錢ノ事也、此方ノ錢ヲバビタト云フ、永樂錢ヨリハ惡キ錢ナルニ依テ金偏ニ惡ノ字ヲ書テ、ビタトヨマセタリ、今モ農家ノ年貢帳ニ、幾貫文、鐚幾文ト書也、鎌倉時代ニハ、永樂錢ナカリシ故、所領幾貫ト云名目ハ無之ナリ、又奥州ノ人ニ聞タルトテ、百貫ハ今ノ知行百石ト同ジト云ハ誤ナリ、永十貫ハイマノ百石ニテ、百貫ハ今ノ千石也、慶長年中金子通用始リテ、永一貫文ヲ小判一兩ニ當シ也、永百文ハ丁百也、鐚百文ハ九十六文也、永一貫文ハ鐚四貫百六十四文ニ當ル也、農家ニテハ今モ年貢ヲ永ヅモリニシテ、年貢帳ニ記ス也、江戸ノ人ハ此算數ヲ知ラヌ人アリ、今世ニ上ノ御藏米、一俵三斗五升入ト定メテ、三十五石ヲ百俵トス、此ノ百俵ノ價、永十貫文ト定ル也、金子ニシテ四十兩也、是大方ノ定ニテ、年々米ノ出來不出來ニ因ツテ相庭ノ上リ下リアリ、又國國古ヨリノ定メニ因ツテ、俵入ノ升數ノ多少ノ違アリ、大方ノ定ハ右ノ如シ、知行幾石ト云ヒテ、石

ヅモリヲ云フ事ハ當御代ヨリ始リシ事カ、豊臣太閤ノ頃マデモ、貫ヅモリナルベシ、貫ヅモリハ永樂錢ヨリ出タルコトニ違ヒナシ、其證ハ農家ノ年貢帳ナリ、又鈴錄ニ謂所ノ百目一貫目ト云フ事信ジ難シ、百目一貫目ナドト云ハ秤ノカケ目ニテ、田畝ノ數ニハ聞及バヌ事也、又土佐國幡多郡八幡宮ノ古文書ニ、一貫トアルモ七百五十トアルモ、永祿二年ノ定ナレバ、永樂錢ノツモリニテ記シタルナリ、名アル人ノ云シ事ハ其誤ヲモ辨ゼズシテ猥ニ信用スル故ニ、今委シク記シオク也

又云、武士ノ領所ハ鎌倉ノ代ニハ、幾町賜ルト云、今ハ幾石ト云也、然ルニ盛衰記第四十、屋島合戰ノ條ニ、太胡小橋太ト云者、海ヲ潜リテ、松浦太郎ガ船ニ乘テ、軍ノ下知スルヲ、其足ヲ捕リテ海中ヘ引入レ、首ヲ取リタルヲ、後ニ世靜テ、頼朝其功ヲ賞シテ、千餘石ノ勸賞ヲ給ヒタル由ミエタリ、此千餘石ハ、何ノ國ニテト云フ事モ見エズ、只千餘石トアレバ、國郡ヲ給リタルニハアラズ、米穀ヲ千餘石給ハリシナルベシ、石ハ斛ノ事也、鎌倉ノ代ニハ、何ノ國ノ何ト云處ニテ、幾町賜ルト云ナリ、永祿七年十一月二十日加茂ノ住人鈴木重量ニ釆邑ヲ賜リ、印章ヲ授ケラル

瀬戸地之内

一 三石五斗五升 禰宜方

一 貳石八斗七升 四郎左衞門之内

一 三石五斗八升

以上拾石也　此代拾貫文

右ノ分依レ有二子細一、酒井雅樂守爲券者所レ令二扶助一也、永不レ可レ有二相違一ノ狀、如レ件

永祿八乙丑年十一月二十七日　御諱

鈴木八右衞門どのへ

草廬雜談云、知行ニ貫ヲ以テ稱スル事、諸書ニテ考レドモ、知難カリシニ、今仙臺ノ人萬石以下ヲバ、貫ヲ以テ稱ス、十貫ヲ百石トス、是ニテヨク知レタリ、誠ニ知レザル事ハ、衆人ニ問尋ベキコトナリトアリ、コレニ依テミレバ、十貫ヲ百石トス、然レドモ右ノ御印章ヲ以テミレバ、百石百貫ノ割ナリ、其餘種々ノ說アレドモコレヲ略ス、又大觀通寶錢モ、多ク異國ヨリ渡リシニヤ

草廬雜談云、四家合考ト云モノヽ中ニ、永正元年天下飢饉シテ、會津ニテ米價一升百錢、此ノ時ノ錢ハ大觀通寶ナリ

按ニ、會津ニテ米一升百錢ナルハ、實ニ大飢饉ナルベシ、西土ノ錢ヲ遣ヒシ事ハ、諸書ニミエタレドモ、此頃奧州ニテ、大觀通寶バカリ遣ヒシコトハ、他書ニモ見アタラズ、コヽニ記スト云、今大觀錢世ニ多ク殘レリ、其頃ハ亂世故、商人ドモ異國へ渡リ、諸物交易セシ故、多ク持カヘリシニヤ、然レドモ大觀錢ハ、宋ノ徽宗大觀年中ニ鑄シ錢ニテ、本邦鳥羽院御宇ニ當レリ、右永正元年マデハ、異國ノ大觀年ヨリ、凡ソ三百九十年餘ニ當リ、其ノ間元・明ト代替リ、洪武・永樂・宣德ナド鑄錢

數萬コレアリ、右大觀錢ハ前世ノ錢故、本邦ヨリ交易ニ渡リシ商人ドモヘハ、此錢ヲ多ク渡セシニヤ不レ詳

奉使小錄云、今アル所ノ夷錢ハ、通用ノモノニアラザルヤウナレドモ、武州秩父郡ヨリ出セル古文書ニテ見レバ、夷錢モ通行ノ錢トノミエタリ、其文

右代物品前ニゑびす錢、於ニ鄉中ニ大小人ニ借候御算用事ハ、一ヶ月ニ五字、十ヶ月定五わり御算用可レ申候

甲戌八月十七日

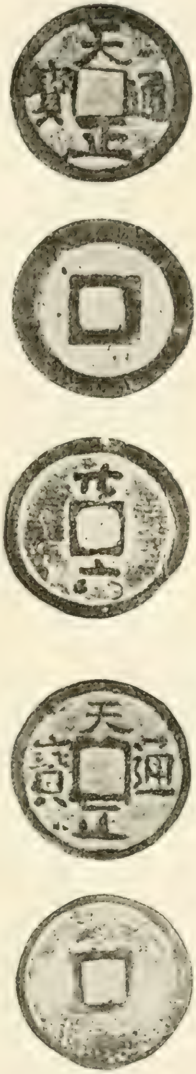
上吉田村、代官、百姓中

トアリテ、年號無レ之、朱印アリ見エガタシ 北條氏ノ印ナルベシ

右小錄書寫ノ誤リ多ク、文解シ難シ、故ニ前後略ス、夷錢ノ事、ヱビスノ繪錢ノ事ヲ云ハレシナルベシ、然レドモ諸書ニ夷錢トイフ事見アタラズ、今世ニ夷大黑ノ繪錢多クアリ、サレドモ此繪錢ノ事ニテハアルマジ、此繪錢ハ皆元祿ノコロ、好事ノモノヽタクミ拵シモノナリ、又座錢アリテ、僞錢者ノ作モアリ、何レ通用ノ錢ニテハコレナシ、右小錄ノ論ハ甚疑ハシ、古文書ニヱビス錢トアル故、推察ニ夷ノ繪錢ト評ヲ付ラレシナルベシ、尤年號コレナキ故分明ナラズ、朱印モ北條氏ノ印ナラントアルハ、氏康以來、闔八州領セシ時ノ印ナルベシ、永樂錢專ラ關八州通用セシハ、鎌倉公方滿兼ノ時代ヨリ、北條氏政ノ頃盛也、此時代夷錢ト云事ミエズ、何レ夷ノ繪錢ノ事ニテハ有ベカラ

ズ、異國ノ錢ユヘ、夷錢ト云シナルベシ

天正通寳 銀銅二品アリ 百八代後陽成院天正十五年、豊臣太閤命ジテコレヲ鑄サシム

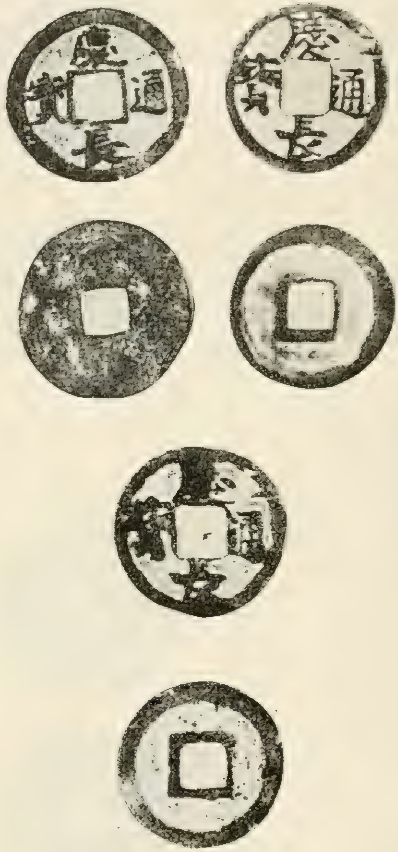


文祿通寳 又文祿元年太閤命ジテ銀錢ヲ鑄サシム、間々銅錢アレドモ贋錢ナリ



右二錢正史ニ見エズ、追テ考フベシ、弄錢家ノ說ニテハ詳ナラズ

慶長通寳　慶長十一年十一月八日コレヲ鑄サシム



或書云、後陽成帝、慶長十年十二月八日、慶長通寳ヲ鑄テ、永樂錢ノ通用ヲ禁ゼラル、是ハ永樂錢ノ撰強ク萬民安カラザル故也トゾ

按ニ、其砌永樂錢ヲ鑄物師買取テ、銅器ヲ鑄シトナリ、未ダ天下草昧ニシテ、一統ナラザル故、錢ヲ鑄潰ス事ヲ禁ゼザリシカバ、自然ト永樂始メ漢錢拂底ニ相成、民間次第ニ通貨不融通ニテ困窮セリ、世ニ錢ヲ鑄潰ス程ノ大罪ハアラジ、禁ゼズンバ有ベカラズ、近世奸民多ク、既ニ寛政年、文錢ヲ鑄潰シテ、佛具・燭臺・火鉢等ノ銅器ヲ竊カニ造ルモノアリ、召捕レテ嚴科ニ行ハレシヨシ聞ケリ、

尤天ノ罰スル所、サモ有ベキ事歟、文錢ノ銅質至テヨロシク、其品程ノ黄銅買ハント欲スル時ハ、凡一貫目ニテ價三四十目モセシナリ、今文錢一文ノ量目一匁アリテ、一貫文則一貫目ナリ、此錢今相場ニテ凡九匁前後、コレニ依テ奸利ヲ貪ル市民、窃ニコレヲ鑄潰シ、銅器ヲ造リ分外ノ利ヲ貪ル、其惡行天豈免サンヤ、後世カヽル罪人多シ、公ノ制令ナクンバ、蓋シ治平ノ一日ヲ過サンヤ、國恩ノ有難キ事謹デ思フベシ

元和通寶　百九代後水尾院、元和三年コレヲ鑄サシム、銀銅ノ二品アリ



右慶長・元和ノ兩錢ヲ鑄ラレシ事諸史ニ見エズ、猶考フベシ、又永樂錢興廢ノ事、武家盛衰記ノ趣、前ニ見エタリ

北條五代記二の卷に云、關東永樂錢すたる事見しは、今錢はから國のたからなるを、いつの頃より我が朝へ渡り、日本のたからとす、錢は日出度子細樣々あるにより異名おほし、其中に錢を青蚨と云ふことは、昔天竺悲南といふ所に、青蚨といふむしあり、其母をころして錢にぬり、其子を殺し

てさしにぬり、偖市町にて此ぜにを以て物を買へば、其母錢子を戀ひてかへり來り、さしにつらぬかれ〳〵する事幾度ありてもつきず、是淮南の術なり、去程に一百の靑蚨にて一生涯つかふ、是に依て、靑蚨と名づけたり、唐國ノ作法は年號改元には錢をあらため、錢ノ中の文字開元・天德・政和元祐ノ永樂などゝ年號を作せり、されば錢品々ある中に、とりわけ永樂錢を關東にて重寶する事不審なり、然るに唐の年代記を見るに、永樂は明朝御代三十六年に當りてはじまる、此とし日本は、應永十癸未年にあたる、此年八月三日、唐船我朝へきたる、扨又同年中日本より唐國へ御貢を納ると、是も年代記にあり、此船ともに彼永樂を積み來りけるか、慶長十一丙午の年迄は二百九年になりぬ、年寄たる人いふやう、近き年迄、關東にびた・永樂とりまじへ、同じ樣につかひしが、在在所々に於て善惡を爭ひ事有り、止むことなし、其頃東八ヶ國の守護北條氏康公仰せけるは、錢はしな〴〵有といへども、永樂にますはあらじ、自今以後、關東にて永樂一錢をつかふべしと、天文九戊の年に高札を立てられければ、關八州、市町にて永樂を用ひる、此儀近國他國へ聞え、びたの内より永樂をゑり出して用へ、びたはいつとなくかみがたへのぼり、關西にてつかひ、永樂は關東にとゞまつて用る、然るに今は天下一統のよとなり、東西にて此二錢をつかふ、されども永樂一錢のかはりは、びた四錢五錢つかふ、是により善惡をえらび、萬民安からず、此由公方に聞し召、びた一錢を用ゆべし、永樂禁制と慶長十一年午の極月八日、武州江戸日本橋に高札立つ、夫より天下

の永樂すたる、故に永樂をはかりめにかけ、鑄物師買取て、萬の道具につかふ、さればこの永樂世のびたのなみならば、末代日本のたからとなるべきに、天文より餘錢に秀て用事譬へば燈し火消むとて其光をますがごとし、慶長迄五十七年の間、さかむにして目出度寶錢もめつする時節にあへるふしぎさよと語りければ、老人きゝて錢かはりといふに付て詠ぜし歌あり、古今集に、伊勢が家をうりて

　あすか河ふちにもあらぬ我やども、せにかはり行ものにぞありける

とよめり、これは淵の瀨にかはるを錢によせたるなり、顯昭のいはく、ぜにをもて直となす法のゆへに、ぜにを瀨によせて淵變じ瀨となると云々、そのうへ一切萬物、むかしにかはらずといふ事なし、業因の緣によりて、つらそくあるべき程ありて、つくべき時につくる、日午なるときんばかたふき、月みてるときんばしよくすと、周易にみえたり、よきことも、あしきことも、世は皆不定也、不定と心得ぬるのみ、まことにてたがはずと申されし

伊勢貞丈漫錄ニ、奥州會津年譜ヲ引テ云、「第百七代正親町院、永祿元年戊午、同十年丁卯、自ニ此年一用永樂錢一、按、用ニ永樂錢一、可ニ天文末一未レ審

按、天文十五年庚戌九月十日、捨ニ永樂通寶錢一用ニ京錢一、京錢者歷代之雜錢也、傳云、駿府大相國公一夕夢換レ城、醒告ニ忠於本多佐渡守一、佐渡守敬曰、是公不レ所レ可レ患、志路可ニ相換一太易也、以ニ京錢一換ニ永樂一、公尤容ニ其言一、終如ニ此云、其事倭俗謂レ錢曰ニ代物一、訓志路也、故取レ義然也

創業記、慶長十三年十二月下云、此冬江戸永樂錢ヲ捨テ、薄錢ヲ可レ用之由、大御所ノ玉フ云々、又或記ニ、慶長十五年九月十日、捨ニ永樂通寳錢一、用ニ京錢一、京錢ハ歷代ノ雜錢也云々、右京錢、薄錢ト云ハ雜錢ニテ、前ニ云如ク、皆鐚錢也、尤前ノ式目ニ、セイ錢ノギ、ウチヒラメヲノゾクトアリテ、此京錢ト云ハ、和同・萬年・神功以下、本邦ノ錢ヲ云ナラン、然レドモ和同・萬年・神功等ノ錢ハ形チ大ニシテ、量目一匁程モアリ、夫ヨリ以下ハ、段々形チ小ニナリテ、量目六七分位ナリ、依レ之永樂錢ヲ始メ、渡唐錢ト相交、百文ニ通用スレドモ、其中ニテ承和錢・長年錢ヨリ、乾元錢ニ至ル迄、段々形チ小ニシテ右ノ渡唐錢トサシ交ヘテハ、百文ノ緡面見苦シク、諸民トモ是ヲ厭フ故、右ノ承和・長年錢ヨリ、小錢ノ分ハ、槌ニテ打平メ、形チヲ大ニシテ、永樂錢ヲ始メ、渡唐ノ錢百文ノ中ヘ、差交ヘ通用ス、依テ彌市民精鐚ノ選ビ强ク、民ノ騷動止マズト見エタリ、扨此鐚錢モ、關八州ヨリ追々上方ヘ上リ、京ハ勿論西國筋迄モ、專ラ通用セシナルベシ、是皆此頃マデ、本邦鑄錢ノ沙汰コレナシ、諸國錢拂底ノ故ナリ、右鐚錢ヲ東國ヨリ選テ、上方ヘ登セシ故、鐚錢ヲスベテ京錢ト云、西國筋迄通用セルヨシハ、奉使小錄ニ記セル如ク、天正廿年八月、京大阪ヨリ肥前名護屋迄ノ次馬次夫次船定ノ古書ニ

大阪よりなごやへ次船

一 大阪よりは　　北政所殿御印

一　なごやよりは

關白殿御朱印
太閤樣御朱印

右浦々に一文遣ひの精錢百貫文被レ置候は、次ぎ舟に可レ被レ下ためなり、但奉行相紛かし、惡錢遣し
候はゞ、御定のごとく何錢にても增レ　ハ可ニ請取一候事
一　次舟四たんほたるべく候、一艘一里に付て、右の公用事十里、合二百文渡事
一　御定の御朱印めい〳〵請取置、次舟公用に遣し、追而算用可レ仕候、自然御朱印御印無レ之族は、
次舟之儀雖ニ申付一、不レ可ニ許容一事
右之條々、若違犯輩忽レ可レ被レ處ニ嚴科一者也

天正二十年八月　（豐臣朱印）

右ノ通ニテ、一文ヅカヒノ精錢トアレバ、勿論鐚錢アル事知ベシト云々、猶惡錢又中錢ト云フ事、物價ノ部ニ記ス、依テ玆ニ略ス

增補家忠日記、慶長十六年六月廿四日下云

一　從ニ江戶一品川迄、上下駄賃、荷物、駄、四十五〆に付、京錢廿六文、板橋へ三十文たるべき事
一　路頭、中宿木錢之事、宿主薪を燒に　いては、一人に付鐚錢三文づゝたるべし、但自分薪を求め
燒においては、宿賃不レ可レ出事

慶長十九寅年十月十九日

此京錢ト云モ、皆鐚錢ナリ、前ニ云、慶長十五年捨永樂錢・用京錢トアルハ、其頃頻リニ永樂鐚ノ選ビ强キ故、精錢ノ永樂ヲ捨ツレバ、却テ鐚ノ勢ヒ强ク相成、又永樂モ捨ツベキニアラザレバ、鐚ト同樣ニ通用シ、東國ヲ始メ、諸國自ラ穩ナラントト、永樂ヲ捨テラレシナルベシ、依レ之、元和年ニ至リテハ、左ノ錢、制令ノ通ノ六錢ハ省キ、其餘永樂・洪武・宣德、又慶長等ノ撰ビナク、都テ通用セラレシトミユ、元和三年五月ニ、酒井雅樂頭老臣ヨリ、東海道ノ領主ヘ連書ヲ以テ仰出サレシニモ、路次筋木錢一人ニ付、京錢四文・馬壹疋・京錢八文宿賃ニ極ムベキ旨觸ラル、又元和八年ニ仰出サルヽ制法ニ、江戶ヨリ品川迄、上下荷物一駄ニ付、ビタ錢三十四文、又御定ノ外人足宿賃ニ增錢取シモノハ、家一軒ニ付ビタ錢百文ヅヽ、年寄五貫文、過料タルベキ旨仰出サル

右京錢、又ビタ錢トアリテ、都テ鐚ノ定ニテ通用アリ、別ニ永樂錢ノ定ハナシ、永樂モ鐚ナミニナリテ、撰ビコレナシトミユ、然レドモ間々其理ヲサトラザルモノハ、喧シク爭論コレアルニヨリ、

コレヨリ先ニモ、元和二年、錢通用ノ制令ヲ出サル

急度申入候、御定之惡錢にて路次筋、米・大豆賣買仕候に付而、往來之者致二迷惑一之由により、就レ夫道筋御藏之處に而は、米・大豆相二渡之一爲レ賣、其鐚錢を御藏へ納め申候間、各々も時々之相庭を以て爲レ賣候而、鐚錢を自分藏へ可レ被二納置一候、高札之按文別紙に遣候、領內堅く申付可レ被二相定一候、委細者高室金兵衛・藤川庄次郎可二演說一候、恐々謹言

元和二年五月十一日

本多上野介　酒井備後守
安藤對馬守　松原右衛門大夫
板倉內膳正　秋元但馬守
伊丹喜之助

定

一　大カケ錢　一　ワレ錢
一　形ナシ錢　一　コロ錢
一　新惡ゼニ　一　ナマリ錢

右六錢の外は御藏へも納候間、不レ可レ撰の金一分に錢一貫文の賣買たるべし、若彼六錢の外撰候者、幷をさへて遣ふもの有レ之者、糺明の上其面に火印を押べきもの也、仍所レ定如レ件

元和二年五月十一日　奉行

按ルニ、此新惡錢トアルハ、天正・文祿・慶長ノ錢ナルベシ、然レドモ右天正・文祿・慶長等ノ錢鑄ラレシ年月等、舊書ニ見アタラズ、新惡錢トコヽニ出シツレバ、新錢トアルハ、右ノ三錢ノコトナルベシ、大和通寶ト云モ、其出所御觸書等ヲ見ズ

右連書ニテ大小名ヘ仰達セラレシトゾ、尤往來ノ者迷惑致スノ由有レ之、路次筋商人ドモ迷惑トアラバ

キコユレドモ、夫ニテモ解セズ、按ニ、路次ノ商人ドモハ諸色惡錢ニテ賣買スレドモ、往來ノ旅人ヘハ精錢ニテ賣ル故、自ラ往來ノモノ、難儀トナル故カ、依レ之公儀ノ米・大豆ヲ御拂ナサレ、其鐚錢ヲ所所ノ藏ヘ納メ置レ、世上ノ惡錢ヲ御引上ニ相ナレバ、自カラ世上惡錢滅スベキトノ事ナルベシ、元和二年後ハ、都テ精鐚ノ分チナク、皆鐚錢（但シ京錢）ヲ以テ諸物交易ニ相成、精錢ノ威光モ衰ヘ、元和二年ニ制令有シ六錢ノ外ハ、撰ミナク精鐚一列ニ取扱シト見エタリ、然レドモ間々市民制令ヲ用ヒザルニヤ、又元和八年以後、追々嚴敷其趣ヲ相觸ラル

定

一 大かけ錢　一 われ錢　一 かたなし錢

一 ころ錢　一 新惡錢　一 なまり錢

右六錢之外えらぶべからず、若えらぶものおしてつかふもの有レ之ば、其町過料として、年より五貫文、其外家一軒より百文づゝ可レ出レ之、然れども金子一兩四〆文之賣買たるべし、自然御定の旨を背き候高下之賣買仕もの有レ之ば、其賣買錢金、双方より可レ出レ之、其上過料右同斷たるべき事

元和八年戌二月

寛永二巳年八月廿七日ニモ、前文ノ撰錢ノ制法仰出サル、文前ニ同ジ、依テコヽニ略ス、此頃錢ノ賣買私ニ高下コレアルニヨリ、又制令ヲ出サル

定

一　錢之賣買金子壹兩四貫文之御定、共上者勿論、一步ニ壹〆文たるべき事

此旨相背き高下之賣買仕に於而は、御定之通違背之方より共賣買錢金一倍可レ出事

寛永二年丑八月廿七日

右ノ通仰出サル、然レドモ世上錢拂底ニテ賣買高下コレアリ、民間不便利ニテ難澁ニ付、今通用ノ寛永錢ヲ鑄ラル、右東都日錄ニ見エタリ

三貨圖彙 卷之四 錢之部

草間直方輯錄

百十代明正帝ノ御宇、古錢モ次第ニ滅ジ、國用乏シキ趣ヲ以テ、寛永十三丙子年五月ニ、錢ヲ鑄サセラル、所謂寛永通寶是ナリ、古錢ト相交エ通用ス、於江戸ニ始テ錢座被仰付、淺草橋場ニテ鑄之、又芝新錢座ニテ鑄之、又近江坂本ニテモ鑄ラル

毘陽漫錄ニ云、續日本紀曰、「和同元年正月、武藏國秩父郡獻和銅、七月令近江國鑄銅錢」ト、按、國家寛永中、令近江國鑄寛永通寶錢、古ヘ銅錢ヲ鑄タル國故ニヤ、云々

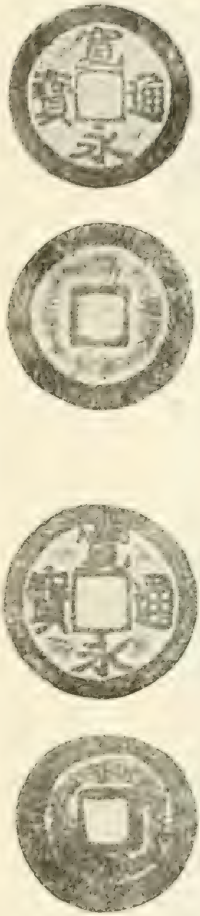




右ハ錢座免許ノ時、初メテ是ヲ鑄トイヘリ、其初ヲ祝スルノ義ナラン、故ニ擬物ノ和同錢多ク、又繪錢等アリテ、二十餘品ニ及ベリ、古代ノ錢ハ世ニ稀也、能々鑑定スベシ

寛永錢ノ文手替リ、百品モ有レ之由、筆者ハ加茂ノ藤木甲斐守、又木下長嘯子・佐々木志津磨・東叡山天海僧正等ニテ數品アリト云ヘリ、是弄錢家ノ說ニシテ不レ詳、又別種寛永通寶錢アリ、筆者佐々木萬治郎也

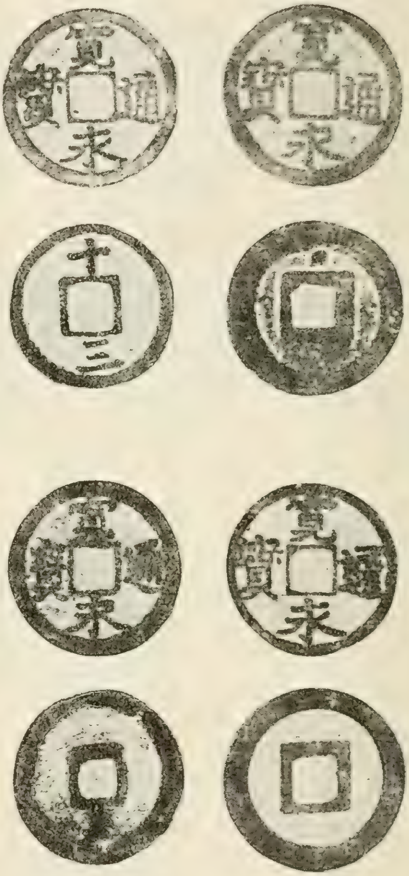
寛永通寶



右ハ芝ニテ鑄シ圖、掛リ請負人同所都司兵右衛門・麩屋又右衛門



右ハ淺草ニテ鑄シ圖、掛リ請負人同所秋田屋小左衛門・末吉與左衛門・丸太屋文右衛門



コレヲ二水寛永ト云、錢座免許前ニ鑄トカヤ、其委シキ事ハ不レ知、裏ノ番數一ヨリ十六迄有ト云ヘリ、奉使小錄云、寛永中信州松本ニテモ、錢ヲ鑄シト見エタリ、其文左ノ如シ、是ハ人ノ知ザル事ナリ

定

於二信州松本新錢座望申一付而、從二其方一書付乞取申付候、無二相違一急度用意候而、可レ被二鑄立一候、此上者餘人望申共、一口之外申付間敷候、兵粮之儀者相場次第、以二相對一可二申付一候、炭薪未進有レ之候ハヾ催促人共へかし可レ申候、以上

寛永拾三丙子極月二十七日

梅半右衛門
香西茂左衛門
乙部九郎兵衛
已下四人略レ之

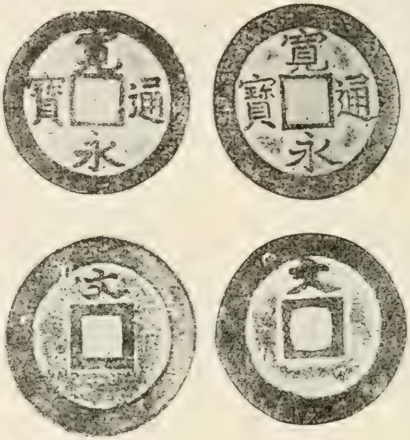
今井勘左衛門殿

按ニ、右連判ノ七人ハ皆雲州侯ノ家老ナリ、元祖直政君ハ、中納言秀康卿ノ四男ニシテ、寛永十五年、今ノ所ヘ遷ラル、其已前ハ信州松本城主也、其砌願ハレ領國ニテ新錢ヲ鑄ラレシヤ、又公儀ヨリ被レ仰付ニシニヤ不レ詳

寛永鑄錢ノ後、寛文八戊申年、將軍家綱公御治世、武州川越ノ城主松平伊豆守信綱殿、老中職ノ時、工夫ヲ以テ京都大佛ヲ毀チ錢ヲ鑄ル、是又寛永通寶ヲ用ユ、裏ニ文ノ字アリ（錢文佐々木志津磨書、背ノ文ノ字ハ辻春達也）俗ニ文錢ト云、異國ニテハ南史南平王偉傳曰、「武帝軍東下、用度不レ足、偉取ニ襄陽寺銅佛一、毀以爲レ錢、」コレ銅佛ヲ毀チテ錢トスルノ始、又五代史ニ、「周紀論曰、世宗即位時、明年廢ニ天下佛寺三千三百三十六一、是時國中乏レ錢、乃詔、毀ニ天下銅佛一、以鑄レ錢、」ト云、此時民間佛像ヲ壞ヲ恐ル、「世宗云、佛以ニ善道一化レ人、苟志ニ於善一、斯奉レ佛矣、彼銅像、豈所謂佛耶、且吾聞、佛志在レ利レ人、雖ニ頭目一猶捨以布施、若朕身可ニ以濟レ民、亦非レ所レ惜也、云々」、是ハトモアレ豆州侯ナドハ、誠ニ吾

邦ノ英雄ト云ベシ

文錢舊記云、寛文二寅年三月、大佛普請銅佛毀初、同月十六日、伊豆守殿卒去、同月中旬ヨリ下旬ニ至リ・日出・日入赤キコト如レ丹、愚民大佛ヲ毀ノ祟ト云一笑スベシ、其後追々錢ニ鑄ル





御觸

一 寛永之新錢金子一兩に四貫文、勿論壹分に者壹貫文之商賣たるべし、若違背いたし高下之賣買仕においては、双方より其賣買之一倍過料として出レ之、幷に其町之年寄、過錢二百疋、其外一軒より十疋宛可レ出レ之事

一 大かけわれ錢・かたなし・なまり錢・新悪錢此外撰べからず、若えらぶもの、右五錢を推てつかふ

もの有レ之ば、或は其所に三日さらし或十日籠舍たるべし。其町之過料、先條之通たるべき事

一　新錢之儀何れの所にても御免なくしして、一圓不レ可レ鑄ニ出之一、違背之輩有レ之ば可レ爲ニ曲事一、新錢被ニ仰付一之上は、或は禮錢・散錢等にも、古錢一切取あつかふべからざる事

一　御領・私領共、年貢收納等にも御定之通、不レ可ニ違背一事

一　にせ金銀賣買一切停止たるべし、自然持來においては兩替屋に而打つぶし、其主に可レ返レ之、並にはつしの金銀は金座銀座へ遣し相對すべし、兩替屋之外は賣買すべからざる事

右之條々可ニ相守一、此旨若違背之輩於レ有レ之者、速可レ被レ處ニ嚴科一者也、依而下知如レ件

寛文十二年九月十二日

右寛文八年より天和三年迄、江戸龜井戸村にて鑄と云

後藤縫之助　茶屋四郎次郎　龜屋源太郎

三島吉之進　上柳平左衞門　茶屋長晉

右御服所、加役掛

近代閑田耕筆ト云モノヽ中ニ、瀧本樣ノ書ヲ能スル人、江戸ニテ鈍書トイヘルハ、大佛錢ト云モノヲ撰ンデ、大佛殿燒亡ノ年ニ寄附スルコト壹貫文ナリ、大カタノ人銅色ノヨキモノトノミ然リト思フハ非ナリ、鑒定ノ傳アリトテ、其書ノ門人長阪長泰ヘ云コシケルハ

寛 此點下へ引通サズ



永 此所ハネタリ

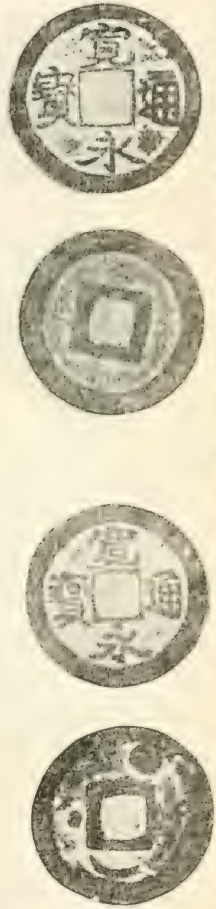
此外ニモ、ハネタル錢アレドモ、銅質異ナリ、長泰ハ我ニ從ヒテモノ學ブ人ナレバ、彼自筆ノ儘ヲ得テ寫セリト云、然レドモ予ハ詳ナラズト思フ、尙後ノ考ヲマツ、又或説ニ此錢鑄終ルノ時、背ノ穿ノ左右ニ【圖缺ク】如レ斯取濟ト云、極印ヲ鑄形ニ加ヘタルト云、然ドモ其眞僞ヲバ知ズ、錢面ハ佐々木志津麿（但シ加茂藤木甲斐守弟子也）背ノ文ノ字、筆者、正五位左衞門大尉辻高庸（狛姓也）尤面文ニ參樣アリ、内ニ一品濶縁白銅少シト云、又跂寛永トテ、永ノ字跂タル有、是坂本贋トテ、寛文ノ頃私鑄ノヨシ、本人被レ行ニ刑罰ニ、其子孫追福ノ爲ニ右跂永ノ錢ヲ悉ク買集メ、佛像ヲ鑄テ、寺院ニ納ムト云

其後追々錢ヲ鑄サセラル、依レ之古錢モ（永樂開元洪武ノ類）價安ク相成リ、寛永ノ錢ト相並ブ、其後追々所レ鑄錢



元祿京錢大形銅質宜シ、面文通字如レ此

元祿四辛未年ヨリ同六年迄、京都七條村ニテ鑄レ之



江戸錢

同十丁丑年ヨリ寶永元甲申年迄、江戸龜井戸村ニテ鑄レ之、加役丁子屋味休・神田屋孫八

荻原錢



同十三庚辰年三月六日ヨリ、京都七條川原ニテ鑄レ之



右七條錢ヲ荻原錢ト稱ス、御勘定奉行荻原近江守重秀差圖ニテコレヲ鑄、錢文筆者長崎屋不舊ト云、京

都奉行ヨリ検使御出改コレアリ、同七日ヨリ通用銭鋳出ス、銭頭長兵衛・半七郎ナリ、古老ノ説ニ、此銭後ニハ段々少ク成リ、甚評判悪ク、此銭ヲ鋳終リテ、直チニ大銭ヲ鋳候由、大銭停止ノ後、此座潰レ候トゾ

丸屋座銭大形銅質文銭ノ如



島屋銭大形銅質好シ、面文文銭ニ似テ、通字如レ此爪出タリ、文銭ニハ通字如レ此コ爪不レ出



文銭ニ爪出テタルモノアリ、島屋文銭歟

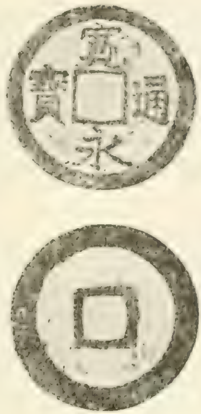
寛永五戊子年ヨリ正徳二年迄、江戸龜井戸村ニテ鋳レ之、加役山本三郎兵衛・樋口吉兵衛



此二銭ハ京都順正寺ノ説ニハ正徳ノ初、京都島屋何某鋳ル所トイヘリ、藤蒙齋ノ説ニハ、文銭ノ初、文ノ

字ナシニ、コレヲ鑄、偶文ノ字アルモコレアリ、至テ希也ト、兩說不分明、雖レ然文ノ字アル錢於レ有レ之ハ、藤氏ノ說可ナランカ、唯年曆ノ違ノミ

江戶大形錢



正德四甲午年被ニ仰付ー、同年九月迄、江戶龜井戶村ニテ鑄レ之、加役同所中島喜左衛門・吉次吉兵衛

妹尾・鹽川兩士ノ說ニ、享保初年、江戶ニテ大形錢ヲ鑄ルト有レ之、疑ラクハ此錢歟

佐字錢



正德四年甲午年仰付ラレ、佐渡國相川又淡川ニテコレヲ鑄、明年十一月止ム、請負人江戶糸屋八左衛門

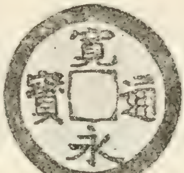
耳白錢潤澤制質至テヨシ

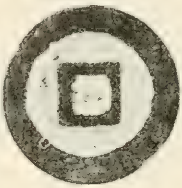
正徳四甲午年ヨリ享保三戊戌年マデ、江戸龜井戸村ニテ是ヲ鑄掛リ後藤縫之助・茶屋四郎次郎・龜屋源太郎・三島吉之進・上柳平左衛門・茶屋長曾也、正徳四年九月廿二日、於二殿中一老中衆列座ニテ、呉服所ノモノヘ仰渡サル

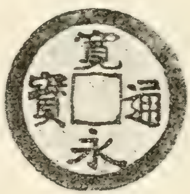
一　今度寛永之錢之法を以、新錢鑄立候樣被二仰出一候ニ付、寛文之例ニ任せられ、六人之呉服師共へ被二仰付一候間、右御用掛リ之面々ヘ被レ仰二渡之一、差圖を請相勤可レ申者也

午九月廿一日

六人之者へ





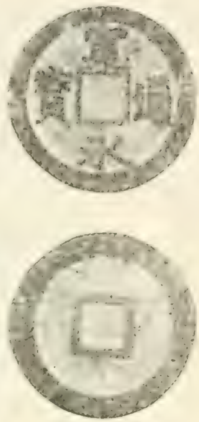




右新錢ノ儀、新古ノ撰ビナク、高下通用スベキトノ事ニテ、一ヶ月ニ四度ヅヽ賣出シ有レ之、十六日廿六日ハ武家方、十七日廿七日ハ町方ノ定メ、張紙出ル、極月二十二日ヨリ錢賣出ス、町方兩替ノ相場ヨリハ一二百文ヅヽ下直ノ由、金一兩ニ付テノ相場也、錢引替ニ參リ候モノ甚多ク、錢吹出シ方大ニ澁滯ス、藤氏ノ說ニ、文錢潤緣ノ物ヲ種ニシテ鑄ルト云ヘリ、按ニ、耳白ト稱スルハ文錢ノ稱也、耳白ノ稱不審、此錢文筆者ヲ狛高庸ト云世說有レ之、高庸ハ文錢背文字ノ筆者ナリ、其種ヲ以

鑄ニ付、高庸ノ筆ト傳ヘ誤ル也

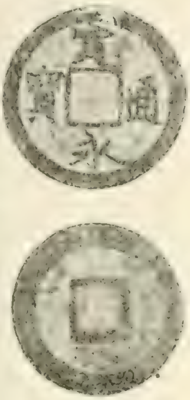
大錢停止後ノ錢



此錢モ、文ノ背文ヲ削リ、種ニシテ鑄ノ由也、藤氏ノ説ニ、大形ナレドモ銅質宜シカラズトゾ

一説ニ吳服所請負ト有レ之、按ニ吳服所請負ハ、右龜井戸村ニテ所レ鑄ノ耳白錢也、疑ラクハ同種歟、雖レ然此錢銅質耳白トハ大ニ劣リテ、一種トハ不レ見、藤氏ノ説、所以ナキニ非ズ、後ノ考ヲ俟ツモノ也、寛永七庚寅年、鑄所不レ詳、京都七條ナラン歟

京都七條ニテ鑄錢



妹尾・鷲川兩氏ノ説ニ七條河原ニテ鑄ラル、筆者長崎屋不舊（始名忠七）也、此錢銅質文字トモ全ク大錢ニ同ジ、藤氏ノ説ニモ、京都七條ニテ鑄錢、年月シカト知レズ、深川錢ニ似タリト、アルハ此錢ナリ、此錢通字通如レ此

江戸深川ニテ鑄錢（兩文二樣、長崎屋不舊筆摸範）



大阪難波村ニテ鑄銭



金地銭大形徑九分半



享保十一丙午年ヨリ同十七壬子年マデ、江戸深川十萬坪ニテコレヲ鑄ル、請負人橋本平七郎・吉野十五郎・野田三郎兵衞・大河原喜平治・中西五郎七

享保十三戊申年ヨリ同十五庚戌年迄、大阪道頓堀裏難波村ニテコレヲ鑄ル、錢座中村忠兵衞・丁字屋喜兵衞・島屋嘉兵衞

德廟日光御社參ノ時、此座ヘ仰付ラレ所レ鑄ノ御用錢ナリ、今希ニ有レ之

同銅錢

同鉛錢〔前後共半貟程ノ余白アリ、原本ハ圖形剝取タル跡アリ〕

仙字錢背文仙、仙ニ樣有レ之、面文通字如レ此



元文元年江戸深川ニテ鑄錢



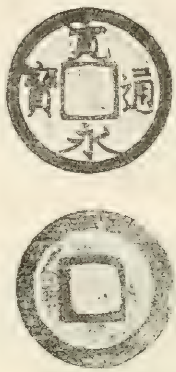
享保十三戊申年ヨリ同十七壬子年迄奥州仙臺石ノ卷ニテ鑄レ之、錢座瀬川八十次・田中總七・家城太郎兵衛ナリ、通用錢ハ背ニ仙字ナク百文繋ギノ時兩端ヲ仙字錢ニテ之ヲ挾ム、又面文字永如レ此二水ヲ含者

元文元丙辰年五月十五日仰付ラル、江戸深川十萬坪ニテ鑄レ之、錢質前ニ劣レリ、藤蒙齋ノ説ニ、背穿ノ上十ノ字アルモノハ種錢ナリトイヘリ、掛リ橋本平七郎・中西五郎兵衛・千田庄兵衛

元文元年淀領ニテ鑄錢



同所ニテ鑄鐵錢



小字錢 背文小字、三樣有レ之、銅錢・鐵錢、二品有レ之



元文元丙辰年ヨリ同四己未年迄、淀領下鳥羽横大路村ニテ鑄レ之、面文長崎屋不舊筆、願人有來（ウライ氏今ウラヱト稱）新兵衛・大坂屋三右衛門

藤氏ノ說、右同所ニテ鑄レ之、種錢ハ銅錢ニテ銅質至テ好シ、掛リ清水清右衛門、近江屋小四郎

元文元丙辰年十月廿日被ニ仰付一、江戸小梅村ニテ鑄レ之、掛リ野島新左衛門・瀨川八十次

猿江錢



同錢



紀州和歌山ニテ鑄錢



元文元丙辰年、下總猿江ニテ鑄レ之、妹尾氏ノ說ニ、大形銅質宜シ

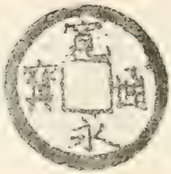
面文右ノ錢トハ大ニ異ナリ、鳥羽清水錢ニ類ス、藤氏ノ說ニ、小形銅質好シ、兩氏ノ說不分明、後ノ考ヲ竢ツ、藤氏ハ妹尾氏ノ所謂猿江錢ハ、仙臺後鑄ナリト云

元文元丙辰年、紀州和歌山ニテ鑄レ之、掛リ土屋市太夫・松葉屋伊兵衛・熊野屋平兵衛・願人永井市兵衛

同所新銭 銅鐵二品有レ之



伏見濶縁銭 銅鐵二品有レ之





佐字銭 背文正徳年中所レ鋳ハ、佐字佐也、此銭ハ佐也





右同年、宇津・中ノ島二ヶ所ニ銭座コレアリ

右同年、城州伏見ニテコレヲ鋳ル、銭文長崎屋不舊筆、摸範、願人江戸近江屋市兵衛ナリ、種銭ハ濶縁少シ簿シ

元文年中、佐渡ニテコレヲ鋳ル、面文文字耳白銭ニ同ジ

同鐵錢 小形此錢ニモ銅錢コレアリ

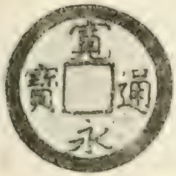


右ノ銅錢トハ面文大ニ異ナリ、永字二水ヲ含ムハ背文二樣有レ之、銅錢二品トモ背文ナキ錢モ有レ之

元文二年江戸龜井戸村ニテ鑄錢



日光寂光寺ニテ鑄錢 小形面文永字二水ナフクム



元文二丁巳年、江戸龜井戸村ニテコレヲ鑄ル、掛リ三木彦右衞門・井筒屋五郎右衞門

同年下野國日光寂光寺ニテコレヲ鑄ル、願人相馬德之丞・大和屋平八・若松屋利右衞門・大田卯兵衞

秋田ニテ鑄錢 面文二様、永字跡ヲハネタリ

同年、羽州秋田ニテコレヲ鑄ル、願人同所岩井新五郎・同新助・中村三右衛門



仙字錢 背文

同年奥州仙臺石ノ巻ニテコレヲ鑄ル、願人大阪屋吉郎右衛門ナリ、享保年中所レ鑄トハ、面文背ノ仙字共ニ異也、仙字山コノトコロハネタリ



藤澤ニテ鑄錢 面文長崎屋不舊筆、摸範

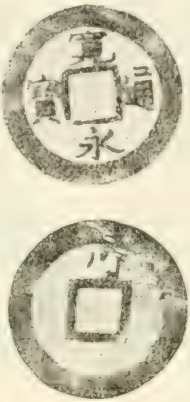
同年相州藤澤ニテ鑄レ之



面文長崎屋不舊筆、摸範ノ者六品アリ、初ノ七條錢ハ不舊ノ直書ニテ、銅色大錢ノ如ク白色ヲ含ム、外輪中潤也、江戸深川錢ハ、最潤緣ナリ、下鳥羽ニテ有來氏鑄ル所ハ、至テ薄ク小ナリ、此藤澤錢ハ、銅色黒色ヲフクミ、七條錢ヨリ潤緣ナリ、伏見錢ハ背潤緣ニテ格別ナリ、加島錢ハ、銑錢ニテ又格別ナリ（銑錢背文無之）

川字錢（背文銅質最ヨロシ）

同年江戸深川小名木川（今ウナギ川ト唱フ）ニテ鑄、種錢也、至テ希也、願人釜屋太田六次郎



攝州加島銅錢

元文三戊午年仰付ラレ、攝州西成郡上中ノ島加島村ニテコレヲ鑄ル、初ハ銅錢ヲ鑄ル、今世ニ希ナリ、面文長崎屋不舊筆、摸範、願人江戸萬屋卯兵衛・具足屋六之丞・大阪備前屋喜右衛門



同銑錢面文前ニ同ジ



元文四年ノ末ヨリ、銑錢ヲ鑄、同五年正月廿日ヨリ賣出ス、寛保元酉年停止、時ノ相場ヨリ金一兩ニ八十文下直ナリ、銑錢ナリトイヘドモ、此後段々出ル處ノ銑錢トハ質佳ナリ、尤モ奥ニ記ス如ク此頃錢至テ高直也、依レ之古錢ノ質ニ不レ拘、銑錢ヲ鑄ラル、大阪ニテ錢兩替致ス者召出サレ、右ノ新錢下直ニ御賣出被レ成候ニ付、時ノ相場ヨリモ下直ニ買請可レ申、尤錢少々ナリトモ下直ニ相成候ヤウトノ御趣意心得違無レ之樣、隨分相場引下ゲ賣買可レ致旨被ニ仰渡一、之ニ依テ右ノ銑錢ハ別段ニ直段ヲ立、賣買致候樣ニ相ナリ、又市中騷動ス、乍レ併又々御教諭モ有レ之、別段ニ不ニ相成一、其頃少々錢下直ニ相ナル、然レドモ元文四年己未年正月壹貫文ニ付二十一匁七分位

江戸白目錢

元文四己未年二月二十二日仰付ラレ、江戸深川平野新田ニテコレヲ鑄ル、請負人山田忠右衛門・中

島兵左衛門・上田七郎兵衛



江戸鐵錢

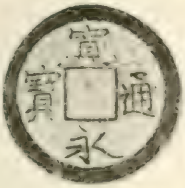
同年六月ヨリ江戸本所押上村ニテコレヲ鑄ル、願人佐藤源兵衛・水瀬權右衛門・池田茂兵衛



白目錢金一兩ニ付四貫文
鐵錢金一兩ニ付四貫二百文

一字錢（背文小形）

元文・寛保ノ間ニ鑄ル、場所未レ考

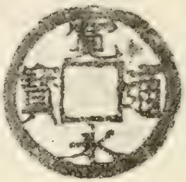




銅錢二品有レ之、
面文細書

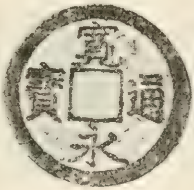
同錢大形

右ノ錢ヨリハ面文大書ニテヒラタク、大ニ異ナリ、筆者江戸アタゴ下青松寺前、奥御祐筆蜷川八右衛門ナリ



大形錢

元文・寛保ノ間ニコレヲ鑄ル、場所未レ考、銅色青シ、錢質宜シカラズ



元字錢背文面文三樣、大中小三形有レ之

元文五庚申年仰付ラレ、寛保元辛酉年ヨリコレヲ鑄ル、大阪高津新地別段御用座仰付ラレ、銀座ヨ

リ加役德倉長右衛門・平野六郎兵衛





同鑛鑄錢

【圖缺ク】

右一錢三文通用ノ願叶ハズ、鑄ル處ノ錢今世コレアリ

足字錢背足

寛保二壬戌年、下野國簗田郡足尾村ニテコシヲ鑄ル、請負人橋本平七郎・中西五郎兵衛・千田庄兵衛也

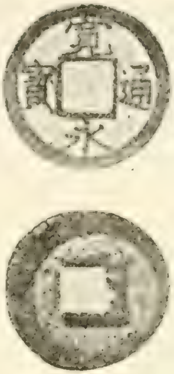

寛永通寶

三貨圖彙卷之五 錢之部

草間直方輯錄

江戸鐵錢 大小二品有レ之

明和二乙酉年、龜井戸村ニテコレヲ鑄ル



筆者アタゴ下青松寺前、奥御祐筆蜷川八右衛門トイヘリ

按ニ蜷川氏ハ是ヨリ前ニ沒收也、一字錢ノ大ノ方、是ト同筆ト見ユ、然レバ其種ヲ以テ、此錢ヲ鑄タル歟、錢質初メテ是迄ノ鐵泉トハ劣レリ

伏見錢

城州伏見西濱ニテコレヲ鑄ル



明和四年丁亥九月四日初テ賣出ス、金一兩ニ四貫三百五十文也、面文蜷川氏筆、摸範、コレヨリ後出ル所ノ鐵錢皆其質惡シ、茶碗ノ缺ヲ入ルコトハ、寶永ノ大錢ヨリ初マリ、土ヲ入ル事ハ此錢ヨリ初ルトイヘリ、此後長崎ノ長字錢、水戸ノ久字錢・千字錢、何レモコレニナラヒ、土ヲ交テ鑄ルトゾ、故ニカネノ音ハナシ、加島銑錢マデハ銑ナガラモカネノ音アリ

江戸銅錢小形

明和五年コレヲ鑄ル



明和二年龜井戸ニテ鑄ル所ノ鐵錢、關東ニテ不通用ニ付、改テ銅錢ヲ鑄サセラル、面文鐵錢トハ大

ニ異也、錢形小シ

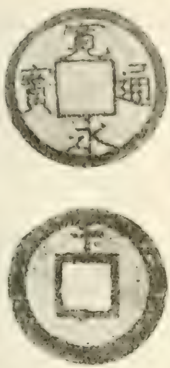
長字錢 背文

明和五戊子年八月、長崎ニテコレヲ鑄ル、奉行石谷備後守、筆者唐通辭高斤嘉左衛門、掛リ後藤總左衛門・福田十郎左衛門



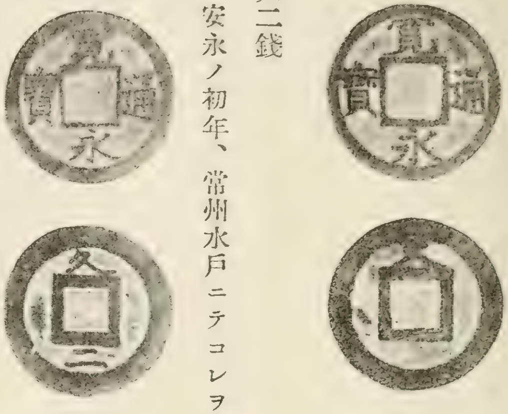
千字錢 背文千字 三様有レ之

明和ノ初コレヲ鑄ル、鑄所未レ考、錢質伏見ニテ鑄ル久字錢ヨリハヨロシ



久字錢 背文面文 三様有レ之

明和ノ初メ常州水戸ニテコレヲ鑄ル、鐵錢土交リナリ



久二錢

安永ノ初年、常州水戸ニテコレヲ鑄ル

委シク中山信名ガ、常陸誌料ニ見エタリ、其ノ略云、本國ノ父老相傳フ、慶長年中、武田信吉君、水戸ニ封ゼラレシ時、多ク銅錢ヲ鑄ル、皆宋朝ノ錢文ニ從フト云、蓋弄錢家ノ所謂水戸手ト云フモノ是也、一說ニ蒲生氏郷、水戸ヲ領セシ時、コレヲ鑄ルト云ハ誤也 元和年中、水戸大町ノ町人佐藤新助ト云者アリ、舊族ニシテ、且富有ノ者也、寛永二年、水戸威公、城東ノ水田ヲ築キテ、田町ト稱シ、今ノ下町ナリ 町人ヲ移シテ、コヽニ居ラシムルニ及デ、新助モ亦移サレテ、田町ノ三町目ニ住ス、是ヨリ先新助鑄錢ノ願アルヲ以テ、

是年國老中山備前守信吉、及其餘ノ老臣ニ訴ヘ、寛永新錢ヲ鑄テ、世用ニ充テタキ由内許ヲ蒙リ、江戸ニ上テ、酒井雅樂頭已下執政ノ第宅ニ走リ、又町奉行ノ廳ニ詣シテ、志願ノ趣ヲ達ス、允許アルニ依テ、水戸ニ下リ、始メテ寛永通寶ノ銅錢ヲ鑄ル、凡諸國ニ於テ今ノ新錢ヲ鑄ルモノ、コレヨリ先ナルハナシ、コノユヘニ當時ノ諸國名物記ニモ、寛永新錢水戸ニ於テコレヲ鑄ルト註セリ、新助錢座ヲ創メテ後、追々鑄立ケルガ、程ナク死去シテ、其子清兵衛（後庄兵衛ト云）ト云者、未幼少ナルニ依テ、鑄錢ノ事ヲ廢ス、清兵衛成人ノノチ、同十二年、父新助ノ例ニ准ジ、國老ニネガヒ内許ヲ得テ江戸ニノボル、其比江戸ノ町人三久保三右衛門ト云フ者、兼テ鑄錢ノ志願アルニヨリ、清兵衛ト同意シ、執政諸家及ビ町奉行ノ廳ニ訴ヘケルニ、新助ノ先例ニ因テ其事ヲ聽サレ、兩人ニテ寛永錢ヲ鑄ルベキ旨命ヲ蒙リ、早速水戸ニカヘレリ、下町ノ煙草町ニ錢座ヲ再興シ、兩人錢座頭トシテ新錢ヲ鑄出ダス、同十三年五月、幕府ノ命アリテ、江戸ニ於イテ更ニ寛永錢ヲ鑄ル、コレ全ク公儀ニテ鑄サセラレシ始メ也、其比ハ水戸ノ外ニモ、仙臺。吉田。松本。高田。長門。備前。豐後及中川内膳領分ニモ錢座御免アリテ鑄出シケレドモ、數スクナクテ弘マリ難カリケレバ、同十四年閏八月、件ノ所所ニ形錢ヲ下サレテ、不同大小ナク、數多鑄出スベキ由ヲ命ゼラル、水戸ニハ下町ノ錢座ノ外ニ、上町ニテモ錢座ヲタテラレ、荻庭市左衛門。和田與兵衛（共ニ上金町ノ町人ナリ）ト云フ者ナド頭ニテ、同町ノ町人五人、各ノ居宅ニテ鑄サセラルル、然レドモ自然ニ不同アルヲ以テ、向井町。片町ト云所ヘ、錢座ヲ

定メテ一同ニ鑄サシム、コレヨリ上町・下町兩座ニテ盛ニ鑄立ケルニ、諸國ニテ似セ錢ヲ鑄出スモノ多ク、又輕薄ノ品スクナカラザルニ依テ、同十七年八月、江戸・水戸其外七ヶ國ノ錢座悉ク停止セラル、但水戸ニテ鑄立置タル分ノ錢ハ、田中三右衞門・佐藤清兵衞兩人シテ諸方ヘ弘メシム、其後モ私ニ鑄立ルモノアルニヨリテ、同二十年二月、堅ク禁ゼラレケレバ、以後タエテ私ニ鑄ルモノナシ、明和四年ニ至テ、水戸ノ領内、久慈郡太田村ノ百姓、小澤九郎兵衞（後水戸侯ノ家臣ト成テ、多仲ニ更タム）ト云フ者願ニヨリテ太田ニ錢座ヲ立テ、寛永ノ鐵錢ヲ鑄サシム、（佐藤新助ノ側ニヨリテ許サル、ト云）背文ニ久ノ字アリ、コレハ久慈郡ノ久ノ字也、筆者ハ東江源鱗ナリト云、九郎兵衞ハ源鱗ノ門人ナルニヨリ、彼人ニ書シメシト也、同八年異變ノ事アリテ、暫フクコレヲ停メラレケルガ、安永ノ初年、九郎兵衞錢座ヲ再興シ、又鐵錢ヲ鑄ル、今度ハ背文ニ、久二ノ二字アリ、久慈郡第二度ノ意ナリ、筆者ハ彰考館ノ惣裁野口多新次祐ナリ、兩度ノ鐵錢、多ク世間ニ流布シケレバ、更ニ鑄錢ノ事ヲ止メラル、今偶銅錢ニテ久字錢・久二錢ノ交リ出ル事アルハ、其時ノ種錢ト云シモノニテ、黄金ヲマジヘ鑄タルナリ、サレバ他ノ銅錢ヨリハ、光澤多シト云

貞享通寶

綱吉公御治世、貞享通寶ヲ鑄サセラル、尤銀銅ノ二品有テ、背ニ甲子ノ字アリ、貞享元甲子年鑄ルナルベシ、イカナル故ト云事ヲシラズ、御觸等モナシ、尚可レ尋





此外元祿德寳・享保通寳、或ハ慶安通寳等皆玩錢家ノナグサミモノニシテ、其實ハシラズ、近年古錢ヲ愛スルモノ多シ、依テ錢座願ノ節ノ手本錢、又ハ座錢ナド唱ヘ、僞錢ヲ鑄テ人ヲ欺ク、惑フベカラズ、又水戸手・永利手ナド云テ、替リ錢コレアリ、數奇者ノ翫ブ所ナリ、凡水戸手ト云ハ、漢土ノ文ヲ鑄シ錢也、天聖・嘉祐・凞寧・祥符・元豐等、常州水戸ニテコレヲ鑄ル、或說ニ、蒲生氏鄕領國ノ時コレヲ鑄ルト云、按ニ、蒲生氏ハ奥州會津ノ領主ニテ、氏鄕、天正十八年、初テコレヲ領ス、秀行ノ時、野州宇都宮ヘ所替ナリ、蒲生氏、水戸ヲ領セシ事アル事ナシ、元來常州水戸ハ、賴朝公時代ヨリ佐竹氏ノ領國ナリ、義宣ヨリ出羽ノ秋田ヘ國替、慶長五年已後、今ノ水戸公領レ之 永利手ト云モ、皆漢土ノ文也、永利・永昌・天啓・泰昌・宣德・永樂・康熙・隆慶等、又寛永モアリ、天正年ヨリ寛永年迄ノ内ニ鑄ル、長崎ニテ鑄ト云說モアリ、又天正年中、隅州加治木ニテ、洪武・大中・元祐・元符・治平・元通・宣和・祥符・景祐・元豐・永樂等ヲ鑄ル、尤亂世故ニ、鑄錢ノ沙汰ナク、皆私ニコレヲ鑄ル歟、猶尋ヌベシ、此外ニモ有ベキカ、委シクハシラズ、錢ノ大小幷厚薄、銅ノ美惡、錢文替リシトテ、漢土ノ錢ト一槩ニハ決シ難シ

本邦鐵錢ヲ鑄ル始ハ、元文元丙辰年、城州淀領下鳥羽横大路村ニテコレヲ鑄ル、其後攝州加島村・武

州押上村、近クハ明和年、城州伏見ニテ追々コンヲ鑄ル

但シ異朝ニテモ銑錢ヲ用シ事アリ

事物紀原ニ通典ヲ引テ云、王莽改ニ革漢錢一、百姓不レ便レ之、公孫述廢ニ銅錢一、置ニ鐵官一、鑄ニ鐵錢一、則以レ鐵爲レ錢、始ニ於公孫述一之據

梁書、武帝紀ニモ、「普通四年冬十二月戊午、始鑄ニ鐵錢一」トアリ、然レドモ此ノ加島村・押上村・伏見ナドニテ鑄ル錢ハ、此鐵錢ノ論ニアラズ、俗ニ鐵錢ト云ヘリ

〔此處原本ニナク六行程ノ餘白アリ〕

本邦眞鍮錢ヲ鑄ル事ハ、明和五戊子年四月、江戸龜井戸村ニテコレヲ鑄ル、同五月晦日、始テ御觸コレアリ、錢ノ裏ニ浪ノ紋アリ、通用一文ヲ以テ四文ニ換フ、コレニ依テ世俗四文錢ト云

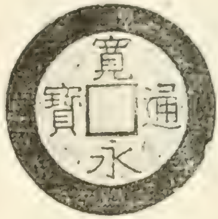
御觸

一世上通用のため、於ニ銀座一眞鍮錢吹方被ニ仰付一候に付、眞鍮錢一文にて並錢四文の代りに相用、國々に至る迄無ニ指支一樣、可レ令ニ通用一者也

明和五子年四月

右眞鍮錢年々一萬貫文ヅヽ吹方仰付ラレシ處、錢相庭段々下直ニ相成、世上難儀ニ付、天明八年四月ニ、吹方七分通減少仰出サレ、通用ハ永代タルベキ由、是レ亦仰付ラレ、則銀座ニテ座相勤メ、猶又

同年ノ冬、更ニ吹方指止ラル、是レハ錢賣買近年下直ニナリ、世上難儀ニ及ブ故、御仁惠ヲ以テ右ノ通仰出サル、ナリ、併シ諸國通用ハ、永々タルベキトノ事ナリ









眞鍮錢ヲ鑄ル事、異國ニテハ明ノ嘉靖通寳ヲ始トス、本邦ニテハ此四文錢始メナリ

按ニ、元文五年、大阪高津新地ニテ、一錢三文通用ノ眞鍮錢願ヒシカドモ免許ナキ由、今民間ニ間間其手本錢殘レリ、勿論免許ナケレバ論ズルニオヨバズ、一錢ヲ以テ四文ニ替ル事ハ、天文・元祿ノ頃永樂一錢ヲ以テ、鐚四文ニ通用セシ例アルカ

錢相庭ノ事其大概ヲ記ス、天正年ノ頃ハ、切遣銀ヲ以テ、錢一貫文ニ、凡銀八匁四五分ヨリ、拾六七匁ニ及ビ、時々其代銀、相對ヲ以テ賣買有シカバ、一概ニハ論ジ難シ、尤モ今ヲ以テ推ス時ハ、高直ニ當レリ、然ドモ其頃ハ鑄錢ノ沙汰ナク、拂底ニテ精錢ノ直段ナリ、又鐚一貫文ニハ、凡銀三匁六七分ヨリ五六匁位ナリ、鐚ハ惡錢ニテ市民撰リ嫌ヒシ故、直段下直也、慶長年ノ頃、慶長銀（第廿八卷、集ノ部ニ記ス）

ヲ以テ銭ヲ買ソニ精銭一貫文、代銀十三匁位、鐚一貫文代銀三匁七分位ナリ、（但シ精銭ノ事ハ前ニ記ス、猶物價ノ部並セ見ルベシ）文祿ノ初年、武藏小判ヲ吹カレ、慶長五六年ノコロ、慶長金ヲ吹カレ、此ノトキ金一兩ヲ以テ、永樂精銭一貫文ニ當テ交易ス、金一兩ハ大抵銀六十目ニアタル、（但シ御書秘鑑ニ、十二兩替ノ凡積トアリ）然カレバ銀十五匁ニ精銭二百五十文、其ノ後慶長十三年ノ頃ヨリ、追々精鐚兩銭ノ撰嫌ヲ停止セラレ、元和年ヨリ寛永二年ニ至リ、慶長金一兩ヲ以テ銭四貫文ニ定メラレ、金一歩ニ銭一貫文、則チ代銀十五匁ナリ、其後寛永十三年、今ノ寛永通寳ヲ鑄ラレ、惡銭取交遣フコトハ嚴敷停止セラレ、永樂ヲ始メ古精銭ハ搆ヒナク取リ交通用セラル、此ノ時モ舊例ノ如ク、金一兩ヲ以テ銭四貫文ニ當ラル、其後元祿八年、元祿金銀ヲ吹カル、此時モ金一兩ヲ代銀六十目ト立テラレ、ハ金一兩ニ銭四貫文ノ定メナリ、然レバ銭一貫文代銀十五匁ナリ、（但シ兩替屋共、利潤モコレアルニ付、金一兩ニ銭三貫九百文ヨリ高直ニ致ス間敷趣相觸ラル）然ルニ其ノ頃ヨリ世上金銀不融通ニ相ナリ、（第廿八巻ノ部ニ記ス、並セ見ルベシ）銭ニテノ交易多シ、依テ銭相庭次第ニ高直ニ相ナリ、元祿十二三年ノ頃ハ、金一兩代銀六十目前後（慶長・元祿ノ金ナリ）銭三貫五百文ヨリ二百文位ニテ、追々銭ノ位貴トク、上ミ方ハ一貫文ニ付キ十七匁餘、十八匁位ナリ、銀モ亦拂底ナリ、（但シ第二十巻金ノ部、廿八巻銀ノ部ニ記ス、並セ考フベシ）其後寛永三年ヨリ正徳元年マデ、四度増吹ノ銀出ヅルトイヘドモコト〳〵ク位劣レリ、市民銀ヲ土芥ノ如ク賤シミ、銭ヲ貴ミ銭ニテノ交易多シ、依テ寳永銀ニテハ銭一貫文、代二十四五匁ナリ、其後正徳四年、又新金銀ヲ吹カル、（今ノ古金銀ニテ慶長ニ同ジ）此金銀慶長ノ古製ニ復セラレ、良金銀ニテ市民歸服スレドモ、其頃吹方容易ニ出來難シ、依レ之古金銀（但シ五品

ノ銀割合違ヒノ事、第二十八匁銀ノ部ニ出セリ取交通用有リテ、金銀多品ニ付紛ハシ、世通用銀ト云ハ永中。三ッ寶。四ッ寶銀ナリ、之ヲ以テ諸品相庭ノ表トシテ交易ス、是等ノ事知ル者希ニシテ、大抵ハ今ニ引當テ高下ヲ考ル故、齟齬スル事多シ、正德二三年ノ頃ハ、錢壹貫文ニ付、右通用銀ニテ凡二十三四匁前後、同四年ニ至リ、益々高直ニ相ナル、コレニ依テ制令ヲ出サル

覺

一　此間江戸表者不レ及レ申、道中筋幷在々迄も、錢の相場日々に高直に成來り候事、今度金銀の御沙汰候に事起り候而、町人百姓に限らず、錢を買入候者共有レ之故に候由相聞候、初金銀之事御沙汰候に付、一身の利潤を謀り候爲めに、何事によらず、其通用相滯候事共仕出候においては、嚴科に行はるべき由、被二仰出一候處に、未だ新金銀世上通用も無レ之内に、如レ斯の事出來候者、其罪科輕からず候、奉行中、各其支配の所嚴密に穿鑿を遂げられ、錢の相場高く賣出し候ものはいふに不レ及、其故なくして過分之錢買求め候者於レ有レ之者、召捕候樣に仕らるべく候、武士方諸家中、幷其領所へも急度其沙汰有レ之候樣に、可レ被二申觸一候、以上

午七月

覺

一　此間追日錢之相場を高直に仕候由相聞候、先頃も申觸候ごとく、何事に限らず故なくして高直に

仕ふべからざる事に候處に、其故も無レ之、錢之相庭を押上候事不屆之至りに候、錢之相場、高直に仕らずして、不レ叶事に於而者、月番の番所へ申出、差圖を可レ請事

一切賃之事、古來より例も無レ之候程、高直に仕候、如何樣之子細に候か、急度切賃押下、猥に高直に不レ可レ仕事

一錢買候者有レ之時は、錢無レ之由を申候而、次第に相庭を上候由相聞候、然者買置仕候事も相見候、もし買置しめ賣に仕候者於レ在レ之者、何者に限らず、其當人之事は勿論に候、其所之名主・五人組等迄も、急度曲事に可ニ申付一候事

右之條々町中之者共、よろしく相心得、違犯之者有レ之候者、早速可ニ申出一候、後日に相あらはれ候者、其罪科も本人に同じかるべき者也

午十二月

右ノ通制令度々出サル、シカレドモ錢拂底ニテ、此事ヲエズ制令ヲ用ヒズ、正德四年ノ頃ハ、私ノ賣買、錢一貫文代銀卅五匁前後也、此卅五匁ハ永中・三ツ寶・四ツ寶銀（此三品ヲ通用銀トイフ）相庭也、正德四年午年五月ニ、新古金銀割合通用仰出サル、（第二十八卷銀ノ部ニ委シク見エタリ、依テ略ス）此割合通用ニテ右三十五匁ノ割合ヲ考フレバ、慶長幷新銀（正德四年鑄レ之）ニテハ錢一貫文代拾七匁五分ニ當ル

但シ此時慶新兩銀ニ、通用銀ハ十割增也

元祿銀（元祿八年鑄レ之）ニテハ錢一貫文代二十一匁八分七厘ニ當ル
　但シ此時元祿銀ニ通用
寶ノ字銀（寶永三年鑄レ之）ニテハ錢一貫文代二十六匁九分二厘ニ當ル
　但シ此時ノ寶ノ字銀ニ通用銀ハ三割增也

右通用三品ノ銀ハ、至テ位宜シカラズ、コレニ依テ割合通用モ右ノ通ナリ、此後享保三戌年閏十月、改テ通用割合遣ヒノ制令ヲ出サル（第二十八卷銀ノ部ニ委シク見ニタリ、依テ略ス）又金小判ノ切賃高直ナル故ハ、元祿巳下寶永銀ニ至ル迄、小玉銀拂底ニテ、市民迷惑ニ及ビ、小銀ノ分ハ專バラ錢ヲ用ユ、コレニ依テ小判ノ切賃、小玉銀ノ替リニ錢ヲ用ユ、仍ツテ自ラ切賃モ高直ニ相成ル、右ノ後チ正德ノ新銀ニナリ、位好ク又小玉銀モ數多ク吹カルヽ故、追々相庭引下ゲ、享保二酉年ヨリ、新銀相庭ニタテ替リ（今云フ古銀ニテ、慶長銀ト同品也）、錢一貫文ニ付キ代銀九匁前後、其ノ已後享保廿年ノ頃マデ、時々高下アリテ、十二三匁前後ナリシヲ、同廿一年元文ト改元アリテ、又今ノ文銀ニ吹替リ、古銀五割增シ步ニ凡引合ヒ、一貫文代銀十八匁前後ナリ、然ルニ元文二巳年ニ至リ、徐々錢高直ニ成リ、十一二月ノ頃ハ十九匁四五分ヨリ、私賣ハ廿五六匁ナリ、江戶ハ文金一兩ニ錢二貫七八百文、コレニ依テ高直ニ致スマジキ旨、度々嚴令アリテ、兩替ノ者共糺サレシカバ、大阪表ハ錢入津少ナキ處、當秋以來西國北國ヨリ積登ル、米綿始メ諸色トモ、多分代錢ニテ持チ下リ、市中愈錢乏シク困窮ス、コレニ依ツテ他國ヘ錢ヲ積出ス事停止セラル、

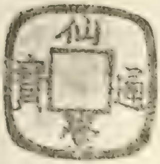
御觸書略ス　元文三午年、二十目七八分ヨリ五六匁ニ至リ、國々ヘハ密ニ私ノ相對ヲ以テ二十八匁ヨリ、卅目ニシテ交易ス、コヽニ於テ隱シ賣リ、買シメ等穿鑿ヲ遂ラレ、咎ヲ受ル者少カラズ、此上錢高直ニ成ラザル樣ト、種々糺明セラレ、市中御觸數度出サル、然レドモコレヲ用ヒザルニヨリ、猶又嚴敷吟味ヲ遂ラレ、古來ヨリ銀ニテ賣來リ候諸品、錢ニテ賣申儀コレアル間敷、前々ヨリ銀直段ノ品類ハ銀ニテ賣リ、錢ニテハ交易致スマジキ旨相觸ラル、其制令ヲ用ヒズ、銀ニテ賣買致ス者追々糺明セラレ、彌他國ヘ錢遣シ候事ヲ嚴敷停止セラル、是迄錢極メノ物モ、他國ヘハ銀ニテ遣スベク、相背クモノハ過料。曲事仰付ラレ、市中甚喧シク騷動セシナリ、右ハ其ノ頃錢拂底ノウヘ、改鑄ノ文金銀位宜シカラズ、市民歸服セズ、又諸國共新文金銀行ハレズ、眞僞ノ疑惑コレアリ、依ッテ諸品代錢ニテ積下ダスベキ樣、國々ヨリ注文コレアリ、其ノ上文ノ字銀。小玉少ナク、小銀ノ受拂是非ナク代錢ニテ取扱フ故、愈錢乏シク高直ナリ、コヽニ依テ其ノ後追々文銀。小玉。露銀等ヲ鑄ラル、元文三午年十一月、江戸錢一貫文ニ付廿一匁餘、京。大阪二十二三匁ナリ、又他國ノモノ大阪ニテ遣ヒ錢望ミ候時ハ、代三十目迄ノ賣渡ハ勝手次第、ソレ以上ニハ賣ルマジク、又三十目程ヅヽ所々ニテ買集メ候者見及ビ候ハヾ、早々訴ヘ出ベシ、決シテ過分ノ錢他國ノ者ヘ賣リ申間敷、此上高直ニナラザル樣度々御觸アリ、元文四未年四月、江戸ハ金一兩ニ錢二貫八百六十文、但シ銀相場五十七匁二分、是ヲ錢相庭ニ直シ壹貫文ニ凡二十目、京ハ二十一匁七分二厘、大阪ハ二十一匁四分ナリ、但シ古銀ノ時、錢一貫文享保年ノ

平均凡ソ十二匁トシテ、是レヲ五割増歩ニシテ、文銀ノ積リ錢壹貫文凡ソ十八匁ノ當リナリ、然ルニ二十一二匁ヨリ三十目ニ至ルコト、甚ダ以テ高直ナリ、コレニ依ツテ元文年中所々ニテ錢ヲ鑄サセラル、是相場下直ニモ相成ベキ樣ニトノ御趣意ナリ、其後段々引下ゲ、寳暦年中ヨリ明和ノ始メマデハ、凡一貫文ニ付銀十五匁位迄ヲ常トス、シカルニ明和二年ノ頃ヨリ、頻ニ鑄錢仰付ケラレ、江戸龜戸。奥州石ノ卷。城州伏見、或ハ常州水戸。肥前長崎等ニテ夥シク鑄ラル、其上明和子年ニ至リ、本邦始メテ眞鍮ノ四文錢ヲ鑄ラル、コレニ依テ同七年三四月ノ頃ヨリ、一貫ニ付十二三匁ノ前後ニ相ナリ、安永八亥年ノ頃ヨリ、十匁ノ内ヘ入、天明六午年ノ頃ハ、既ニ一貫文ニ付八匁六七分ナリ、其後文化年ニ至リ、九匁ヨリ三四分マデヲ常トス、故ニ元文ノ頃トハ事替リ、錢ヲ以テ賣買スル品類モ今皆銀直段トナリ、前々ヨリ錢極メノ物、或ハ賃錢ヲ以テ今日ヲ送ル傭夫ノ者ドモハ、錢下直ニ付甚困リ、或人云、錢ノ相場ハ高キニスギ、安キニスギテハ貴賤難儀ニ及ブ、然レドモ人力ノ及ブ處ニアラズシテ、程ヨキ事ハアラジ、其ノ高下ニヨリ民家交易ノ損益アリテ、貧富自ラ備ハル、然レドモ高キニ過グルハ卑賤勝手ヨク、安キニ過グルハ勝手アシシ、安キトテ一錢ノモノヲ二錢ニモウラレズ、高キトテ二錢ノモノヲ一錢ニモ賣ラズ、皆其品物ヲ大小。厚薄ニ造ルノミ、シカシ高下アリトテ、其ノ度々物ヲ造リ改ムルニモアラズ、相場八匁ノトキモ、九匁。十匁ニ成リテモ、其品大抵ハ替ラズ、米相場下直ナリトテ、一錢ノ糊大キクモナラズ、今錢相場ハ十二三匁ノ前後ニ至ラバ、民間一入賑フベシ、前ニシル

ス如ク、近年錢下直故、小店ノ賣物微少ニナレドモ、今又錢高シトテ、大キク改ルモノアラズ、下地ノ儘賣出ダスベシ、是小店ノ賣物ニ利アリテ、又格別卑賤ノ妨ニモナラズ、百錢已上ノ働賃トルモノ、世界ノ內廣大ノ利アラン、錢貴クナレバ米穀初メ諸色下直ニ成ラント思ヘドモ、是レハナルマジ、イカントナレバ是レモ右ノ一錢アキナヒノ如ク、都ベテ錢下直ノトキ極メシ相場ナレドモ、錢上リシトテ一概ニ品物ハ改ムマジ、錢アキナヒノモノ、上下イクバクカ賑ハハン、米ノ高下ハ年ノ豐凶ニヨリテ、聊カモ人力ノ及ブ處ニ非ラズ、下直トテ公儀ヲ始メ市中ヘ買ヒ米仰付ケラレテモ、凡大數知レタル事ニテ、又相場高キ土地ヘハ、諸國津々浦々ヨリ、貯置シ米穀追々出ル、其時少々ヅヽノ高下ハアレドモ、先大抵相庭スハリテ、米穀市場初メ、市中ノ賑ヒニナラズ、ツマリ右ノ買シメ米出ルニ相違ナシ、海川ヘスツルニアラズ、又市中金銀不融通ニテハ、諸侯方モ難儀ナルベシ、是モ九十月ヨリ翌年正月ヘカケテ、買米アラバ東西諸侯利アルベシ、奉祿ノ士ハ都ベテ一年中ノ食祿定リアレバ、每年相場下直ノ積リヲ以ツテ、公私ノ用ヲ辨ズル覺悟アレバ、下直トテサノミ憂フルニタラズ、安キトテ苦シムハ不覺悟トヤ云ハン、又市民ハ元來無祿ノモノニテ、貧富ハ業ニ精力ヲツクスト盡サヾルニアリ、米穀相場ノ儀ハトテモ人力ノ及ブ處ニアラズ、又錢ノ高下ハイカ樣ニモ出來ルコトニテ、凡ソ一萬兩カ二萬兩ノ買錢アレバ忽チ上ルモノナリ、世界ノ錢大キナル樣ニテ、マタチヒサキモノナリ、米トチガヒテ朽損スルコトナキモノ故、幾年置イテモ苦シカラズ、其ノ上前條ノ通リ錢ノ性アシキ故、

潰レ費エ、又ハ澤山ニ思フ故、海川スタリテモ、青礫ノ如キモノ今ノ世ニアル可キトモ思ハネバ、年年費エルコト多カラン、サレバ愈々世界ノ錢、不自由ニナリテ相庭上ラン、又後來共儘アランニハ、相庭高キニスグル頃、開錢ヲ出シ賣拂ヒナバ、又利アルノミナラズ、民ノ賑ヒナラン、又朽損シナバ、鑄直ホシテ通行セバ、タトヒ朽ルトモ過半ハ鑄出スベシ、左アル時ハ不時ノ備ヘニモナリテ、常平倉ノ如クナラン、米ト違ヒ錢ハ定直段ニナリテモ、民ノ害ニハナラザルベシ、併シ是レモ少々ヅヽ高下ハアルモヨロシ、買錢ハ四文錢ヨロシカルベシ、四文錢世ニ滅ゼバ、文錢始メ雜錢ノ位増スベシ、政談ニ云ヘル如クニテ、徂徠在世ノ時代ニハ、錢多カラン事ヲ願ヒ、安永已來ハ錢ノ少カラン事ヲ願フ、世ノ情變今更云フモ愚カナリ、百年ノ後又徂徠在世ノ如キ事モアリテ、又我ヲモ識ラン、夫レハ又其時ノ事ト云ヒテ止ミヌ

天明年ノ始メ、奧州仙臺侯願ヒニ依テ國中ニテ錢ヲ鑄ル、則國內計通用ヲ御免アリ、他國ハ通用セズ、尤伏見ニテ鑄ル、銑錢ノ通ナリ、形チ紛レザルヤウニ角ナダレナリ





御觸

松平陸奥守領分限り通用鑄錢、形ち撫角、文字仙臺通寶、右於ニ領内一當辰年より五ヶ年之間、鑄錢有レ之候、右者陸奥守領分に限り通用の筈に候處、若し心得違ひ外に而通用致候もの有レ之候は、御領は最寄御代官陣屋、私領は公事方御勘定奉行月番宅へ可ニ訴出一候、隱置外より於ニ相知一は、吟味の上急度可ニ申付一候、右の通り御料は御代官、私領は領主・地頭より可レ被ニ相觸一候

辰十一月

右天明四辰年被ニ相觸一候所、年月ヲ經ルニシタガヒ御觸ヲ忘レ、上方筋商家ノ者共、或ハ廻船ノ船頭ナド、己レガ利欲ニ耽リ、其國ノ相庭下直ナル故、凡彼地、仙臺通寶一貫文ニ付、四匁五分・五匁位也、多ク運送ノ荷物錢ト交易シ、三都ヲ始トシテ諸國通行ノ公錢、百文ノ内ヘ五文ヅヽ相交ヘ通用ス、凡ソ公領ノ錢相場九匁前後、彼地ノ錢凡ソ五匁前後、出入四五匁ノ德用ヲハカリ、數萬ノ錢上ミ方筋ヘ積登リ、ヒソカニ相交通用スルコト歲々盛ンナリ、依レ之數々吟味ヲ遂ラレ、文化三寅年三月、其事ヲ工ミシ者數人罪セラレ、上ミ方筋始メ諸國、右仙臺錢取交通用ノ儀、一時ニ止ム

御觸

松平陸奥守領分限、通用の鑄錢、形ち撫角、文字仙臺通寶と致し、右領内に於て、當辰年より五ヶ年の間鑄錢有レ之候、右は陸奥守領分限通用の筈に候處、若し心得違外にて通用致し候者有レ之候は、

御料は最寄御代官陣屋、私領の分は公事方御勘定奉行月番宅へ可㆓訴出㆒候、隱置外より於㆓相知㆒は、吟味の上急度可㆓申付㆒候

右の通、天明四辰年相觸候處、右鑄錢通用錢に取交、取遣致候者有㆑之候趣相聞え不屆候、依㆑之改めの者相廻し、右鑄錢交り有㆑之分、緡にて取扱ひ候分共緡限り、叺亦は筵にて取扱候分は共叺共包一ト口限り取上げ、急度可㆓申付㆒候

右の趣御領は御代官、私領は領主・地頭より可㆓相觸㆒候

文化三寅年四月

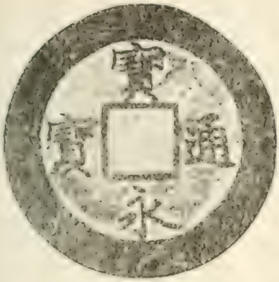
右仙臺錢、仙臺侯願ニ依テ免許セラルル、如何ナル故ト云フ事ヲ知ラズ、或老人云、錢貨ノコトハ前々記ス如ク、世々鑄之事ハ、甚重ズル所ニシテ、公錢ニ類スルコトヲ、免許ハ有間敷キコトナリ、春臺云ハク、國家用度乏シクナレバ、興利ノ臣種々ノ惡説ヲ言上スルハ、定マレル事也、其中ニ紙鈔ヲ造ル事ハ、甚キ惡政ナリ、防ガズンバ有ベカラズト云リ、増テ錢ヲ私ニ鑄ルコト、免スベキコトニアラズ、紙錢ト同樣ノコトヽ思ヘドモ、鈔ハ他國ニ不用ナリ、錢ハタトヘ角ニシタリトモ、公錢ニ紛亂スルコトハ知レテアルコト也、又民間ニテモ贋。潰錢又ハ銅釘ヲ平メ丸クシ無紋ノ錢、又甚シキハ銑錢ノ破ヲ紙ニテ張ナドシテ、公錢百文ノ内ヘ取交ヘ通用ス、右僞錢ヨリミレバ、仙臺錢其ノ代リト成ツテ世ニ通用セバ、甚ダ益ナラント思フヨリ、自ラ角錢諸國ヘ廣マリ、始メハ一二文ノコトモ、後ニ

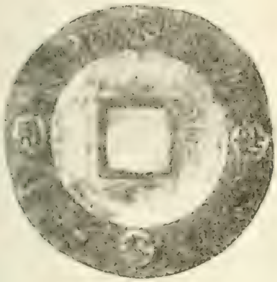
ハ五文。十文ヲ交フルヤウニナレリ、世界廣大ノ錢ニ、五文。十文ヲ百文ノ中ニ交フレバ、誠ニ夥キコトナラン、尤角錢出ヅルヨリ、嚴シク制令ハ出ヅレドモ、年ヲ經ルニ隨ヒテ市民忘却ス、勿論博奕諸勝負ニ到ルマデ、法度犯スモノハ、嚴科ニ處セラル、コトヲ知ナガラ、犯ス者世ニ多シ、增テ角錢ヲ公錢ニ交ヘ通用スルコト、其ノ咎知テモ不レ知顏シテ紛亂スルハ、全ク奸利ヲ貪ル民情ナリ、既ニ前文ノ通、嚴ク不通用ニナル時、三都ノ市中ハ勿論、民家小店ノモノニ至ル迄、其ノ迷惑一方ナラズ、尤兼テ掟ヲ不レ守咎ト雖ドモ、世ニ角錢ナクバ此難ハ不レ可レ有、是紙鈔ヲ造ルヨリハ天下ニ其害大イナラン、後來能之ヲ守リ、制令ヲ犯ス事ナカレ、利ニ迷フ都鄙ノ民情、愼ムベク恐ルベシト、或老人云リ、右等ノ事茲ニ記スハ、誠ニ恐レ憚ルベキ事トイヘドモ、後年右角錢停止セラル、善政ノ有リガタキ事ヲ知ラシメンガ爲メ、老人夜話ノマヽ記ス

三貨圖彙 卷之六 錢之部

草間直方 輯錄

大錢ノ始ルコト、前漢食貨志曰、周景王患ニ錢輕一、更鑄ニ大錢一、文曰寶貨、其後往々鑄レ之、南宋文帝ノ時ニモアリ、又仁宗ノ時モ、軍中用度不足故、大銅錢ヲ鑄ル、一ヲ以テ小錢十ニ當、關中ノ軍用ヲ助クト云、本邦百十四代、東山院ノ御宇、寶永四丁亥年、京都七條ニテ、始テ大錢ヲ鑄セラル、是一文ヲ以テ小錢十文ニ當ツ、大サ凡一寸五分許、量目二匁五分、錢文寶永通寶ナリ、裏ニ永世久用ノ四字アリ、願人長崎屋忠七・菱屋五兵衛・鮫屋三郎兵衛・清水宗仙





御觸書

一今度京都錢座にて大錢出來候、世間通用の爲に候間、諸國何方によらず、賣買請取方無レ滯只今迄の新錢に交へ、通用可レ申候、但大錢一錢は、只今迄の十錢に當り候事

一只今迄の新錢、相庭金壹兩に錢三貫九百文より四貫文迄の積りに定め、夫より高下無レ之樣相守り、大錢を差交へ通用可レ仕事

附大錢當四月より通用可レ仕候事

一大錢外にて、似せ拵候者於レ有レ之は、可レ爲二曲事一事

寳永五子年二月十日

右大錢ノ文字ハ、林大學頭信篤門人樋口彌門書レ之、此人當時ノ能書也、又長崎屋不舊トモ云リ、國朝舊章錄ニ、寳永五年戊子、十當ノ大錢ヲ鑄ラル、輪郭ニ珎ノ一字アリ、此文字ハ小田侯ノ臣ニテ、林祭酒ノ門人樋口彌門ガ書シナリ、謝禮トシテ錢座ヨリ黄金一枚ヲ出ダス、是ハ寛文年中、新錢ノ背文ニ文ノ一字ヲ、弘文院春齋ノ門人辻春達書シ時ノ例也云々

此ノ錢、遣ヒカタ不便利ニシテ民不レ服、依レ之寳永六年停止セラル、マタ今ノ四文錢ハ甚ダ便利ヨク、京都ヨリ關東筋專バラ之レヲ用ユ、大坂ヲ限リ中國西國ハ未ダ之レヲ用ヒズ、如何ナルユヱト云フコトヲ不レ知

大錢相止御觸

一　先達て被二仰付一候、大錢の儀通用致二難遣一、下々迷惑仕候に付、向後通用相止め候樣に、今度被二仰付一候、且又御藏より出候大錢は、追々御引替可レ被レ成候旨、町中商賈人へ、念入可二申渡一候事。

寶永六丑年正月廿三日

凡錢通利者、以二十文一抵二銀一分値一、其大錢當五當十、其弊便二于私鑄一及以レ害二民故、中外行而輙不レ行一ト天工開物ニモアリ

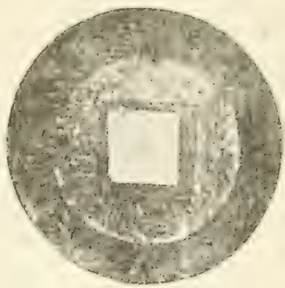
右大錢通用不便利ニテ、民ノ煩ヒトナリシコト、星霜歷ルニシタガヒテ、商家ト雖ドモ知ル人稀レナリ、武家方ハ猶更ノコトナルベシ、經濟治術ヲトルニハ、民ノ情ヲ知ラザレバ害ニナルコト多シ、官家ハ大概下情ニ疎キモノナリ、是レ武備ヲ專務トスル故其ノ謂アルベシ、市民ハ利欲ヲ專ラトスル故、非ヲ理ニ曲ゲ、上ニ益アリ下ニ利アリト云ヒテ、官家ヲ欺クモノ有リ、甚怖ルベキコトナリ、既ニ寶鈔ノ如キハ、紙ヲ以テ銀錢ニカヘ通用ス、然レバ紙鈔ヨリ銅錢ヲ以テスル時ハ、タトヘ下民通用不便利ナリト云トモ、遙ニ增サルナルベシ、宋ノ世國用不足シテ、會子關子ノ紙鈔ヲ出シ、色々ノ法ヲナセドモ、彌國用乏シク、通用不便利ニシテ、下民交易ニ苦シメリ、又政事ヲ執スル人ハ、尤心ヲ深ク盡スベキコトナリ、此大錢寶永五年ニ通用ノ制令アリテ、程ナク明正月止メラル、全民害通用不便利ノ由ナリ、此時停止ノ御沙汰ニ及バズトモ、格別民ノ害トナルベキコトニモアルマジキヲ、市民一統

ノ歸服セザルヲ聞召シ、忽チ通用ヲ停メラレシハ、難レ有事共ナリ、經濟ヲ行フニモ人々偏頗一癖アリ、俗諺ニ謂ル負ケヲシミト云フモノニテ、一己ノ功ヲ立テント强ヒテ行フ人、諸侯ナドノ臣ニハアルモノナリ、經濟ハ蠡ヲ以テ海ヲ測ル管見豹毛ノ論ニテハナシ、過アラバ命令ノ重キモ破リ、幾度モ過チハ改ムベシ、是レ忠ノ經濟ナリト、或老人云フナリ、右大錢民ノ通用不便利ナルコトハ、譬ヘバ小錢ノ相庭十匁ノ時ハ、大錢一文ニ付銀何程ニ當ルト云フニ、一分四毛一弗六忽六六トナル、小錢十一匁ノ時ハ、一分一厘四毛五弗八三三トナル、同十二匁ノ時ハ、一分二厘四毛九九九トナル、然レバ小錢十匁ノ時、大錢十文ノ代銀ハ、一匁四厘一毛六弗六忽六トナリ、其餘モ皆ナ右ノ割合ニテ、銀拂ラヒノモノヲ大錢ニテ渡ストキハ、其算用不便利ニテ、大錢ノ代銀モ何厘何毛何弗迄、算ノ表ニ出デズ、是ハ小錢百文ニハ九十六文、大錢十文ハ長百文ニシテ、通用四文ヅヽノ違ヒ有レ之故ナリ、依レ之品類貨物ノ賣買ニモ、自然ト厘毛ヲ爭ヒ市民甚ダ喧シ、如レ此通用不便利ニ付、翌寶永六巳年正月、通用ヲ停止セラル、右不便利ナルコトハ最初ヨリ知ラレタルコトナレドモ、官家ハ利ニウトク正直ナルモノ故、願人ドモ表ニハ忠節ヲ顯ハシ、内ニハ私欲ヲ構ヘ、御爲御益ト言葉ヲ巧ニシテ欺キシナルベシ、然レドモ翌年ニ至リ、何ノ子細モナク過ヲ改ラル、難レ有善政後世ノ美談トナレリ

二字寶永、此錢ハ表穿ノ左右ニ、寶永トアリテ、上下ニ文字ナシ、背ノ緣ニ萬代通寶ト云極印アル大錢ナリ、是ハ右大錢願ノ始メニ差出セル手本錢ノ由、其ノ後寶永ト可レ致旨令セラルト云フ

右二字寶永、又十錢通寶、銀代通寶等、皆錢家ノ云ヒ傳フル所ニシテ、其是非ハ知ラズ





銀代通寶

此錢ハ、元祿十六癸未年、願人伊勢屋道喜ト云者アリテ、一錢ヲ銀一分五厘ノ通用ト定メ、大サ九分五厘、重サ一匁六分、吹高百二十萬貫文、百文ハ金壹分ニ當リ、百疋百文、千疋一貫文ノ定ニテ、願書ニ和漢ノ故事ヲ引ケリ、此願書納リ、粗可レ被ニ仰付一沙汰有レ之、然ル處關東西ノ秤座神善四郎・守隨彥太郎ヨリ、銀代通寶被ニ仰付一候テハ、秤座退轉ニ及ヒ候由、訴有シニヨリ相止ムト云、此時代元祿銀ニテ、世上小玉銀拂底ニ付、右ノ事願上シトナリ



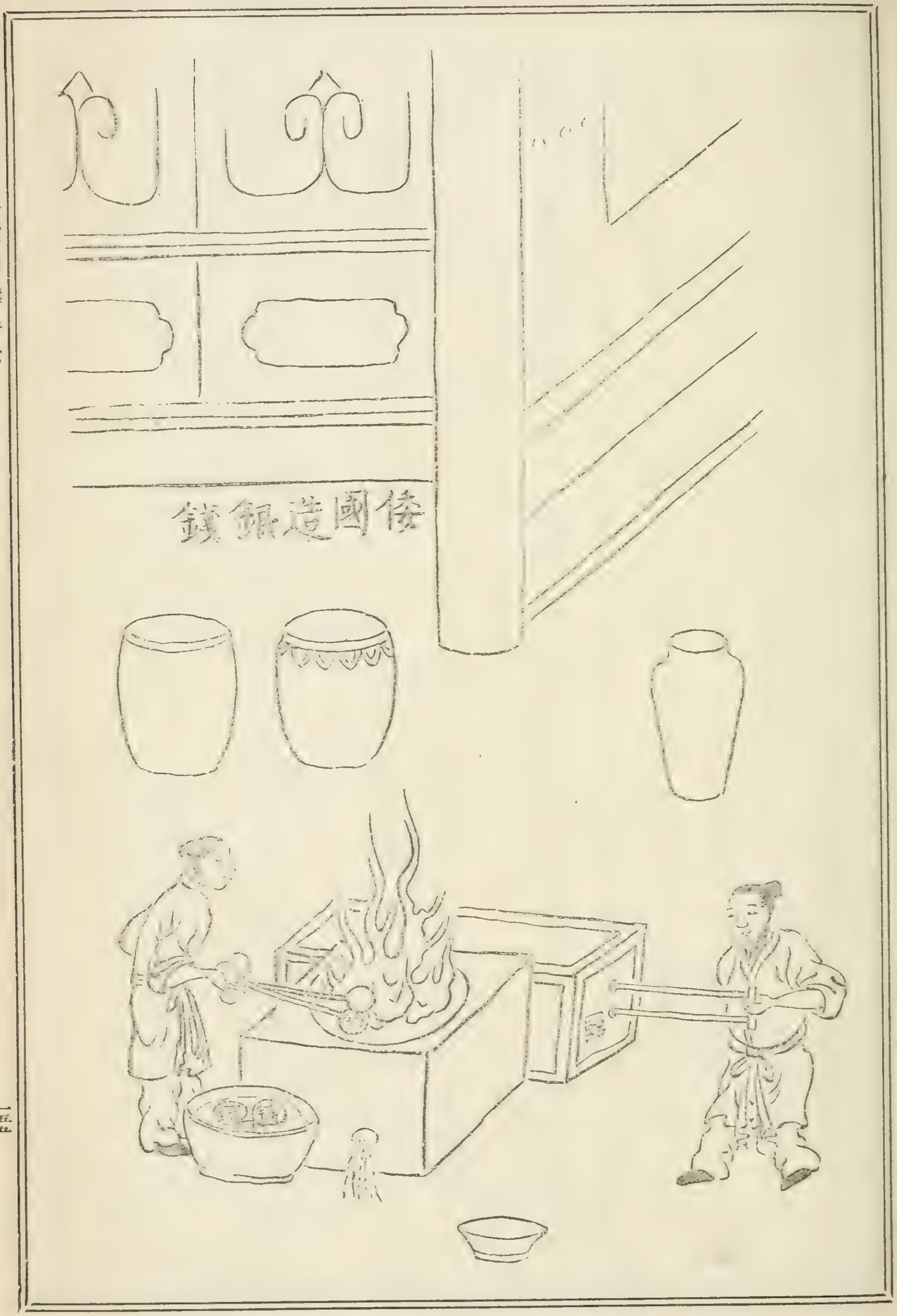
永樂金錢



同銀錢



右文祿。慶長ノ頃、太閤ノ命ニ依テコレヲ鑄ト云ドモ不レ詳、何レノ時ニ鑄テ通用セシヤ不レ知、室町殿日記ニ、大政所ノ御追善トシテ、四十九日ニアタル日南日ガ間、乞食貧人ニ施行ヲヒカセタマフ、唐金錢ノ中ニ、金錢銀錢ヲアヒマジヘテヒカセタマフニ、受クル非人ノウチニ、許多ノ得失アリテ、我等如キノ一錢ナシノ貧人ト成テモ、貧福ノサカヒハ有リケルモノカナド打チ笑ヒタリトアリ、右大政所ト云ハ、秀吉公ノ母公ニシテ、文祿元年七月廿五日逝去アリ、高臺院ト號ス、右金銀錢ハ、豐臣家ヲ始メ、專ラ天正。慶長ノ頃、諸侯國々ニテ鑄サセ、軍役賞賜ノ用ニ備ヘシニヤ、尤永樂錢、鎌倉公方滿兼ノ時代ヨリ東國盛ニ行ハル、兩國筋ハ未ダ其ノ沙汰ヲ聞カズ、關東ニハ專ハラ行ハレテ、今ナホ其ノ餘風殘レリ、右金銀ノ錢モ、又東國ノ諸侯鑄レ之カ、仙臺ノ國主古例ヲ以ッテ毎正月三日野陣ノ備ヘアリ、此ノ時雉ヲ以テ獻ニタトヘ、一番・二番其首ヲ取ル者ヘ、賞トシテ金銀ノ永樂錢ヲ給フト云ヘリ、其餘東國ニハ右ノ金銀ノ錢ヲ以テスル古例、國々ニアリト云、兩國ニハ此沙汰ヲ不レ聞、依レ之見レバ、東國ニテ鑄シモノニ疑ヒナシ、又或記ニ、東福門院諸社諸寺御參拜ノ時ノ散錢ニ、鑄サセフルトモ云、右仙臺侯ノ古例ヲ以テ見レバ、此ノ女院ノ御時代ヨリ前ニアルモノカ、又金銀ノ錢文正シカラズ、輪郭モ又全カラズ、是ハ今鑄シ錢ノ法ニテ鑄シモノニアラズト、金銀錢譜ニ云ヘリ、天工開物ニ倭國俱錢ヲ造ト云圖アリ、其法ニテ鑄シモノニヤ


倭國造銀錢

若琉球諸國銀錢、土摸卽鐵、與鐵鉗頭上銀化之時、入レ鍋夾取、淬二于冷水之中一、卽落二一錢其內一云々

鎌倉時代切錢ト云コトアリ、昆陽漫錄云、切錢ト云コト有テ解セズ、佐渡銀・越後銀ノ切使ヒノ如ク、弘長ノ頃民間ニテ、密ニ銅ヲ薄ク長ク吹テ、切テ錢トナシテ通用スルニヤ、東鑑ノ文左ノ如シ

切錢之事

右近年多出來之由有二其聞一、於二自今以後一者、用二切錢一事可二停止一之存、此旨普可レ令二下知一之狀、依レ仰執達如レ件

弘長三年九月十日

武藏守

相摸守

加賀前司殿

偕唐書ニ、二兩京錢有二鵝眼一古文錢別、毎貫重不レ過二三四斤一、至二剪レ鐵而緡一レ之一トアリ、切錢モ此類ナルベシ、又同書ニ、一鐵葉皮紙、皆以爲レ錢一トモアリ、今キセルノ雁首ノ古キヲ、錢へ雜ルモ此類ナリ

緡ノ事、和漢三才圖會云、說文、貫繩也、以レ縚穿レ錢曰レ貫、从レ毌从レ貝、古之貫字也、緡同義

本邦、錢九十六文ヲ以テ百文ト定ルコト、其ノ據ルヲ知ラズ、往古ハ丁百ヲ以テ通用スト云フ、後世ニハ九十六文トス、或ル說ニ往古ハ城州山崎、又逢坂ニ關ヲ置キ、京都往來ノ貨物、百文ノ內二文ヲ以テ役用トス、出入各四文ヲ取リ、殘リノ九十六文ヲ其ノ儘後代通用スト云ヘリ、依レ之九十六文ヲ以

百文トス、又和事始ニ云、人皇百六代後奈良院、天文年中、上杉憲政ノ家臣長尾意玄、是ヲ制セショリ始ルト云、意玄曰、敵國ニ入リ町人地下人逃ゲ散ジ、其ノ處ニ居ザルニハ、小身ノ中間等、少ノ物ヲモ買ベキ樣ナシ、然ラバ取鎮メテ豐ナラネバ、代物ハ不レ遣モノ也、又豐カナル世ニハ闕漏アルコト、長久ノ政ナレバ、代物ヲ九十六錢ニシテ、四文宛闕漏然ルベシ、其ノ上三十二文宛三ツニ分チ、マタ三十文ヲ四ツニワクレバ八文ニナル、斯クテハ錢ノ遣ヒ樣モヨシトテ、如レ此ニ定メシトモ云、又或説ニ、九六ノ數ハ陰陽ノ極數、物極マレバ必ズ變易ス、故ニ今交易通用ノ義ニ取ルト云々、又天文略ニ云、太陽冬至ニ赤道ヲ去ルコト、南ニ至テ二十四度、夏至ニ赤道ヲ去ルコト、北ニ至二十四度、南北四十八度、往來九十六度ニシテ一歳ヲナス、ユヱニ太陽一歳ノ天度往來ノ歩ニ象ドリ、九十六錢ヲ省百トシ、名ケテ御足ト云、マタ或ル書ニ慶長ノ頃、永樂一錢ニ鐚錢四文ヲ以テ通用スル故、鐚百文ヲ以テ永樂二十五文ニ替ル、此ノ内口錢トシテ永樂一錢代ヲ鐚百錢ノ内ニテ引キ兩替ス、仍テ殘九十六錢ヲ常用ノ百錢トス、鐚錢通用ノ時ノ遺風ナリト云、又田宮仲宣ノオコタリ草ニ云、九六百文ノ錢ハ淵鑑類函、及ビ品類事實ニ、安祿山初メテ百文ニ四文宛ノ運上トシテ官庫ニ納メシト、玄宗帝ニ勧メシニヨリ初ルトカヤ、日本ニテハ上杉修理大夫定政ノ家老ニ、長尾將監ガ孫四良左衛門景春、コレヲ始メシト也、景春後伊玄ト云、偖九六錢通用大キニ益アルコトニテ、丁百ハ八ツニ割ルニ端出テ執中ナラズ、九六百ハ當分ヨリ四十八ニ割レルナリ、九ハ老陽ニシテ六ハ陰ナリ、互ヒニ小陰小陽ニ變ズル

數ニアタリ、易ニ乾九坤六ハ用九用六ノ一卦ヲ益シ、小陽不變ノ妙數七トナルナリ、サル故ニコソ下民大キニ用ヲナスナリ、タトヘバ九州ニテ肥前ハ一錢目ヲ二十文ト定メテ、國錢ト云ヒテ古ヨリ用ヒ來タルナリ、ユヱニ六文目繋ギ、丁錢百二十文緡ナリ、是レヲ八本ニテ八ニ、二八ノ數ヲ合セ、九六一貫文トナルナリ、筑前ハ一錢目八十文ト定メタル古法ノ國錢ナリ、通用丁百六十文緡ニ匁繋ギナリ、是ヲ六本ニテ六ニ六六ノ數ニテ、九六一貫文トナレリ、昔佐々木氏ノ武佐枡ヲ通用トセラレシヤウノ仕來リ、夫レ唐ニハ四文ヲ公益トシ、本朝ニハ下民ノ用ヲ辨ゼシメラル、本朝ノ仁政、唐ノ不仁政、天壤ノ差ヒナリ、仰グベシ尊ムベシ云々、右九十六文ヲ百トスルコト、大抵其ノ理皆同ジ、然ドモ慶長ノ頃、鐚錢通用ノ時ノ遺風ト云ヘル論ハ宜シカラズ、既ニ建武式目追加ニ、渡唐永樂・洪武・宣德以下取合セテ、百文ニ三十二錢ケリヤウ三分一可レ有レ之トアリ、百文ノ三分一、三十二錢ナレバ、三十二錢、三ツハ九十六錢ナリ、是レ永正五年ノコトナリ、永正五年ハ、和事始ニ云ク、天文年ヨリ二十ケ年モ前ノ事ナリ、然レバ天文年以前ヨリ早九十六錢ヲ百文トセシニヤ、又長尾意玄、若年ノ頃ノ工夫カ不レ知、又錢一ツヲ一文ト云フコト、其ノ據ヲ不レ知、前ニ云、日本紀顯宗帝ノ時「稻斛銀錢一文」トアリ、又温故要略ニ、事文別集・五雜俎及ビ其ノ中ニ、秦好古器費財後乞市、其ノ語ノ中ニ太公九府錢一文トアリ、天台止觀第八ニモ、一文ノ費トアリ、錢ヲ一文ト云コト、古キコト見エタリ、又錢ヲ鳥目ト云ハ、南宋明帝ノ泰始元年、鑄鵞眼錢トアリ、是レヨリシテ鵞眼鳥目ト云ナルベ

シ、又靑銅靑錢ト云コトハ、毘陽漫錄ニ云、「乾隆五年、改ニ鑄靑錢一條例曰、鎔試以ニ靑錢四串一、計重三十觔、內有ニ紅銅十五觔、白鉛十二觔七兩二錢、點銅九兩六錢、黑鉛一筋十五兩二錢一、俱鎔ニ化三十觔之靑銅一、必須ニ外加黑鉛十七觔鎔□一始可下將ニ靑銅一投入鎔化上、合計鎔試一鑪分ニ得紅銅五觔八兩、黑鉛脆錫十七觔一、其餘盡行折耗」下略 乾隆ノ錢モ、康熙ノ錢ノ如ク、鍮金ナリト云フハ、卽鍮金錢ノコトナルベシ、白鉛點銅脆錫知得スト雖ドモ、意ニ白鉛ハ白メノ類、點銅ハトタンノコト、脆錫ハ白鉛・黑鉛・點銅ノ交リタルモノニヤ、猶博物ノ士ニ問ベシ、我國ノ靑錢靑銅ト云フハ、惡錢ニ對シテ云コトニテ、精錢ノ扁ヲ省キテ、靑ト云コトニミユ、又赤錢ト云コト、同書ニ云、唐書郴州桂陽郡ノ土貢ニ赤錢アリ、連州連山郡ノ土貢ニモ赤錢アリ、桂陽郡ノ義章縣連山縣銅出ルニ依テ、鉛錫ヲ雜ヘザル銅錢ヲ鑄テ赤色ナル故、赤錢ト云ナルベシ云々

錢千文ヲ一貫ト云コト、其據ヲ不レ知、前ニ云、說文ニ、「貫繩也、以レ繩穿レ錢曰レ貫、」事物紀原ニ、「自レ古用レ錢貫以ニ千百一以レ足、又唐昭宗時、京師用ニ錢八百五十一爲レ貫、河南府以ニ八百一爲レ貫」トアリ、本邦ニ今四國土佐邊ニハ、錢ヲ皆一匁繫ニシテ、時々增減ハアレドモ、凡七十錢或ハ八十錢ヲ緡ニ繫ギ、八百錢又ハ七百錢ヲ十匁トシテ、國用通用セルヨシ、是レモ粗右ニ相似タルモノ歟、千文ヲ一貫トスルコト、既ニ和銅年中錢ヲ鑄ラレシ時ヨリ、何貫ト云フコトミエタリ、夫レヨリ以前ハ不レ知、其後歷代ノ史ニノスル處、皆千文ヲ以テ貫トナス、又錢一貫文ヲ百疋、五百文ヲ五十疋ナリト云フコト、其始ヲ不

レ知、延喜式ノ春宮式ニ曰、凡十二月二日、來年雜用料三百匹。綿七百屯。絲五百絢。調布一千端、鍬一千口。錢五百疋云々

玉海云、文治二年七月五日、肥前國司場、假殿成功、而可レ給二三萬疋一、切々由二官舍一申、當時可レ造二營殿舍四字一（御殿三字 御殿一字）準二七千疋一歟、（一下略）トアリ、然レバ夫ヨリ以前モ、錢貫百ヲ以テ何疋ト云通稱アリシト見エタリ、久明將軍ノ時代、永仁御即位用途記ナドニモ、皆何百匹ト出タリ、其記ニ云

砂金九兩二分　　　代二千八百五十疋

按ニ一兩、凡錢三貫文ニ當ル歟

銀四十二兩　　　代四千二百疋

按ニ一兩、凡錢一貫文ニ當ルカ

熟銅廿六斤十二兩　　　代千五百疋

按ニ一斤、凡錢五百六十文餘

上品八丈絹四十二疋、代一萬六千八百五十匹

按ニ此代不レ解、寫誤アランカ、東鑑ニハ上品、八丈絹六匹、代百二十文（文各廿）トアリ、依レ之考フレバ、

一疋ニ十文替ニシテ、絹凡八千四百二十匹程ニ當レリ疑ハシ、追テ考フベシ

凡絹三百四十八疋、代八百文

按ニ一疋、凡錢二文三歩程ニ當ルカ、是モ疑シ、三百四十反成ベキカ、夫ニテハ一反凡二文三歩程ニ當レリ、是モ東鑑ニ「紺布二反四文」トアレバ、一反二文ナリ、尤モ絹ト布トノ違ヒ目アレド、大抵三百四十反ナレバ、相應ナルベキカ

右之通、何疋ト稱スルハ、鎌倉時代ヨリ、以前ノ事ニシテ、其始メヲ不レ知、世俗ノ諺ニ、建久・文治ノ頃、右大將頼朝卿、獸狩ヲ好ミ玉フ、其田獵ノ令ニ、獸一疋ヲ捕ル者ハ、錢十文ヲ賞トシ、百疋ヲ捕ルモノニハ、一貫文ヲ賞トス、是ヨリ一貫文ヲ百疋ト云、伊勢貞丈漫錄ニ、奇異雜談集（室町殿ノ頃、佐々木家臣、中村豐前守某、記レ之）ヲ引テ云「唐には牛を一頭と云、日本の詞に約せば湯桶文章にして、牛一牽と云ふべきか、馬を一疋と云ふいはれは、馬の目には、絹壹疋長の間を見るなり、字註に曰、一疋は四丈なり、馬の光景一疋の長なりと云々、絹を一疋と云いはれ、一疋は二きだけなり、夫婦二人の衣裳となる故に、一疋と云なり、夫婦二人相したがふを一匹の夫婦と云なり、論語に、匹婦匹夫と云は是なり、匹は配也、物を一對と云がごときなり、疋の字同也、犬を一疋二疋と云いはれは、犬追物の時、河原の者、輪の內より犬を放せば、騎馬一矢、犬を射る、もし二騎三騎、追ひかけて射ると雖も、本になる矢は、唯一つ也、馬一疋に犬一つなる故に、犬を一疋と云ふ也、異なる犬をば一疋二疋と云ふべからずと雖も、世俗のことはみだりにして常の犬をも一疋二疋と云、剰へ鹿兎狐狸猫鼠小虫に至る迄云ひならはしたり、料足を、十疋廿疋と云いはれは、犬追物の時、河原の者、犬を百疋放てば、一貫文とる、五十疋放てば、

五百文取る也、犬一疋は十錢に當る故に、十錢を一疋と云、百文を十疋と云へり、是犬追物より出たること也云々

又隨筆ニ、延喜式ヲ引テ云、上古ヨリ此數目アリト云ヘリ、又往古錢ヲ鑄シ時、十文ノ間々ニ、駒牽錢一文ヲ入ル、依テ百文ヲ十疋ト云、一貫文ヲ百疋ト云、是等國史始メ、舊記ノ據ヲ不レ見、俗說ナルベシ、康富記ニモ、武家ヨリ御成助トシテ何萬匹、大將ノ拜賀ニ何千疋、或ハ新嘗祭又ハ月次祭ノ參役ニ、御訪何百疋ナド、所々ニ出タリ、徒然艸ニモ、師匠ヨリ錢二百貫ト、坊ヒトツヲ讓リタリケルヲ、坊ヲ百貫ニ賣テ、彼是三萬疋ヲ、芋ガシラノアシト定メテト云フコトアリ、是皆百疋ト云ハ、錢一貫ノコトナリ

錢ヲ料足ト云ハ、延喜式、又二水記・元長記・康富記ナドニ出タリ、後世婦人、錢ヲオアシト云モ料足ヨリ出タル義ナラン、又九十六文ヲ省百トシ、是ヲオタシト云、是ヨリ轉ジ來ル歟、或ハ錢神論ニ、「無レ翅飛、無レ足走」ト云ヨリ轉ジテ、錢ヲ足ト號スルカ、然レドモ料足ト云フヨリ出デタル方是ナラン、又金壹分ヲ百疋ト云コト、錢一貫文ヲ百匹ト云ヨリ轉ジ來ルベシ、寛永年中、錢ヲ鑄シ時、金一兩ニ、錢四貫文、金一歩、一貫文ノ定ヨリ、遂ニ一歩ヲ百疋ト云ヒ習ハセルナリ、往古新錢ヲ鑄ル時、先神ニ奉ル、其後親王始メ諸臣ニ下サル

三代實錄ニ云、貞觀元年十月二十八日、鑄錢司進二新錢一、奉二諸名神社幷諸山陵一、及頒二賜親王以下一、同十

二年八月五日、鑄錢司進二新鑄錢一、貞觀錢一千一百十貫文、勅進二献太皇太后宮及淳和院一各五十貫文、賜二東宮二十貫文一、頒二賜親王以下五位以上見參者一、各有レ差、自二諸司六位官人一、迄二諸衛府、駕輿丁衛士一、皆預二恩陳一焉

此外新錢ヲ鑄ル度、諸社ヘ進ラルルコト、國史ニ出タリ

西宮記云、「奏聞之後、先被レ奉二神社佛寺一各有二其例一次勘定仍給二諸司所々等一、次又勘定御菜料幷一院・三宮・親王・女御・更衣・女官等、給法了、次定二吉日一、下二宣旨於大藏省一、奉當日大藏省運置、件錢於二南殿前櫻樹東頭一、任二見參一召給レ之、親王公卿從二陣座一一々進出、就二膝突一取手錄、錢一貫文、一拜退至二宣仁門外一、令レ給二僕從一還着二本座一、次諸大夫入レ自二日華門一、隨レ召就二膝突一取レ錢、一拜退出、其數各有二例數一、件事只有二其非一之時大略覺悟許也、更不レ可レ爲二慥說一」徂徠政談云當時如何樣ノ事ヲシテ、世界ヲ賑ハスベキト工夫スルニ、錢ヲ鑄ルニシクハナカルベシ、總テ金銀ヲ附石ニテ試テ、位ノヨキト云事兩替屋ナド云事ニテ、大ニ愚ナル事ナリ、其子細ハ元祿ニ金銀ニ歩ヲ入テ、金ノ性ハ惡敷ナレドモ、錢ノ直段、サマデ替ラネバ、慶長モ金ノ位替ル事ナシ、當時元祿金銀ヲ吹キ直シテ、性ハヨク成リタレドモ、錢ノ直段元祿ト替ネバ、是レマタ元祿ト全ク位替ラヌナリ、一兩ハヤハリ一兩ナリ、一兩ヲ二兩ニモ遣ハレヌナリ、サレバ性ヨク成リタル詮ハナシ、元祿ノ金銀ヲ吹キ直サズ、性ノ惡キ儘ニテ世界ノ金銀ヲ半分ヨリ内ニ減ジタルト、全ク同意ナリ、サレバ世界ノ困究シタル筈ノ事也、今錢ヲ夥シク

吹出シテ、一兩ニ七・八貫文モシタラバ、金銀ノ員數ハ半分ニ減ジタレドモ、位一倍ヨク成ル故ニ、元祿ノ金銀ヲヤハリ吹キ直サズ置イテ、金銀ノ員數元ノ如クナルト、全ク同ジコトナルベシ、金銀ノ誠ノ位ト云モノハ、錢高クナレバ位下リテ、金銀ノ威光働少ク、錢安クナレバ位上リ、金銀ノ威光、働キ强ク成ルコトニテ、金銀ノ性ノヨキハ、何ノ詮モナキコト也、假令バ召仕ヲ夥シク持チタルヲ大身トシ、召仕少シ持チタルヲ、小身者トスルガ如シ、然カルヲ錢ノ員數少ナクナレバ、錢ノ位貴クナル故、金銀モ夫モ連テ貴シト云フ人アレドモ、夫レハ物ノ情ヲ全ク知ラス人ニテ、是非ヲ變亂スル利口ノ佞人也、下略誠ニ錢ヲ夥シク鑄出スハ、則金銀ノ增タルニテ、其ノ上制度タツ時ハ、此ノ上ヤナカルベキ、併シ右ニ云ヘル錢ノ高下ニヨリテ、金銀ノ威光强弱ナルユヱ、金銀ノ性ノヨキハ、何ノ詮モナキト云ヘルコト、享保十年ノ頃ナルベシ、此時代世界人數增タル上、錢甚タ少シ、依レ之相庭貴ク、既ニ一貫文二十三四匁位ナリ、諸色ハ左程高直ニハ無レ之、然レドモ下々錢ノ廻リ、少シク困究ナリ、働キモ取ベキ料ハ、前々ノ通ナルベキヲ、錢高直故、價ヲ自ラ少ク渡スハ、錢乏キ故也、夫レ故本文ニモ錢ヲ多ク鑄レバ、世上錢ノ廻リヨク賑フベシトノ考ヘナリ、金銀吹キ改リテ、性ハヨク成テモ、全體錢少ナキ故、ヤハリ下々ハ難儀ナリ、サレバ金銀ノ位ヨク成リテモ、何ノ詮モナシト云フノ義ナリ、其ノ時代ニ引キ合セテ是レヲ見レバ至極ノ理ナリ、サレドモ金銀錢ノ增スハヨケレドモ、性ノヨキハ何ノ詮モナシトハ云ヒ難シ、同ジクハ性能クシテ增シタキモノナリ、此ノ時右ニ云フ如ク、下

下困究ノ時節故、中々其ノ頓着ニ不ㇾ及、先性ハ悪クトモ、錢ヲ餘計鑄出サントノ趣ヲ以テ書ルニヤ、夫レハトモアレ金銀ハ本邦モ異國モ重ンズル所ノ寶貨ナレバ、次第ニ増スハ美目ナレドモ、其性ノ悪キヲ厭ハズ鑄出サンハ、甚ダ其ノ意ヲ得ズ、性ノヨキハイラザルト云フヨリシテ、イカサマ一文ハイツニテモ一文ト思フ故、土ニテモ紙ニテモ上ミヨリ寶ナリト云ヘバ、何國マデモ貴ミ用ユル故、其ノ性又ハ文字ニモ拘ハラザル時ハ、甚タ賤ク相成リ、異國ニ渡リテモ、後世本邦ノ耻ヲ殘スコトロ惜キコトナリ、春臺先生モ云ヘル如ク、既ニ周景王ノ時ノ大錢、凡ソ二千三百年ニ及ビヌレドモ今ニ存セリ、其ノ餘秦ノ世漢ノ世ハ後ナレバ猶ホ存ス、唐ノ太宗ノ時開元通寶ヲ鑄ル、其ノ時ノ能書褚遂良ニ命ジテ、錢文ヲ書カシム、但シ舊唐書食貨志ニモ、「開元錢歐陽詢制詞、其字含八分及隸體其詞先上後下、次左後右讀ㇾ之、自ㇾ上及ㇾ左迴環讀ㇾ之、其義又通俗、謂㆓之開元通寶錢㆒」トアリ、宋ノ淳化通寶ハ、太宗ノ筆ニシテ、眞草行ノ三體アリ、大觀通寶ハ、徽宗皇帝ノ筆ナリ、如ㇾ此錢ヲ鑄ルコトヲ甚ダ重ンジ、銅モ上好ヲ擇ミテ、皆其ノ時ノ能書ヲ以テ書カシム、是レ後世ニ殘ル寶ナレバ也、明ノ太宗、永樂九年ニ、永樂通寶ヲ鑄ル、此ノ錢文ハ本朝相國寺ノ僧中正ノ筆也

本朝通鑑云、「應永十年、相國寺僧中正藏主、（又名中芳）尤善㆓楷書㆒、明人謂書法第一、令ㇾ書㆓永樂通寶錢文㆒、今所ㇾ傳㆓于天下㆒、錢文中正筆也云々、」松下見林ノ日本傳ニモ載セタリ、實ニ我ガ皇和ノ光ヲ、千載ニ輝カスト云ベシ、世人ノ知ルトコロ、和同ハ魚養ノ筆、神功開寶ハ吉備公ノ筆、富壽神寶ハ空海ノ筆、

者其ノ時ノ能書ヲ以テ文ヲナサシム、其ノ餘筆者前ニ記ス、依レ之錢ヲ鑄ルコトハ、天下ニ甚ダ重ンズル所ニシテ、代々鑄錢司ヲ置ルル事、本邦ノ國史ニ見エタリ

西宮記云、大臣奉レ勅仰ニ博士一令レ勘ニ進錢文一奏定訖、擇ニ吉日一召ニ能書者於ニ陣頭一令レ書ニ其文字一奏聞給ニ作物所一彫定訖、副官符下ニ給鑄錢司一了云々

又漢土ヘ渡リシコトナド、三才圖會・泉志ニモ出デテ、異國ニモ劣ラズ、泉志云、日本國錢四品、並徑寸重五銖、其文隸書、一曰和銅開珍、二曰神功開珍、（珍疑寶字）三曰萬年通寶、四曰隆平通寶、其國延暦中鑄云々

吳寧野小窓別記云、日本國・和銅錢・神功錢・萬年錢・隆平錢・乾文錢（文疑元誤）又國朝會要、太平興國九年、日本國僧奝然等、浮レ海而至、云其國用銅錢、文曰乾元大寶

賛寧傳載云、倭國在ニ東海中一正朔一同ニ中夏一年號天慶・天暦、其國用錢文、曰延喜通寶

右ノ通リ異國ノ書ニモ載セテ、後世ニ是レハ何レノ世、彼レハ何レノ代ト、人ノ評スルモノニテ、擇バズンバアル可カラズ、金銀位惡シクスレバ民服セズ、兎角位ノ惡シキハ、僞作ノ罪人モ自カラ出デ來、依レ之民マタ疑惑シテ服セズ、元祿ニ吹キ替有リテサヘ市中カマビスシ、マシテ寶永ノ四品ノ銀ナド、後世ニ及ンデ人口ニ殘ル、本書ノ如ク錢ナド性ニ拘ハラズ妄リニ鑄ルベカラズ、既ニ元文年中、攝州加島村ニテ鑄ル錢、又武州押上ゲ村、近年城州伏見等ニテ鑄ル錢ハ、皆銑ニテ破レ費ルコト夥シ、

寛文年中ニ鑄シ文錢、今ニ存シテ其貴ブ事世ノ人知ル所ナリ、又本文ニ錢ノ員數少クナレバ、錢ノ位貴クナル故、金銀モ夫ニ連レテ貴シト云人ハ、利口ノ佞人也ト云、此義如何、既ニ安永年中ニ錢ヲ夥シク鑄、又四文錢出デ、世ニ錢多ク相成ルニヨリ、次第ニ今ノ如ク相庭下直ニ成ルウヘ、安永年ハ金モ又下直ナリ、全ク錢ニテモ金ニテモ、世ノ貨ノ增ニハ相違無レ之、兩方共下直ニ成ル道理也、尤明和年二朱銀出デ、金ト同樣ニ取扱フ故、其頃ハ金モアガラズト雖ドモ、錢ノ少ク直ヒ貴キ時ハ、下々ハ渡世仕安ク、夫ニ付テモ金ノ直上ルコト必セリ、金銀上レバ諸色ハ下ル道理ナリ、元來金ハ通用便利ノモノニシテ、士民年中公私ノ用ヲ辨ジ、餘分ハ軍用始メ、水旱其外不時ノ備ヘ、子孫相續ノ基等、都テ貯置ハ言フモサラナリ、旅中往來ノ支度、遠路ノ取遣(ヤリ)等迄、嵩高ニ無レ之、三貨ノ内至テ便利ナルモノ故、其時ニ應ジ世ニ拂底ナルコトモアリ、又諸家拂金アレバ、澤山ナルコトモ有リテ、相庭ノ高下定メ難シ、併シ大抵知レタルコトニテ、一兩ニ十匁ト高下スルコトモナシ、都テ相庭ノコトハ自然ノ理ニシテ、人才ノ及ブ所ニアラズ、梁武帝ノ時、普通年中、銅錢ヲ罷テ鐵錢ヲ鑄サシム、此錢ノ性惡ク、民賤ムノミナラズ、私ニ鑄ル者多ク出來リテ、世間ニ山ノ如ク錢滿々ケレバ、民彌賤ム、依レ之物價貴ク交易スル每ニ、車ヲ以テ錢ヲ載テ往來スト、隋書食貨志ニ出タリ、兎角性惡キハ僞作モ出來、性惡ケレバ錢ノ數モ鑄ヤスシ、依レ之數增スノミナラズ、民又是ヲ賤シム、仍テ物ノ價貴ク、錢ハ下直ニ相成リ、自ラ困究ナルベシ、愚考ノ及ブ處ニアラザレバ、其是非ヲ不レ知、或書ニ云、李之彥曰、錢

ノ字ノ傍ヲミルニ、上ニ戈字ヲ付ケ、下ニ亦戈字ヲ付クル、誠ニ人ヲ殺スノ物ニシテ人曉ラズ、然カシテマタ兩戈貨ヲ爭フ、豈賤シキモノニアラズヤト云ヘリ、又タ昔程子、雍華ノ間ニ關西ノ學者ヲ伴ヒ遊バレシニ、或ル日千錢ヲ失セリ、僕者云ク、晨裝ニ遺セルニハアラズ、水ヲ渉ル時墜セルナラン、程子曰、惜哉、或ル人曰、誠ニ可レ惜ト、又一人曰ク、微ナル哉、千錢何ゾ惜ムニ足ラン、又一人曰ハク、水中ト嚢中ト、人失フト人得ルト以ッテ均シ、何ゾ惜ムト歎ゼン、程子曰、人實ニ之ヲ得バ失フニ非ラズ、今水中ニ落スハ用ナシ、此レヲ以テ歎ズト謂ハレキ、本邦ニテモ北條時頼ノ臣青砥左衛門藤綱夜ニ入ッテ出仕セラレケルニ、燧袋ヘ入テ持チタル錢十文ヲ滑川ヘ落サレケルガ、錢五十文ヲ出シテ松明ヲ買テ尋出ダサシム、諸人是レヲ見テ小利大損哉ト笑ヒケレバ、藤綱額ヲ感メ、サレバコソ御邊達ハ世ノ費エヲ不レ知、民ヲ惠ムコヽロモナシ、錢十文ヲ只今求メズバ、永ク滑川ノ底ニ沈ミ失ヌベシ、某ガ松明ヲ買ヒタル五十文ハ、商人ノ家ニ殘リテ、二ツナガラ永ク不レ可レ失ト云ヘリ、今民間ニ六道錢ト名付ケテ、錢六文ヲ葬ノ棺ニ入ルルコトアリ、マタ富士・淺間・湯殿山等ヘ登ルニ、錢ヲ穴中ヘ入ルト云フ、右ノ類僅ナレドモ、海內ニ棄ルコト大ナリ、誠ニ愚ノ甚ダシキニシテ勿體ナキ事ナリ、異國ニモ葬ノ錢ヲ埋ミ、神ヲ祭ルニ錢ヲ焚キ、水神ヲ祭ルニ錢ヲ水ニ沈ムル類ノコトアレドモ、後世ハ錢ノ形ニ紙ヲ刻ミテ、是ヲ其ノ代リニスト云、先年此ノ義ヲ停止セラレ、今民間ニモ多ク紙ヲ用ユル處アルトゾ、有難キ事ナリ

三貨圖彙卷之七 金之部

草間直方輯錄

本草綱目曰、石者氣之核、土之骨也、大則爲岩巖、小則爲砂塵、其精爲金爲玉、說文云、五金之內、黃金爲之長（五金金銀銅鐵錫以配五行也）久埋不生衣、百練不輕、從革不違、生於土、地鏡圖云、黃金之氣、赤夜有火光及白鼠（太平廣記四百四十ニモ、白鼠ノコト有、畧之）

天工開物云、朱子曰、人有十等、自王公至于輿臺缺一焉、而人紀不立矣、大地生五金、以利用天下與後世其義亦猶是也、貴者千里而一生、促亦五六百里而生、賤者舟車稍難之、國其土必廣生焉、黃金美者其價去黑鐵一萬六千倍、然使釜鬵斤斧不呈效于日用之間、即得黃金直高而無民耳、貿遷有無貨居、周宮之泉府萬物司命繫焉、其分別美惡、而指點重輕、熟開其先、而使相須于不朽焉、又云、凡黃金爲五金之長、鎔化成形之後、住世永無變更、白銀入洪爐、雖無折耗、但火候足時、鼓鞴而金花閃爍、一現即沒、再鼓則沈而不現、惟黃金則竭力鼓鞴、一扇一花愈烈愈現、其質所以貴也

又云、凡金性又柔可屈折如枝柳、其高下色分、七青・八黃・九紫・十赤、登試金石上立見分明云、」

孟子ニ兼金ノコト出デタリ、古註云、「兼金好金也、其價倍ニ於常一者、故謂ニ之兼金一也

漢書食貨志曰、黄金一斤、直錢數萬師、古云、諸賜言黄金皆與レ之、金不レ言レ黄者、一金與ニ萬錢一也

書經禹貢曰、荊州貢、惟三品」トアリ

左傳云、古禹之世、貢金九枚」トアリ 宣公三年

管子云、玉起ニ禹代一金起ニ於江漢、珠起ニ於赤野一」ト云

爾雅曰、黄金謂ニ之璗一其美者謂ニ之鏐、即紫磨金也、」右餘金之事、漢土歷代ノ史ニ出タリ、今略レ之、金ノ色黄・青・紫・赤數品アリ、其餘金ト稱スルモノ、水銀金・丹砂金・雄黄金・疏黄金ナド、凡十五種、皆制シテ成ル故、眞ノ金ニアラズ、附石ニ摺付テ、硫黄ヲ以テ燒レ之ニ、眞ナルモノハ色不レ變、餘ハ色變ズ

本邦太古神ノ代、寶トスル所ハ、三種寶・十種寶等アリ、所謂

八咫鏡・瀛都鏡・邊都鏡・八握劒・草薙劒・八坂瓊曲玉・生玉・死反玉・足玉・道反玉・曲物比禮

右鏡・劒・玉等ヲ以テ寶トシ、金銀ヲ以テ寶トセシヿ聞エズ、神代卷ニ、素盞烏尊帥ニ其子五十猛神一降ニ到於新羅國一、居ニ曾尸茂梨之處一」ト見エタレバ、其頃ヨリモ韓國ヘ往來アリテ、彼ノ地ニ金銀ノ財寶有ト聞傳ヘ給フニヤ、又云、「韓鄉之島、是有ニ金銀一、若使ニ吾兒所御之國一、不レ有ニ浮寶一者未是佳也云々、」然レ

ハ新羅ノ國ヲ望ムコトモ久シキコト也、遙後、仲哀天皇ノ八年九月、熊襲ヲ討ントト議シ玉フ時ニ、住吉ノ三神皇后ニ託シテ、愈ニ兹國一而有ニ寶國一、譬如ニ美女之睩一有ニ向津國一、眼炎之金銀彩色多在ニ其國一、是謂ニ栲衾新羅國一焉、」神功皇后ノ九年ニ欲レ求ニ財寶國一、同十月、船師ヲ發シ、新羅ヲ攻伐、終ニ降テ自服ス、依レ之「入ニ其國中一、封ニ重寶府庫一、新羅爲レ質、仍賚ニ金銀彩色及綾羅縑絹一、載ニ千八十艘船一令レ從ニ官軍一」トアリ、金銀ハ和漢トモニ貴ク重シ、財ノ最上ニシテ、本邦ニモアレドモ採ルコトヲ不レ知、神武天皇ヨリ千四百十年ヲ歷テ、天平二十一年、陸奧國ヨリ始メテ黃金出ル、今國史ヲ參考シテ記スコト、左ノ如シ

續日本紀曰、文武天皇二年十二月辛卯(五)、令ニ對馬治ニ金鑛一

又曰、大寶元年三月戊子(十五)、遣ニ追大肆凡海宿禰麁鎌于陸奧一冶レ金、甲子對馬島貢レ金、建レ元爲ニ大寶元年一、事ハ銀ノ部ニ出ス、仍テ畧ス

又曰、聖武天皇、天平二十一年二月丁巳、陸奧始貢ニ黃金一、於レ是奉レ幣以告ニ畿內七道諸社一

百練抄、寛治四年五月二日下云、諸卿定申、宇佐大宮司公則犯ニ用黃金一件、可レ爲ニ御體一哉否之事件、黃金聖武天皇所ニ獻納一也

續日本紀曰、天平感寶元年四月乙卯(廿二)、陸奧守從三位百濟王敬福、貢ニ黃金九百兩一、五月庚寅、陸奧國者免ニ三年調庸一、小田郡者永免、其年限者待ニ後勅一、閏五月甲辰、陸奧國介從五位下佐伯宿禰全成、鎮守判官

從五位下大野朝臣横刀、並授ニ從五位上、大掾正六位上餘足人、獲レ金人上總國人丈部大麿、並從五位下、冶レ金人左京人戸淨山、大初位上、出レ金山神主小田郡日下部深淵、外少初位下ニ

又曰、天平勝寶四年二月丙寅、陸奥國調庸者、多賀以北、諸郡令レ輸ニ黄金一、其法正丁四人一兩、以南諸郡依レ舊輸レ布

又天平二十一年四月甲午朔、天皇幸ニ東大寺一、御ニ盧舍那佛像前殿一、北面對レ像、皇后・太子並侍焉、群臣百寮及士庶分頭行ニ列殿後一、勅遣ニ左大臣橘宿禰諸兄一白レ佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命、盧舍那佛能太前仁奏賜部止奏久、此大倭國者天地開闢以來爾黄金波人國用理献言波有登毛、斯地者無物止念部流仁、聞看食國中能東方陸奥守從五位上百濟王敬福加部內、少田郡爾黄金有奏氏献、此遠聞食驚伎悅備貴備念久波、盧舍那佛乃慈賜比福波倍賜物爾有止念聞受賜畏、恐理載持、百官乃人等率天禮拜仕奉事遠、掛畏三寶乃太前爾、恐美恐美奏賜波久止奏下畧

右百濟王敬福ハ百濟國義慈王ノ子孫ナリ、天平神護二年丙午六月卒、清貧ニシテ無ニ餘財一、性了弁ニシテ、又有ニ政事之量一、聖武皇帝造ニ盧舍那ノ銅像ヲ玉ヒシニ、塗金不レ足、此時陸奥國馳驛小田ノ郡ヨリ出黄金九百兩ヲ取ヨセ貢レ之、是常ニ政務ニ心ヲ用ユル故、我國始テ黄金ヲ出セリ、其功又大也、天皇甚嘉尚シ玉ヒ、從三位ヲ授ケ、宮內卿ニ遷リ、河內・常陸・出雲・讃岐・伊豫ノ守等ヲ歷テ、神護ノ初、任ニ刑部卿一、年六十九

萬葉集云、天平感寳元年五月十二日、於₂越中國守舘₁、大伴宿禰家持、賀₂陸奥國出金₁詔書歌、一首幷

短歌

葦原能、美豆保國乎、安麻久太利、之良之賣之家流、須賣呂伎能、神乃美許等能、御代可佐稱、天乃日嗣等、之良志久流、伎美能御代御代、之伎麻世流、四方國波、山河乎、比呂美安都美等、多弖麻豆流、御調寳波、可蘇倍受、都久之毛可稱都、之加禮騰母、吾大王能、毛呂比登乎、伊射奈比多麻比、善事乎、波自米多麻比弖、久我稱可毛、多能之氣久安良牟登、於母保之弖、之多奈夜麻須爾、鷄鳴、東國能、美知能久乃、小田在 山爾、金有等、麻宇之多麻敝禮、御心乎、安吉良米多麻比、天地乃、神安比宇豆奈比、皇御祖乃、御靈多須氣弖遠代爾、可々里之許登乎、朕御世爾、安良波之弖安禮婆、御食國波、左可延牟物等、可牟奈我良、於毛保之賣之弖、云々

丈夫能、許々呂於毛保由、於保伎能能、美許登佐吉乎 一云、能 聞者多布刀美

大伴能、等保追可牟於夜能、於久都奇波、之流久之米多弖、比等能之流倍久

須賣呂伎能、御代佐可延牟等、阿頭麻奈流、美知能久夜麻爾、金花佐久

金花山ハ、奥州石ノ巻ヨリ辰巳ニアタリテ、海上十六里ト云フ、山ノカタチ寳珠ノゴトク、蓬莱山トモ稱スベキ山ナリト、山ノマハリ三十六里、谷ノ數十八、マタ洞穴アリ、數三百八十四穴、是レハ往古黄金石ヲ穿チシ穴ト見エテ、此ノ穴ヘ入レバ黄金石ヲ拾ヒ得ルト云ヘリ、然カレドモ權現取ルコト

ヲヲシミ玉ノトテ、穴ニ入ルコトヲ禁ズト云ヘリ、右洞穴數々ノ内ニ、往古天然ト開ケシ竅アラン、其ノ洞ノ中ニ石鐘乳ノゴトク、金ノ津氣鍾聚リテ、黄牙ノゴトクナル砂金アリテ、天平年貢(ミツ)ギシヤ、マタ冶煉ノ黄金ナルヤ不レ知、獲レ金・冶レ金トアレバ、沙金マタ練金ナルベシ、冶金ノコトハ委シク不レ知

金銀圖錄ニ云ハク、觀跡聞老志ヲ按ズルニ、陸奥ノ砂金ハモト小田郡陸奥山ニ出ヅ、山ハ式ニ載スル所ノ黄金山神社也、後世其ノ地ヲ牝鹿郡ニ併セ、其山ヲ金華山ト改ム、古ヲ失フト云フベシ、宋史日本傳ニ、「東奥州產ニ黄金一、西別島出ニ白銀一」トアレバ、異朝ヘ聞エシモ舊シキコトナリト、云々

宇治拾遺ニモ、佐渡ノ國ニ黄金ノ花サキタル所ハアリシト云フ、又七條ノ薄打、御嶽マウデシテ、金崩レヲ行テミレバ、マコトノ金ノヤウニテ有リケリ、件ノ金ヲトリテ家ニカヘリミレバ、キラヽニシテ誠ノ金ナリ、ハカリニテカケテミレバ、十八兩ゾ有、下略トアリテ、砂金ナルヤ、天然ノ黄金ト見ユ、砂金ノ本邦ニ出ル始メハ不レ知、天平勝寶二年、駿河國主獻ニ砂金一由續紀ニアリ、砂金ト云フコト茲ニ始メテミユ、其ノ以前ヨリモ有リシナルベシ、寶龜七年ニ在唐藤原淸河ニ、砂金大百兩賜フコト見エタリ、其ノ頃黄金トアルモ、砂金ナルベキヤ不レ可レ知

冶煉ノコトハ、天武帝二年、始メテ對馬ヨリ銀出ル、此時既ニ其ノ術アリシナルベシ、尤太古ノ時ヨリ冶煉ノコトハアリ、神代卷ニ、「以ニ石凝姥(イシコリドイ)一爲(シ)ニ冶工(タクミト)一、採ニ天香山金(アマノカグヤマノカネ)一以作(テ)ニ日矛(チ)一、又全(ウツ)ニ剝眞名鹿之皮(ハギマナカノカハ)一

以作二天羽鞴一、用レ此奉レ造」トアリ、眞名鹿ハ鹿ニシテ、此皮ヲ以テ吹皮トシ日矛ヲ鑄ル、羽鞴ハ羽吹キニテ、其扇風鳥ノ羽翼ニ相似ルヲ以テ云ナリ、今鍛師ノ橐籥ト云フモ則吹皮ナリ、右ノ外鏡作部遠祖天糠戸ニ鏡ヲ造ラシムトモ見エタリ、冶煉ノ術ナクテ、金銀銅鑛ハ鎔化成シガタシ、金花山ハ奥州ノ内ニテモ海上ヘハナレ、今ノ如ク防舍營ミテ人ノ住ムベキ所ニモ有ルマジ、誠ニ神仙ノ住所ニシテ、稀ニ渡海セシ人初メテミツケシナルベシ、其ノ比ハ黄牙・砂金ノ類ナルベシ、次第ニ冶煉ノ制クハシクナリテ、後ハ鑛石ヲ穿チ取制セシナラン、尤文武帝大寶元年、陸奥冶金トアリテ、又天平感寶元年閏五月、金ヲ獲人・金ヲ冶ム人ナドアレバ、其ノ頃冶煉ノ術アリシト見エタリ、然レドモ右大寶元年ヨリ天平廿一年迄五十ケ年ノ間、國主ヨリ貢グ事ナク、大佛造營ノ時ニ當テ貢レ之歟、依テ此ノ時ヲ本邦金ノ出ヅル始トス

閏中抄ニ、天平勝寶四年壬辰三月十四日、始テ金泥ヲ大佛ニ奉ル、去ル天平廿年ニ、金ヲ始テ奥州ヨリ獻ルニ依テ也、是レ日本ニテ砂金ノ始メ也云々、東鑑ニモ、始テ奉二泥金於大佛一、是吾朝砂金ノ出ル始ト云々 如是院年代記、天平十六七年ニモ出ヅ、又帝王編年紀、天平十七年八月廿三日下云、依二砂金難一レ得、爲レ買レ金欲レ遣二唐使一之處、宇佐宮御託宣云、此土可レ出、次令レ祈二申金峯山一給、藏王大菩薩示曰、此山金彌勒出世可レ用レ金也、我身只守護計也、近江國志賀郡河邊漁翁在二石上一、其石上造二居如意觀音像一、可二祈申給一云々、天皇遣二良辨僧正一、造レ像祈禱時、奥州献二黄金五百兩一、彼像石山觀音也云々、」右天平年始テ貢シハ砂金ナルヤ

不知、朝野群載ニ、南都大佛ノ記アリ、（事ハ錢ノ部ニ出ス）此大佛ノ像ヲ鑄ラレシ時、熟銅七十三萬九千五百六十斤、練金一萬四千卅六兩トアリ、（但帝王編年記ニ、連金トアルハ、練ノ字ノ假借ナリ）、東大寺大佛記ニハ、練金二萬四百四十六兩トアリ、此練金ノ事不詳、冶錬セシ黄金ニヤ、是迄本邦ニ黄金ナシ、コノ時前文ノ通奥州ヨリ始メテ黄金ヲ貢ギ、天皇殊ニ嘉賞シ玉フ趣前ニ見エタリ、右練金ト云フハ、甚ダ大數ニシテ鍛練ノ黄金ト思ハレズ、甚不審也、大佛鑄始ラレシハ、天平十五年、近江紫香樂地ニテ鑄始メ、其ノ後十九年、今ノ大和國奈良ヘ移シテ又被鑄、天平廿一年迄、已上三ケ度ニテ成就セシ趣、朝野群載ニ見エタリ、天平廿一年四月ニ、奥州ヨリ又黄金九百兩ヲ貢グ、依テ元ヲ改メ天平感寶元年トス、其ノ七月ニ、又天平勝寶元年ト改ム、既ニ其ノ時大佛ノ像ハ成就セシ由前ニ見エタリ、然レバ黄金ノ始メテ出タルハ、右ノ像成就シテ後ノコトナレバ、前ニ錬金トアルハ、眞ノ黄金ニテハ是ナキヤ、併シ大寶元年陸奥冶金ト、天平年ヨリ前ニ見エレバ、練金ハ黄金ナランカ、尤天平二十一年、右大佛ノ告文ノ前、「二月、自陸奥始貢黄金」トアリテ、其員數ナシ、大佛鑄用練金、凡一萬四百餘兩、其時貢シヤ、然レドモ其四月ノ告文ニ、「御盧舍那佛像前殿、北面對像」トアレバ、早ク像ハ成就セシ趣ナリ、二月ニ金ヲ貢テ、四月迄漸ク三四十日ノ間ニ、大佛皆成就スベキ樣ナシ、練金ノ事疑アリト雖モ、ヤハリ鍛練ノ黄金ナルベキカ知ラズ

大安寺伽藍緣起資財帳ニ、合金伍佰貳拾壹兩壹分

練金四百五拾兩、佛物四百廿五兩、菩薩物十兩、僧物二分、通物十四兩二分
生金九兩二分、佛物七兩、菩薩物一兩、温室物一兩、僧物二分
沙金幷消金六十一兩三分、佛物砂金卅八兩一分、通物砂金六兩三分、通物消金十六兩三分

右ハ平城宮御宇天皇以㆓養老六年歳次壬戌十二月七日㆒、納賜者」トアリ、是ハ「陸奥始貢㆓黄金㆒」ト云、天平二十一年ヨリ二十七年以前ナリ、然レバ前ニ云フ如ク、「文武帝大寶元年、陸奥冶㆑金」トアルハ、冶煉ノ金ニテ、則右資財帳ニ云練金ナルベシ、生金ト云ハ天然ノ黄牙ニテ、本草ニ云「大者如㆑指、小者猶㆓麻豆㆒、色如㆓桑黄㆒也」トアル眞金ナルベシ、沙金又天然ノモノナリ、消金ト云ハ塗金ニテ、金箔滅金ナドノ所ヘ用フル金ニテ、スリオロセシ鎕金ナリ、前ニ云フ奥州百濟王敬福ノ貢シハ、右ニ云銷金九百兩ニテ、則大佛ノ像莊嚴ニ用ヒラル、今ノ金箔ノ類ニテ、大佛像成就ハシタレドモ、塗金不足ノ趣ハ、續日本紀、天平寶字二年八月戊申ノ勅ニ見エタリ、既ニシテ「鎔銅已成、塗金不足、天感㆓至心㆒也、信終出㆓勝寶之金㆒」トアリ、其後神護二年六月、敬福卒去ノ條ニモ見エテ、天平二十一年二月ト四月、但同年四月ニ改元有テ、天平感寶元年ト云、兩度貢シハ皆製セシ銷金ナルベシ、依㆑之閏中抄・東鑑・玉海等ニ、砂金・泥金トシルサレタルナルベシ、金箔製ノ事ハ國史ニ見エズ、延喜式ニ下野ノ練金ト有ハ、全ク冶練ノ金ナラン、同所ヨリ金ノ出ヅル事、國史ニ見アタラズ、下野ハ奥州ニ隣リシ國故、奥州ヨリ出ル所ノ生金ヲ、下野ニテ精錬シ貢シヤ、又日光山・日根山等ノ名高キ山モ、ケ所アル國ナレバ、其ノ邊ヨリモ出ケル歟未

レ考

續日本紀曰、天平勝寶二年三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於ニ部内廬原郡多胡浦ニ獲ニ黄金獻レ之、（練金一分 砂金一分）於レ是東人等賜ニ勤臣姓ニ

文德實錄曰、仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮内卿相模守滋野朝臣貞主卒、貞主右京人也、曾父、大學頭兼博士從五位下楢原造東人、能通ニ九經ニ號爲ニ名儒ニ天平勝寶元年、爲ニ駿河國守ニ于レ時出ニ黄金ニ東人採而獻レ之、帝美ニ其功ニ曰、勤哉臣也、遂取ニ勤臣義ニ賜ニ姓伊蘇志臣ニ

右砂金オホクハ海川江砂ニマジリ生ズル天然ノモノナリ、東人等獲シ黄金ハミナ砂金ナラン、是レヲ得テ半ハ治錬シ、半ハ其ノ生ノ儘獻リシナラン、此ノ一分ト云フハ、拾芥抄ニ云、量目二匁五分ヅツニテ、都合半兩ナルベシ、雜令ニ、三兩ヲ爲ニ大兩ニトキハ、大兩ノ一兩ハ三十目ナルベシ、半兩ハ十五匁ナルベシ、何ヅレニシテモ微數ナリ、然ルニ其ノ功ヲ褒美シテ、天平勝寶二年十二月ニハ、東人ニ從五位上、无位淨足ニ從六位下、其ノ餘絁綿正税二千束ヲ賜フ、出金郡ハ免ニ今年田租ニ郡司主帳ノ官人ニ位ヲ賜フコトアリ、餘リ大造ナル褒賞故、甚疑ヒアリ、右錬金砂金一分ト云ハ、史ノ誤ルコトアランカ、是ヨリ後國史ニ駿河ヨリ貢金事不レ見、猶後ノ考ヲ俟ツ

治金ノコトハ大寶元年ニ始マリ、貢金ハ天平廿一年、陸奥ノ貢ヲ始メトス、其ノ後下野ヨリモ砂金・錬金出デ、共ニ並ビ行ハル、其ノ餘對馬初メ諸國ヨリモ出デケルカ、國史ニ不レ見、今多分佐渡國ヨリ

出ルコト夥シ、何レノ年ヨリ出初ケルカ不レ知、寶貨事略ニ云、佐渡國ヨリ黄金出ル由ハ、宇治大納言物語ニモ見エタリ、然レドモ之レヲ採スベヲ不レ知ナリ、上杉入道謙信、彼國ヲ攻取、其金ヲ採リテ國用ヲ足ス、太閤秀吉兼ネテ知レ之、謙信ノ子景勝ノ時、奥州ニ移シ佐渡ヲ押取、金ヲトラレシカドモ金出デズ、慶長以後、神祖ノ代ニナリテヨリ、金銀出ルコト夥シ、幷ニ石見・伊豆、及ビ奥州ヨリ追々出ル、昔ヨリ遂ニ聞カザル所、萬國ニスグレテ財用豐ナリ、偏ニ神祖ノ御恩德、仰ギ奉ルベキ者ナリト云々

駿府政事略ニ、慶長十七年壬子四月八日、羽柴肥前守、以二使者一獻二白銀一萬兩一、彼領內ニ產スル所ノ銀也

同十九甲寅年二月十九日、佐竹左京大夫義宣、獻二南鐐銀二百貫目・砂金千兩一、是領國ニ出ル所也

同年四月、間宮新左衞門・田邊十郎左衞門、佐渡ヨリ參府、白銀千貫目貢レ之

同年五月廿四日、南光坊出仕、下野國日光山麓、日頃銅出日頃銀出ノ由、留主僧申二越之一

創業記ニ、慶長十一年丙午正月伊豆國金山ニ銀多シト、大方佐渡ノ國ヨリ出ル程モ可レ有レ之ト也、此ノ以前代官彥阪小刑部ナリシヲ、向後大久保石見守可レ爲二大官一ト也、他ノ山ニ勝レテ多ク金銀交リ出ルト、慶長十四年十月、本田上野介披露ヲ以テ、大久保石見始メテ御言葉ヲ掛ケラル、又相模土井山ニ金出ケルトテ、石見ヲ被レ遣

往古ハ今ノ如ク金銀自由ナラズ、金銀ヲ以テ形ヲ鑄、通用スルコトナシ、唯金銀銅ノ錢ヲ以テ、交易ヲ定ム、（此事錢ノ部ニ記ス）天平年中、初テ金出デテヨリ、往々是ヲ用ユ、然レドモ形ノコトハ不レ知、吹オロシノ金鋌ヲ其程々ノ兩目ニ從ヒ、權衡ニカケテ通用セルカ、國史ニハ黃金・砂金並ビ行ハル、續日本紀ニ、承和三年九月己巳金銀長上工正六位上丹波直廣主年老還レ鄕、勅給二正稅穀五十碩一ノコト出デタリ、是レハ諸品ノ莊嚴、錺ニ用ユル金銀ノ制作者ニテ、今ノ飾師ナラン歟、又金銀座ノ役人ノ如ク、都テノ金銀鋌ヲ其ノ入用ノ量目ヲハカリ、制スル職ナルヤ不レ知、金銀長上工ノ官人ハ、茲ニ始テ見ユ、其餘無レ所レ見、砂金ハ其ノ量目秤ニテ掛ケ分ルコト自由ナレドモ、黃金トアルハ練金ニテ、其入用程々ヲ推シ量リ、切ッテ用ヒシナルベシ、然レバ金錢長上工職ニテ、其ノ金銀ハ制セシニヤ不レ可レ知、砂金・練金又下野ヨリ出ヅルコトハ、延喜式民部交易雜物ノ所ニ、下野國砂金百五十兩・練金八十四兩トアリ、鎌倉ノ時、奧州秀衡入道ヨリ貢金ノコト、東鑑・玉海ニモ見エタリ、足利殿ノ世トナリテ、諸國ヨリ贈金ノコト不レ聞、次第ニ砂金・黃金拂底ナリシヤ、多クハ錢ヲ以ッテス、奧州ハ元來貢金ノ土地ナレドモ、寬政年伊達成宗上洛ノ時モ、三萬疋ヲ贈進ス、其ノ餘ハ猶ホ以テ皆錢何萬疋・何千疋ト云フニナリタリ、然レドモ將軍家ノ御元服、或ヒハ任官祿物マタハ法會ノ布施等ニ、砂金黃金用ヒラルコトアレドモ、拂底ナレバ砂金ヲ代何千疋トシテ、錢ニテ出サルヽヤウニ成リタリ、砂金一兩ト云フモ量目十匁ニテハ無レ之、京目・田舍目トアルゴトク、一兩量目四匁五分・五匁ト云フ、兩

目ニテ（但シ量目ノコトハ附錄ニ出ダス）タトヘバ文明五年、元服ノ祿物砂金拾兩、但代二千疋被レ出レ之トアリ、此ノ十兩ハ（往古ハ）量目百目ナレドモ、此ノ時ハ五十目トシテ、此ノ五十目代錢ニテ二十貫文、然レバ砂金一匁ノ代錢四百文ニアタル、右砂金十兩ト云フハ、目錄ヲ以ツテ披露シ、其ノ代ヲ錢ニテ渡サル、ナラン、是ノ砂金・黃金無レ數故ヲ以テナリ、然レドモ又其ノ時ノ諸書ニ、黃金・砂金トアリテ代錢無レ之モアリ、是レ等ハ代數ノコトハ通例ニナリテ、代ヲ略セル成ルベシ（倚附錄ノ部三十一卷ニ記、依略レ之）右砂金一匁代錢四百文ハ甚ダ錢貴シ、是レハ錢ノ部ニ云フ如ク、既ニ文明七年・同十五年ニハ明朝憲宗ヘ請ヒテ、錢ヲ求ラル、程ノ衰微ナリ、依テ錢貴キ事推シテ知ルベシ、砂金ノコトハ奧ニ記ス

本草藏器曰、常見人取レ金掘レ地深丈餘、至レ紛ニ子石一、石皆一頭黑焦、石下有レ金、大者如レ指、小者猶ニ麻豆一、色如ニ桑黃一也、咬時極軟、卽是眞金」トアリ、金銀ノ萠生氷柱ノ如ク垂レ下ルモアリ、是レヲ鉡ト云ヒ、黃芽トモ云フ、鑛石ノ冶錬スルコトハ、大寶年中ニ始ルト云ヘリ、都テ諸國金山ヨリ出ル生金ハ、石中ニ交リ有ルヲ打碎キ粉砂トナシ、水ニテ淘リ分ケ、鉛ヲ加ヘ橐籥ニテ吹キヨセ、又夫ヨリ鉛ヲ吹キ拔キ、幾度モ燒キ返ス程金ノ位ヨクナレドモ、其ノ度々目方減ズ、位四十四ヨリ二百五迄有レ之、其ノ局官ノ秘スルコトニテ、位ノ見ヤウ治煉ノコトハ不レ知、其ノ人ニ可レ尋、マタ銅ヲ再煉シテ金ヲ取ルコトハ、其始末レ知、是レモ吹キ拔ク程宜シト云ヘリ、今其ノ制煉ノ委シキハ神祖ノ御時ヨリ起ルト云フ、或ル書云、東照宮ノ御時天下ノ金銀不足ニテ、末々ノ難儀ニ及ブベクト被ニ思召一候、御

身ノ爲ニテハ聊無之、唯諸人ノ難ヲ思召ス由ニテ、殊ノ外御憂被遊候、或ル時御近習ノ内慇ニ、狂言師ヲ呼ビ寄セ致サセ見被申候、其ノ時ノ咄ニ、日本ニ金銀掘廣氣ノ薄ナルコトノ由被申候ヘバ、狂言師ノ内一人申サレ候ハ、私ニ被仰付候ハヾ、自由ニ金子出來致サセヤウ有之候ヨシ被申候ニ付キ、子細ヲ尋ネラレ候ヘバ、中々各樣ナドノ被仰聞分ニテハ申ス事ニ無之、上ヘ樣ヘ被爲召、其上御側ノ人ヲ御拂被遊候ハヾ具サニ可申上旨申シ候ニ付キ、右ノ人其ノ趣ヲ被申上候ヘバ、其ノ者ヲ早々呼寄候ヘトノ上意ニテ罷出候處、彼ガ申スニ任セラレ、御側ノ人ヲ被拂直ニ御聞被成候ヘバ、去年佐渡ヘ罷越、金山ノ樣子見申ス處、掘ヤウ惡シク御座候段委細ニ申上候ニ付キ、則此ノ者ヲ奉行ニ被遣、御掘セ被成候ヘバ、金子段々ニ出來申シ候、其ノ後數十年ノ間、外國ヘモ毎年夥シク金子ヲ被遣候ヘドモ、於今絶不申事、此ノ者ノ功ニ有之候、尤モカヤウニ罷リ成リ候儀ハ、東照宮ノ下ヲ憂ヘサセラレ候御心ノ一筋ナル故、天道ノ感通仕ル所ニテ候ト云々、凡ソコレヨリ掘ヤウ、並ニ鍛錬ノ委キ樣ニナリタルカ

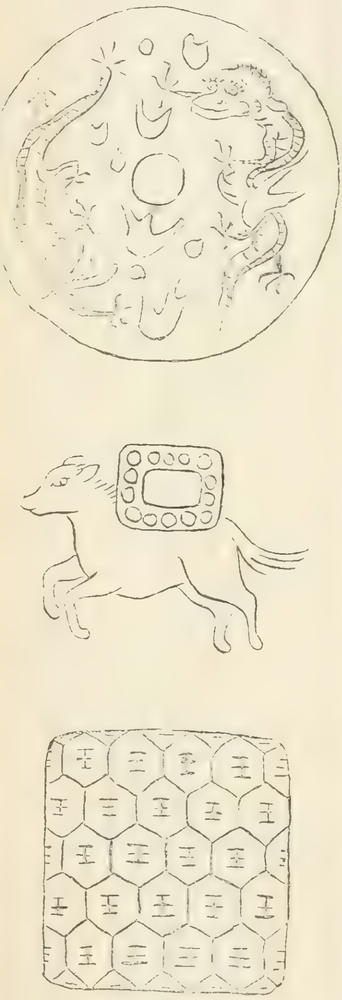
神君ノ厚德有難キコト推シテ可量、（右狂言師ハ大久保石見守事ナルベシ）

烈祖成績ニ云フ、慶長六年辛巳年十二月、頃年佐渡出白銀倍蓰、上杉景勝在越後時、石見出黄金亦倍蓰、毛利輝元管石見時、毎年二月、大久保長安至佐渡監銀坑、九月、至石見監金坑、運輸伏見、國用豐饒、（創業記・松葉記事・岩淵夜話並曰）

大久保石見守、甲州人、大藏大夫之子、今春座中樂也、長ニ於財利一、請ニ靑山藤藏一、請レ開ニ諸國金銀銅鑛一神祖試レ之、徵捷有ニ吏才一故擢爲ニ士流一使レ掌ニ其事一年每至ニ伊豆・佐渡一冶ニ金銀一國用大贍、補ニ石見守一賜ニ采邑于武州八王寺一龍山部屬數百人甚有ニ權勢一死後姦謀發覺、神祖戮ニ其子一ト云々

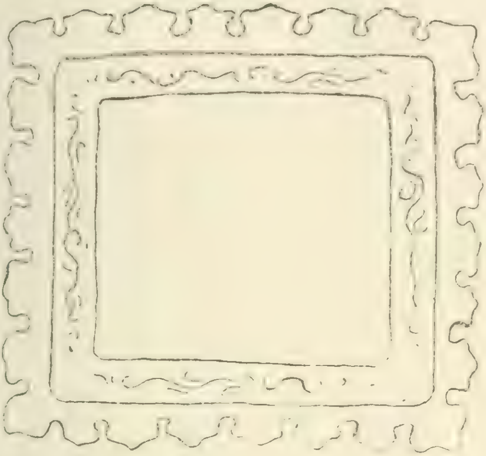
金ノ位、至テヨキヲ印子ト云コトハ、夢溪筆談ニ云、「壽州八公山側、土中及溪澗之間、往々得ニ小金一、餠上有ニ篆文一刻ニ主字一世傳淮南王藥金也、得レ之者至多、天下謂ニ之印子金一」ト續博物志ニ出タリ、今印子金ト稱シ、人ノ貴重セルモノハ、足赤金。安南金。西藏金ノ類ニシテ、寶暦年ヨリ明和年迄、長崎ヘ唐船持渡ノ金ニテ、皆灰吹ノ金ニテ、玆ニ云印子金トハ別ナリ、周禮ニ「祭ニ五帝一卽供ニ金板一」トアリ、漢書ニハ「黃金方寸而重一斤」トアリ、周以來、往々金銀ノ形制有ト雖モ委ク不レ知、漢武ノ世、白金

漢白金三品



三品ヲ鑄ル、コノ形制ノ圖、或家ノ傳寫ヲ得テ是ヲ記ス、圖書ニ曰、「造銀・錫・白金、如淳曰、雜二鑄銀錫一爲二白金一以
爲、天用莫レ如レ龍也、地用莫レ如レ馬、人用莫レ如レ龜、故白金三品、其一曰、重八兩、圜レ之其文龍、名二
白撰一、直三千二、曰以レ重差小、方レ之其文馬、直五百三、曰復小橢レ之其文龜、直三百」トアリ
右白金三品、漢武元狩四年、鑄レ銀爲レ之、以天用莫レ如レ龍、圜レ之以象レ天、其文龍、重八兩、用二三千一、
地用莫レ如レ馬、方レ之以象レ地、其文馬、差小重六兩、用二五百一、人用莫レ如レ王、橢音妥レ之以象レ人、其文
龜、重四兩、用二三百一　右七修類藁四十一

漢皮幣



右皮幣、漢武元狩四年、造以二白鹿皮一、爲レ之存レ毛方
尺、緣飾金文、繪以二五采一、凡朝覲聘享、必以二皮幣一、
薦璧得レ之而後行、用二四十萬一

是形制ノ幣ナリ、又同書ニ、朱提銀、重八兩、爲ニ一流ニ直一千五百八十トアルハ、今本邦ニテ見ル所ノ棹金ト云モノヽ如クナラン歟、漢ノ世ノ一兩ト云ハ、今ノ一匁八分六厘程ニ當ルト云、重八兩ト云ハ、凡十四匁八分八厘ナラン、然レバ今ノ丁銀ニ似ヨリタル小銀ナルベシ

本邦ノ制、神武天皇ヨリ反正天皇マデハ不レ詳ドモ、其レ以來無文ノ錢ヲ以テ通幣トセルカ、國史ニ錢ノコトヲ載スルハ、顯宗帝ノ朝ヲ始メトス、夫ヨリ已來、金錢銀錢ノコト往々アリテ、今ノ如ク金銀ノ幣ニ刻鑿シテ通用セルコトヲ不レ聞、國史ニ砂金・黄金・錬金ノコト何兩々々ト載セテ其ノ形ヲ不レ記、玉海、承安三年三月ノ條ニ云ハク、傅大納言道綱、後一條院幼稚ノ御時、參内申曰、金千兩、打ニ散于御覽一、尤有レ興事、早召ニ納殿一可レ被レ散云々、仍召ニ金千兩一、御覽更無レ興之由、于レ時道綱、實無レ興候、遣□□申□併懷中退出時人惡レ之云々、」續古事談ニモ此ノコト出デタリ、後一條院ヲサナクオハシマシケル時、傅大納言道綱參リテ御前ニ候フテ、金百兩ナゲチラシタルヤ御覽ジタル、イミジク興アルモノナリト申サレケレバ、イマダミズイカナルゾト被レ仰ケレバ、大納言マコトニオモシロキモノナリ、御覽ズベシトテ、ヲノコドモメシテ、ヲサメ殿ノ砂金百兩タテマツレトアリケレバ、藏人トリテ參タルヲヒキアケテ、御前ニナゲチラサレタルヲ御ランジテ、イヅレオモシロキト被レ仰ケレバ、大納言サラバステ候ヒナントテ、ヒキツヽミテフトコロニ入レテイデラレニケルトゾ、是レニテ見レバ右ノ千兩ハ砂金ナリ、又大鏡ニモ、學生共メシアツメテ、作文アソバセタマヒケルニ、金ヲ

二三十兩屏風ノカミヨリ投出シテ、人々ニウチクレタマヒケレバト云々、右金ノ類ヲ以テ見レバ、其ノ金モ形チアルヤウナレドモ、砂金又切金ナリ、何レ形制ノコトハ不レ知、今金銀切遣ヒノ殘挺ト云フヲ見ルニ、古代ノモノトモ見エズ、天正時代ノモノ也、往古ヨリ砂金ト、錬金兩種有リテ、錬金ハ冶煉セシ黃金ニテ、其ノ程々量目ヲハカリ、切リテ用ヒシナルベシ、天正年ノ切リ遣ヒ金ト云フモ同樣ナリ、尤モ砂金ハ茄程ノ如クナルモノニテ、取扱度ゴトニ散失シ、不便利ナルモノ故、天正年ニ至リテハ、砂金ヲ冶煉シ、延シ金ニシテ又是レヲ切リ遣ヒヤセショリ、砂金年々世々減ジ、天正年ハ皆切リ遣ヒノ延シ金ニ成リタリ、是レヨリ又大判金ニ轉ゼシナリ、此コトハ天正年信長時代ヨリ起レリ、享保年尾州清洲山王ノ社内土中ヨリ掘出ス切金六十枚（但大判ノ部ニ圖ヲ出ス）又或家藏ニ信長時代ノ切金アリ、長サ三寸四分、幅八分。量目四匁四分アリ、是レ等皆天正年時代ノ切金ナリ、又竹流金ト云フコトハ、中世棹金ト稱スルモノナリケル歟、其ノ形チ未レ見、慶長年ニ大阪城内ニテ多ク鑄ト云フ、何レノ年ニカ、大阪川筋天滿橋ノ下ニテ、川浚ノ土民板金數枚ヲ掘出セルト云フ、則チ大判ノ部ニ記ス、天明年中ニ、越後國椎谷領ヨリ掘出セル黃金ニ同ジキモノナリ、舊年大阪落城ノ節入水ノモノ懷中セシナラン、然レドモ竹流ト云ヒ、又棹金ト云ヒ傳フルヲ以テ見レバ、形チ長キモノト見エタリ、又掛目四十三匁トアルハ、格別大キナルモノトモ見エズ、極印ノ沙汰モナシ、其ノ節切テ遣ヒシヤ、今其殘金モ不レ見、又昆陽漫錄ニ、或ル老人ノ云ハク、古キ甲州金ニ、竹流金。鳥目金。六角極印小判アリ、竹流

金、長サ二寸七八分、横八歩ホド、厚サ中程ニテ三歩程、縁ニテ一歩程、長キハ幅セマク、短キハ幅ヒロシ、重サ四十目、十兩ト云ヒテ通用ス、形チ圖ノ如シ、中ノ極印ハ極ト云字、上下ノ極印ハ、見エ難シト云々



〔原本ニハ此間二枚ノ餘白アリ〕

慶長年中、大阪城内ニテ鑄シ、竹流金ト云モ如レ右ナルモノニヤ、後考ヲ俟ツ、甲州略記ニ、延シ金トアルハ、茲ニ云、切遺金ノ類、又竹流ノ類ナラン、武德編年集云、慶長十九年十月五日、京尹板倉伊賀守、驛次ノ飛檄、至ニ來於大阪城、故太閤ノ千枚分銅ト稱スル金ヲ以テ、掛目四十八匁宛ノ竹流判ト云フ物ヲ拵ラヘ、諸國亡命ノ徒、或ハ庚子ノ亂ニ落魄ノ士ヲ募リ求ルコト頻ナルヨシ注進ス

又十月上旬ヨリ、石田ニ與セシ亡命ノ徒ヲ、大阪城内ヨリ頻ニ求ム、其時太閤ノ收歛シ置レシ、千枚分銅ハ勿論、城中ノ金熨斗付ノ座席モ打放シ、小川七郎右衛門ヲ奉行トシテ、懸目四十三錢目宛ノ竹流金ヲ拵、是ヲ以畿内近國ノ浪人ヲ集ム由ト云々

或曰、浪人一騎ニ竹流金二枚ヲ授ケ、大名浪客ニハ屋敷ヲ渡、其下歷々ノ族ニハ、妻子ヲ市店ニ養シム、（但失ニ記ス、竹流金十丁、掛目一丁ニテ、四十三匁八分、是等本文ニ云フ、竹流金ナルベシ）

參河記ニ云、（元和八年卯月十一日、大久保彥左衛門聞書トテ、實錄ト見エレドモ、是非ハ不レ知、）慶長十九年とらのとし、秀賴諸國の浪人をかゝへ、ふんどうをくづして、竹を割りそれへいながして竹流しと名付け、浪人共に取くれて十萬餘ふちせられける、右竹流金樟金ノ痕跡不レ見、追テ可レ考

寬文十一亥年、大阪天神橋下川中ニテ

大佛判十六枚（目方一枚ニ付、四十四匁二分宛）

ながし金十枚、（目方四百四十目）

延し金二枚（目方大小ニテ、卅六匁七分）

右四月廿一日ト、廿二日、兩度土砂中ヨリ掘出ス、則奉行所ヘ納ム、東奉行石丸石見守殿ヨリ、兩替天王寺五兵衞・小橋屋淨德・鍵屋六兵衞三人被レ召、右改被ニ仰付一、其趣關東ヘ御達被レ成、則三人ノ者立會、判金壹枚ヅヽ、流シ金・延シ金トモ、夫々包立、金目幷年號月日、三人名前等相記シ、五月十六日御城內闕所藏ヘ相納メ、其後享保十一年午正月十二日、東奉行松平日向守殿ヨリ、掛屋被レ爲レ召、左ノ品々目利被ニ仰付一候

一　竹流金十丁　　位六十

掛目四百三十八匁（此代金五十六兩餘）

一　まがり金　　位五十八

掛目四匁五分（此代金二兩餘）

一　まがり金　　位六十四

掛目三十二匁（此代金三兩三歩餘）

凡代金合六拾一兩三歩餘、改御本カネ、四十四ヨリ二百五迄ノ位、右之通位•代金申上候、尤代ハ新金（正德）也、其節ハ亡父幼少ニテ不レ見レ之、竹流ハ竹ヲ破リテ金ヲ流シタルヤウ也、まがり金ハ延シ金ニテ、往古ノ切遣ヒ金ト云モノヽ由、聞傳而已也、其後江戸ヘ遣サレシト聞ケリ、金銀圖錄ニ云、一友嘗テ竹流金ノ斷片ヲ藏ス、竹ヲ剖テ金ヲ鎔シタルナリ、使用ノ時ハ切テ秤ニ掛テ用ヒシナリ、或云、織田氏ノ時ノ物也ト云、豐臣氏ノ時ノ記錄ニモ、竹流ノコト往々ミエタリ、靜菴隨筆ニ、大坂ノ竹流ハ、大方金五兩程宛有シトナリ、（直方云、前ニ記ス竹流金ハ、元和年落城ノ時、川中ヘ落セシモノナラン、右掛目一挺四十八匁三分）今モ佐渡ニテ小判ヲ制スルニ、筋金ヲ竹流ト云ニスルナリ、津輕ニ今竹流ト云菓子アルモ、此遺制ナルニヤ、又續近世畸人傳、小万女ノ條ニ、恩孝云、予ガ知レル老婆、北ノ方ノ番袋ト、銀ノ竹流三筋ト、手箱一ツヲ傳ヘ持タリ、銀ノ竹流ハ、細キ針金ノサマシテ八寸バカリアリ、鋏ニテ切テ用ユルモノナリ、蒿蹊云、オノガ類族ノ家ニ傳ヘ持タルハ、針ガネヨリハ稍々平メニシテ長モ定ラズ、通稱ハ竿金ト云シ、刻印ナドハ

見エズ

右往古ノコトハ國史ヲ以テ參考ス、中世切リ遣金、竹流・ながり金等大概記ストイヘドモ、諸說區々ニシテ茲ニ不レ止、追テ加補スベシ、今妄ニ臆斷ヲ加ヘ、古代ノ事實ヲ謬ルコト少カラズ、多罪トイヘドモ、當代ノ金銀豐饒ナル故、却テ國恩ノ厚キヲ忘レ、古代ヲ慕フモノヽ爲ニ、其不粹ナルコトヲ告ルノミ、其精密ナルコトハ博雅ノ君子ニ聞フベシ

三貨圖彙卷之八 金之部

草間直方 輯錄

一 砂金ノ事、本草綱目曰、「金有二山金・砂金二種一、又砂金細如二沙屑一出二蜀中一云々、」又麩金トテ江沙ノ水中ニアリ、「如二沙屑一、其色淺黃也」ト云、博物志ニハ、「麩金是毒蛇屎」トアリ、是モ生金ニシテ、砂金ニ類スト云ヘドモ、「大毒有レ殺レ人」ト本草ニ云ヘリ、天工開物ニ「山石中所レ出、大者名二馬蹄金一、中者名二橄欖金・帶胯金一、小者名二瓜子金一、水砂中所レ出、大者名二狗頭金一、小者名二麩麥金・糠金一、又水金多者出二雲南金沙江一、又川北潼川等、州邑與二湖廣・沅陵・溆浦等一、皆于二江沙水中一淘汰取レ金、千百中間有下獲二狗頭金一塊一者上、名曰二金母一」

續日本紀、天平勝寳二年三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於二部内廬原郡多胡浦一、獲二黃金一獻レ之、（練金一分 沙金一分）砂金ト云コト、茲ニ始テ見ユ

閏中抄ニ、天平二十年、金ヲ奥州ヨリ始テ獻ル、是日本ニ沙金ノ始也ト云々、東鑑ニモ天平年、始テ奉二泥金於大佛一、是吾朝砂金ノ出ル始トアリ

聖武紀ニハ、「始貢二黃金一」トアリテ、又獲レ金治レ金人々ニ賜二位階一ノコト見エタリ、治金トアレバ、

鍛錬ノ金ト見エタリ、始ハ砂金ナルヲ、冶錬シテ貢シヤ知ラズ、砂金ハ水沙ノ中ニ生ズルト、砂山ニ生ズルトアリテ、倶ニ生金ニシテ、冶錬セズ天然ト生ズルヲ云

續日本後紀ニ、「承和二年乙卯二月戊戌、下野國武茂神奉レ授ニ從五位下、此神座レ採ニ沙金一之山也」同書、「承和三年丙辰正月乙巳、詔奉レ充ニ陸奧國白川郡、從五位下勳十等八溝黄金神、封戸二烟一、以テ應ニ國司之禱一、令レ採ニ得砂金一、其數倍レ常、能助ニ遣唐之資一也」其餘延喜式ヲ初メ歷代ノ書ニ、沙金ノコトハ往々見エタリ、今ハ出ルコト少シ、凡ソ出ル土地、奧州・羽州・豫州・薩州・佐州ナリ、然レドモ多カラズ、品モ又劣レリ、古代ノ形ノ如クナルハ稀也、適奧州幷豫州川ノ江ヨリ出ル所、古代ニ類スルモノアレドモ又少シ、近代林子平ノ著ハス三國通覽・蝦夷略記ニ、彼ノ地金山甚ダ多シ、然レドモ掘ルコトヲ不レ知、空ク埋レテアル地也、銀山・銅山亦然リ、又砂金ノ出ル地多シ、此砂金河水ニ流レ出ルノミニ非ズ、砂金ノアル地ハ、十里・二十里モ土地一面ニ生ズルナリ、ハホロノ砂金ハ、海底ヨリ打上ルト覺テ、西北風ノ大荒レシタル後ハ、海濱四十里ノ間、一帶金色ヲナスト云ヘリ、古河氏ノ東遊雜記ニハ虛說ナリト云フ、何レ渡海見聞ナラデハ不レ可レ知、東遊雜記ニ又云、松前知内浦ノ北ノ方ニ、仙見嶽ト稱セル深山アリ、此ノ山ニ黄金出ル由、寬文年、秋田・南部・津輕ノ金穿ドモ、此山ニ來リ黄金ヲ穿出セリ、蝦夷ノ人是ヲ知テ如レ蜂數萬集マリ、又追々掘リ出シ、數多ノ黄金ヲ知内・函館ノ浦々ヘ出シ、諸品ト交易ス、依レ之其ノ山ノ邊日增ニ家居出來テ、千軒ニ及ベリ、故ニ初ハ

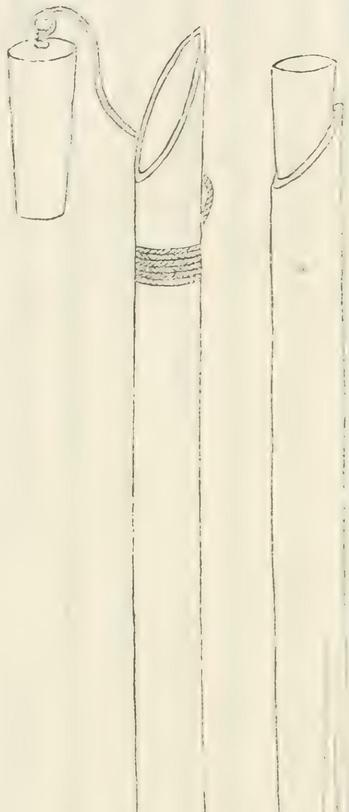
無名ノ山ヲ、島人千軒山ト稱ス、其ノ後松前侯ヨリ制度アリテ、松前侯ノ山トシ玉ハントシ給フ、是ヨリ蝦夷人共ト合戰ニ及ビ、松前ノ家臣佐藤權左衛門ト云、智勇ノ士ノ謀ニテ、蝦夷人三千餘討取、此武威ニ恐レテ以後松前侯ノ領トナル、今ハ不レ出、浦人ノ説ニハ、此ノ山ニテ數千人ヲ殺害シ玉ヒシヨリ、山神怒リテ黃金ノ出ル筋ヲ塞グト云、愚俗ノ説ニシテ不レ可レ信、今松前ノ寺院ニ、右ノ黃金ヲ以テ鑄シ佛像アリ、至テ上品ノ黃金ナリト云々

創業記・駿府政事錄、又武德編年集成ニモ、松前ニ金山有テ、金甚等夥至ル處ニ、松前志摩守云、此表ニ米穀乏シ、若干ノ人數入リコム時ハ飢饉スベシト、是ヲ制シテ鑿スルコトナシ、慶長十三年 砂金ハ茄子種ノ如シ、天工開物ニ、麩麥金・糠金ト名、金上品ニシテ見事也、岩田氏ノ書ニ、是ヲ袋ニ入テ用ユ、今時ノ伊勢大神宮ヘ、商家ヨリ金ヲ奉納スルハ、大判・小判ノ類、此砂金ニカヘテ神前ニ奉供スト云フ、其ノ是非ハ不レ知、凡天平年中ヨリ已來、僧ノ布施物幷ニ諸臣ニ賜フ所、黃金・砂金双ベ行ハルルコト多也、砂金ハ前文ニ揭グル通リ天然ノ物也、當時出ル土地、佐州西三河・相川、豫州金光山・川瀧・古野川、奥州南部・鹿角郡白根山・尾去澤・西道・眞金山・羽州秋田・寒川江等、諸々ノ山川、土砂ニ交リ生ズ、是ヲ水中ニテ關板ヲ以テ、土砂ヲユリ流シ、或ハ布ヲ以テ流シカケテ是ヲ採ル、餘計ハ出ザル由、尤佐州相川・豫州古野川ノ沙金ハ、金銀圖錄ニ出ル通リ、金山ノ碎屑ト見ユルモノナリ、或ル人右沙金ノ類ヲ集メ所持スルニ、佐州西三川ノ產ト云フ沙金モ、ヤハリ金ノ碎屑ト見エテ、自然ノ金

沙ト見エズ、出所書誤ルモノ歟其眞ヲ不レ知、蝦夷地ノハホロ（但ハホロハ地名ナリ）沙金ハ寶暦十辰年八月、江戸へ上納有ルト云フ、右沙金ハ細密ニシテ、砂ノ如クニテ平メナリ、古代ノ沙金ハ出所知レザレドモ、イカニモ茄子種ノ如ク、細ク丸ク平メナリ、又一種至テ上品ニテ、右ハホロノ砂金ヨリ、又細密ニテ試ニ掌ニノセテ、手ノ中ニ指ニテスリツクレバ、其金掌ニツキテ金色ヲナス、今畫工金箔ヲ膠ニテトキ金泥トナス、其類トハ大ニ違ヒ、至テ細密ナガラ、總體ニテハ薄ク平メナリ、金色美ニシテ誠ニ結構ナルモノナリ、愚按ズルニ、眞ノ沙金ニハアラザル樣ニ思フ、往古練金ヲスリオロセルモノ成ベシ、

金箔製ノコトハ國史ニ見エズ、聖武紀ニ、盧舍那ノ銅像成就シタレドモ、塗金不足ノ趣ミエタリ、此塗金ト云フモノ、類ヒナラン歟、金ハ箔ヲスリトキテ泥金トシテ、諸佛具ノ莊嚴ニ用ユ、右塗金ハ箔製ノ法無レ之時ノモノナラン歟、又玉海・東鑑ニ、大佛再興ノ時、奉レ塗二滅金一（若打薄可レ押歟）トアルハ、此時ハ箔泥トミユ、滅金ト云フハ火氣ヲ以テスレバ、其ノ金モノニツキテ滅スル故ノ名有歟、聖武紀ニ云、塗金トアルモ後世云フ滅金ナレドモ、打箔モコレナキ時代ユヱ、右ノ沙金ヲ以テスリ塗リシ成ルベシ、其時代ハ又其仕法有シナルベシ、保元時代ノ蒔繪香合或ハ和州法隆寺天平時代ノ器物ヲ見ルニ、今ノ金鏘ト云モ、右砂金ノ類ヲ以テ潤色セルモノニテ、泥箔ト見ユルモ至テ結構ニ、繪ヤウモ工ミナラザレドモ、殊勝ニテ古雅ナルモノナリ、鎌倉時代ハ、金鏘・金箔ヲ用ヒシト見エ、玉海ニ云、若打薄ヲ可レ押歟トアルヲ以テ見ルベシ、此ノ時代ノ器物ハ、相州鶴ヶ岡・安藝嚴島寶藏等ニ、手筥・櫛筥ノ類

アリ、和州當麻寺、曼陀羅ノ厨子、是等鎌倉時代ノモノナリ、右沙金ト云品類モ種々アリテ、一偏ニハ論ジ難シ、圖錄ニ云、加州ノ富商、露金ヲ藏スト云モ、前ニ云古代ノ塗金ノ類ナラン、又古代金商ノモノ、沙金ウリ買、又ハ是ヲ以テ諸物交易セシ時、農商ノモノ沙金筒ト云モノヲ造リ、腰ニ差ハサミ往來セシト見エタリ、奥州南部ノ士人、古代ノ沙金筒ヲ藏セリ、長サ八寸四五歩、其圖竹ヲ以テ製セシモノニテ、但南部ニ眞竹ノ類生ゼズ、上方ニ產スルナヨ竹ト云類ニテ、細ク節長シ



右ハ商人腰ニサシハサミ、諸物交易ノ用ニ持シト見エタリ、又沙金袋ノコトハ、扶桑略記ニ見エテ金銀圖錄ニ委シク出タリ、依テ茲ニ略ス、其精密ナルコトハ見テ知ルベシ、沙金考未レ見、愚考齟齬多カランコトヲ嘆ズ、古代御轉任・御兼任ノ時、告使・副使等、宣旨ヲ覽筥ニ入大外記ニ渡ス、大外記ヨリ

又高家衆ヘ渡ス、請取ノ御前上覽、其後御奏者、請取之、沙金二袋十両ゾ、其覽筥ヘ入レ、又大外記ニ渡サルコトアリト云、當時モ古例ノ如ク沙金ノ取扱ヒアリヤ、禁中ノ秘故、知ルコトニ非ズ、此圖彙、都テ金銀圖錄併セ考ベシ、小異大同ナルモ却テ一興ナランカ

サテ砂銀ト云コトハ舊記ニ不レ見、中世砂銀ト云フコトハ、慶長六甲辰年八月十日、大久保石見守長安、伏見ニ至リ、其ノ司ル所佐渡國ノ砂銀ヲ出スコト夥シキ旨ヲ言上ス、五年已前、庚子ノ年マデ、上杉景勝領セシ時ハ、僅カニ砂銀出ケルガ、辛巳年ヨリ神君ノ公領トナリ、石見守按檢シテ、壬寅一ケ年ニ出ル砂銀一萬貫目ナリ、又石州銀山モ、庚子年迄毛利輝元領セシ時ハ、銀僅ニ出デケルガ、辛巳以來公領トナリ、長安檢斷シテ、壬寅ノ年ヨリ、年中砂銀出ヅルコト四千貫目ニ及ベリ、寔ニ天既ニ神君ノ德ニ感ズル故ナルベシト、編年集、又創業記、慶長七年十一月ニモ見エタリ、右砂銀ト云ハ、礦石ヲ碎テ粉砂トナシ、水ニ淘リテ冶鍊セザルヲ云フナラン、前ニ云フ砂金ノ如ク、天然ノ物ニハアラザルベシ、都テ金銀ハ製シテナルモノ也、延喜式ニ煉金トアルハ、是鍛鍊セシナルベシ、國史ニ黄金何兩トアルハ、是ヲ官府ニテ又製シ、兩目ノ量リ、其上ニテ行ハレシナルベシ、未ダ其形ヲ不レ知、文武天皇、丁酉ノ年ヨリ、光仁天皇、寶龜七年迄、砂金ヲ賜フコト不レ見、同年四月、遣唐使佐伯宿禰毛人・大伴宿禰益立二人、唐ニ趣ク時、前ノ遣唐使藤原清河、在唐ニヨリテ、其忠誠ヲ感ゼラレ、絁一百匹・細布百端、砂金六百兩ヲ賜フ、是砂金ヲ賜フノ始メトミユ

續日本紀、承和三年四月壬辰、天皇御二紫宸殿一、賜二餞入唐大使藤原朝臣常嗣・副使小野朝臣篁等一、中略賜二大使、御衣一襲・白絹御被二條・砂金二百兩、副使、御衣一襲・赤絹被二條・砂金百兩一

同書、承和九年三月辛巳、下云、五台山僧靈仙、黄金百兩寄附、承祖但靈仙化去金又綠浦ニ陷沒セリ

日本紀略、延暦十五年五月丁未、渤海國使呂定琳等、還レ蕃、中略今因二定琳等還一賜二砂金少三百兩一

同紀、同廿二年三月庚辰、遣唐大使葛野麻呂・副使石川道益、賜レ餞中略賜二葛野麻呂、御被三領・御衣一襲・金二百兩、道益御衣一襲・金一百五兩一

扶桑略記、延長四年五月廿一日、居二興福寺一、寛建法師、入唐黄金小百兩

同七年九月十七日、大娘宮君諷誦、沙金一百兩、」右ノ外黄金砂金ヲ佛事ノ布施物・祿物ニ賜フコトハ、百練抄・長秋記・玉海・吉記・兵範記・園大暦・康富記・二水記等ノ古書ニ、往々見ユレドモ、無用ノコトハ省レ之、又高麗始メ異國ヘ金銀ヲ送ラレシコトハ、國史ニ見エズ、續日本紀、寶龜八年五月、賜二渤海王一書ニ、「黄金小百兩・水銀大一百兩」、三代實錄、「承和二年掃部頭藤原貞敏到レ唐、劉二郎贈二砂金三百兩一、妙曲相傳、」百練抄、「仁平元年九月廿四日、左大臣、贈二砂金於宋客劉文仲一、去年進二送書籍一之故也、」又盛衰記、「安元元年宋育王山ヘ平重盛黄金三千兩送ル」ト云、此外ニモ國史ニ、諸臣・僧尼ニ金ヲ賜フコト擧テ不レ可レ數、右ノ貢數大使等ニ賜フ所ハ左モアルベシ、佛事僧ナドニ賜フ所、今一兩十匁

トミレバ甚ダ大數ナリ、是ハ大內裏ノ頃ハ、都テ官ニハ金銀行ハレ、民間ニハ今ノ如ク金銀ヲモテ扱フコトナク、皆錢ヲ用ユル由ヲ記セリ、延喜式ニモ都ベテ料物雜用料錢ヲ以テス、金銀ヲ以テスルコトハ甚少シ、國々ヨリ貢處ノ金銀ハ、其儘官ニ納マリテ、世ニ行フコト少キ故、官府ニ滿ルナルベシ、然レドモ今ノ如クニハ有ルベカラズ、國史ニヨリテ其自由ナルトハ思フベカラズ、見ル人可レ考也、又砂金袋ト云フコトアリ、是レハ世俗賴朝將軍ノ時、後鳥羽院ヘ沙金ヲ進ゼラル、其ノ時錦ノ袋ニ入テ進ゼラル、是ヨリ沙金嚢ノコト興レリト、其是非ハ不レ知、扶桑略記ニ、「沙金百兩、納ニ銀壺一、裹ニ青朽葉清紗一、付ニ五葉松枝一」トアリ、是沙金袋ナラン、コノ文ニヨルニ、鎌倉時代ヨリ以前ニモアリト見ユ、延長七年九月十七日ノコトナリ、鎌倉時代モ、沙金・錬金兼用セラレ、又南廷モ並ベ用ヒラル

東鑑ニ、沙金千兩・米一萬石・絹、元曆二年三月、大佛勸進、重源上人、被レ送ニ黄金一千兩・米一萬石一、建久六年三月、東大寺ヘ送ラル、貢金四百五十兩、文治二年十月、秀衡ヨリ送獻、但先ニ陸奥守秀衡入道ヘ貢金貢馬ノコト、賴朝ヨリ禁裏ヘ可レ被ニ傳進一ノ由通達セラル、文治二年四月ノ事也、砂金八百兩（中略）建久元年、賴朝上洛ノ砌、奏覽、正治二年十月十日京都ヘ貢金五百兩・馬二十疋

玉海ニ云、元曆元年六月廿三日、大佛之間事於ニ御身一者皆悉奉レ鑄了、當時奉レ營之間也、來月之內、可レ終ニ其功一、其後奉レ塗ニ滅金一、可レ押ニ貫一（若打薄）可レ有ニ開眼一也、滅金・斷金、諸人施入有ニ少々一之上、賴朝千兩、秀衡五千兩、奉加之由所レ奉也

文治三年十月。大佛殿造營ノ條ニ、御身滅金總不レ可レ及二三千兩一
右ノ外布施等ニ、砂金・黄金並ベ用ヒラレシコト多ク有リ、今略レ之、砂金一兩ト云フハ、量目十匁也、量目ノ事ハ卷ノ三十一ニ見ユ、依テ畧レ之親長卿記ニ、砂金十兩、但シ代二千疋トアリ、二千疋ハ錢廿貫文ナリ、然レバ沙金一兩ハ錢二貫文、マタ量目一匁ハ錢二百文ニ當ル、今ヲ以テ考フレバ、金甚ダ卑シク錢大ニ貴ク、疑ハシ、永仁御卽位用途記ニモ、砂金九兩二分、按ニ此二分ハ、六朱ヲ一分トシテ、二分ハ五匁ナリ、コレハ十匁ヲ一兩ト立ル割也 此代二千八百五十疋トアリ、是レハ一兩代錢三貫文ニ當ル、鎌倉久明將軍時代ナリ、此ノ時マデハ往古ノ通一兩ト云フハ十匁トミエタリ、按ズルニ康富記・親長卿記ニ、砂金トバカリ記スモアリ、又右ノ通リ代何疋ト記スモ有、今按ズルニ往古ヨリ沙金ヲ用ヒラルヽコトハ、遣唐使或ハ佛事ノ布施、其餘元服式始メ、大禮ノ祿物等ニ用ヒラレ、又ハ蕃客貨物交易ノ時、砂金ヲ以テ融通セシ趣モ、三代實錄ニ見ユレドモ、皆官府ニテノ取扱ヒニテ、平常下民通用セルモノニ無レ之、是貴キモノナレバ也、然ルニ保元年以後ハ諸國穩ナラズ、建久年ニ到リ武家一統ノ世トナリ、打續キ元弘・建武ノ亂ヨリ、足利ノ世ニ移ルト雖モ、又應仁年ヨリ京地騷亂シ、連々禁中モ公方家モ次第ニ衰微シ、公事モ名バカリ有テ、形バカリノ取行ヒト成シコト擧ゲテ數ヅヘ難シ、公事根元等可レ見、然レドモ將軍家位階昇進元服等ノ大禮ハ、悉ク舊記ヲ以テ考ヘ執リ行フトイヘドモ、昔ノ如ク金錢自由ナラズ、殊ニ砂金ナドハ、古代ノ如クニハ取扱フコト成難ク、依レ之舊記ニ記ス砂金ノ數目ヲ以テスレドモ、其ノ扱フ處ハ永仁年トハ變リ、一兩ノ

量目モ減ジ、マタ錢モ貴ク金一兩ノ處ヘハ錢二貫文、十兩ハ二十貫文トシテ祿物有シト見ユ、又砂金一兩量目十匁ト見ル故、代錢ニ疑ヒアリ、此ノ量目ノコトハ足利ノ世トナリ、金銀トモ拂底ニナリ、一兩ト云フ量目モ過半減少ナリ、沙金十兩（但京目ニテ、量目四十五匁）代廿貫文（二千疋トモ云フ）ナレバ、一兩（量目四匁五分）代二貫文（二百疋ト云フ）ナリ、然レバ沙金量目一匁ハ、代錢四百四十四文程ニ當リ、今ヲ以ツテ見レバ金ハ甚ダ賤シク錢ハ至ツテ貴シト云フベシ、然レドモ親長記ニ云、文明年ノ頃ハ公武共衰微ノ時節ニテ、砂金・黃金ハ勿論、錢モ至テ不自由ナルコトニテ、砂金・黃金等ノ取扱モ皆名目ノミニテ、金ハ正金ニテ無レ之ユヱ賤ク、錢ハ正錢ナルユヱ自ラ貴シ、全クハ金錢トモ不自由ニアリシナリ、故ニ砂金一袋、或ハ二嚢、宣旨筥ニ納ル、或ハ筥蓋ニ納トアルハ、袋又ハ薄ヤウナドニ形バカリヲ裹ミ餝バカリニテ、別ニ目錄ヲ以テ引カレシニヤト推量セラル、鎌倉年中行事・殿中申次之記・光源院殿御元服記等ニ進上折紙目錄ヲ用ヒシコトミユ、是レ等モ應永年ヨリ、金錢次第ニ拂底ニナリシ故起ルナラン、伊勢貞丈隨筆ニモ、古ヘハ小判・小粒ノ金子無レ之、サレバ今ノゴトク折紙ニ金子ヲ糊ニテ付クルコトナシ、折紙ニハ眞中ニ萬匹・千匹ナドト書クバカリナリ、鳥目トモ何トモ不レ書、當日ニハ此ノ折紙ヲ贈ルバカリナリ、偖後日ニ右ノ員數ノ鳥目ヲ運ビ送ルナリ、京都將軍ノ時代、公私共ニ皆如レ是也、猶其ノ昔ヨリ如レ此ナルベシ、遠國ノ大名ヨリ公方樣ヘ獻ズルモ、先ヅ使者或ハ書狀ヲ以テ折紙ヲ獻ジテ、後ニ鳥目ヲ運送ス、數月歷テ京着スル也、蜷川新右衞門尉親元日記ノ趣、如レ此見エタリト有、尤舊記ニ砂金

何兩トバカリ記シ、代無レ之モアレドモ、通例其當リ有テ代ハ錢ナルベシ、鹿苑院殿御元服記、應安元年四月、禁裏ヘ贈進砂金百兩（兩分本法銀折敷）トアリ、是ハ京目ノ兩分本法ヲ記シ、眞ノ砂金ニテ、其餘砂金何十兩トバカリ、目錄ヲ以テノ披露ハ、其代錢ヲ以テ行ハレシナルベシ、親長記、文明五年十一月七日、室町殿若公御元服、來十二月云々仍參仕人々ニ亂中、依ニ窮困ー各々申請御訪（下略）八日無ニ用脚ー且五百文（千疋ノ内）可レ給レ下書（下略）十二月十四日、若公御元服延引可レ爲、來ル十九日（云々）依レ無ニ用脚ー同十九日御元服、（御名字義尙）廿日申剋、室町殿惣樣參賀（中略）宣旨御藏小舍人參告使各給レ祿、三局持參砂金十兩、（但代二千疋ト云フ）文明十一年八月、當今御元服ノ砌、當時其用脚事更有ニ難澁ー時節也ト云云、又内侍所御神樂・四方拜等依レ無ニ用脚ー停止、同十七年正月、四方拜、奉行御訪百匹也、昨日至來貢馬、傳奏日野一位、自ニ武家ー御替物用脚二千匹進レ之、依レ之四方拜被レ行、平座停止ト云々、適近年如レ形被レ行之處、如レ是儀無ニ勿體ー事也、同十八年、平座無ニ用脚ー、武家不レ進之故也、右之通公武共衰微ニテ、用脚拂底ナルコト推考スベシ、黃金・砂金モ是レニ準ジ拂底ニテ、取扱モ目錄ノミニシテ其代ヲ錢ニテ取遣リ有シト見ユ、富商ノモノ正金ト正錢ト眞物ヲ以テ交易セシハ、右砂金十兩代二十貫文ニテハ不レ可レ有、依テ其ノ頃砂金一兩錢何百文ニ當ルト云コト、聢ト定メ難シ、應永已來、寬正・文明年ハ異國ヘ諂ヒ錢ヲ乞求シ程ノコトニテ、右砂金代錢ト雖モ、高直ノ積リナラン、親長。元長。二水記等ニ、用脚ナク前文ノ通リ公事ノ大禮モ執行ヒ難キ程ノ衰微推考ベシ、砂金モ往古ヨリ有來ノ儘ニテ、國々ヨリ出ルコトナク、年

年減滅シ、其上砂金ハ茄種ノ如ク微細ナルモノ故、取扱フ毎ニ散失シ、通用不辨理ナル故、文明年以後ハ、諸侯國々ニテ是ヲ冶錬セシヨリ、又切遣ヒ金ノコト起リ、是レヨリ又大判金ノコト起ル、依レ之彌砂金ハ拂底シ、天正年ニ到テハ、砂金ノ名目モ失セ、大判金ト切遣ヒ金銀トニナレリ、天正十六年、聚樂行幸ノ進獻ニ、黄金五百兩、砂金袋ニ入レテト有モ、砂金ノ代リニ練金ヲ用ヒラレシト見ユ但豊臣家譜ニ、五十兩ト有ハ右五百兩ヲ十裹ニセシモノニテ、五十兩ト云ノ書損ナルベキカ、又太閤記ニ、百兩トアルモ、五裹ミナルベキヤ、黄金一兩ト云ハ、壹目四匁四分ニテ、五百兩ハ、二貫二百目ナルベシ、寶貨事略ニ、天正十六年、大判・小判ヲ造ルトアレドモ、右ノ五百兩ハ、必切遣ヒノ錬金ナルベシ、多門院日記ニハ、主上樣ヘ品々ノ内、金百兩、北政所ヨリ金子廿兩、シヤ金袋ニ入テ大政所ヨリ、是モ二十兩トアリ

南鋌ノ事ハ、是陽漫錄ニ云、連山雜抄ニ云、沙石集ニ、正直ノ人寶ヲ得ルト云フ部ニ、宋朝ノ物語ヲ引テ人ノ袋ヲ落シタルニ、銀ノ軟挺六ツアリト云、是今ノ挺銀ナルコト疑ナシ、其頃丁銀ヲ軟挺・南挺トモ云トミエタリ、敎書按ニ、胡身之刀、釋文辨語ニ云、一今人冶銀大挺五十兩、中挺半レ之、小挺又半レ之、世謂ニ之挺銀ート、今ノ人トアレバ宋朝ニ鋌銀アルコト明カナリ、偖連山氏ノ說ニテ見レバ、東鑑ノ南廷ハ今ノ丁銀ノ類ト云ヘリ、俗說辨ニハ、南廷ハ花降判ノコトト云ヘリ、東鑑ニハ、多ク砂金ト並行ヘリ

東鑑ニ曰

卷絹十疋・南廷一嘉禎元年

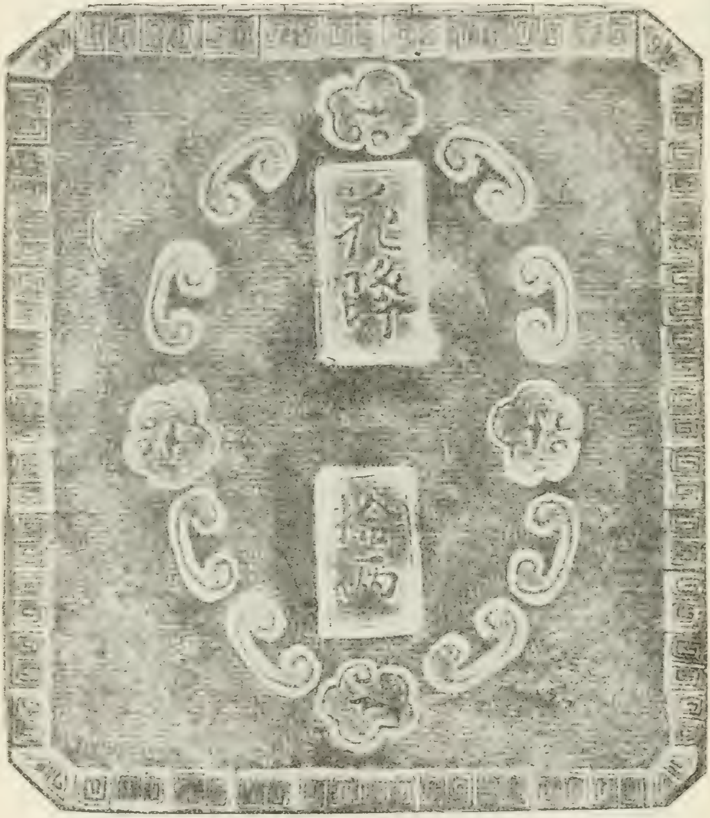
御甲、駿河次郎泰村、南廷、長井左衞門大夫泰秀三年

砂金百兩、南廷十兩、又砂金百兩、南廷十兩、建長四年 南廷五ツ・置銀折敷八年
奉御引手物、砂金、越後守實時、南廷、秋田城之介泰盛正元二年
沙金、相摸太郎、南廷相摸四郎
沙金、秋田城之助、南廷　宮内權大輔、正元二年

右ノ餘南廷ノ事數多アリ、南廷ノコト諸説區々ニシテ不分明、修禪寺紙也ト云説モアリシト見ユ、是ハ昆陽漫錄ノ説ノ通リ、紙ノ類ニテハ有ベカラズ、鋌銀ニテ有ベキコトハ、其拂底ナルモノト見エタリ、奥州秀衡滅後、泰衡征罰ノ時、文治五年八月、泰衡、平泉ノ館逐電ノ後、倉廩ヲ見セシメ玉フ時、種々ノ珍寶數多アリテ、其中ニ漸ク南廷ハ百ナリ、又範賴、西海ヨリ入洛ノ時、院幷鎌倉ヘ進上スト云モ、南廷漸ク三十ト五十也、是レハ平家ノ官物ト見エタリ、右ノ通數無レ之ヲ以テミレバ、決テ銀鋌ナラン、然レドモタシカニ其形チヲシラズ、昆陽漫錄ニモ、南廷ハ花降ノコトトハ云ハズ、別ニ花降銀ノ圖説ヲノス、長秋記、大治四年八月ノ條ニ銀三百兩・金五百兩、又金二十五兩・銀九十兩、長承三年五月ニ、銀七萬兩ト有テ、砂金同樣ニ量目ヲ以テ行ハレ、其ノ形制無レ之、南廷ト云名目ハ、玉海・長秋記・吉記等ニハ見エズシテ、東鑑ニ初メテ見ユ、サレド其形制知レズ、南廷一ツ・五ツ、或ハ百又ハ三十五ナド皆數ヲ以テ稱ス、然レバ南廷銀ナラバ、形制ノモノト見エタリ、東鑑、建長四年ノ條ニハ、南廷十兩ト見ユ、尤モ沙金ト並行ハルヲ以テ見レバ白銀ナルベシ、金銀圖錄ニ云、平家物語

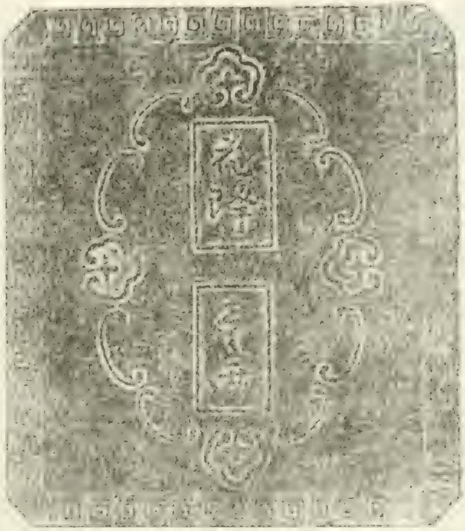
ニ木ノ下ガ代リニ、六波羅ノ煖廷ヲコソ、取テ參リテ候ヘト云フコトアリ、是ハ仲綱ガ馬ノ白キヲ、銀ニ譬ヘシモノト云ヘリ、然レバ南廷ハ南鐐銀ノコトニシテ、銀ト記スベキコトヲ、多分南廷ト記シ、又其形制有シト見ユ、右南廷十兩ト有ハ、前ニ云一ツノコトニヤ十挺ノコトニヤ、其形制・量目不レ知、今茲ニ出ス花降ハ、加州ノ制トハ別種ニシテ、何ノ世ニ行ハレシモノニヤ不レ知、其美ナルヲ以テ、南廷ト云テ可ナランカ

古代大形花降銀



掛目、四十三匁、立稻妻員十六、横十四、裏無銘、此銀、又勢州松阪愛宕社靈寶ニモアリ、正親町院御奉納ト云、南都興福寺・尾州淺井氏・大阪鹽川氏ニアリテ、皆大ノ方ナリ

古代小形花降銀

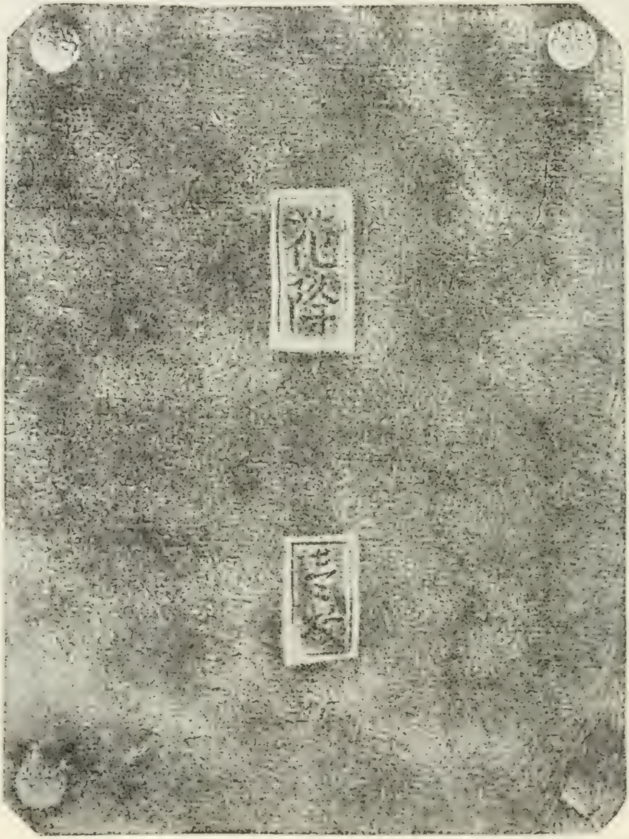


掛目四匁三分、裏無銘

大阪蒹葭堂ニアリテ、小ノ方ハ少シ



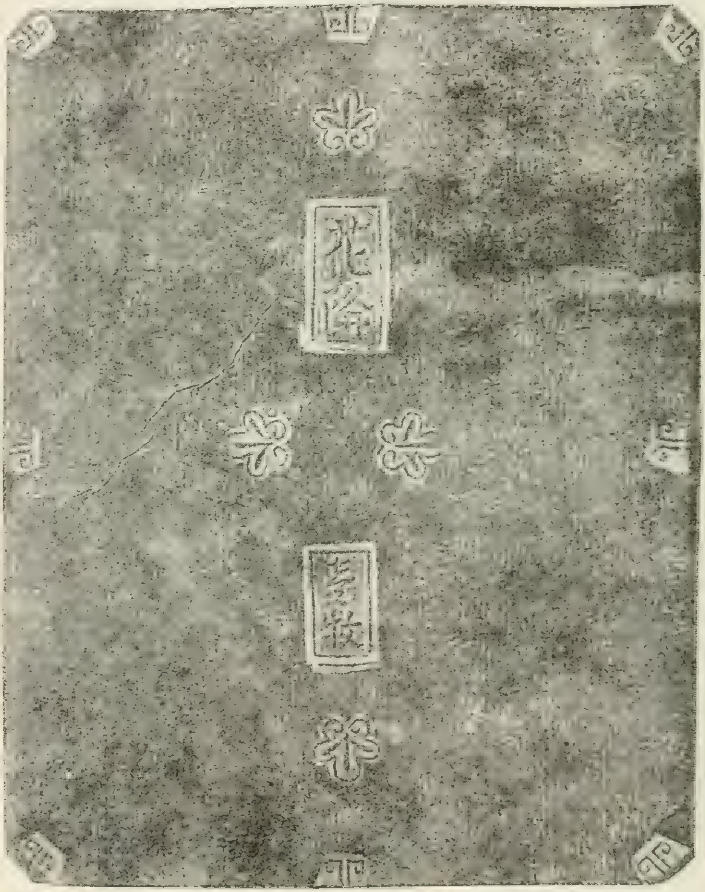
加賀座花降銀



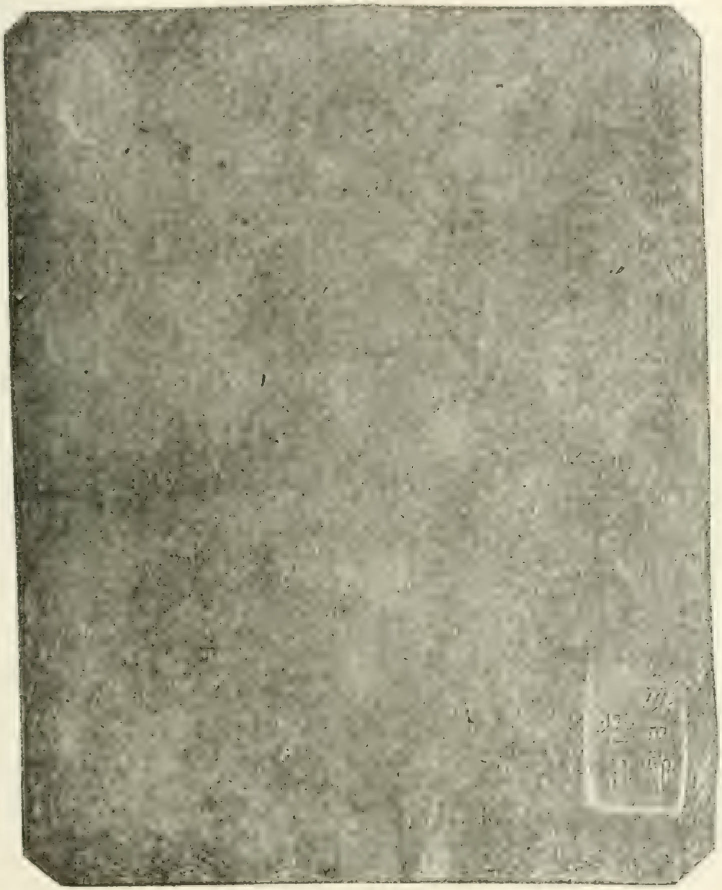
掛目四十三匁



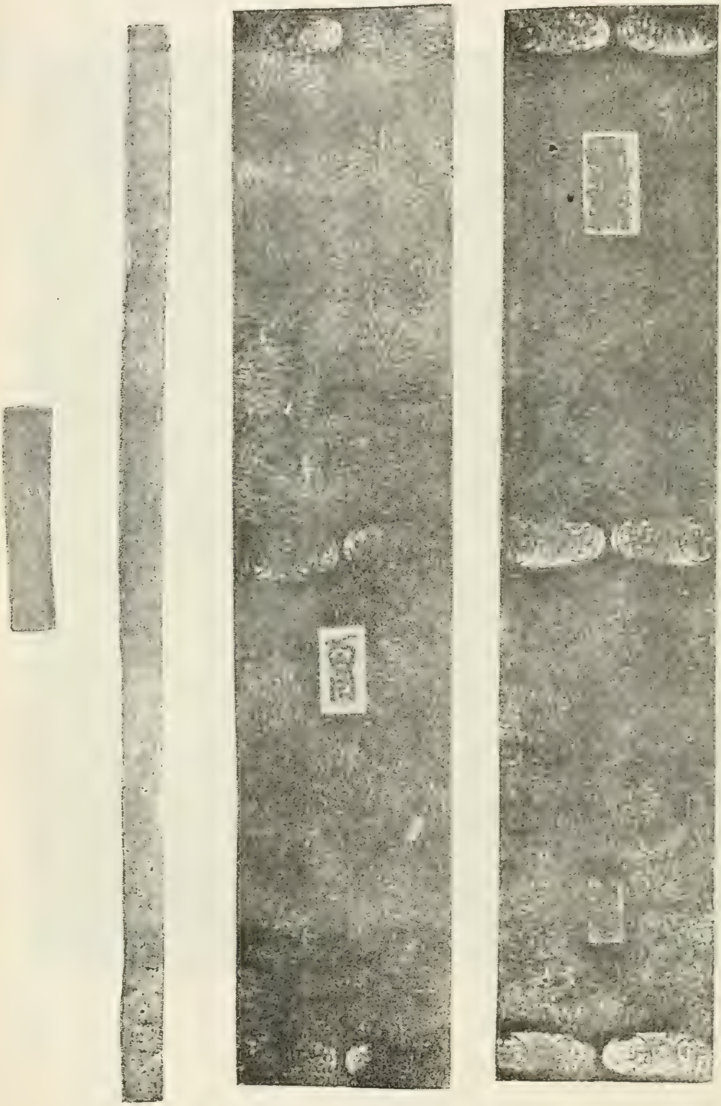
加賀座花降銀（大字）



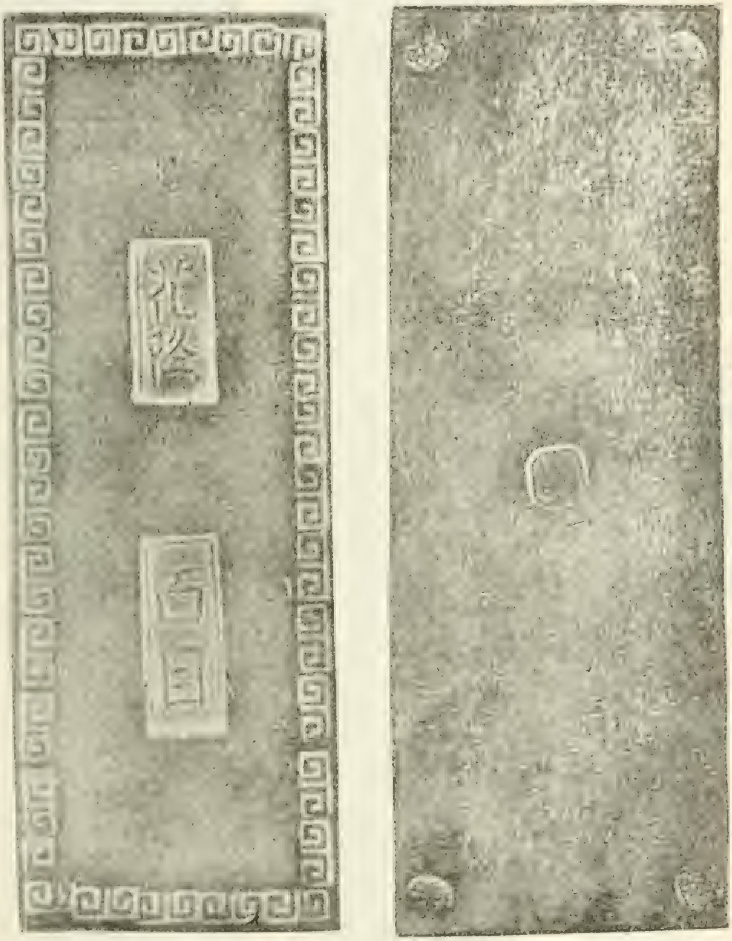
掛目、四十三匁（小字）



加賀座花降銀



加賀座花降銀







亡父云、此ノ花降銀ノコトハ、年來不審セシニ、鴻池吉右衛門、寶暦年ノ頃、加州藏元ノトキ國ヘ下リ、不圖花降銀ノコトヲ中屋何某ト云フ老人ニ咄シセシニ、其ノ老人云、當國初大納言殿時代、加越能三ケ國通用ノ爲、於レ國鑄サセラル、尤金ノ灰吹等モ多ク鑄サセラル、是レハ今ノ小玉銀ノゴトク丸ク吹テ、別ニ極印トナクテ、㋚㋖ノ小極印ノミニシテ、大抵量目五六匁位ヨリ十匁、大イナルハ、二十目餘アリテ、是レハ通用スベキモノニテモ無レ之、御用金ナリ、銀モアリ、（私ニ云、昆陽漫錄ニ云、露銀ナランカ）又銀ノ切リ遣ヒ等ハ、以前ヨリアレドモ、改テ大納言殿被ニ仰付一、當國山々ノ內ヨリ掘出セシ銀ヲ以テ、花降トイフ銀ヲ鑄サセラル、コレハ大昔花降トイフモノアリテ、鎌倉時代ノ銀ノヨシ、御寶藏ニモ有レ之ヨシ、是ヲ摸シテ當國武藏ノ辻ト申ス所ニ、住居致候者即武藏治郎兵衛、又金屋彥四郎ト云モノニ命ゼラレ、數枚吹カセラル、今以テ世ニ殘レリ、通用ハ相止ミ、右兩人當國ノ用達•兩替方•封座トナリ、致ニ相續ニ居候、昔ヨリ申傳ヘ、銀座ト稱シ來リ候由、老人物語ナリ、重役衆ニ尋レドモ、却テ不案內ニ

テ、大抵右ノ趣ナリ、右花降ト云フモノ南鐵ニテ御寶藏ニアリヤ知ル人ナシ、タヾ古ク申傳ヘノミナレドモ、右老人ノ物語ニテ愚察スレバ、今花降ト云フニ二品アリ、江州長濱邊ニ、佐々木ノ宮アリ、此神庫ニアル花降銀ト云モノ、但神主ニ知音アリテ、先年吟味セシニ、今ハ無レ之由云ヘリ又尾州名古屋淺井氏、大阪雁蔭ニ有レ之花降ハ、前ニ出ス圖ニテ到テ美ニシテ、緣ニ稻妻ノヤウナル彫モノアリテ、大ノ方拾兩トアリ、小ノ方一兩トアリテ、極印等モ甚ダ工ミニシテ、裏ハ皆極印ナシ、至テ良銀ニテ、花降ト云テ可ナリ、又裏ニ、治郎兵衞・彥四郎等極印有レ之、此花降ハ、前ニ云フ、加州ニテ鑄シ花降ナリ多ク黑ク錯ビテ、緣ニ稻妻ノ彫物ナク、又細工モ麁抹ナリ、右二品ヲ以テ論ズル時ハ、稻妻ノヤウナル彫モノ有レ之方、往古ヨリ有レ之モノニテ、治郎兵衞・彥四郎等ノ極印アルハ、加州ニテ鑄シモノナラン、此ノ銀ハ大ノ方一枚トアリ、小ハ無レ之哉未レ見、加州ノ仁ニ尋シニ、皆大バカリニテ、一兩ノ小ハナシトイヘリ、是レ迄五六品見レドモ、皆大ノ方バカリ也、右二品、花降・南鐐ト云フモノニヤ、古人ノ說モ區々ニシテ分明ナラズ、末世愚昧ノ我ガ如キノ論、取用ユルニ不レ足ドモ、又後ノ考ノ一助トモ記シ置ナリ、東鑑ニハ、南廷トアリテ、花降トハ見エズ、何レ慥ナル證ナケレバ今難レ論、東鑑ニ、南廷三十、唐錦綾、中略又南廷五十、唐錦綾、中略文治元年十月、範賴、自ニ西海一入洛シ、鎭西ニ於イテ御劒ヲ尋取奉リ、今度進上、マタ右ノ南廷ハジメ、錦綾等、院幷賴朝、且ツ御臺ヘ進上ストアリ、依レ之思フ、右南廷賴朝時代ヨリ以前、平氏ノ頃ヨリモ行ハレシモノニヤ、然レドモ長秋記・玉海・吉記・兵範記・山槐記・盛衰記等ニ

モ見エズ、其餘ノ記錄ニモ見アタラズ、東鑑ノミ南廷アリ、不審ト云ベシ、全ク其ノ頃南鐐又ハ銀ト云ベキヲ、南廷ト通稱セシナラン

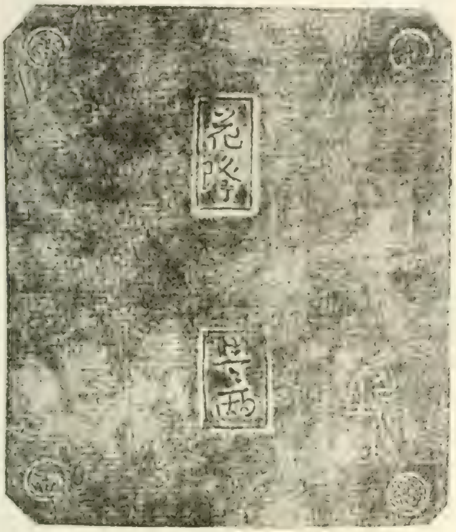
右ノ通、花降モ加賀吹トモニ數品アリ、南廷ノコトハ、古記ニ其ノ形ヲ云ハズ、鐵ヲ庭トモ、廷トモ作ル、倶ニ鋌ナルベシ、上品ノ銀ハ日ノ光ニ映ズレバ花ノ降ルガ如シ、因テ古來上品ノ銀ヲ、花降ト云フナルベシ、昆陽漫錄ニハ圖ヲ出シテ云ク、按ニ室町殿ノ末ヨリ、慶長ノ頃迄、專ラ此銀行ハレシヤ、金銀行使ノ法、國々一ナラズシテ、花降銀ヲ鑄テ行ヒシ國モアリト見ユトアリ、俗說辨ニハ、殘鋌ヲ出シ、是ハ段々切遣ヒシ跡ナリトアリ、雅遊漫錄ニモ圖出タリ、皆不詳

右ノ餘御藏花降銀・會津花降・對馬花降ナド、色々有ト云ヘリ、但シ是等ハミナ通用ノモノニテ無之灰吹銀ナラン、然レドモ今ノ如ク治世ナラザレバ、金座ナドモ無之時、諸侯國々ニテ之ヲ鑄サセ、國內通用セシニヤ、何レ委シキコトハ知ラズ、後考ヲ竢ツ、銀ノ美ナルモノヲ南鐐ト云、金ノ餅ヲ鋌ト云、南鐐ノ鋌ト云ノ略ナル歟、何レ其是非ヲ不知、伊勢貞丈漫錄ニ、古花降銀ト云アリ、圖ハ俗說贅辨ニ見エタリ、方二寸計リニテ、端ニ星形連リ、面ニ花降ノ二字アリ、是通用スル銀ニアラズ、（私云、是ハ加爲ノ花降銀ナルベシ）古代ハ錢バカリ通用シテ、金銀ハ只器物ナドノ飾ニ用ユル計リ、又進物ナドニモスル也、近年或人出羽ノ國ノ金山見物ニ行タル時、銀ヲ鑄ルヲ見シニ、銀鑄ル者此銀ヲ花降ニシテ、御目ニ掛ベシトテ、手ニ水ヲ付テ盪タル銀ノ面ニ、水ノ滴痕付キテ、落花ノ散カヽリタルガ如シト語リヌ、其

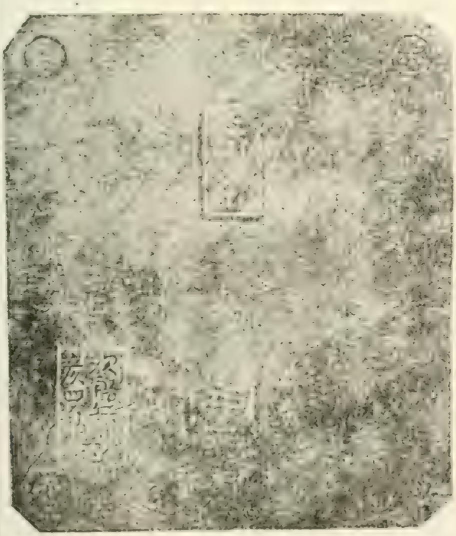
語リシ人、兼テ花降ト云コトヲバ知ラヌ人ナリシガ、其語ニテ花降ト云名ヲ始テ辨ヘ得ラレタリト、土州ノ儒官谷氏ノ談ナリ、按ニ、是等ハ前ニ云、御藏花降・會津花降・對馬花降ノ類ニシテ、加州ニテ鑄、國内ヲ通用セラレシ物トハ別ニテ、軍用等ノ灰吹銀ナルベシ、加州ニテ鑄ラレシ花降ト混ズベカラズ

右加賀吹花降大ノ方十兩ハアリテ、小ノ方一兩ハ無レ之趣、前文記シ置シ所、其後加州ヨリ有レ之趣申越シ、則押形到來、仍テ追加ス

加賀座花降一兩判



掛目四匁三分



三貨圖彙卷之九 金之部

草間直方輯錄

天正時代諸國ニテ多ク鑄ル處ノ金、小判數品有、其時代ハ金座・銀座ナドモナク、因レ玆諸大名銘々領國ノ砌、國用ニ鑄レ之、依テ天正時代、金銀判數品アリ、然レドモ永祿・天正年ノ諸書ニ、慥ニ記セシ金銀圖說ナシ、古キ云傳ヘノミニシテ臆說多シ、後藤家トイヘドモ、舊記ハ明曆ノ火災ニ燒失ノ由聞ケリ、然レバ他ノ知ルモノハ猶々稀ナリ、後藤家ハ先祖祐乘ヨリ、代々室町家ニ事フ、然レドモ四代目迄ハ、金ノ極印ノ沙汰ナシ、五代目德乘ヲ光次ト云、是ヨリ金銀極印始ル、夫ヨリ以來金銀鑄作ノコトヲ勤ム、凡小判ニ極印ヲ打テ通用スルコトハ、天正年中ヨリ始ル、然ドモ其形製定リナク、諸侯私ニ鑄テ國用トシ、其品類數多アリ、後藤德乘、室町家斷絕ノ後、秀吉公ニ事フ、此時命有テ、大判・小判ヲ造ルト云、（但小判ノ儀、疑アリトイヘドモ、暫ク實貨事略ニ隨フ、大判ハ足利殿ノ時ヨリ有、猶金銀トモ、其部可二並考一）或書ニ云、秀吉公薨ジ玉ヒ、關ケ原後ハ、神君ニ事ヘ、的傳ノ雕物家ヲ繼グ、又弟子後藤庄三郎ハ、御當家隨身ノ臣ニシテ、其以前ヨリ駿河ニ於テ、金銀座ヲ免許セラレシニヨリ、御一統後ハ後藤上下ト別ルト云、武德編年集ニ云、天正十九年十二月、神

昔關八州ヘ通用セラルベキ爲ニ、後藤德乘、幷門人庄三郎光次ニ命ジ、黄金ヲ以テ大小ノ形ヲ定メ、是ヲ鑄サセラル、但シ大判ハ金目四十八匁ヲ以テ一枚トス、是ハ室町將軍家ノ流例也、往古ヨリ今ニ至リ小判ト云コトナク、灰吹ノ砂金ヲ權衡ニカケテ通用ストイヘドモ、急用ヲナスニ世ニ難儀ナル故、今光次ニ命ジ、昔年ヨリ在シ金錢、四倍增ノ積リ四匁八分ヲ以テ小判トシ、是ヲ鑄サセテ通用スト云

按ニ、武藏判ナルベシ、量目四匁八分アリ、此事ハ奥ニ記ス

按ニ、大判金目四十八匁ヲ以テ一枚トス、是室町家ノ流例トアリ、然レドモ四十八匁ニテハ不レ可レ有、四十四匁ナラン、尤其時代ノ大判ニ、掛目不同アリトイヘドモ、大抵四十四匁ヨリ、重キハ五六分アリテ、五匁ヨリ五十目ノモノナシ、尾州淸洲三王地中ヨリ掘出ス判金ノ中ニ、五十目・七十目・百目ニ至ルトアレドモ、是ハ切遣ノ殘挺ニテ、其中ノ大判ハ、四十四匁有ベシ、未ダ眞物ヲ不レ見、依テ難レ定レ之、大判ノ部ニ出ス、天正十九年トアリ、判金是モ量目四十四匁餘アリテ、其餘ノ判金、大抵皆四十四匁二分ヨリ上ハ、少々重キモアレドモ、右四十八匁ト云ハ不レ詳、此時小判ト云コトナク、依レ之金目四匁八分ヲ以テ、小判ヲ始テ制シ通用スト云、此金目四匁八分ト云モ、右大判、掛目四十八匁ノ積ニテ、墨判ニ十兩ト書據ヨリ出タルトミエタリ、文祿・慶長ノ小判、量目四匁七分六厘ニテ、大判四十八匁ト云、數目ニ不レ當、信長公時代ヨリ、大判ハ量目四十四匁ナリ、然ルニ小判ヲ四匁八分ト云量目ニ擬センタメ、大判ヲ四十八匁トセシナラン、尤關八州ヘ通用セラレシハ、武藏判ナルベシ、遺老

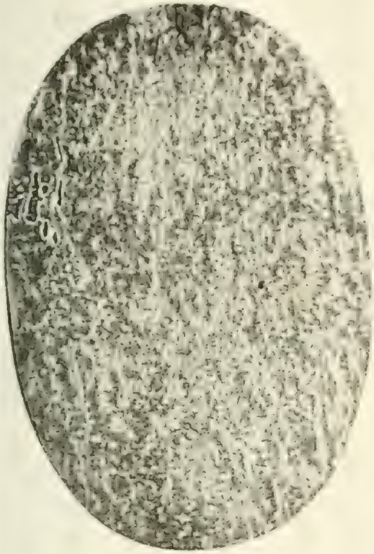
物語ニ云、權現樣御代、文祿二巳年、初テ金銀ノ改被二仰付一、同四年、江戸・駿河兩所ニテ小判拵立候、金ノ位小判一兩ノ目御直ニ奉レ伺相定リ申候、此小判ニ墨ニテ光次判ト書記シ申候、是ヲ武藏小判ト名ヅケ申候、其後慶長五子年、右墨判ニテ記候ヲ、極印ニ直シ候樣ニト被二仰付一トアリ、右ノ趣ニテハ、文祿四年武藏小判ヲ造制セラル趣ナリ、武德編年集ニハ、天正十九年トアレドモ、文祿四年迄ハ、纔四五年ノ間ノコトニテ强テ論ニ及バズ、江戸ニテ鑄ルヲ武藏小判トイフ、駿河ニテ吹クヲ駿河小判トイヘドモ、同所ニテ造リ江戸ヘ廻シ、江戸ニテ後藤改メ光次墨判ヲシテ出ス故、兩所ノ甲乙無レ之、何レモ武藏小判ニテ通用セシナラン、又京目一兩小判アリ、大抵墨判金色武藏小判ニ似ヨリタルモノナレドモ、是ハ駿河バカリニテ行ハレシモノナルベシ、金色駿河巴判ト同ジ、右武藏小判、慶長五年ニ極印ニ改ラルト有ルヲ以テミレバ、京目一兩小判ハ量目モ違ヒアリテ、武藏小判ト一列ニ通用アリシモノトモ見エズ、駿河吹ノ金銀判數品アリテ、京目一兩判モ其中ニテ、右武藏判ト一列ニ江戸ニテ鑄ルモノトハ見エズ、右駿河判ノコトモ、其頃ハ國々金銀形制一定ナラズ、是ニ依テ同所ニテ鑄ル金銀判數品アリ、猶大判ノ部並セ見ルベシ

京目一兩判

重サ四匁二分五厘



（黄色）



（仝上）

金銀圖錄ニ云、此金ドモ名ヅケテ京目一兩ト云、今改テ駿河小判トス、右邊ノ二字ハ駿河ナリ、武藏小判ト併セ見ルベシ、是紳書ニ所謂ル、文祿四年江戸・駿河兩所ニテ造ルト云モノ、蓋シ是ナラン歟ト云ヘリ、右京目一兩トアレドモ、京目ハ重サ四匁五分ナリ、右四匁二分五厘トアルハ疑ハシ、緣ヲスリ落シタルモノナラン歟、正判未レ見

半兩判

量目二匁四分

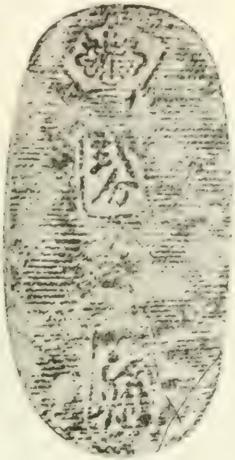


（薄墨色）

（仝上）

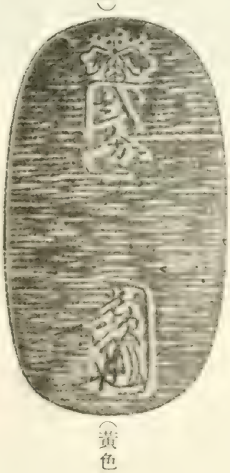
但シ此半兩判ト云ハ、武藏小判ノ半金ナルベキ歟、墨色金色武藏小判ニ類ス

太閤二歩判

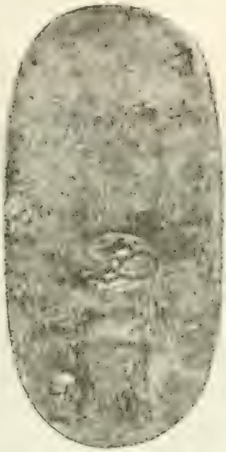


（薄黑色）

量目二匁四分五厘



（黄色）



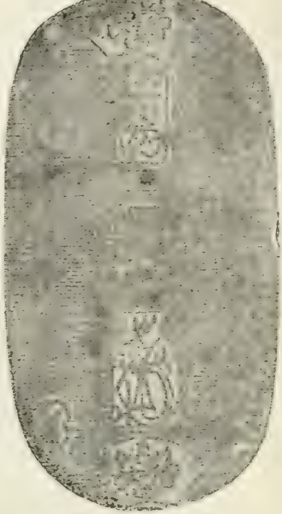
（仝上）



（仝上）

太閤一兩小判金（慶長駿河吹ナラン）

量目四匁八分



（淡黒色ナリ）

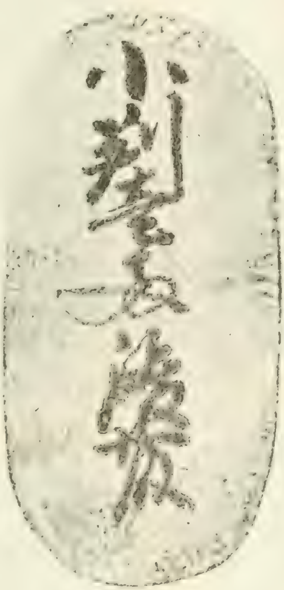


（仝上）

但シ太閤ノ一兩小判二分判ト云コト、人口ニ傳フルノミニテ、予未レ見ニ正史ニ寶貨事略ニ、天正十六年、大判・小判ヲ造ルトアレドモ、大判ハアリテ小判ノコトハ、京都官家幷寺社ノ古文書ニ不レ見、遺老物語ニ、後藤云、文祿四年始テ小判ヲ造趣、其以前小判ト申事承リ不レ申トアリ、然レバ武藏小判其始ナルベシ、右太閤小判二歩判ト云モ、皆關八州通用セラルベキ爲ニ命ニ庄三郎光次ニ江戸ト駿河ニテ造ナラン、太閤大阪主城ニテ造ラレシモノナレバ、太閤飯依ノ京都寺院ノ佛事布施等ニモ專ラ用ヒラルベキニ、小判ト云名目不レ見、依テ玆ニハ皆江戸吹・駿河吹トシテ文祿ヨリ慶長初年ノモノトス、尤太閤在世ナレバ其時代ト云テ可ナラン、然レドモ關東ニテ命ゼラレシモノナラン

會津舊事雜考、文祿四年ノ條ニ、小判金始用ト云、其頃早奥州邊迄モ通用セシニヤ、小判ハ左ニ記ス

武藏小判ナルベシ、敎圓私記ニ云、昔黃金何枚ナドト申候ハ、只今ノ樣ニ無レ之、竹流シト申テ、兩目四十四匁二分、棹金ニテ候、內二分ハ入目ノ由、其金ヲ賣買致シ、皆勝手ニ細工ニ打延候テ通用致シ候、兩目大判小判色々有レ之候、其後今ノ大判、段々被レ爲二仰付一候由、其後國々ヨリ出候金ハ、皆御物へ被レ爲二召上一候、其位ノ目利定ハ、後藤庄三郞殿引請、小判ニ御仕立、兩目大方四匁八分或ハ五匁モ有レ之候、則庄三郞殿自筆ニテ

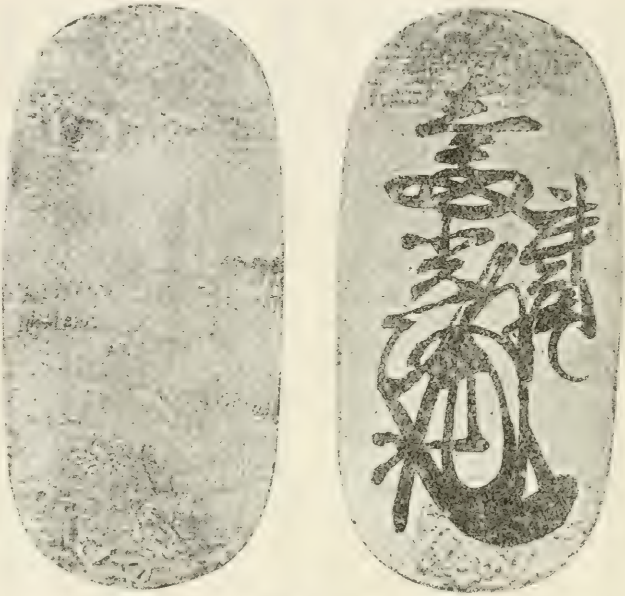


（極濃黑色）

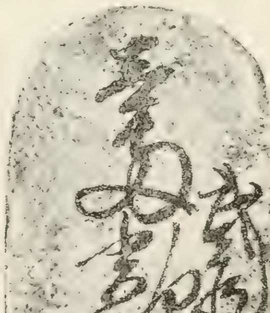
古キ家ニハ、今モ有レ之候ハン、墨判ト申候ハ是也、御調法ニ相成候、其時代公方樣、庄三郞へ御上意ノ趣、小判ノ儀、末代迄ノ調法ノコトニ被レ爲二思召一候、然レバ兩目ト金ノ位ヲ、永々無二相違一樣ニ有度コトニ被レ爲二思召一候ニ付、庄三郞申上ラレ候樣ハ（下略、餘ハ慶長金掛目ノヿ故、大判ノ部ニ委ク記ス）

右ニ出ス圖、極印モ無レ之、墨判許ト見ユ、是關八州へ通用セラレシ小判ナルベシ、遺老物語ニハ、

慶長五子年、始テ極印仰付ラレシコト有レ之、然レバ今現存セル極印有レ之、武藏小判ハ文祿ノ制ニテ、金小判ハ其儘用ヒ、慶長五年ニ到リ、墨判ノ上ヘニ極印ヲ打添ヘシモノナラン



（薄墨色）



（ヤヽ濃シ）

右武藏小判量目ノコトハ、大判ノ部ニ記ス、四匁七分六厘ナル故、武德編年集ニハ四匁八分ト云フナ

ルベシ、又金錢四倍增ノ積リヲ以テトアルモ不レ解、金錢ノコト昔ヨリ有リシ趣ナレドモ、廢帝ノ天平寶字四年ニ鑄テ、其後鑄シコトナシ、星霜ヲ經テ、太閤ノ代、天正・文祿年ノ頃、永樂ノ金錢ヲ鑄サセラルト云傳フ、然レドモ正史ノ類ニ不レ見、又弄錢家ノ愛スル永樂之金錢、其餘桐ノ紋ノ金錢等實ニ是ナルカ、云傳ヘノミニシテ不レ詳、又關東ニテ永樂錢通用ノ頃、諸侯私ニ鑄テ軍役賞賜ノ用ニ設ケシニヤ、猶錢ノ部、永樂金錢ノ所ニ論レ之、右天正・文祿ノ頃、豐臣命ゼラレシト云、金錢凡量目一匁二分有、是ヲ證トシテミレバ、四增倍ノ量目四匁八分アリ、疑ラクハ武德編年集ハ、是ニヨリテ記セルモノ歟、乍レ併天正十九年トアレバ、永樂ノ金錢モ其頃鑄シモノニテ、昔年ヨリアリシト云コト論ニ不レ當、何レ詳ナラズ

右天正十九年ノ頃ハ、未ダ秀吉公御在世ナレバ、德乘ハ大阪ニ在シナルベシ、秀吉公薨ジ玉ヒシ後、神君ニ事フ、秀吉公薨去ハ慶長三年ナリ、德乘秀吉公ニ初テ食衣ヲ受テ仕ヘシハ、天正九年巳ノ九月ト云ヘリ、右慶長三年迄ハ年數十八年大阪ニ在シナルベシ、駿府政年錄ニモ、後藤庄三郎光次トアリテ、於ニ駿河ニ屢々御奉公相勤メ、此庄三郎ト云フハ德乘ト別人ナラン、然レドモ光次ハ德乘ノ名乘故、一人トモ見ユレドモ兩人ナルベシ、右駿河吹・江戶吹ノ金、都テ庄三郎光次制作ナリ、右武藏判初メ大判ノ部ニモ圖ヲ出ス、往古ノ金銀極印モナク、墨判バカリニテ通行セシハ、金銀ノ少キト性ノヨキニテ、今ノ如ク細工ノ巧ナラザルニヨリ、僞作ハナカリシナリ、僞作ハ文祿以來、金銀ニ歩ノ入ショ

リ起ル、徂徠先生ノ政談ニ、金銀ノ性ノヨキハ、何ノ詮モナキコトナリト云ルハ、甚其意ヲ得ズ、愚按ハ、錢ノ部ニ記ス如ク、欲ニ耽ル世ノ奸民、金銀ノ性ノヨキハ何ノ詮モナキト心得ルヨリ、極印サヘ正シケレバ、金銀ハ銅ニテモ通用無レ妨、紙鈔ヨリハ又益ナラント、是ヨリ極印ヲ巧ニ僞作シ、世ニ贋金銀ノ多ク相成ル、欲ニ身ヲ亡ス罪人又多シ、可レ恐可レ歎、武徳編年集ニ云、慶長五庚子年八月、濃州岐阜中納言秀信ヲカタラヒ、關ケ原ヘ出陣サセントシテ、秀頼ノ命ト稱シ欺レ之、三成微行シテ岐阜ノ城ヘ入、黄金百枚ヲ贈ル、秀信困究ノ上得レ之大ニ悦、追テ彼ノ黄金ヲ熟見スルニ、頃年石田ガ密ニ職人浮具庄助ト云モノニ課セ、佐和山ニテ拵ヘシ似セ金ナリ、爰ニ於テ秀頼ノ命ト云モ、如レ斯僞計ナラント、岐阜ノ群臣臍ヲ噬ト云々

又何ノ年カ、銀座ノモノ出奔シテ長州ヘ下リ、沖ノ遠島ニテ竊ニ贋金ヲ鑄ル、終ニ露顯シテ召捕レ、嚴科ニ處セラルト云、其實ハシラズ、世人是ヲ長門似セト稱シテ其巧ミナルコト兩替屋ノ者モ正銀ト見誤ルモノ少カラズ、古今奸賊ノナス所可レ恐

柳營秘鑑ニ云、天正十壬午年五月、權現樣泉州堺、御見物トシテ御越ノ節、六月二日、京都ニテ信長公、明智ガ爲ニ御生害、權現樣ニモ御人少々召連ラレ、伊賀ノ山越ヲ經テ、岡崎ニ被レ爲レ歸、道々一揆多シトイヘドモ、伊賀ノ土民共出デ、之ヲ追拂ヒ御奉公申シ、勢州白子マデ送リ奉ル、之ヲ伊賀越ト今ニ云傳フ、此節三州吉田マデ、權現樣ノ御供仕モノ三人アリ、大橋左馬允。後藤庄三郎。小笠原小

太郎等ナリ、鈞命ニ依テ庄三郎ハ金座トシテ、一步小判ノ制作者トナル、小太郎ハ江戸、三年寄ノ隨一タルベシト仰付ラル、後チ奈良屋市左衞門ト云ハ是ナリト、又云、小判ノ儀、關ケ原御陣以前、後藤庄三郎ニ仰付ラレ小判出來、光次ト書判共ニ極印仰付ラルト云

遺老物語ニハ、文祿四年トアリ、武德編年集ニハ、天正十九年トアリ、柳營秘鑑ニハ、天正十年トアリ、然レバ十年ニ金座ヲ免許アリテ、十九年ノ頃、大判・小判ヲ鑄サセラル、カ、年ノ不同ハアレドモ、何レ其頃ナルベシ、三河後風土記ニ、天正十八年八月八日、武州江戸ノ城ヘ移徙アラセラル、トアリ、此翌年十二月ヨリ追々鑄サセラル、歟、其後慶長年ニ至リテモ、金小判ハ駿府ト江戸・佐渡ニテ鑄、其後又京ニテモ鑄ル、都テ慶長金ト云、此慶長金モ江戸吹ハ位ヨク、駿河吹ハ位惡シシト也、秘鑑ニ云、後藤庄三郎ハ駿河ニテ金座ヲ仕、光次小判ヲ定メ、京・江戸・佐渡ニテ金ヲ吹タリ、其外方々國々ニテモ吹テ、其吟味ヲ駿河ヘ遣シ、後藤庄三郎ガ判ヲ取テ世上通用ス、大法十二兩替定也、然ルニ十二兩替ニシテ遣フト雖ドモ、金ノ色アシ・ク見ニクキ由ニテ、後藤ガ判ヲセズ、然ラバ方々國々ヨリ造リ、遙々遣シタル襍用又損金モ多キニ付テ、定リタル十二兩替ヨリハ過分ヨク仕立テテ判ヲ取ル故ニ、慶長金ハ十二兩替ヨリハ宜シキト也、駿河吹ト云フ小判ハ位アシヽトナリ、駿河ニテ後藤ガ御定ノ通十二兩替ヲ以テ吹立ル故、他國ノ金ト合セテハ位アシク色モアシシトナリ、右ノ通京・江戸・佐渡ニテ吹キシトナリ、然ドモ極印ハ是非トモ駿河幷ニ江戸ヘ遣シ、後藤方ニテ是ヲ打チ、世間通用セシトナリ、

依レ之後藤ヘ遣ス故、金ノ出來アシケレバ、又々吹直シ拵有テ、モトノ國々ヘ還ス時ハ、彼是ト雜用失却カヽリ迷惑ユヱ、後藤方ニテ、納リ易キヤウニ、念ヲ入テ吹ユヱ、自ラ他國ノ金ハ位ヨキト見エタリ、但十二兩ト云ハ、十二双替ノコトナラン歟、然レバ金小判、量目四匁八分ナレバ、代銀五十七匁六分ナリ

寳貨事略ニ云、天正十六年、初テ黃金大判・小判ヲ造ル、織田殿ハ財ヲ生ズル才略オハシケレバ、國富ミタリ、秀吉公又其才オハシタレバ天下ヲ知給シヨリ、天下ノ財ヲ聚斂シテ國用ヲ足サレキ、天正十六年ニ新タニ大判・小判等ヲ造ラル、是世ニ天正十六年判ト云

但シ是ヨリ三年前天正十三年ノ秋ニ、金賦トテ大名・小名ニ、金銀ヲ給ヒシ事アリ（金五千枚 銀三萬枚）サレバ其頃既ニ大判・丁銀等アリ、右ノ十六年ノ制トハ同ジカラザルカ、慶長四年始テ造二一歩判一

此ノ年ハ秀吉公薨ジ給ヒシ明年ニテ關ケ原前ノコトナリ、思フニ秀吉公ノ末年ニ此事ヲ巧ミ出サレテカクレ玉ヒ、後ニ功ナリテ世ニ行ハレシナルベシト云

按ニ、遺老物語ニ、小判ノ儀、先祖庄三郎ヘ被二仰付一候以前ハ、小判ト申事有レ之歟、承リ及ビ不レ申候トアリ、又成田氏金銀譜ニモ、天正九年德乘小粒ヲ造ル、小判ハナシ、此小粒四ツヲ以テ一兩ト定メ、文祿年ヨリ以前ハ小判ト云フコトナシト云ヘリ、尤是ハ後藤家ノコトニシテ、其ノ餘國々ニテモ諸侯私ニ鑄シヤ、其事ハ不レ詳、一歩ノコトハ慶長五年始メテ出來候趣ハ、遺老物語ニアリテ、慶長ノ

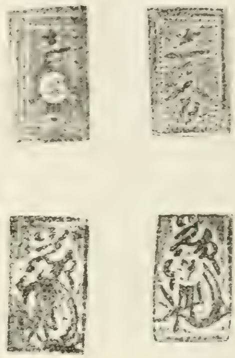
歩判ナルベシ、右金銀譜ニ天正九年ニ小粒ヲ造ルトアルハ、太閤ノ丸一分ト云フ圓金ニテ、角一歩トハ別段ナリ、文祿年以前ハ、小判ト云モノ無レ之ト云說ヲ以テ考ルニ、多門院日記、大德妙心寺等ノ銀錢納下帳、其餘京地ノ古文書等ニモ、永祿・天正年ニハ、判ノ金、又ハ黃金何兩トアリ、小判・小粒等ノ名目不レ見（但シ古書ニ、一兩二兩・一歩二歩トアルハ、砂金通用ノ掛目ニテ、今ノ小判・歩判ニテハ不レ可レ有、物價ノ部ニ記）

實貨事略ニ、天正十六年大判・小判ヲ造ルト雖ドモ、大判ハアリテ小判ノコトハ甚ダ疑アリ、今天正小判ト云フモノアレドモ、是又疑ハシ、皆慶長金ニ極印ヲ打チ添ヘ人ヲ欺ク類アリ、然レドモ是モ臆說ニテ、其精密ナルコトハ不レ知、猶ホ後ノ考ヲ竢ツ、尤モ永祿・天正年ノ間、銀一枚、量目四十三匁ヅツノ挺銀ハ有リシト見エタリ、銀ノ部ニ出ス、室町殿時代ノ丁銀是ナリ、然レドモ公用ニノミ用ヒ、其餘ハ皆金銀共大判ノ外ハ切リ遣ヒニテ、金ハ量目四匁四分ヲ黃金一兩トシ、銀一枚、四十三匁ニ當テ、黃金十兩量目四十四匁ヲ判金一枚トシ、是ヲ銀十枚、四百三十目ニ當テ通用ス、（米金物價ノ部ニ並セ考フベシ）

太閤圓金壹歩　重サ一匁二分



同大阪壹歩



重サ一匁二分

武徳編年集ニ、慶長十乙巳年十二月、後藤庄三郎光次ニ命ジ、金一歩判ヲ始テ造ラセラル、其重サ、一錢二分ト云々、是ハ慶長一歩ナラン

遺老物語ニハ、慶長五子年、此節始テ一歩判ヲ造ル趣ミエタリ、年月ノ不同不審、右慶長五年ハ關ケ原御陣ノ年ナリ、然レバ其騒動中故、金銀ハ江戸・駿河・佐渡ニテ鑄ラレシ事勿論也、寶貨事略ニ云、關ケ原前年ニ鑄ルナラント云、一歩判ハ、右ニ出ス大阪一歩判ナルベシ、右江戸・駿河ニテ吹一歩判ハ慶長ノ歩判ナルベシ

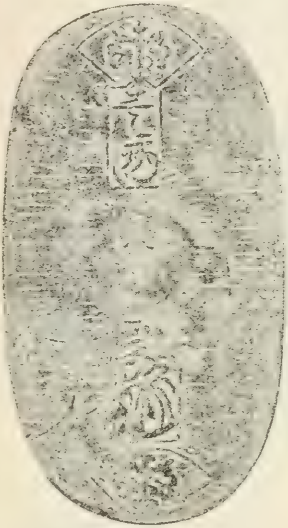
成田金銀譜ニ云、金座根元後藤徳乘、天正九年蒙二上意一金ヲ吹始ム、是ヲ徳乘小粒ト云、掛目一匁二分小判ハナシ、小粒四ツヲ以テ一兩ト定ム、後藤系圖ニ云、天正九年辛巳九月十三日、秀吉公賜二衣

食ハ金銀座ノ上意ヲ蒙リ、御扶持頂戴ス、其後慶長ニ至リ、豐臣薨ジ、家康公於二駿河一金座被二仰付一（下略）

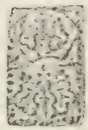
寶貨事略ニハ、慶長四年、始テ造二一分判一トアリテ、是ヨリ前ニ一歩判有事ヲ記セズ、然レバ圓金ハ慶長以前、天正年ノ始ノ小粒ナルベシ、小粒ト云フハ圓キヲ以テ云ナラン、今角金一歩判ヲ小粒ト云ニハ當ラザレドモ、右圓金一歩ヨリ世俗云ヒ馴ラヒ來ルナラン、圓金量目一匁二分四ツヲ以テ、金一兩ニ當ルト云フ、然レバ一兩量目四匁八分也、黃金一兩ト云フハ、量目四匁四分ニテ今四分ノ違アリ、思フニ圓金ハ公用ノミノ物ニテ、古文書等ニ有レ之、交易ノ用ニ遣モノニテハ無レ之、大抵黃金一兩ニ當テ、賞賜ノ用ニ設ラレ、金錢・銀錢共ニ双ベ用ラレシモノニテ、交易ノ用ニ通用セシモノニテハナカルベシ、德來ノ事ハ後藤系圖ニ云ク、慶長ニ至リ太閤薨ゼラレシ後、駿河ニ事ヘ金座トナルトアリ、柳營秘鑑ニハ、伊賀越ノ勤功ニヨリテ、金座ヲ免許セラルトアリテ、何レ不審ナリ、思フニ德乘ハ秀吉公ニ仕ヘテ金座トナリ、弟子庄三郎ハ、最初ヨリ駿河ニ事ヘ、勤功ニヨリテ又同所ニテ金座トナリテ、師弟兩人ナルベシ、光次ト云ハ德乘ノ名乘也、又庄三郎モ光次ト云ヘル歟、何レニテモ師弟ノ事故、其頃造ル金ハ大阪・駿河・江戶共ニ、光次ト極印セシモノナラン、駿河ニテ吹シ小判故、駿河小判ト云フ、則慶長金ト同ジ、江戶ニテ吹シ小判ヲ江戶小判ト云、其頃ハ京・江戶・佐渡ニテ吹シ金、都テ慶長金ナリ

駿河吹小判　　量目四匁八分

江戸吹小判

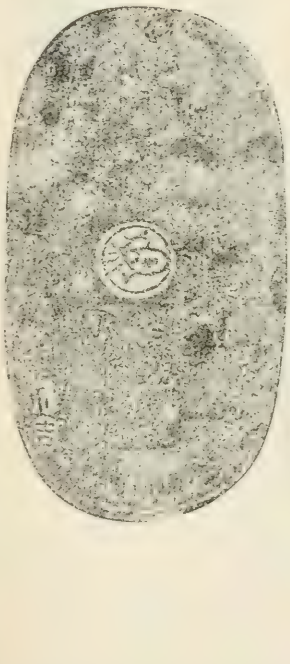


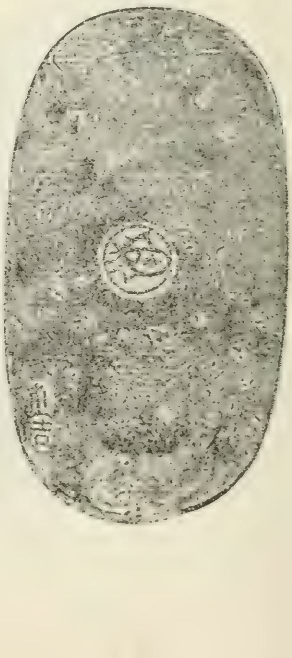






量目四匁八分





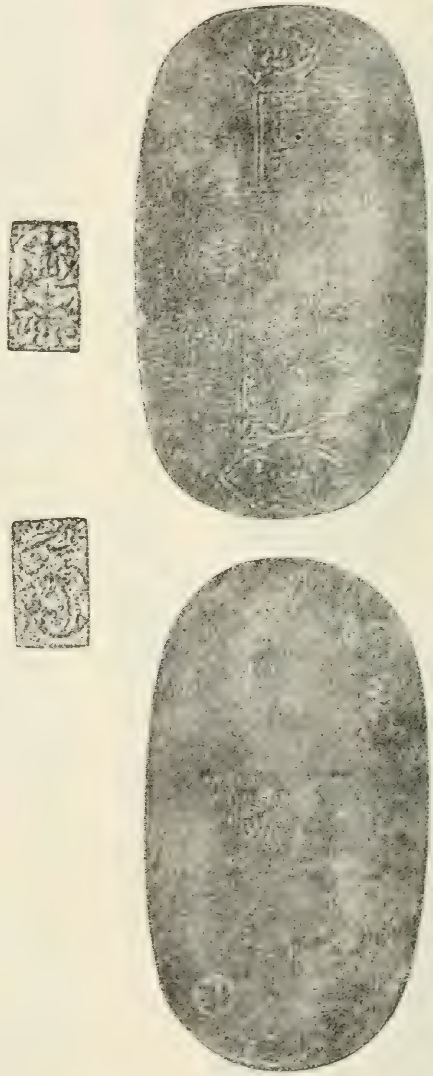
京吹小判



量目四匁八分

佐渡吹小判

量目四匁八分

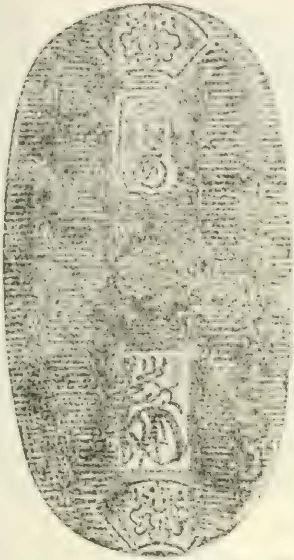


三貨圖彙卷之十 金之部

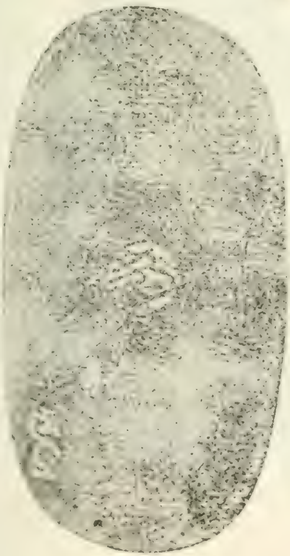
草間直方輯錄

慶長金ハ、或書ニ云、往古ハ國々、山々所々ニテ切遣相用ユ、慶長六年巳年、於二駿府一被二仰出一候者、國々金銀取扱ヒ、位高下有レ之、交易不自由ニ付、金銀座御取立、金銀ノ位一ト手ニ被二仰付一ト云々右慶長金ノ由來、別卷ニ出ス、但シ外見ナ不レ免ノ由申傳、依テコヽニ省ク則後藤庄三郎製レ之、是ヨリ以來、光次ヲ以テ代々極印ス

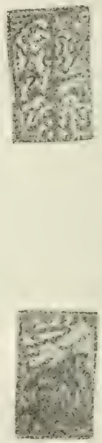
慶長小判　縦二寸四歩　横一寸二歩　重サ四匁八分



裏

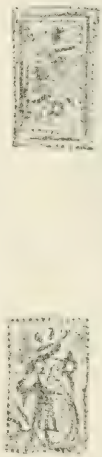


同一歩判



縦六歩
横三歩
重サ一匁二分

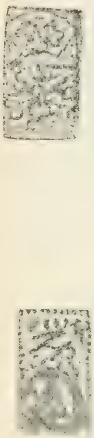
同萬兩一歩



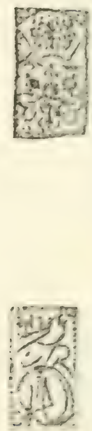
右ニ同

是ヲ慶長萬兩一歩ト云、金一萬兩ノ數トリニ、一歩吹ト云、千兩ニ一歩吹トモ皆不レ詳、コレハ寳貨事略ニ云、關ケ原ノ前年ニ鑄ルナラント云、歩金ニテ前ニ記ス大阪一歩ト云モノナリ、又慶長・文祿・乾金・新金・文金ニ、一歩逆桐ト云テ、千兩ニ三歩ヅヽ逆ニ桐ノ極印ヲ打ト云、是又不レ詳、又慶長一歩ナドニモ、本ノ字打タルモ、前文ニ記ス萬兩一歩ノ類ニシテ實ハ不レ詳

本ノ字一歩

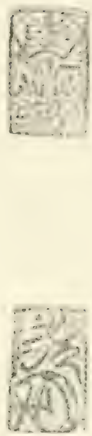


南本一歩



重サ一匁二分

逆一歩



佐渡小判



重サ四匁八分

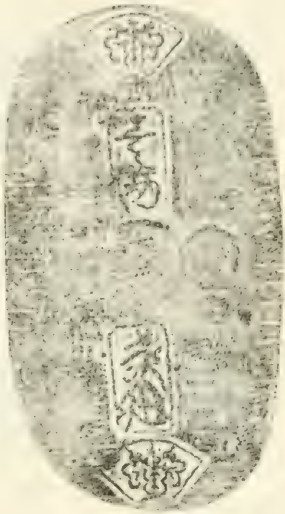




重サ一匁二分

右慶長金、元祿年中マデ通用有レ之、所々段々金減ジテ國用乏シキユヱ、元祿八乙亥年、百十四代東山院御宇、新ニ金ヲ吹セラル、此金雜ゼ物有レ之、位アシキ故ニ僞作モ仕易ク、因テ僞作ノ罪人モ多ク出來、士民流布ナレザル故、皆欺ヲウケ罪人磔刑ヲ被レ、右元祿金ハ、荻原近江守殿工夫ト云傳フ、其是非ハ知ラズ、元來ハ異朝ニテモ、寳鈔トテ紙ヲ以テ金銀ニカヘテ天下ニ通用ス、夫サヘアルニ、タトヘ金銀ノ位劣タリトテ、右ノ寳鈔ニハ比ブベキニアラズ、（此事、寳永二年ノ制令ニモ有）コレニヨリテ金銀ノ位ヲ引下ゲ、銀錫ヲ雜ヘ增鑄シ、天下ニ通行セバ金銀萬倍シ、財用豐カニシテ貴賤ノ便利ナルベシトノ考ヘナラン、寳永ノ銀モ右同意ニテ、紙鈔トクラブル故、增シ鑄ルタビゴト位アシク、自然ト國民服セザルヤウニナレリ、右紙鈔ハ異朝ニテ金。元ノ世、用度乏シクハジメテ起ル、本邦元弘年中、後醍醐帝ノ御宇始メテ起ル、其ノ後亂世打ツヾキ紙鈔ノ沙汰ナシ、後世ニ及ンデ諸國銀札ハジマリ、又ハ錢ヲ鑄ルニ銑ニナリ、其ノウヘ甚ダシキハ土砂モマジリテ至ツテ錢下品ニナリ、割費ユルコト夥シ、右元祿金ノ位アシキニヨリ諸人服セズ、自然ト古金ヲ貯ヘテ、世上新元祿金多シ、コレニヨツテ諸色直段高直ニ成ル、（物價ノ部並可レ見）古金引替ノ儀ハ追テ被ニ仰出一ソレマデハ新古取交通用ス（被仰出三字原本ニハナキモ原本ノ脱誤乎）

元祿小判

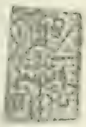


重サ四匁八分
縱二寸二步
横一寸二步

裏



同一步判





縱五步
横三步
重サ一匁二分

京吹一歩





御觸

一　金銀極印古く成に付、可㆓吹直㆒旨被㆓仰付㆒候、且又近年山より出候金銀も多無㆑之、世間の金銀も次第に減じ可㆑申に付、金銀の位を直し、世間の金銀多出來候ため被㆓仰付㆒候事

一　金銀吹直し候に付、世間人々所持の金銀、公儀へ御取上被㆑成候にては無㆑之候、公儀の金銀、先吹直し候上にて世間へ可㆑出㆑之候、至㆓其時㆒可㆓申渡㆒候事、以上

元祿八年亥八月七日

右御觸後、追々新金銀出來ニ付、元祿九子年九月ヨリ、古慶長金銀ト引替可㆑申、其節ハ金銀トモニ増歩ヲ可㆑遣趣被㆓仰渡㆒、此増歩有㆑之候ハヾ、追々引替ニ可㆑出ト存ジノ外、新金銀位アシキ故、自ラ古金銀ヲ貯テ出サズ、是良金ナル故ナリ、尤モ一兩ハ新古トモ、一兩ニテ引替レバ、眼前増歩ノ徳アリトイヘドモ、新金銀位アシキ故、古金銀引替ニ出サズ、彼寶鈔ニクラベ喩ヘテモ、民不㆑服、天下金銀ヲ増ノ益ハアレドモ、民服セザルニヨリ、却テ煩ヒトナル

定

一　今度金銀吹直し被ニ仰付一、吹直り候金銀、段々世間へ可ニ相渡一之間、在來金銀と同事に相心得、古金銀と入交、遣方・請取・渡・兩替共に無レ滯用ひ可レ申候、上納金銀も右可レ爲ニ同事一

一　新金銀、金座・銀座より出レ之、世間之金銀は引替候、其節金座共に員數を増可ニ相渡一事

一　金銀町人手前より被レ成ニ引替一候間、武家方、其外之金銀は勝手次第、町人へ相渡引替可レ申候

附古金銀貯置不レ申候而段々引替可レ申事

右之條々、國々所々に至るも可レ存ニ此旨一者也

元祿八年亥九月日

右之通今度於ニ江戸一被ニ仰付一候間、三郷市中、可ニ觸知一候、以上

右ノ通被ニ仰渡一候得ドモ、兎角引替不レ申、先新古取交通用スレドモ、多分古慶長金銀ハ貯ヘ不レ出、依レ之古金銀通用停止セラルレバ無レ據引替、新金バカリ通用スベキ趣ニテ御觸出ル

覺

一　吹直し金銀、段々出來寄候間、面々所持之古金銀、兩替屋へ聞合せ、無ニ油斷一新金銀と引替可レ申候、吹直新金銀出來之上は、古金銀通用可ニ相停止一之間、可レ存ニ其旨一候、次に灰吹銀も吹直し候間、同前に可ニ相心得一事

右之趣、去十日於ニ江戸一被ニ仰付一候間、三郷町中可ニ觸知一者也

元祿九年子七月二十六日

美濃
甲斐

覺

一、今度本郷にて金銀吹直し候場所之外、一切金銀吹直し申間敷候、自然脇より吹直し候者有レ之歟、又は似金銀、拵へ候者有レ之者、早速訴へ可レ出、假令同類たりと云ふとも其科をゆるし、急度御褒美被レ下、其上あたをなさゞる様に可ニ申付一候、若し隱し置、後日に外より顯はるゝにおいては、其身は不ニ申及一、諸親類幷所之者迄、可レ爲ニ曲事一もの也

子七月

右之通、今度於ニ江戸一被ニ仰出一候間、三郷町中可ニ觸知一候、以上

元祿九年子八月十二日

美濃
甲斐
玄蕃

右ノ通、被ニ仰出一候ヘドモ、元來山々ヨリ金ノ出方無數、依レ之今マデ通用ノ古金銀引替、集リ次第、

追々ニ銀・錫ヲ加ヘ雜鑄シ、新金銀ニ吹直シ、民間ヘ引替ニ出サル、然レドモ古金銀隱シ貯ヘテ、世間ニ無數、因テ引替ニ出サス、ソレニツレ鑄直スベキ手段モ殆ンド盡ントシ、イカントモナシガタシ、是ニヨリ一旦古金銀通用停止セラレヌレドモ、無ㇾ據又來ル寅年迄、年限ヲ定メ通用ヲ免ゼラル

覺

金銀吹直に付、古金銀と新金銀と、彌引替可ㇾ申候、御料は御代官、私領は地頭より申付、遠國に至る迄、古金銀不ㇾ殘候樣、引替させ可ㇾ申旨、尤も金銀之儀者、來寅三月迄は唯今之通、新金銀と一樣に用ひて、其以後は古金銀通用相止め、新金銀計可ㇾ用ㇾ之間、可ㇾ存二其旨一候、若滯儀有ㇾ之候はば金銀吹直し候場所迄可二申出一候、以上

丑四月

右之通、今度於二江戸一被二仰出一候間、三鄕町中可二觸知一者也

元祿十年丑五月十七日　美濃

甲斐

右ノ通觸レラルレドモ、兎角古金銀引替無數、其上金銀新古トモ通用不便利ニナリ、民ノ煩トナリ、市民甚喧シ、依ㇾ之、又古金銀通用ノ停止ヲユルメ、來卯年三月迄通用ヲ免ゼラル、此以後ハ、聢ト停止ト云コトモナク、只古金銀殘シ貯ヘ不ㇾ置、新金銀ト引替可ㇾ申、其上ニモ差支ノ儀モ有ㇾ之バ、吹

替掛リ御奉行迄可ニ申出一トノ事

御觸

覺

一　古金銀を新金銀と引替候儀、當三月を限り候樣にと去年四月相觸候處、今以古金銀相殘り有レ之由に候、遠國渡海など有レ之所者、通路不自由之由にて引替相殘り候儀も可レ有レ之間、來卯三月を限不レ殘引替候樣に、御領は御代官、私領は地頭より其所々へ申越、古金銀不レ殘引替之樣に可ニ申付一候、若し差支之儀有レ之に於ては、萩原近江守方へ可レ被ニ相達一、其上にて古金銀殘置候はヾ、可レ爲ニ越度一候、以上

寅三月

右之通、今度於ニ江戶一被ニ仰出一候間、三鄕町中可ニ觸知一者也

元祿十一戊寅年二月七日　美濃

玄蕃

又元祿十巳年六月、始テ二朱金出ル、是ハ世間下々、割遣ヒ便利ナル趣ヲ以テ、鑄レ之サセラル、御觸次ニ記ス

元祿二朱





重サ六分

右二朱金ハ、根元、甲州武田領國ノ時ヨリ、二朱・一朱・朱中トテ國内通用便利ノタメ鑄レ之、其ノ後神君ノ御代トナリ、同國宮原村、松木源十郎ト云モノニ命アリテ、古來ヨリ定ノ通、甲金鑄レ之コトヲ免許セラル、（金ノ部廿一巻ニシルス、依テ略レ之）右古來ヨリ甲州ニモ例有レ之故、民間割遣、通用便利ノ趣ニテ、御勘定奉行金銀吹替掛リ、荻原近江守、工夫ヲ以テ鑄レ之ラル

御觸

一　今度新金にて、二朱金出來、世間へ相渡し候、通用自由之爲に候間、國々所々迄も其旨を存、商賣・請取方・渡し方無レ滯、二朱判を用ひ可レ申候、二朱判者壹歩判之半分之積りたるべき事

一　大判・小判・壹歩判、有來りの通、勿論通用可レ仕事

一　前々より相觸れ候通、似せ金銀仕者有レ之者訴人に出べし、假令同類たりといへども其科をゆるし急度御褒美被レ下、仇をなさざる樣に可ニ申付一候、總て金銀細工仕候者は、其所に而心を付け、少も疑はしき儀を見及聞及候はゞ、早速可ニ申出一候、隱し置き外より顯はるゝに於ては、本人は不ニ申及一、諸親類其所之者迄、可レ爲ニ曲事一者也

元祿十五年丑七月十二日

右二朱金出レドモ、位同樣ニテサノミ民不レ服、又古金銀ヲ新金銀ト引替申儀、元祿十二卯年三月ヲ限リテ、通用免許セラレケレドモ、兎角ニ引替無レ數、依レ之同年四月ニ御觸ヲ出サル

一 古金銀、當三月迄に、新金銀にかへ可レ申旨被ニ仰付一候得共、遠國他國に未だ古金銀可レ有レ之候間、此以後も只今迄之通りにかへ可レ申旨、被ニ仰渡一候事

右之通、今度於ニ江戸一被ニ仰出一候間、三鄕町中可ニ觸知一者也

元祿十二年卯四月朔日

右之通、被ニ仰渡一候得共、一向引替無レ數、依レ之今迄ノ通、御觸等ナクシテ、市民新古金銀無レ構取交通用ス、然ル處此度ノ元祿金銀出デ、天下金銀倍シ、融通自由ナルベキニ、世間古金銀ヲ隱シ貯ヘ、出サザルニヨリ、却テ又金銀不融通ニナリ、市民苦シム、別テ古金ハ良金ニテ、其上隱シ貯フニ便利ナル故、彌々以テ世間古金無レ數ニヨリ、市民專ラ銀錢ヲ日用ニ取扱フ故、於レ爰又銀錢世間ニ拂底ニナリ、彌々民苦シム、因テ又制令ヲ出サル

覺

一 銀子之儀、御藏元拂、金子一兩に六十目替之積り候間、世間准レ之、金子壹兩に銀六十目替之積り可ニ相心得一候、乍レ去兩替屋共指引之利潤可レ有レ之候間、當年より來年十二月迄、金子壹兩に銀五十八匁より高直に仕間敷候事

一　錢之儀も御藏元拂、金子一兩に四貫文之積り候間、世間准レ之、金子一兩に錢四貫文之積りに可二相心得一候、是又兩替屋共差引之利潤可レ有レ之候間、當年より來年十二月迄、金一兩に錢三貫九百文より高直に仕間敷候事

右之通可二相觸一候、以上

辰十一月十六日

右之通、今度於二江戶一被二仰出一候間、此旨堅相守候樣ニ、三郷町中可二相觸知一者也

元祿十三年辰十一月十六日　半　右

甲　斐

右銀拂底ニ付、大阪市中へ、銀千五百貫目分、御買金被二仰付一、尤御買金ノコトハ、寬文年中ヨリ、此元祿・寬永年時代迄ハ、大阪市民兩替ハ勿論、何商買ノ者ニ不レ限、富有之者へ被二仰付一、御買金有シナリ、其以後ハ市中兩替ノ者ニバカリ被二仰付一、其仲間ヨリ相庭ヲ以テ買集メ、金高割賦シ取集メ、兩替仲間ヨリ上納ス、右御買上金御觸

口上之覺

一　今度銀子拂底に相聞候に付、大阪御藏銀之內、千五百貫目、當地町金と引替候樣に從二江戶一申來候間、三郷町中へ觸知、望之者於二惣會所一遂二吟味一、來巳正月四・五日兩日之內、御金奉行月番、北

尾市良左衛門宅へ參り、右引替之仕方可レ受ニ指圖一候、以上

元祿十三辰年十二月晦日

右之通、被ニ仰付一候間、望みの仁は、來る三日朝飯後五ッ時、北組惣會所へ、印判持參可レ有レ之候、
其節可ニ申合一候、以上

元祿十三辰年十二月晦日

米屋　彌一右衛門
吉文字屋三郎兵衛
中村　左近右衛門

右ノ通、銀錢拂底ニテ、元祿十三年ノ頃、金一兩ニ銀五十目四五分ヨリ、五六匁、錢三貫五百文位、コレ全ク新金元祿位劣リタルヨリノコトニシテ、如何トモナシガタシ、尤兼テ民間錢拂底ユヱ、元祿四年ノ頃ヨリ、京七條村ニテ、同六年迄錢ヲ鑄サセラル、其後モ江戶龜井戶村ニテモ、數萬鑄サセラルレドモ、イカナル故ニヤ、世間錢拂底ナリ、是ヲ考ルニ、全ク新金ヲ賤ミ用ヒズシテ、錢ト銀ニテノ賣買多ク有レ之故、金ノ代リヲ銀錢ニテ用ユル故、海內廣キコトナレバ、何程錢ヲ鑄テモ不足ナリ、又銀ノ拂底ハ、元祿七年ニ銀ニ歩ヲ入吹改リ元字銀ト云、此銀又位慶長銀ヨリ劣リ候ユヱ、古慶長銀ヲ貴ミ諸人オシカクシ、貯テ出サズ、依レ之新銀元祿バカリ通用スル故、是又海內へ行屆キ候ホド出シ方無レ之、夫故銀拂底ニ相成、何レ新金銀トモ位アシク、民コレヲ賤シムヨリ事起レリ、右銀錢拂底ニ付又

嚴令ヲ出サル

覺

一　銀子錢之賣買、遂ニ相對ニ御定之直段より高直に賣候由相聞候間、左樣之儀堅く仕間敷事

一　銀子錢之通用不自由に成候、雖ニ心得一候間〆賣・買置仕間敷候事

右之趣可ニ相守一之、若相背におゐては急度御仕置可ニ申付一候、總て何樣之譯にて銀子錢拂底に成候哉及見及聞付次第可ニ訴出一候、隱置外より相知れ候はゞ、其所之家主・五人組・名主迄、可レ爲ニ曲事一者也

辰十二月

右之通、江戸町奉行衆御勘定衆より申來候間、此趣違背無レ之樣に三鄕町中可ニ觸知一者也

元祿十四年巳正月二日　善太

半右

右ノ通仰出サル、元來ハ元祿ノ新金民服セザルヨリ起ル、依レ之東國ハ勿論金ヲ以テ交易通用スル場所モ、オノヅカラ銀ヲ以テ直段ヲ定、其代リニ新金ヲ受取事ヲ迷惑ニ及ビ、騷論日々ニ喧シ、依テ制令ヲイダサル

覺

一　諸町人共、賣買之代金銀取遣に付、銀子之代りに金子を取候儀迷惑がり、今以金子通用差支、其

上商賣等迄も相滯、且又請取方は銀子を請取、渡方へは金子にて可レ拂由申掛る類の者も有レ之に付、
末々にて令ニ難澁一之旨相聞候、賣手・買手共に難ニ心得一致樣に候、去冬相觸之通、五十八匁より六十匁
迄之內に、兩替時々相庭を以、金銀共に無ニ差別一通用可レ仕候、たとへば銀子にて直段極候代物、銀
子拂候內へ金子相交へ拂候共、無レ滯取遣可レ致、勿論諸問屋共荷主共へも申聞、手支無レ之樣可レ致候
右之通町中之者並兩替屋共へ申聞、無レ滯樣に可レ致候、此方よりも折々人を出し、可レ令ニ吟味一候
條、若相背者有レ之に於ては、可レ為ニ越度一候、以上

巳五月廿一日

大阪諸藏屋敷、拂米入札始メ、西國邊ハ專ラ銀ヲ用ユ、然レドモ銀不自由ニ依テ、諸色商買代銀通用滯リ、西國筋モ士民共ニ喧シ、依テ追々銀子ノ儀ニ付、御觸ヲ出サル

覺

一 諸大名衆藏屋敷、拂米入札之節、代銀銀子にて可ニ受取一候旨書付、賣場へ差出し候由相聞へ候、金銀同前之儀に候へば、銀子計りにて請取可レ申筈無レ之候、此段藏元幷名代へ申渡、去冬申渡之通り金銀通用無レ滯樣急渡可ニ申渡一旨被ニ仰出一候御事

一 金銀通用之儀、舊冬被ニ仰渡一候通、今以通用相滯、末々之者金銀兩替致候節、手支に罷成候段相聞へ不屆に被ニ思召一候間、愈舊冬申渡候通り、相滯不レ申候樣、急度可ニ申渡一旨被ニ仰出一候事

元祿十四巳五月

覺

一　近年、銀子賣買段々高直に成候に付、銀子貯置候者有ㇾ之候はゞ、相庭之通拂可ㇾ申候、若致ニ買置一候者有ㇾ之ば訴人に可ㇾ出、縱令同類たりといふとも其科をゆるし、御褒美可ㇾ被ㇾ下、且又仇をなさざる樣可ニ申付一候、隱置脇より顯はるゝに於ては當人は不ㇾ申及、名主・五人組迄、可ㇾ爲ニ曲事一者也

右之通、今度於ニ江戶一被ニ仰出一候間、此旨堅相守候樣に三鄉町中可ニ觸知一者也

元祿十四巳八月廿五日

善　太

半　右

三鄉總年寄中

覺

一　銀子幷錢相庭之儀、去年相觸候通、向後彌金子一兩に銀は五十八匁替、錢は三貫九百文替之積りより高直に仕間敷候、右之相場より下直に致候分は勝手次第、若し內證にて相對致、銀子錢共に高直に賣買仕者相聞へ候はゞ、僉議之上可ㇾ爲ニ曲事一、勿論かこひ置候者有ㇾ之候はゞ、其所之者より支配へ可ニ申出一候、存じながら隱し置候はゞ、其所之者迄可ㇾ爲ニ曲事一

一　西國・中國、其外上方筋、商賣物銀遣ひにて金遣ひ候儀、不自由之旨相聞候、向後諸國一統に、金銀共無ㇾ滯通用可ㇾ仕候、當分遣ひ馴れざる內、商賣等差支へざる樣に、御領は御代官、私領は地頭より入念可ㇾ被二申付一候、以上

巳十二月

右之通、今度於二江戶一被二仰出一候間、此旨堅く相守候樣、三鄕町中可二觸知一者也

元祿十四巳年十二月十八日

善太

半右

右之外、御口上にて被二仰渡一之覺

大阪者天下之津にて町人金銀所持之者多く有ㇾ之樣に、於二江戶一御沙汰有ㇾ之候、其上上方筋は、諸色賣買、銀遣ひに致候得ば、銀子多可ㇾ有ㇾ之筈之處、金銀兩替可ㇾ致と申候へば、銀子は無ㇾ之など申段、不屆千萬に思召候、畢竟銀子を買置申樣に思召候、或は藥種など買置致し候を御吟味被ㇾ成候へば、其品早速分明に相知候、銀子たくはへ置、又は買置など申も、金持と申と相紛れ申譯有ㇾ之故、只今迄は御用捨も被ㇾ成候、最前銀子たくはへ置候歟、又は買置候はゞ、急度曲事と被二仰出一候間、向後銀持と申斷者御いはせ被ㇾ成間敷候、御手あて被ㇾ成御吟味の上、不屆者有ㇾ之候はゞ、急度曲事に可二仰付一候、

年度金銀通用の儀被仰渡候得共、町人用ひ不申候、御定法の通り向後用ひさせ被成候間、此旨急度相心得可申候、當地の町人内證にては、猥なる賣買致候段、當所御奉行所よりの被仰付もぬるく候樣に、於江戸御沙汰有之故、御兩殿樣共御難儀被遊候、總年寄共、町々末々申付も、ぬるく候樣に被思召、不屆けに候とて、殊之外御機嫌惡しく候、隨分急度申付候樣にと被仰渡候、近々町中へ御目付御出し被成、急度御吟味可被成候、若し相背候者有之候はゞ、總年寄迄、急度可被仰付由、御意被成候事

元祿十四巳十二月二十一日

右ノ通、三都始メ諸國士民共、銀拂底ニテ甚喧シ、古金銀引替ノ儀モ、今以無數、多分殘リ有之趣、依之追々御觸ヲ出サル略之

右ノ通、度々嚴令アレドモ、兎角引替無之、金銀不融通ニテ、士民モ大キニ困究ス、依之金銀ノ出入公訴ノ分御裁許無之、德政ヲ行ヒ玉ハヾ、自然ト士民モ手廣ク、金銀融通モ宜シカルベキト御沙汰有之ヨリ、又士民貸借ノ道塞ギ、諸色高直ニ相ナル、時勢ノナス所ニシテ、如何トモナシガタシ、全ク金銀拂底ヨリ、民ノ騷動ニオヨビ候ニ付、又寶永二年ニ銀ヲ吹セラル、此銀又銅・錫ヲ交、位アシク民不服、天下銀ヲ增ノ益ハアレドモ、民彌々是ヲ賤シム、夫ヨリ又諸色ノ直段高直ニナリ、昨日迄賤ミタル元祿ノ金モ、右寶永銀、位アシキニ對シテハ、又金ノ位貴クナリ、仍テ金相庭モ引直シ

元祿金一兩ニ、寳永銀六十四五匁ヨリ、八九匁ニナリ、錢ハ又益〻貴ク、一貫文ニ、寳永銀十四五匁ヨリ二十五匁位ニテ、民ノ騷動推テシルベシ金銀相場ノコトハ、物價ノ部ニ出ス、依テ之ヲ略ス右元祿金、位アシク民服セザルニヨリ、古慶長金ノ如ク吹改メ度思召候得共、右元祿金ヲ吹直シ、良金ニ命ゼラルレバ、過半金減ズベシ、然レバ又國用乏シク思召、先ヅ當分ノ御思召ヲ以テ、アラタニ寳永七庚寅年、金ノ重サヲ減ジ小形ノ小判ヲ鑄サセラル、所謂乾金是レナリ

乾字小判



縱二寸横一寸一分

重サ廿二匁五分

同壹歩判



重サ六分二厘五毛

御觸

一先年吹直し有レ之所、新金の位あしく、折損じも出來、通用不自由の事に候、依レ之今度古金の位に宜敷吹直し候樣に、今度小判一歩判共、小形に爲二吹直一候事

一二朱判は、向後相止め候間、所持の分引替可レ申候事

一新金出來次第、段々世間へ可レ出候間、只今迄の金と新金と取交へ、大小の無レ構通用可レ致事、尤も兩替の儀は只今迄の金と同然たるべき事

一先年吹替より以前の古金所持の者は、勝手次第新金と取交通用可レ仕候事、然らば諸色商賣の代に相渡候は、新金一兩の相庭に、古金は十匁增の積り、諸拂可レ仕候、但し後藤方、又は兩替屋方にて引替の時分は、其餘り歩銀增候儀は相對たるべき事

一只今迄の金子取集め、後藤方へ持參引替の時には、後藤方より金高に應じ雜用歩金相渡候の事

一金子は町人手前より引替へに成候間、武家方其外の金子勝手次第に町人方へ相渡し引替可レ申事

一大判は有來る通り用レ之、小判と差別の儀は前々の積りに兩替可レ仕事

寶永七庚寅年四月十一日

右御觸後、五六月頃ヨリ翌卯年五六月頃迄、金相庭次第ニ高直ニナリ、一兩ニ付五十九匁四五分ヨリ六十二三匁ノ處、寶永八年ニ至リ、七十一匁二三分迄有レ之、此年改元アリテ、正德ト云、同二年七八月

頃ニハ、八十目餘錢一貫文ニ付、二十二匁四五分ト云フ、（但シ金ハ元祿ナリ、銀ハ通用銀、寶永ノ三ツ寶、四ツ寶ナリ）此譯ハ此節通用ノ三ツ寶・四ツ寶、殊ノ外位アシク民服セズ、依レ之追付吹替有レ之由專ラ風說ス、然レバ只今通用ノ銀ハ、皆潰シニ相成リ大損アルベシトテ、金銀ノ代リニ、米穀・絹布・藥種ノ類ヲ貯ヘ置ケバ、勝手ヨロシキトテ、諸人專ラ諸色ヲ買コム、依レ之諸色直段、殊ノ外高直ニ相成ル、金錢モ是ニツレテ大キニ相庭上ルト云フ、然レドモ全クハ此年ノ銀（永中・寶永・三ツ寶・四ツ寶）位アシキ故、金錢高直ニナリタリ、又此度出ダサレシ乾金小判小形ニテ、是レ迄年來通用ナレシ、慶長・元祿金、一兩ニクラベテハ、凡ソ半減二歩ニ相當ス、然ルヲ銀相庭ニ十匁ヅヽノ高下ツケテ用ユル故市民服セズ、慶長金ハ至ツテ良金ニテ、量目モ重ク、形チモ大イナル故、市民多ク隱シテ出サズ、元祿金ノミ多分通用ス、此元祿金ハ、銀・錫ヲ交、金色下品故民服セズ、右乾字ハ良金ナレドモ、形チ小サク其上追テ慶長ノ通リノ良金ニ吹替ヘアル迄、當分ノ通用ト存込ミ是又服セズ、右元祿乾字金市民服セザル故、自ラ諸物ノ價高直ニ相成ル、又兩替モ右慶長・元祿ノ金相庭六十目替ナレバ、乾金ハ右ノ兩金ノ相庭ニ十匁下リテ乾金一兩五十目ト立テ、十匁宛ノ高下有リテ、又步銀ノ餘德アリトイヘドモ、兩替ニ手數入リ面倒ニテ、其上永久通用スベキモノニアラズト、市民一樣ニ思フユヱ、自然ト二步ノ通用ニナリテ、譬ヘバ絹一疋金一兩ノ價モ乾金ナレバ二兩ニ賣ルト云フ道理ニテ、夫レニツレ古金又元祿金ニテ賣買ノモノモ同樣ニ上リ、諸物皆高直ナリ、又金ノ相庭モ右乾金ヲイヤシム故、古金ノ直ヲ上ゲ、乾金一兩六十目ナレバ（慶長金ハ八九十目）

元祿金ハ七十目前後ニモアツル故、自ラ金相場モ高直也、依レ之乍レ恐御上ニモ天下ノ經濟ニ拘リ候事故、甚ダ御心ヲ盡サレ古慶長ノ如ク、良金ニシテ一樣吹改モ被レ遊度御思惟モ有レ之候ヘ共、此節諸山ニ金ノ出方モ無レ數、又元祿ノ惡金ヲ引上ゲ、雜物ヲ除キ良金ニ命ゼラルレバ、又天下ノ金其ノ數ノ半ヲ減ジ、猶々國用乏シク、依レ之先ヅ當分右ノ小形小判ヲ鑄テ、慶長。元祿ノ金ト大小ノ無ニ差別一通用セラル、然レドモ利ニ走ル下民ノ小智故、當時慶長・元祿・乾金多品ニシテ民用不便利ナル故、久シカラズシテ一樣ニ吹替アルベキ旨ヲ察シ、絹布・雜穀ヲ始メ、諸物ノ價ヲ增シテ交易シ、吹替アリテモ損失ナキ樣ト謀ル、依テ種々嚴令ヲ出ダサルヽト雖モ如何トモナシガタク、銀モ右元祿金ト同樣ニテ銅錫ヲ交ヘ、元祿十年ニ吹改マリ、其後又寶永三年ヨリ四度ノ增鑄、此銀其鑄ルゴトニ銅錫ヲ雜加シテ銀甚下品ナリ、市民之ヲ土石ノ如ク賤シム、慶長ノ金銀ハ上品ナル故、市民愈〻隱シ貯ヘテ出サズ、只元祿・乾金ノ兩金ト元祿巳下五品ノ銀トシテ市民交易スル故、自ラ米穀・油・絹布ハジメ、諸物ノ價日々ニ高直ニ相成ル、凡慶長金ハ、慶長銀六十目ヲ以テ以前通用セシニ、今三ツ寶・四ツ寶ノ銀ニナリテハ、金一兩八十目・九十目ニ通用ス、錢又右惡銀ニ對シテ位貴ク、右五品ノ銀、一匁ニ錢三十八文・四十文バカリナリ、市中甚喧シキコト推テ知ルベシ、依テ其理ヲ貴賤ヘ知ラシメン爲メニ、別段御主意ヲ以テ、御書附出ル左ノ如シ

覺

一　上古以來、我國にて金銀を生じ候事、其數少く天下之財用乏しく候ひし事どもは、世之人傳承たる所にて候、然るに

東照宮御治世之始め慶長七年に及びて、天運之時至り候故歟、神德之感じ致され候故歟、天下之寶山一時に開け、始めて金銀を生じ出せし事、吾國之始めより以來、未だ其の例を聞かず、是れよりして、公私貴賤之財用豐かに、事足り候而已に非ず、我國之外よりも金銀を求むべき爲めに渡り來る國々其の數多く、之に依りて又我國の財用も豐かに事足候て、今日に至り候は、皆是れ

東照宮の御恩にあらずとは不ㇾ可ㇾ申、寬永年中外國の船我國に渡來候を禁ぜられ候國々多しと雖も、今に至て年々に渡り來り候所も、其數尙不ㇾ少候を以て我國の金銀は、萬國の寶に優り候事、世の人又推知るべき處にて候、然るに又慶長より以來は、或は異國の中に流れ入、或は火災の度に燒失せ、或は神社・佛閣・衣服・器財の爲めに費し用ひし處、凡九十餘年の間、我國の金銀大半を減じ候、故に天下の財用相通じ候事共始めに及びがたし、是によりて元祿年中金銀の法を改め被ㇾ造、我國通用の金銀、又其數を信じ候、然れども其金銀の品は、東照宮の定置かれし處には大に不ㇾ及候に依て、工商の類新に造出され候金銀を賤み、各々其利を失ふべからざるを謀り、諸物の價は年々に貴く、金銀の價年々に賤しく成り來りて、終には公私貴賤の難儀に至りぬ、異朝にしては古へより其寶の品、高下同じからざる事共にて、就中中古以來は寶鈔とて紙を以て金銀に替候て、天下に通用せし

め候事、今に至るの由相聞え候、元祿以來の金銀、縦ひ其品は下り候共、異朝の寶鈔の如きには不レ可レ比、然るに我國の四民、各々其家業を相傳て、其財用を相通じ候事

東照宮より以來代々之國恩により候處を存じ候半には、金銀の價もさのみは賤しまず、諸物の價もさのみ貴まずして、今日の難儀にも及ばしむべからず、然れども財を重じ利を爭ひ候事は、工商の類の習に候上は、あながちに咎むべからず、只偏に其餘公私貴賤の類ひと成り候事、今更是非を論ずるに不レ可レ及、都て是等の事共、年久しく知し召され候を以て、

御代の始より常に　御心に被レ懸候處は、金銀の品、もとの如くに諸物の價も平に、如何にもして天下の煩を可レ被レ除御本意に候得共、凡物一度破れ候後、元の如くなしかへし難き事は、定まれる理にて、中にも今日金銀の品を元の如くになしかへし被レ成候事、尤も以て難き事共に候、若可レ然謂れも無く、今の金銀を以て元の如くになしかへされ候半には、天下に通用仕來り候金銀は、俄に其半を減じ、天下の人各家財の半を失ひ、又工商の類の利を謀り候心は、元の如くに諸物の價は其半を減じて商賣し候事も不レ可レ有、然れば金の數は今迄の半を減じ、諸物の價は貴く候事は、今迄の事に候半には、公私貴賤の難儀、只今よりは尙甚しきに至り候べき歟、是等の儀に依りて、卒爾の御沙汰にも難レ及候内に、新金の事、或は火に過候へば流失、或は物に觸れ候てはうち損じ、其實を失ひ候輩有レ之由聞召及ばれ、止む事を得ざれば先づ其品を元の如くに改造るべき由、被二仰出一候、

其形の少しく候事は不レ可レ然候得共、金銀の法、元の如くに被二成返一候迄は、天下に通用仕候金の數、其半を可レ減事尤も以て不レ可レ然事に有レ之候故に候ひき、然るに又新銀の法、次第に其品下りて、去年の冬に至りて銀にて通用し候、國々貴賤の難儀に及び候由被二聞召一、殊に不レ可レ然事に聞召され候を以て、新銀造出候事をば停止せられ候、此上は尚更に金銀の品、大の如くに可レ被二成返一、事、日々に御心を盡され候、但し天下の寶は、天下と共に寶とすべき物に候上は、思召に任せて御決定被レ遊難き御事に候、縱ひ今日金銀の品を元の如くに被二成返一、其數の半を減じ候共、慶長以前の代々に比べ候へば、天下の財用豐かなるべき事は萬々倍し候べし、然る上は天下之貴賤相共に存じ候所は、我國之金は萬國にすぐれ候ひて、萬代之後迄之寶とすべき物に候得ば、假令各其財寶之半を失ひ候共、其品元の如くに可レ被レ成御事に存、工商之類も相共に存ずる處、金銀之品、元之如くに被二成返一候はゞ、假令其利を失ひ候共、諸物之價は其半を減じて、商賣可レ仕事に候と存候はゞ、年來之御本意之如く、速に金銀の品、元之如くに被二成返一、天下之煩を被レ除候べし、若天下之貴賤存る處も今日通用之金銀、其數の半を減ぜられん事も不レ可レ然事と存、工商之類も其利を半ばは失ひ候半事は、不レ可レ叶と存候に於ては、天下之人と共に、其時を御待合可レ有レ之候、只何れの道にも金銀之事は我國萬代迄之爲めに、　東照宮定置かれし法之如くに成し返されべき御本意に候間、天下之貴賤宜しく此旨を可レ存由、被二仰出一候者也

正徳二壬辰年十月十一日

右ノ御書付、諸侯始メ市中ヘモ御申渡有レ之、新金銀吹替ノ沙汰ヲ停止セラレ、右ノ乾金ヲ吹増被ニ仰付一、總體ノ吹替ハ、先ヅ追テ御沙汰、夫迄ハ只今迄通、金銀通用無レ滯可レ仕由トノ儀、然レドモ右ニ付市中甚喧シ、尤寶永四年ノ頃ハ時氣不順ニテ風雨地震シ、富士山燒、諸國凶作打續、世間困究ス、依レ之米相庭凡寶字銀百二十匁ヨリ百五十匁位、油一斗、六十目位、此節小判七十五匁位、錢十九匁五分ヨリ、二十目前後、又正徳二三五月頃、彌諸物高直ニ成、米百七八十目、小判八十五匁ヨリ、六七匁、錢廿二三匁位、依レ之世間彌困窮ス、其上前文ノ通故、兎角諸色買シメ等殊外多ク依レ之御觸等モ追々出嚴敷御吟味有レ之、尤右諸色高直ナルハ、因作ニ拘リ候ニテモ無レ之、前ニ云如ク三ツ寶・四ツ寶銀ニテ、位甚アシク、金ノ位ト引合不レ申、夫レニツレ諸色自ラ高直ナリ、歪ク銀下品ナル故ナリ、猶銀ノ部ニ記ス、右乾金出デ、元祿金ヲ變ヘ通用ス、慶長金ハ此節隱シテ出サズ、是良金ナル故也、依レ之隨分通用モアレドモ甚少シ、右乾金モ良金ナレドモ、形チ微シク掛目モ輕ク、且永久用ヒラルベキ金ニアラズ、追テ吹キ直シ可レ有ト諸人存ジコミケルカ不レ服、依レ之正徳四甲午歳新古割合遣ヒノ法ヲ出ダサレ候節、乾金ハ慶新ノ兩金一兩ニ、乾金ハ二兩用フベシト令セラル、前ニ記ス如ク元祿年以來金銀多品ニシテ、公私ノ用不辨理ニシテ、通用マギラハシク市民甚喧シク、海內ノ煩トナル故、前御代ノ御遺命ニ任セラレ、正徳四甲午歳、新金銀ヲ改鑄セラル、今ノ古金銀ナリ

三貨圖彙巻之十一　金之部

草間直方輯錄

正徳四甲午年、金銀位ノアシキヲ改メ玉ヒ、慶長金銀ニ准ジラレ、新タニ金銀ヲ鑄サセラル、是ヲ新金銀ト云、只今ノ古金銀之レナリ　但シ新金ハ江戸一ト所ニテ鑄サセラレ、新銀ハ江戸・京兩所ニテ鑄サセラル

新金小判

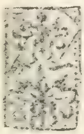




縦二寸、横一寸三歩

重サ四匁八分

同壹歩判





縦六歩、横三歩

重サ一匁二分

右悉ク慶長金ノ通、御觸ハ銀ノ部ニ記ス、コレニ依テコレヲ略ス

則引替ハ

慶長金百兩ニ	新金百兩
元祿金百兩ニ	新金五十兩外ニ歩金ト號シテ、新金一兩壹歩ヲ加フ
乾字金百兩ニ	新金五十兩右同斷
元祿金百兩ニ	乾金百兩外ニ歩金ト號シテ、金二兩二歩ヲ加フ
新金百兩ニ	元祿金二百兩
同百兩ニ	乾金二百兩

右ノ割合ヲ以テ通用ス、尤モ通用御觸ハ、銀ノ部ニ記ス、兩替取引ハ、此時代ハ五十兩包ナリ、尤モ慶長金ハ其儘サシ置レ、手本金ニ相ナル、右五十兩包ノ内ヘ、慶長金十兩差ミ、百兩ニハ二十兩差ナリ、右正德四年新金吹替アリテ、割遣ヒノ法ヲ出サレ、其後又享保三戌戌年十月、割合ヲ改メラレ、十一月ヨリ金錢初メ諸物新金銀相庭ニ相ナル、慶新ノ兩金、一兩代四十二三匁ヨリ五六匁、但慶新ノ兩銀ニテノ相庭ナリ、享保六七年ノ頃ニ到リテハ、追々高直ニ相ナリ、五十六匁、六十日以上ニナル、尤モ元祿年中ニ金ヲ吹カセラレ、其後乾金出テヨリ、慶長金多ク隱レテ、一向世上ニ出ザル所ニ、此度右新金位、掛目トモ悉ク古慶長金ニ准ジ吹方被ニ仰付ハ世上通用仰セ渡サレ有リテヨリ、何方ニ隱レ

シヤ、右慶長金夥シク出テ當時ノ新金ト相並ブト云、是恐多クモ賢王ノ明智ヨリ出テ、市民ノ隱藏スル處ノ良金銀、再ビ世ニ發顯スルコト、凡智ノ及ブ所ニアラズ、謹テ考フベシ、尤モ慶長金・元祿金・乾金、口々増歩割合相庭ヲ以テ諸色交易コレアリ候ニ付、金多品ニシテ、諸人甚ダ紛ラハシク、不便利ナリト云フ、享保年ノ末ハ右新金位ヨキ故、民服シテ自カラ古金但元祿金・乾金・二朱ノ類通用相止ム、然レドモ乾金毎度通用ノ儀相止メ、引替ヘ候ヤウニ御觸モコレアレドモ、兎角相ヒ殘リ諸國通用有レ之、右乾金ハ此度ノ新金同位ニテ、一兩ヲ二歩ノ積ニテ、便利宜キ故、引替ニ出ダサズト見エタリ

御觸

覺

一　新金銀、追日世上に流布仕り通用候、其中東國筋は、金通用の事に候處、新金未だ諸國在々に不ニ行渡一、其上只今迄遣ひ馴れ候故に、多分は小形金を以て通用之由に候、去年被ニ仰出一候新金銀通用之次第は、萬事に就て少しも損徳無レ之ための御沙汰に候得ば、御觸書之通りを相守り、新金銀之撰びなく可ニ相用一事に候處、小形金計りの通用に偏り候事は、遠國之者共其仔細を不ニ相心得一候故と相見へ候間、村々之名主・組頭等は云ふに不レ及、大小之百姓共、亦は諸商賣人此旨を相心得候て、元祿金・小形金ともに有合次第に、新金に引替候て通用候樣に可レ致候事

一　此度江戸町中にて、諸國在々商賣物請込候問屋共へ町御奉行所より被ニ相觸一候、元祿以來之金銀

は、集り次第に引替所へ差出し、新金銀に引替候樣に仕、荷主共へは、新金銀通用之次第、少しも損失無レ之候仔細を相達し、商賣物代は第一に新金銀を可レ渡由被二申渡一候之間、諸國在々大小之百姓共、幷に諸商賣人等、其旨を可ニ相心得一候事

一　諸國在々に於て、諸商賣物之代、又は小判之切賃等を始め、何事に依らず、新古金銀割增御定之外に、纔にても新金銀にての直段をさしかへ候歟、又は元祿金・小形金貯置引替ざる者候に於ては、後日に相聞へ候共、當人之事は不レ及レ言、名主・組頭迄も曲事之御沙汰有るべき事に候間、一村限りに、大小之百姓・諸商人迄、能々其旨を可ニ相心得一事

未五月

右仰渡サレシ後ハ、元祿ノ金銀始メ、連々引替ヘ候得共、其ノ中乾金ノ儀ハ至ッテ無レ數、兎角引替ニ出サズ、是形チ小ナレドモ、良金ニテ其上通用勝手便利ナル故、江戸始メ上ミ方筋賞行ス、依レ之元祿金ハ年ヲ經テ世上ニ減ジ、殘ル所少ナケレドモ、乾金ハ引替ニ不レ出、因テ其後ハ先ヅ其儘ニサシ置レ、凡元文年吹替ヘ前マデ通用スト云フ、享保十五庚戌年御觸奧ニ出ス、右新金銀引替ノ儀ハ、江戸金銀座ニテ、追々引替ヘ仰付ラル、然レドモ月々ニ引替數少ク、其上小數ノ金銀ニテモ、數口ニテ多人數入込ミ、混雜大方ナラズ、依レ之兩替屋・錢屋・諸商賣問屋仲ヶ間ニテ、各組合ヲ相立、一組々々月行司ヲ定メ、居所幷ニ名前・判形等帳面仕立、町御奉行所ヘ差出置キ、其仲ヶ間組合切リニテ、元祿以來

ノ金銀取集メ、右月行司一人ヅヽ付添ヒ、懈怠ナク引替ベキ趣仰渡サル、御觸

覺

一 新金銀追日世上に流布し候と雖も、未だ諸國に不₂行渡₁、就中關東筋に於ては、金通用之事に候所に、新金は未だ遣ひ馴れず候故に、多分は乾金を以て通用候由相聞へ候、江戸町中諸商賣物、受込所問屋共、各共荷主共方へ相達し、新金銀通用の事に於ては、少しも損失無₂之仔細を相心得候樣に仕、自今以後、諸商賣之代として相渡候金銀は、第一に新金銀を指遣し候樣に可₂仕事

一 自今以後は、其商賣之品々、及び問屋仲買にて各組合を立置、一組に一人づヽ行司を相定め、月行事之者より、組切り仲間へ集り候、元祿以來金銀取集め、日々に引替所へ指出し、新金銀に可₂引替₁之事

一 諸問屋組切に、其人別町所付、幷に月行司之者共をも委細に帳面に記し、引替所へ渡置、毎月其帳面に引合せ引替之樣子を相改め、若し懈怠之事於₂有₁之は、其組之月行司は不₂及₁言、組合之者迄可₂爲₂越度₁事

右之條々、急度相守可₂申者也

未四月

一 新金銀追日世上に流布し通用候、就中新金は江戸表にて被₂吹替₁候、兩替屋。錢屋等は、金銀通用

を以て家業とし候處に、去年以來金引替之次第、不審之樣子度々に及び、殊には乾金引替候數は少分之事に候、自今以後は、江戸町中之兩替屋・錢屋、或は其町切りに成共、仲間組合切に、毎月一人宛月行司を相定め、行司之者より、組合切に日々に集り候元祿金・乾之字金取添へ、引替所へ指出し、新金に引替可ㇾ申事

一　其一組日々に引替之金高は、組合之人數多少に應じ、定數を申付候間、一組金高之内、元祿金半分宛相交へ可二引替一候、若し元祿金之集り方無ㇾ數、又は少しも不ㇾ集時は、乾金計りにても定數の通差出可二引替一之、組合の者共、家名町所付、月行事等、委細帳面に記し、可ㇾ遂二吟味一候間、其旨を可二相心得一事

一　最初御定の金銀、增割の外にわづかにても、新古金の直違ひを仕出し、又は小判切賃過分の事に及び候類、總て何によらず、金銀通用の妨を仕出候者有ㇾ之候はゞ、其主人・手代は不ㇾ及ㇾ云、月行司組合の者迄、其罪科遁るべからざるもの也

右の條々、急度可二相守一候、新金銀の事被二仰出一候始めに、兩替の事家業とし候者共は、別而被二仰出一候趣も有ㇾ之候上は、自今以後、違背の輩於ㇾ有ㇾ之は、御宥免の御沙汰は不ㇾ可ㇾ有者也

未四月

一　新金銀追日世上に流布し通用候、就中新金は江戸表計にて被二吹替一、兩替屋は金銀の通用を以て家

業にし候處に、去年以來町兩替屋共、金引替の次第不審の樣子度々に及び、殊には乾の字金引替の數は、小分の事に候、自今已後は、町兩替屋共に組合立置、月行事一人定て、引替の事を取計らひ、毎日々々町の者より新金に引替候、金高三千兩より五千兩迄の間を以て、其内元祿金・乾之字金半分宛相交へ可レ引ニ替之一、若元祿金集り無レ數時は、元祿金は集り次第に仕、其餘りは乾之字金を差出して定數迄可レ引ニ替之一、若亦急用に付て定數より多く引替候儀は、望みたるべき事

一　此度江戸町中、兩替屋・錢屋又は諸商賣物問屋共よりも、元祿金・乾之字金相交へ、日々に引替へ候樣に申付、引替所にても、日々引替に來り候、人別・金高等委細は帳面に記し置候樣に申渡候間、町々兩替屋共は、別て無ニ懈怠一引替候樣に可ニ相心得一候事

未四月

右ノ通、度々御觸有レ之ト雖ドモ、兎角新金銀ニ引替ヘ員數少ク、別シテ金ハカサ高ニ無レ之、便利ノモノ故、江戸ヨリ又元祿・乾金他國ヘ差出ス、是ハ此度新金銀ニ相改ムルト雖ドモ、良金ニテ又吹方モ十分ナラザル故、先ヅ當分新古取交通行シ、連々ニ引替申ス事故、爲替金ヲ始メ、遠國又ハ市中ノ貸金ニ至ル迄、乾金ヲ以テ貸シ候者ハ、乾金ヲ以テ返濟シ、元祿金ヲ以テ貸候モノハ、又元祿金ニテ返濟スルヤウニ相成、是ヲ新金ニ引替候テ返濟スベキヲ、其金位ノ高下ニヨリテ、新金ニテハ返濟ノ金數減ジ、古金ニテハ是迄遣ヒ馴レ、又新金ニテハ不便利ノ方モアリシニヤ、右遠國ノ取引ニハ、

元祿・乾金他國へ積遣ス趣、之ニ依テ諸國へ金銀請込ミ差遣ス、飛脚又ハ船問屋ノ者共へ嚴シク仰渡サレ、他國へ古金銀遣シ申モノアラバ、訴へ出べキ旨仰渡サル、御觸

覺

一　兩替の者共方へ日々廻り來り候元祿金・小形金、上ミ方其外餘國へ差遣し候事、向後堅く無用に仕り、たとひ定數の外たりとも、引替所へ差出し新金に引替可ㇾ申候事

一　上み方筋其外へ遣し候金銀を請込候飛脚、請負の者、又は船問屋等迄も此の度申付、兩替の者共より、元祿小形の金、餘國へ遣し候者一切請込不ㇾ申、其旨出雲守番所へ可ㇾ訴出ㇾ旨申付候、且又兩替の者共、手前より仕立飛脚、或は荷物等の內へ差加へ、密々に元祿小形之金、餘國へ遣し候者有ㇾ之候はゞ、見及び聞及び次第、可ㇾ訴出ㇾ之旨申渡し候間、其旨可ㇾ存事

一　此度京・大阪兩替の者共に、當地兩替屋共之格を以て、組合を立定數をきはめ、金銀引替候樣に兩奉行所より被ㇾ申付ㇾ候間、當地兩替屋之者共、別て其旨を可ㇾ心得ㇾ事

一　何事によらず金銀之通用有合候に隨ひ、新古の撰なく通用すべき由之御定法に候處、兩替之者共上ミ方其外より金銀爲ㇾ替取組候にも、新金・小形金と差別有ㇾ之、たとへば上み方より取組候爲ㇾ替仕も、江戸にては新金を以て渡候筈と、御定を仕由風說有ㇾ之候、自今以後、爲ㇾ替にも第一に新金を用ひ、金銀に品を立て候事、堅く仕間敷事

一　借金の事、是又最初よりの御定法に候處に、新金銀を以て借候者は、返濟の節も新金銀之積り、小形金を以て借候者は、小形金を以て返濟之筈と品を立て候由、是又風聞候、小形金にて貸し候處新金にて返濟候とも、無㆓其異論㆒受㆓取之㆒、其品を立て候事不㆑可㆑仕候事

右之條々、急度可㆑相㆓守之㆒、金銀通用之次第は、最初より御定法有㆑之、就中兩替之者共方より、新金銀通用に相妨候事を仕出し候者、重犯の罪科に候條、其本人は不㆑及㆑言、一組の月行事迄、重科に行はるべし、たとへ後日に外より相聞と云ふ共可㆑爲㆓同罪㆒者也

前文十二月組合仲間を立ること、京都・大阪も同様御觸有㆑之

大阪本仲間兩替之者共、向後組合をたて、毎月可㆓引替㆒之金銀定數

一金壹萬兩より壹萬五千兩まで

但元祿金・小形金集り次第、此定數之内を以て、毎月引替所にて、新金と引替可㆑申候

一銀千貫目より貳千貫目まで　但通用銀の積りにして

是者元祿銀・寶永銀・三ツ寶・四ツ寶銀共、集り次第、此定數の内を以て、毎月引替所にて引替可㆑申候

右之趣を以て、組合定次第、來る申正月より毎月無㆓懈怠㆒可㆑引㆓替之㆒

一　組合之者共、人別は名を記し、判形仕候帳面、町奉行所へ出し置、其一組の内にて、代り〳〵に

月行事一人宛を相定め、毎月朔日、其月の行事の名幷居所を記し、判形仕候書付を奉行所へ可ニ差出一候事

一 右帳面幷に月行事の書付等、引替所へも渡し置、金銀可レ引ニ替之一、毎月引替候數の多少を引合、定數よりも不足し候月も有レ之に於ては、其月の行事の者、曲事之沙汰あるべき事

一 新銀は京都にても吹出候に付て、一月の定數を割合せ、日々に引替候共、其勝手に任すべし、新金は江戸より被レ爲ニ差登一候故に、毎日引替る事難レ成候間、新金到着の度々引替所より月行事共方へ案内有レ之候上は可ニ引替一候事

十二月十二日

右正德五乙未年仰渡サレ、其以來今以テ大阪本兩替仲間ニテ、何町組何組ト唱ヘ來ルハ、此ノ時ヨリ起ル

右元祿金・乾金、逐日凡引替ヘ相濟ミ候得共、乾金前文ニモ記スゴトク、良金ニテ便利モ宜シキユヱ、引替多分相殘リ有レ之候ヘドモ、引替イツヲ限リトモ果ナキユヱ、乾金ハ先ヅ其儘ニサシ置レ、元祿金バカリ來ル丁酉年十二月ヲ限トシ、其以後決シテ世上通用ノコト停止セラルヽ趣、カネテ世民覺悟スベキタメ、御觸出ル

覺

一　新金銀逐日通行し候に就て、只今に至ては、世上に相殘處の元祿金其數を減じ候、依レ之元祿金通用の事は、來々年丁酉十二月を限とし、其明年戊戌年正月よりは世上之通用一切に停止たるべき事

一　元祿金通用の停止の後に至ても、或は遠國末々之輩未だ替へ盡すに及ばず候も有レ之候はゞ、引替所に於て、新金に引替候事は制外たるべし、然りと雖も都て通用停止の上は、引替の歩金を加へ候事はあるべからざる事

一　小形の金通用の限も此後程なく御沙汰可レ有レ之候間、元祿金は云ふに及ばず、小形金引替の事も其心得可レ有事

右今度御沙汰有レ之候、元祿以來の銀の事も、此旨に准じて、新銀も引替通用し、最初被二仰出一候御書付の趣を無二違犯一、新金銀・慶長金銀の通り、聊も難澁の事者不レ可レ有者也

乙未十二月

右小形乾金前々記ス如ク、市民遣ヒ方便利ヨキ趣ニテ、引替ノ御沙汰モ其儘ニコレアリ、享保二酉年、尚又引替ノ儀仰出サレ、來ル亥年マデ三ケ年ヲ限リ可二引替一旨

御觸

一　新金出來候に隨ひ、乾之字金も段々引替候に付、世上に相殘り候員數、追日減少候、依レ之乾之字金通用の事、當酉年より來る亥年まで三ケ年を限り、翌子年より世上之通用一切停止たるべき事

一　乾之字金通用年數終り、停止之後に至りても、或は遠國末々にて、未だ引替へ相殘り候も有レ之候はゞ、引替所にて新金に引替可レ申事

右之趣、國々所々に到る迄、此旨可レ存者也

享保二年酉八月廿七日

右御觸後、翌戌年閏十月ニモ、元祿金引キ替、未ダ相殘リコレアル間、追々引替ベキ趣、尚亦乾金ノ儀ハ、當戌年ヨリ來寅年迄、五ケ年ヲ限ルベシ、元祿金ハ引替、來ル亥年迄ニ通用限ルベキ趣被二仰出一（御觸コレヲ略ス、又銀之部ニ出スモアリ、合セテ可レ考）凡享保四亥年ヨリ同七寅年マデ、追々引替相濟ミ候ニ付、翌八卯年ヨリハ、引替殘リノ金銀ハ、潰シニ相成通用止ム

御觸

一　乾字金幷元祿以來品々之金銀引替之儀、去る寅年限に付、當卯年よりは、潰し金銀に成候間、未だ遠國末々に引替殘り候も有レ之候半、金は金座、銀は銀座へ差出し、金銀定法之通り、潰し金銀之割合を以て賣渡可レ申候、元祿金引替殘り、所持之者も候はゞ、是又右同前たるべき事

享保八卯年正月

右之通、從二江戶一被二仰下一候事

右ノ通相觸ラル、然レドモ乾金ハ多分相殘リ、民間通用止マズ、享保七寅年、彌々停止セラレ、以後

ハ潰金ノ積リヲ以テ、座方ヘ差出シ可ㇾ申趣、士民ヘ相觸ラレ候得ドモ、兎角遣ヒ方便利ヨロシキ故歟、引替不ㇾ申ニ付、御詮議ノ上民間辨便ノ趣、聞シ召及バレ、向後ハ又潰シニ仕ラズ、其儘通用イタスベキ旨仰渡サル

覺

一　乾字金之儀、去る寅年限通用相止め、其以後は潰金之積りを以て、金座へ買取候得共、今以て殘り候員も多く候、依ㇾ之向後は潰金に不ㇾ仕、其儘通用可ㇾ仕候、但し新金幷慶長金、一兩之代りに、乾金二兩可ニ相用ㇾ尤も乾金一兩は、新金・慶長金二步之積りたるべく候

一　御年貢諸運上を始め公儀へ納め候類、幷合力或は奉公人給金、又は諸商賣物代金、其外金子にて取遣候儀、右之積りを以て通用可ㇾ致候事

右之通り可ニ相心得一也

享保十五年戌正月

右乾金ハ、二步ノ積リユヱ、世上便利ヨキ故、引替ニ出サズト見エタリ、此以後文金ニ吹替リ、引替ノ節右乾金モ悉ク引替、通用相止ム

三貨圖彙卷之十二 金之部

草間直方輯錄

食貨ハ、八政ノ第一ニシテ、治國平天下ノ根本ナリ、士農工商ニ到ル迄、是ニ心ヲ用ヒ、出入ヲ量リ奢侈ヲ戒メ、儉素ヲ守ラズンバ、必ズ安穩ニ永久ヲ保ツコト能ハズ、用度乏シクナレバ、種々ノ計策ヲ用ヒ、國家ノ爲ト思ヒ計リシコトモ、後ニハ民ノ愁苦トナリ、却テ上下ノ煩トナルコトモアリ、漢ノ武帝ノ時、海魚ヲ縣官ヨリシメタリシカバ、其年ヨリ魚不レ出、後ニ又民ニ與ヘテ取シメタレバ、魚又大キニ出タリトナン云ヘリ、元祿年以來、金銀吹替アリテ、銀銅交ヘ、位次第ニ下品ニナリユキ、市民服セザル故ニ自ヅカラ萬物高直ニナリ、金銀ヲ賤シミ、交易融通セズシテ、士民服セズ、文昭公世ニ立セ玉ヒシヨリ、深ク御心ヲ盡サセ給ヒシガ、凡ソモノ一度變ジテ、又改ルコトカタキハ常ナリ、殊ニ慶長ノ金銀ハ、位至ッテ上品ニシテ、又今ノ如ク細工巧ミナラザル故贋物モナシ、僞作ハ元祿以來金銀ノ位ノアシキト、細工ノタクミニ成タルヨリ、世ニ罪人モ出デ來ルヤウニナリタリ、慶長ノ金銀ハ位ヨキ故、元祿以來ノ吹替ニモ出サズシテ、嚴令ヲモ恐レズ貴ミ隱セリ、有章公、世ニ立セ玉ヒ、尙又賢臣御心ヲ盡サレ、昔ノ法ノ如クナシ返サレ、正德四年、先御代文昭公、思召ヲ繼セラレ、

新金銀ヲ吹改ラレ、追々此新金出ヅルニツキ、市民甚ダ服シ、是レ迄隱シ貯ヘ置シ、慶長金同品ナル故、隱シテモ詮ナシト思ヒテ、皆々貯ヘ置シ金銀ヲ出シテ、新古取交通用シケレバ、慶長ノ金銀自ラ世ニ顯レ出デ、天下ノ金銀萬倍ス、是全ク明臣ノ賢慮ニヨリ、忽チ天下通用ノ金銀萬倍シ、元祿ヨリ寶永マデノ金銀、引替融通無レ滯、世以テ之ヲ恐感シ、衆民忽チ服シ、右ノ新金銀（但今ノ古金銀ナリ）ト古慶長ノ金銀トヲ以テ、萬物交易ス、正德五年六月、改元アリテ享保元年ト云フ、此年有德公世ニ立セ玉ヒ、益々御政務ニ御心ヲ盡サレ、萬民ヲ撫育シ玉ヒ、彌々天下萬歲ヲ唱フ、新金銀追々增鑄セラレ、市民交易無レ滯シテ、五風十雨、倶ニ時ヲタガヘズ、四海穩ニシテ、米穀豐熟ス、世以テ天下ノ中興ト仰ギ奉ル、享保十三四年ノ頃ハ、別テ諸國米穀充滿シ、又米價下落シ、大祿ノ士ハ勿論、小祿ノ士ニ至ルマデ年分ノ食料ヲ除イテ、米ヲウレドモ朝夕ノ用度ニ足ラズ、多ク賣レバ食料ニ足ラズ、農民ハ作德ヲ賣レドモ其年ノ肥（コヤシ）ヲ求ムルニ足ラズ、市民ハ米ノ安キニヨリ、自然ト己ガ職分ニ怠ル故ニ、米價賤キモ、却テ士民ノ爲メトナラズ、コレニ依テ享保十五年戌ノ九月、世上一統ノ難儀ニナリ、米相場引立ノ爲メ、市中富有ノ者ヘ御買米ヲ被レ仰付（是市中御買米始也）、猶數々賢慮ヲ盡サレ、米相場引立ノ存ジ寄モ有ベキヤ、大阪ハ萬貨ノ聚ル根本ノ地ニテ、諸相場ハ當地ヲ第一トスル故、先ヅ堂島米問屋ノ者、幷ニ市中兩替ノ者共迄悉ク御役所ヘ召サレ、（東稻垣淡路守　西松平日向守）米穀直段引上ベキ筋ヲ談問セラレ、各書付ヲ以テ趣意ヲ聞セラル、コレニ依テ封書ヲ以テ申シ出ルニハ、諸國金銀拂底ニ付、先達テ銀札ヲ免許セラ

ル、夫故諸國正金銀ハ彌々隱レ、札遣ヒノミ多ク、國々賣人共、米ヲ國ニテ拂ヘバ、皆紙札ノミノ引替故、賣人共是レヲ厭ヒ、多分大阪ヘ內々米穀積登セ賣拂フテ、正金銀ニ引替持カヘル故、自カラ大阪市中金銀拂底ニナリ、米價下落スルニ、入津米ハ益々多ク、是大阪米多クナリ、相場モ下ル所以也、然レバ諸國ニ札遣ヒヲ停止セラレナバ、米ノ入津モ少ク、又金銀モ他國ヘ洩レズ、自然ト相庭ヲ引立候ハンカ、或ハ米一石價三十目ト定メ、二十萬石代六千貫目、濱方ノ者ヘ拜借仰付ラレ、買米アルベキカ、又昔ノ通リ諸藏屋敷ノ拂米市中望ノ者ヘ勝手次第ニ之ヲ拂ヒ、問屋仲間ノ入札相止ルカ、仲間バカリヨリ買立ルニヨリ、手狹ニテ自ヅカラ直段モ安キ方ニナルベキカ、尙又敷銀モ、米百石ニ付二百目ヅヽ、サシ入ルヽユヱ、身輕キモノハ當座ニ自由ヲ得ズ、相場下落ニオイテハ、忽損失スルヲ見込ミ、入札スルニヨリ、自然ト直段モ安ク入ルヽユヱ、彌相場下落ス、依テ入札幷敷銀等ヲ止メント訴フ、右ノ類區々ニシテ、議定スベキコト一事モナシ、其內兩替ノ者ヨリ申出シ書付ニ、元祿以來寶永ニ至リ、金銀位下リ其上多品ニシテ、民ノ騷動トナルニ依テ、正德四年ニ其品ヲ改メラレ、今ノ如ク古慶長金銀同位ニ命ゼラレ、市民一統感服シ今ニ至ツテ事ナシ、然ル所享保十三年ノ頃ヨリ、諸國米穀豐熟シ、次第ニ今ノ如ク米充滿シ、價モ至テ下落ニ及ビ、諸人ノ迷惑ニナル、全ク諸國ヨリ出ル米多キ故トハ云ヒナガラ、一ツニハ只今通用ノ金銀位宜シキニヨリ、當時ノ米ノ位ト相當セズ、元祿以來寶永ノ金銀ノ位ナレバ、オノヅカラ米穀ト相位センカ、今ノ銀（但正德ノ古銀ナリ）ニテ、米一石三十目、寶永ノ銀ナレバ、

凡十割增ノ算用ニシテ、米一石代六十目ニ當レル歟、但十割增ハ、永中銀ト、新銀ノ割也、何レニモ金銀ト米ノ位相當セザル理モアランカト考フル由書キ出セシコトアリ、右ノ通ノコトニテ、御評議モ區々ト聞エ、享保十七子年二三月ノ頃マデ、市中御買米御沙汰コレアリ、然ル所吉凶喜憂トモ天下ノナス所、定メ難ク考ヘ難キハ天運ニシテ、昨日マデ土芥ノ如ク思ヒシ米モ、其秋西國・九州飢饉シ、大阪ヘ登リ米一切コレナク、市中人民餓死スル者夥シク、十月頃ヨリ翌巳年春ニ至リ、米穀貴キコト金玉ノ如ク、一石ニ付百四五十目、飢民道路ニ餓死スル者算ヲ亂スガ如シ、依レ之公儀幷富民ヨリ、米錢ヲ出シ困民ヲ救フ、翌年ヨリ又天氣時候ヨク、諸國追々豐熟打續キ、享保二十年ニ至リ、又々米價下落シ、士民迷惑ニ及ブニヨツテ、江戶・大阪ニテ、米ノ定直段ト云コト仰付フレ、江戶金ニテハ、一兩ニ米一石四斗以上、大阪ニテ一石ニ付四十二匁以上、下米三十八匁、是ヨリ以下ニ賣ル者アラバ、石ニ付十匁宛ノ過料差出スベキ趣ヲ下知セラル、同廿一年モ又再應觸レラル、今辰年五月ニ改元アリテ、元文ト云、今年今ノ文金銀ニ吹改アリテ、諸物相場文金銀ヲ以テ交易ス、米一石六十目前後、此ノ文金銀、元祿以來正德迄ノ金銀位ノ宜シキ、全ク其中庸ヲ得タリ、公私共ニ便ニシテ、萬代不究ノ善政ナルモノナリ、コレ前ニ云、兩替ノ者ヨリ訴出シ米金、倶ニ位相應スルニヨル歟、右吹替ニ付、元文元辰六月、市中ヘ米始メ諸色、文金銀ノ積リヲ以テ、直段引上ゲ相場相立申ス可キ趣ヲ觸レラル、此米銀位相當スルノ工夫、是又凡慮ノ及ブ所ニアラズ、又市民老功ノ者召出シ、米價引立ノ談問セラレシコト、公ノ論議ヲ下民

ニ問フハ、士ノ耻ル所モ可レ有ナレドモ、米價ノコトニ於テハ、交易融通ノコトユヱ、士ハ商家ニ不レ及コトアル故、諮問セラルナルベシ、孟子ニ云、「左右皆曰レ賢未可也、諸大夫皆曰レ賢未可也、國人皆曰レ賢然後察レ之、見レ賢焉、然後用レ之」ト云々、當レリ、尤モ至極ニテ全ク政務ニ心ヲ盡サル、コト恐感スルニ餘リアリ、後年右等ノコトニ密々諮問セラル、コト有ルベキナレドモ、心得有ル可キコトナラン、譬ヘ經濟ニ委シク、老功ノ者トイヘドモ、表ニ忠節ヲ莊リ、所謂御爲又ハ御奉公ト稱シ、內心私欲アル者ヲ以テ諮問セラル、時ハ、其害又大イナリ、依テ能ク人ヲ知ル人ナラデハ行ヒ難シ、「安ンゾ在レ得レ人」トイヘドモ、「事以レ密成リ語ハ以レ泄敗ル」ト米銀ノ利欲ニ不レ拘、廉直ナル舊家ノ民ニ諮問シ、地情ヲ察知スベシ、士農ニ益アレバ、工商ニ不益アリ、工商ニ益アレバ、士農ニ不益ナリ、此益・不益ノ根本ハ、融通ノ道ニアリテ、萬物融通滯ラザレバ、益・不益、平等ニ行ハレ損益ナシ、天ノ陽ハ地ノ陰ニ融通シ、天地ノ德ハ人ニ融通シ、人ハ萬物ノ理ヲ融通シテ、聖賢ノ道行ハレ、四民共夫々恒ノ產ナキハナク、米穀・貨物交易融通シテ、一日モ止ムコトナシ、然レバ融通ハ則天ノ道ナリ、書經洪範八政註ニモ、「在レ天惟五行、在レ人惟五事、以レ事參ニ五行一天人合矣、八政者、人所ニ以因一乎天一」ト云々、言・視・聽共ニ融通シテ用ヲナス、融通偏ヨレバ、是非・損益アリ、米價ノ高卑ハ皆天理ニテ、大抵十年ニハ高下平等ニナルモノナリ、然レドモ士農ハイツニテモ米價ハ賤シト心得、儉約質素ヲ守リ、工商ハ米價貴キ算當ニシテ、家職ニ不レ怠出精シ、儉約ヲ守ルベシ、依ッテ常ニ士民、米價ノ

心得ハ、天壤ノ違ヒアリ、高下ノ事ハ何レ天理也、金銀ノコトハ人力ニテ如何樣ニモナルモノナレドモ、元祿以來數品ノ金銀アリテ、民ノ騷動トナルノミナラズ、隱レタル古金銀迄モ、自然ト世ニ出テ、元文ノ沿革ニ到ル迄、天然ト雖ドモ凡慮ノ工夫ナラズ、治世ノ經濟、善政ノ美談、謹デ思惟スベシ

右文金銀吹替ニ付

御觸

一　世上金銀不足に付、通用不自由の由相聞へ候に付、此度金銀新に吹替被ニ仰付ー候事

一　此度吹改候金銀相渡候儀、慶長金・新金は百兩の代り、百兩慶長銀、新銀十貫目の代り十貫目引替、可ニ相渡ー候間、右引替の格を以、書面金銀無ニ差別ー取交請取方渡し方、兩替屋共、無レ滯通用可レ致候、尤も上納金銀共可レ爲ニ同前ー候事

一　吹替候金銀は、金座・銀座より、増歩差出可ニ引替ー候、且員數の儀は、引替金百兩に付、増歩六十五兩づゝ、引替銀十貫目に付、増歩五貫目宛、可ニ相渡ー事下略、御觸ハ銀ノ部ニ出ス

文字小判





縱二寸二步
横一寸二步
重サ三匁五分

同一步判





縱五步
横三步
重サ八分七厘五毛

右文金引替ハ

慶長金百兩ニ　文金百六十五兩
新金百兩ニ　右同斷
元祿金百兩ニ　文金百五兩位
乾金二百兩ニ　文金百六十五兩

右ノ通ナリ、尤此時慶長金・新金ハ夥シクコレ有ドモ、其餘古金ハ甚少シ、是ハ享保新金ノ時、多ク引

替相濟候故ナリ、右慶長・正德ノ古金ハ定百兩ニ引替ヘ文金百兩ナリ、六十五兩ハ増歩ナリ、御觸書ハ銀ノ部ニ記ス、元文三戊午年十二月迄ニ、殘ラズ引替相濟候、事ハ銀ノ部ニ記ス此節金相庭、文金ニナリテ、五十二匁ヨリ、凡三匁ナリ、是マデ右金通用ノ時ハ、凡六十目ヨリ、一二匁餘マデモ相庭有レ之、尤古金位モヨロシク、掛目モ四匁八分有レ之ユヱカクノ如キノ處、文金ニ成テハ位宜シカラズ、掛目モ輕シ、コレニ依テ吹替ノ時節民服セズ彼是喧シ、全ク金ノ位惡シク、銀ノ位宜シキノ故ナリ、尤此時ノ吹替ハ、金ヲ最初ニ仰付ラレ、其ツヾキ銀ヲ吹替仰付ラル、此銀又古銀ヨリ位アシキニヨリ、文金銀相位スル故、其後相庭引上ゲ、五十六匁位ナリ、夫ヨリ追々引上ゲ、六十目前後ヲ常トス、明和九年二月、江戸行人阪ヨリ出火、諸侯屋敷、并民家悉ク類燒ス、此時ハ京・大阪一時ニ相庭引上ゲ、四五月頃ニハ、凡七十二三匁マデコレアリ、近來聞カザル處ノ高直ナリ、其後追々引下ゲ、又々六十目前後ヲ常トス、然ル處安永年ノ始メ、二朱銀出デ、金ト同樣ニ取扱仰セ出サレテヨリ、又々相庭引キ下ゲ、天明八年ノ頃ニハ、五十四五匁ヨリ六匁位ヲ常トス、全ク二朱銀出デ金ト同樣ノ取扱ヒ故、世間ニ金多ク相成ル故也、コレニ依テ天明八戊申年、二朱銀吹止メ仰付ラレ、是ヨリ相庭モ引上ゲ、寛政六七年ノ頃、六十目前後ヲ常トス、其以後二三匁引上ゲ、少々ノ高下アレドモ先ヅ替ラズ、然ル處文化三寅年三月、江戸芝口ヨリ出火有レ之、諸侯方屋敷并民家類燒ス、此節又三四匁引上ゲ、六十七匁前後、其後又六十五六匁前後、先ヅ高直ナリ、右江戸出火ニテ相庭モ高直ニナルト云ヘドモ、元來此頃金拂底

ノ故ナリ、前ニ云明和九年四五月頃ハ、相庭七十日前後コレアリ、尤モ江戸行大阪ノ火災ニ付、諸侯方費用多キ故トハ云ヒナガラ、二朱銀世ニ行ハレザル已前、其頃正金拂底ニテ、左モ有ル可キコトナガラ、其以後ハ二朱銀出テ世ニ行ハレ、天下ノ金安永年已前トハ増倍ス、依テ天明年ノ末ハ、相庭モ下落シ、五十三四匁トナル、然レドモ又追々引キ上ゲ、文化六七年ノ頃ハ六十五匁ニテ、二朱世ニ行ハレザル已前ト同樣ノ相庭ニテ、二朱銀出デ世ニ金増倍セシ功ハミエズ、二朱銀世ニ行ハレザル、明和九年已前ノ相庭ニ引クラブレバ、當時ノ六十五六匁ハ、凡八九十目バカリノ相場ナラン、是全ク當時世上金大キニ拂底故トミエタリ、何故カク世上金拂底ナルヤ、其謂レアルベシ

一　元祿年中、二朱金コレアリ、則金一兩ノ四ツ一ト分ヲ以テ一歩ト云フ、其一歩ヲ二ツニシテ、是ヲ二朱金ト云、此格ヲ以テ、明和九壬辰ノ年南鐐ヲ以テ、二朱銀ヲ吹セラル、則金相場ノ割合ヲ以テ、通用金一兩ニ二朱八斤ノ積リナリ、元來二朱金ト云ハ、甲州ニテ前々ヨリ之ヲ鑄、二朱金・朱中金トテアリ、元祿年萩原近江守殿、此例ヲ以テ工夫セラレ、其頃始メテ世ニ行ハル

御觸

一　此度通用のため吹拔候、上銀南鐐と唱申候銀を以て、二朱之歩判被仰付候間、右歩判八つを以て金一兩之積り、文銀幷に錢共、時之相庭之通、無滯兩替可致事

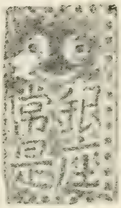
一　右二朱銀兩替に付切賃之儀、是又金と同樣相心得、取遣に可致事

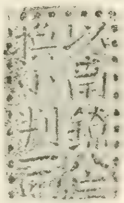
一 二朱銀包之儀、文字金と違ひ、於二銀座一包み致し候間、其通相心得可レ申事

右南鐐二朱銀之儀、金と同樣通用之爲め、被二仰付一候間、無レ滯通用可レ致事

右之趣、國々へも可二觸知一者也

辰九月十日





重サ二匁七分五厘

二朱判

右南鐐二朱、安永三午年十一月、大阪ニ於イテ兩替仲間へ　御公儀ヨリ以後通用手馴レ候タメ、御貸付ニ相成ル、來ル安永四未二月ニ、正金ニテ上納被二仰付一、無利息ナリ、仲間取遣ヒハ、金百兩ニ南鐐二朱、廿五兩差ナリ、其後天明六乙巳年ニ、金ト南鐐二朱、差別ナシニ仰付ラレ候ヘドモ、民甚服セズ、夫レ故天明七年、先規ノ通リニ相成、尤モ金ナレバ相場ニ賃銀掛ル、是ヲ開キト云フ、此譯ハ相庭ハ二朱廿五兩差ノ積リヲ以テ立ル故也、凡金百兩ニ南鐐百兩換ルトキハ賃二十四五匁也、是ヲ四ツ一ト分、相庭ヘカクル、二朱廿五兩ハ金ノ四ツ一ト分ンナレバナリ

右二朱判、年々若干出來、丁銀ハ世上拂底ニ相成、次第ニ金相庭ハ下直ニ相成、下々難儀ニ付、天明八戊申年、右二朱判吹止メ被二仰付一候事

御觸

一此度丁銀吹方申付、幷ニ朱判吹止申付候、二朱判之儀は、無ニ永代差支ニ通用可レ致候、右に付諸色直段も、隨分正路に相守り、下直に賣買可レ致候、彼是不時申唱候者有レ之候はゞ奉行所へ可ニ申出ニ候事

右江戸よりの御觸

申六月　石見
　　　　土佐

一改御本金ノ法、四十四ヨリ二百五マデ有レ之、考ヘ方ハ局官ノ秘スルコトニテ、予ハ不レ知、或ル書ニ、其術ヲ記ストイヘドモ、其職ニ實ヲ受ケザレバ一概ニ論ジ難シ、今愚意ヲ以テ考ヘヌレドモ、相違ノミナラン、委シクハ其職ニヨリテ尋ヌベシ、予ハ知ラズ、其荒增ヲ記スノミ

假ニ以ニ一匁ニ重サトス

四十四　燒詰、金一匁

但四十四ヲ以テ、位ノ最上ト立ル由來ハ、大判ノ部ニ出ス

四十五　金九分七厘七毛八弗
　　　　銀二厘二毛二弗

四十六　金九分五厘六毛五弗
　　　　銀四厘三毛五弗

四十七　金九分三厘六毛二弗　銀六厘三毛八弗

四十八　金九分一厘六毛七弗　銀八厘三毛三弗

四十九　金八分九厘七毛六弗　銀一分二毛四弗

五十　金八分八厘　銀一分二厘

五十一　金八分六厘二毛七弗　銀一分三厘七毛三弗

五十二　金八分四厘六毛二弗　銀一分五厘三毛八弗

餘ハ略レ之、此以下ノ四品ハ、慶長金以來、文金迄ノ位ヲ出ス、其委シキハ不レ知

慶長金位

五十　金八分八厘　銀一分二厘

又五十二トモ　金八分四厘六毛二弗　銀一分五厘三毛八弗

正徳乾金

五十　同前

又五十二トモ　同前

元祿金

七十二　金六分一厘一毛一弗餘　銀三分八厘八毛九弗

又七十六ト毛　金五分七厘八毛九弗餘　銀四分二厘一毛一弗

文字金

六十七　金六分五厘六毛七弗餘　銀三分四厘三毛三弗

右考ノ儘記ス

凡位ヲ見ルハ、術ヲ以テ總目ノ內、正金何程、正銀何程ト知ル、今又假ニ五品ノ金、各以ニ百兩ニ記スニ

慶長金　位五十二　量目、四匁七分六厘、今四匁八分ト云、但シ位ハ五十ナレドモ、茲ニハ五十二チ以テ出ス

金四百二匁七分六厘九毛二弗

銀七十三匁二分三厘〇八弗

元祿金　位七十二　量目四匁七分六厘今四匁八分ト云

金二百九十目八分八厘八毛八弗

銀百八十五匁一分一厘一毛二弗

乾　金　位五十二　量目二匁五分

金二百十一匁五分三厘八毛二弗

銀三十八匁四分六厘一毛八弗

新　金正徳金又三代目金ト云　位五十二　量目元祿金ニ同ジ

金四百二匁七分六厘九毛二弗
銀七十三匁二分三厘八弗

文字金　位六十七　量目三匁五分
金二百二十九匁八分五厘一毛
銀百二十目一分四厘九毛

右交銀ヲ知ルハ、算ヲ以テ各其金ノ量目ニ、本燒金ノ位四十四ヲ乘ジ實トス、各其金ノ位ヲ法トシ、之ヲ除シテ其ノ金ヲ知ル、又銀ヲ知ルニハ、其金ノ位ノ內、本燒金ノ位、四十四ヲ減ジ、其餘リヲ以テ、其金ノ量目ニ乘ジ實トス、法ニ其金ノ位ヲ以テ之ヲ除シテ銀ヲ得ル

一今關東筋ニテ、金一兩凡銀九十目ト立ルコトハ、國初ヨリノコトナレドモ、其ノ制令ノ古文書未レ見、依テ何頃ト云フコトヲ知ラズ、或記ニ云、信長公時代ノ大判ハ、砂金ヲ鍛錬セシモノト、又燒詰ノ精金等ヲ以テ作リシモノニテ、至ツテ良金ニテ、皆四十四ノ位ニテ候、此大判一枚、掛目四十四匁御座候テ、黃金十兩ニテ候ヲ、此中ニ上南鐐銀ヲ六匁加ヘ申候テ、五十目ト仕リ、則五十ノ位ニテ候、私ニ云、此慶長金ノ位、五十又ハ五十二ト兩說アリ、今何レ是ナルヤ知ラズ、舊記ノ儘茲ニ記ス、疑ハシキハ後ノ考ヲ俟ツ 是慶長金ノ位ト申候、此大判掛目四十四匁ハ、上金三十八匁七分五厘ト、上銀五匁二分五厘ニテ候、其位ヲ以テ金目十匁ヲ算用スレバ、上金ハ八匁八分ニテ、上銀ハ一匁二分ニテ候、コノ上銀一匁二分ヲ據トシテ、雜鑄金五十ノ位ニ又カケ合

セテ、凡金一兩ヲ慶長銀六十目ト立テシモノニテ候、然レドモ駿河吹ハ、金ノ位五十二ヨリ劣リ申候ユヘ、一兩ヲ五十七八匁ニ兩替致シ候下略トアリ、此說モ疑アリトイヘドモ、後ノ考ニ記ス、關西・畿內ハ、應永年ノ頃ヨリ、銀ヲ專用ス、依テ諸物銀積リニテ、金銀ノ取扱ヒ、後世ニ至リテモ、東西一列ナラズ、大僊院、慶長十六年ノ古文書ニ、銀五十八匁金一兩トアリ、是等慶長金銀ナリ、寬永・正保年ノ頃ハ、一兩六十二匁前後ニテ、時々高下アリテ今モ同ジ、關東筋ハ前々ヨリ、金ヲ六十目ト立ル定例アリテ、諸物ハ兩ニ何程ト代ロ物ノ方ヨリ高下ヲナス、銀錢トイヘドモ、諸物同樣兩ニ銀何匁、兩ニ錢何貫文トシテ、金一兩ノ六十目ハ、イツ迄モ替ルコトナシ、此六十目ト立ルコトハ、國初ヨリノコトナレドモ、其證トスル令書ナキ故、何ツ頃ヨリト云フコトヲ不レ知、寬永十三年、初メテ寬永通寶ノ錢ヲ鑄ラル、此時ノ令ニモ、又寬文十二年、錢ヲ鑄ラレシ時モ、新錢、金子一兩ニ四貫文、勿論一步ニハ一貫文賣買タルベキ旨相觸レラル、此時モ金一兩六十目、金一步十五匁ト思ハル、然レバ國初ヨリ、金ハ六十目ト定法ヲ立ラレシト見ユ、寬明日記ニ、寬永九年、金一兩銀六十六匁ト云コト、草廬雜談ニ見ユ、是等ハ今云フ江戶ノ銀相場ト云モノナル可キ歟、金一兩ヲ大抵六十目ニ相當セシヨリ初マリシ事ナラン歟、然レバ其ノ起リモ久シキコトナリ、元祿八年、金銀吹改マリ候節モ、御藏元拂金子一兩ニ、六十目替ノ積リ、世間モ其ノ積リニ相心得ベキ旨令セラル、此時シカト金一兩六十目ト云定直段見ヘ、其以前ノ事ハイツ頃ヨリト云コトヲ不レ知、元祿年以來

京・大阪ノ金相場ノ高下ハ物價ノ部ニ記ス

當時古金賣拂凡定

慶長金百兩ニ　文金百六十三兩位

元祿金百兩ニ　同百一兩位

乾金百兩ニ　同七十六兩二步

古金百兩ニ　同百六十三兩位

凡ソ座方ニテモ右ノ通ナリ、尙多少ノ員數、位ノ善惡ニモヨリ申スコト、荒增カクノ如クナリ

一切金ノ事、元祿已來兩替方ニテ步銀ヲ取ル故、民家失却掛リ候ニ付、彼是喧シク不通用ニ有レ之趣、依レ之切金無レ構通用致スベシ、尤折レ候テ遣方滯リ候分ハ、後藤方へ遣シ、步銀ヲ出シ引替可レ申旨

御觸

一御藏金幷世間通用之金銀共、切れ有レ之候小判、只今迄兩替屋方に而步銀取候由、向後は切れ有レ之小判にても、遣ひ方障不レ申は、小判に步銀取申間敷候、但小判折れ候て、遣ひ方滯り可レ申分は、後藤方へ差越、步銀を出し疵無レ之金と引替可レ申候、兩替其外之商賣人に而、步銀取候儀、可レ爲ニ停止一候、已上

右之通、今度從ニ江戶一被ニ仰下一候間、堅く相守之旨三郷町中可ニ觸知一者也

寶永二乙酉年十一月七日　　　大隅
　　　　　　　　　　　　　　和泉

右ノ通相觸レラル、尤古慶長金ハ良金故、切レ・折レ等ハ決シテ無レ之、元祿年ニ始メテ金銀ニ銀銅雜鑄アリテヨリ、右切レ・折レ等ハ出來候也、銀モ慶長銀ハ良銀故銷又ハ折レ銀ハコレナシ、然レバ元祿年ヨリ已後ノ事也、右御觸後、世上銀拂底ノ上、猶又折レ銷等、市民撰強ク、通用難儀ノ趣、依レ之右折レ銀等構ナク、通用スベキ旨嚴令ヲ加ヘラル

御觸

一頃日町中に而切銀通用相滯よし、兩替屋共方に而引替遣し不レ申候に付、諸人商人方致二迷惑一由御聞被レ成、當地十人兩替屋之內、被レ遂二吟味一候處、兩替屋共申上候は、京都常是包にも相除く故、大阪にても其通りに相心得、切銀不二引替一候由申立候に付、京都御奉行所へ御聞合せ被レ成候處、常是方にて切銀相包み候旨申來候、然る上は兩替屋共申分不二相立一候、切銀通用不レ仕、不二引替一候儀不屆に被二思召一、其上步金をも取引替候兩替屋も有レ之由、御聞被レ成候、然るに於ては重々不屆至極に思召候、彌向後切銀通用無レ滯樣に相心得引替滯らせ間敷候、其上利潤を求め候仕方有レ之ば、急度曲事に可レ被二仰付一候、畢竟兩替屋共切銀通用滯候樣にいたしなし候事に思召旨、被二仰渡一候御事

正德三年癸巳八月三日

右ノ後、切レ金ノ儀モ、享保六巳年・同八卯年、疵ノ大小ニ構ヒナク、通用スベキ旨御觸コレアリ、文略ス、然レドモ歳ヲ歴ルニ從ヒ、銷銀又ハ燒銀・切金・輕目金等多ク相成、市民是ヲ擇嫌ヒ、通用滯リ候ニ付度々御觸モ有レ之、通用致スト雖モ、兎角擇嫌ヒシ、且ハ定メノ直シ賃ヲ出スヲ厭ヒ、彼是喧シ、依レ之天明三卯年十二月、兩替ノ者共ヘ金一兩ニ賣買ニ六厘ヅヽノ增歩ヲ役銀ト唱ヘ、金座ヘ差遣シ、其代リ切金・輕目金ヲ無代ニテ引替ヘ候樣仰付ラレ、京・大阪市中ヘモ御觸有レ之、則天明四辰年ヨリ、同七未年マデ、凡四ケ年ノ間、本兩替幷錢屋仲間ヘ取來ル所ノ增歩、役銀則天明七未年十二月上納被ニ仰付一ト雖ドモ、難澁ノ段々申立、上納モ大ニ相減ジ、先ヅ其儘ニテ天明八申年ヨリ、今以テ何ノ御沙汰モナクシテ相止ム、(但此事ハ物價ノ部ニモ出ス) 其以後是迄ノ通リ、輕目金ハ四厘マデ、切金ハ五歩迄ヲ滯ナク通用致スベキ旨被ニ仰付一候事、尤モ切金・輕目金・銷銀・折銀、擇嫌致シ候ニ付、是モ天明七未年・同八申年・寛政元酉年三月、滯ナク通用致スベシトノ御觸度々有レ之ドモコレヲ略ス、但切金ヲ彼是市中ニテ擇嫌ヒ候ハ、往古ニモ似ヨリ候事有レ之ナリ、續日本紀ニ云、「和銅七年九月甲辰制、自今以後、不レ得レ擇レ錢、若有下實知ニ官錢一嫌擇者上勅使レ杖ニ一百一、其濫錢者主客相對破レ之即送ニ市司一」又三代實錄ニ「貞觀七年六月十日已來、禁ニ京畿及近江國、賣買之輩、擇ニ弃惡錢一、曰、弘仁十一年六月九日、下ニ知大藏省一曰、鑄錢司所レ進新錢雖ニ文字頗不一レ明、而不レ失ニ體勢一、又有ニ小疵一行用無レ妨、宜ニ猶檢納一、而閒愚者不レ悟ニ此旨一、專任ニ己心一、擇弃不レ受、或稱ニ文字不一レ全、計十嫌ニ二三一、或號ニ輪郭有一レ缺、擧レ百欠ニ八九一、是

以要ニ升米一者、飢口難レ糊、買ニ屯綿一者寒身不レ暖、宜下牒ニ路頭一嚴加中禁止上、若有ニ乖違一、隨即決笞上ト、カクノ如ク有レ之、尤此時代ハ今ノ如ク金銀通用スルコトナシ、皆々錢ナリ、天文時代、關八州ニテ惡錢ヲ撰嫌致シ候段、錢ノ部ニモ記ス。カクノ如ク錢ニテサヘ、撰嫌セシト見ヘタリ、今ノ切金・輕目金ヲ市中ニテ撰嫌致候ハ至極セリ、今ノ潰錢ナド、潰錢ノ多クテ、百文ニ通用スルコト、自然ト金銀ノ多キ故、錢ヲ卑ミ左程撰バザルト見ユレバ、ヤハリ奢ノ長ジタルニヤ、愚按ニアタハズ

小判ニ橫筋ヲ入ルハ、遺老物語ニ、後藤庄三郎云、小判ニゴザ目ヲ切ルコトハ、內迄表ノ通ナルモノトノ印シナリトアリ、サレバ今云莚目ト云ハ、ワザト切レ目ヲ入タルモノニテ、イカ程切通リテモ、內迄正金ナルコト、見ス可キ爲ナレバ、今ノ如ク切金ヲ厭フベキコトニハアラザレドモ、是非ナキ世風ナリ

〔此間原本二頁ノ餘白アリ〕

一　東西國々貨物ノ交易ニ、金銀ノ取扱ヒ一列ナラヌヲ、謹デ考フレバ、凡ソ黃金ノ質ハ堅剛美ニシテ、又柔ニ屈折其意ニ隨ヒテ、枝柳ノ如ク、萬世共色無ニ變更一、君子ノ德ニ比シテ至テ貴シ、是又恐レ多クモ神君ノ德ニ比ス、依レ之當御世慶長年ニ至リテ黃金ノ出シコト、上古ニ萬倍シテ天下財川豐

カナリ、斯ク大德ノ黄金ナル故是ヲ貴重シ、諸貨物金ヲ表ニシテ、諸相庭ハ貨物ノ方ヨリ高下シ、兩ニ何程ト立ルコト、慶長年神君、關東ニシテ交易ノ道ヲ開キ玉ヒシ、天下一統根本ノ土地ユヱ、今以テ關東ハ金ヲ貴重ス、又タ天平年ニ本邦始メテ奥州ヨリ黄金ヲ出シ、御世榮エント、吾妻ナルト云ヘル如ク、黄金ハ東方ヨリ初メテ出現セル由縁アリテ、天然ト關東ハ金ヲ貴重スナラン、凡ソ銀ノ質ハ、堅脆ニシテ、折レ曲リ金ト不レ同、其色モ又年ヲ經テ變更シ、黒錆ヲ生ズ、試ニ火ニ投ズルニ、金ハ質柔ナレドモ、輙ク鎔化セズ、銀ハ質堅ケレドモ、蕩ケヤスク、又金銀方寸ニシテ、量目大ニ輕重アリ、是銀ハ金ニ及バザルイハレ也、京都中世足利殿ノ世ト成リ、次第ニ王道モ衰ヘ、名ノミニテ威力ナク、毛利・大内等ヨリ扶助ヲ得テ、御即位ノ式ヲ行ハル程ノコトニテ、其砌ヨリ自然ト銀ハ西國ヨリ京ヘ入込ミ、諸物モ銀錢ノ定メニ成リシ也、天正・慶長ニ至リテモ、三好・赤松等ノ餘類皆入洛シ、制スル者モ無レ之、市民トイヘドモ、君父ヲ恐レズ、利欲ヲ恣ニセル風俗ト成リ、利ヲ專トシ、信義薄情ニシテ、慶長ニ到リテモ、猶市民利欲ヲ構ヘ、銀ヲ貴ミ、交易ノ貨物モ其品類ヲ表ニシテ、一石何程ト、相庭ハ銀錢ノ方ヨリ立ル樣ニ成タル也、天武二年、本邦銀始テ對馬ヨリ出現シ、其後伊豫・但馬・備前・石見・攝州等、專ラ西國筋ヨリ銀出ルヲ以テ、後世毛利・大内・三好始メ、西國ノ輩入京ノ節、皆銀ヲ以テ貨物交易スルニヨリ、自然ト銀ヲ京畿内・西國貴重スル樣ニナリテ、銀錢ノミノ通用ニ偏リシナリ

右ニ述ル如ク、諸物交易金銀通用ノ法、東西一列ナラスハ、此謂レニテ、天然自然ノコトニシテ、今奈何トモナシ難シ

一　或書ニ云、日本深山幽谷ハ、悉ク金・銀・銅・鐵ノ蔓ハビコリテ、中ニモ吉野ノ金、富士。身延ノ銀ナド、人更ニ手ヲ付ケル事ナシ、奥金華山ハ、日本最初ノ金山ニシテ、今モ又金色ナル由、留メ山ナレバ、人窺フ事ナシ、佐渡ノミハ古來ヨリ掘セラル丶、二盡ルコトナフシテ、多クハ黄金ヲ出ス、然レドモ日本ノ金、大體積ツモリアルコトニテ、多ケレバ却テ天下ノ害トナル、是レ程コソ宜ケレト東照神君ノ定メヲレシヲ以テ、其分量ヲ御代々守ラル丶コト丶カヤ、寛文年中ニ、金座ノ者共打寄相談シケルハ、金子一兩ニ、銀子何程入テ吹改ルトキハ、日本ノ金、何程多ク成ノ道理ナリ、但シ金ノ位少シ劣ルコトニ構ヒモナシ、世上重寶何增倍ノ御德用ト公儀ヲカリテ己等ガ利欲ヲ構ヘ、當時ノ老中ノ内ニテ、土屋但馬守數直殿サヘ、得心アラバ、願成就スベシト云合テ、但馬守殿ヘ人シテ申入ケル、公儀御德用ト有之故ニ、右ノ書付ヲ留メ置レケル、去間イツカイツカト沙汰ヲ待暮シケルニ、一向其沙汰ナカリシカバ、失念ニヤト但馬守ヘ申入タル人ヲ以テ、重テ窺ヒ試ミケルニ、其時宜玉ヘルハ、町ノ者共願立申筋大ニ違ヒタリ、金銀ト申スハ七寶ノ最上ニシテ、和漢是ヲ重寶ス、其金ノ位ヲ一段引下ゲテ、澤山ニスベキトノ事ハ、中々申出サル丶筋ニテナキ故、仲間ヘモ沙汰シ申サヾルナリ、近代ハ昔ノ如キ紫磨金少ク總體黄金ノ色白ミタルサヘ、上ニモ歎キ思召、是ヲ又求ノ

位ニ吹替テ、日本金ノ位ヲ引下グルトハ、下ノ了簡ニ及ブ所ニアラズ、此書付ハ返シ渡サレヨト有シトカヤ、コレ土屋但馬守、儉約發端ヲ申シ行ヒ、形ノ如ク費ヲ厭ハル、故、御爲ト云ハヾ取上ゲ申サルベキヲ、古代ヲ改メラレザルコト、感心セルトカヤ、其後金座ノ者共、願ノ叶ハザルヲ殘念ニ思ヒ、延寶七年、土屋殿卒去後元祿年ニ至リ、荻原近江守重秀殿、勘定奉行ニテ、又御儉約申立ラレシ時、折ヲ得タリト、金座ノ者共、寛文年ノ書付ヲ潤色シ、近江守殿ヘ持カケ内談シケレバ、案ノ如ク老中職モ尤モニ思ハレ、御聞ニ達シ、程ナク元祿金銀吹替ノ事出來タリ、土屋殿ノ性質ナルコト、世以テ美談トス云々

一　大神君ヘ或人御團扇ヲ進メシニ、黄金ノ裝リアリシヲ、ヒタト御覽ジテ之レハ黄金カト有リシニ、御前ニ後藤庄三郎アリケルガ、答テナル程黄金ニテ候ト申ス、ツケ石ヲ取寄セツケテ見ルベシト仰アリテ、則御前ニテ石ニツケテ、上々ノ黄金ノヨシ申シ上ゲシ時、大ニオソレ玉ヒタル御氣色ニテ、早早此團扇ヲ深クヲサムベシ、偖仰アリシハ、天下ニ此黄金ホド重寶ハナシ、多クノ領地ヲ人ニ遣スモ、此黄金大切ナレバ也、モシ黄金大切ナラズンバ、何ヲ以テ人ヲ賞スベキ、領地ヨリモ至ツテ重キハ此黄金ヅカシ、カク重寶ノ黄金ヲ以テ、如レ此ノモノヲ飾レルハ、以テノ外ノコトナリトノ仰ヲ、近臣タリシ人承ハリシ由ニテ、柳生但馬守物語ラレキ也

三貨圖彙卷之十三　甲金之部

草間直方輯錄

甲斐ノ國ハ、後冷泉院ノ御宇、康平年ノ頃、新羅三郎義光初テ領セラル、是甲斐源氏ノ始祖ナリ、義光ノ嫡子義清ヨリ初テ武田ト名乘、甲府ノ屋形ト號シ、數代住居セラル、左京大夫信虎迄ハ十八代、信玄迄ハ十九代ナリ、二十代勝頼ニ至リ、天正十年三月、信長ノ爲ニ數代ノ名家忽滅亡ス、其後甲府一國ヲ信長ヨリ、川尻肥前守ニ授ケラレ、巨摩郡ハ、穴山梅雪舊領ナル故、其儘ニナシ置ル、川尻ハ甲府ニアレドモ、國政正シカラズ、民其酷烈ヲ恨ンデ、川尻ヲ殺サントスル故、神君ヨリ本多百助ヲ甲府ヘ遣ハサレ、御穿鑿シ玉フ所、川尻ハオノレヲ亡ボサントテノコトヲ察シ、ヒソカニ本多百助ヲ殺害ニ及ブ、國人等神君ニ敵對スルヲ憎テ、川尻ヲ責討其跡穴山梅雪暫ラク居住ス、其後北條氏直、甲・信ニ望ヲカケテ打入、コレニ依テ酒井忠次始メ、大須賀・大久保・本多等ヲ甲・信征罸ノ爲ニツカハサレ、天正十年七月、神君甲・信ニ出馬アツテ、府中ノ仕置ヲ命ゼラル、其時古府・新府、兩所アリ十月北條ト和親アリテ公領トナル、其後府中ハ暫ク淺野長政御奉行ノ列ニテ、府中二十一萬四千石ヲ領シ、慶長五年後ハ公領トナル、當國ニ金山アリテ、昔年ヨリコレヲ冶鍊シ國内通用ス、然レドモ其

始何頃ト云コトヲ知ラズ、甲斐ハ四郡ニシテ、八代・山梨・巨摩・都留ナリ、此中都留ノ郡ヲ郡内ト云フ、今郡内絹・甲州絹等ノ產スル所ナリ、此郡内ハ交易甲金ニ偏ラズ、江戸金ヲ多分用ユ、コレハ絹商人等、江戸・他國ヘ、其產スル絹ヲ持出ス市ニ鬻グ故ナリ、當時ニテモ文金銀ヲ嫌忌ヒテハ、交易不辨理ナルニ付、慶長出來、元祿・正德文金ニ至ル迄、時々江戸・京ノ相庭ヲ以テ、絹ヲ賣捌クコト故、此郡内バカリハ、前々ヨリ甲金ニ偏ヨラザレバ、外三郡ヨリハ、別國ノヤウニ思ヘリ、郡内ヨリモ又三郡ヲサシテ、甲州ト云、此三郡ト郡内ノ境ニ、大山數峯連リテ、郡内ハ又一構ヲナス、山梨郡、大山ノ内ニ金坑アリテ、昔ヨリ金ヲ冶鑄シ、國内通用ス、然レドモ此コト其始メ何頃ト云コトヲ不レ知、金銀圖錄ニ、甲金ノ丸判出タリ、左ノ通



量目、四匁五分ト有、コレハ大内壁書ニ云、京都金銀量目ノ定法、黄金一兩ノツモリナルベシ

武田菱ノ極印アリテ、金上々ノ位、形制最モ醇古ナリト云リ、是等武田信虎・晴信代ノモノニシテ、京都室町殿季世、織田信長時代、大判出來ス、永祿ヨリ天正年ノモノナラン、未ダ其眞物ヲ不レ見、格別古キ物ニハアルマジ、其以前ハ砂金ト切遣ヒナルベシ、今間々存スル所ノ、甲古金形制古雅ニシテ、金質美ナレドモ、制作天正・慶長ノモノニテ、駿河巴判ノ金色ニ類ス、甲州金ノ制作ハ、

松木・野中・志村・山下トテ四家アリト云、然レドモ多分松木ノ制作多ク、外三家ノ作少シ、松木ハ三家ノ長ニテ、先祖了存五郎兵衞紹哲ト云テ、巨摩郡宮原村ニ數代住ス、天正年神君此國ヘ入ラセ玉ヒシ時、松木源十郎ヲ召出サレ、甲金ノコト委シク尋ネサセ玉ヒ、猶又吹方ノ儀改メテ命ゼラル、其後慶長年ニ至リ、大久保石見守長安ニ命アリテ、伊豆・佐渡・石見始メ諸國金銀・銅鑛ノコトヲ掌ラシム、依レ之甲州ヨリ出ル處ノ金モ、長安支配アリテ、此時又延シ金ノ形制始テナル、但今存スル所ノ、松木・六角極印小判歟金銀圖錄、又甲州略記ニ云、慶長年中、大久保長安ヨリ、松木ヘノ狀ニ云、其元ノ金子、碁石ニテマネ判多ク候間、ノシ金ニ江戸小判ノ如ク仕ベキヨシ御意ニ候、金二三兩ノシ候ヘトアリ、是前ニ云フ松木小判ナルベシ、碁石金トハ灰吹ノ粒金ニテ、極印モ之レナク、今ノ小玉銀ノ如シ、大小アリテ重サ等シカラズ、加州ヨリ出ルハ小キ極印アリ、或人甲州ノ碁石金トテ所持セルヲ見シニ、ヤハリ加州ノ灰吹金ナリ、又マネ判トハ、眞錬リ判ト云コトニテ、碁石ノ如クノ眞錬ノ灰吹金ナリ、又マネリノ灰吹金、量目四匁ヲ以テ制セシモノヲ、甲州ノ露小判ト云、是ハ極印ニテ、一兩吉、又金吉等アリテ、甲州丸小判ト同樣ニ通用セシモノナルベシ、元來ハ露小判・碁石金・マネ判、皆灰吹ノ金ナリ、前ニモ云今甲州ノ碁石ト云ヒテ、玩賞スルヲ見ルニ、露小判ノ外ハ、多分加州ノ灰吹金ナリ、コレ等又良金ニテ小玉銀ノ如ク、量目十匁・二十匁輕重アリテ、皆小キ極印アリ、右碁石金モ加州ノ灰吹金モ、皆古代ノ軍用ニ貯設シモノナラン、亦甲州ニ竹流極印金等有レ之由、昆陽漫錄ニ出デタリ、コノ竹流金未レ見、

大抵加州ノ墨形ノ類ナルベシ、竹流ハ四十目アリテ、甲金十兩ノ割ヲ以テ通用セシニヤ、是等ハ甲金ノ丸判ナキ以前ノモノニテ、切リ遣ヒノ類ナラン歟、加州ノ墨形金ハ、量目二十目アリテ、金五兩ノ割ヲ以テ、古代國內通用セル歟、又軍用ノ備金ナル哉、是ハ切遣ヒトハ見エズ



右墨形金ハ、甲州竹流金ノ見合セニ記スノミ、加州ニハ右ノ外花降銀ヲ始メ種々形制ノ金銀判アリテ、甲州ノ如ク金座・銀座アリ、武藏治良兵衛・金屋彦四郎トテ、慶長ノ初年、加州侯御入國ノ砌ヨリ、命アリテ右兩人ノモノヘ、金銀制作冶鑄ノ事皆マカセラル、此事ハ第十七金ノ部、南挺花降ノ條下ニ記ス、依テ玆ニ略ス、甲州金ノコトハ甚ダ不案內ニシテ、委シクハ不レ知、然レドモ三貨ノ續キニヨリ、其大概ヲ甲州略記・金銀圖錄ヲ以テ考誌シ、其餘ハ、京師、雄崎老人ノ（元甲州ノ絹問屋ナリ）物語ヲ、玆ニ並セ記ス、甲州略記ニハ圖ナシ、今見安カランタメ、其條ニ圖ヲ出ス、略記ニ云、甲金（江戸ニテハ甲州判ト云）ハ一分ヲ十二匁ト定ムルナリ、金銀圖錄志稿ヲ引テ云、甲金通用ノ法ハ

金一兩代　銀四十八匁
同一歩代　同十二匁
同二朱代　同六匁

同一朱代　　同三匁

同朱中代　　同一匁七分五厘

同糸目代　　同七分五厘

同小糸目代　　同三分七厘五毛

同小糸目中代　　同一分八厘七毛五弗

右ハ大抵元和年後ヨリ、延寶・天和年ノ頃ノ通用ト見ユ、今モ其通リナルヤ、又通用禁止ナリシヤ、何レ委シクハ不レ知、金銀圖錄ニ云、延寶七年ノ文書ニ

米四石二斗五合　　此金一兩ト糸目 按ニ此銀四十八匁七分五厘 一石ニ付十一匁五分九厘餘

米一石一斗七升六合　　此金一兩ト三朱糸目 按ニ此銀五十七匁七分五厘 一石ニ付四十九匁一分一厘位

米六石四斗七合　　此金五兩一分一朱糸目小糸目中 按ニ此銀二百五十五匁九分三厘七毛 一石ニ付三十九匁九分六厘位

合七兩二歩朱中糸目小糸目中

按ニ右ノ米合十一石七斗八升八合、尤直段夫々大キニ甲乙アリテ、上中下三段ト見ユ、是ヲ銀ニシテハ三百六十二匁四分三厘七毛五弗位ニ當ル、平均一石ニ付三十目七分四厘餘ナラン

略記ニ云、甲金ノイワレヲ甲府ノ町年寄ニ尋ネシニ、其始メヲ詳ニセズ、古キ甲金ハ其形チ色々アリ

碁石金

大鼓判
一兩判
一兩糸目
糸目
小糸目
細目甲金一分
二朱
一朱
朱中

右定リタルハ、神祖ノ御時ノコトナリ、元祿金ニ吹替ラルヽ年マデハ、古來ヨリ一ヶ年ニ三千五百兩、又ハ山金買出シ有次第中絶ナク、判本方ニテ吹出シ、金ノ位、上ノ金ニ極メ、一國中甲金ヲ以テ賣買ス、元祿八年、元祿金ニ吹替有レ之砌、甲金通用ヲ禁ゼラレシカドモ、其砌松平美濃守吉保甲州ヲ領セラレシニヨリ、三四年ノ後、郷民甲金通用ナキヲ甚ダ患ヒ歎キシニヨリ、美濃守ヨリ公儀ヘ相願ハレテ、甲金通用又免許アリ、然レドモ甲金ノ位ヨク、元祿金ノ位劣リシニヨリ、美濃守ヨリ又被ニ相願ー、是迄ノ甲金ヲ元祿金ノ位同様ニ引下ゲ吹替アリテ、是ヲ甲安金ト云、則其極印アリ、尤モ是ハ甲金ノ位宜シク、

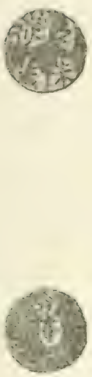
元祿金ノ位不レ宜故、他國ノモノ入込ミ、甲金ヲ買取國々ヘ持出スニ付、無レ據領主ヨリ元祿金之位ニ吹改ルトナリ、其後又江戸ニテ乾金ヲ鑄ラルニ付、又乾金ノ位、古甲金ノ通ニ吹替ル、然ル處美濃守(後甲斐守)國替仰付ラレシニヨリテ、右古甲金吹替高四五萬兩不足ニテ吹替止ム、依レ之其後甲府ノ町人願ヒテ、右不足ノ分ヲ吹足セシナリ、是ヲ甲定金ト云、寶永四年ヨリ、享保二年迄吹出セシナリ、是レ通用ノ金ニシテ、表ニ松木トアリテ桐ノ紋アリ、裏ニ甲安ト極印アリ



重サ一匁



重サ五分



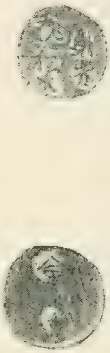
重サ二分五厘

〔圖ナシ〕

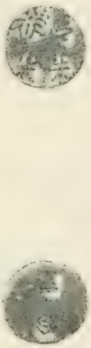
重サ一匁



重サ一匁



重サ五分



重サ二分五厘

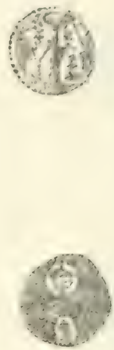
又甲重金ト云ハ、享保六年ヨリ、同九年迄吹出ス、金高三萬四五千兩程ナリ、是ハ表前ニ同ジク、裏ニ甲重トアリ、右ノ甲安金取交通用ス

一分金



重サ一匁

二朱金



重サ五分

一朱金



重サ二分五厘

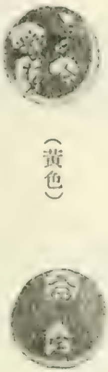
朱中金



重サ一分二厘五毛

又甲定金ハ享保十三年ヨリ吹出シ、今ニ到ル迄通用ス、享保十七年、甲定金吹足シ被二仰付一、金高二萬兩餘、町人願ニテ吹足ス、尤モ表前ニ同ジ、裏ニ甲定ト極印アリ

一分金



（黄色）

重サ一匁

二朱金



（黒色）



重サ一匁



（黄色）





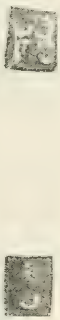
（黒色）　重サ五分

同



重サ五分

朱中金



重サ一分二厘五毛

右甲安・甲重・甲定金ハ、古甲金ノ位ヨリハ二割アシヽトナリ、皆々取交通用ス
又云、甲金ノ極印ヲ打、宮原村松木源十郎ニ尋ネシ書付ト、亦甲州ノ人ノ甲金ノコトヲ記シタル書付
ト幷セテ記スコト左ノ如シ、灰吹・碁石金、コレハ慶長ノ初メ通用ノ金ニシテ皆極印ナシ、又云、甲金

ハ往古正金ヲ鐵砲ノ玉ノ如ク吹テ、打平シテ、其形チ碁石ノ如クナル故、碁石金ト云



輕重定リナシ

露一兩判



是等ハ眞錬碁石金ノ類ニシテ數品アリシト見ユ、古文書ニ、マネ判多シトアルハ是等ナルベシ

私ニ云、碁石金ニ極印アルモノニテ、掛目四匁アリ、是ハ古甲金一兩ノ丸判通用ノ時、是ト双ベ通用セシナラン、慶長ノ古文書ニ、碁石ニテ、マネ判多シトアルモ、右ノ露小判・碁石金ノ類、眞錬判、餘リ多キ故、ノシ金ニ可レ仕旨御意有リシナルベシ

右ノシ金ト云ハ、松木小判ノコトナルヤ、又或家藏ニ、甲州吹慶長小判トテアリ、此金ナルヤ不レ知、右古文書ニ江戸小判ノ如ク可レ仕由御意ニ候トアルハ、甲州ニテ江戸小判ノ如クノシテ、其儘江戸ヘ遣シ、後藤方ニテ極印ヲ打シモノナラン歟

甲州吹慶長金

重サ四匁八分



松木小判

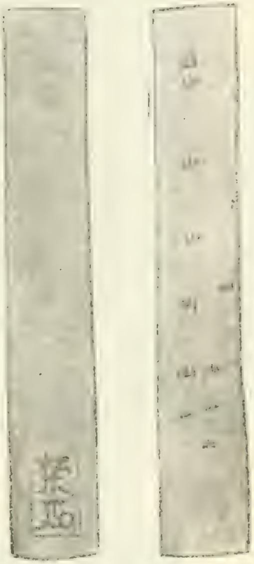


圖錄ニ云、重サ四匁、表ニ六角極印二ッ、上ニハ桐アリ、下ニハ菊アリ、裏ニハ無ニ極印一

愚按ニ、是レ玩賞品ノ雛小判銀ト同、互見スベシト云ヘリ

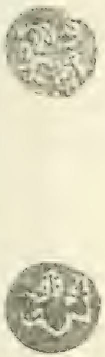
右ノ外、板金アリ、是ハ碁石金ニテハ、微用ニ遣ヒ方不辨理ナル故、薄ク板ノ如ク打チノベテ、小用ニハ切リテ遣ヒ用ヒシナルベシ、但シ碁石金初ニ甲州金ノ形制無レ之、以前ノ切リ遣ヒ金ナルベキ歟

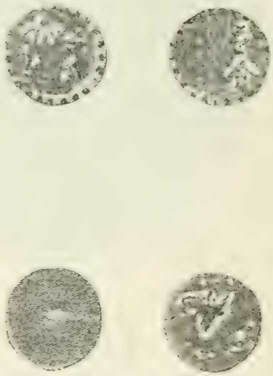
板金



長短不同、五寸ヨリ二三寸マデ有テ、享保年畑中ヨリ掘出スト云、未レ見

一分判ハ、武田信玄ノ時、始メテ金分判ヲ丸ク吹テ、表ニ桐マハリニ星七ツ、重サ一匁アリテ、是ヲ太鼓判ト云トイヘリ





鑄金ニシテ、極印ノ打込モ無キヲ、太鼓判ト云ト圖錄ニアリ

私ニ云、右ヲ以テ見レバ、都テ古甲金ノ丸キハ、信玄時代ヨリ出來シモノナルベシ、右碁石ノ灰吹金ハ軍用ノ備金ニテ、板金ハ切リ遣ヒ金ニテ、皆天文年ヨリ、永祿年ノ事ニテ、其間ニ丸甲州モ、丸一分モ、出來シナルベシ、然レドモ略記ニ、神祖ノ御時ニ、甲金ノ形極リタルト云フ說アリ、何レ不レ詳

繩目金、コレハ慶長ノ末ヨリ、元祿年中迄ノ通用ノ金ニシテ、片面ニ桐ト松木ノ二字極アリト云ハ、是等ナルベキ歟、繩目ト云ハ、緣ノ星目、繩目ニ似タルヲ以テ云フナルベシ



重サ、四匁五分ヨリ、二匁迄、大小アリテ皆縄目金ト通稱スル由、雄崎氏云ヘリ、否、不レ知

裏ニ、山下ノ二字アルモ有リト云

古金大判



金銀圖錄ニ云、右大判重サ拾二匁二分、背石打毛文、制造ノ年歷ヲ詳ニセズ、金質精純。制作古雅、天正以前ノ物ナルコト疑ヲ容レズ、松木源十郎ハ其先了存、五郎兵衛紹哲ト云、甲州ノ金座ナリ、巨摩郡宮原村ニ住ス

古志村壹兩判



重サ四匁

古金壹兩判



金銀圖錄ニ云、右壹兩判重サ四匁、背石打無文、金位上々、形制精雅古物知ベシ、愚按ニ、甲斐國志稿ニ云、甲金通用ノ法ハ金壹兩ヲ銀四十八匁ト定メ、十二匁ヲ壹分トシ六匁ハ貳朱ナリ、三匁ハ壹朱ナリ、壹匁五分ヲ朱中トス、七分五厘ヲ絲目ト云、三分七厘五毫ヲ小絲目ト云、小絲目中ナドト云ヘリ、今ハ絲目ト云ハズ、專ラ銀ト稱スルナリ、延寶七年ノ古文書ニ米四石二斗五合、此小判一兩絲目米一石一斗七升六合、此小判一兩三朱絲目米六石四斗七合、此小判五兩一分一朱、絲目小絲目中合金七兩二分、朱中絲目

小絲目中トアリ、同八年ノ古帳ニ小判朱中絲目代三十三文、此釉二升九合八勺、小判三分絲目小絲目此釉一俵一斗七升九合八勺、甲三朱ニ中此釉八升八合四勺、甲一分一朱二匁五分、此釉一斗四升七合三勺トアリ

古金壹兩判



重サ四匁

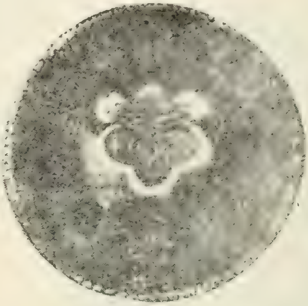
同上



重サ四匁五分

古金壹兩判

表



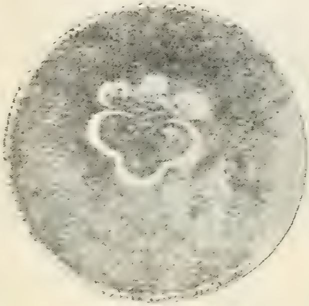
裏



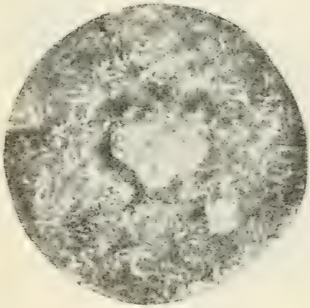
重サ四匁

古金壹兩判

表



裏



重サ四匁二分

古金壹兩判



重サ四匁五分



重サ四匁

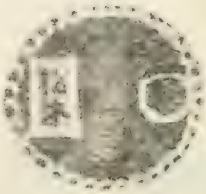
古金壹兩判

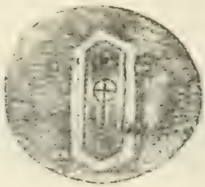


重サ四匁

古金二分判

〔原本一頁ノ餘白アリ〕





重サ二匁二分

甲金小判

〔原本約七行餘白アリ〕

右大キサ、鶏卵ホドニテ、表裏、ヤスリメ五筋アリ、表ニ上ノ字アリト云、右ハ甲金ノ三分ニ當テ通用スト云フ

天正年中、神祖甲州ヘ入玉ヒシ時、國中ノ甲金ヲ集メ、宮原村、松木氏ニ命ゼラレ、甲金三十萬兩吹カセラル、重サ一匁、コレヲ松木判ト云、又細字金ト云、按ニ松木判ト有故ニ松木小判ノヤウニ見ユレドモ、重サ一匁トアレバ、一分判ノ事ナラン

一分判





重サ一匁

二朱判

一朱判



重サ一匁

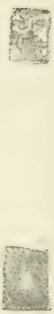
重サ五分

重サ五分

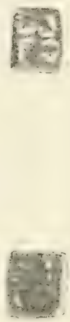
重サ二分五厘

重サ二分五厘

朱中判



重サ一分二厘五毛



重サ一分二厘五毛

武川筋、宮原村ノ農民三七ト云フモノ、古甲金色々所持スト云ヘリ、甲金吹替アレバ、請負人運上ヲ出ス故、己レガ利欲ヲ專ラニ計ルニヨリ、金ノ位アシクナリテ、吹替ノ時ハ定ノ通リ行使スレドモ、後後ハ一分ニテ五六十文程賤シク通用シテ、民ノ患ヒヲナス、其上吹替ゴトニ、甲金ノ數多クナリ、古來ハ三十萬兩ト云シモ、今ハ四十萬兩モアリテ、通用賤シクシテ、民ノ利ナラズト云リ

右ハ元文五申年、靑木敦書、甲州ヘ檢使ニ出役シ、歸府ノ上官ヘ奉ル略記ト、寶曆八年、甲金ノ事ヲ記シタル文書ヲ得テ、右略記ニ付スト云フ兩說ニ、京師雄崎氏ノ雜話ト並セ、甲金ノ大概、愚意ヲ以テ茲ニ記ス、相違ノミアラン、寛免ヲ願フ、猶委シキハ、金銀圖錄並可レ考

三貨圖彙卷之十四 金之部

草間直方輯錄

古代ノ金小判數品アレドモ、其據ヲ不レ知、全ク前ニ云如ク亂國故、金座銀座ナド云コトモ無レ之、諸大名其國ヲ領スルトキ、國用ニ銘々之ヲ鑄ル歟、所謂左ノ類ナリ、但此圖彙ニシルス古代ノ金銀判、幷一歩判ノ類、今以世ニ數品殘レリ、先年銀座ヨリ出シモノニ、右金銀數品ヲ集メテ、此圖ニアルモノ凡洩サズ、其器物ナド、甚美麗ニシテ翫ビモノ、最上ナリ、是驕奢ノ第一ナルベシ、是ハ元祿年ノ頃古錢ヲ愛スルコト專ラ流行シ、和漢ノ古錢數品此時始テ世ニ賞セラレ、盛ンニ貴賤ノ玩ビモノトス、依レ之此時又僞錢ヲ多ク作リ、人ヲ欺キ利ヲ奪フ、其作ノ巧ミナルコト、今以テ名ヲ殘ス、（輪袈裟作、東條作、升伊作、谷川作、）其以後正德年ニ至リ、銀座ノモノ利欲ヲ構ヘ、三ツ寶・四ツ寶ノ惡銀ヲ增鑄シテ、過分ノ利ヲ貪リ、驕奢ニ誇リ、種々ノ珍寶ヲ貯フ、此時右ノ弄錢ニナラヒ、古金銀ヲ集メ翫物トシ、數品ノ珍物ヲ集ム、然レドモ古代ノ金銀判、格別數品ナシ、凡天正・文祿年ノ頃、豐臣家ノ時代ヨリ、國主自分鑄サスルトイヘドモ、元來ニ金銀ノ出方少キ故、金銀判數多有ベキヤウナシ、尤豐臣家ノ金賦リナド云

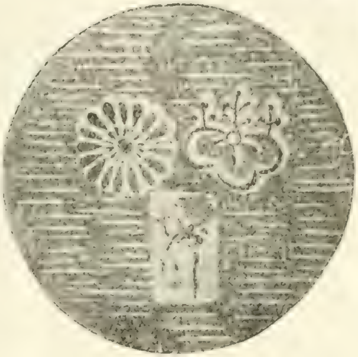
フコト有シユヱ、其時代ハ金銀充滿セルト思フハ僻コトナリ、前ニモ著ス如ク、金銀ノ出方多クナリ、今財用豐ニナリシハ、全ク神祖ノ御恩澤ニシテ、當御世ノ始メ慶長年ノ頃ヨリノコトナリ、夫ヨリ以前ハ甚拂底ナリ、依レ之銀座ノ者ドモ、古金銀ヲ集ムトイヘドモ、格別珍ラシキ物モナク、又數品アラザル故其意ニ任セズ、依テ内々色々ノ金銀判ヲ鑄サセ、世ニ稀ナル珍寶ニテ、座方ノ手本金銀ト稱シテ、自ラ慢賞シ、彌奢ニ長ジ人ヲ欺クト云ヘリ、（正德見聞錄并可レ考）是ヲ知ラザルモノハ、頻ニ珍ッシキコトニ思ヒ、古代ハ金銀多ク種々ノ品類アリテ通用セシ樣ニ思フ者數多アリ、皆昔ヲ考ヘザルノ過チニシテ、大キニ僻コト也ト、或老人ノ云ヘリ、銀座所持手本金銀ト稱シ秘藏セシモ、星霜フリテ明和年ノ頃マデ、京師ノ或家ヘ質物ニ入レ置タリ、其節右質屋ヨリ拂ヒモノニ出シヲ、予モ見テ異品ノ多キヲ不審ニ思ヒシニ、前ニ云老人ノ物語ヲ聞テ疑ヲハラセリ、右ノ通中世ニ拵ヘシモノ多ク、其上金銀錢譜ナドニ習ヒ、好事ノモノ種々異形ノ金銀ヲ巧ミ出シテ、人ノ眼ヲ惑ハシム、夫故圖式ニ古代何國ニテ通用セルト云コト、證跡委シクハノセズ、勿論古代亂國ニテ、證トスル書物ナキユヱ、彌々空論ノミ出來、又珍シキモ一犬吠レバ萬犬吠ルトテ、俗諺ノ如ク虛言ハ云ヒ勝チニテ、十ノモノ八九ハ實ナシ、依テ今著ス圖彙ニハ、强テ圖式ヲ取ラズ、然レドモ是迄世ニ流布セル金銀錢譜・黄白志・珍寶錄ナドノ圖ハ、虛ニモセヨ、能ク人ノ知ルコトユヱ、疑アリト雖モ作者ノ意ヲ破ランコトヲ恐レテ、其儘ニ圖ヲ用ヒ出セリ、現ニ眞物ハ數少ク、疑シキモノ多カラン、又奥ニ出ス寛永年、將軍家御上洛ノ節、金

銀座ヘ雛ノ玩ビ物ノ金銀判數品仰付ラレ、其頃コレヲ鑄ル、此時亦座方ノモノ、私ニ種々ノ金銀ヲ鑄シコトモ有ト云傳フ、皆御當代中世ノモノナレドモ、此譯ヲ知ラザルユヱ、珍ラシキトテ異品ニ迷フモノ多シ、此ノ圖式ミン人能ク思惟スベシ、譬バ今ニテモ古錢ヲ諸人翫ブコト時行セバ、忽チ昔ノ如ク僞作ノ罪人モ出來ル也、然レドモ黃金ハ價貴キユヱ、容易ニ僞作スルモノ希ナレドモ、當時諸物ノ巧ミナル上、邪欲ノ利ヲ貪ル人情ノモノコレアル時ハ、又僞作ヲ巧ムベシ、尤黃金ノ位、昔ニハ劣ルトイヘドモ、座方ハ格別素人ノ眼目ニテ鑒定スルコトハ甚難キ事ナリ、又極印ナドハ昔ニ似スルコトハ安キコトヽ思ハル、然レバ座方ハ格別古金銀ノ目利ハ、兩替商賣ノモノニテモ、今功者ナルモノハナシ、然レドモ何事モ好デ眼ヲ懲ス時ハ天然ト妙ヲ得、眞僞モ分ルベケレドモ、大抵古金銀ナド好キ集ムルモノハ、豪富ノモノナラデハナシ、又古金銀貯ヘ所持スルコトハ、嚴シキ御制禁ニテ、數度仰セ渡サレモアレバ、市民ナド持貯ル事決シテナラズ、依テ古金銀ノ珍品見ルコト至テ希也、適々眞物ト思フ品類出ル時ハ則模寫シテ此圖彙ノ據トス、又疑シキモノハ論ゼズ、先年西國ノ者トミエ、金ノ千代小判ト云モノヲ拂ヒ度由ニテ持來レリ、極印ナドモ古代ノモノト見エ、金色モ麗ハシク、眞物ト見エ乍ラ、疑ハシキ物ユヱ、古金ノ賣買ハ制禁ノ由ヲ云テカヘセリ、贋金ノコトモタトヘバ文金贋物ナレバ、通用金ノコト故、速ニ眞僞分ルナリ、タトヘ眞金ヲ以テ僞鑄シテモ潰金ノ價ナリ、又眞金ヲ以テ古代ノ珍品ニ僞造シ、何々ト名ヲ付ルトキハ、金ノ位下品タリトモ、珍品ニ眼クレ、不功者ノモ

ノハ文金一兩ノ替リヨリモ直ヒ高直ニ買フモノアリ、今古錢ヲ初メ、古金銀ヲ玩賞スルコト流行アラバ、必ズ嚴令ヲ出シテ停止アリタキモノ也、左ナクバ通用金銀ニ無レ之故ニ、古錢ト等シク僞造ノ罪人出來、後ハ通用金銀モ僞鑄スル樣ニナルベシ、今古金銀モ世ニ數少ク、圖品等モ海内ニ不レ知モノ七八步有ベシ、是甚以テ世ノ大幸也、同クハ古金幣ノ眞圖迄モ秘シテ世ニ出ダサザルヤウ有タキモノ也、此書ニ圖品ヲ出ス事モ不レ宜ト雖ドモ、三貨事實ノ文續ニテ無レ據出セリ、依テ此書世ニ廣クセントノ志願ナシ、茲ニ於テ圖品ノ事ハ强テ不レ論、又珍幣ト雖ドモ一品モ蓄ヘズ、弄錢家ナド目利自負シテ、家ヲ倒スモノ間々アリ、只文金銀ヨリ外ニ有難キモノナシ、不レ可レ惑、近世古筆ヲ玩ブニヨリ、一休・定家ナド僞筆多クアリ、是モ定家・一休ト名ヲ顯ハシ、其書體モ似ヨレバ贋物ト知リテモ、金一步或ハ南鐐一片ニモ求ムルモノアリ、是ヲ八兵衞・六兵衞ナド書スト、紙上ニ顯ストキハ、タトヘ定家・一休ニハ似ヨリテモ、其價無レ之、一錢目ニモ求ル者ナシ、贋物ノ古金銀モ此類ナラン、依テ古金銀圖式ハ、大抵國初以前ノ事ハ强テ論ゼズ、慶長年以來、今南鐐銀マデ通行、國恩ノ廣大ナル事實ヲ幼童同業ノモノニ大略知ラシメン爲ニ、此ノ圖彙ヲ著ス、依テ迂遠ノ漢事ハトラズ、鄙言ヲ以テ悟シヤスカラシム、然レドモ齟齬ノミ多カラン事ヲ嘆ズ、短才ノ咎ハ寬免ヲ願フ、茲ニ出ス圖、眞貨ハ墨摺ヲ以テ模寫シ、又金銀譜・黃白志等ニ載テ、眞物ヲ見ザルモノハ、其圖ヲ傳寫シ往々集メ置シニ、今年文化八辛未江都近藤君、金銀圖錄七卷ヲ著ス、其精密ナル事恐感ス、依テ今眞貨不レ得シテ是迄集メシ金銀錢譜始メ、諸

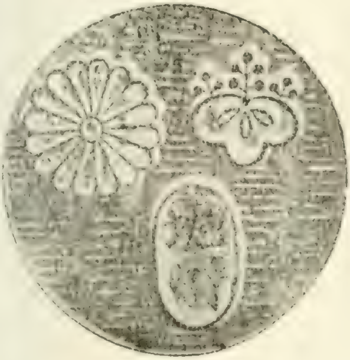
書ニ傳寫セシ圖ノ眞ヲ失フ類、スベテ委ク是ヲ省ク、右金銀圖錄其事跡トモ、不レ漏此圖彙ニ加フ、其餘圖錄ニモル、品類、且小異不同ノ說等、悉ク輯シテ加フ、圖錄並可レ考

山城國、堀川小判



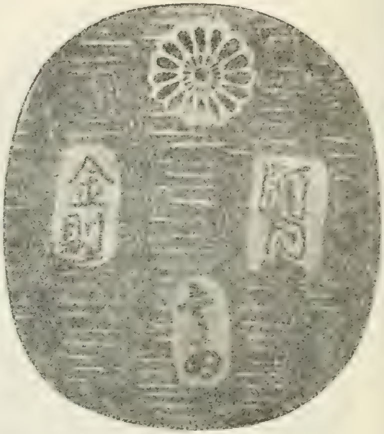
金銀圖錄ニ云、緣ノ厚サ五厘、徑一寸六步五厘、重サ四匁、位中、或人ノ說ニ、仙臺淨瑠璃ノ文句ニ堀川小判ト云名目アリト云ヘリ、古ク傳ヘシモノナルニヤ

同上



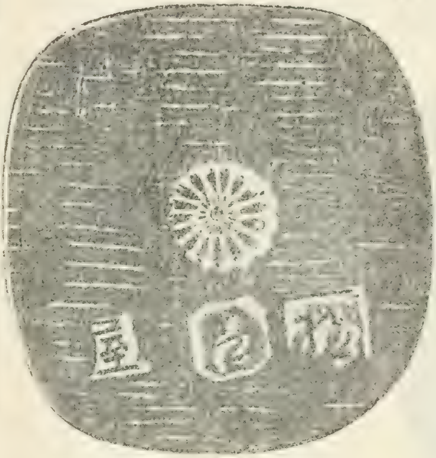
同云、重サ二匁三分五厘、コレ模造ノモノナリ

河内小判



圖録ニ云、重サ四匁一分、位下

尾張、那古屋小判



同云、重サ四匁

同上、津島小判



同云、厚サ二歩、長サ一寸四歩、濶サ壹寸五歩、位中ノ上

駿河、今川永四貫小判



重サ四匁五厘、金位下
同云、愚按ニ、風土記ニ、駿河國、駿河郡、鞠込、貢二黄金一トミエ、宜秀卿記、享祿四年ノ條ニ、駿州金トミエタリ、或人ノ説ニ梅ケ枝ト云、淨瑠璃ノ文句ニ、駿河小判ト云名目アリト云リ

同上



圖錄云、舊說ニ今川氏、駿河ニ於テ此金ヲ造リ、一枚ヲ以テ永樂錢四貫文ニ當ルト、愚按ニ、永樂錢ハ應永十年初テ渡リ來テヨリ、天文十九年、北條氏康ノ時、關東ハ永樂錢ノミヲ用ヒテ、鐚ヲ停廢セリ、慶長十三年十二月ニ至リテハ、鐚一錢ノミヲ用ヒテ、永樂錢ヲ禁止セラル、慶長十四年七月ノ令ニ、金子一兩ニ、永樂錢ハ一貫文、京錢ハ四貫文タルベシト見エタリ、今川氏ノ家法今知ルベカラズトイヘドモ、慶長ノ定ヲ以テ推考レバ、永四貫ヲ以テ、金一兩ニ當ルベキニ非ズ、又金一兩、重サ四匁餘ニ製スベキ理ナク、且今川氏ノ時、作リシコトヲ聞カズ、此金蓋シ後人ノ僞作ナラント云ヘリ

同上、永二貫小判

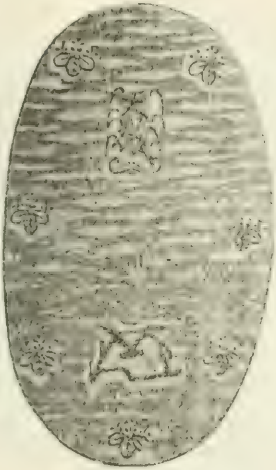


同云、重サ二匁八分五厘、是模造ノモノ



同云、重サ二匁一分、位下

相模、大磯小判



同云、重サ五匁、金位上上、制作精美、金色古雅、舊説ニ主馬盛久ノ所レ造ナリト、愚按ニ、諸本抄ニ云、平家物語一部ノ内、盛久ト云コトナシ、主馬判官盛國ガコトカ云々、然レバ盛久ノ造ト云モノハ杜撰ノ臆説ナリ

同上、小田原小判

重サ六匁、金位上



（黄色）



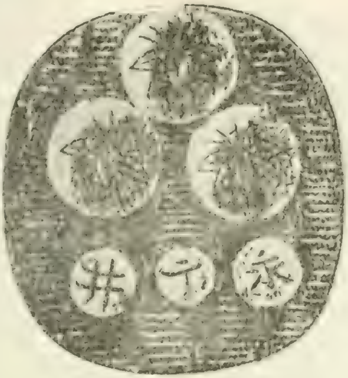
（黒色）

同上、菱小判



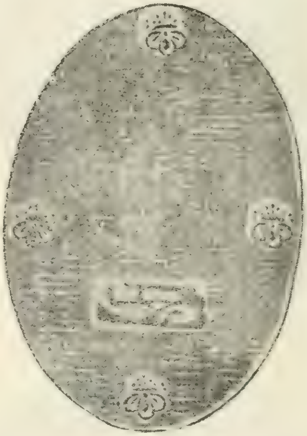
同云、重サ三匁三分、是模造ノモノナリ
又銀小判アリ、重サ三匁三分ナルモノアリ、菱ノ郭三重ナリ、又重四匁ナルモノアリ、形象・刻印異ナルコト無キ故略ス

同上、笹小判



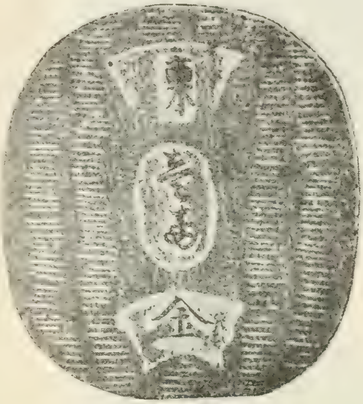
同云、重サ四匁二分五厘、厚サ二厘、長サ一寸七歩、濶サ一寸四分、位中ノ上、譜ニ云、小田原ニテ吹キ、二百年前通用スト雖ドモ詳ナラズ

武藏、辨定小判



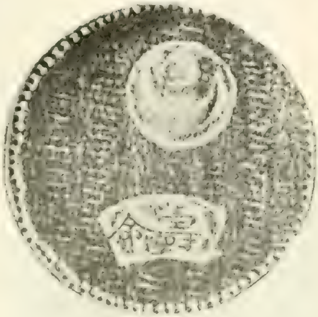
同云、重サ五匁、位上、精雅可レ見、或云、澁谷金工造レ之ト何ノ據ナ不レ知、譜ニ云、延享元年二月、信濃國飯山領、戸隱山支配、三千寺簷際、大石ノ下ヨリ金小判八枚掘出ス、內二枚ニ辨定判トアリ、二枚ハ辨定トアリ、金重サ二百四十八匁アリ、三千寺此金ヲ官ヘ獻ズ

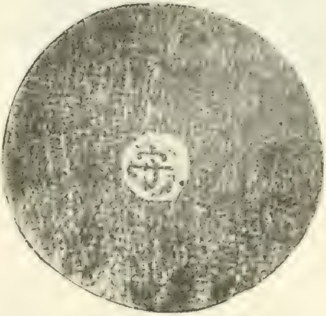
上總、東金小判



同云、厚サ三厘、長サ一寸八步、濶一寸五分、重サ三匁九分五厘、金位中ノ下

下總、千葉壽命小判





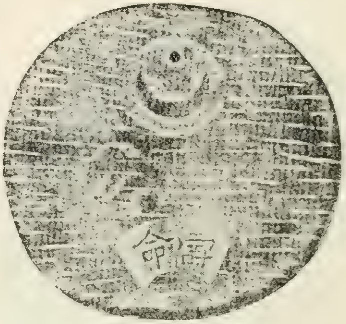
同云、重サ四匁、徑一寸四分五厘、緣ノ厚サ四厘、千葉ノ紋月星

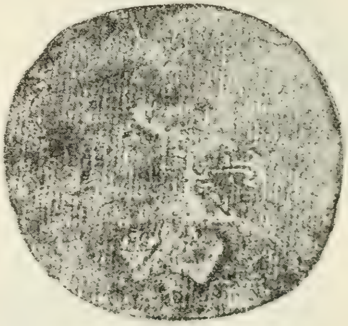
同上



同云、重サ一匁九分、愚按ニ、是好事ノモノ圖ヲ以テ模造ナラン、故ニ背字ナシ

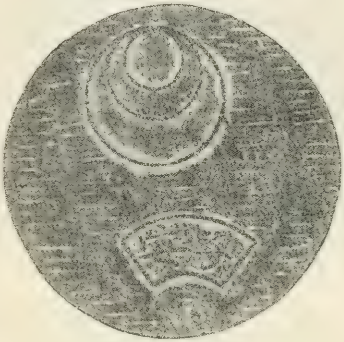
同上





同云、重サ四匁

同上子安小判



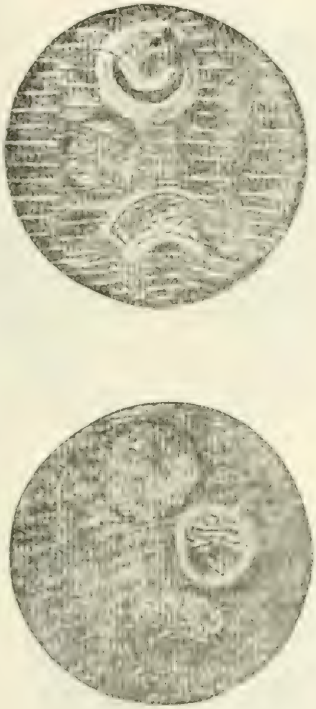
同云、重サ二匁一分

同上



同云、重サ四匁、徑一寸四分五厘、縁ノ厚サ四厘、位中ノ中

同上



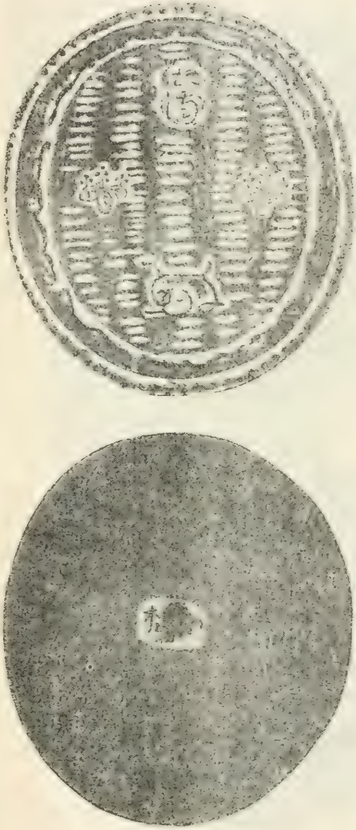
同云、重サ四匁、位中

常陸、水戸松岸小判



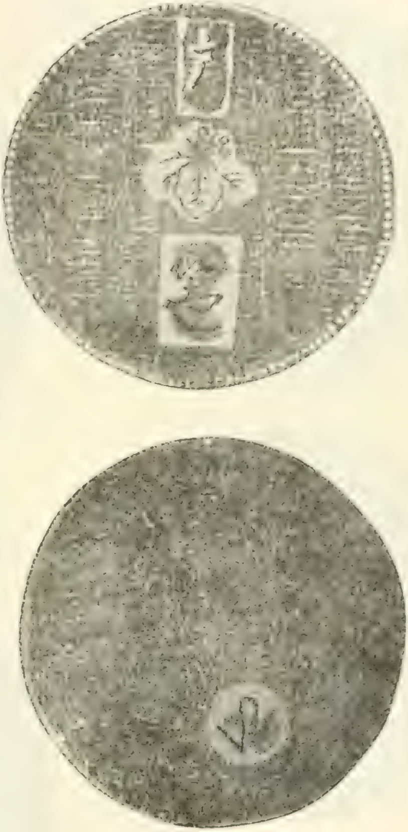
同云、重サ四匁、厚サ三厘、長二寸三歩、濶サ一寸四歩、弘治元年水戸ニテ吹ト云、不レ詳

同上、土浦小判



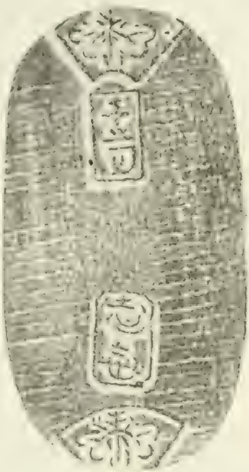
同云、重サ六匁九分五厘、位上上、制作華美面紋縟麗、寳用ニ足ル

近江、戸笹小判



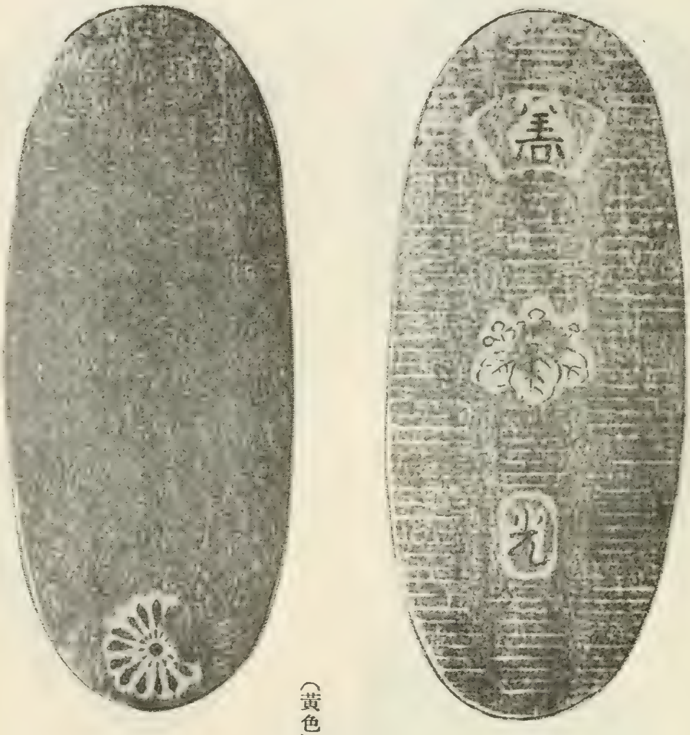
同云、重サ四匁二厘、厚サ二厘、圓形一寸八分、位中ノ下

同上、江津川小判



同云、重サ三匁一分、位下、字文模糊、明ニ辨ズベカラズ

信濃、善光小判



（黄色）

同云、重サ四匁一分、位下

同上

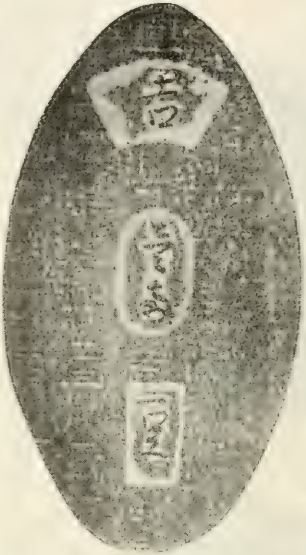


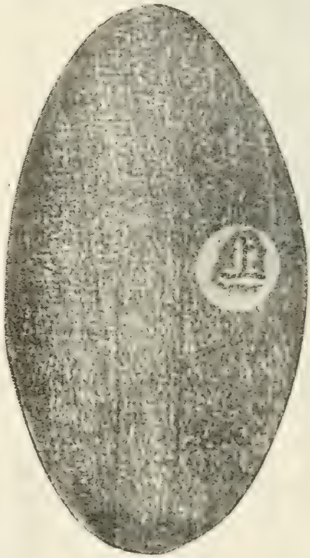


（黒色）

同云、重サ三匁二分、是好事者圖ヲ以テ模造ノモノナラン、菊紋面ニアリ、其正品ナラザルヲ證トスベシ

上野、吉豆小判



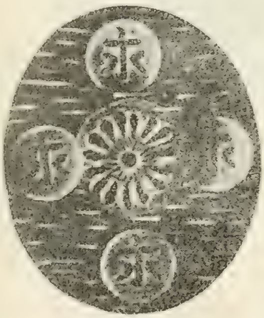


同云、重サ四匁一分、厚サ一厘、長サ二寸五分、濶サ一寸一分五厘、
此金又足利小判ト云

陸奥、永字小判又秀衡小判ト云、



（黄色）



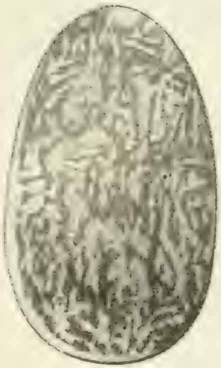
（黒色）

厚サ五厘、長サ一寸四歩、
重サ四匁

圖錄云、金位中ノ下、此金厚クシテ肉アリ、相傳フ秀衡ガ所レ造ト、疑クハ臆說ナラン、愚按ニ、國史ニ天平二十一年三月、陸奥國ヨリ黃金ヲ貢ス、是レ黃金ノ出シ始ナリ、天平勝寶四年二月、陸奥國ノ調庸、多賀以北之諸郡ハ、黃金ヲ輸サシムトミエ、初メテ黃金ノ制ヲ立テラレシ也、延喜式交易雜物ニ、陸奥國砂金三百五十兩トミエ、源平盛衰記ニ、小松內府奥州知行ノトキ、氣仙郡ヨリ金千三百兩ノ金ヲ參ラセタリト見エ、小右記ニ、長元二年前陸奥孝義志ニ、砂金十兩トミエ、東鑑ニ、文治三年十月、陸奥國今年ノ貢金四百五十兩、秀衡入道送獻スト見エ、寶貨事略ニ、白川ノ頃迄、此貢金ハ參ラセシナリト見ユ、觀跡聞老志ヲ按ニ、陸奥ノ砂金ハ、モトハ小田郡陸奥山ニ出ヅ、山ハ式ニ載スル所ノ黃金山神社ナリ、後世其地ヲ牡鹿郡ニ併セ、其山ヲ金華山ト改ム、古ヲ失フト云ベシ、宋史日本傳ニ、「東奥州產二黃金一、西別島出二白銀一、」トアレバ、異朝ヘ聞エシモ舊シキコトナリ

同上、定字小判





圖錄ニ云、重サ三匁三分、位上、精雅醇古、寶トスベシ

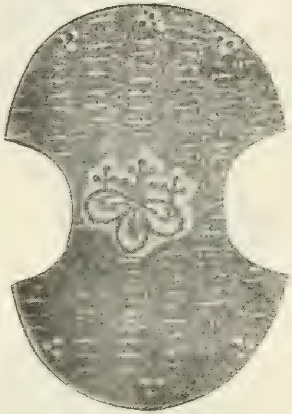
同上





右ニ同ジ

同上、分銅小判



同云、重サ四匁三分、厚サ四厘、長サ壹寸七歩、腰八分

同上



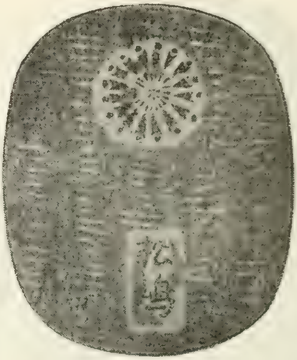
同云、重サ二匁三分五厘

同上



同云、重サ一匁五厘、是模造ノモノ本ト題シテ太閤金、分銅ニ歩小判ト云、妄説ナリ

同上、松島小判



同云、重サ四匁、厚サ二厘、長サ一寸七分、闊サ一寸二分五厘、位中ノ上

同上、松前小判





同云、重サ三匁四分、金位上上カ、面ニ花押ノ如キモノ辨ズベカラズ、是篆文ナルカ、蝦夷模様ナルカ、松前モト知内（シリウチ）金アリ、又蝦夷ノ砂金アリ、寛文年間ニ多ク出ヅ、其金造ル所ナルカ

出羽、月山小判



同云、重サ四匁二分、厚サ一厘、徑壹寸九分、位上ノ下
按ニ、羽州村山郡月山ノ麓、寒川江村砂金ヲ出ス

同上、赤西小判



同云、重サ四匁一分五厘、厚サ二厘、長サ二寸二分、闊サ一寸四分、位中ノ中

土佐小判 四足小判トモ云



同云、重サ四匁一分、位下

加賀小判



同云、重サ四匁一分、位中ノ下、是下ニ載スル花降銀ト同時ニ造ル所カ、加賀ノ金坑ハ澤村山ニアリ

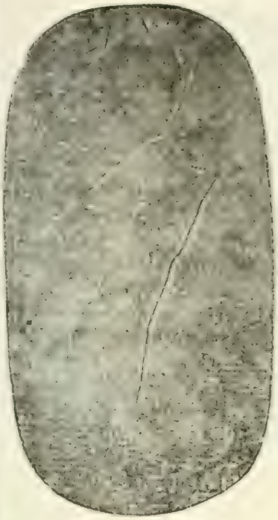
同上



同云、重サ一匁五分、是ハ模造ノモノ

同上





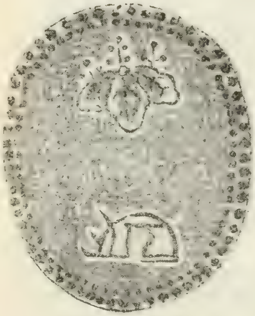
重サ四匁、位上々

越後、高田小判 又謙信小判ト云



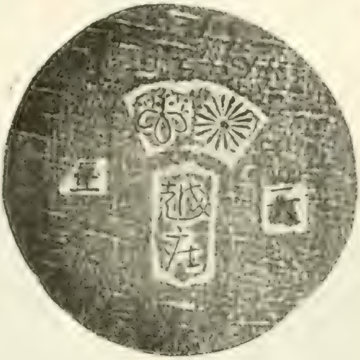
同云、重サ四匁、金位中ノ上カ、相傳フ上杉謙信ノ造ル所ナリト、愚按ルニ、寶貨事略ニ、謙信入道佐渡國ヲ攻取シヨリ後ナハ、其金ヲ採テ國用ヲ足スト見ユ、是佐渡金ヲ以テ制スルカ

同上、圓小判



同云、重サ四匁一分、相傳フ、謙信造ル所ナリト、制作醉古、金色精華、必ズ上杉氏ノモノナラン

同上、越座小判





同云、一名謙信小判
重サ四匁、相傳フ謙信所レ造

丹波、龜山小判



同云、重サ三匁八分

同上



同云、重サ二匁五分、是ハ模造ノモノ

但馬小判



同云、重サ三匁七分五厘、位中ノ上、
或云、太閤ノ所レ造

同上



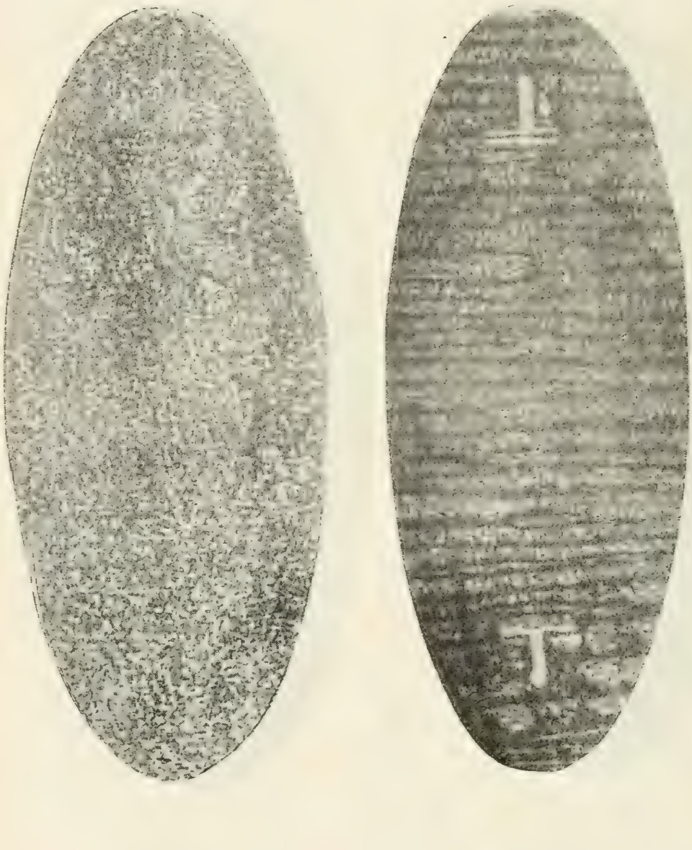
同云、重サ三匁七分五厘

太閤小判

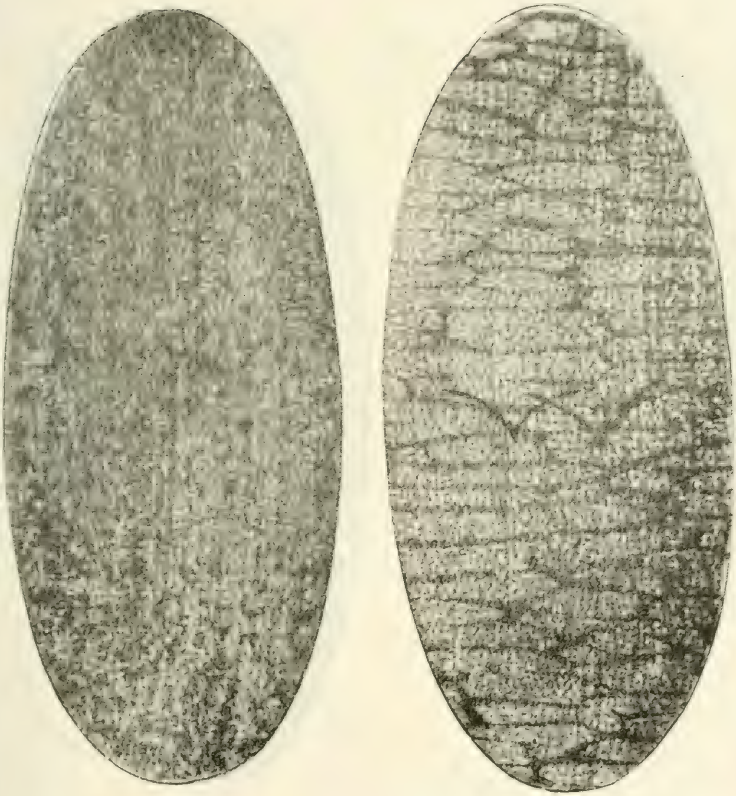


同云、重サ三匁二分五厘、但馬小判ヲ模造スル所ナラン

上字金

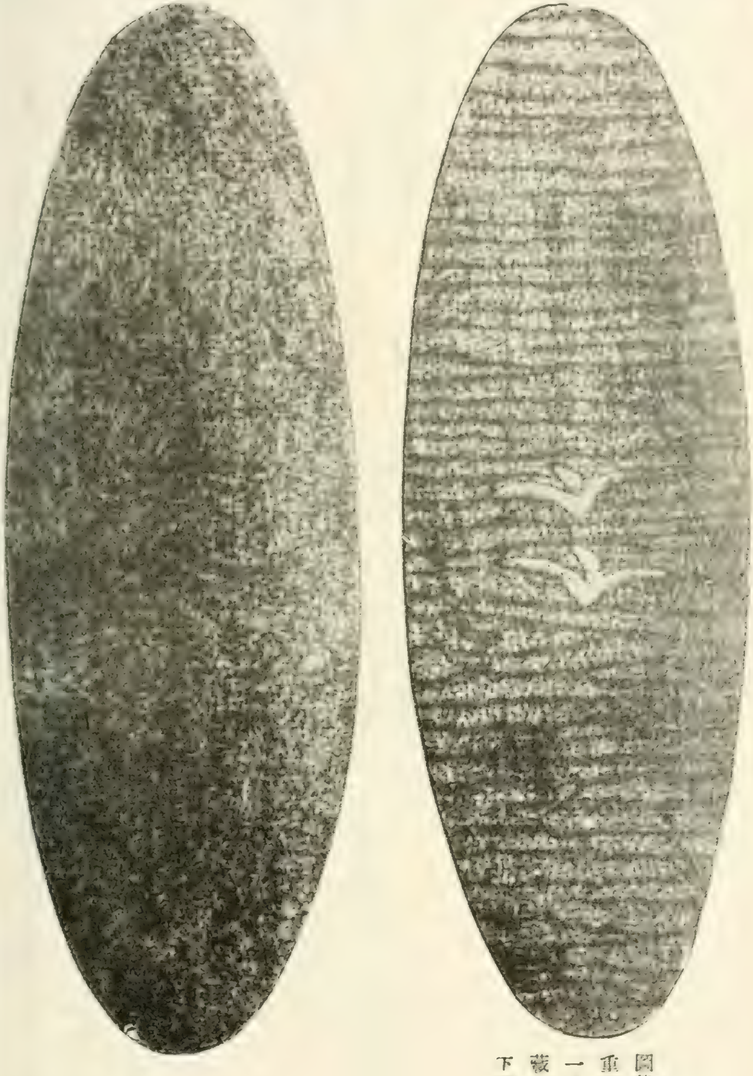


雁金



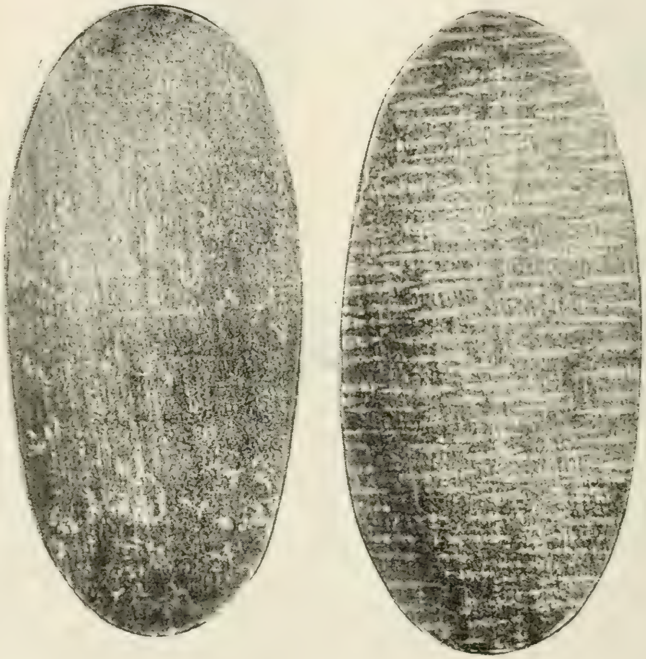
圖錄ニ云右上ノ字金、重サ十八匁九分、雁金、重サ三十八匁四分共、俗ヒルモ金ト名ク、形眼兒菜ニ似タルヲ以テナリ、金ノ位、上ノ上、金色幷黄蒸栗ノ如シ、面槌目、背石打ニシテ鏨ヲ以テ上ノ字雁金ヲ刻ス、古色藹然トシテ、其鎌倉前後ノ物ナルコト、鑒定ヲ待ズシテ知ルベシ、天明六丙午年閏十月（一說ニ寬政元酉年四月）越後國刈羽郡五日市村ノ農夫、地ヲ掘テ、古金十五枚ヲ得タリ、形皆同ジ、大小半槗アルノミ、其刻記ハ、上ノ字ナノ字ト雁金ナリ、其二枚ハ右圖ノ如シ、殘十三枚ハ、內一ハ、重サ三十八匁四分、一ハ重サ二十六匁、一ハ重サ十八匁、二ハ重サ十九匁、一ハ重サ十三匁七分、一ハ重サ十八匁八分、一ハ重サ三十一匁六分、一ハ重サ十五匁五分、一ハ重サ二十四匁四分、二ハ重サ十三匁、一ハ重サ二十九匁五分

雁金



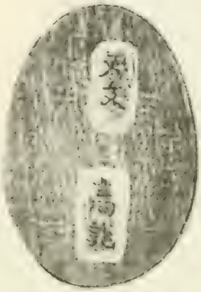
圖錄云、重サ
一士人所藏ノリ、下同

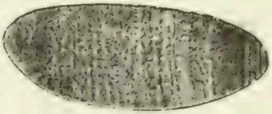
上字金



同云、重サ

玉子小判

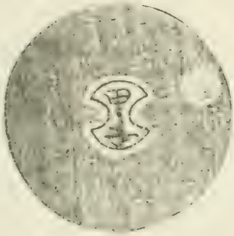




同云、重サ四匁九分五厘、長サ一寸二分五厘、濶サ七分五厘、裏凸ニシテ、厚サ二歩五厘、裏極印有モアリ、鶏卵ヲ割テ伏ガ如シ、裏面ノ平ナル處ニ字アリ、位上ノ下

甲子小判

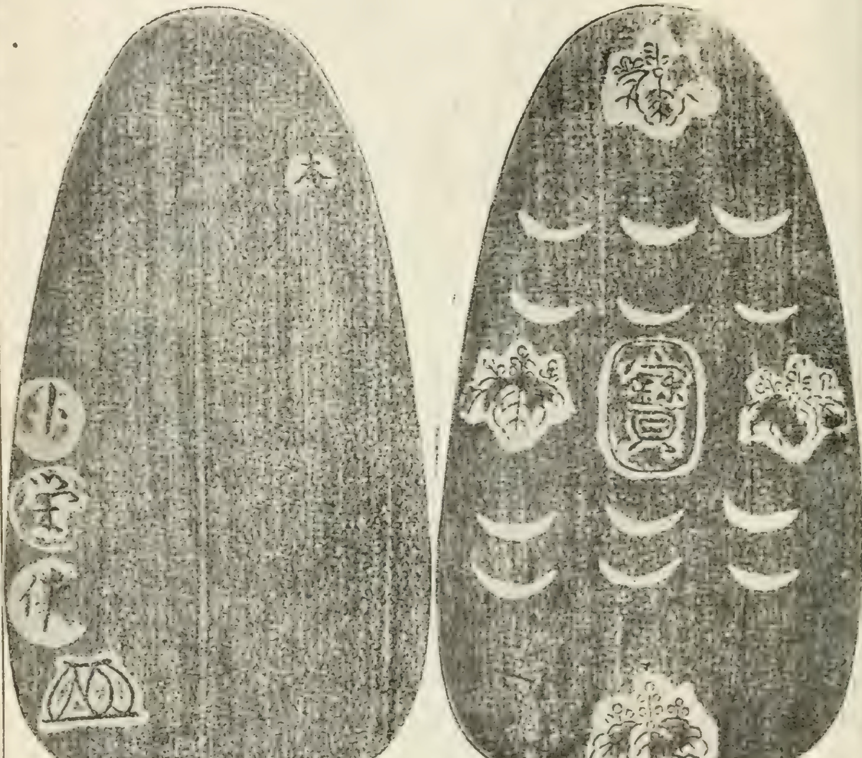




同云、重サ三匁五分五厘、相傳フ、文祿元年ニ造ルト、何ノ據ヲ知ラズ、圓徑一寸

私云、文祿元年ハ壬辰ナリ、甲子ト云フ、極印如何

牛舌金



圖錄ニ云、右重サ十二匁二分、金位下眞鍮ノゴトシ、其牛舌トハ、形ノ似タルヲ以テ名ク、此金制創ヲ詳ニセズ、愚嘗テ加賀ノ人ニ聞ケリ、云フ其國民間秋成リノ躍歌ニ八島クドキト云フアリ、其句ニ「牛若コロシテ牛ノ舌、大判小判ツカミ取」云々ト、然レバ往時普通ニ用ヒシモノト見ユ、疑ラクハ此金加賀ノ制ナランカ

同上

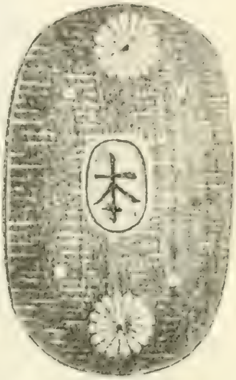


加賀ノ人其國ニ於テ見ル所、余ガ爲ニ圖スルモノ長四寸五歩計、金色最下、眞鍮ノ如シ、黝黒ヲ帶ブ

同上



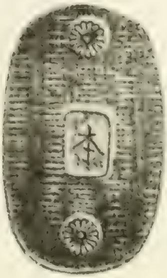
朝鮮小判



同云、重サ廿二匁四分五厘、又大判アリ、何ヲ以テ朝鮮ト名クルヤ、其謂ヲ知ラズ、朝鮮征伐ノトキ造ラレシニヤト云フ

私云、鏇小判ヲ模造ノモノカ

同半小判



同云、重サ二匁四分五厘、位中、小同壹匁二分、位中、又一品模造ノモノアリ、重サ一匁一分、一名菊本小判

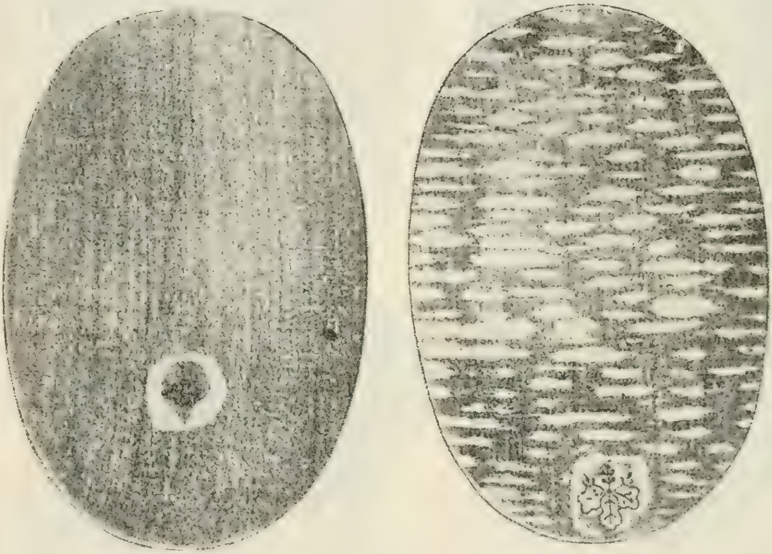
私云、右ニ云鏇小判ナラン

壽永小判



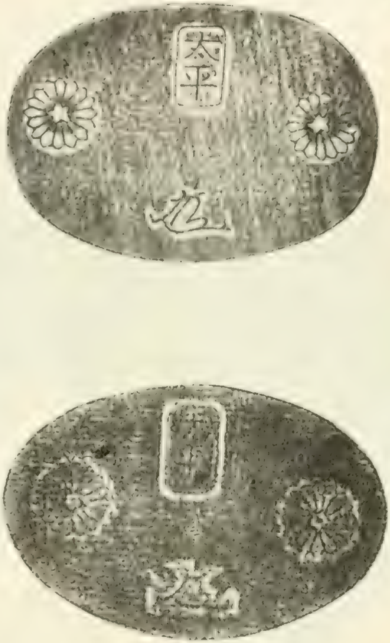
同云、重サ五匁、位上上、蓋古醇圖尊ベシ、或云、壽永中造ル所、或北条泰時所レ造、何ノ據不レ知

大塔宮小判



同云、重サ四匁六分、金位上ノ上、乘加曰、コレ京目一兩金ノ墨書剝落セシモノナルベシ、正用品併セ見ルベシ、何ヲ以テカ大塔宮小判ト云フヤ知ラズ、姑ク舊名ニ從テ此ニ附スト云

大平小判



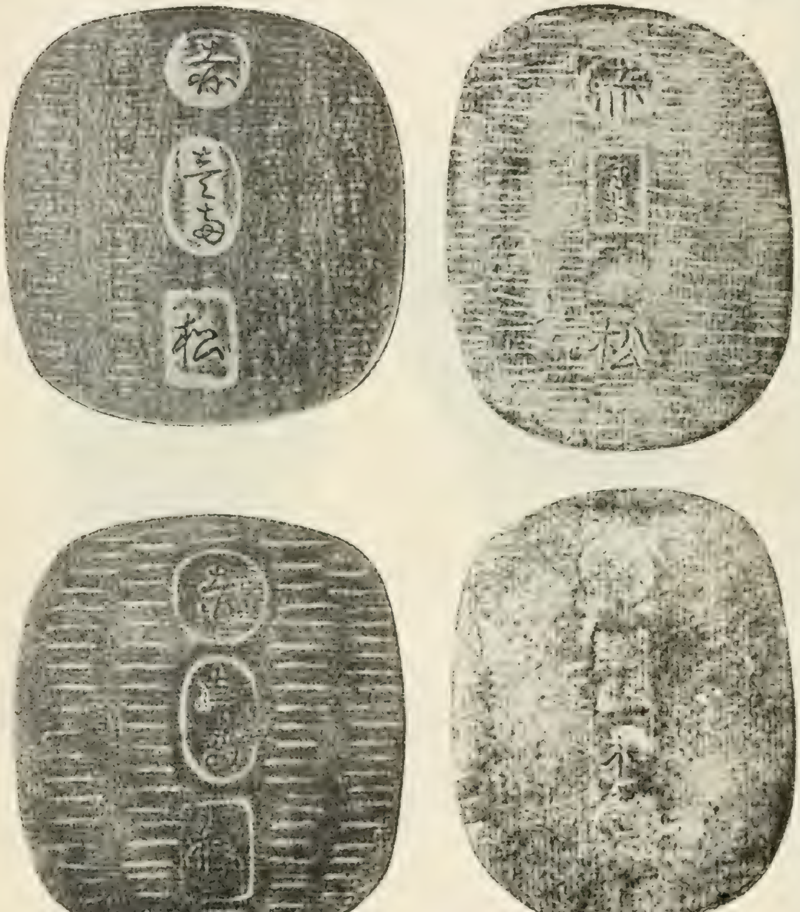
同云、重サ三匁六分、金位上、表金ミナ縦縞ニシテ、此金ノミ横縞ナリ、或云、新田判官、仁木左京大夫頼明ノ所ノ造ト、何ノ據ナ知ラズ

正門小判



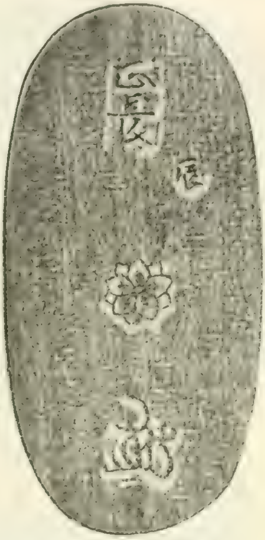
同云、縁ニテ厚サ五厘、徑壹寸五歩重サ四匁二分、位中ノ下

赤松小判



同云、重廿四匁一分、金位上

正長小判



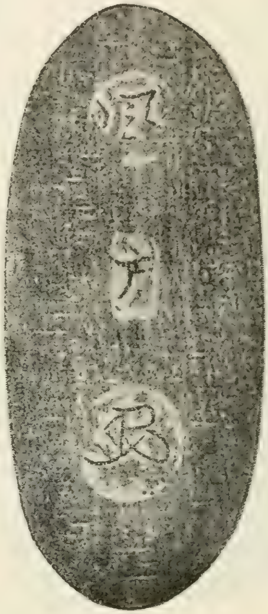
同云、重サ四匁五分、金色古薄、見ツベシ、此金正長年間造ル所カ、又正長ハ人ノ名ナルカ、詳ナラズ、位上

高來小判



同云、重サ四匁、厚サ三厘、圓徑一寸七歩、位上、或云、此金肥前國高麗郡ニテ造ル所ト、未然否ヲ知ラズ

風戸小判



同云、重サ四匁一分、厚サ二厘、長サ二寸八歩五厘、廣サ一寸二歩、金位下

湊小判

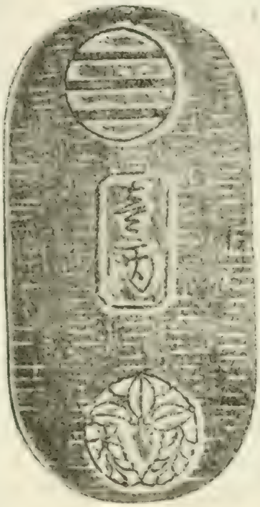


同云、重サ四匁、位上

同上

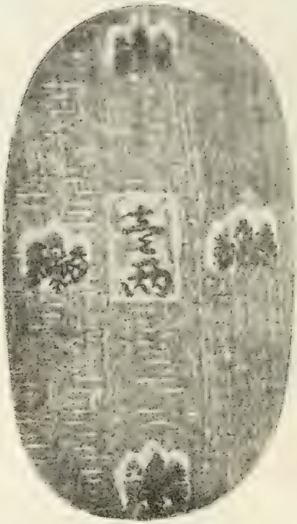


三浦小判



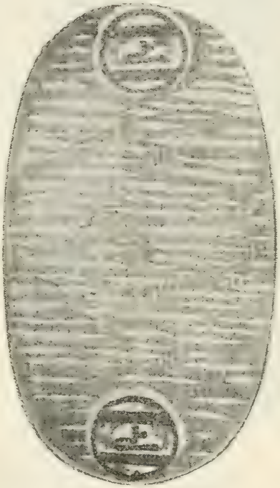
同右、重サ三匁一分、又似判アリ、重サ三匁、共ニ模造ノモノ

桐小判



同云、重サ四匁七分

上字小判

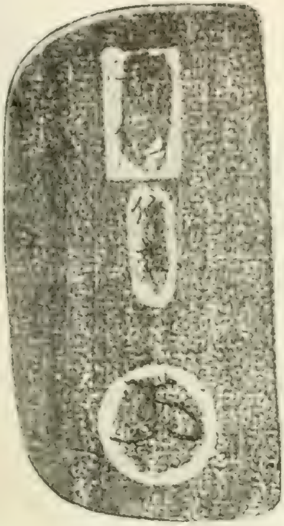


對馬、高木握小判



同云、重サ四匁、厚サ二厘、長サ二寸五歩、寶貨事略ニ、天武白鳳二年三月、對馬ヨリ銀ヲ貢ス、是延喜式ニ太宰府ヨリ毎年銀ヲ貢トミユレバ、對馬ヨリ出セル所ナリ、此後鳥羽堀川ノ頃マデ、對馬ヨリ銀出セシト見ニタリ、天寶元年、此國ノ貢金ハ國史ニ出デ、後一條長元ノ頃モ此國貢銀ノ事小右記ニ見エタリ、文祿年間マデモ、銀出セシ事多カリシトゾ

肥前、長崎伊藤小判



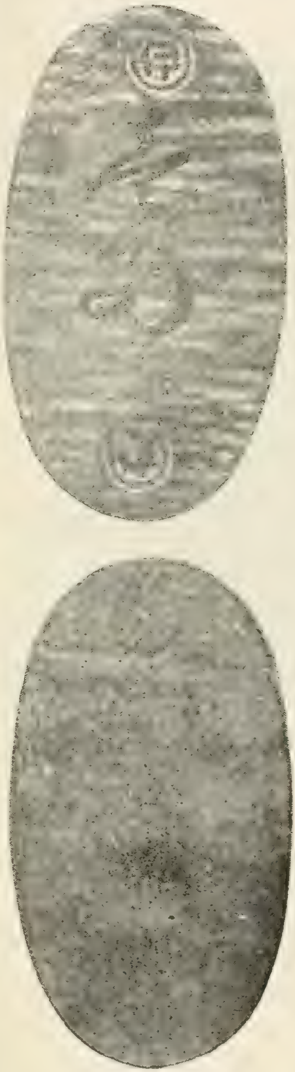
同云、按ニ、長崎記ニ、筑前ノ富商伊藤小左衛門　長崎五島町ニ住ス、豪富無比、寛文七年、私販ニ坐シテ罪ニ處セラル云々、所謂伊藤ハ是カ、重サ四匁一分

伊字小判



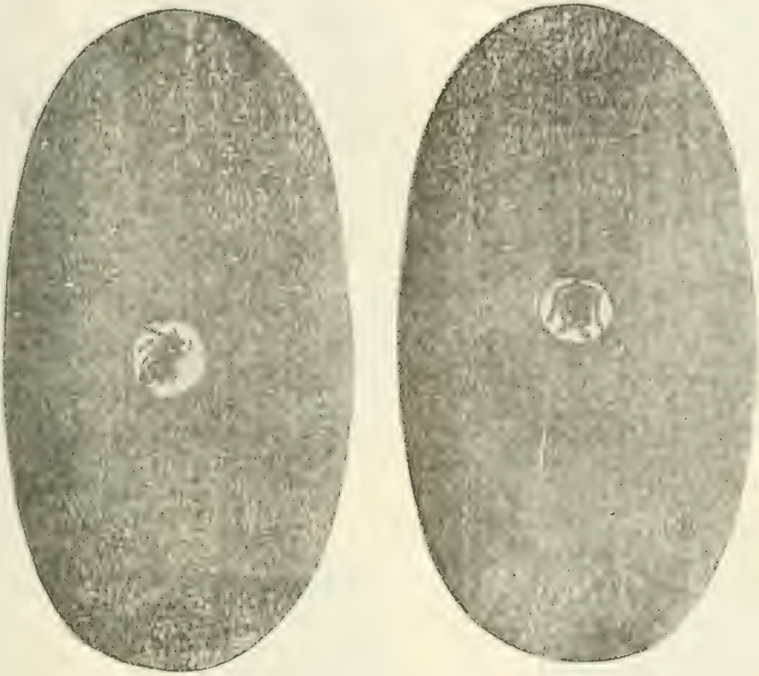
同云、重サ四匁八分

右同



重サ四匁八分

貳兩小判



圖錄ニ云、重サ九匁四分、此金制造ノ事未考ルコトナシ

六波羅小判



同云、厚サ二厘、長二寸五歩、濶壹寸四歩、重サ四匁一分、位上、昔小判ナリトアリ、按ニ此金好事ノモノ、大塔宮小判ヲ前ニ擬造スルモノナルベシ、大塔宮小判ハ、モト駿河小判ヲ誤認假號セルモノナリ、採錄ニ足ラズトイヘドモ、其名ヲ傳フルノ舊シキヲ以テ此ニ載ス

六波羅小判ノ說、附言ニノス

ヒルモ金



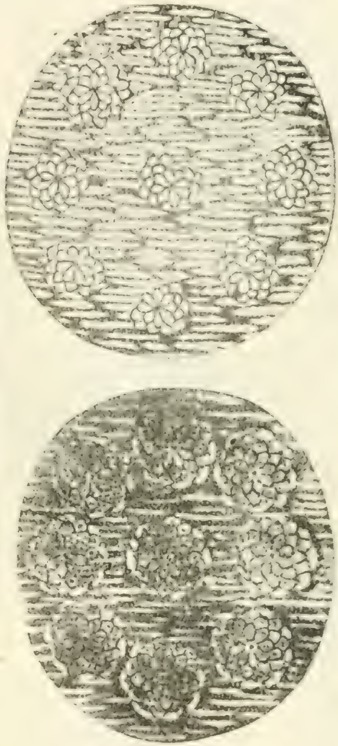
同云、寛政七年三月、越後國蒲原郡水原市、北二町計リ、千苅ト云フ處ニテ、古金七枚ヲ掘出ス、形圖ノ如シ、金色上、重サ一匁九分ト、一匁七分アリ

譲葉金



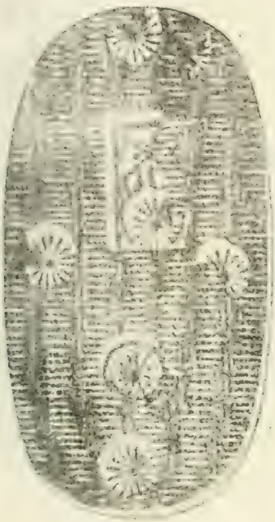
同云、金色中、重サ四匁

九重小判



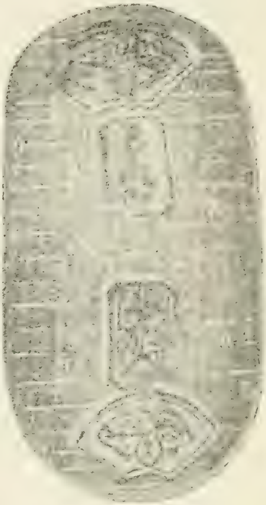
同云、重サ一匁九分五厘
位上トイヘドモ、板少シ薄劣ナリ、
菊紋ハ最モ鮮明ニシテ、古色見ルベ
シ

花小判

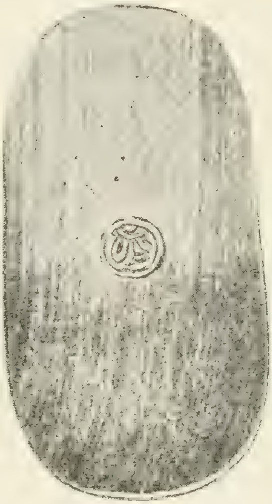


同云、重サ四匁

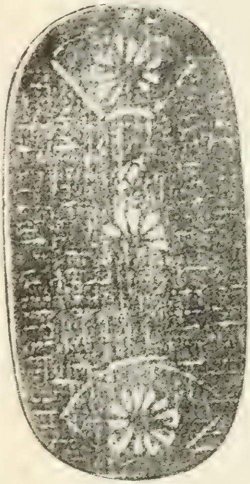
雛小判



同云、重サ一匁七分五厘、金色下、
字紋模糊

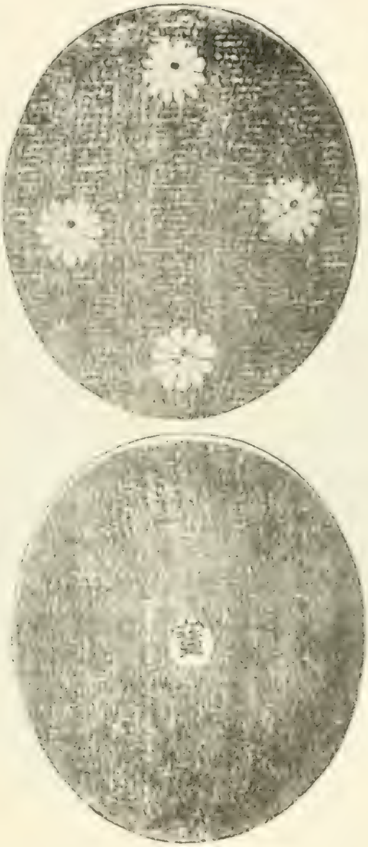


菊小判



同云、重サ一匁七分五厘、位下

菊寶小判



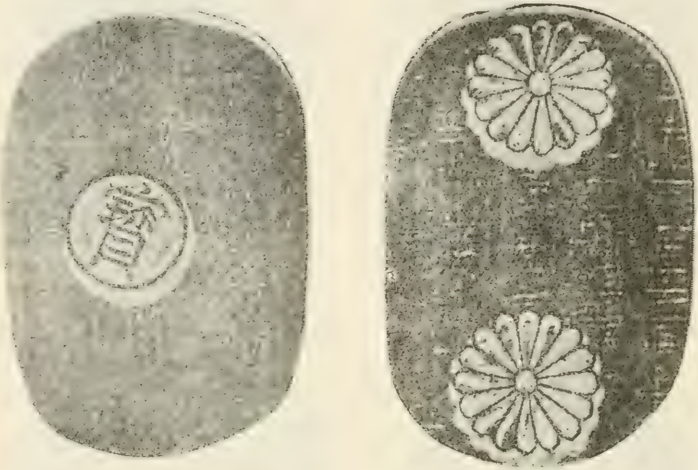
同云、重サ三匁六分五厘、金色中、
一名四菊小判

同上



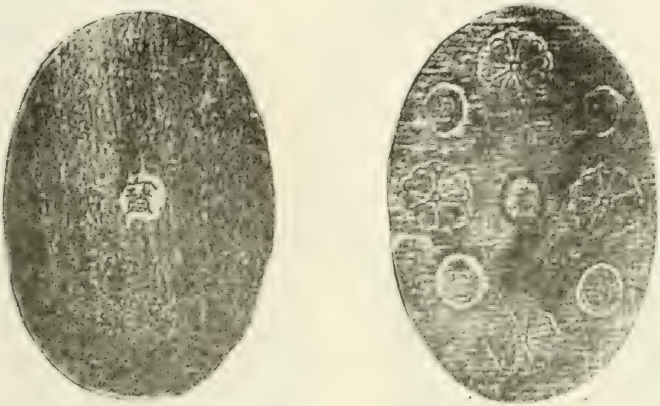
同云、重サ右同斷、
一名、二菊小判

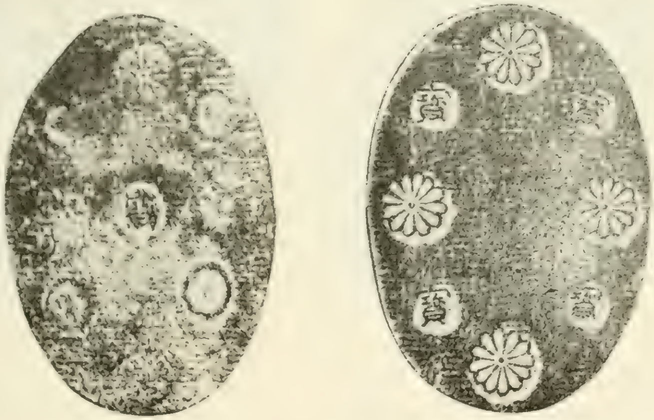
同上



同云、重サ三匁一分、是模造ノモノ也

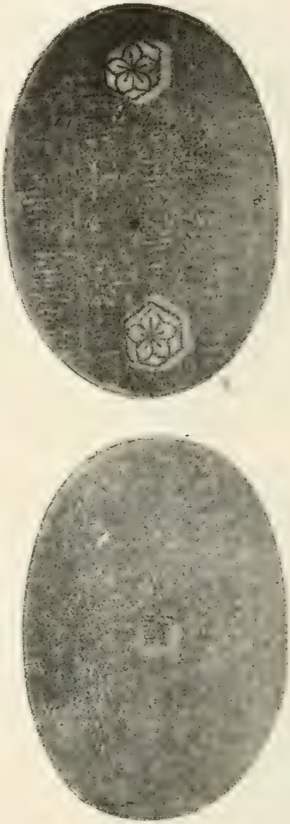
同上





同云、重サ二匁五分、金色中

桔梗小判



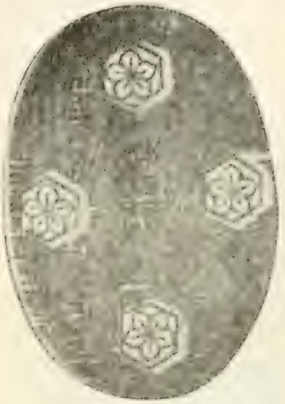
同ム、重サ二匁六分、金色巾

同上



同云、重サ一匁七分、金色古ナラズ、模造ノモノナラン

同上







同云重サ二匁六分、金色中

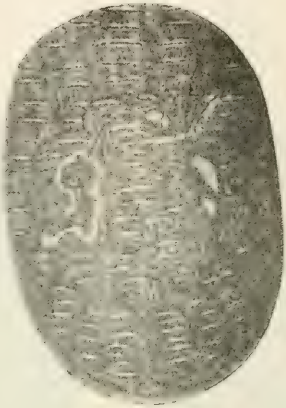
大黒福小判





同云、重サ二匁五分、位下、私ニ云、寛永年稲荷ヘ寄附ノ中ナランカ

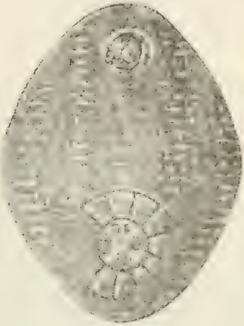
同上、徳

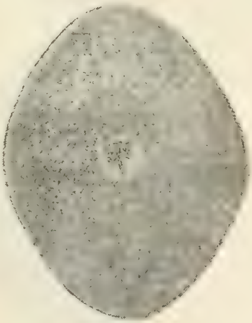




同云、重サ右同斷、
位下、同上

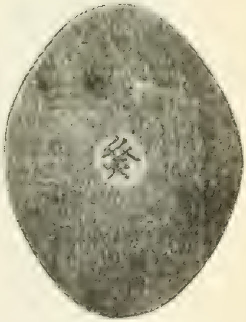
十二支繪小判





同云、重サ一匁九分
五厘、位中



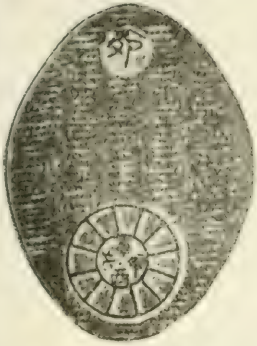


同上



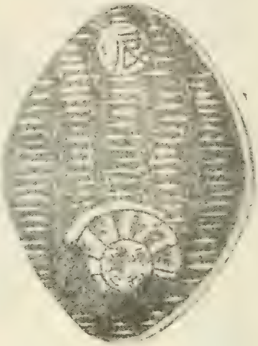
同云、右同斷

同、字小判



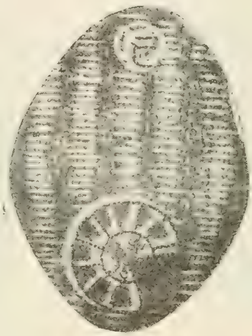
同云、重サ一匁五分、又銀アリ、重サ二匁、共ニ古色乏シ、模造ナラン

同上



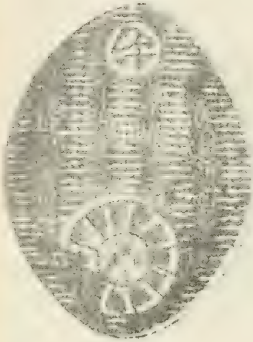
同云、重サ二匁、位中

同上



同云、重サ二匁五分

同上



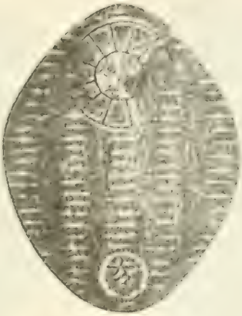
同云、重サ二匁一分

同上



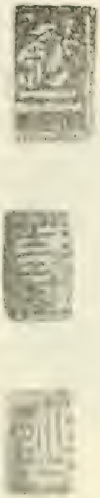
同云、重サ二匁二分

同上



同云、重サ二匁一分

福壽小粒金



同云、重サ三分

花一歩金



重サ八分（マヽ）一匁

稲荷福小判



同云、重サ五匁、位中下

同壽小判



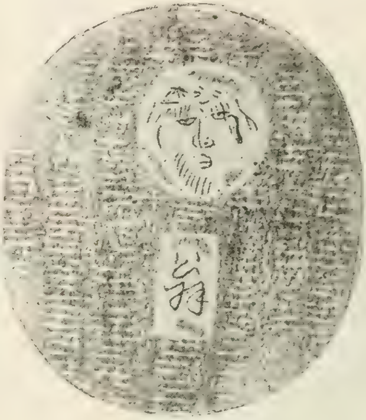
同云、重サ同上

玉屋小判



同云、重サ四匁五厘、長サ一寸九歩、厚サ二厘、位中、一名寶珠小判ト云、弘ニ云、寶永年、稲荷寄附ノモノナランカ、玉屋ト云フ屋號イブカシ

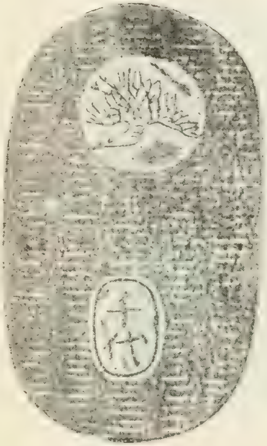
翁小判





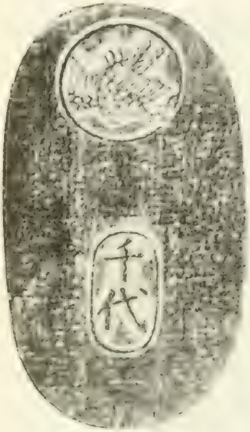
同云、重サ四匁、位中ノ下、厚サ二厘、長サ一寸九分、濶サ一寸六步、住吉ヘ納ムト云、私ニ云稻荷ナランカ

鶴千代小判



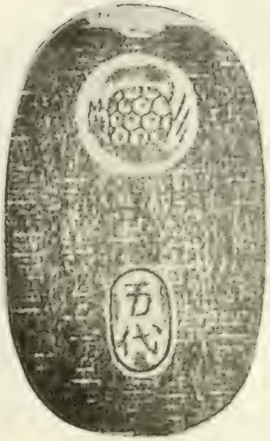
同云、重四匁五分五厘、位下

同上



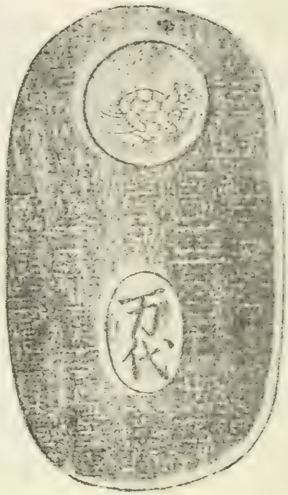
同云、重サ二匁一分五厘、位下、模造ノモノ歟

龜萬代小判



同云、重サ四匁五分、位下々

同　上



同云、重サ二匁八分五厘、是レ模造ノモノニヤ

城州伏見稲荷山愛染寺（神宮寺ナリ）ニ、聖天堂アリ、是ハ寶永年、銀座世盛リノ頃、座方ノ者建立セシ堂ニテ、至テ結構ナル造營ニテ、其頃專ラ座方ノ者信仰シ、本尊ハ銀天ニテ、二六時中浴油ノ執行退慢ナク、又靈驗モ數々多ク、座方誠ニ繁昌シ盛ナル事、今以テ人口ニ殘ル、然レドモ私欲驕奢、日々增長ス、大明神其罪ヲ惡マセ玉ヒ、幾程ナク座方ノモノ糺明セラレ、其罪露顯シ、夫々所置仰付ラレ、座方暫ク退轉セリ、右一時盛ンナル頃ハ、自ラ宿願ノ奇瑞ヲ祝シ、尊前ヘ種々ノ備品ヲツクセシ中ニ、銀ノ千代・萬代・翁・稲荷小判等モアリテ、今模造ト見ユル銀判ハ本判ニテ、金小判ハ銀ヲ模鑄セシモノニテ、金銀共供セシナリト、愛染寺先々代老僧ノ話セシ也、五十年以來寺モ衰微シ、數代住職モ代リ、今右ノ一品モナシト歎ゼリ、近世予モ大般若經ヲ寄附シ、今粟田御殿詮量院大僧正世話ナサレ、追々繁昌ナリ

元文稲荷小判



圖錄ニ云、重サ三匁五分、是文金ニ寶珠雨狐ノ極印打シモノナリ、私ニ云、是等好事ノモノ、玩ニ玉雨狐ヲ打添シモノナラン、尤モ唐土厭勝錢ニ倣ヒ、祭祀ノ用ニ設ケシモノニテモ、福壽小判ノ類ナラバ、其罪輕シ、カリニモ通用ノ公金ニ、カヤウノ事ハセマジキ事ナリ、當時金銀ノ珍ナルヲ玩好セバ、種々ノ金銀僞鑄スベシ、嚴シク禁ゼズンバ有ベカラズ

世ニ、雛大判・小判トテ、玩貢スル金銀種々アリ、是ハ寛永年關東兩御所御上洛ノ時、姫宮御方ヘ進ゼラレシ雛ノモテ遊ビモノニテ、其時座方ノ者ヘ被ニ仰付ㇾ鑄造セシモノニテ、通用ノモノニ非ズ、東武實錄ニ云

寛永三丙寅九月六日、主上二條亭へ行幸、同七日將軍家ヨリ　主上中宮女院ノ御方へ御內々御進物有レ之（品類略レ之）

女一ノ宮へ

一　白銀三千兩

一　御服三十領

一　金襴十卷

一　黃金五百片

一　白銀五百片但一片黃金一步ヲ以テ是ヲ製ス、雛ノ玩物ナリ

女二ノ宮へ

一　白銀二千兩

一　御服二十領

一　金襴十卷

一　黃金五百片

一　白銀五百片但シ右同斷

大相國ヨリハ、白銀・御服幷雛ノ御道具・傀儡ノ御玩モノ、右進献ノ內、黃金五百片・白銀五百片ト云モ

ノ、今世ニ玩賞スル雛小判是ナリ、靈元法皇ヨリ御拜領ノ趣ニテ、或官家ニ數枚所持ナリ、右進獻ノ後、御好ミニテ、又色々出來シヲ、今女院大判。小判ト云テ種類アリ、其時座方ノ者、獻上ノ手本ト稱シ、又私ニ種々ノ雛小判ヲ造ルト云、尤通用ノ物ニ無レ之故、今假作模造ノ論ニ不レ及、大抵此以下ノ圖皆々其類ニテ、證トスベキ據ナシト、右官家ノ御說ナリ、但一片黃金一分ヲ以テ製スト云ハ、慶長金ノ一步ノ積ニテ、量目一匁二分ヲ以テ、金銀共ニ仰付ラル、今量目不同ナル品類ハ、進獻後ノモノニテ、座方ノ私鑄ナリ、官家所持ノ數枚、金銀トモニ皆量目一匁二分宛アリ、圖錄ニ云、靜庵隨筆ニ云、花小判ト云モ、ヤハリ是等ナラン





重サ、一匁ヨリ、一匁二分



重サ、各一匁二分



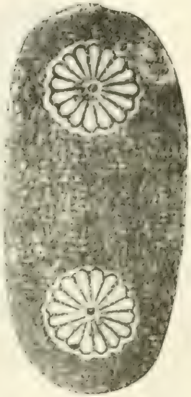
重サ前同斷

重サ一匁五分

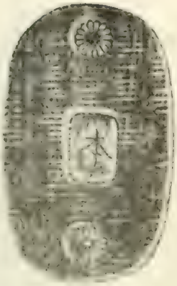
重サ各一匁二分



重サ一匁二分



重サ二匁一分



重サ一匁二分





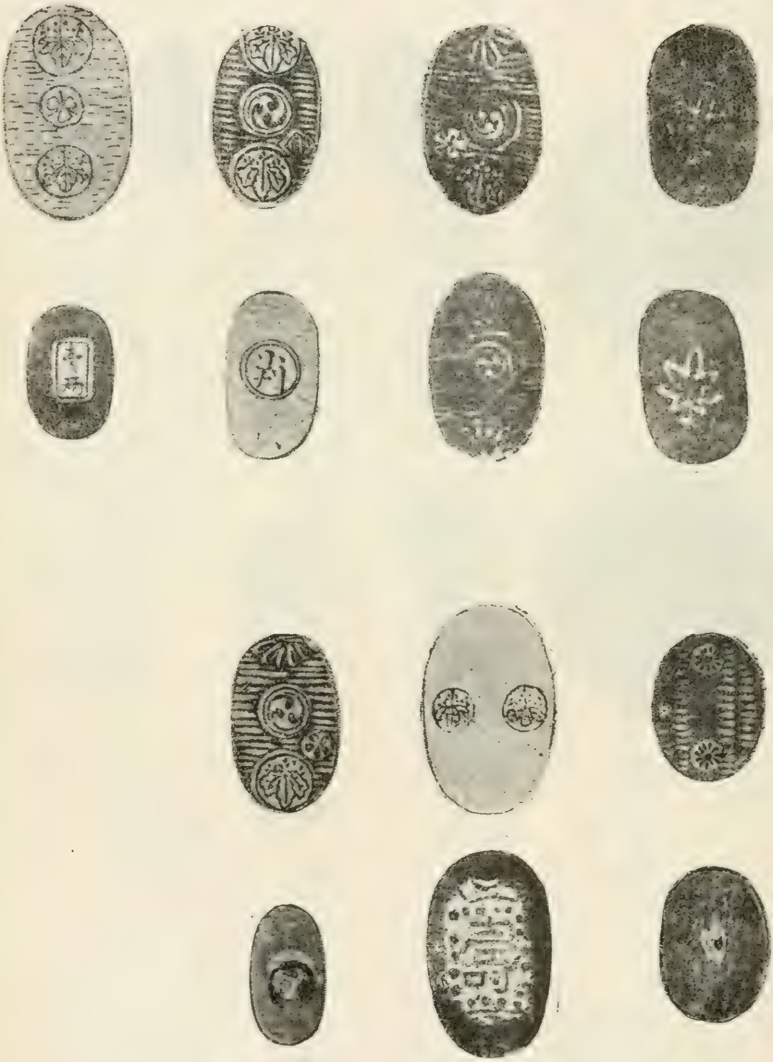


重サ二匁四分五厘



重サ各一匁二分





太閤花降金



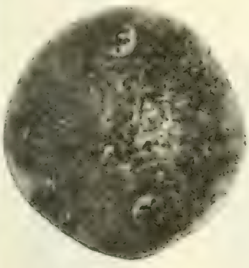
圖錄云、重サ三分、傳ヘ云、太閤ノ造ル所ナリト、此金薄片觀ルニ足ル者ナシ、姑ク舊說テ存スルノミ

重サ六分、此金朝鮮ノ役ニ重サ一匁ヨリ十匁迄造ルト云、未ダ然ルヤ否ナ不レ知

右金銀圖錄ヲ以テ、大率ヲ茲ニ出シ、餘ハ略レ之、委シキハ其書ニ就テ見ルベシ

加州灰吹金





重サ二十目



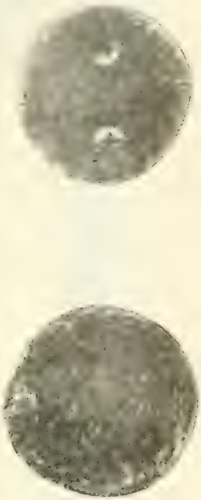
右同斷

重サ十匁

重サ九匁九分五厘

重サ九匁二分

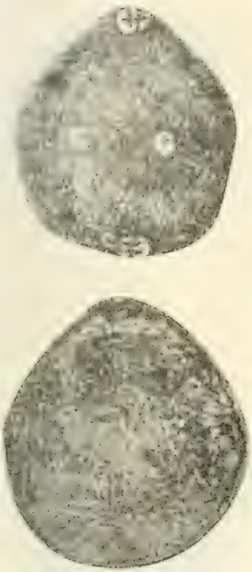
文化八未年閏八月、金灰吹、日方五十貫目、加州侯ヨリ大阪ニテ御拂、二十二匁替代文銀ニテ、凡千二百貫目ナリ



重サ八匁五分



重サ二匁五分五厘ヨリ五匁六分



重サ二十目

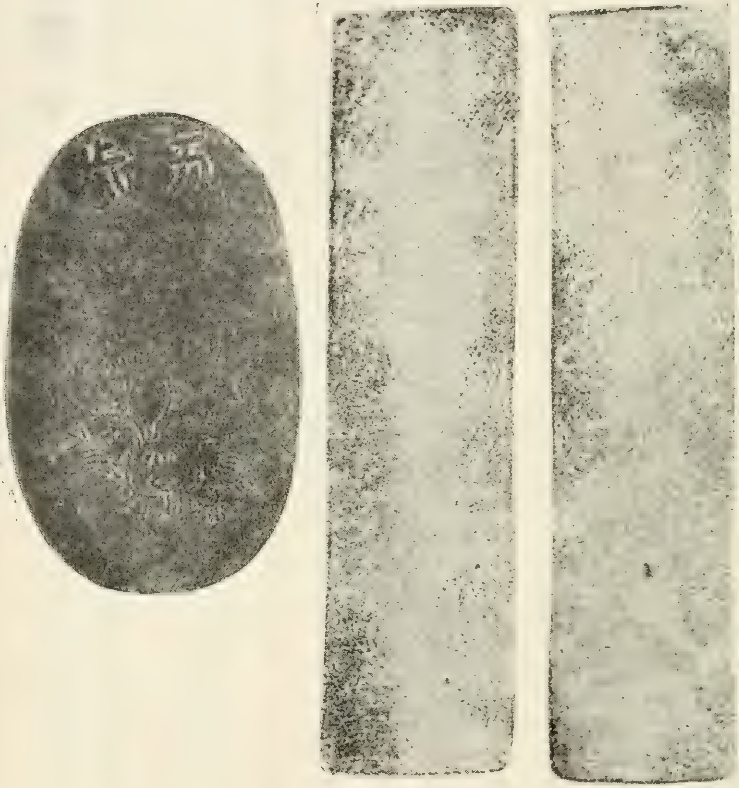


重サ、百五十八匁五分
又百四十九匁五分
又百五十七匁
又百三十二匁

右ハ、花降ノ條下ニ記ス、加州侯御備ヘ金灰吹ノヨシ、先年拜寫スル所ナリ、眞金ニテ至テ金色美ニシテ賞スベキモノ也、諸侯方都テ御手當ノ備ヘ、金灰吹等有ベキナレドモ、加州侯ノ外見聞セズ、天正・慶長年、諸侯私鑄ノ分モ、皆臨時・非常ノ備ヘ金ニテ、加州モ同樣ノコトナレドモ、右ノ形制ヲ以テ推ス時ハ、微少ノ用ニハ遣ヒ難ク、又金銀モ不自由ノ時節故、遣ヒ方便利ノ爲メ、大判ニ傚ヒ種種ノ小判金出來シナルベシ、往古ヨリ文明・永祿ノ頃迄ハ、砂金ト練金ノ切遣ヒノミニシテ、銀モ同樣

ナリ、然レドモ銀ハ白銅・白鑞等ニ似ヨリシ故ニ、諸人眞僞辨ジ難キニヨリ歸服セザルニヤ、銀ノ切遣ヒノコトハ、古代ヨリ其頃マデハ多ク見エズ、文明年、大内壁書ニ、切遣ヒ金銀、兩目ノコト出テ銀ノ切遣ヒモアリシト見ユ、今關西銀ヲ貴重セルハ、天文年以來、西國ヨリ大内ノ民族始メ、赤松・三好等京地ヘ亂入ノ頃ヨリ、專ラ遣ヒナレシヤトミユ、龍翔寺大永年ノ古帳ニ、算用ノ不足カンヲ金銀共ニ切リ減リト有テ、尤形制ノコト一切ナシ、砂金ハ往古ノ儘ニテ通用スレドモ散失多ク、故ニ多分又鍊金ニ製シ、切遣ヒニセシヨリ、又量目ヲ定メ、信長公時代ヨリ、大判ノ事起リ、大判ヨリ又天正年、小判始マレリ、依レ之其頃諸侯方備貯ノ灰吹金、又ハ砂金、切遣ヒノ金マデモ、遣ヒ方便利ナルタメ、多分小判金ニ造リ國用トセシ故、今古代ノ金銀判數品アリ、尤モ壽永小判・秀衡小判・大塔宮小判等ノ名目アレドモ甚疑ハシ、天正・慶長年ノモノナルベキカ、又元祿七八年ノ頃ヨリ、頻ニ古錢ヲ玩賞スルコト流行シ、寶永・正德年盛ナリ、右弄錢ノ頃又々異製ノ古金銀ヲ集メ、弄錢家ノ黨ヲ卑シメ、驕慢セシコト流行シ、其頃又古代ノ金銀ヲ僞造シ、諸人ノ眼ヲ掠メ、利ヲ貪リシモノアリシト、老父ノ話アリテ、必ズ右等ノ儀事ハセマジキコトニテ、又古金銀ヲ貯フルコト制禁ニテ、度々制令アリ、驕奢ノ第一ナリ、深ク愼ムベシト、常ニ教訓セリ

天正年時代切遣金



重サ四匁四分

三貨圖彙卷十五　判金之部

草間直方輯錄

大判金ノ事、室町殿ノ頃ヨリ始マリ、今ニ至リ專ラ用ユ、然レドモ室町殿ノ中、何レノ代ヨリ起ルト云コトヲ不レ知、遺老物語ニハ、信長公ノ御代、後藤四郎兵衛ノ先祖、コレヲ極ムルノ由見エタリ、金銀圖錄ニ、藥王院古文書ヲ引キテ、大判金ハ信長公ノ時ヨリ始ルヲ是トスベシト云リ、後藤家ハ先祖祐乘普光院義教公ニ仕フ、五代目德乘ニ至リ神君ニ仕フ、或說ニ室町家判金モ、德乘墨判シテ、通用セシトイヘリ、未其據ヲ知ラズ、多門院日記ニ、天正十六年九月、大納言殿ヘ樽八金子百枚、一々ニ後藤判アリト云フ、是レ室町家ノ判金ナラン、尤寶貨事略ニ云、天正十六年ノ新判ナラン歟、然レドモ右日記ニ、天正十六年トアレバ、此年鑄ル判金ニテハコレナキカ、室町殿時代ノ書ニ慥ナル判金ノ沙汰ナシ、砂金ト黃金何兩トノミ有、適々進退記ニ、板金五枚十枚百枚ト云コト見得タリ、是室町殿ノ時代ノ判金ニテ、奥ニ記ス無名ノ判金ナルベシ、無極印今ノ大判ノ如シ、量目四十四匁ヨリ或ハ五六匁、間々土中ヨリ掘出ス、是モ墨判有テ通用セシモノナラン、則後藤家ノ墨印アレバ、判金ト云フニヤ、

又餅金、爾雅ニ「餅金謂ニ之鈑一」註ニ周禮曰、「祭ニ五帝一即供ニ金鈑一」是ナリトアリ、同名ナレドモ其形チ不レ知、金ノ鋌ト同名ナレドモ、判金ト云コト右ノ鈑金ヨリ出タルヤ不レ知、又判金ニ十兩ト書コト、慶長大判由來等ノ事ハ奥ニ記ス、天正十三年（豊臣家譜ニハ、天正十七巳年五月ニアリ）秀吉公ヨリ堂上侍從以上、其外諸侯大夫等ニ、金賦トテ金銀ヲ給フコト有、金五千枚（按ニ、量目二百廿貫目、金五萬兩也、黄金十兩ハ、判金一枚ニテ、量目四十四匁也、黄金一兩ト云ハ、量目四匁四分也）銀三萬枚（按ニ、此量目千二百九十貫目、銀三十萬兩也、一兩、四匁三分ナリ、豊臣家譜ニ、總計金銀三十六萬五千兩トアリ、按ニ金五千枚銀三萬枚ニテハ、都合三十五萬兩ニテ、一萬五千兩遣ヒアリ、是ハ菊亭殿始メ、中山・烏丸・日野殿等ヘ給フモノカ、金賦ノコト豊臣家譜・太閤記八物語等附錄ニ出ル）聚樂總門、南ノ方ニシテ臺ニ居ヱ並ベ、朝ヨリ晩ニ至リテコト盡ニケリトアレバ、古今大仰ナルコトナルベシ

烈祖成績ニ云、天正十七巳年五月六日、秀吉分ニ贈所レ蓄金銀於親王公卿諸侯大夫一各有レ差、贈ニ黄金二百枚・白金二千枚一、於ニ神祖世一、謂ニ之配金一（秀吉譜曰、黄金二千兩・銀一萬兩、今從ニ年譜・秀忠日記・松榮記事一）太閤記・寶貨事略等ニハ、天正十三年秋トアリ、豊臣家譜・烈祖成績ニハ、同十七年五月六日トアリテ、年月不同アリ、今八物語（序文ニ、元和二年仲春トアリ、秀吉薨後、年數不レ久シテ記セル書故、實錄ト見エタリ、闕文アリテ、不レ解所アリ、惜ベシ）ヲ以テ見レバ、天正十三年初秋ト有テ、又此後其沙汰ニ及ビ給ヘリトアリ、多門院日記、天正十七年五月二十四日ノ條ニ云、去る二十日歟於ニ聚樂一從ニ關白殿一、諸大名衆ヘ金銀被レ遣了、金千枚・銀千枚、うへにて次第々々悉被レ遣、筒井四郎へは銀三百枚給了、惣じて金銀之數、事々敷儀やトアリテ、金銀ノ員數不レ知ドモ、豊臣家譜・烈祖成績ニ、天正十七年五月トアルハ、此多門院日記ニ的當セリ、寶貨事略ニ、十三年ト有ルハ、太閤記ヲ以テ記セルナルベシ、多門院日記

天正十三年ニハ、金賦ノコト不ㇾ見、十三年六月ニ、四國ヘ御出陣、七月十三日ニ、秀吉關白拜賀ノコトミエタリ、然レバ其設等繁雜ノ事故、金賦ノ事ハ有マジキ哉、然レドモ太閤記・八物語ニ、十三年トアリテ、此後又其沙汰ニ及ビ給ヘリト云ヲ以テ見レバ、金賦ノコトハ兩度有リシニヤ、茲ニハ豐臣家譜ヲ以テ記ス、大權現ヘ贈ラレシ黄金二千兩トアルヲ以テミレバ、小判ト有ベキニ、黄金トアル故、判金ノ割ヲ以テミレバ、黄金一兩ニテ、量目四匁四分、二千兩ニテ八貫八百目ナリ、天正年判金ハアリテ、以下金一兩迄ハ、皆切遣ヒノ金ヲ秤ニカケテ遣ヒシ也、依テ大判金ハ有テ、小判ノ一兩金ト云モノナシ、然レドモ寳貨事略ニ、天正十六年、造黄金・大判・小判ニトアリ、右金賦十七年ナレバ、〓金小判ニテモ有ベキナレド、天正十八九年ノ中、小判ト云名目見エズ、尤モ諸侯領國融通ノ爲メ、其國々ニテ恣ニ鑄ルトイヘドモ、此二千兩ハ、小判ニテハナク、判金ニテ二百枚ナリ、烈祖成績ニ、黄金二百枚トアルモ、又豐臣譜ニ、黄金二千兩トアルモ皆同ジ員數ナリ、是ニテ二千兩ト云フハ、小判ニテハナク、判金ナルコトヲ知ルベシ、白金ハ豐臣譜ト四十三貫目ノ違ヒアリテ、何レ今詳ナラズ、其黄金何枚ト云フハ、足利家ヨリ、信長公時代ノ判金ナルベシ、丁銀ノ始リハ寳貨事略ニモ見エズ、只銀三萬枚ト云フ金賦ノコトヨリ、其頃既ニ大判丁銀アリシト云ノミニテ、其丁銀ノ始リハ見エズ、右金賦銀三萬枚トアリテ、其制作ヲ知ラズ、銀ノ部ニ記ス、足利時代ノ丁銀ナランカ、併シ同部ニモ云、三萬枚ト云數先ヅ大數ナリ、今猶存スベキニ、其數ナキヲ以テ見レバ、又疑ヒアリ、尤モ神君關八州御領トナリテ、

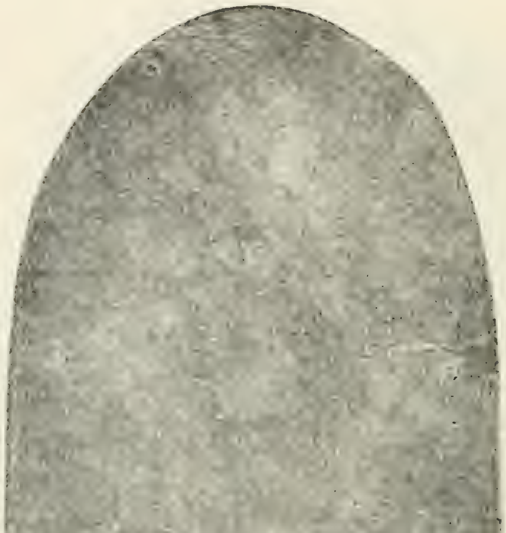
文祿二巳年、初テ金銀改メ仰付ラル丶由、遺老物語ニモ出タリ、金ハ武藏小判ナルベシ、銀ハ其制作知リ難シ、只灰吹ノ極印ナキ銀鋌ナルベシ、銀ノ部ニ記ス所ノ讓葉銀ナルベシ、是レハ一鋌量目不同アリ、所謂切遣ヒトモ見エズ、駿府政事錄ニ、文祿四未年神君ノ舘ヘ、秀吉公來臨、此時神君ヨリ、白銀三千枚進ゼラレシ事アリ、此時右ノユヅリ葉銀・公用銀ノ類ナラン、其量目ヲ權リテ用ヒラレシナルベシ、然レドモユヅリ葉銀・公用銀等ハ、豐臣家ノ制作ト云ヘバ、彼家ニハ多ク用ヒラレ、御當家ハ又駿河ニテ別段ニ制作アリテ用ヒラレシニヤ、今駿河吹ノ金銀多ク殘レリ、右秀吉公ヘ贈ラレシ銀ハ、駿河ノ十兩判ナランカ、此十兩判量目四十三匁アリ、然レバ右白銀三千枚ハ、十兩判三千枚ニテ、量目百二十九貫目也、右駿河ノ十兩判ハ多ク世ニ殘レリ

駿河吹銀判



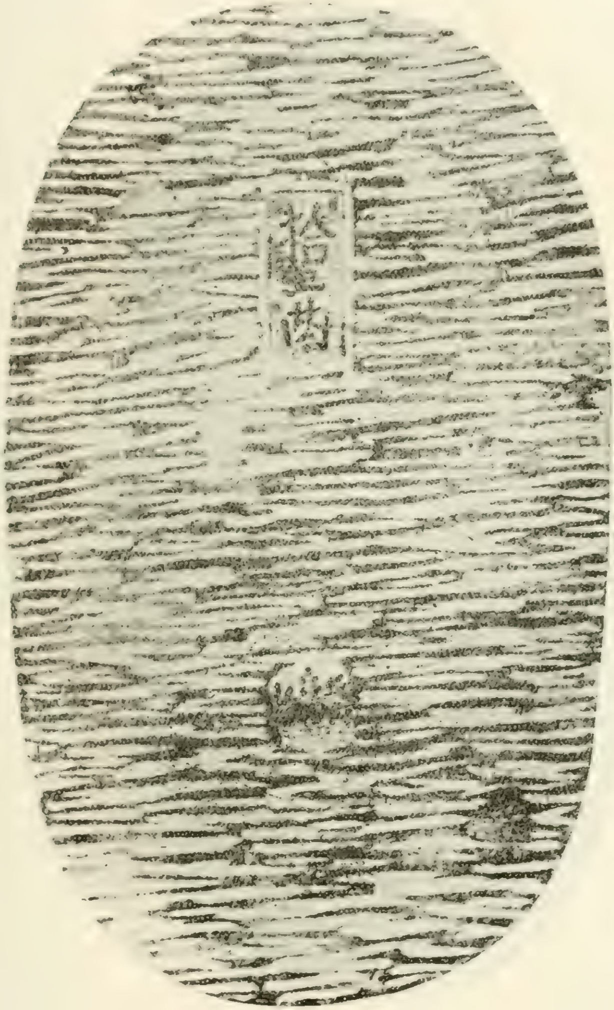
量目四十三匁

同裏



同銀判

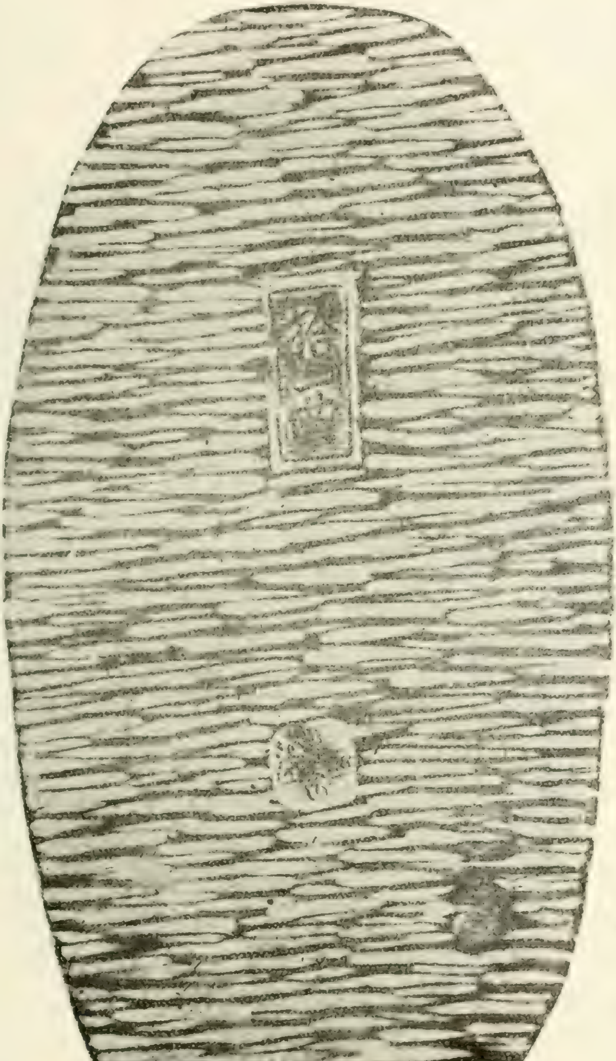
量目四十三匁



同裏

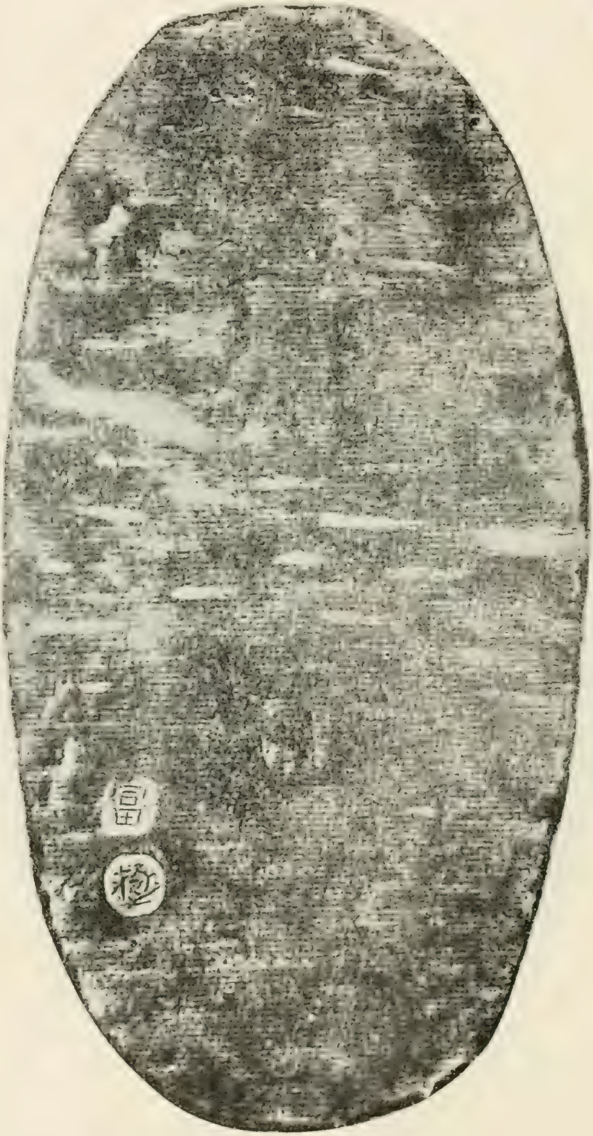


同銀判

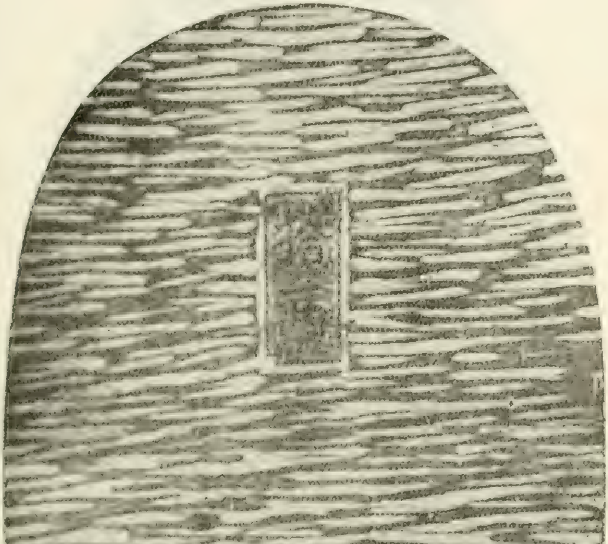


量目四十三匁

同裏



同銀判

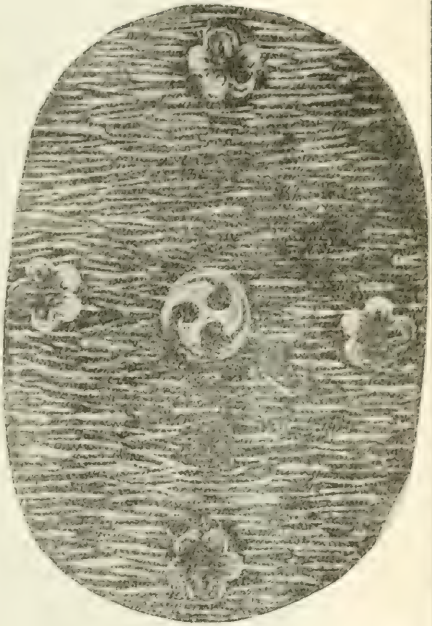


量目四十三匁

同裏

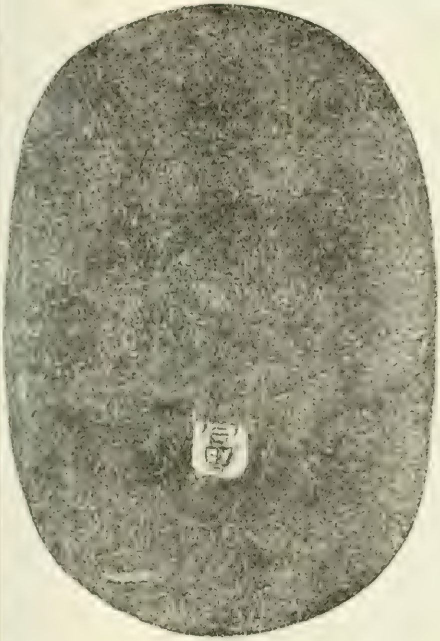


同五兩判

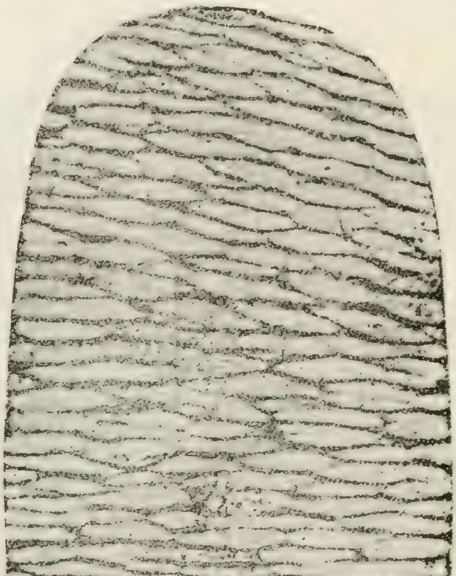


量目廿一匁五分

同裏

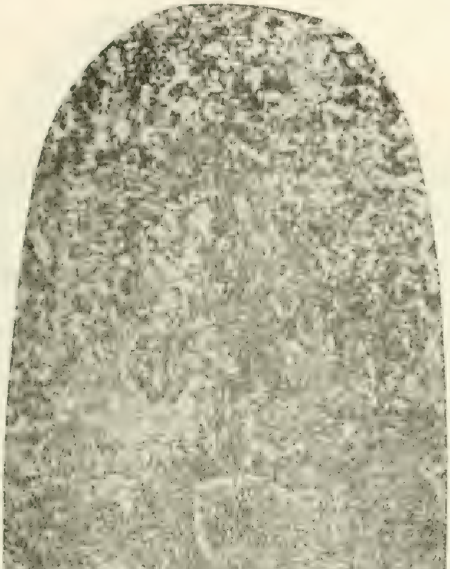


同錠判



量目四十三匁

同裏

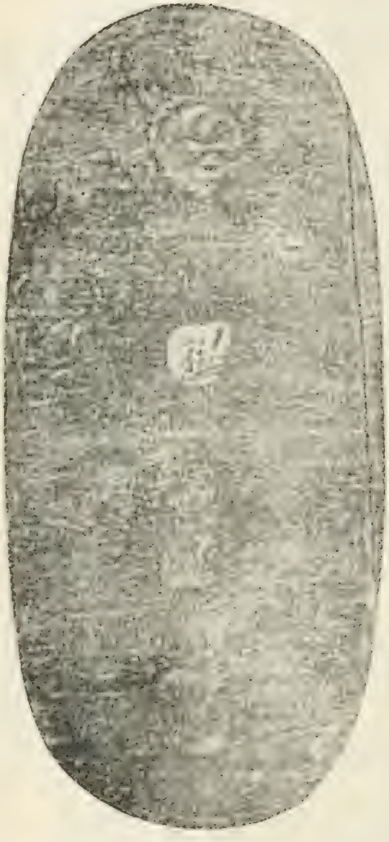


同黄金五兩判



量目廿二匁

同裏



古判ノ中ニ、慶長ハ已ニ後藤ノ極印若干河此ナキ、古筆ノ包紙ニ、古ヘ墨付有之、西本願寺御門主ノ家蔵也

其精粗ナルコトハ、後ノ考ヲ俟ツ、今銀ニ極印ヲ打チ通用セシ始ハ、慶長六年、常是ニ命アリテ始テ造ル、古ノ金銀三両位ノ銀ハ、ニダメ灰吹銀ナランカ、又銀ノ際ニ出ス所ノ、室町殿時代ノ銀ナランカ、是又後ノ考ヲ俟ツ、又貞宗蔵ニ、天正年ノ大判アリ、包ミ紙ニ天正十九年五月、秀次ヨリ来ルトアリテ、今色見ニシテ直スベキモノナリ、是十六年鋳ナランカ、古金銀ノ判金ト云ヒテモ可ナリ、墨印徳乗ノ判カ未ダ知、此時代後藤ノ家ニ折紙ト云コトナシ、徳乗ヨリ折紙ハ始ト云、其已来ノ折紙ノ判トハ格違ナリ、大判ノ印トハ別ナルヤ知ラズ、此事正可後藤庄三郎光次徳乗ノ製ナルベシ

天正判



掛目四十四匁三分

位最ヨロシ

表ニ鑿目アリ

同裏



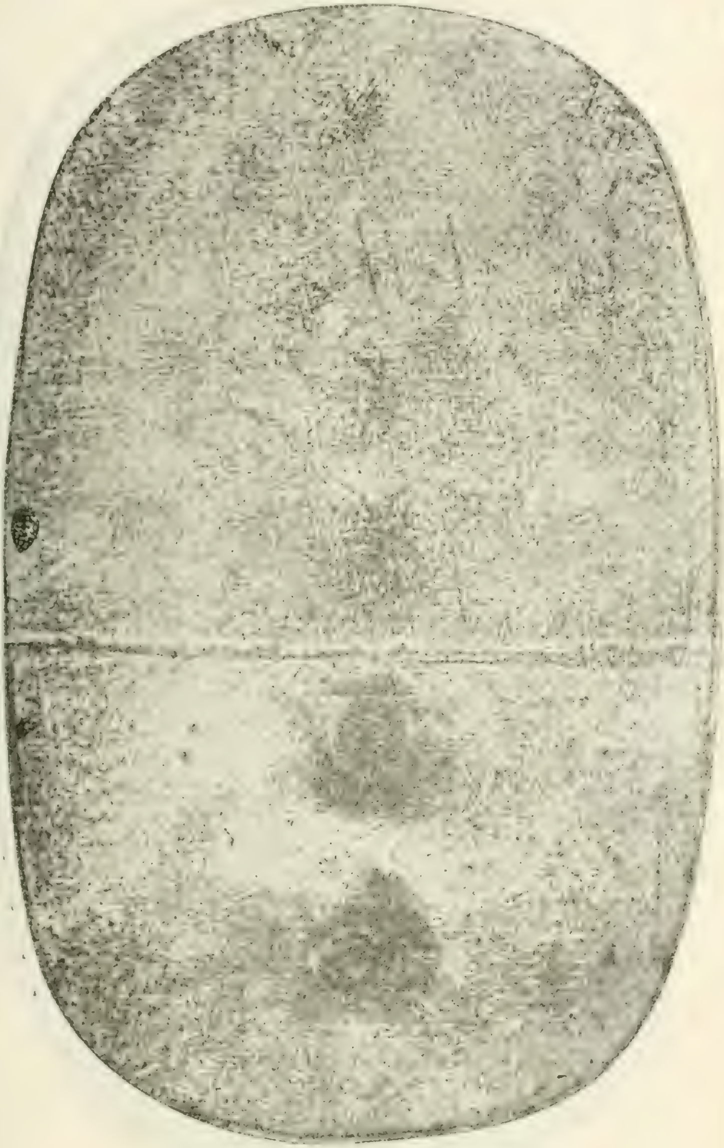
天正大判



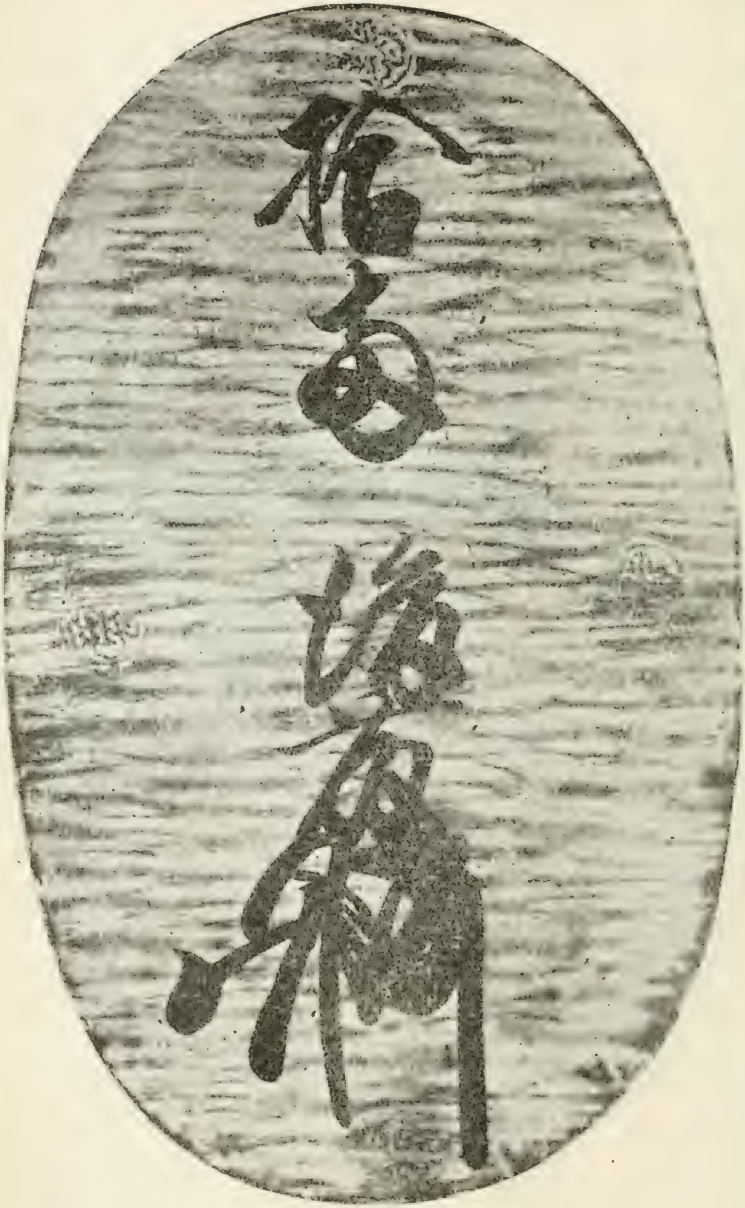
掛目四十四匁三分

此判金、墨判モ裏ノ桐極印モ違ヘリ、然レドモ或家藏ニ、天正判ト書付有レ之故、茲ニ出ス

同裏



天正大判



掛目四十四匁三分



天正大判



掛目四十四匁三分

同裏



此大判包紙ニ、天正囑託判トアリ、此囑託ト云コト解セズ、古書ニ據可レ有歟未レ考、永祿年、舊

本節用集ニ、囑託（隨路送出也）トアリ、然レバ金銀ヲ送ルコトニテ、大判ノ名目ニハアラズ、此大判裏ノ極印三ツアリテ、前ノ判金ト不レ同

又別種太閤大判ト云アリ（金銀圖錄ニ出此大判未レ見）是等十六年判ナラン歟未レ知、後ノ考ニ記ス



古大判金



重サ四十二匁五分、金銀圖錄ニ出

同裏



大佛大判ノ事、武徳編年集日、慶長十四年、右府秀頼、洛東大佛再興アリ、營監ハ長臣片桐東市正且元、及ビ雨森出雲守ナリ、誠ニ無双ノ大營タリ、依而四國・鎭西・中國ノ諸侯、工匠ノ粮米二萬石・一萬石、或ハ五千石・三千石、大阪ヘ運送シ其資用トナシ、洛陽ニテ石河三右衛門・饗場民部ヲ以テ、太閤聚斂ノ黄金千枚、分銅ヲツブシ、後藤徳乘ニ課セ、大佛資用ノ爲メ大判トセラル、徳乘其分銅一ッ鑄潰ス時ニ、金目減ジ、大判、九百五十六枚トナル、逐日大判若干出來ルト云々、遺老物語ニ云フ後藤四郎兵衛云、大判之儀信長公御代、私先祖相極申候、大佛判之儀者太閤様之時、私先祖徳乘相極め申、極印桐も徳乘作にて候、大佛供養之時入用之爲め拵へ候ゆゑ大佛判と申候、常之通用申し候大判よりは金之位能御座候、下略

右ノ通リコレアリ、尤千枚分銅トハ大判金千枚ノ掛目ヲ以テ、分銅ノ形ニ鑄サセ、兼テノ用意トス、分銅一ッ掛目四十四貫目餘ト云々、但金銀圖錄ニ、靜庵隨筆ニ、千枚分銅ハ、七寸ニ八寸アリト云、愚按、此量目、精金五十九貫百九十二匁、但是ハ七寸ニ八寸四角ノ積リ也、分銅ノ形ナレバ、圓ク左右欠ル所有ユヱ、又目方減ズ、四十四貫目餘ナラン

駿河政事錄ニ、元和元卯五月二十八日、台徳公二條城ヘ渡御、藤堂和泉守・井伊掃部頭ヘ、今度大阪表六日・七日ノ合戰、勳功ヲ賞セラレ、太閤秀吉ノ儲置ル、金ノ法馬、俗ニ千枚分銅ト云各二ッ宛ヲ授ケラレ、其上可レ被レ知行加賜ノ旨被ニ仰出一

大佛大判



掛目四十四匁三分　位五十



大佛大判



掛目四十四匁二分

同 裏



右何某家藏ニテ、一枚見シニ、大佛判ハ耳ニ極印ナシ、又判金ノ端ヲ手ノ指ニテツマミ、火ヲアヲツ如クニ振レバ、ポンポントナルナリ、尤モ掛目モ四十四匁餘アリテ、形チ常形ヨリ大キニ見ユルナリ、右振レバナルヲ以テ、薄キト云フベキニ、薄キコトナク妙ナリ、コレ良金ナレバナリ、今一枚ヲミルニ、形チ判極印モ同ヤウナレドモ、右ノ如キ音ハセズ

右大佛判ト唱ヘ候モ、二三通リモ有テ、少々ノ不同アリ、凡皆天正大判ノ位ニ同ジ、慶長六年、金銀ノ制法ヲ改ラルト云バ、其時大判モ改メラルトミユ、右大佛判ハ慶長十四年鑄ルトアレバ、慶長判ニ後ルヽヿ八九年遲シ、尤慶長大判ハ、駿河•江戸ニテ鑄ラルヽナルベシ、大佛判ハ京都ニテ鑄シト見エタリ、慶長大判トハ少シ金色モ替リ、裏ノ極印初メ都テ天正判ニ似タリ、疑ラクハ天正判ノ極印ヲ大佛判ニ用ヒシモノニヤ、依テ大佛判ト天正判トノ分チ、座方ハ知ラズ、素人ノ眼目ニテハ實以テ分チ難シ、大佛大判ハ耳ノ廻リニ桐打詰メシ極印ナク、又裏ノ極印モ、丸ニ桐ト、其下丸キ極印ト、二ツノミト云傳フ、然レ共予見シモ三枚程ニテ、内一枚ハ常判ノ通、耳ノ廻リニ桐極印打詰メアリ、裏ノ極印ハ右ノ通二ツ計ナリ、墨判抔モ少シモ立派ナルヿナク、判モ少シハ筆格モ違ヘリ、又量目ハ違ハザレ共、形ニ大小アリ、尤亂世草昧ノ中故、其論ニモ及バズ通用セシト見ユ、先年後藤家ニ由緒アリテ、右等ノヿ尋ネシニ、彼ノ方ニテモヤハリ知レズ、然レバ知レザルヿヲ、後世臆說ヲ設クルヿハ、至テ不可ナラン、コレニ依テ古ク云ヒ傳ヘノ儘コヽニ記ス、見ル人咎ムベカラズ

大佛大判



掛目四十四匁二分　位五十　表槌目　上金 上墨

同裏



此大判、右ノ大佛判トハ大キサ・墨判少々違有レ之、依テ定メ難シト雖ドモ、此大判或人往古ヨリ所持セシ處、先年文金吹替ノ時、古金銀貯置コト、嚴敷御制禁仰出サルヽニ付、其砌局官へ差出スノ所、役人委シク之ヲ見、是所レ謂大佛大判ト云テ甚希ナル判金ナリ、此判金ハ殊ニ良金ニテ珍シキ誠ニ世ノ寶ナリ、是ヲ潰サンハ本意ナシトテ、殊外稱美シ、尚追テ沙汰スベシトテ還サレケリ、此事委シク書付テ、何某所持セリ、依テ形チ不同ナレドモ、大佛大判ニ決セリ、慶長大判ノコト、鑄ル年月詳ナラズ、是ハ或書ニ元祿年中四良兵衛方火災ニ遭テ、舊記悉ク燒失シテ知レズト云、慶長六年、慶長金出レバ、大判モ其頃ナルベシ、右慶長判凡十二三品アリ、掛目ハ不レ替ドモ、墨判形ノ替タルモアリ、一ト通ニハ定メ難シ、又梅八ノ紋アル慶長大判ト云モノアル由、sic見、小判ハ當所何某所持セリ、年號梅八、幷ニ判トモ皆極印ニテ良金ナリ、量目四匁四分有テ、黃金一兩ノ目ニ合フ、右大判モ一兩トアリ、大判ナレバ十兩ト有ベキニ不審也、按ニ、右小判ヲ後世大判ニ假作セシモノナラン歟、右小判梅八ノ紋アルヲ以テ見レバ、慶長五年ノ頃ヨリ、加州ヲ前田侯領セラレシ故、花降銀ト同様ニ鑄サセラレシモノニヤ、圖ハ後卷ニ出ス

慶長大判・小判掛目ノ事

敬園私記ニ云

今大判を掛目四十四匁とするは、凡往古山出しの金（私ニ云、五十ノ位カ）五掛目百目、是を練精する時は、燒詰金、

八十八匁、銀十二匁となる、其八十八匁を折半して、四十四匁を得る、則四十四匁は燒詰之精金なり、又折半するは通用勝手よき爲也（今切遣ヒト云ハ、往古竹流ノ古金ナリ）依レ之四十四匁を足色金と號して、最上之位とし、倍大判の掛目も是より起る、且慶長年中仰付られし、大判も右に准じて掛目を四十四匁とす、然れども位は四十四にあらず、五十二の位にして、往古金より劣るものなり、都て大判に十兩と書事は、凡大判一枚を黃金十兩之積りにあつる故なり、昔は銀一枚を、黃金一兩とたて、銀十枚を黃金十兩とせしなり、依て大判に十兩と書、慶長小判の十兩にあらず、右慶長小判も五十二の位にて候、金一兩掛目四匁七分六厘これあるは如何と申候に、右大判の位より立たるものにて候、五十二之內、燒詰金之位、四十四之一割、四匁四分を製作者の德用として、これを引き殘り、四十七六となるを、小判の掛目としたるなり、（私云、是慶長金一兩、四匁七分六厘ト云フ據ナリ、今通用四匁八分ト云、）依レ之大判に十兩と書て、小判十兩之掛目とは相違致候と云

云

又或記ニ

文祿二年、最初被ニ仰付ニし武藏小判は、右大判の位四十四の內へ、上銀四匁を雜鑄し、其儘小判に仕立しものゆゑ、武藏小判は一兩量目四匁八分にて、則四十八の位に御座候、金十兩之內、九匁一分は上金、九分は上銀にて候、慶長金は大判之位四十四匁、此精金上南鐐、上銀六匁を雜鑄し、合て五十目と立て、此內二匁四分、後藤方制作の德用とし、引殘四十七匁六分となるを、小判十兩に仕立候故、

金一兩量目四匁七分六厘となる、凡武藏小判之量目四匁八分を據とせしものにて、武藏小判は四十八之位、慶長金は五十之位にて候、右二匁四分制作者之德用となるは、慶長金五十之位にしては、大判量目四十四匁は、上金三十八匁七分二厘と、上銀は五匁二分八厘なり、其位を以て金目十匁を算當すれば、上金八匁八分、上銀一匁二分となる、此上銀一匁二分を據として、雜鑄金五十目を以、小判十兩に仕立候、内一匁二分を制作之費用とすべしと上意ありけれども、多分費用もかゝり候故、御願申上其倍下され、二匁四分德用となり申候、下略ト云、何レ是ナルヤ不レ知、大抵其趣ハ同ジ

遺老物語ニ

後藤四郎兵衞云、大判に十兩とかく儀は、小判十兩にては無ニ御座一候、黄金十兩にて御座候、黄金十兩と申儀、昔は銀一枚を黄金一兩と仕、銀十枚を黄金十兩と申候、大判一枚を銀四百三十目に通用仕候、右四百三十目之外之高下は時々兩替師の相場と相見え候、と云々

右慶長金ノ說、何レト其是非を不レ知、官局ノ秘トスル所ニシテ、他家ノ知ルコトニアラズ、京都大德寺ニ、天正年古溪和尚へ御奉行ヨリノ算用書アリ、今右ノ大判一枚、銀四百三十目ト云コトハ、此古文書ニテモ明證ヲ得ル、事ハ物價ノ部ニ記ス、依テ略レ之

慶長大判

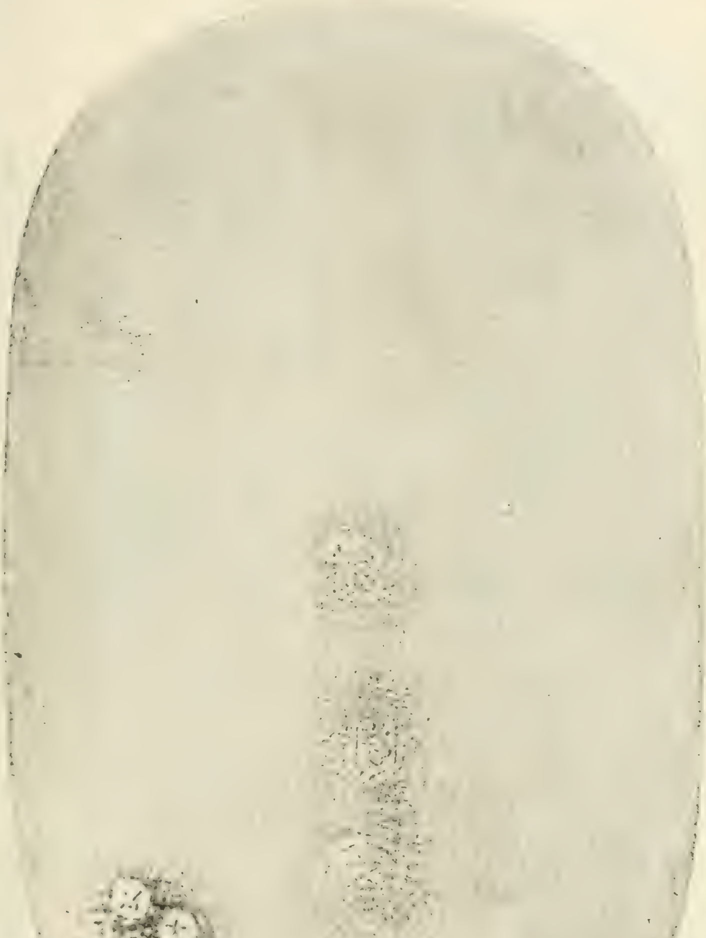


掛目四十四匁　位五十

上金　卅八匁七分二厘

上銀　五匁二分八厘

同　裏



慶長大判



掛目四十四匁

同裏



慶長大判



掛目四十四匁

同裏



慶長大判

掛目四十四匁



同裏



慶長大判

掛目四十四匁



同　裏



慶長大判



掛目四十四匁　位五十二

上金　三十七匁二分三厘
上銀　六匁七分七厘

表槌目

同裏



慶長大判

笹判ト云



掛目四十四匁　位六十二

表鋌目有

上金　凡三十一匁二分三厘

上銀　凡十二匁七分七厘

同裏



慶長笹大判



掛目四十四匁
表筵目

同裏



慶長大判ノ裏ハ、眞中ニ極印三ツ、左ニ小キ丸ノ添極印、文字不レ定シテ四ツアリ、右ノ笹判ハ眞中ニ三ツノ極印ノミニテ、左ノ小印ナシ、今ノ新大判ノ裏モ、眞中ニ三ツナレドモ、右小キ添極印ハ三ツアリ、

三貨圖彙卷之十六　判金之部

草間直方輯錄

金銀譜ニ、判金十五種ノ事ヲ出セリ、左ノ通

大佛判　位五十五

右判金、寸法常ノ金ニ、一二歩長シ、背ニ大ノ字アリ

小佛判　位五十六

右判金、背ニ小ノ字アリ、古書ニモ、小佛判ト云事アリテ、是ヲ二條判ト云トアリ、不レ詳

二條判　位五十七

右判金、背ニ二ノ字アリ

三條判　位五十八

右判金、三印ト云

五條判　位五十八

右判金、五印ト云

笹印判　　位

右判金、背ニ笹アリ

駿河判　　位五十五

右判金、常ノ金ヨリ、寸法一二歩モ長シ、背ニ桐ノ塔、後藤ノ判アリ

甲州八兩判　　位五十五

右判金、常ヨリ小サク、背ニ四ツ割菱アリ、掛目三十四匁四分、此目ヲ考ルニ、一兩四匁三分ノ積リナリ

異大判　　位五十

右判金、無印、背ニ三ツ巴一ツアリ、常ノ大判ヨリ大ナリ

佐渡判　　位七十五

右判金、背ニ佐ノ字ト、桐ノ塔アリ

京　判

今世ニ多キ元祿大判ナリ、掛目四十四匁ヨリ五匁迄

江戶判

右半金、今世ニ多シ、掛目右ニ同ジ

東山殿判　　位五十二

右判金、背ニ三ツ巴二ツアリ

相國殿判

右判金、入道相國清盛公作ル所ト云、是世ニ希ナルモノ也

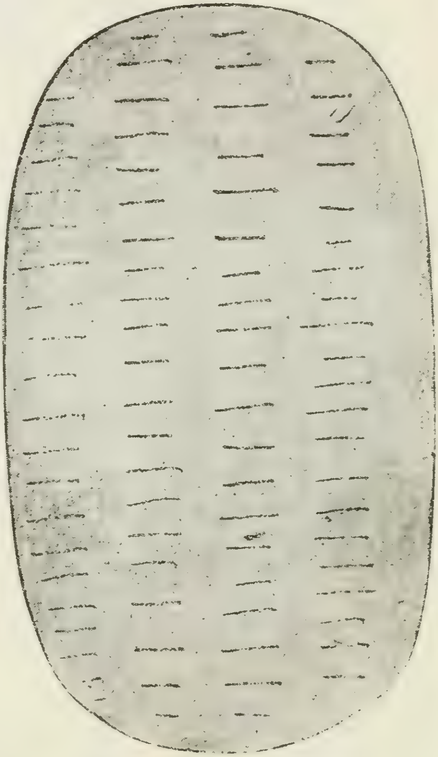
嵯峨判　　位五十

右判金、天和年中ニ出ル、長サ八寸、横五寸、タカネ許ニテ、極印ナシ、随分薄クテ、巻ナリ

右ノ通出レドモ、未ダ其圖式ヲ見ズ、（但シ金銀圖録ニ、吹替録ト云フニモ、右ノ通有レ之由、予未吹替録ト云ハ不レ見）此十五種ノ内、前ノ天正十六年判ノ事見エズ、今實ニ正判ヲ見ル所ヲ以テ前ニ圖ス、至リテ見事也、又大佛判、背ニ大ノ字有ト、是予ガ見ル所二三通ナレドモ、遂ニ大ノ字アル大佛判ヲ見ズ、（讓葉金ノ背ニ、大ノ字アルモ有リトイヘドモ、未レ見、詳カナラズ）其餘小佛判已下、心得難キコト多シ、其中、駿河判ト云ハ、小判ノ部ニ云、駿河吹ノ小判ノ時鑄シ大判ナランカ、是慶長大判ト同ジ物ナラン、然レドモ駿河判ト云ニ、又一品別ニアリ、則圖ハ前ニ出ス、此判金慶長判ヨリ位ヨク、量目大判ノ半金ニテ二十二匁アリ、甚ダ美色ニテ珍シキモノ也、尤舊記ニ、此判金ノコト見エズ、然レドモ金色見事ニテ疑モナキモノナリ、是等ノ事モ記サズ、又元祿大判トアルハ、是子細ナシ、江戸判ハ今世ニ多シトアリ、是ハ新大判ノコトナルベシ、相國殿判ハ清盛公ノ作ル所トアリ、

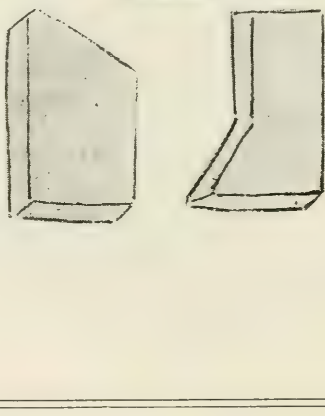
前川氏考ノ中ニ、平相國ノ作ラシメラレシ大判ト云コト如何アラン、唯口傳ニアリテ實記ニ見エズ、足利將軍ノ相國ニ任ゼラレシ時カ、東鑑ニ、沙金南鐐ノコトアリテ、未ダ判金ヲ記セザレバ、此物ナキ事ヲ知ルベシ、鎌倉將軍ハ平氏ヨリ後ナリ、此時ナキコトヲミレバ、況ンヤ此以前、決シテナシト知ラレタリトアリ、此義尤ナルベシ、其餘ノ判金今其實ヲ見ズ不審ナリ、又右大判・正徳判・元文大判トアリ、此内慶長・元祿ハ仔細ナシ、正徳大判ハ今ノ新大判ノコトナランカ、正徳四甲午年、今云古金吹替アレバ、其頃大判モ吹替リシトノ考ニテ、正徳大判ト記セルト見エタリ、併シ此新大判ハ、享保十巳年、鑄改ルノ趣則御觸モアレバ、享保ノ新大判ト云ハンカ、又寶永大判トアルハ、元祿大判ナルベシ、別ニ寶永大判ト云ハナシ、元文大判トアルハ、享保ノ新大判ナルベシ、別ニ元文ニ大判出ル由ハ、御觸ニモ見エズ、寶永モ同斷、尤モ後藤ノ墨判、其時代々々ニ少シヅヽノ違アレドモ、只大判ハ御當代ニ至リ、慶長・元祿・享保バカリナリ、尙御觸引合スベシ、凡ソ仰付ラルヽ大判大數定リアルコトト聞ケリ、併シ火災ナドニテ追々減ズルコトモアレバ、享保・元文以來、今ニ追鑄サセラルヽヤ知ラズ、局官ノ秘スル所ニテ、其委シキ事ハ知ラズ、縱ヒ元文ヨリ今文化ニ至リテ鑄サセラルヽモ、享保ニ定例アリテ、金ノ位替ヲ示バ、以來表向キ、吹改メ仰付ラレ、極印等相改ル迄ハ、イツ迄モ享保ノ新大判ナルベシ、併シ今右ノ新大判ヲ見ルニ、墨判少々ヅツノ違アリ、是ハ書付損ジ追々墨判書直シ候節、後藤家代々ニヨリテノ義カ尋ヌベシ、奥ニ其凡ソヲ記ス

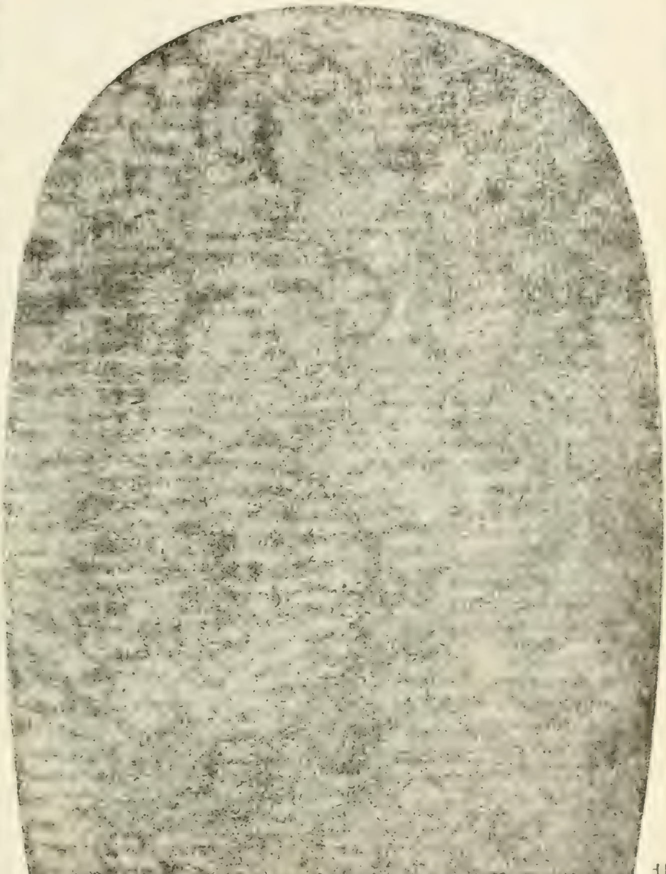
一　享保十一丙午年四月十一日、尾州中島郡、淸洲山王ノ社地、古木ノ根ヨリ、黄金大九枚・中九枚・切金六十枚、社領ノ土民十兵衛ト云モノ掘出ス、則神主ヨリ尾州侯ヘ奉ル一枚ハ、八幡宮ヘ奉納セラレ、外ハ上ヘ納ル、共金ノ總目程、今ノ金ニ取替ヘ、正德ノ古金也掘出セル土民ヘ下サレシト也平維章、東海談



享保十一年丙午、尾州中島郡淸洲山王神主丹羽外記、社内ニテ掘出ス所ノ大判也

秤目五十目・七十目・百目ニ至ル

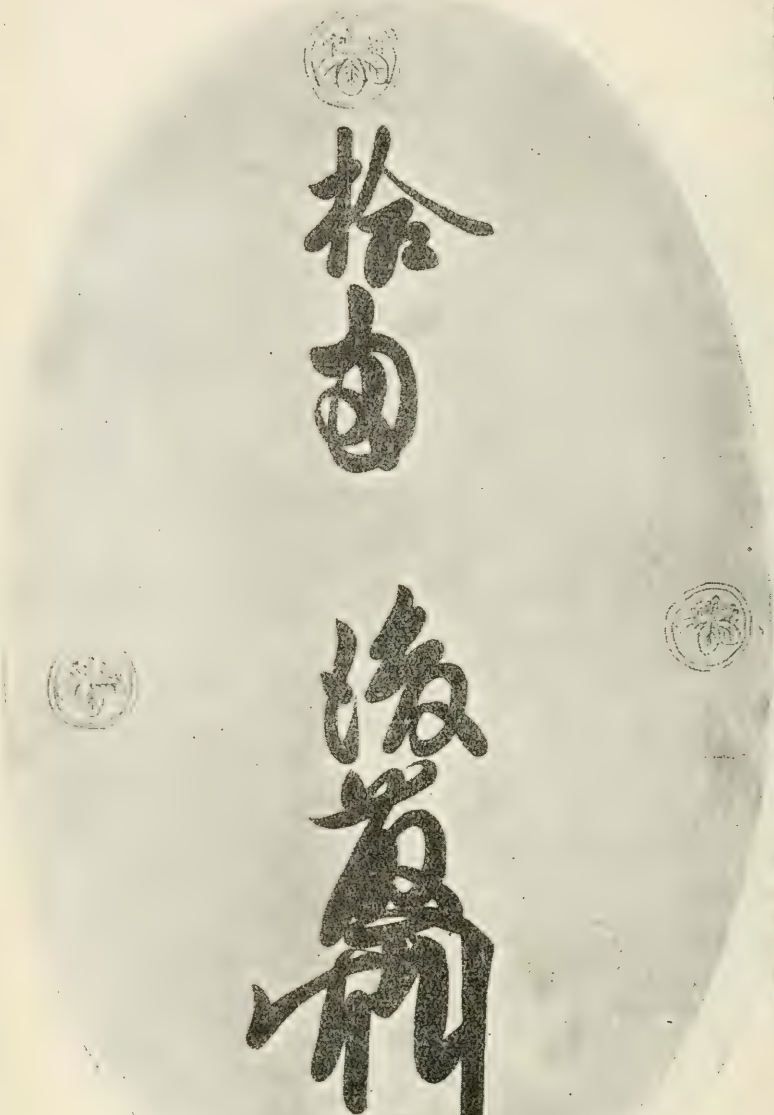




掛目四十四匁三分

右悉ク極印ナシ、筵目バカリト云、墨判ノミニテ通用セシモノカ、何ノ世ノ幣ト云コトヲ不レ知、掛目四十四匁アルヲ以テ見レバ、格別古代ノモノトモ見エズ、其餘無名ノ大判、又ハ角判ナド有テ、折々土中ヨリ掘出ス由、藤貞幹ノ集古圖、青木公ノ金銀錢譜、又諸家秘錄等ニモ記錄セリ、今茲ニ記ス以下ノ圖式、是ハ余ガ眞物ヲ見シニハアラズ、諸家ノ說ヲカルノミ

澤潟大判

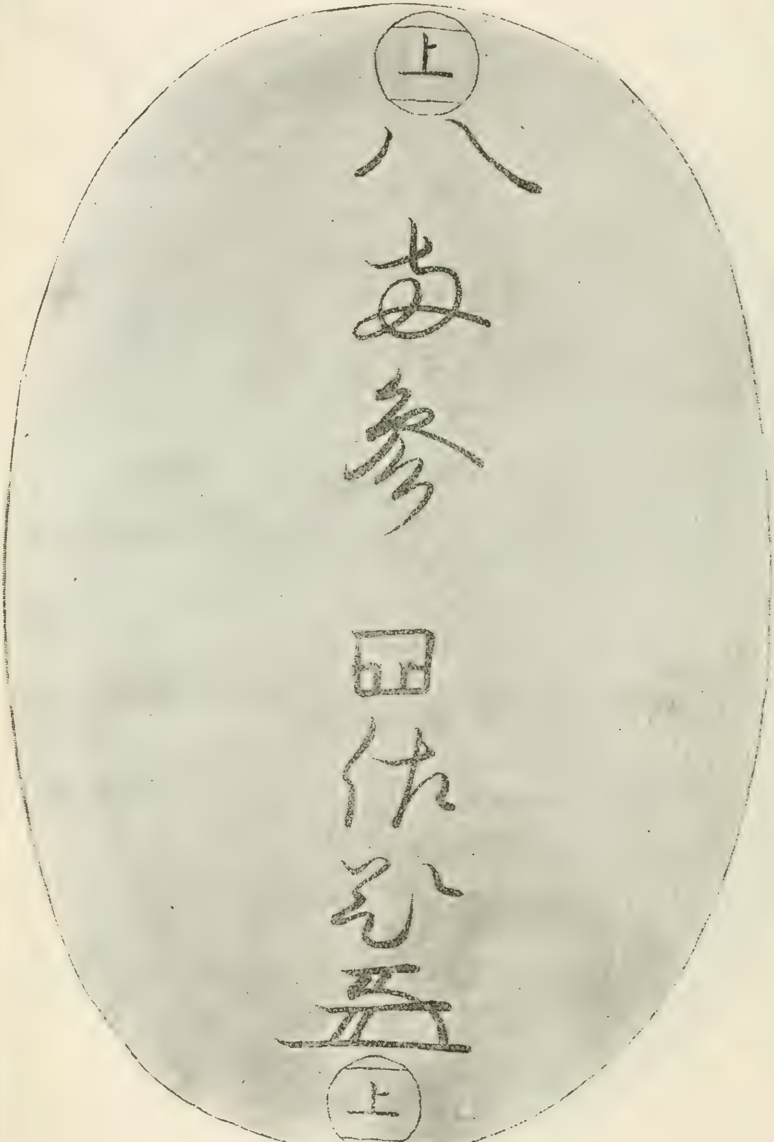


重サ四十四匁



同 裏

二上判



重サ卅六匁九分

菱大判



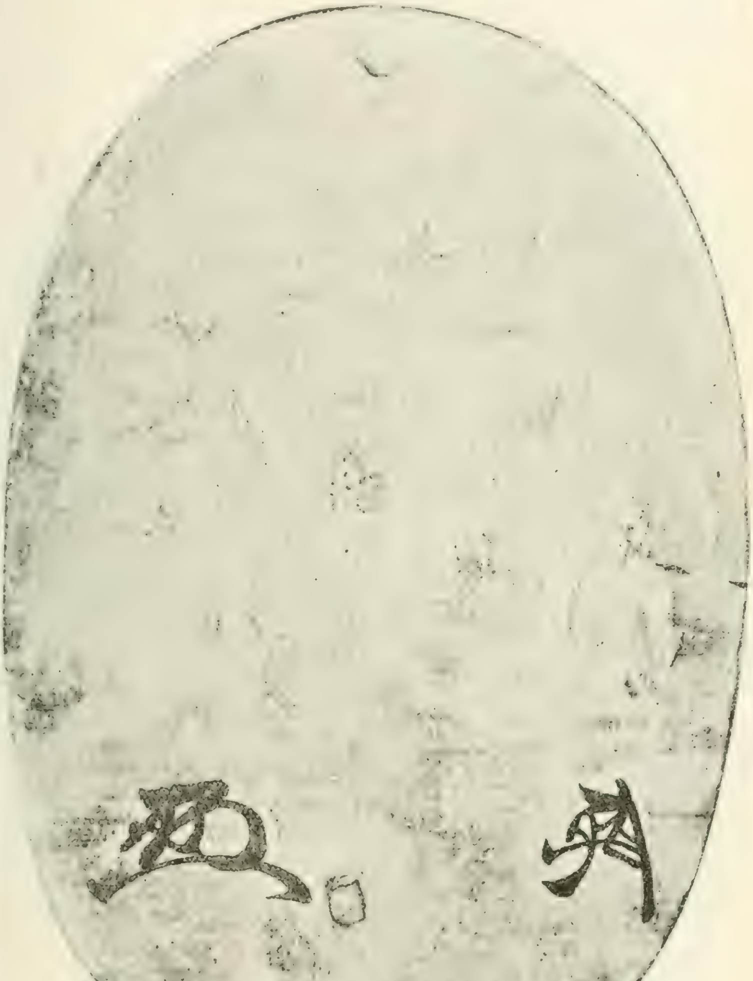
重サ四十四匁四分、長サ五寸、横三寸、裏無地

菱大判



重サ四十四匁三分

同裏



右菱大判ノコト、京都御朱印改ノ砌、古文書ノ中ニ

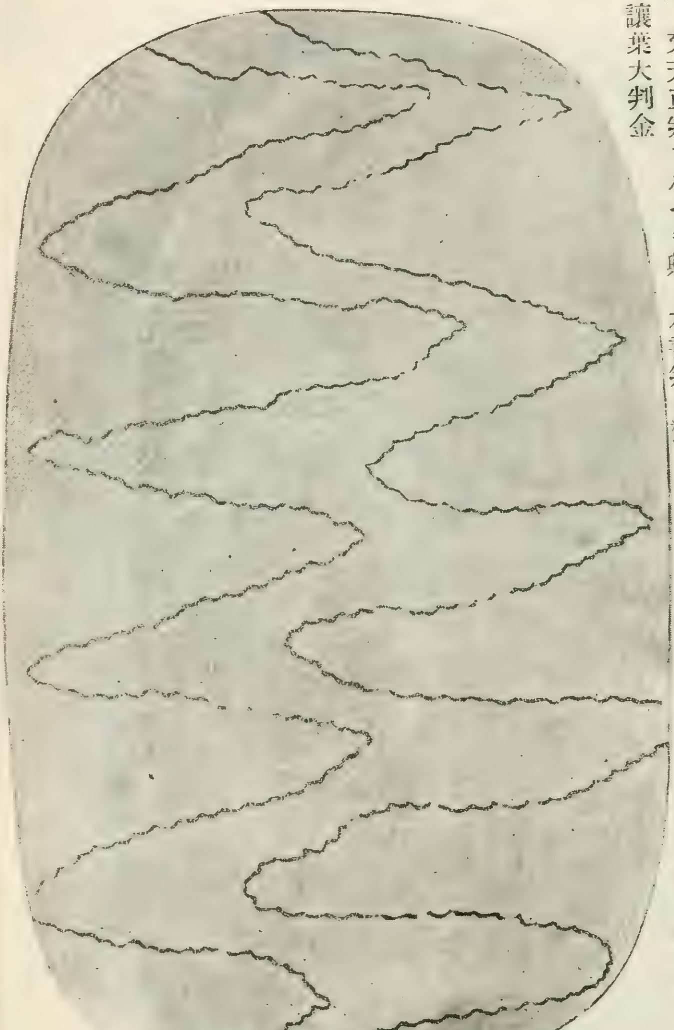
一太閤様より橋之御しゆ理之金之事

三枚はひしはん、壹枚は丸はん、合四枚

慶長二年五月

右ノ古文書アリ、其頃菱大判金アリシナリ、又まるばんト云ハ未レ考、奥ニシルス無名ノ判金ノ類ナラン歟、又天正判ナルベキ歟、右書判ノ類、年数ヲ経テ磨挑シ見エガタク、其大率ヲ記ス

讓葉大判金

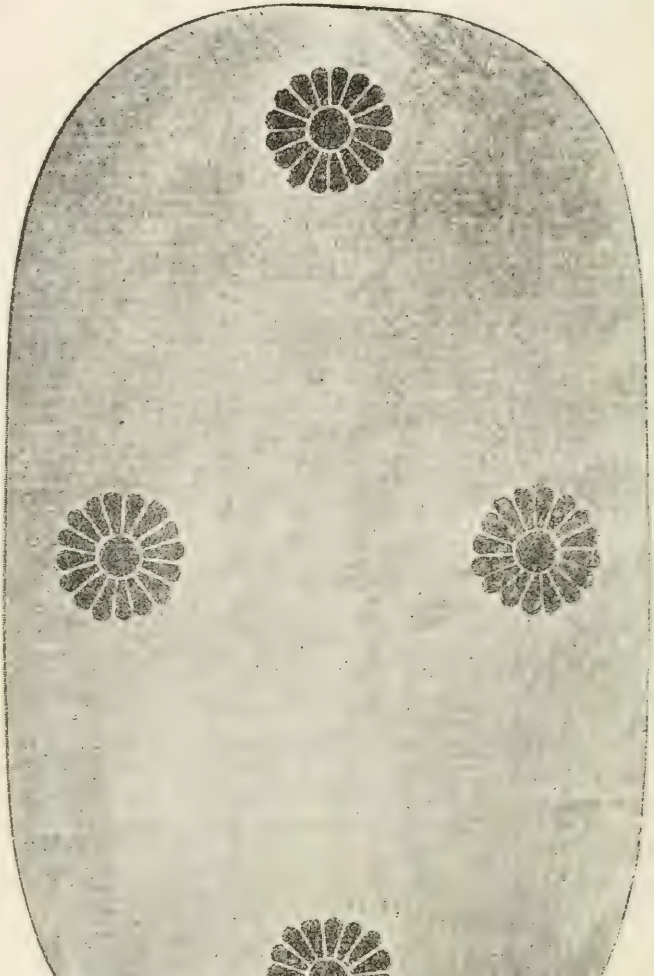


銀大判



重サ四十三匁

銀大判



重サ四十三匁

同　裏



圖錄ニ云、重サ四十三匁、此銀本ト題シテ、長州銀大判ト云、未ダ是否ヲ辨ゼズ、姑ク此ニ附ス

右銀大判ノ事、何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不レ知、足利中世ノモノニテ銀ノ部ニ記ス、後藤制作ノ一枚銀ノ類ニシテ、右銀大判未ダ見ズ

御ゆどのの日記ト云モノヽ中ニ（但年號ヲ失ス追テ書加ベシ）

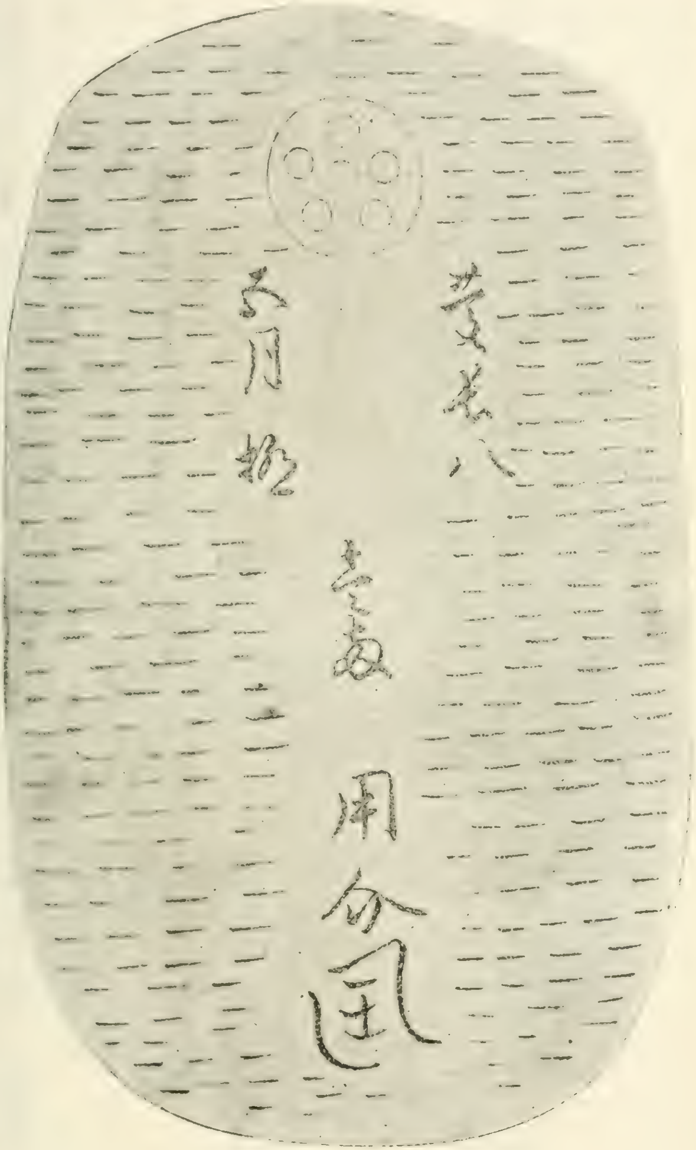
十六日、はるゝ、いつものごとく

十七日、けふむけあきまいらせると御所〳〵男だち御とき楽、しこうあり云々、女院御所よりこばん二兩、白かねの大判一つ、　御ちやのこ、御さかな、御多る色〳〵まいる、　でうどのよりむまの、たうたう御ちやのこなり

青鷺御たるまいる

右ノ中ニ、白かねの大判ト云事、始テ見エタリ、尤こばんト云事アレバ、格別古キ事ニテハ無レ之、文祿以來、慶長年ノ事トミエタリ、然レバ白かねの大判有シニヤ、前ニ出ス銀大判ハ其類ナラン歟、又ヤハリ丁銀ノ事ニヤ、尙追テ考ベシ

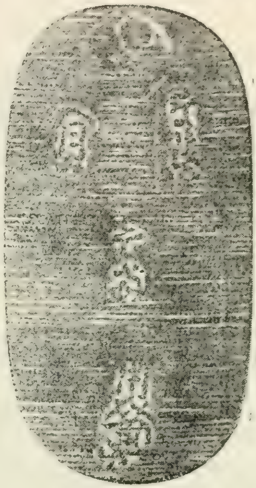
梅鉢大判



右梅鉢大判ノ事ハ前ニ出ス、左ノ小判金ヲ假作セシモノナラン、大判ナレバ十兩トアルベキニ、一兩

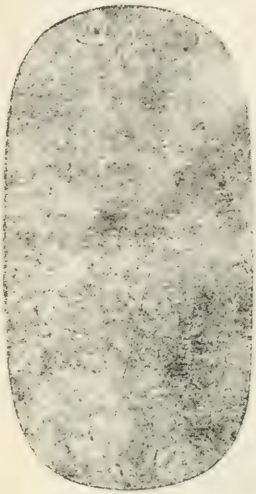
トアルハ兩目ノ不案內ナルコトナリ、決シテ假作ナルベシ、第十四卷ニ云如ク、今古金銀、諸人翫ブ事時行セバ、忽チ右ノ如クノ僞作ノ罪人モ出來、人ヲモ欺クベシ、古金銀ヲ翫ビ物ニスル事ハ、嚴シク停止アリタキモノナリ、驕奢ノ第一ナリ

梅鉢小判



重サ四匁四分

同裏

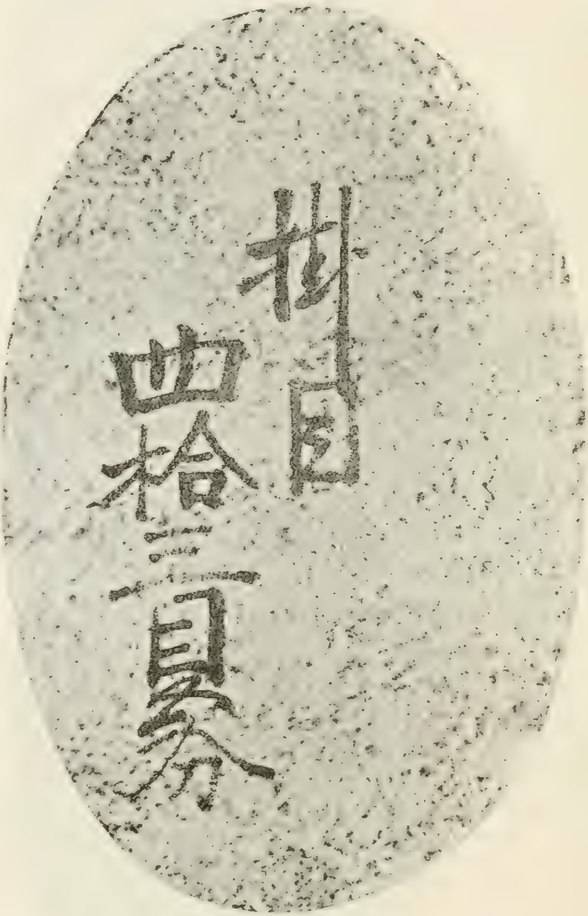


金字大判



重サ四十三匁(マヽ)、位中ノ下

同裏

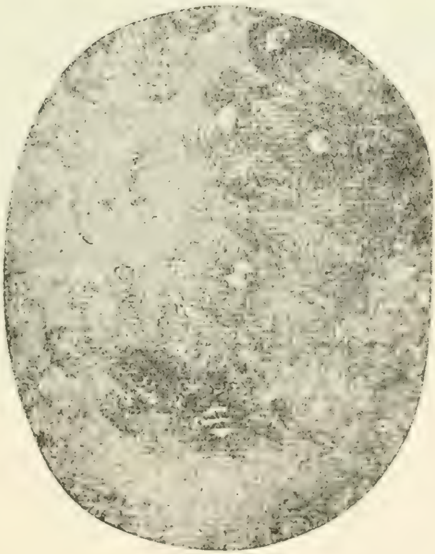


古金幣

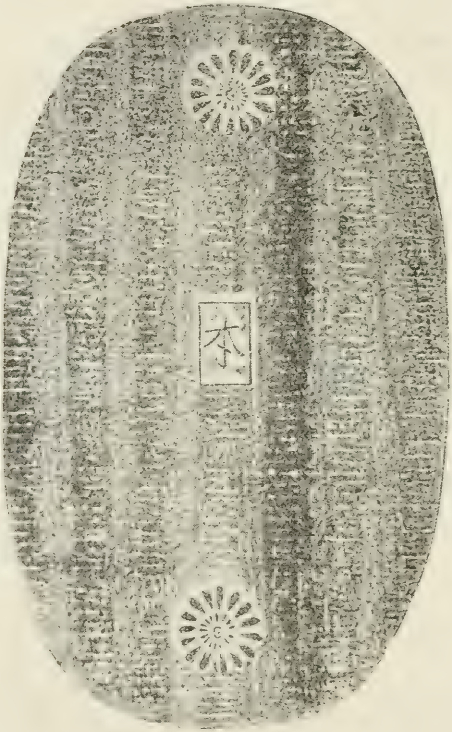


同裏

重サ二十二匁五分、明和年　九州邊土中ヨリ掘出スヨシ、
押形蒹葭堂ヨリ到來



朝鮮大判



重サ、十二匁二分、金位中、何ヲ以テ朝鮮ト名ヅクルヤ、其謂ヲ不レ知、朝鮮征ノ時、造ラレシモノニヤト、金銀圖錄ニ出

同裏



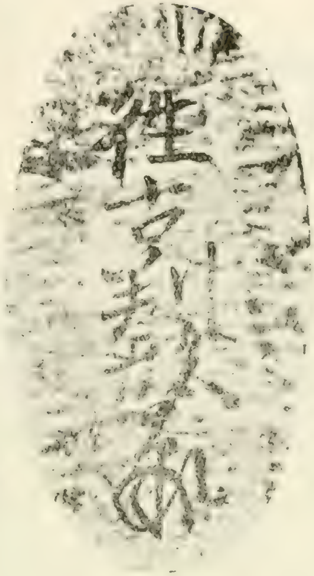
無名大判



重サ、四十四匁七分

經濟錄、食貨篇ニ云、寶永ノ間、濃州關ノ農民、宅地ヲ掘テ板金ヲ得タリ、形大キサトモ今ノ判金ノ如シ、文モナク極印モナク、兩面ニ粗キ刻アリ、其民京都ニ持往テ、金ヲ買フ者ニ見セテ問ヒケルニ、織田氏ノ時ノ板金ナリト云、文モ極印モナキハ如何ト問ヘバ、精金ナル故ニ極印ナクシテ天下ニ通行シ、僞造スル者モナシ、少分ノ用ニハ鏨ニテ切リ、其重サ秤ニ掛テ使ヒシト答フ、予其時在京ニテコノ金ヲ見タリ、凡金銀ハ純粹ナルヲ貴ブ、純粹ナレバ僞造ナシ難シ、極印ハ僞セヤスシ、是ニヨリテ前代ニハ金銀ヲ純粹ニシテ印文ヲ用ヒザリシヤト云々、茲ニ記ス無名ノ判金皆同時代ノ物也

無名古金判



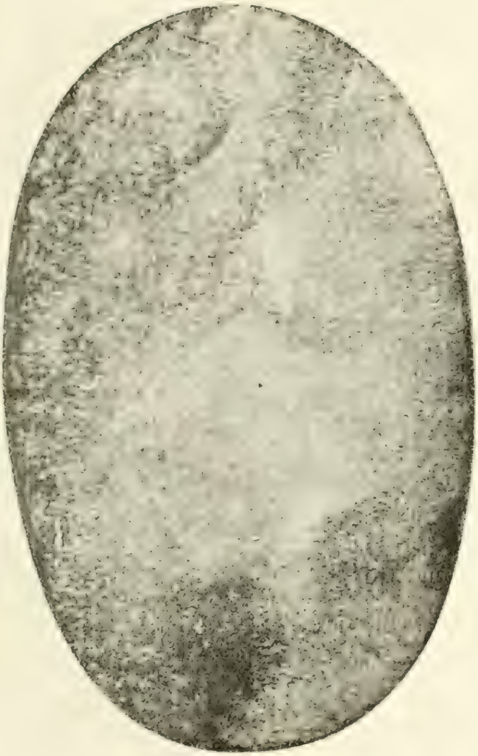


無名大判



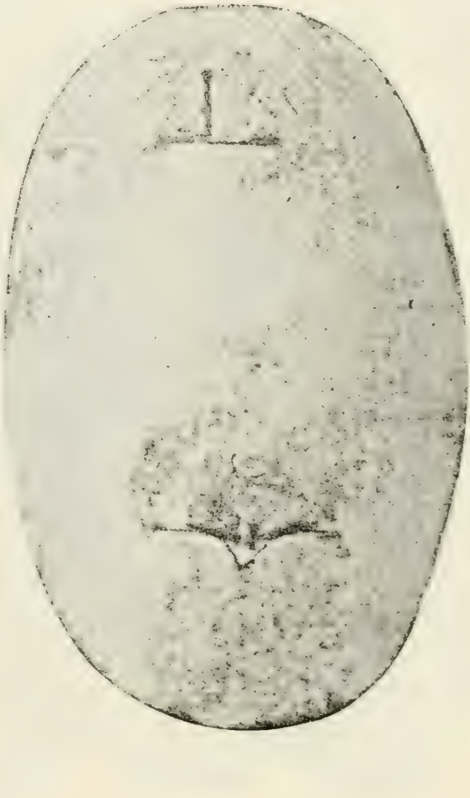
長サ三寸五分
濶サ二寸一分
重サ三十目

越前國□□村ニテ、寛文年中、
土中ヨリ掘出スト云、在所詳ナラズ



無名大判

如ニ慶長金ノ長三寸八分
濶二寸五分三厘、重サ四十五匁



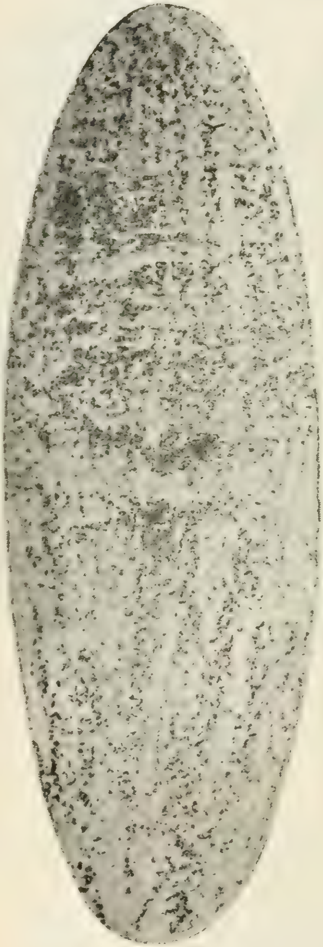


鴈金

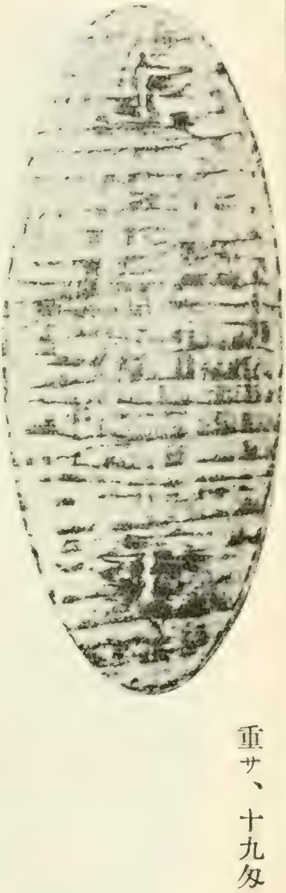


重サ、三十八匁五分

同裏

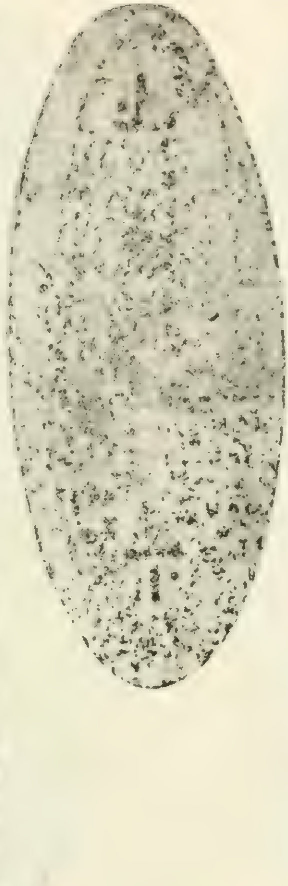


上字金



重サ、十九匁

同裏



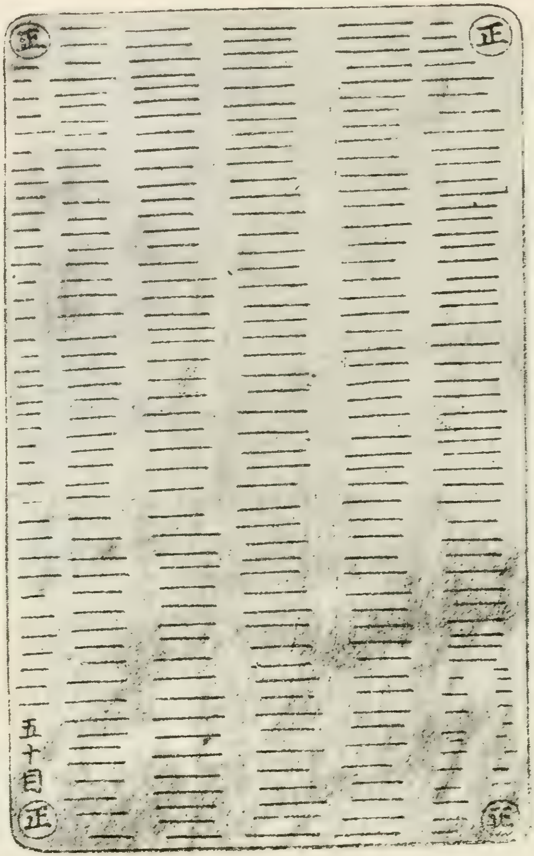
右天明丙午十一月、越後國椎谷領、五日市村百姓五左衛門ト云者、掘出シタル黄金十七枚、大イナルハ四十五錢、小ナルハ十二三錢ノヨシ

右押形、丁未三月十八日、椎谷ノ大谷章齋ヨリ到來

延享元年子十二月十四日、信州飯山領、戸隱山支配、三千寺（自二戸隱山一五里）、雨落ノ大石ノ下ヨリ、（土中ヘ二尺入ル）判金八枚掘出ス、内二枚ハ辨定判トアリ、二枚ハ辨定トアリ、八枚ニテ金重サ二百四十五匁八分、右三千

寺、此金ヲ官へ奉ル、官ヨリ文字金ヲ代リトシテ下サル、金銀錢譜ニ出

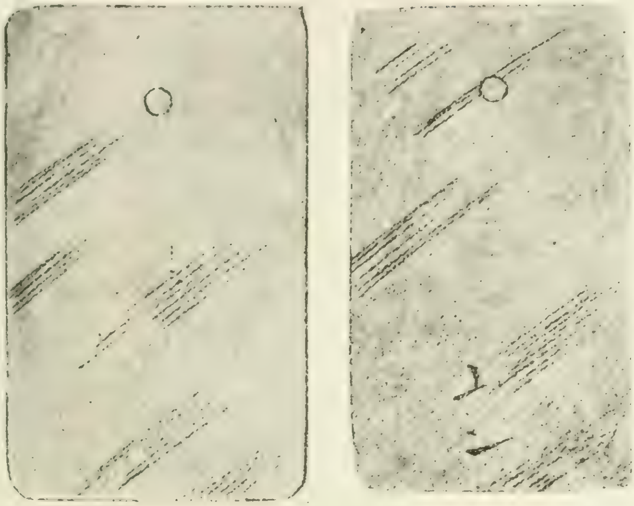
昆陽漫錄ニ云、先年角判ト云金ヲ見ルニ、其色紙ニ角判トアレドモ、正名ナルヤ不レ知、金ノ位ハ大佛大判ト同ジト云、金銀錢譜ニ云、重サ五十匁、金ノ位ハ慶長金ヲ中トシテ上下ヲナシタルモノ也ト云





圖錄云、右昆陽漫錄ニ載ス、正ノ字ハ刻印ニテ、五十目ノ字ハ彫テアリ、花押ハ持主ノ判ナルベシ

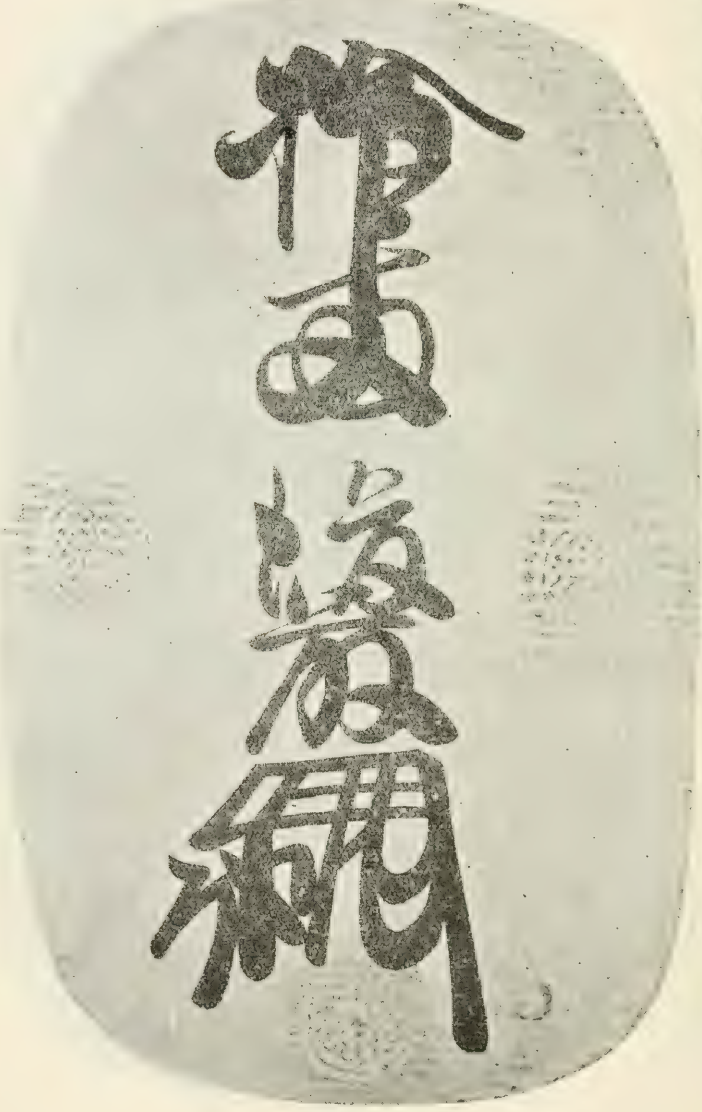
古金幣



長サ二寸三分、濶一寸一分
重サ四匁五分、是等切リ遣ヒノ金ナルベシ

元祿大判 元祿年三萬枚鑄レ之ト云

掛目四十四匁、表筵目



位七十八、又七十六トモ
上金凡二十四匁八分
上銀凡十九匁二分

同裏



元祿大判

掛目四十四匁



同 裏



右大判元祿七甲戌年、吹改リ通用有レ之トイヘドモ、古來ノ大判金ヨリ位甚惡シ、然レドモ正德年、新金改鑄ノ時ハ、御沙汰ニ及バズ、其後享保十巳年、新吹仰付ラレ、右慶長ノ位ニ吹方有レ之、是ヲ新判ト云、今ノ大判金也、尤一枚ニ付、七兩二歩ノ積リ也

御觸

一 大判金の儀、元祿年中、吹直し有レ之、古來の大判より位劣り候に付、此度右吹直し以前の大判位に、吹改め被ニ仰付ハ十一月より兩替屋共へ相渡し候間、獻上・被レ下物、其外の遣用には、當年十二月朔日より可レ用レ之事

但し大判一枚に付、金七兩二歩の積り可レ爲候、兩替之者共買入候節、右分量不ニ相減一樣に致し、賣出候時も歩銀多分に不レ可レ取、此旨令ニ違犯一に於ては僉議の上可レ爲ニ曲事一候事

一 只今迄通用の元祿大判、當十二月朔日より、一切相止可レ申事

一 元祿大判は當十二月潰し金に相成候條、所持の面々後藤庄三郎方へ差越之潰金之割合を以て小判に引替可レ申、尤貯置不レ可レ申事

但し右潰し金は一枚に付、小判四兩二歩餘の積たるべく事

右の趣、國々所々に至る迄、急度可ニ相守一者也

巳十月

右の通、今度從₌江戶₋被₌仰下₋候條、三鄕町中可₌觸知₋者也

享保十巳年十月

日向

飛驒

一今度大判吹直し候、通用に付而者極印・墨印・緘等、兩替屋方にて、一切不ㇾ仕候樣、町中へ可₌申渡₋事

右之通、從₌江戶₋被₌仰下₋候之條、三鄕町中可₌觸知₋者也

巳十月

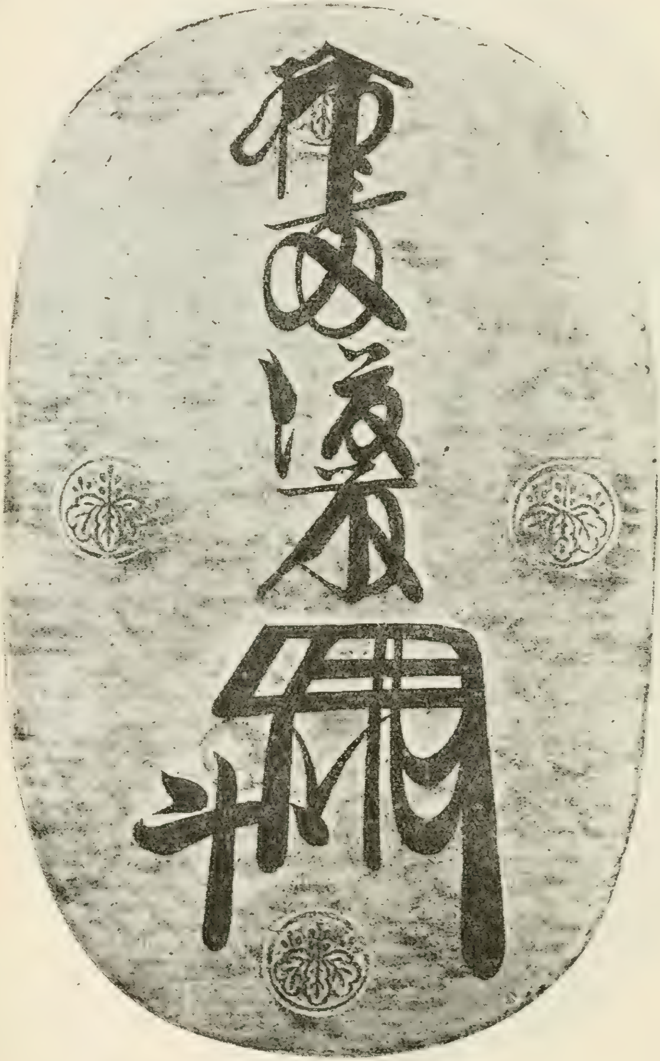
日向

飛驒

新大判

享保年九千枚鑄レ之ト云

掛目四十四匁



新大判



新大判



新大判



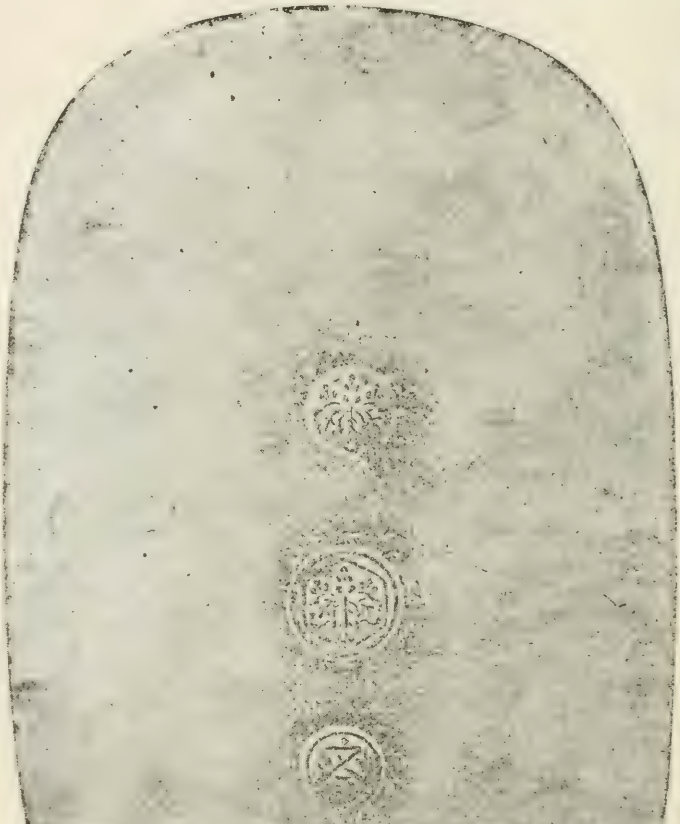
新大判



新大判



同　裏　掛目四十四匁　位慶長の通



新大判



同裏



右當時通用大判ナリ、五十二ノ位ニテ、慶長大判ト同樣ナリ、尤通用ノ歳光有レ之故、直段ハ大キニ相違コレアリ、墨判書替料定法四匁三分ナリ

一大判一枚ヲ代金七兩貳歩ト定メシコトハ、何頃ト云事ヲ不レ知、或記ニ是ハ駿河小判一兩五十七八匁トシテ、金七兩二歩、代銀凡ソ四百三十目前後ナル故、古代大判一枚代四百三十目ト云據ニシテ、慶長大判一枚ヲ慶長金七兩二歩トタテシモノ也ト云ヘリ、教圓私記ニ、慶長小判量目ノコトヲ云フ中ニ、御上意之趣小判之儀は末之世迄之調法之事に被レ爲ニ思召一候、然れば兩目と金の位を永々無ニ相違一やうに有レ之度事に被ニ思召一候、庄三郎申上られ候樣は、大判の目四十四匁二分（但二分ハ入目ナリ）御座候、是を代金八兩二歩にて取引仕候、尤金の付け本んも八兩本んと名付候而、黄金八兩二歩之積りを以て作り申候と云事トミエタリ、愚按ズルニ、慶長大判ハ黄金八兩二歩之積リヲ以テ作リシモノナラン、然レバコノ黄金八兩二歩ノ量目ハ三十七匁四分ニテ、慶長大判ノ量目四十四匁二分（但二分ハ入目ナリ）ニテハ六匁八分ノ違ヒアリ、此六匁八分ノ違ヒハ交銀アリテ、黄金ノ位ヨリハ、夫程大判ノ金位劣リシモノナラン、今大判ノ量目四十四匁二分ヲ、黄金八兩二歩ヲ以テ算ニテ之ヲ除ク時ハ、五二トナル、是則慶長ノ大判ハ位五十二トミエタリ、金小判モ準レ之、右八兩二歩ハ四十四ノ位ニテ、量目三十七匁四分ナリ、之ヲ五十二ノ位ニ直ストキハ、交銀五匁七分五厘四毛ヲ加ユル故、金目凡四十三匁二分トナリテ、五十二ノ位ノ慶長金九兩トナル也

但此金九兩、一兩凡量目四匁八分トシテ量目四十三匁二分ハ五十二ノ位精金卅六匁五分二厘五毛上銀六匁六分四厘六毛一弗餘

右ニテハ慶長大判一枚、慶長金九兩ニアタル、慶長十六年、大仙院古文書ニ、銀五百三十匁目、金子一枚分又五十八匁目、金一兩分トアリ、右金九兩ヲ五十八匁替ニシテ、代銀ヲミレバ五百二十二匁トナル、五百三十目ニシテハ八匁程タガヘリ、是ハ兩替師ノ徳用ナランカ、右ヲ以テミレバ、慶長十六年ノ頃ハ大判代金九兩、或ハ八兩二歩ニテ交易セシナラン、其後ノ事ハ委シク知レズ、正保元年五月大光院ノ古文書ニ、銀四百六十八匁五分、判金一枚分、又金一兩六十二匁四分五厘トアリ、是ハ今ノ如ク一枚分凡ソ金七兩二歩ニ當レリ、元寛鎹、寛永九年、御遣金ノ條ニモ、一枚七兩二分ノ積リトアリ、其後元祿十三年、金銀改鑄有リテ、此時金一兩六十目替ノツモリ、金一兩五十八匁ヨリ以下ニ賣買致スマジキ趣令セラル、金七兩二歩、五十八匁替ニシテ、銀四百三十五匁トナル、是又凡ソ四百三十目、大判一枚ノ代ニテ古代ノ大判、代銀ニ據トセラレ、元祿ノ大判モ、七兩二歩ノ積リナリ、其後享保十年又大判金ヲ改鑄アリテ、此時モ一枚ニ付金七兩二歩ノ制令アリ、古代ハ大判一枚ト云ハ、黄金十兩ニテ代ハ切遣ヒ銀ニテ、四百三十目ナリ、黄金一兩ハ切ヅカヒ銀ニテ、四十三匁ナリ、但此切ヅカヒ銀ト云フハ、

㴱リ葉銀ノ類ニシテ、銀ノ部ニ記ス然ルニ慶長六年、慶長銀ヲ鑄ラレ、關西ハ銀通用ノ場所ナレバ、禁裏ヲハジメ進獻ニハ、多分銀ヲ用ヒラル、但シ聚光院、慶長八年ノ古文書ニ、度々カケヘリトアリ、今云カン銀ノコトニテ、慶長銀專ラ世ニ行ハル、ヿ見ツベシ、其以前ハ金銀共ニ皆切ヘリトアリ之レニ依テ銀ハ上ミ方ヘ多ク登リテ、次第ニ潤澤ニアリシ故、銀ノ位ヰ卑シクナリ金錢ノ位ヰ貴ク、古代ハ大判一枚

ノ代銀四百三十目、黄金一兩ノ代四十三匁ナレドモ、右ノ如ク銀ノ位卑シキ故、慶長年後、元和以來ハ、大判ノ代銀モ、四百三十目ヨリ以上ニナリ、金一兩ノ代モ、六十目以上ニナリシトミユ、大判一枚ヲ金七兩二歩トスルコトモ、國初以來ノコトニテ久シキ事ナリ、後世公武トモ恒例吉凶ノ進獻ニ判金ヲ用ヒラルヽ事、年々有レ之ユヱ、次第ニ大判ノ直段モ高直ニナリ、私ノ賣買金二十兩前後ナリ、依レ之諸侯方モ迷惑セラルヽニ付テ、寛政年以來ハ進獻ノ判金モ、代七兩二歩ニテ納メラルヽト云フ、誠ニ難レ有善政ナリ、然レドモ尊敬セラレ、諸侯方ヨリ京・江戸ノ進獻ハ、古來ノ通正判金ヲ用ヒラルヽト云、是モ其謂レアル歟、依テ京・大阪ノ賣買ニモ、一枚ニ付金二十兩前後ノ相場ナリ、右前々ヨリ七兩二歩ト云ハ、古金ニテノ直段也、今文金ニ改リテハ、慶長金百兩ニテ、文金ハ百六十五兩ナリ、此積リヲ以テハ古金七兩二歩ハ、文金十二兩一歩二朱ニ當レリ、然ルニ今一枚金二十兩ニテハ七兩二歩餘高直ニ當レリ、是ハ全ク當時通用ノ威光有レ之故也、今大判ヲ七兩二歩ト云ハ、古金ニテノ價ナルコトヲ多分不レ知、右七兩二歩ト立ル謂レ委シキコトハ不レ知、尚博雅ノ考ヲ竢テ糺明スベシ、前文其一助トナラバ幸甚々々、當時大判賣拂直段

大佛大判一枚ニ付凡文金十二三兩位

但シ出來ノ上下ニヨリテ不同アリ

慶長大判一枚ニ付凡文金十一兩位

右同斷

元祿大判一枚ニ付凡文金八兩一步位

凡右ノ通ナリ、尤モ大佛幷ニ慶長判ハ出ル事甚稀也、元祿判ハ每々出ル、座方定法拂直段八兩二步銀四匁三分也

右天正判以下新大判ニ至ル迄、墨判ノ模寫、予至テ不得手ニテ、正判ト寫誤リ、又大小ノ相違、或ハ後藤家代々ノ墨判ト、不案內ニテ都テ齟齬多カルベシ、唯其大率ヲ書寫スルノミ、鈍才ノ咎ハ寬免ヲ願フ

三貨圖彙卷之十七　銀之部

草間直方輯錄

和名類聚抄云、銀爾雅云、白金謂ニ之銀一、宜珍反其美者謂ニ之鐐一、力凋力弔二反、和名之路加禰

本草綱目曰、白金鋈、說文云、鋈白金也、从ニ金沃一、省聲烏酷切、梵書謂ニ之阿路巴一、管子云、凡上有レ鉛下有レ銀　地鏡圖云、山有レ葱、下有レ銀、銀之氣入レ夜正白、流散在レ地、其精變爲ニ白雄鷄一

周秦ノ世ハ、黃金ト錢トヲ以テ通幣トス、仍テ珠玉・龜貝・銀錫ヲ幣トセズ、漢ノ王莽ノ時、始メテ幣トス、白金三等、又朱提銀二品アリ、本邦銀ノ出ル始メハ

日本紀曰、四十代天武天皇三年三月、七日庚戌朔丙辰、對馬國司守忍海オシノミ造大國言、銀始出ニ于當國一即貢上、由レ是大國授ニ小錦下位一、凡銀有ニ倭國一初出ニ于此時一、故悉奉ニ神祇一

續日本紀曰、四十二代文武天皇大寶元年三月甲午、廿一對馬貢レ金、建レ元爲ニ大寶元年一、八月丁未、先レ是遣ニ大倭國忍海郡人三田首五瀨對馬島一、冶ニ成黃金一、至レ是詔授ニ五瀨正六位上一、賜ニ封五十戸・田十町・絁綿布鍬一、仍免ニ雜戸之名一、對馬島司、及郡司・主典已上進ニ位一階一、其出レ金郡司者二階、獲レ金人家部宮道授ニ正八位上一幷賜ニ絁綿布鍬一、復ニ其戸終身百姓三年一、又賜ニ右大臣大伴宿禰御行首遣下ニ五瀨上冶セ金、因賜ニ大臣子封百戸・

田四十町一、日本史曰、引二年代曆一曰、後五瀨欺詐發露、乃知贈右大臣爲二五瀨一所レ誤也、按水鏡要記並曰、自二對馬一始貢二白銀一、因建二元大寶一、朝野群載、有二對馬貢銀記一、據二聖武記一、天平勝寶元年、陸奥始貢二黄金一、然則是年所レ貢者白金而非二黄金一、本書直書レ貢レ金、不レ言二黄白一、蓋有レ意乎、又按、日本紀天武帝二年、對馬國司、始貢二白金一

右日本史ニ云ヘル如ク、是年所レ貢ハ白金ニシテ黄金ニ非ズ、本書ニ金ヲ貢ト云テ黄白ヲ言ザルハ意アル乎トアリ、勿論其理當レリ、然ドモ黄白ヲ言ハズ、金ヲ貢シハ元年ノ三月ナリ、又五瀨ヲ對馬ニ遣シテ、黄金ヲ冶成セシメ、之ニ依テ位階ヲ授ケ、封田絁布等ヲ賜ヒ、其餘金ヲ出ス郡司◦獲レ金人、幷ニ御行公ノ子孫マデ、封戸田町ヲ賜ヒシハ、同年ノ八月ナリ、然レバ本書ニ黄白ハ不レ言ドモ、八月ノ條ニ右ノ通リ黄金ヲ冶成セシムトアレバ、旣ト黄金ト記シテモ誤ニハ有ルベカラザレドモ、註ニ年代曆ヲ引キ有レ之故疑アリ、又水鏡要記ニ、對馬ヨリ始メテ白銀ヲ貢グ、因テ元ヲ大寶ト建ルトアレバ、白銀ナルベシ、文武紀ニ、對馬ノ黄金ヲ冶成セシムト記セシ後、彼國ノ黄金ノ事、國史ニ不レ見、三代實錄ニモ、彼ノ國ノ銀穴ノコトハ見エテ、黄金ノコトハ見エズ、貢銀記ニ、島中珍貨充溢シ、白銀◦鉛◦錫◦眞珠◦金漆ノ類ト見エレドモ、黄金ノコトハ見エズ、文武天皇元年三月、對馬貢金ト云フモ白銀、「又二年十二月令下對馬冶中金鑛上」ト云フモ、皆黄金ニハ無レ之白銀ナルベシ、扶桑略記第五云、「文武天皇五年三月廿一日、甲午、對馬島國始貢二白銀一、仍改爲二大寶元年一、對馬島出レ

白銀ニ部司等授ニ二階位一、幷賜ニ絁布鍬等一

右扶桑略記ハ、二十二卷ヨリ末ノミ世ニ殘リテ、一ヨリ二十一迄ハ欠卷セリ、然ルニ尾州ニ眞福寺ト云寺アリ、是ニ二・三・五・六ノ古卷アリ、先年江戸塙檢校ヨリ尾州ヘ相願、則右ノ殘卷寫サル、此略記ニ、白銀トアリ、今ノ續紀ハ、白ノ字ヲ落セルナリ、略記ノ白銀トアルハ、白金ヲ白銀ニ誤リシナリ、右ニテ白金ナル事決セリ、顯宗紀ニ、所謂銀錢ノコトハ、錢譜ニ云、疑ラクハ修レ史ノ者ニ後世之物價ニ追記耳、非ニ當時實銀錢ニ也、未レ知ニ是非一トモ云ヘリ、顯宗紀ニ、一遂令下金銀蕃國群僚遠近莫上レ不レ失ニ望一トアリテ、太古ヨリ、高麗・新羅ヲ本邦ヨリ金銀ノ國ト云フハ、是迄此國ニ金銀ナク、異國ヨリ貢ヲ以テ云ナリ、顯宗帝ノ時マデ、未ダ金銀本邦ニ不レ出ヤウ見ユ、然レバ異國ヨリ貢所ノ銀ヲ以テ錢ヲ鑄ラル歟、武烈紀ニモ誕受銀鄕トモアリテ、金銀高麗・新羅等ヨリ貢ヲ以テ、彼國ヲ金銀(ダカラ)ノ鄕ト云ヘルナルベシ、程歷テ異國ヨリ制煉ノ術對馬ヘ傳ハリ、天武帝ノ二年、本邦ニテ始メテ銀ヲ制セシナラン、持統紀ニ、百濟善信等ニ銀二十兩ヅヽ賜フトアルハ、本邦ノ銀ナルベシ、五瀨、白銀ヲ以テ黃金ナリト欺キテモ、黃白ハ小兒トテモ見誤ルベカラズ、高麗ハ隣國ユエ、其國ノ黃金ヲ以テ、對馬ヨリ出セリト欺キシニヤ知ルベカラズ、然ラズシテ黃金ヲ治成セシトテ褒賞セラレ、位祿ヲ賜フベキモノニハ非ズ、何レ疑ヒアリ、延喜式、諸國ヨリ貢スル年料雜物ノ中ニ、太宰府ヨリ銀八百九十兩、又交易雜物ニ銀三百兩等出ダセルハ、專ラ對馬ヨリ出ル銀ナルベシ、三代實錄曰、

貞觀七年八月十五日癸亥、太宰府言、對馬島銀穴有二下縣郡一、自二高山底一穿二鑿巖一、掘入四十許丈、白晝執レ炬而得レ入、頃年以來、處々崩塞、屢費二人功一而去、夏霖雨穴底水湛、計二其功力一非レ可レ堪、司、私輙穿開、望請准二延曆十五年例一、以二彼島例一擧、大豆遺二百斛幷租地子穀百斛一、且充二其料一令二掘開一許レ之」トアリ

對馬國貢銀記　江納言

對馬島者在二本朝之西極一屬二於太宰府一、孤二立海中一、四面絕壁、其名兼見二於隋唐史籍一、自二肥前國博多津一、西向飛レ帆一日、到二壹岐島一、自レ斯又到二對馬島一一日、自レ非二大風一不レ得レ渡矣、與二高麗一隔レ海非レ遠、金海府牧野之馬・掛帆之布分明、互見其近可レ推、彼國之無二窺窬心一、八幡大菩薩之威神也、欽明天皇之代、佛法始渡二吾土一、此島有下一比丘尼以二呉音一傳上之、因レ玆日域經論、皆用二此音一、故謂二之對馬音一、全無二田畝一、只耕二白田一、或置二諸租稅一、至二此島一以二大豆一爲二正稅一、島中珍貨充溢、白銀・鉛・錫・眞珠・金漆之類、長爲二朝貢一、其採レ銀之地、極爲二險難一、多年穿壙中漸深自レ口入レ底二三許里、日月之光、不レ得レ照レ之、三人連レ手以爲二一番一、一人秉レ燭以レ萩爲レ炬星許也、不レ銷久焉、一人持レ(イ捧)器、一人持二鐵鎚一取レ之、數輩雜入、常法三人、其後量二於斗斛一、置二之於高山四面受レ風之處一、以二松樹薪一燒レ之、數十日以レ水洗レ之、斛別定二其率法一、其灰爲二鉛錫一、滿二千二百兩一、以爲二年輸一、推二其單功一、不レ可二勝計一、若不レ造之時、雨水□壙三四百人連二座於壙中一、汲二水土壙一、猶如二行李一、三里之水漸々傳出、費二民力一盡二人功一、可二長大息一、其人夫所レ須年粮米

二千二百餘斛、支ニ分於管內、諸國度ニ轄海一、向ニ絕域一、漕レ之最重也、其來ニ於太宰府一、乾不ニ逗留一、殊撰ニ行李ヲ進ニ藏人所一、自レ島到レ府、用ニ海路一著ニ五十丈綱一、以備ニ入海一、自レ府到レ京用ニ陸路一運送之間、人不ニ敢近レ之、嗟呼鄙陽之□見ニ於漢家一、賢王聖主殊不レ爲レ用、愼ノ本禁レ、未以誡ニ遊手一、護粢之外記ニ無徭之民一、殆不レ異ニ沙石一之故也、然而千載之事、一旦難レ改而已

右朝野群載ニ出、作者江納言ハ大江維時ナリ、神明帳ニ云、對馬國下縣郡銀山ノ上ノ神社ハ、金山彥命ニテ、其始メテ銀ヲ出スノ地ニ就テ祭ルナリ

續日本後紀云、承和七年十一月癸酉朔庚辰、對馬島銀山神預ニ官社一

延喜式云、凡對馬銀者、任ニ聽百姓私採一、但馬國司不レ在ニ此例ニ一トアリ、然レバ既ニ此以前ヨリ但馬ヨリモ貢シヽ見ユ

日本紀ニ曰、持統天皇五年七月庚午朔壬申(三日)、伊豫國司、田中朝臣法麻呂等、獻ニ宇和郡御馬山、白銀三斤八兩鉎一籠一、御馬山ハ今宇和郡三間鄕ニ有テ大山ナリ、釜根二十二村ニ亙ル、三間山ト號ス、釋記ニ云、謂天工開物ニ、𨫼砂(マツスナ)・礁砂(カラカチ)トアリ、茲ニ鉎ハ未レ練白銀ヲ云歟

續日本紀曰、大寶三年五月己亥(九日)、令ニ紀伊國奈我・名草二郡一、停ニ布調一獻ニ絲、但阿提(アテ)・飯高(イヒタカ)・牟漏(ムロ)三郡獻レ銀、日本後紀曰、延曆十五年六月壬戌、木工允上道廣成授ニ外從五位下一、褒下採ニ備前國銀一之功上也、又續日本紀曰、大寶五年四月、禁ニ六位已下以ニ白銅及銀一飾ニ革帶上、又天平四年十月、節度使給ニ白銅印一、又

寶龜十一年出雲國言、白銅香爐海濱ニ漂着ノ由ミエタリ、又兵範記ニモ、仁安三年、大嘗會、悠紀目錄ニモ、銀器・金銅物・白銅物・風爐一具・油杯四口等數々アリ、此白銅ト云モノ、銀ニ似テ又一種アリトミユ、今云南鐐沙銀ノ類ナラン、銀ノ傍リニ並ビ用ユル故、銀ニ似ヨリシモノナルベシ

右寶龜以後白銅ノコト見エザレバ、委シク考ルコト能ハズ、是異國ヨリ渡來ノモノナルベシ、本邦金銀次第ニ出デ、之ヲ用ユルコト過度ス、仍テ續後紀ニモ、「承和元年二月癸巳、勅云、金銀薄泥用レ之、公私有レ費无レ益、宜ニ禁斷ニ之」、元明帝ノ時代ハ、銀銅ノミニテ、金ハ異國ヨリ貢ヲ以テ、高位ナラデハ傍ニ用ヒズ、則天武天皇十四年ニ、九十二ケ條ノ式ヲ定メラル丶由、日本紀ニ見エタリ、扨銀本邦ニ出ヅルコト前文ノ通リ對馬ヨリ出ヅルヲ始トシテ、其後伊豫。但馬・陸奥・伊豆・石見・攝津、及ビ追々盛ンニ出ヅ、肥後國ヨリモ出ケルカ、兵範記、仁安三年、悠紀・主基ノ牒狀ニ、「肥後國、進ニ唐錦銀七十兩」、又進ニ銀九十兩・紫檀・蘇芳ニ」、出雲ハ進レ鐵トアリ、當時專ラ石州ヨリ出ヅルヲ最上トス、此國何ツ頃ヨリ出初メケルヤ不レ知、殘太平記ニ云、弘安年中、大内介弘幸、鎌倉ニ恨ミ有テ謀反ヲ企テ、百濟國ヨリ軍兵ヲ招キ寄、其勢二十萬騎、大船數艘ニ取乘テ、石見國ニ着岸ス、執事北條相模守貞時、驚キ和ヲ乞ヒシカドモ調和ナシ、花園院叡聞ニ達シ、勅命ヲ以テ、國母太后(崇光院ノ國母、陽祿門院ヲ賜フ)ヲ弘幸ノ男子修理大夫弘世ニ賜ハリ婚合シ、玆ニ石見ノ國ヲ賜ヒテ和平シ、是ヨリ大内此國ヲ領ス、依レ之百濟ノ兵船ハ國ニ皈帆ス、此時大内ノ氏神北辰星ノ靈夢ニ、石州山吹ニ白銀多シ、是ヲ取テ此度渡海セシ百

濟ノ兵ニ與ヘテ、遙々來朝セシ報謝トスベシト託シ給フ、因レ茲、其白銀ヲ尋ヌルニ、數千貫ヲ漫出メリ、是ヲ取テ軍勢ニ褒美トシテ百濟ニ皈サル、是ヨリ銀山ト號ス、カヽル寶山ナレバ、隣國ヨリ是ヲ奪ヒ取ラント爭フ故ニ、此山吹ニ城ヲ建テ置キ守護スルコト不レ怠下略

但シ殘太平記、後人ノ作ニシテ、弘安ハ後宇多院年號ニテ、花園降誕以前ナリ、又陽祿門院、太后ニハアラズ、カヤウノ謬アリテ、引書ニモ用ヒ難シ、然レドモ石州ヨリ白銀ヲ出スト云ノ因ミニ記ス、

石州銀山舊記ハ追テ考ベシ

天正・慶長年ニ至リ、佐渡・石見ヨリ夥シク銀出シ事ハ、金ノ部ニ記ス、依レ之茲ニ略ス、凡銀ノ制、銷石ヨリシテ燒レ之取二熟銀一、生銀ハ則銀笋・銀牙ト稱シテ、此乃眞ノ南鐐ナリ、本草頌曰二、銀在二鑛中一、與レ銅相雜、土人采得以レ鉛再三煎鍊方成、故爲二熟銀一、生銀則生二銀鑛中一、狀如二硬錫一、其金坑中所レ得、乃在二土石中一、滲漏成レ條、若二絲髮狀一、土人謂二之老翁鬚一、極難レ得方書用二生銀一、必得レ此乃眞、」時珍曰、爲二眞銀一者新羅銀、波斯銀・林邑銀・雲南銀、是四種、其外水銀・々草・砂銀・丹陽銀・白錫銀、始メスベテ十三種皆以レ藥制成者、是假銀也ト云、其餘黃銀ト云ハ、金ト異ナルコトナシ、甚ダ希也、人君ノ金德ヲ秉テ生ル時ハ、則黃銀見ハルト云、槐記ニ黃銀ト云モノアリ、黃金ト云モノアリ、此ソカチヲハキト書タルモノハ無キニヤ、分チ難シト被レ仰趣ミエタリ、其差別可レ有歟未レ知、天工開物云、一凡石山硐中有二鑛砂一、其上現二磊然小石一、微帶二褐色一者分丫成、徑路採者穴上十丈或二十丈、工程不レ可二日月計一、尋二見土

內銀苗ヿ然後得ニ礁砂所在ヿ、凡礁石藏ニ深土ヿ、如ニ枝分派別ヿ、各人隨レ苗分レ徑横穵而尋レ之、上レ楷横レ板架レ頂、以防ニ崩壓ヿ、採工篝燈逐レ徑施レ钁、得レ鑛方止、凡土內銀苗或有ニ黃色碎石ヿ、或土隙石縫有ニ亂絲形狀ヿ、此卽去レ礦不レ遠矣、凡成レ銀者曰レ礁、至碎者曰レ砂、其面分ヿ若ニ枝形ヿ者曰レ鉚、其外包環石塊曰レ壙、壙石大者如レ斗、小者如レ拳、爲ニ棄置無用物ヿ、其礁砂形如ニ煤炭底襯石ヿ、而不ニ甚黑ヿ、其高下有ニ數等ヿ

銀鋌ノコト、國史ニ諸臣及蕃客ニ賜フニ、銀大五百兩、又ハ三百兩ナド出ル、是モ金ノ部ニ云ヘル如ク、其形ヲ知ラズ、棹金ト云フモノヽ如クニシテ、切リテ行ハレシニヤ、然レドモ奥ニ記ス所ノ切遺ヒノ類ハ、足利已來中世ノモノニテ、古代ノモノニ非ズ

東鑑ニ、文治元年、勝長壽院、供養ノ布施ニ、砂金二百兩・銀二百兩トアリ、其餘銀ノコトモマヽ出レドモ、先ヅ銀ハ少シ、南延ノコトハ多ク出タリ、右銀トアルハ、是モ棹金切遺ノ類ナランカ、何レ形ノコトハ不レ知、今ノ丁銀ト云コトモ、往古ハ不レ聞、コレモ足利中世ノ頃ヨリ行ハレケルカ、奥ニ記ス銀鋌、是其類ナルベシ、又黃白志ニ、小楪銀ト云闘出タリ、傳ヘ云、用明天皇御宇、豐後國眞野長者所レ造之銀、小判量目四匁三分、コレ日本銀一兩ノ始ナリト云ヘリ、然レドモ國史ニ見エズ、其實ナルコトヲ知ラズ、不レ詳モノ也

室町殿時代銀

量目四十三匁



右足利時代ノ丁銀ト云、尤モ足利末ノ代ノモノナルベシ、後藤家ハ金ノ部ニモ記ス如ク、祐乘ヨリ普光院殿ニ奉仕シテ、後五代目德乘ニ至リ、足利家斷絶ノ後、天正九年ヨリ秀吉公ニ召出サレ、右銀判後藤ト極印アリ、此時代ノ古書ニ、黄金・砂金ノコト多クアリテ、銀判ノコトハミエズ、天正十三年、

秀吉公金賦ノ時　銀三萬枚トアリテ、此銀如何ナル形ト云コトヲ知ラズ、尤モ金制作ノ事ハ秀吉命ゼラレシコト、後藤系圖ニアレドモ、銀ノコトハ踪トミエズ、神君命アリテ、大黒長左衛門常是ニ、座ヲ免許アリテ吹セラレシハ、慶長六年、是慶長銀ノ始ナリ、是ヨリ前丁銀ノ形チアレドモ、諸侯ノ國ニテ自分コレヲ作ラシム、世ニ揲リ葉銀ト云ヒテ數品アリ、則圖ハ後ニ出ス類ニシテ、モトヨリ銀吹所ノ定メナシ、依レ之常是ヲ以テ銀座ノ始トス、右ノ室町殿丁銀ハ未ダ銀座ナドモ無レ之、金銀トモニ後藤鑄レ之ト見エタリ、但シ駿府ニテハ後藤庄三郎ヘ、金銀トモ吹方仰付ラレ、駿府金銀判ヲ以テミルベシ、豐臣家譜金賦ニ、銀三萬枚トアルハ是ナルベキ歟、併シ三萬枚ト云數大員ナレバ、今ナホ多ク存スベキ所、無數ヲ以テミレバヤ丶疑アリトイヘドモ、數十萬貫ノ永樂錢サヘ、今其數少ケレバ、マシテ金銀ハ元祿以來度々吹直シアリテ、古金銀貯置コト御禁制ナレバ、追々吹直シニ出デ、古金銀ノ殘稀ナリ、故ニ右丁銀モ數ナシト見エタリ、量目四十三匁アレバ、金賦ノ時ノ銀ナルベキ歟、信長記、又將軍家譜ニ、諸將ニ賜フ金銀、是等如何ナル金銀ニヤト云ヘルモ、右室町殿時代ノ銀ナルベキヤ、上古ハ砂金・練金ヲ以テ世ニ行フトイヘドモ、皆官以上ノ取扱ヒニテ、士民ハ皆錢ヲ以テ米穀ヲ交易シ、其餘ノ貨物ハ皆ナ粟ヲ以テ交易ス、依レ之海內錢乏シトイヘドモ、萬物滯ルコトナク融通セリ、是等鎌倉時代ヨリ以前ノコトニシテ、其以來ハ鑄錢ノコトモコレナクシテ、次第ニ錢乏シク、足利義滿ノ世ニ至リテハ、異國ヘ諂ヒ錢ヲ求メシ程ノ事ニテ、至テ錢不自由ニアリシ故、無レ據官家モ、砂金・

練金ヲ以テ、錢ヲ下民ニ求メシニヨリ、黄金ノ類ヒモ下民ノ手ニ落タリ、是ヨリ又士民トモ是ヲ貴ムヤウニナリ、砂金ノ分散スルヲ厭ヒ、練金ニ鑄潰シ、是ヲ以テ入用ニシタガヒ、切リ遣ヒ用ヒシヨリ、又判金ノコト起リ、其以來下民金錢ヲ双ベ行ヒ、萬物交易スルヤウニナレリ、又銀ヲ以テ金錢ニ並ベ行フコトハ、凡弘安年頃以來ノ事トミユ、六國史初メ、玉海・兵範記・長秋記・東鑑・百練抄等ニ、砂金ト銀ヲ並ベ用ヒフルヽ事モアレドモ、至ツテ其事スクナク、又交易ノ用モ見エズ、士民銀ヲ用ヒザル謂ハ、黄金ハ貴キモノニテ、下民トイヘドモ見アヤマル事ナケレドモ、銀ハ前ニ記ス白銅、或ハ白鑞・鉛等ニ至ルマデ、銀ニ似ヨリシ品類多キ故、貴賤トモ疑惑スル事アルニヨリ、信用セザルナリ、其後銀ヲ貴ムヤウニナリシハ、弘安年、周防ノ大内弘幸時代驕奢ニ誇リ、石州ヨリ出ル所ノ白銀ヲ以テ領國ニ行フ、是ヨリシテ西國一圓ニ押ウツリ、京畿内マデ次第ニ貴ミ、金ト並ベ通用スルヤウニナレリト見ユ、今以畿内・西國筋、其餘風殘リ、諸物銀直段ナリ、右銀ヲ士民貴ムヤウニナリシハ、凡應永年ノ頃ヨリ盛ニナリシト見ユ、文明年ノ大内壁書ニ、金銀兩目ノ事ミエタリ、然レバ其頃モハヤ盛ンニ行ハレシナルベシ、多門院日記ニハ、文明・天文年ノ頃ハ見エザレドモ、元龜二年ノ條ニ

五月二日頃より尾州勢奈良へ打入、筒井順慶より種々曖、同七日既に數萬人悉く西の京へ着陣、依之種々奈良中難儀の趣にて曖不調、既に奈良へ打入迄の處、奈良中より銀子三百三十枚、寺より百枚東大寺より五十枚、禮にて曖調ひ、先以て安堵の趣き、五月九日尾州衆は大黑の尾より多門山の北を取廻

し、午の刻計に悉以て打歸りぞ、併神の助也大慶にと、云々

右等銀百枚・三百枚ト云數、奈良一郡ニシテモ大數ナリ、此銀形製無レ之、皆切リ遣ヒノ南鐐銀ニテ、只量目ノミ京都ノ大法アリテ用ヒシナルベシ、然レドモ前ニシルス足利時代ノ銀挺ナルヤ知ルベカラズ、今間々銀ノ大判ト云モノアレドモ、是ハ後世黃金判ニ倣ヒ、好主ノモノ、假作ト思ハル、前ニシルス足利時代ノ銀挺、形製極印至テ古雅ナルコト、實ニ疑フベキモノニアラズ、或官家ノ秘藏ノヨシ、則模寫墨搨ヲ乞得テ茲ニシルス、又因ニ云、文化十三四年ノ頃、京都上下町人共ト、町代ノ者共ト、公事騷論ノ事アリテ、文政二卯年、公訴落着アリテ諸事町役古格ノ仕法ニ改ル、尤數年是レ迄公用町代ノモノニ任セ、足利ノ世ヨリ、織田氏・豐臣太閤幷ニ當御世マデ、京都上下町人共へ被レ下置、御朱印幷ニ元和年マデノ古文書類、皆右町代ノ者へ預ケ置キシ分、不レ殘上ミ京・下モ京・聚樂三組、町人共へ引取、町々年預リニ相ナル、右古文書ノ中ニ

菊大黑の銀と、常是吹きの白かねと、善惡之へだてなき樣と被ニ仰付一候間、いよ〳〵へだてなく取やり仕べし、されども銀子惡しく候はゞ申上べし、しからずして、さりきらひを仕るべからざるもの也

五月十六日

右制令アリテ年號無レ之故、委シク分リ難シトイへドモ、常是ふきト有ヲ以テ見レバ、慶長六七年ノ古書ナルベシ、右菊トアルハ前ニ記ス菊桐ノ丁銀ナルベキ歟、大黑ノ丁銀ト云ハ、今慶長ノ古銀ニ、大

黒計リ極印アリテ、常是ノ極印ナクテ、慶長ヨリ銀色美ナルモノアリ、是等ナルベキ歟、今混ジテ分チナク、皆慶長ノ古銀ト云ヘリ、此大黒銀ハ常是ヨリ以前ノモノナルベキ歟、菊大黒トアルヲ以テ、二品ナルベキトノ臆見ナリ、然レバ慶長ノ常是大黒銀ハ古代ノ大黒銀ヲ模寫セラレシモノナラン歟、今菊大黒ノ銀辨識セズ、今菊ノ銀小判數品殘リアレドモ、常是吹ト双ベ同ヤウ取扱フヲ以テ見レバ、決シテ銀挺ナルベシ、猶後ノ考ヲマツ

三貨圖彙卷之十八　銀之部

草間直方輯錄

慶長銀ハ或書ニ云、往古ハ國々山々所々ニテ切遣ヒ相用ユ、慶長六年辛巳年、於二駿府一被二仰出一候ハ、國々金銀取扱位ノ高下有レ之、交易不自由ニ付、金銀座御取立、金銀ノ位一手ニ被二仰付一、菊一文字鍛冶・夷一文字鍛冶・大黑鍛冶右三品雛形、奉レ備二上覽一候處、大黑極印銀可レ然旨依二上意一則泉州堺住人大黑屋作右衛門常是、大黑鍛冶座吹手ニ相定、細工人ハ其時々雇、作右衛門ハ、座中列ニ相加リ、步方勘定役人ニ准ジ、慶長六年巳五月朔日、（按ニ此日迄ニ鑄終ル歟）巳ノ月、（十二月ニ通用始ル歟、）巳ノ日、巳ノ刻ヨリ、金子一兩ニ正金二匁替、正銀ハ十匁通用可レ仕樣被二仰付一、御請奉二申上一候

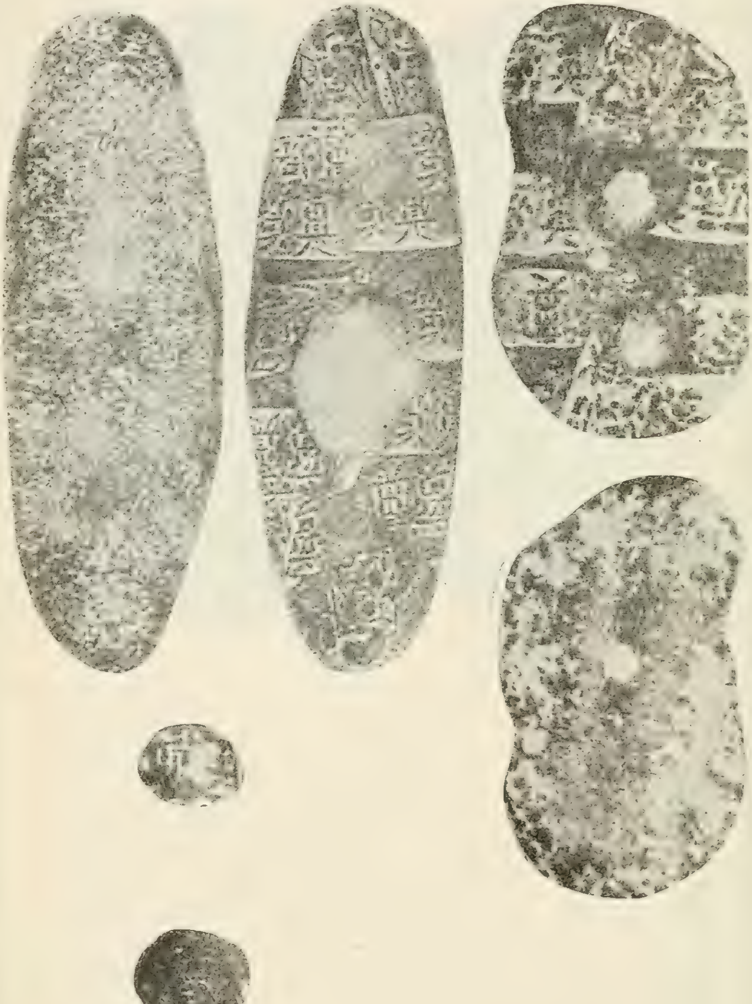
私云、此金子一兩ニ正金二匁替ト云コト解シ難シ、案ニ、此金一兩ト云ハ、今年鑄ラル五十二ノ位ノ慶長小判ニテ、量目四匁七分六厘ナリ、正金ト云ハ切遣ヒ、四十四ノ位ニテ、一兩量目四匁四分ナリ、此精金一兩ト、慶長小判一兩ト引替ル時ハ、慶長小判一兩ニ、精金量目二匁替ト云コトナラン歟、又正銀ハ十匁ト云モ、慶長銀ハ百目ニ銅二步サシナル故、切リ遣ヒノ精銀百目ニハ、慶長挺銀ハ百十匁ト云コトナラン歟、何レ解シ難シ、後ノ考ヲ竢ツ、此書年號無レ之、今兩替ニテト云コトア

レバ、格別古キモノニテハナシ、敎圓私記ノ趣モ同ケレバ、寛永年ノ頃ノ書ナラン、當否ハ不レ論、其儘茲ニ記ス

又云、大黑長左衛門ハ弟也、右ノ通國々御沙汰有レ之、慶長六年辛巳五月朔日、吹立鑄上一統通用相究ル、然レドモ諸國銀山ノ分、或ハ一郡山々灰吹銀ヲ出シ、其家々ノ極印ヲ打通用セル故、（私云泉州堺太子屋銀・金屋銀ノ類ナルベシ）他所ニテハ暫ク慶長不レ用、其後國々山々金銀錢賣買所ニテ、右慶長銀見ナレザル故ニ、又其家家ノ添極印ヲ打テ、交易有レ之、今兩替ニテ家々極印打モ此餘風ナリ、此事既ニ慶長年御不審有レ之候得共、家々ノ極印無レ之シテ疑ハシク存候テ、其極印ヲ以テ改メ民家皆納得致シ來候故、此儀御免願候處、御聞屆有レ之也トアリ、此慶長銀ヨリ以來、大黑屋常是ヲ以テ極印トス

按ニ、通用金銀ニ私ノ極印ヲ添ルコトハ、尤可レ恐愼コトナレドモ、古來ヨリ此儀ニ於テ制令ナク、今以テ家々ノ極印ヲ打添ルコトニナリヌ、古代ハカヤウノ事モ大樣ニテ、既ニ後藤制造ノ分銅ニモ、其持主ノ極印ヲ打添シナリ、然ルニ元文五年、始テ諸國通用ノ分銅改、此時ヨリ分銅ニ私ノ極印ヲ打添事ヲ免サズ、公儀ヨリノ御渡サレニ無レ之、後藤ヨリ定メシコト也、古代ハ分銅ニ後藤ノ極印ナクシテ通用セシコトモアリ、寛文年、極印無レ之分銅後藤家ヘ遣シ、極印ヲ打セ通用スベキ旨令セラル、猶權量ノ部ニ記ス

慶長銀 但シ銀百目ノ内、上南鐐八十目、銅二十目吹合スト云ヒ傳フ



慶長手本銀



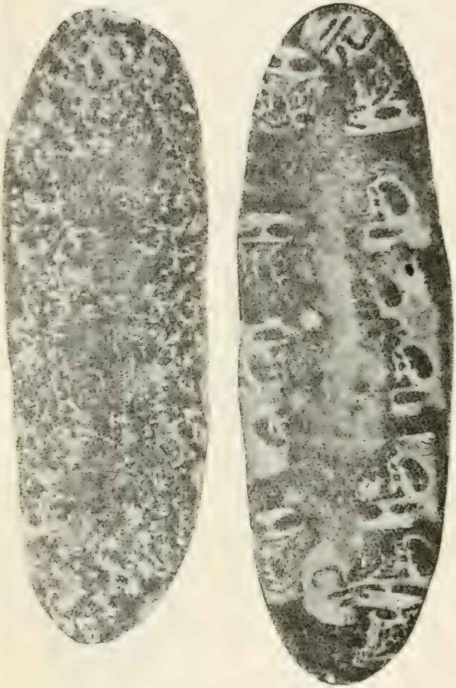
右ハ前ニ記ス、大黒鍛冶雛形、奉レ入二上覧一候、極印銀ナルベシ、（但シ金銀錢譜ニ、大黒クヽリ銹銀ト云テ、其半片ノ圖ヲ出セリ、圖錄ニハ、秀吉ノ製スル所ト云、然レドモ右寄持ノ色紙ニ、常是、慶長手本銀ト記シ有レ之故、其儘茲ニ出ス、秀吉公ノ製スルモノニヤ、其是非ハ知ラズ）右慶長銀、元祿年中迄世上通用有レ之候處、次第ニ減ジテ國用乏シク、依レ之元祿七甲戌年、百十四代東山院御宇、新ニ銀ヲ吹カセラル、尤銅・錫等ノ雜ヘモノ

有レ之、然レドモ南鐐位ヨロシ

但雜鑄ノコト、漢書ニ曰、「造銀・錫・白金、」（如淳曰、雜二鑄銀錫一爲二白金一）是異國ニテ雜鑄スルノ起リ、本邦ニテハ此元祿銀ヲ始トス、則萩原近江守殿工夫ト云、國家用度乏シキ時ハ今古無異、尤モ慶長ノ金銀ニモ、銀銅ノ雜鑄アリトイヘドモ、皆美色ニシテ元祿ノ金銀ニ類スルモノニアラズ、依テ雜鑄ハ元祿ニ始マルト云フ

元ノ字銀 但シ銀百目ノ内、上南鐐凡五十五匁ヨリ七匁、銅四十二三匁吹合ト云傳フ

裏石目、元祿七戌年九月鑄レ之





[illegible]寶永七年四月[illegible]

御觸

覺

一 金銀吹直に付、古金銀と[illegible]引替可申候、御料は御代官、私領は地頭方より申付、遠國に至る在方

金銀不殘候而引替可申候、古金銀之儀來辰三月迄は只今迄之通新金銀と一樣に用之、其以後は古金銀通用相止み、新金銀計を可用之間、可得其旨候、若し滯候有之者、金銀吹直し之場所迄可申出候、以上

元祿十一寅年五月九日

右古金銀ヲ新金銀ト引替候儀、元祿十一寅三月迄ヲ限リシ處、遠國ナドハ通路不自由ニテ引替相滯候ニ付、來ル卯三月迄ヲ限リ、其後ハ通リ可止通用旨、若シ又ハ滯有之バ、荻原近江守殿ヘ申出ヘキトノ事

御觸

覺

一　銀子之儀、向後元祿金子一兩に六十目替之積りに被仰、世間並之、金子一兩に銀六十目替之積りに可相心得候、乍去、兩替屋共掛引之利潤可有之候間、前々より來る迄、金一兩に五十八匁より高直に仕間敷候事

一　錢之儀ハ向後元祿金子一兩に四貫文替之積りに被仰、世間並之、金子一兩に錢四貫文替之積りに可相心得候、且又錢替屋共之利潤も可有之候間、前々より來辰十二月迄、金子一兩に三貫九百文より高直に仕間敷候事

辰十一月

一 金銀相場之儀、最前相觸候通、御藏元拂准レ之、小判一兩に付銀子六十目之積り、一統通用可レ致候事

附兩替屋共之儀、是又觸知せ候通、賣買利潤之爲、當年より來年十二月迄、小判一兩五十八匁より六十目迄之間にて相庭可ニ相立一候、五十八匁より內六十目より外に賣買致し候者有レ之候はゞ、可レ爲ニ越度一事

一 錢相庭之儀先に觸候通、金子一兩に四貫文之積り、一統可レ致ニ通用一事

附錢屋共ニ當年より十二月迄、小判一兩に付三貫九百文より四貫文迄之間にて相場可ニ相立一候、三貫九百文より外之賣買有レ之候はゞ、可レ爲ニ曲事一候事

一 京都は銀遣ひに致來候得共、向後江戸之通り、金銀同前に遣ひ可レ申候、然る上は六十目より五十八匁迄之內、其時之相庭を以て、金子代り銀子を相渡候共、平に異義に及び申間敷候事

附他國之者と通用候共、右可レ爲ニ同前一事

一 金通用之儀最前度々相觸候得共、先約之通取やり不レ致候之由相聞へ不屆に候、當地之者は不レ及レ申、縱令他國之者にても、右之趣銀を以て金相渡に、若し違背之者有レ之候はゞ、早々可ニ申來一候事

一 當年五畿內・近江・丹波・播磨、御藏入御物成三歩一銀納十歩一豆代共に、金一兩六十目替之積り、

金納成共銀納に成共、百姓勝手次第に相納候筈、御代官中御藏納めも、右之通被二仰付一候條、金銀取やり之儀、彌最前申觸候通り相守、無レ滯通用可レ仕候事

元祿十三辰年十二月

覺

一 金銀錢通用之儀、先達而御書付出候、就レ夫西國・中國・其外上方筋より、商買者銀通用にて、金を遣ひ候儀不自由之段相聞へ候に付、以後諸國一統に金銀無レ滯可レ致二通用一旨、國々へ被二仰出一候條、共旨可レ存事

一 金子銀子に替申度相望み候ても、銀子無レ之旨申立不二取替一候者有レ之様に相聞へ、不屆之至りに候、段々御觸れ有レ之事に候間、此上若し滯る譯於レ有レ之は、遂二詮議一急度御仕置可二申付一候、尤金一兩に付五十八匁より下直に取遣はし仕問敷候事

元祿十四巳年十二月十九日

覺

一 古金銀吹直し有レ之處、今以て所々に滯有レ之由に候間、彌以致二吟味一、古金銀は新金銀に引替候様、入レ念可二申付一候、年過ぎ候はゞ紛敷可レ有レ之候間、急度可レ被二申付一候、以上

元祿十五午年二月

右ノ後モ同樣引替ノ儀、度々被ニ仰出一、但シ御觸ノ寫ハ、金ノ部ニ出ス然レドモ元祿金銀ヲ賤ミ、慶長金銀ヲ貴重シ、市民貯藏シ自然ト慶長金銀世ニ拂底ニナリ、依レ之錢ノ賣買多ク、又元祿ノ新銀モ吹立無レ數故ヲ以テ、銀錢彌々世ニ拂底シ市民迷惑ス、茲ニオイテ前文ノ通、元祿十四巳年嚴令ヲ出サレケレドモ、兎角銀錢拂底ニテ、金銀倶ニ世間不融通ナリ、依テ毎々御觸ヲ出サル

御觸

一　五年以前被ニ仰渡一候金銀通用之儀、彌以相守り無ニ難澁一致ニ取引一候樣に、昨日御直に被ニ仰付一候、兩替屋・米問屋・仲買・諸問屋共へ、急度無レ滯樣に被ニ仰付一候事

右之通末々迄、急度入レ念可ニ申渡一事

寶永二年乙酉十月十二日

右ノ通被ニ仰出一候ヘ共、銀錢拂底ニテ融通滯候故、尙又古金銀ト新金銀ト取交通用候テモ不レ苦趣被ニ仰渡一、依レ之新金銀引替無レ數、世間モ新古金銀取交通用ス

御觸

一　金銀吹直し以來、今以世間に古金銀相殘り候間、古金銀不レ殘引替可レ申候、其内古金銀と新金銀相交遣ひ候ても不レ苦候之間、無レ滯請拂可レ仕候、以上

戌正月

金ノ部ニ記ス通、元祿十年ノ頃ヨリ世間銀拂底ニナリ、士民迷惑ノ趣、銀座ノ輩如レ是銀ノ拂底ヲ見コミ、利欲ヲ計リ上ヲ欺キ、銅錫ヲ加ヘ增鑄シ、寶永三丙戌年、又新銀ヲ鑄ル、但此事ハ寛文年ヨリ、座方ノ者兼テ巧ミシコトナレドモ、其頃ノ老職土屋殿一人不承知ニテ、事成就ナラズ、右土屋殿卒去後、時ヲ得テ元祿年ニ、元ノ字銀ヲ鑄ル、又之ヲ例トシ、其年又此銀ヲ鑄ル是ヲ寶永銀ト云フ、元祿年ニ銀ニ歩ノ入テ市民歸服セザルニ、又寶永銀出デ彌民服セズ、此以後鑄ル處ノ四ツ寶銀マデヲ土石ノ如ク賤シム、依レ之諸物ノ價彌增ニ高直ニナル、勿論依ニ 台命ニ鑄ル銀ナレドモ、座方ノモノ利欲ヨリ起リ上ヲ謀リ、而シテ己等驕者ニ耽リ、遂ニ身ヲ亡スニ至ル、後世愼マズンバ有ルベカラズ

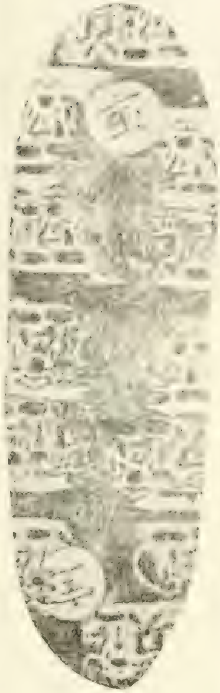
但シ常是極印ノ儀ハ、慶長年ヨリ大黒長左衛門ヘ御預ケノ極印ニテ、元祿以來年々御銀位惡シク相ナリ候故、御大切ノ極印打チ難レ申段相拒申候ニ付、 公儀向不首尾ニ相成、依テ常是極印ナシ、依レ之寶永ノ新銀四品トモ、闕九右衛門ヘ被ニ仰付ニ極印ス

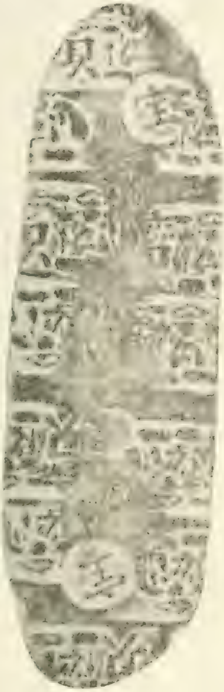
寶永銀 但シ銀百目ノ内、南鐐四十目、銅六十目吹合スト云フ

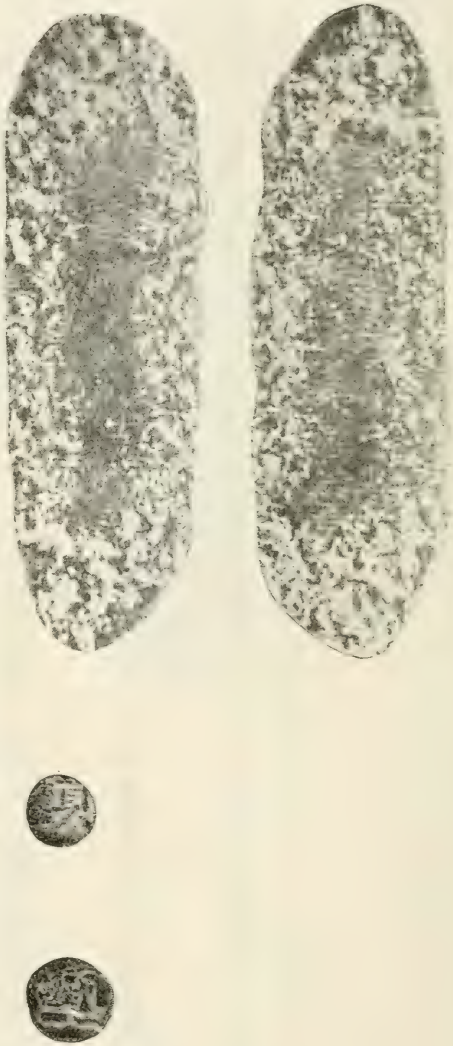
異名曰寶永三戌年六月鑄レ之

世俗寶ノ字銀ト云

舊記ニ云、寶永三戌年ヨリ同七寅年三月迄、吹高二千七萬八千百三十貫目餘ト云フ







御觸

一　近年銀拂底之由其聞へ有レ之、通用不自由に相見得候に付、銀吹直し被ニ仰付一候間、吹直し候銀段段世間へ可ニ相渡一候條、有來銀と新銀同事に相心得、不レ殘吹直し候迄は、古銀・新銀入交遣方受取渡兩替共無レ滯可レ致ニ通用一候、上納銀も可レ爲ニ同前一之事

一　新銀令ニ出來一、銀座より出レ之、世間之古銀と可ニ引替一候、其節銀之員數を増し可ニ相渡一候間、兩替屋其外何商賣にても勝手次第、役所へ持參引替可レ申候事

一　銀引替之儀町人手前より引替に成候間、武家方共外相對にて町人へ渡し引替可レ申候事

附古銀貯置不レ申、段々引替可レ申事

右之趣國々所々に至る迄、此旨可レ存者也

寶永三年戌六月十八日

一　爲二御軍役一常々に用所に遣ひ不レ申差置候古金銀は、只今迄新金銀に引替不レ申候て可レ有レ之候、今程世間金銀拂底に候間、御軍用之金銀も出レ之、引替候ての上御軍役金銀は、除置候樣に可レ被レ仕候、遠國にて海川を隔、引替之儀不自由之面々は、其段御勘定奉行へ達レ之、向寄之御代官所へ遣レ之、引替候樣に成共可レ被レ仕候事

一　金銀錢札遣ひ之處も有レ之候間、札遣無レ之所通用爲不レ宜候條、向後札遣ひ停止之事に候間、其所々へ申遣し、相達候日より五十日を限り、相止め可レ被レ申候事

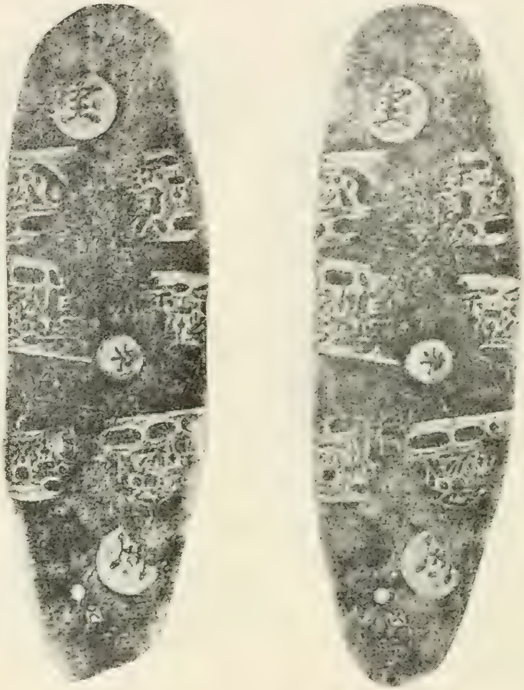
一　知行所百姓之手形にて、地頭へ金子を借り、物成の時節にて無レ之、收納之證文百姓方へ渡し候も有レ之樣に相聞へ候、向後右之類可レ爲二無用一候、且又百姓田畑等質物に書入させ、金子地頭へ借候儀彌可レ爲二停止一候、以上

寶永四年亥十月

右ノ銀出デ、其後寶永七庚寅年ニ、雜物ヲ加ヘテ增銀ヲ吹セラル、是ヲ永中銀ト云

永中銀 但銀百目ノ内、南鐐四十目・銅六十目 吹合スト云

裏石目、寶永七寅年四月鑄レ之、世ニ是ヲ中銀トモ云





舊記ニ云、寛永六巳年十二月ヨリ翌寅年三月四日迄、吹高五千八百三十六貫目餘ト云

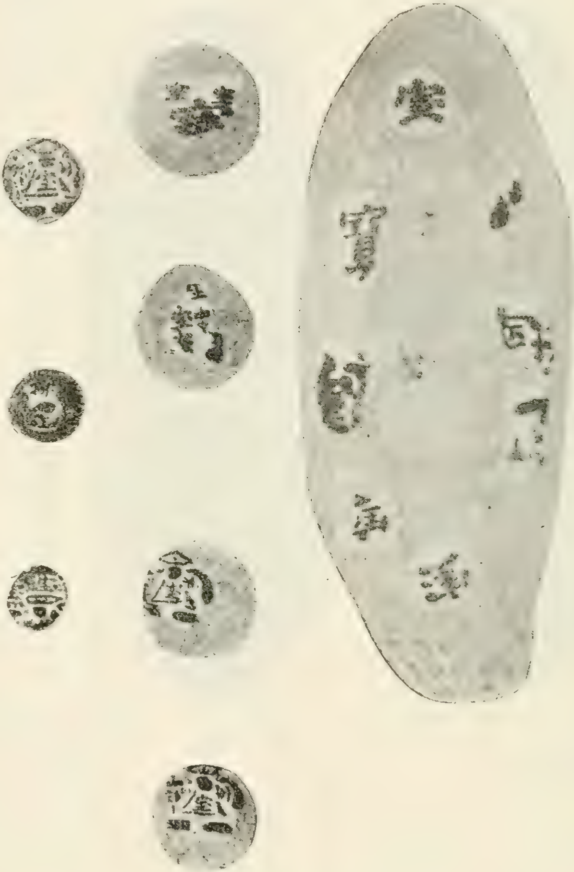
右同年ニ又々追吹被仰付、三ツノ寶極印アリ

三ツ寶銀

但シ銀百目ノ内、南鐐二十目・銅七十目吹合スト云

裏石目、寶永七寅年四月鑄レ之

舊記ニ云、今年ヨリ正德元卯年七月迄、吹高三十五萬三千八百七十貫目餘ト云

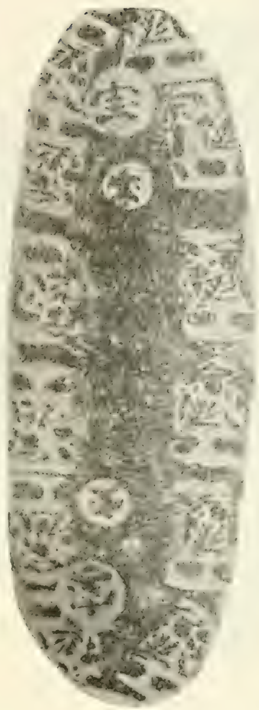


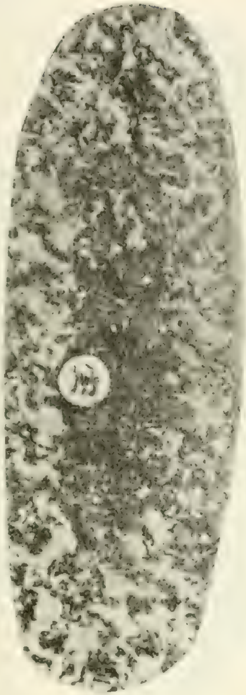
其後正德元年辛卯年、又々銅錫增倍シ鑄レ之、四ツノ寶極印アリ、是ヲ四ツ寶銀ト云

四ツ寶銀但シ銀百目ノ内、南鐐二十目・銅八十目吹合ストト云

裏石目、正德元卯年八月鑄レ之

舊記ニ云、今年ヨリ翌辰年九月迄、吹高四十萬千二百四貫目餘トバフ







以上、寳永三年ヨリ正德元年迄四度增鑄有レ之、悉ク位アシク、右寳永銀四品トモニ寳ノ極印ト大黒計リナリ、是ハ前ニモ云如ク、關久右衛門ト云者ヘ命アリテ吹セラル、依レ之常是ノ極印ナシ、右四品共位アシキニヨリテ、金錢ノ位貴ク銀ヲ賤ム、既ニ慶長銀幷元祿銀迄ハ、凡一匁ニ錢六十文前後ヲ常トセシニ、寳永銀出テヨリ凡一匁ニ錢四十文計リニ相成、是全ク銀ノ位惡キニ因テナリ、依レ之銀直段ノ物ハ至テ高直ニ相成、慶長銀ハ凡ソ六十目ニ慶長金一兩ナリ、寳永銀ハ凡八十四五匁ニ元祿金一兩也、尤寳永・正德年ハ諸國不熟ニテ、米穀乏シク價高直ナリ、正德四年五六月ノ頃、米一石價六十目、九月ニ至リ白米一石代二百廿目ヨリ卅目、十一月新穀百八十目位、金一兩八十五六匁ヨリ九十二三匁位ナリ、但シ慶長金ト新金トノ直違、此節二匁位ナリ、錢一貫文廿四匁三分ヨリ五匁位ナリ、サレバ京都・大阪初メ西國筋ハ、前々ヨリ銀ヲ以テ直段ヲ極ムル故ニ、諸色甚高直ニ相ナリ、民大ニ痛ム、東國ハ金ト錢トヲ以テ交易ノ場所ナレバ、夫程ニナシト云傳フ、然レドモ銀ヲ皆々取交遣フ故、多品ニシテ甚紛シ、凡通用左ノ通

慶長銀一貫目ニ
　元祿銀一貫二百五十目
　寳永銀一貫六百目
　永中三ツ寳二貫目、同四ツ寳右同斷

元祿銀一貫目ニ
　慶長銀八百目

寶永銀一貫二百八十目

永中三ツ寶一貫六百目、同四ツ寶右同斷

寶永銀一貫目ニ

慶長銀六百二十五匁

元祿銀永中三ツ寶四ツ寶銀一貫三百目ヅヽ

永中三ツ寶銀幷四ツ寶銀一貫目ニ

慶長銀五百目

元祿銀六百二十五匁

寶永銀八百目

右元祿以來ノ新銀段々麁卑ニナリ、士民是ヲ賤シム、座方ノ輩ハ是ヲ恥トモ思ハズ、上ヲ恐レズ利欲ヲ構ヘ、其德分ヲ以テ日夜婬樂シ、珍寶ヲ積重、（但シ茶器始メ、結構ナル器物ノ類ヲ後世銀座道具ト稱スルハ、此時所持セシモノナリ）驕リ超過セシカバ、先ヅ其罪ヲ糺明セラレ、且新銀（三ツ寶 四ツ寶）吹止メ被㆓仰付㆒

御觸

一 新銀吹替の事被㆓相止㆒候間、自今以後は古銀・元祿銀・寶永以後の銀、何れも取交候間、通用無ㇾ滯可㆓仕候、若兩替相庭の事、或は高きに過ぎ、又は安きに過ぎ候而、通用差支候樣に仕者有ㇾ之に於ては、急度御沙汰可ㇾ有ㇾ之者也

正德二年辰九月

右ノ通新銀四ッ寳吹出シ禁ゼラレ、尙又被₂仰出₁候御書附、御遺言ノ趣、前文略ㇾ之

一 近年金銀惡敷罷成、士・農・工・商、困窮仕候由被₂　聞召₁、御詮議被ㇾ遂候半處、御他界被ㇾ遊候は
不ㇾ得ㇾ止事候、是非諸人爲₂御救₁之
權現様より、通用之通之古金銀に被₂仰付₁候間、其旨可₂相心得₁御書付被ㇾ遊₂御取置₁候間、左様相心
得可ㇾ申事

一 諸家中、町・在に至る迄、國主・城主慈悲を專に仕、加₂憐愍₁可ㇾ申候、以上

辰十月十四日

右秋元但馬守殿被₂仰渡₁、且ッ前文之通リ銀座ノ者ドモ御糺明被₂仰付₁、依ㇾ之諸國ヨリ私ニ持出ル灰吹
銀幷潰銀座方へ持參セズ、脇賣イタシ候ニ付、御觸ヲ出サレ脇賣不ㇾ致、以來ハ三都トモ町奉行所へ持
參致シ、差圖可ㇾ受趣被₂仰渡₁候

御觸

一 諸國より持來候灰吹銀、只今迄銀座へ買上、丁銀吹立世上通用銀に成候、然る處當九月より銀吹
替相止候故歟、諸國より持參候灰吹銀、相對にて致₂脇賣₁候之由相聞候、向後灰吹銀持來次第、只今
迄買取候、下買の者共より當分は江戸・京・大阪奉行所へ訴可ㇾ請₂差圖₁、若無ㇾ訴脇賣致者有ㇾ之候はゞ、
後日に相聞へ候とも、詮議可ㇾ有ㇾ之もの也

十一月

右之趣三鄕町中可ニ觸知一もの也

正德二壬辰年十二月

右ノ後正德四午年、銀座御取立ノ節ヨリ、古例ノ如ク諸國ヨリ持登ル灰吹潰銀悉ク座方ヘ賣渡ス御觸、奥ニ出ス

一　正德三巳年三月五日、御殿中にて　御意之趣、能き銀を吹出し候ても、今迄之銀通用可レ致やと御尋有レ之候、其儀は能き銀出來候はゞ、能き者高直にて惡敷者下直に、相庭兩用に立申候はゞ、成程無レ滯通用可レ仕候、若し直段御極め御出被レ遊候はゞ、却て通用難レ成樣に奉レ存候と、老職之衆被ニ申上一候得者、先々歸り心入を書付候て差上候樣御意御座候

右等恐多クモ御仁慈ノ御厚配、後年推テ知ルベシ、前文ノ通此頃金銀多品ニ付、吹替等モ可レ有レ之哉ト、貴賤甚ダ喧シ、依テ同年十月十一日御書付ヲ以テ、武家市中ヘ被ニ仰渡一御書付ノ文ハ金ノ部ニ出ス

右寶永年四品ノ銀、悉ク位アシク麁卑ニシテ、民不レ服皆卑レ之、至ク世上金銀拂底ノ時節故、銀座ノ者己ノ利欲ニ事ヲ巧ミ、上ヲ謀リ座方ノ極印アリテ、天下通用ノ制令アラバ、銅ニテモ土石ニテモ其品ニヨラズ、通用妨ナシ、既ニ異朝ニテ寶鈔トテ、紙ヲ以テ金銀ニカヘ、本邦ニモ今諸國ニ銀札ヲ用

ユ、便利ニ於テハ何レ妨ナシト、辯舌利口ニ己等ガ利欲ヨリ、種々上ヲ謀リ、銅ヲ多分交ヘ雜鑄ス、是ヨリ日々座方ノ者驕奢ニ耽リ、金銀ノ珍寶ヲ貯ヘ、晝夜婬樂シ奢侈增長ス、遂ニ達上聞、正德四年年嚴科ニ處セラル、此ノ一件記スハ恐レアレドモ、世人懲惡ノタメ不顧恐記ス

正德見聞錄（作者知レズ）ニ云、正德四甲午年四月十七日、世間通用銀、去ル元祿甲戌年・寶永丙戌年吹改之、既二箇度、每度銀品下鄙卑焉、是雖擧世間之銀數、爲使世人快通用、銀座輩以銀品下麁卑得便利、爲貪己之用、違背定限、加過多銅些少銀、繕其異色、以作銀色、打極印、而爲通用銀、（世人稱三寶・四寶而賦之）出世間、自是世人大疾銀之價、而貴米穀及諸物之價、追年至貴賤上下之難儀、是以前御代憐民人之困苦、以世上金銀爲成返往古法、停止吹出彼卑銀、將糺明之御沙汰、及不幸御事、雖然以直法憐民之御遺旨、今度有御沙汰、而彌被遂糺明、以自銀座所出世上之銀、吹分銀與銅之合交、視其多少、僅不足十分之一、於是私欲大罪忽顯其罪無遁、今日於評定所召出銀座（但銀吹出町民）常是（但銀包所）輩、任罪之輕重、被處嚴科、其品々

追放	（銀座）中村内藏助	遠島（豆州大島）	（銀座）深江庄左衞門
遠島（豆州大島）	（同）中村四良右衞門	遠島	（同）細谷太良左衞門
遠島	（同）關善左衞門	追放	關久右衞門

右ノ通、正德四年五月十三日、於御評定大目附・町奉行・勘定奉行・其外御掛リ列座ニテ、銀座年寄共

へ被二仰渡一、家屋舗・家財・掛ヶ屋舗ニ至ル迄、不レ殘欠所被二仰付一

覺

一 銀座之者共、寶永七年以後、荻原近江守一人之計に任せ、位下品なる銀共、吹出候而已ならず、就レ中内藏介事其分限を不レ顧、過奢の次第、其犯罪不レ可レ遁、依而其家財令二欠所一追二放之一、被レ行二重科一者也

後之銀座年寄共へ、被二仰渡一書付

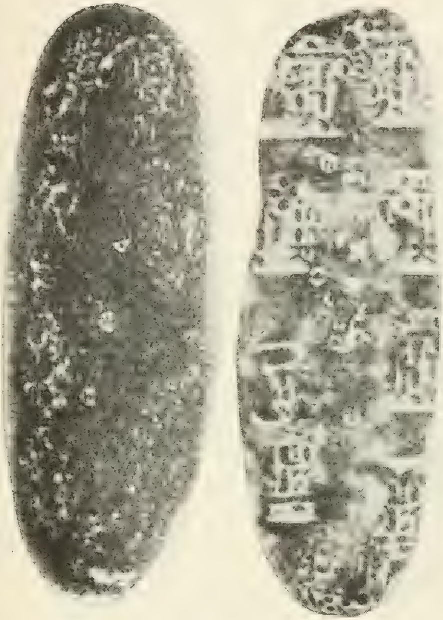
一 銀之事は世に依レ爲二重寶一、從二 公儀一被二仰付一候事有レ之時は、古來は老中又は御留主居、近例に於ては御勘定奉行連判の證文を以て申付候御例に候、然る處に寶永七年以來、荻原近江守幷銀座御用掛り御勘定組頭等、内々の證文にまかせ、其度に銀之位を改め候事、不法之至に候を以て、銀座之輩悉く其罪科雖二可レ被レ糺事に候一、今に於ては近江守死後に至りて、其旨を受る輩の事に付、難レ被レ遂二御糺明一、位下りの銀吹出候事、近江守に申勸め候輩等被レ行二罪科一、其餘は不レ被レ及二御沙汰一候、自今以後如レ此之事有レ之に於ては、急度可レ被レ行二嚴科一候、且又近江守證文三通之事は、從二公儀一被二仰付一候旨に無レ之上は、破り可レ被レ捨事に候得共、銀座に於て近江守一人之取計にまかせ、銀吹出候事之永々迄之證狀に可レ被レ成者に候を以て、三通共銀座之輩へ預け置候者也

午五月十三日

其後百十五代中御門院御宇、金銀位ノ惡シキヲ改メ玉ヒ、正德四甲午年、命アリテ慶長銀ノ通ニ良銀ヲ鑄サセラル、慶長銀ハ手本ニ相成、右新銀ニ交ヘ遣フ、此新銀ヨリ又常是ニ被ニ仰付ニ以後ハ代々常是ノ極印アリ

新銀 正德銀トモ云、今ノ古銀ナリ 但百目ノ内 上南鐐八十目 銅二十目吹合

裏石目、正德四年鑄レ之



舊記ニ云、今年八月ヨリ享保六巳年壬七月廿日迄、江戸・京ニテ、吹高二十二萬三千貫五百七十目ト云、此後享保十九年迄、鑄ル員數不レ知



右新銀ハ江戸淺草諏訪町ニテ、大黒長左衛門鑄レ之、京都ハ兩替町銀座ニテ鑄ル、此吹替ニ付御掛役、江戸ヨリ御勘定水野因幡守殿・同組頭丸毛五良兵衛殿始メ十一人、御小人目付八人上京セラル

一今度吹替被二仰付一候金銀引替所、三條通境町西へ入、谷長右衛門方にて、十一月三日より引替之條、有來候金銀引替候者、右場所へ金持參、先達被二仰出一候通割合を以御引替之旨、洛中・洛外へ觸知候者也

大阪出店今橋二丁目　谷　長右衛門

右新銀出來ニ付、不レ殘御引替ノ處、未吹立成就不二出來一故、當分古銀取交通用有レ之、元祿七年以後ノ金銀ハ、右之通取交ヘ通用ノ内連々ニ引替、慶長金銀ハ此新金銀ト同ジ位故、引替ニ不レ及永々通用被二仰出一、尙委シキハ御觸ニ有レ之

覺

一 慶長年中、被二定置一候金銀法、至二元祿年中一初て其品を被レ改、寶永之始め再度銀之品を被レ改候より以來、諸物の價ひ年々高直に成來り、世之及二難儀一候に依て、前御代御治世の始より金銀の品如二慶長之法一成し可レ被レ返之由、雖二御本意候一、近世以來諸國山々より出來り候金銀之數如二古來一に無レ之を以て、容易に其不レ被レ及二御沙汰に一候處に、就レ中元祿の金は折れ損じ候に付て、其通用難儀に候由を被レ及二聞召一、先づ其御沙汰有レ之候、其後に至て寶永之銀も其通用難澁し候事達二御聞一、其故を尋被レ究候に及び、世上通行し候處之銀、次第に其品不レ宜もの共出來り候事相知れ、早速に銀吹出し候事を被レ爲二停止一、其事之由來を御糺明之上、可レ有二御沙汰一御旨に候處、旣に 御不例日々に重らせられ候に付、去々年辰十一月十一日、以二御書付一思召之程を被二仰出一候、之に依て當御代に至り候より以來、世之人之申沙汰し候事共尋被レ極、各々僉議の上を以て、金銀之品如二慶長之法一之に成し可レ被レ返事に議定せられ候、通用之法引替之定等之事は審かに別紙に相見へ候如くに候、今度於レ此御沙汰は 前御代之御旨に被レ寄、天下後代迄之爲を以之御事に候上は、貴賤・貧富を不レ撰御定之旨を相守、其功之可

レ終處を宜しく可レ有二覺悟一事に候、若し一身之利潤を計り候爲に、何事に依らず其通用爲二相滯一候事共仕出し候に於ては、前御代之御旨を當御代之御沙汰を違犯候のみにあらず、天下後代迄之可レ爲二罪人一者に候得者、急度其罪を被レ糺候て、可レ被レ行二嚴科一候事に候、是又其旨可二相心得一候者也

正德四年甲午五月十五日

一　今度被二仰付一候金銀之品、慶長年中に御定之如くに被二成返一候事は、去々年十一月十一日　前御代被二仰出一候、被レ寄二御旨に一、天下後代迄の爲に御沙汰候上は、　公儀御費用之事等は不レ足レ論候、雖レ然近世以來、諸國山々より出來候處之金銀如レ昔に無レ之候を以、元祿以來之金銀等、悉く皆改り候迄は多くの年月を經べき事に候、これを以て其功終候迄之間、金銀通用之法を被レ定候、條々

一　今度被二仰付一候、新金銀幷に慶長以來元祿七年迄之古金銀は云に不レ及、元祿・寶永の金銀、皆々通用すべし、但し元祿・寶永年之金銀之事、　公儀之御定に於ては、慶長之法之如くに、金一兩を以て銀六十目に被二相當一候と雖も、內々に於ては步金・步銀等を加へ候て、通用仕來候事は、其品々之高下不レ同故に候、然る上は是より後も元祿以來品々之金銀を以て、慶長之法之金銀と、其品を同敷通用之事は不レ可レ有候、是に依て慶長以來、只今通用之金銀に至る迄、各其品々之高下に依て、割合之次第を被レ定、何れの金銀にても有合候に隨ひ候て、皆々通用し候法を被レ定候、其割合之次第は、別紙に相見へ候事

一　何事によらず、物之價を定め候事は、只今通用候金積り銀積りを以て、其直段を立て候て、其金銀之事は有合候に從ひ、何れの金銀にても割合之定めを以、新古之撰なく可ㇾ爲㆓通用㆒事

附貸し金借金之事、是亦此例に可ㇾ準事

一　御料所御年貢之金銀納を初め、總て上納之金銀等是又只今通用候金積り銀積りを以て勘定し、其金銀之事は有合に隨ひ、何れにても割合之定を以て可ㇾ爲㆓通用㆒、公儀御用之代金・代銀として被ㇾ下候處も、割合之定を以、何れの金銀にても可ㇾ被ㇾ用候、世上に於ては上下通用之法、皆々此例に可ㇾ准事

一　大判之事は、元祿年中に被ㇾ改候處も、慶長之大判に引比べ候に、其品大に劣り候にも非ず、折れ損じ候事も無候によりて、寶永七年、只今通用之金を被㆓仰付㆒候時も、此御沙汰には不ㇾ被ㇾ及、今度に於ても小判・壹歩判等相改り候以後に可ㇾ有㆓御沙汰㆒候、其間は公儀より被ㇾ下候處も、獻上之處も其外私に用ひ候處も、皆々只今迄用ひ來り候大判を以、可ㇾ有㆓通用㆒事

一　公儀へ獻上之銀、被ㇾ下候銀之事、是又只今通用之銀積りを用ひ、其銀之事は只今迄用ひ來り候銀にても、又は割合之定を以て、今度被㆓仰付㆒候新銀を用ひ候共、新古の撰なく可ㇾ有㆓通用㆒、一枚・二枚の馬代等に至りても是に可ㇾ准事

一　今度被㆓仰付㆒候新金銀を以て、元祿以來品々之金銀に引替候事は、年を經べき事に候によりて、諸國・在々・所々の手寄次第、連々に引替候爲めに、江戸・京・大阪三ヶ所に於て引替所を被㆓定置㆒引替候

者と相對し、割合の定の如く、其事之無レ煩可ニ引替一候由を被ニ相定一候事

附若し就ニ用事一、今度之新金銀を以て、只今迄通用之金銀に引替度もの候に於ては、是又割合之定を以、其望次第に引替候樣に被ニ相定一候事

一今度被ニ仰付一候金銀之事は、慶長年中より元祿七年迄之間通用し候古金銀と其品相同じく候上は、元祿七年以前之古金銀は不レ及ニ引替一、今度之新金銀と相交へ候て、永く通用可レ有事

右の條々今度被ニ仰付一候金銀、世に普く流布し候迄之間は、公私・貴賤共に宜しく可レ有ニ通用一者也

正德四年甲午五月十五日

新古金銀割合之次第

一慶長之古金は、只今通用之金に十割增、右慶長之古金（世上ニコレヲ往古金ト稱ス）一兩には只今通用之（私ニ云乾金也）金二兩を用ゆべし、今度被ニ仰付一候新金は則此古金と其品同じく候故、其割增も是に同じ（但シ金割合ノ事ハ金ノ部ニ出ス）

附只今通用之金と、元祿之金とは其品に高下有りと雖も、其形大小有るを以て、此二品は其差別なく一樣に用ゆべし、但只今通用之金と、元祿金とを引替候例、元祿金百兩に付て歩金として、只今通用の金二兩二歩宛增し加へ來り候處に、若し其法を被ニ改候はゞ、元祿金を所持し候者之爲めに不レ可レ然候によりて、自今以後も於ニ引替所一、此二品の金を引替には歩金之法は只今迄の如き例なるべき由を被レ定候

但し私に云、年暦を經るにしたがひ、古文書の類も分かり難きに付、愚意を以て註す、只今通用の金と云ふは、乾金にて量目二匁五分、小形金と稱す、位は慶長金に同じ、元祿金は量目四匁八分にて、形ち大いなれども位七十二にして下品なり、乾金の制令に元祿・慶長の金と大小の構ひなく、取交通用すべき趣なり、銀と兩替のことは、此乾金一兩代、慶長金なれば、一兩の相庭に十匁相增し、又乾金と元祿金の通用大小の構ひなく、一兩は一兩に用ふべしとのことなれども、位の高下は外にしても大小の違ひある故、乾金と元祿金引替は百兩に付二兩二歩づゝ乾金の方より出して通用せり、これは被二仰付一にても無レ之、天然と兩替の者より法を立てし故、右割合の制令にも、此法を改められず、其頃諸品物賣買は元祿金にては何兩、乾金にては何兩と、相場も市中にては兩樣にたてしなり、その不便利推して知るべし、玆を以て考に後世自然金銀新鑄の事ありとも、金銀に品類多く相成ることは不レ可レ然と思ふ、下情は卑しきもの故何となく其品を分ち、通用を妨ぐるものなり、左やうの時は俗諺の如く、多勢に無勢制し難きものなり、何つ迄も今の文金銀二幣の吹き增しの方可ならん、新製異形は眞僞疑惑ありて、海內邊鄙迄信仰せずして通用澁滯す、西國筋は銀通用の場所なれども、南鐐二朱・四文錢今以て歸服せず、たとへ金銀位今より劣るともやはり、今の二幣の形製を以て吹增しあらん方善政ならん、然る時は別段、觸流しにも不レ及、下民の疑惑少からんと或老人の云へり

一　慶長の古銀は、只今通用の銀に十割增し、右慶長の古銀 世上ニコレチ往古銀ト稱ス 一貫目には只今通用の銀、私ニ云、是ナ永中三ッ寶・四ッ寶銀ト云 二貫目を用ゆべし、今度被二仰付一候新銀は、則此古銀と其品同じく、其割增も又是に同じ

附り只今通用之銀、凡寶永七年以來出來候處之品、世上に於て永中、三ッ寶・四ッ寶と稱す、其差別なく一樣に用ゆべし

一　元祿之銀は、只今通用之銀に六割增、右元祿銀 世上ニ是ナ元ノ字銀ト稱ス 壹貫目には、只今通用之銀一貫六百目用ゆべし

附り只今通用之銀凡寶永七年以來、出來候處之品に 世上ニ是ナ永中銀・三ッ寶・四ッ寶銀ト稱ス 其差別なく一樣に用ふべし

一　寶永之銀は、只今通用之銀に三割增、右寶永始之銀 世上ニ是ナ寶ノ字銀ト稱ス 一貫目には、只今通用之銀一貫三百目を用ゆべし

此割合次第は別書之定書に相見へ候如くに、今度被二仰付一候新金銀、世に普く流布し候迄之間は、新古銀を撰ばず、皆々爲レ可レ有二通用一被レ定所に候、就レ中只今通用之銀の事は、慶長の古銀に引競候に、其品大に不レ同候得者、其品に准じ候而割合を被レ定候はゞ、公儀御費用にも不レ及して、慶長御定之品之如く、可レ被二成返一事に候得共、世之爲めに於ては可レ有二其損失一事に候を以て、纔に十割增之法に被レ定て、其不足之處に於ては公儀御費用を以被レ償候處にて候、是則前御代之御旨に被レ寄、天下後代

迄之爲に御沙汰有レ之事に候條、宜其旨を相心得候而此定を可ニ相守一者也

正德四年甲午五月十五日

諸國商人兩替仕候輩に可ニ申渡一事

一 元祿・寶永以來、金銀之品改り候度々に、其通用相滯、遂には世之難儀に至り候事、兩替仕候商人等、猥りに金銀の品を高下し、過分之利倍を求め候より事起り候之由に候、今度金銀之品皆々慶長之古法之如くに、雖下被ニ成返一候上元祿以來之金銀悉く皆相改候迄は、其年數久しかるべきに依りて、其間金銀通用割增之法を被レ定候、凡そ金銀錢等之兩替を以て家業と仕候上は、其時に准じ候て相當之相庭は有べき事勿論に候、若し是より後に至りて、兩替之上に付て世之金銀通用之事相妨げ候事仕出し候者於レ有レ之は、其者をば急度被レ行ニ嚴科一、其由を以訴出候者に於ては、彼罪科之者之家財を以て宜褒美之可レ有ニ御沙汰一者也

午五月十五日

覺

一 今度吹替被ニ仰付一候新金銀、今三日より谷長右衛門出店、今橋二丁目に於て（私ニ云今橋中橋筋西へ入南側）引替候間、可レ被レ存ニ其旨一候、以上（但引替所享保六年巳九月、谷長右衛門不幸ニ付引替相止ミ、同十一月ヨリ高麗橋東於ニ銀座一引替相初マリ候、十月十日）

午十一月三日

右新金銀、正德四年十一月三日ヨリ引替相始ル、尤モ前ニモ記ス如ク、新金銀吹立成就迄ノ間、當分新古撰ナク、士民トモ通用無レ滯可レ致趣尙又相觸ラル

一　金銀引替之儀、先達而茂御觸書を以て被ニ仰渡一候通り、新古之無ニ差別一或爲替等にいたし、元祿金・小形金は江戸へも差下し候樣に可レ致、尙又諸商人共は不レ及レ申、御大名衆藏屋敷米代、其外爲替にも新古の撰みなく、米屋兩替屋抔の類も、右同意に心得違無レ之樣に可ニ申渡一旨被ニ仰出一候事

正德四年午十一月廿九日

右之通被ニ仰渡一、世間通用割合ノ法被ニ仰出一候へドモ、金銀多品ニシテ、士民融通方甚紛ハシク不便利ナリ、通用割合

慶長銀一貫目ニ　永中・三ツ寶・四ツ寶銀ハ各二貫目ヅヽ

新銀一貫目ニ　右同斷

元祿銀一貫目ニ　永中・三ツ寶・四ツ寶銀ハ各一貫六百目ヅヽ

寶ノ字銀一貫目ニ　永中・三ツ寶・四ツ寶銀ハ各一貫三百目ヅヽ

慶新兩銀一貫目ニ　元祿銀一貫二百五十目

同　一貫目ニ　寶ノ字銀一貫五百卅八匁四分四厘

右元祿ヨリ寶永ノ銀ニ至ル迄、總テ小玉銀ハ數少ク、因レ玆金一兩以下小分ノ代物等銀ニシテノ諸拂ハ

不便利ニテ、夫故多分ハ錢ヲ以テ通行ス、依テ錢相庭高直ノミナラズ、小玉打金銀ノ切賃マデモ高直ニシテ、三都市中初メトシテ諸國迷惑ス、因テ今度改鑄ノ新銀、別シテ小玉銀數ヲ吹セラル、御觸左之通

一元祿以前は、於二江戸表一小玉銀有レ之候處、近年に至り小玉銀其數無レ數候故に其代として、專ら錢を以て通用候によりて、錢之相庭は云に不レ及、小判切賃等之儀も、年々に高直に相成、諸人之難儀に及候、依レ之今度之新銀は、別に小玉之數を增し、細に雖下被二仰出一候上、今に至りて新銀・小玉之通用、古來之如くにも無レ之由相聞へ候、自今以後は金一兩に餘り候半、銀、又は乾之字金、一步之代或は町屋敷等之地代、借家賃或は諸職人手間料・飯米料諸商買物少分之代銀等、專らに小玉銀を相用ひ候樣に仕り、金高に及び候事は、小玉にても金銀にても無二相違一相交へ候樣に、町中大小諸商人、相互に急度此旨を相心得可レ申事

正德五年未四月廿二日

右之通被二仰出一、且潰シ銀ノ類、國初ヨリ御掟有レ之、銀座ヨリ外へ賣渡シ候コトハ嚴シク御法度ノ所、先年銀座不埒ノ筋有レ之、座方當分御改易ニ付、潰シ銀等ノ捌ケ方ハ、無レ據三都御奉行所へ申達シ差圖ヲ受ケ、取捌キ等致シ來リ候處、此度銀座御取立ニテ、新銀吹方仰付ラルヽニヨリテ、已來右潰銀等ニ至ル迄、座方へ賣渡可レ申旨被二仰出一候、則御觸書左ニ

覺

一　御料所銀山之外、諸國より出候灰吹銀、其外、銀道具・潰銀之類、古來より銀座之者共買取申す事に候處、去々年以來銀座にて銀吹不㆑申候に付、灰吹幷潰し銀之類所持之者は、江戶・京・大阪奉行所へ達し得㆓差圖㆒銀座へ相渡候筈に候、然る處此度銀座にて銀吹候間、向後は灰吹銀・潰し銀之類所持候者、奉行所へ訴に及ばず、前之通銀座へ賣渡し可㆑申事

一　今度金銀吹替に付、江戶・京・大阪引替所にて、元祿以來之金銀引替候に付、灰吹銀之儀、右引替所にても相對を以て買取筈に候間、是又其勝手次第賣渡可㆑申候、古來より銀座之外へは灰吹銀之類は、一切買入不㆑申事に候得共、銀吹替御用中は、引替所にても買取候間、可㆑存㆓其旨㆒候事

右之趣相心得、其外猥りに商賣堅不㆑可㆑仕もの也

正德四年午九月

覺

一　去頃新金銀通用之法被㆓仰出㆒候時、數通之被㆑出㆓御書付㆒、就㆑中諸國商人兩替を業とし候輩には、別ての御書付有㆑之候處に、商人等猥りに新金之品を評論し、兩替之增步を望み、剩へ於㆓武家㆒新金を不㆑被㆑用故に、世之通行相滯候由申出し候事等其風聞候、急度被㆑遂㆓御穿鑿㆒其御沙汰雖㆑可㆑有事候、當時御法事相續㆓付、赦免之御沙汰も就㆑有㆑之、暫不㆑被㆑及㆓其事㆒候、此後に至ても最初御書付之次第違背仕候輩

於レ有レ之者、被レ正二其罪一、重犯之科に可レ被レ行事に候間、或は法に背き兩替之增步を出させ、或は無レ故諸物之直段を高くし候等之事は云に不レ及、何事によらず金銀通行を相妨げ候者之事申出候者は、宜御褒美之事可レ有候、若差當る處之難儀によりて、新金銀之增步を出し、又は違法之事を存候て不二申出一者は、後日に至りて於二相顯一は、其罪科も犯人に同じかるべきもの也

午十一月

覺

一 新金銀追日世上に流布し通用候、其中東國筋は金通用之事に候處、新金未だ諸國在々に不二行渡一、其上只今迄遣ひ馴れ候故に、多分は小形を以て通用之由に候、去年被二仰出一候新金銀之通用之次第は、萬事に就て少しも損德無レ之爲めの御沙汰に候得ば、御觸書之旨を相守り、新古金之撰びなく可二相用一事に候處、小形金計り之通用に片寄候事は、遠國之者共其子細を不二相心得一候故と相見へ候之間、村々之名主組頭等は云に不レ及、大小之百姓共又は諸商賣人此旨を相心得候て、元祿金幷に有合次第、新金銀に引替候て通用可レ仕之事

一 此度江戶町中にて、諸國・在々商賣物等請込み候問屋共へ、町奉行所より被二相觸一、元祿以來之金銀は、集り次第に引替所へ差出し、新金に引替候樣に仕、荷主共方へは新金銀通用之次第、少しも損失無レ之候子細を相達し、商賣代物は第一に新金銀を可二相渡一由被二申渡一候間、諸國・在々大小之百姓共、

幷に諸商賣人等、其旨を可二相心得一候事

一　諸國在々に於て、諸商賣物代又は小判切賃等を初め、何事に依らず新古金銀割增御定之外に、纔にても新金銀にての直段を差加る輩、又は元祿金・小形金を貯置不二引替一者候に於ては、後日に相聞へ候とも、當人之事は云に不レ及、名主・組頭迄も曲事之可レ有二御沙汰一事に候間、一村限りに大小之百姓諸商賣人迄能々可二相心得一事

正德五年未五月

一　新金銀追日通行し候に就て、只今に至ては世上に相殘處之元祿金、其數を減じ候、依レ之元祿金通用之事は、來々年丁酉十二月を限とし、其明年戊戌正月よりは世上之通用、一切に可レ爲二停止一事

一　元祿金通用停止之後に至ても、或は遠國末々之輩、未替盡に不レ及候も有レ之候はゞ、於二引替所一新金に引替候事は、可レ爲二制外一、雖レ然旣に通用停止之上は、引替之步金を加へ候事は不レ可レ有事

一　小形之金通用之限も、此後無レ程御沙汰可レ有レ之候間、元祿金は云に不レ及、小形金引替候事も可レ有二其心得一事

右此度御沙汰有レ之候、元祿以來之銀之事も此旨に準じ引替通用し、最初被二仰出一候御書付之趣に無二違犯一、新金銀・慶長金銀通用聊も難澁之事不レ可レ有也

正德五年乙未十二月

其後享保三戊戌年閏十月御觸有レ之、新金銀引替ノ定有レ之、則御觸之寫左ニ

新金銀を以當戌十一月より通用可レ仕覺

一　金銀吹直し被ニ仰付一候處、段々出來に因て、最前相觸候通り、來る亥年を限り、乾字金通用停止に候、依レ之向後諸色相對を以て直段相極め候事は格別、獻上或は被レ下金、又は給銀借金拂殘金等、都て前々より定來り候員數にて通用候儀、左の通被ニ仰出一候事

附り乾字金にて、何兩と申し取遣に候得共、當戌十一月より、新金にて何兩と申し取遣可レ仕候、尤も乾字金通用有レ之內は、新金之代りに乾字金引替之法を以て、遣ひ候儀勝手次第之事

一　金は正味の有り目に被ニ吹直一、足し金に不レ及候故、右之如く出來候得共、銀は正味不足多有レ之に依て、灰吹銀にて足し銀被ニ仰付一候之處、近年山々より出候銀之出方にては、二十ヶ年餘にても、成就計り難く候、依レ之金之通向後銀之有目にて吹直し被ニ仰付一候、員數に從ひ通用候儀是亦左の通被ニ仰出一候事

附通用銀にて何枚・何貫目と申す取遣に候得共、當戌十一月より新銀にて何枚・何貫目と申す取遣に可レ仕候、新銀之代りに通用銀引替之法を以て取遣ひ候儀は勝手次第之事

一　乾字金引替は、當戌年より來る寅年迄、五ヶ年に限るべし、元祿金引替は來亥年に可レ限事

新金銀引替之法

一　乾字金・元祿金と新金に引替候儀、只今迄之通り相違無レ之私ニ云、元祿金・乾金ノ二品ハ、慶長金トモ、百兩ニ五十兩ヅヽナリ、割合ノ事ハ金ノ部ニ出ス

慶長古銀幷新銀　十貫目ニ付

元祿銀は二割半增

則十二貫五百目を以て代レ之

但元祿銀は正味の割合無ニ相違一故、只今迄之割合也

寶永銀は六割增

則十六貫目を以て代レ之

中銀は十割增

則二十貫を以て代レ之

三ツ寶は十五割增

則二十五貫目を以て代レ之

四ツ寶は三十割增

則四十貫目を以て代レ之

右之割合を以て、當戌十一月より、來寅年迄五ヶ年限、急度可ニ引替一事

一　年貢幷小物成・諸運上之類員數を定め、元祿九子年以前より納來候金銀は、新金銀にても只今迄之

員數可二相納一子年より納め來り候分は、新金銀にては可レ爲二半減一、但子年より納來候品にても、古來之格を以納候分は、新金銀にても員數無二差別一可二相納一事

一 元祿九子年より以來、請負にて直段相極め候類、此以後も右員數を可レ用分は、當時の直段積りを以て、極め直し可レ申事

一 年貢幷小物成・諸運上・諸色共に、元祿九子年より當戌年閏十月迄、其時々之直段積りを以て相極め候品々、納殘又は諸色代物拂殘之類は、乾字金百兩之處は、新金五十兩、通用銀十貫目の處は新銀二貫五百目可レ遣事

一 獻上幷被レ下金銀、古來よりの格式有レ之に付、新金銀にても差別無レ之、世上祝儀取かはし、或は禮物等遣候儀可レ准レ之事

一 借金銀は元祿九子年以前借用之返濟殘りは、新金銀にても其員數可レ返レ之、子年以來之借用は金百兩之處へ新金五十兩、銀十貫目之處へ新銀二貫五百目可二相返一事

一 給金銀は元祿九子年前後共に無二差別一、新金銀にても只今迄通り員數たるべし、然れども相對を以て召抱へ候渡り奉公人之類は、近來之給金銀員數を不レ可レ用、相對次第たるべき事

附元祿九子年以來、金銀位惡しく成り、段々子細を以て別段に金銀遣候類は、元高新金銀にて遣ひ候上は、增金銀は相止め可レ申事

一　合力等入用之積りを以相極め候類は、元祿九子年以前相極め候分は、新金銀にても可㆑爲㆓其員數㆒、九子年以來相極候品は、可㆑爲㆓半減㆒事

右の通堅く可㆓相守㆒、此外之儀は書面の趣に可㆑准㆑之、且又割合改り候は、寶永以來之銀計り之事に候得者、新金銀錢兩替、或は賣買之直段等に付紛敷手だて仕るに於ては、御詮議之上、急度可㆑令㆓嚴科㆒者也

享保三戌年閏三月

右ノ通金銀割合遣ヒ被㆓仰出㆒候得共、公儀進獻ノ類ハ、新金銀ニテ無㆑之テハ相濟ミ不㆑申趣、諸家方モ心得ラレ、迷惑ノ趣相聞ヘ候ニ付、尚又左ノ通被㆓仰出㆒

一　此度新金銀通用之儀に付、御觸出し有㆑之處、心得違にて獻上物・被㆑下物之類に、新金銀用㆑之、通用金銀之儀は、不用之儀も可㆑有㆑之哉、不㆑及㆑申事に候得共、新古金銀共有合次第、取交候て成り共、御觸書之通り可㆑致㆓通用㆒筈に候、勿論御金藏納拂世上通用とも、右有合次第御定之割合を以て取遣可㆑致事

享保三戌年十一月二十一日

右ノ後猶又被㆓仰出㆒候書附、左に

一　獻上銀・御年貢銀・小物成銀・諸運上銀・拜借銀・公儀より御拂物の品代銀

右は新銀未だ出來揃ひ不レ申拂底に付、右品々之納之儀金銀取交候共、又は金計りにて成とも、追て相違し候迄の内は勝手次第之事、勿論世上之相庭に不レ構、新金一兩に新銀六十目之積りを以て、可レ被ニ相納ニ事

享保三戌年十二月五日

右戌ノ十一月ヨリ、來ル寅年迄五ケ年ヲ限リ仰出サルヽ依レ之諸事相庭十一月朔日ヨリ改メ初ルヽ右割合、則左之通

新銀一貫目ニ付

四ツ寳銀ハ	四貫目
三ツ寳銀ハ	二貫五百目
永中銀ハ	二貫目
寳永銀ハ	一貫六百目
元祿銀ハ	一貫二百五十目
慶長銀ハ	一貫目

右ノ割合ヲ以テ通用有レ之、又古銀一貫目ニ當ル時ハヽ算ヲ以テ右ノ割ヲ目安ニ置キヽ左ニ一貫目ト置キ是ヲ割ルヽ則左之通

慶長銀一貫目ニ　新銀一貫目
寶永銀一貫目ニ　同六百二十五匁
永中銀一貫目ニ　同五百目
三ツ寶銀一貫目ニ　同四百目
四ツ寶銀一貫目ニ　同二百五十目
元祿銀一貫目ニ　同八百目

右ノ通引替、此割合ヲ以テ通用・取引幷引替有レ之、此位見ヤウハ物價ノ部ニ載ス、但シ右割合增歩御定出ルヨリ、市中彼是喧シ、十一月朔日ニハ米相庭・金錢相庭相止ムト云、通用銀（永中・三ツ寶・四ツ寶銀ナリ）相庭ニテ金一兩（慶長金、又ハ元祿金ナリ）七十七八匁、錢一貫文ニ付三十五匁位、慶長銀又ハ新銀ニテ、金一兩ノ相庭四十四五匁位ナリ、夫ヨリ段々上リ五十四五匁、錢ハ慶新銀ニテ八匁五六分ヨリ十匁前後、尤十月中旬ヨリ、又金銀吹替ノ沙汰有トテ、相庭殊ノ外高下アリ、四十九匁八九分ヨリ、一日ノ間ニ六十目ニナル、錢二十三匁六七分ナリ、無レ程右ノ御觸出一時ニ上リ、十月晦日頃ヨリ、前文ノ通金相庭銀相庭ニナルト云、如レ是世上甚ダ騷々シク、其上金多品ニシテ紛ハシク不便利ナリ、其後元祿以來寶永ノ銀口々追追引替可レ申旨、度々御觸有レ之候則寫左ニ

覺

一 元祿銀・寶永銀・中銀・三ツ寶銀・四ツ寶銀通用之事は、來る丑年を限り、翌寅年より世上通用一切可レ爲二停止一候、右五品之銀、新銀と引替之儀は最前申渡候通、彌來る寅年を限り可レ申事

享保五年子三月

一 乾字金通用之儀、去々亥年限にて去子年以來は一切通用無レ之筈に候處、今以通用筋も有レ之由相聞候、遠國末々之者心得違候故、右之通りに候歟、此上堅く通用不レ仕、急度引替可レ申候、尤引替之儀も、來る寅年限之事に候條、是又其旨を存無二油斷一引替可レ申事

一 元祿銀・寶永銀・中銀・三ツ寶銀・四ツ寶銀之事も、彌々最前被二仰出一候通り、來寅年限引替可レ申候、卯年よりは一切通用停止之儀に候條、是以遠國末々迄其旨相心得、來寅極月限り急度引替可レ申事

右之通江戸・京・大阪其外所々、町場は其所々之奉行、國々・在々共、御領は御代官私領は領主・地頭より念を入可二申付一候、如レ斯之上書面之趣違犯之事於レ有レ之は、可レ爲二曲事一者也

享保六年丑四月

右五品ノ銀、割遣ヒ通用ノ儀、來ル享保七寅年極月限通用相止メ、夫迄ニ引替可レ申（此趣ハ寅七月ニモ御觸有、依テ文略ス）

又右五品ノ內、四ツ寶ハ至テ位下品故、新銀ト引替ノ儀、市中ニテハ殊ニ迷惑ニ存ジ、御定メ四貫目ノ割合ノ外ニ歩銀ヲ出シ、私ニ引替申趣、依レ之制旨ヲ加ヘラル

一 當地にて新銀と、四ツ寶銀との取交之節、新銀之方へ歩銀を取り候樣に相聞へ候、彌左樣に候へ

ば、其引替之障りにも成候間、御定之割合を以て致㆓取遣㆒、歩銀は堅く取間敷候、自然歩銀取り候者於㆑有㆑之は可㆓訴出㆒、吟味之上急度曲事可㆓申付㆒候、此旨三鄉町中可㆓相觸㆒者也

享保六丑年九月

右新銀追々鑄ラル丶ニ付、古銀（元祿銀・寶永銀・永中銀・三ツ寶銀・四ツ寶銀也）連々ニ引替仰付ラル、慶長ノ古銀ハ新銀ト同品故引替ニ不㆑及、手本銀ト相成リ、慶新兩銀無㆓甲乙㆒取交ヘ通行ス、最モ新銀ニ慶長銀ハ一歩サシ也、新銀一貫ニ慶長銀百目差加ヘ、銀ハ百目包也、尤モ包ノ裏ニ、何屋何某包、何屋誰ヘ直渡シト相記ス、右包銀廻リ次第、五軒目ヨリ包主ヘ包ミ替ニ行ク、是通用ノ定也、右慶長ノ良銀トイヘドモ、年數ヲ經テ又極印磨滅シ、又ハ火ニ入新銀ト双ベテハ、甲乙ナキニアラズ、依㆑之良銀トイヘドモ又撰嫌ヒ通用滯ルニ付、通用銀（永中・三ツ寶・四ツ寶）倶ニ不㆑滯ヤウ、享保十二未年制令アリ

前文之通、銀多品ニシテ、今ヲ以見レバ甚ダ紛ハシク不便理ナルコトナルベシ、推テ知ルベシ、其時ノ交易相庭、金銀割合通用ノ事、武家方ハ勿論、市民トイヘドモ今其委シキコトヲ知ル者ハ希ナリ、元文元辰年、今ノ文銀ニ改鑄アリテ、金銀一樣ニ相成リ公私共ニ便ナル善政ノ世ニ遭ヒテ、彌々先ノ不便利ナル事實知ル者ナク、又巨細ニ明ラメ知ル者有テモ、無用不益ニ云ヒナス者有テ、今上下便ナル善政ノ國恩ヲ忘ルニ至ル、甚ダ嘆ズベキコト也、故ニ正德・享保年ノ金銀交易ノ十分一ヲ記ス、尙其委シキハ物價ノ部ニ記シ、其大概ヲ茲ニ載ス、倶ニ並セ見ルベシ、正德四年ニ鑄ラル丶新銀ハ、至ク

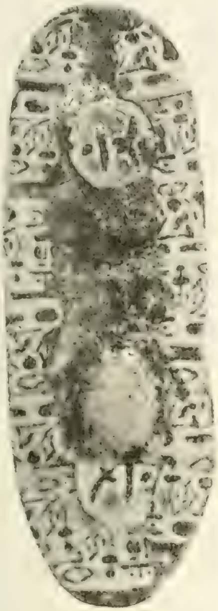
慶長ノ古銀ト、甲乙無レ之皆良銀ナリ、然レドモ慶長銀ハ年數ヲ經テ、自然ト極印磨滅シ、或ハ良銀トイヘドモ、火ニ入リ極印磨滅セシ類多ク、依レ之銀多品ノ上ニ、良銀サヘ美惡ヲ撰嫌ヒ、又ハ其爭ヒアリ、金小判（慶長新金元祿乾金）モ多ク、是レ又割合通用有レ之テ、其不便利知ルベシ、寶永三戌年ヨリ、四品ノ銀增鑄アリテ金銀取遣、代銀右四品ノ内（永中・三ツ寶・四ツ寶）ヲ以テ、其頃通用銀ト稱シ、諸物賣買有レ之、然レドモ右通用銀ハ位アシク市民服セズ、正德ニ新銀出テヨリ、此新銀ト慶長銀ヲ以テ、又諸物交易ス、依テ新古銀相庭兩道ニ成リ彌紛ラハシ、不レ辨レ之シテ今ヨリ其時ノ交易相庭ヲ考ヘテハ、古銀（慶長新銀）通用銀（永中・三ツ寶・四ツ寶）何レノ銀ナルヤ不分明ニテ、齟齬スルコト多シ、之ヲ考フベシ、右通用銀市民服セズシテ之ヲ嫌フニヨリ、自然ト通用銀融通滯リ、市民迷惑ニ及ブ、於レ玆享保七寅年、五品ノ（永中・元祿・寶永・三ツ寶・四ツ寶）銀、皆々通用停止セラル、依レ之右五品ノ銀、逓々引替ルトイヘドモ、前々ヨリ關西ノ國々ハ、皆銀ヲ以テ諸物交易ス、然ルニ新銀ノ出來方無レ數、九州・四國・西國筋迄、右新銀行屆キ流布スルコト不レ輙、之ニ依テ享保十九寅年迄ニ、右五品ノ銀悉ク皆新銀トノ引替不ニ出來一、又交易差支ユルコト共有レ之、引替延引ト云フコトナク、大概文銀鑄ラルヽ頃マデ、前文ノ割合遣ヒ有シ也

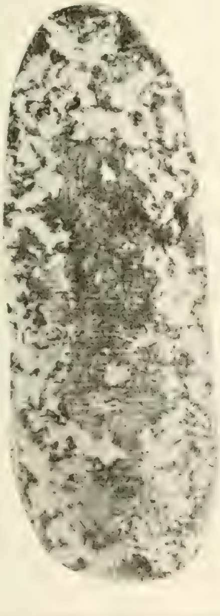
三貨圖彙卷之十九

草間直方輯錄

一　櫻町院御宇、享保二十一年、改元アリテ元文丙辰年、今年又金銀改鑄アリ（事ハ金ノ部ニ記ス）今ノ文銀是也、此時悉ク古金銀ヲ停止セラルベキ所、吹立成就セザル故、當分ハ慶新兩銀ト、文字銀割合通用被ㇾ仰付、尤慶長新銀（正德銀也）ノ外、元祿以下、四ツ寳銀ハ是迄新銀（正德）ト多分引替ヘ殘銀無ㇾ之、自然殘リ有ㇾ之分ハ、奧ニ記ス割合ヲ以テ、其座方ニテ文銀ト引替有ㇾ之、此度ノ文字銀・新金銀（正德製）ヨリ位劣リ、依テ市民又喧シ

文ノ字銀







一　元文元辰年六月、此度吹替ニ付、新金銀國々ニテ見覺候タメ、少シヅヽ最寄々々ヘ差遣ハサル、依レ之於二江戸一御爲替仲間ヘ被二仰付一、大阪表ヘモ十八兩替ノ者ヘ到着ス

新吹文金三十三兩　　此代古金二十兩

同文銀三貫六百目　　同古銀二貫四百目

右代三井次良右衞門ヘ相渡ス、右文金銀六月十五日ヨリ於二江戸一引替被二仰付一候、大阪表右ノ新金銀相廻リ候迄ハ、市民諸物賣買仕カネ候ユヱ、公邊ヘモ相達シ、暫ク金銀相庭相止ム、其後追々金銀相廻リ、大阪九月二十三日ヨリ引替初リ、之ニ依テ辰十月廿一日ヨリ、新文金銀ヲ以テ相庭立會始ル

慶長金百兩ニ　　今吹文金百六十五兩

同銀一貫目ニ　　同銀一貫五百目

新金百兩ニ　　同金百六十五兩

同銀一貫目ニ　　同銀一貫五百目

右通用御定メハ、慶長幷新金共百兩ニ今吹百兩也、銀モ慶長幷新銀共一貫目ニ今吹一貫目ナリ、引替ハ右ノ通リ、百兩ニ六十五兩ノ增歩ナリ、但シ乾金ハ二百兩ニ今吹百兩ナリ、銀ハ一貫目ニ五百目ノ增歩ナリ、然レドモ文金銀ハ吹立少ク、當分世上難儀ユヱ、割合ニテ古金銀通用有レ之、則チ前ニ出ス引替ノ割合通ナリ、タトヘバ古銀二貫四百目ノ所ヘハ、文銀三貫六百目相渡ス、コレ五百目增銀ノ割、

古金二十兩ノ所ヘハ文金三十三兩相渡ス、コレ六十五兩增金ノ割、銀十貫目モ金百兩モ右ノ割合ヲ以テ取交通用有レ之、兩替仲間ハ右古銀聚次第段々引替候也、國々モ右ノ通リニテコレモ役所ヘ聚次第手寄ヨリ座方ヘ引替ヘニ遣ス、然レドモ兎角古金銀殘リ有レ之、取交通用滯リ候ニ付御觸有レ之、右吹替ニ付御觸國々奥ニ記ス

吹替ニ付御掛リ

松平左近將監殿
本多　伊豫守殿
大岡　越前守殿
細田　丹後守殿

吹替に付御觸

一　世上金銀不足に付、通用不自由之由相聞候に付、今度金銀新吹被ニ仰付一候事

一　此度吹改め候金銀相渡候儀、慶長金・新金は百兩之代り百兩、慶長銀・新銀は十貫目之代り拾貫目引替可ニ相渡一候之間、右引替格を以て書面之金銀無ニ差別一取交、請取方・渡方兩替屋共無レ滯通用可レ致候、尤上納金銀共、可レ爲ニ同前一候事

一　吹改候金銀金座・銀座より增步差出し可ニ引替一候、且員數之儀は、引替金百兩に付、增步金六十五

兩づゝ、引替銀十貫目に付、增歩銀五貫目づゝ可ニ相渡一候之事

一　引替金銀、町人より引替候筈に候條、武家其外共勝手次第、町人へ相對にて申付可ニ引替一事

一　引替可ニ指出一金銀之儀、員數相知れ候事に候間、貯置不レ申段々引替可レ申候、若し貯置不ニ引替一者相知れ候はゞ、吟味之上急度可ニ申付一候事

　附り右引替に不レ出金銀は、只今迄之通り潰し金の積りに可ニ相心得一候事

右之條々、國々所々へ此旨可ニ觸知一もの也

　元文元辰年五月十六日

覺

一　金銀吹替に付取交之儀、慶長金・新金一兩之處、文字金にても一兩、乾金は二兩に付文字金一兩、慶長銀・新銀十貫目之所へ文字銀十貫目取遣之積り、先達御觸有レ之候、當十五日より引替も初り候に付、米幷に諸色直段、文金銀之積りを以て、直段上げ相庭可ニ相立一候、然る處文字金銀所持不レ申候に付可レ致ニ難儀一候、依レ之暫く二三ヶ月の內、割合にて取遣可レ致候

一　借金掛り・賣掛け・合力米・給金・年貢・小物成等は先達而御觸之通、割合は不ニ相成一候

於ニ江戶一右の通り候間、當地にても書面の通相心得、諸色直段文字金銀之積りを以て、直段上げ相庭相立、暫割合を以て取遣可レ致候、以上

辰六月十九日

右ノ趣ニテ、諸家借財幷士民賣掛等、皆々古銀十貫匁ノ處ヘハ、文字銀十貫目ニテ、證文手形等、新古銀高ノ損益差別無レ之相濟ミ候ナリ、然ルニ諸家ノ内加州御借財ノ儀ハ、此例ニカハリ古銀慶長銀、幷新銀ニテ當家ヘ借入候儀現然タリ、然レバ古銀ニテ返濟スベキコト當理ナリ、加賀殿借財セズンバ、眼前古銀ニテ十貫目ハ十五貫目ト成リ、金百兩ハ文金ニテ百六十五兩トナリ、銀主ノ德分ナラン、今加州ヘ貸シ置テ、文金銀引替ヘニ、損銀ト成テハ本意ナシトテ、悉ク古金銀ノ割ヲ以テ引替ヘ、增步ヲ加ヘ元利返濟セラレシナリ、市民銀主其信義ヲ感得シ、世以テ美談トス、是等ノ事モ年ヲ經ルニ隨ヒ、知ルモノ希ニナリテ其恩義ヲ忘レ、諸侯方ハ無理ナルモノトノミ思フモノ多シ、サレバ一事ニテモヨキコトハ行ヒ置キ、後世ヘ美名ヲ殘シタキモノ也

文字金銀引替ノ御觸

一　今度吹改被ニ仰付一候金銀引替之儀、大阪にても爲レ替之者共、今橋二丁目にて、來る十三日より引替候間、前日案内承合、段々引替可レ申候、古銀請取大阪より京都へ遣し、文字銀に引替差下し候故、往來兩日程相掛り候に付、代り銀三日目に相渡す筈に候、若川筋出水等有レ之ば、時刻少し延引之儀も可レ有レ之故、往還雜用、別段には不レ取レ之、先達て定之雜用、文字金十兩に付文字銀一匁宛、文字銀一貫目に付一匁五分之内にて相濟候、以上

辰九月

江戸ノ御觸

一 此度金銀引替之儀、來月十五日より、金座・銀座にて引替候之間、可ㇾ得二其意一候

一 右引替の儀、爲替兩替之者共取集め、金座・銀座へ差出し引替候間、右之者共へ申付、金銀引替可ㇾ申候

一 右爲替之者共、金銀引替候節、諸入用として、金一兩に付銀一分、銀百目に付銀一分五厘宛之積りを以て、金銀之高に應じ、金銀主より請取筈に候間、若し右之高多く請取候歟、又は無ㇾ謂引替滯らせ候はゞ、勝手次第外町人又は直に成り共、金銀座へ差出引替可ㇾ申事

但金者百兩、銀者十貫目以上持參可ㇾ致候、爲替之者共方にて引替へさせ候、員數は勝手たるべき事

金銀取集候右爲替之者

駿河町　泉屋三右衛門

本兩替町　海保　半兵衛

同町　谷　勘左衛門

本町二丁目　富山與惣兵衛

同　四丁目　竹屋彦左衞門
長谷川町　荒木伊左衞門
本兩替町　中川　淸三郎
駿河町　三井次郎右衞門
同　町　三井　三之助
同　町　三井　元之助

元文元辰年五月

大阪仲間兩替の組合へ申渡之覺

去る辰年新金銀吹替被仰付候以後、古銀割を以て通用仕樣、御觸渡有之候處、此度新金銀ばかりにて通用仕度旨願出候處被爲聞召、京都同事に取遣り仕候樣被仰渡候事

一　他國亦は素人へ銀子相渡候節、文字金銀を以て相渡、古銀は一切相渡不申、素人より古銀割合にて持參致し候はゞ、御定之通引替賃古銀一貫目に付一匁五分之外、相對を以て請取可申候、若し素人より古銀相望み候はゞ、相對之上引替賃銀相渡申間敷事

一　小判錢代共外文字銀專ら取遣可仕候、相庭之儀は勿論、是迄之通り仲間古銀集り次第、日々引替可申事

右之通被二仰渡一候間、來る二月朔日より新金銀にての取遣、堅く可二相守一もの也

元文二巳年正月二十四日

一　古金銀は兩替仲間より集り次第、速々に引替所へ相渡ス、依テ仲間惣人數書帳面引替所へ出シ置、去辰年九月ヨリ巳年二月朔日迄、兩替仲間ヨリ引替高

古銀一萬四千九百九十貫目

此文銀二萬二千四百八十五貫目

古金五千兩

此文金八千二百五十兩

右ノ外素人ヨリ引替ハ不レ知、然レドモ甚ダ引替高無レ數故、如何ノ譯ニヤ存寄可二申出一旨被二仰渡一、依レ之左ノ通申出ル

一　文字銀引替ノ儀ハ、先立御願申上候通、仲間中ハ堅ク申合、小判錢代銀ハ不レ及レ申、外向キ取渡ノ儀モ、文字銀專一ニ相用ヒ、古金銀集リ次第引替申儀ニ御座候得共、外商賣人共ノ儀ハ、銘々勝手宜敷ニ任セ、割合ヲ以テ古銀通用仕、田舍他國ノ者ヘモ、諸色代ニ多分古銀相渡候樣承リ候、依レ之當地幷國々田舍ヘモ被二仰渡一、當地ヨリ他向ヘ古銀相渡候儀堅ク相止メ、文字金銀專一ニ相用ヒ候樣、嚴敷被二仰付一候ハヾ、自カラ引替モ相增可レ申旨書附ヲ以テ申出ル、然レドモ兎角ニ引替ヘ無レ數五月ニ到リ

稲葉淡路守殿 大阪町奉行 ヨリ被レ召右無レ數趣問セラルヽ、依レ之又々左ノ通出ス

一 大阪表ノ儀、金銀取遣不レ殘文金銀ヲ以テ請拂致候樣相見エ候、然レドモ西國筋・四國・中國ハ是迄引替金銀ハカバカシク無レ之樣見及候、此儀古銀割合通用相止ミ不レ申候内ハ、自然ト取仕切古金銀差登セ引替申間敷察シ候、其上國々ヨリ今ニ至ル迄、古銀ノ名目ヲ以テ諸色賣買モ有レ之由、向後古銀通用幷名目堅ク相止メ候樣、嚴シク仰渡タサレ、增步ハ是迄ノ通リ被ニ仰付一候ハヾ、自然ト古銀當地ヘ入込ミ、引替高相嵩ミ可レ申哉ト申出ル、依レ之種々穿鑿ヲ遂ラルト雖ドモ、引替無レ數仍テ又制旨ヲ出サル

一 文字金銀出來方少く候故、當分割合にて通用候得共、段々文字銀出來候に付、金銀共に割合にて通用候儀、當年中を限り、午の正月上より割合通用相止、先達て相觸れ候通、慶長金・新金は百兩之代り文字金百兩、乾金二百兩之代り文字金百兩、慶長銀新銀十貫目之代り文銀十貫目之積り、請取・渡・兩替共に通用可レ致候、午正月より割合遣ひ仕候者有レ之に於ては、急度可ニ申付一事

一 金銀引替に付增步之儀、當十二月迄は只今迄之通り相渡し、來る午正月より引替金百兩に付增步三十兩、引替銀十貫目に付增步二貫目づゝ可ニ相渡一候間、此節より隨分と精出し金銀共に引替可ニ申込一候

右之條々國々所々へ此旨可ニ相觸一候

元文二年巳三月

右ノ御觸後、巳八月ニ江戸・京・大阪諸問屋方ヨリ願出候ハ、諸事諸拂ハ極月三十日ヲ限リ取引致シ候ニ付、古金銀正月ヨリ割合遣ヒ相止ミ、增歩減ジ候テハ難儀ノ旨願上候ニ付、御聞上有レ之、來ル午四月中迄ハ是迄ノ通ノ割合ニテ通用、增歩モ同斷、五月朔日ヨリ以後、引替案内申込ミ候分ハ、先達而ノ通リ增歩相減ジ可ニ相渡一候旨被ニ仰渡一候也、依レ之午二月左之通相觸ラル

覺

一　文字金銀割合遣ひ相止、并增歩減候儀、當四月限之積り、尤四月迄引替案内申込候分は、四月以後引替金銀相渡候とも、只今迄之增歩相渡、五月朔日以後引替案内申込候分は、增歩相減じ候積り、先達て相觸候通、彌其旨相心得、古金銀不ニ貯置一此節早々引替可レ申候

元文三年午二月

文字金銀引替ノ儀、爲替仲間ヘ仰付ラレ、今橋二丁目ニテ引替、又午ノ五月ヨリ高麗橋銀座ニテモ引替ヘ仰付ラレ、元文三年十二月切ニ今橋引替所相止ミ、其後ハ金銀座ニテ直引替ニ相成ル、入用ハ金一兩ニ一分、銀百目ニ一分五厘差出ス、此儀モ金銀座直引替ニ相成テヨリ、入用銀ハ其古銀取リ集メ候取

次ノモノヘ下サレ候事

覺

一　當五月朔日より取引銀之儀、銀座にても古銀請取文字銀に引替候樣申渡し候間、江戸・京・大阪銀

座へ、古銀持參引替可レ申候、且又銀座へ手寄無レ之者は、所の問屋・兩替屋へ相賴み銀座へ差出させ、引替入用銀は、百目に付銀一分五厘宛、只今迄引替所へ請取來候處、當五月朔日よりは、右引替古銀取集め差出候取次之者は可ニ相渡一候間、問屋・兩替屋共、古銀取集め銀座へ差出し、引替候樣に可レ致事

元文三年午四月二十九日

覺

一　古金銀を以て割合通用、當五月朔日より停止の旨相觸候處、今以遠國は勿論、江戶・京・大阪にても割合せ遣ひ致し候者も有レ之由相聞へ候、向後は古金銀割合遣ひ堅く致間敷候、尤古金一兩は文字金一兩、古銀百目は文字銀百目にて通用可レ致候、若し此以後古金銀を以て割合せ通用致し候者於レ有レ之は、吟味之上急度可ニ申付一事

右之通御領・私領共に、無レ滯樣に可ニ相觸一候、以上

元文三年午八月

右江戶よりの御觸

御觸

明和四年丁亥、當時通用ノ文銀ノ位ヲ以テ、五匁ノ銀ヲ吹セラル

此度文字銀同位を以て、掛目五文目に定り候銀吹立被ニ仰付一候間、有り來る丁銀・小玉銀に取交、渡方・

請取方、無レ滯可レ致ニ通用ニ候、以上

五文目銀





右五匁銀ハ、其掛目ヲ以テ通用ス、則相庭ノ位ニ不レ拘、金六十目ノ割合ヲ以テ、金一歩ニ銀三切、金一兩ニ銀十二ノ積ヲ以テ通用ス

御觸

一、文字銀同位を以て、掛目五匁に定り候銀吹立被ニ仰付ニ候間、有來丁銀・小玉銀に取交通用之旨、去去酉年觸候得共、以來右五文目銀之儀は、銀相庭に不レ拘、金一兩六十目替の積りを以て、金一歩に銀三枚、金一兩に銀十二枚の積り、渡方・請取方、無レ滯可レ致ニ通用ニ候

右之趣國々へ可ニ觸知ニもの也

亥十二月

右遣方不便利ニテ、其後通用止ム、如何ナル故ト云事ヲ不レ知、相止御觸ハナシ

當時古金銀賣拂凡之定

慶長銀一貫目ニ付　文銀一貫二百目
新銀一貫目ニ付古銀トモ、正德銀トモ云　右同斷
元祿銀一貫目ニ付　文銀八百九十六匁
寳永銀一貫目ニ付　同七百目
永中銀一貫目ニ付　文銀五百六十目
三ツ寳銀一貫目ニ付　同四百四十八匁
四ツ寳銀一貫目ニ付　同二百八十目

凡古銀相拂候節右之通ナリ、尤京都・大阪シタカネ屋ヘ差遣シ、定法ノ通座方ニテ潰銀ニ相成直段ナリ、銀ノ位モ悉ク上下アリテ、考ヘ方モ家々ニ據有リテ容易ニハ書記シ難シ、尙又下金(タネ)屋ヘ相渡シ候ヘバ、古銀ノ多少ニヨリテ、代リ銀增減モ有レ之故、其時ノ計ヒタルベシ

寛政十午年古銀拂定直段被ニ仰出一

御觸

慶長銀享保銀者拾貫目ニ付　代十一貫二百目
元祿銀　代八貫九百六十目

寶永銀　　代七貫目
永字銀　　代五貫六百目
三ッ寶銀　　代四貫四百八十目
四ッ寶銀　　代二貫八百目

右之通定直段を以て、於ニ銀座ニ引替候筈に候
寛政十年午五月
古銀引替古法割合
慶長銀并正德銀ハ、一貫目ニ付
元祿銀ハ　一貫二百五十目
寶永銀ハ　一貫六百目
永中銀ハ　二貫目
三ッ寶銀ハ　二貫五百目
四ッ寶銀ハ　四貫目
文字銀ハ　一貫五百目
右ノ通ナリ、都テ銀ハ慶長幷新銀ヲ最上ノ位トシ、餘銀六品ノ割合ヲ定メシモノニテ、則銀座引替

ノ時ノ位也、右割合ヲ知ル法ハ、タトヘバ慶長銀一貫目ニ、文銀ハ一貫五百目ナリ、此位ノ法ヲ以テ
四ツ寳一貫目ニ幾何ニ當ルト云フ時ハ、右慶長ノ割四ツ寳銀四貫目ヲ以テ、文銀一貫五百目ヲ算ヲ以
テ割ル時ハ、三百七十五文目ト知ル、是四ッ寳一貫目ニ文銀ノ割也、或ハ文銀一貫目ニ永中幾何ニ當
ルト云トキハ、文銀一貫五百目ヲ以テ、永中二貫目ヲ割ル時ハ、一貫三百卅三文目三分トシ、是文銀
一貫目ニ永中銀ノ割ナリ、餘ハ是ニ准ズ、則左ノ通リナリ

元祿銀一貫目ニ付

慶長・正德銀ハ	八百目
寳永銀ハ	一貫二百八十目
永中銀ハ	一貫六百目
三ツ寳銀ハ	二貫目
四ツ寳銀ハ	三貫二百目
文字銀ハ	一貫二百目

寳永銀一貫目ニ付、二ツ寳トモ云

慶長・正德銀ハ	六百廿五文目
元祿銀ハ	七百八十一匁二分五厘

永中銀ハ	一貫二百五十目
三ツ寶銀ハ	一貫五百六十二匁五分
四ツ寶銀ハ	一貫五百目
文字銀ハ	九百卅七匁五分

永中銀一貫目ニ付

慶長・正徳銀ハ	五百目
元祿銀ハ	六百廿五文目
寶永銀ハ	八百目
三ツ寶銀ハ	一貫二百五十目
四ツ寶銀ハ	二貫目
文字銀ハ	七百五十目

三ツ寶銀一貫目ニ付

慶長・正徳銀ハ	四百目
元祿銀ハ	五百目
寶永銀ハ	六百四十目

永中銀ハ　八百目
四ッ寳銀ハ　一貫六百目
文字銀ハ　六百目
四ッ寳一貫目ニ付
慶長・正德銀ハ　二百五十目
元祿銀ハ　三百十二匁五分
寳永銀ハ　四百目
永中銀ハ　五百目
三ッ寳銀ハ　六百二十五文目
文字銀ハ　三百七十五文目
當時通用文字銀一貫目ニ付
慶長・正德銀ハ　六百六十六文目六分六厘
元祿銀ハ　八百三十三文目三分三厘餘
寳永銀ハ　一貫六十六文目六分六厘餘
永中銀ハ　一貫三百三十三文目三分三厘餘

三ツ寳銀ハ　　一貫六百六十六文目六分六厘餘

四ツ寳銀ハ　　二貫六百六十六文目六分

右ノ通位ナリ

右金銀位ノコトハ、座方ニ手本金在レ之、是ヲ附ケ石ニ付テ、其位ノ高下ヲ定ム、金ハ位四十四ヨリ二百五迄有レ之、是ヲ改御本金ト云、局官ノ秘スルコトニシテ予ハ未レ知、此等子金ト云事、遊官記聞ニ云、宣和殿、有ニ玉等子一以諸色玉次第排定、凡玉到則以ニ等子一比レ之、高下自見、今內帑有ニ金等子一、亦此法ト云々

無寃錄、以ニ官對牌一、誠驗ニ鑿記封收一、註、官對牌、謂官府以ニ上中下金銀一、各鑄ニ其儀牌一、其牌面鑿ニ記品第一、如レ有ニ買賣及ニ器皿一、鑄造金銀必以對ニ此牌一、定ニ其品第一云々

大黑銀トテ慶長以來、今文銀ニ至ル迄、小玉銀ニ大黑極印有レ之ヲ賞翫セリ、尤兩面アリ、又裏ハ常ノ極印アルモ數多アリテ、是ハ吹替ノ時、座方ニ手寄ノモノアレバ、相賴テ隨分出來ル也、今慶長銀ニ、兩面大黑又十二大黑トテ、丁銀ニ大黑バカリ左右上下ニ都合大黑十二打タル極印ノモノアリ、隨分世上ニ數多アルモノナリ、併シ實ノ慶長銀ニテハナシ、皆々正德ノ古銀ナリ、位慶長ニ同ジケレバ、則慶長ノ大黑銀ト云ヘリ、其餘元祿・寳永今ノ文銀ニ至リ數多アリ、左ノ通リ

〔原本二三行アキ〕

但シ永中三ッ寶・四ッ寶夫々アリ、裏、寶極印打チタルハ四ッ寶銀ナリ

〔以下原本餘白アリ〕

文銀大黑

〔原本餘白アリ〕

右兩面大黑銀ハ、慶長已來多シ、片面大黑、裏、常ノ極印ハ少シ、十二大黑ノ丁銀モ、今文銀マデ

隨分アリ

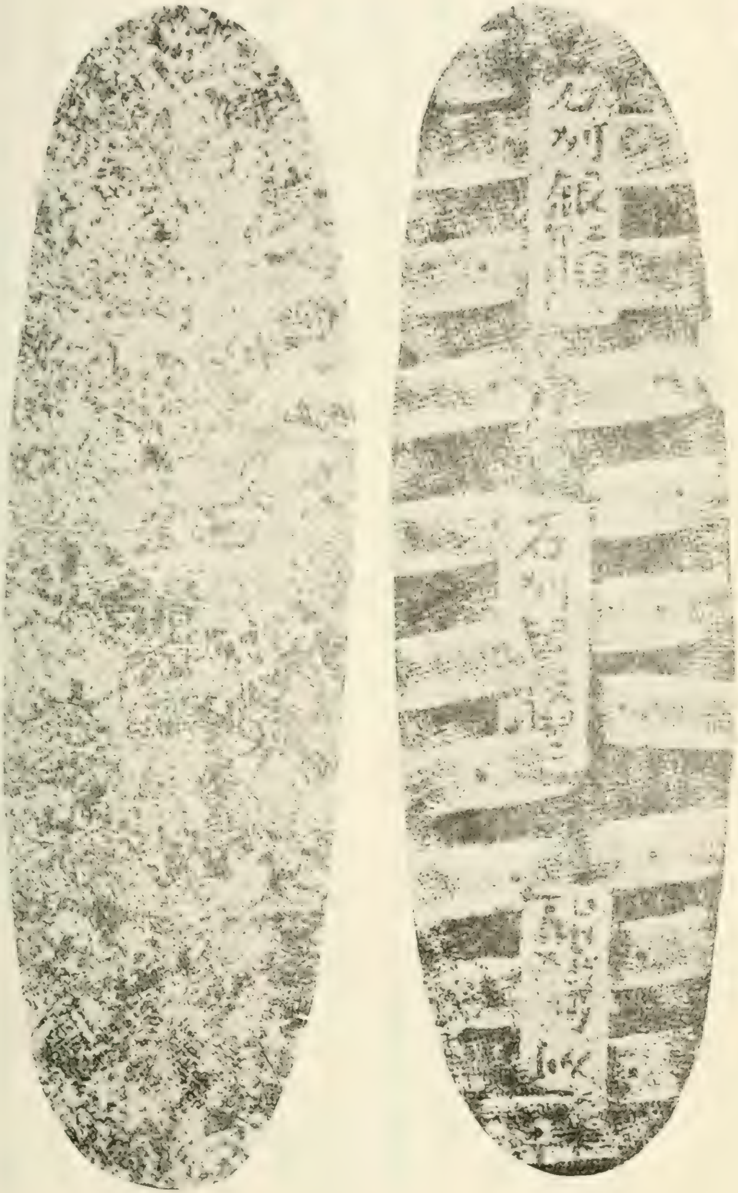
三貨圖彙卷二十　銀之部

草間直方輯錄

古代ノ銀判數品有トイヘドモ、其據不レ知、金之部ニモ云ヘル如ク、諸侯恣ニ鑄テ國用トシ、或ハ軍中賞賜ノ用ニ充ルモアリ、又銀山有テ吹出ストキ、其國内又ハ山中ニテ、通用ノタメ鑄モ有テ、證トスル據ハ無レドモ、金銀トモ古色精雅ナルヲ以珍トス、然レドモ又元祿年以來、種々珍貨ノ僞造有テ、古色上品ト見エ、眼目ヲ惑スモノアリ、又下品拙作ニ眞ナルモノ有リ、或ハ古貨ノ眞ナル物ヲ摸造スルモ有テ、鑒定スルニ新古ノ空論ノミ多ク、眞ヲ辨ズルモノ稀ニシテ、珍貨ニ眼ヲ惑シ、大切ナル文字金銀ヲ費ス者間々アリ、愚ト云フベシ、眞ト雖ドモ通用ナケレバ贋金銀モ同ジ、然ルヲ欣賞スルハ驕ノ長ズル也、今古貨金銀流行セバ、必嚴密ニ禁斷アリ度モノ也、尤古金銀ヲ貯フ事ハ、天下ノ制禁ニテ數度制令アリト雖ドモ、古錢ハ通用制禁無レ之ニヨリ、古金銀モ同樣ト思フ也、故ニ禁ヲ不レ恐假作スル者有ラン歟ト、實ニ可レ怖事也、元祿年、東條升伊等、古錢ノ僞作者ニテ、眞錢ト見誤ルホドノ上作ニテ、其頃世ニ知ラレシ者ナレドモ、贋金ノ咎メハナカリシ也、古金銀ノ贋作モ同意ナラン歟、是今通用ナキ金銀故、僞作者有テモ可レ咎者ナキヤウニナルベシ、文字金銀ノ眞僞ハ、素人タリトモ見誤ル

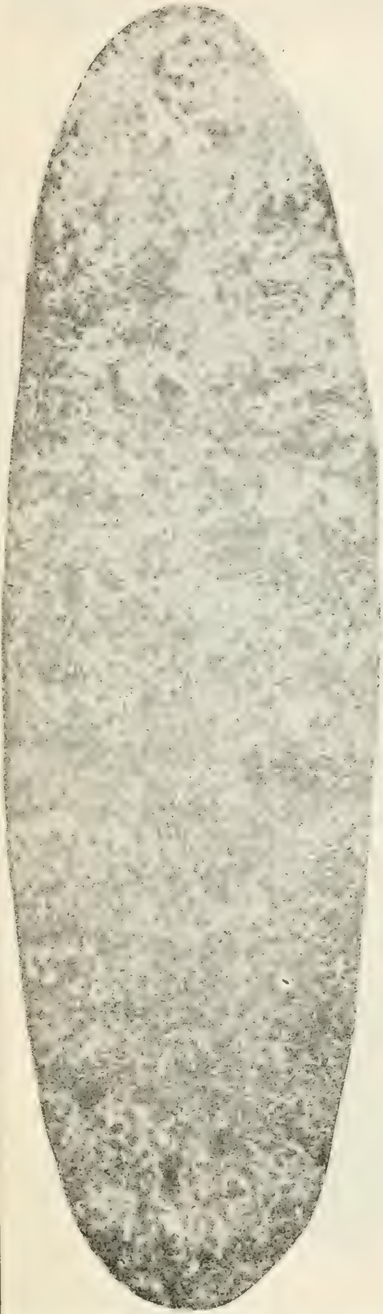
コトナシ、古金銀ハ兩替職ト雖ドモ不分明ニテ、鑒定ナシ難シ、故ニ玩賞スルコト流行セバ、其罪人可二出來一、茶器・古書ノ類モ同樣玩ビ物ニテ、其罪等シト云ベケレドモ、好・不好アリテ同ジ金銀ヲ費スト雖ドモ其害ナシ、古貨ハ玩物ニモセヨ、金銀ハ上下貴重ノ財寶第一ノ物故、古貨流行セバ、人欲ヲ以テ今ノ金銀モ贋作スル樣ニナルベシ、尤モ通用金ハ至テノ精金ニテ無レ之、極印モ亦巧ミ不レ成故ヲ以テ思フ、然レバ古貨ノ流行ハ、其害又大イナルコト可レ有歟、必禁ゼズンバ不レ可レ有故ニ、眞貨ノ珍ト雖ドモ、强テ此書ニ不レ賞、モトヨリ古貨一品モ不レ藏、鑒定猶蒙シ、事ハ金銀圖錄ニ明カ也、並セ可レ考、仍テ印本ノ儘出ス、彩色ナク墨摺ノ分ハ予往々見シ眞貨也、未レ見シテ圖錄ニ漏ルモノハ、素圖ヲ以テ記シ、又是迄眞貨ヲ見テ、手摺セシ品類モ、圖錄ニ載スル類ハ、悉ク省レ之、金銀圖錄ノ精密ナル事ハ見テ可レ知

石州銀



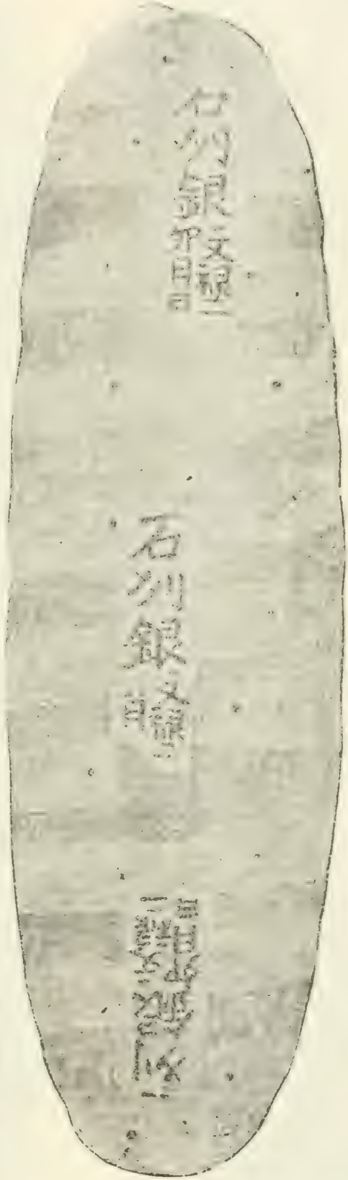
量目五十四匁

石州銀



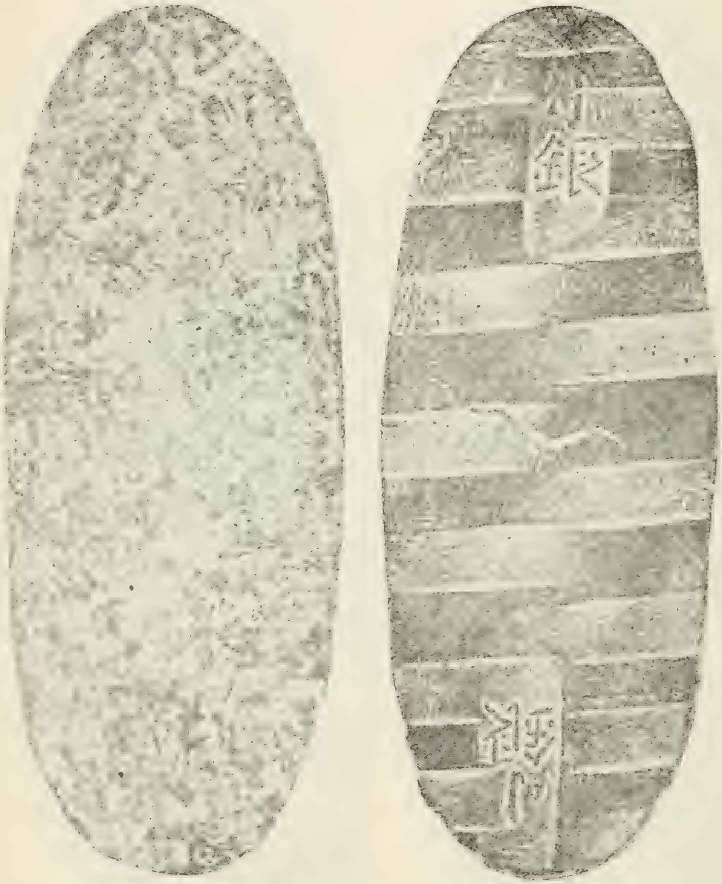

量目五十六匁三分

同上



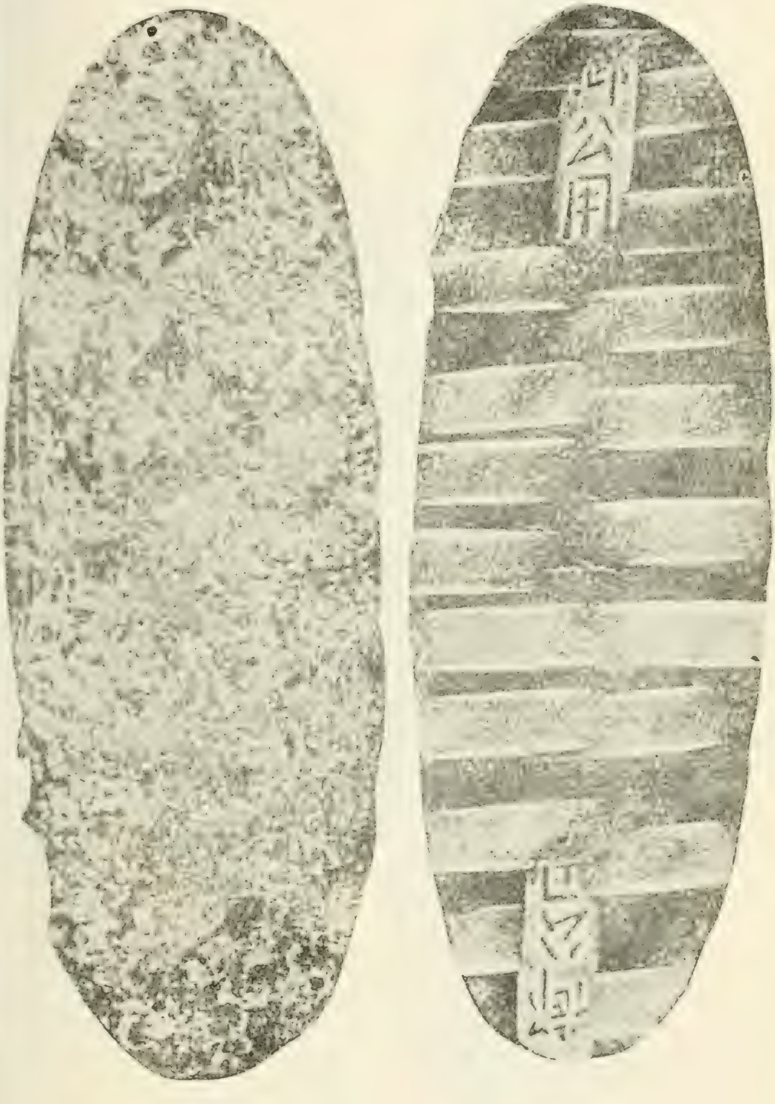
金銀圖錄ニ云、重サ四十三匁、背、石目、愚按ニ、此銀朝鮮征ノ爲メニ造ラレシナルベシ、鷄邑志林ニ云、「倭使小西飛來議ニ封事一、時以ニ京營將佐楊貴綠一爲ニ館伴一小西飛贈レ楊有ニ私覿之儀一、如ニ刀盒之類一、一猶常見惟銀錢多作ニ人馬之狀一、更有ニ銀一片一、形類ニ椋葉一、厚二分・長七寸許、中有ニ一脊一、陽凸陰凹、兩旁斜擊數搥、略似ニ蓁葉一、側一印有ニ長寸餘一、隱ニ起三字一曰、石州銀、皆中國字、惟州字斜書耳」コレ即此銀ナルベシト云ヘリ

石州小銀



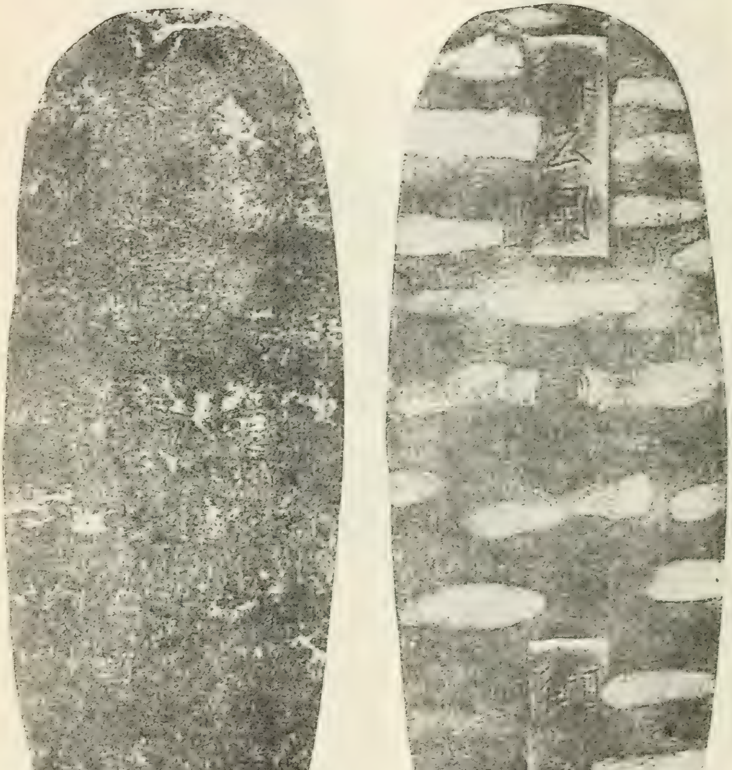
量目四十四匁

博多公用銀



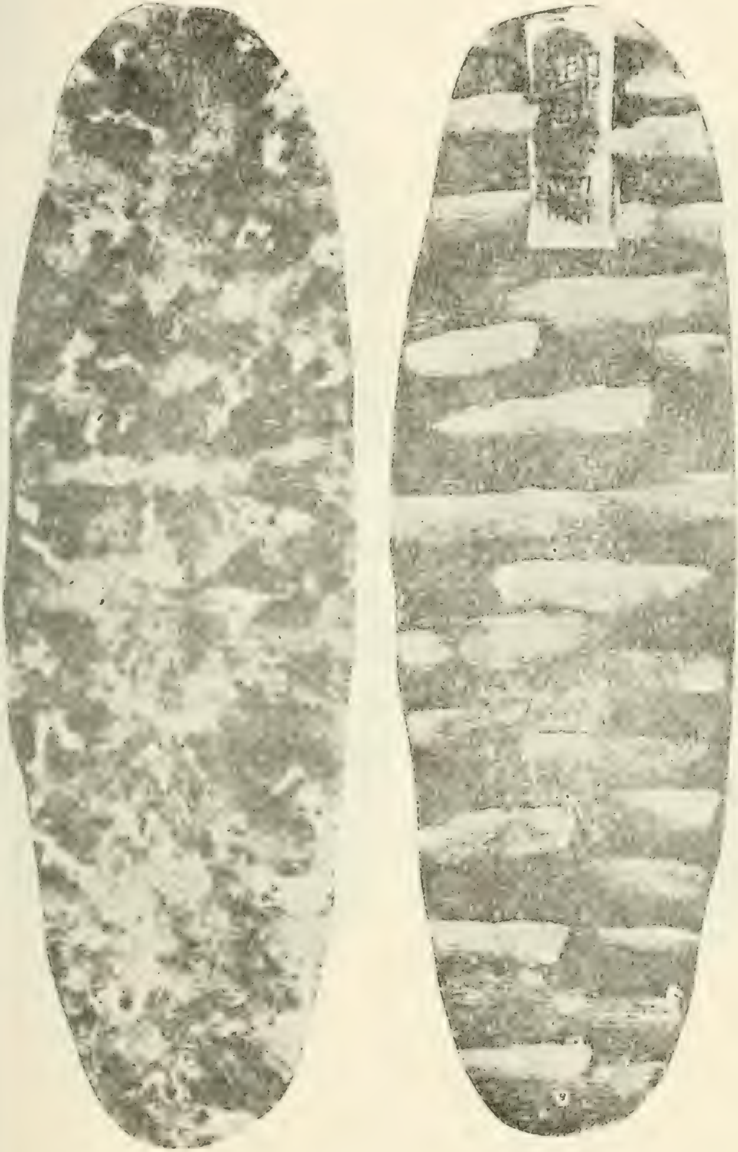
量目五十四匁

同鏨彫公用銀



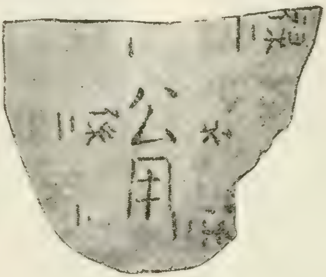
量目卅八匁七分

同上



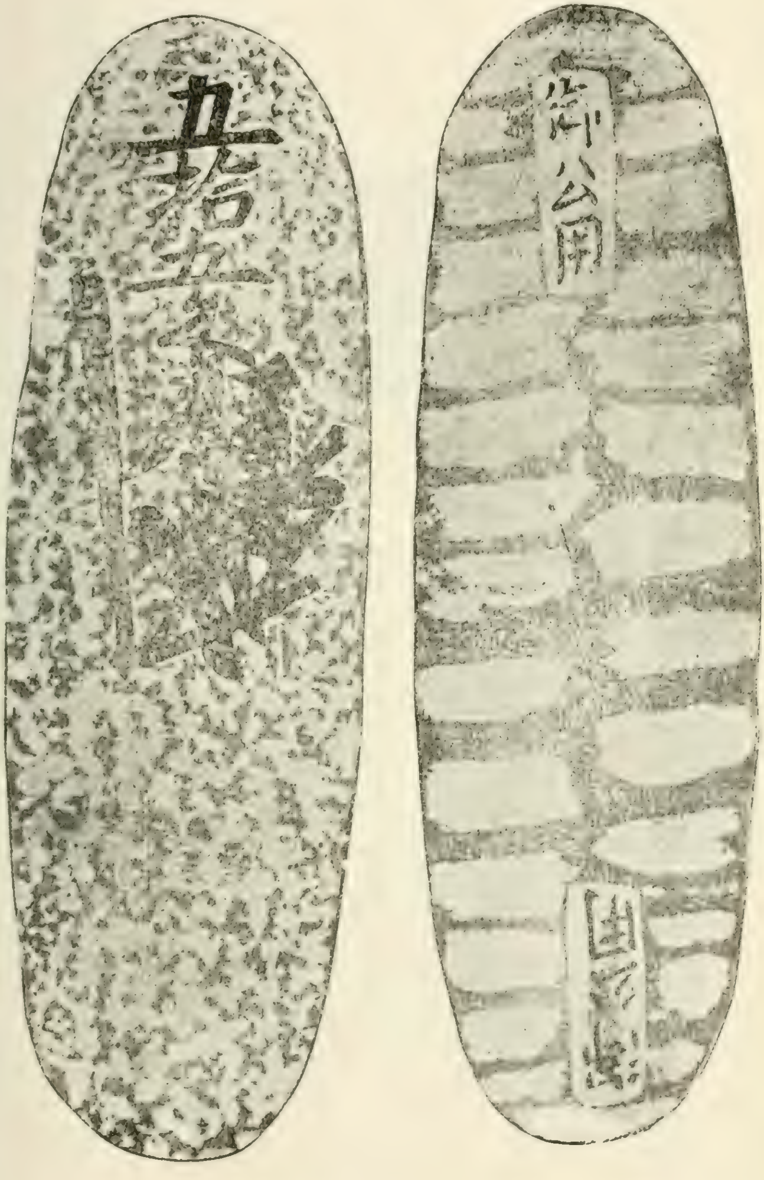
量目五十八匁

同上御公用切銀



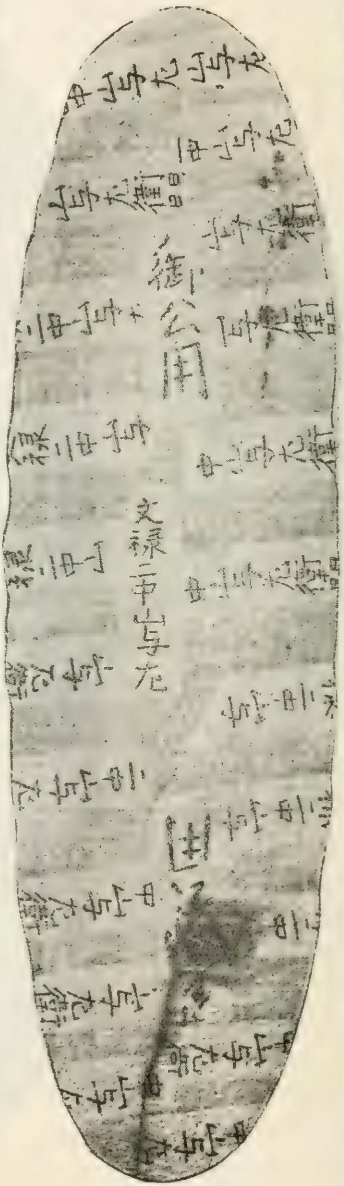
圖錄云、此銀文祿二年ニ吹トコロ、下ノ筑前博多銀ト合セテ其全體ヲ見ベシ、愚按ニ、石州銀山舊記ニ云、天文二年、大內義興、銀山ヲ領スルトキ、筑前博多ヨリ、壽亭ト云モノ來テ、始テ鏈ヲ吹鎔レ、銀ヲ成スコトヲ仕出セリ、是レヲ銀吹ノ始トス、永祿中、毛利元就銀山ヲトル、天正中、太閤ヨリ上使近實、毛利家ヨリ三井某ヲ以テ、銀山ヲ奉行スト云々、此銀必朝鮮征ノ爲メニ造ラレシナルベシ、寶貨事略ニ云、石見國ヨリ黃金ヲ出セシコト其始ヲ不レ知、慶長六七年ノ間ヨリ、出ルコト多クナレリ、程ナク金ヲ掘ルコトヲ止メラレキ

同上



筑前博多御公用銀

圖錄ニ云、重サ三十二匁、背、石日、此銀文祿二年ニ造ル所、前ノ石州銀ト同品ナリ、意フニ朝鮮征ノ時ノモノナルベシ



同細銀

重サ六分ヨリ一匁

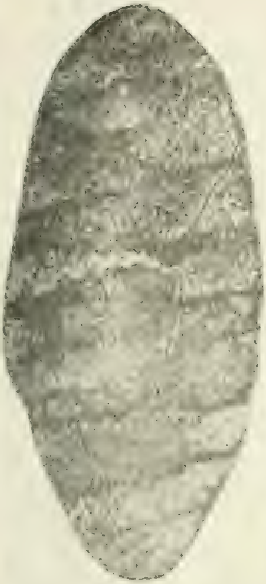


圖錄ニ云、重サ六分、或人云、是石州ヱキレ銀ナリト、然レドモ金銀錢譜ニ、ヱキレ銀ハ灰吹ニテ、耳ウスク、中厚ク、細長ク、ヱキレノ魚ニ似タル故ニ云フト、是ト同ジカラザルニ似タリ、此銀正用品中ニ載スル、太閤軍用金ト云フモノト略似タリ、重サ九分、或人云、此銀ハ天正・文祿年ノ頃、朝鮮征罰ノ砌、軍用銀ヲ石州ヨリ吹出セシトキ、金鑿人夫手間料、雜費用ニ鑄、山内通用セシモノニテ、朝鮮征罰ノ砌ナル故、太閤軍用銀ト後人云傳フト、濱田ノ或老人云リト云、其是非ハ知ラズ、右山口銀モ其類ナラン

楪葉銀

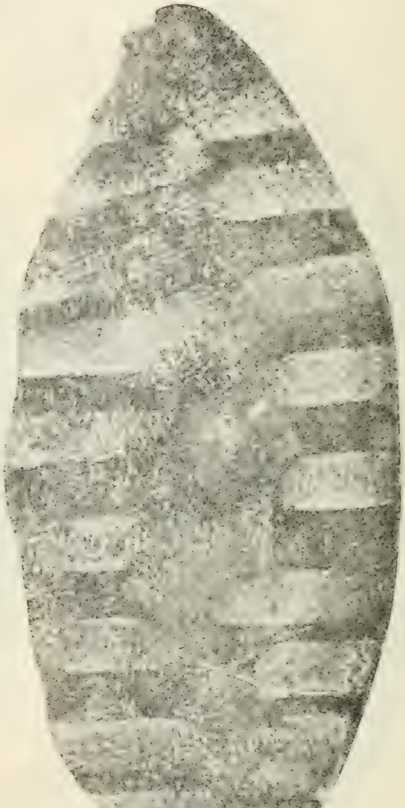


重サ、六十目五分

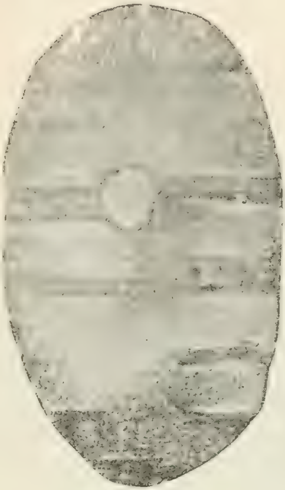


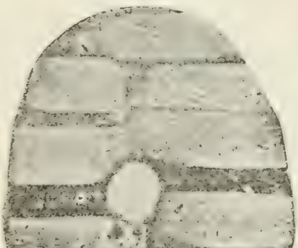
重サ、三十二匁

同上



重サ五十目





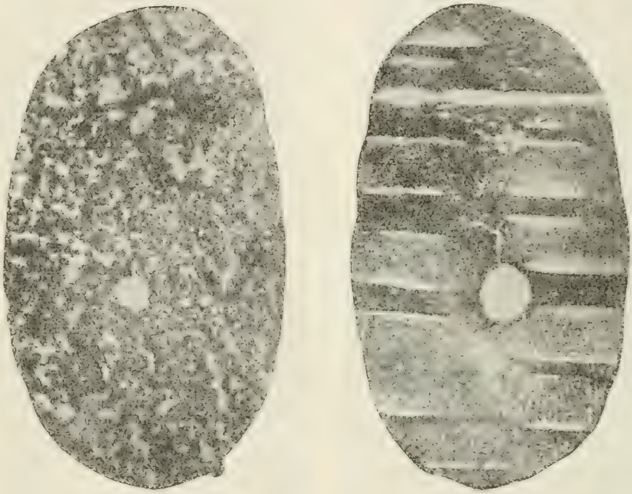
重サ三十目

同上



重サ四十八匁餘

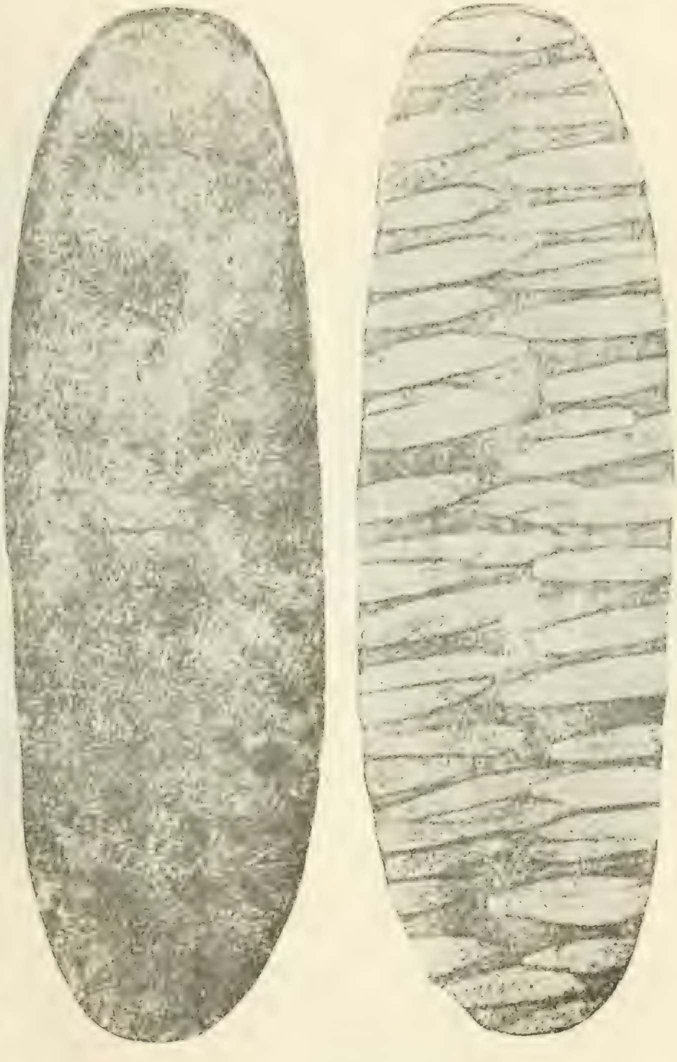
同上



重サ三十五匁

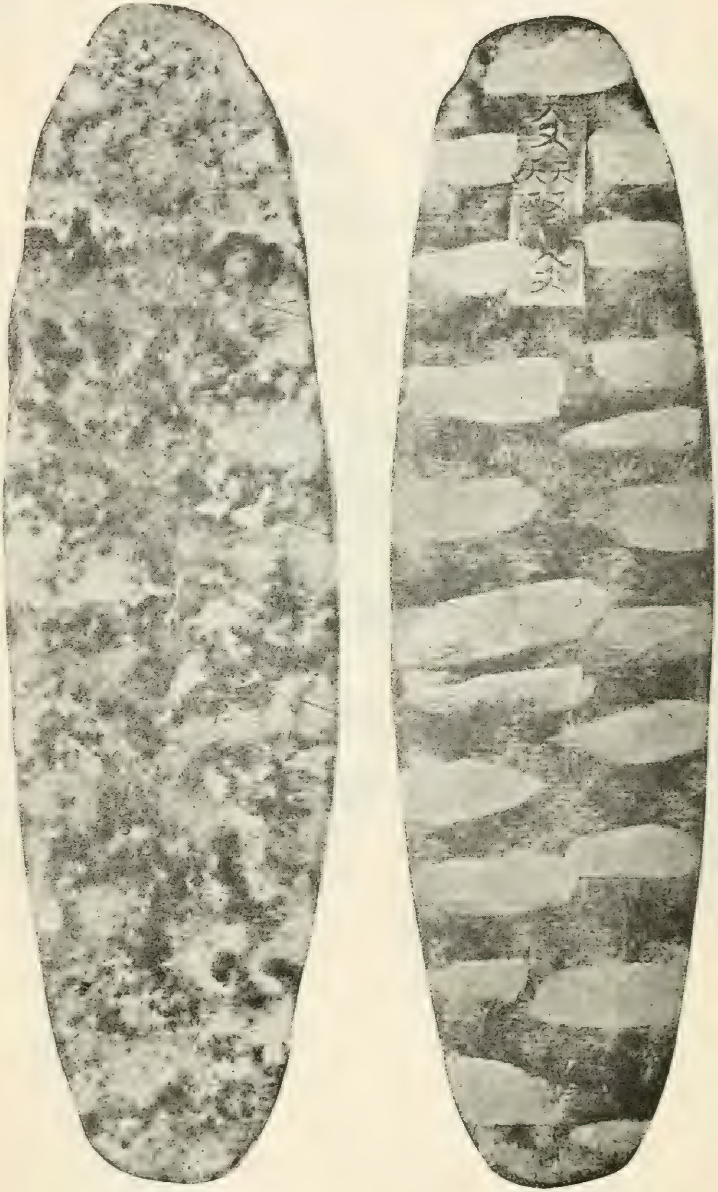
槕葉銀

重サ二十七匁



圖録ニ云、古銀俗ニ槕葉銀ト云、愚按ニ、上ニ所記形類ニ槕葉ノト云モノ即チ槕葉ノ名アル所以ナリ、石州人云、相傳フ此銀延寳・天和ノ際マデ通用スト、未ダ是否ヲ不ㇾ知

天文銀

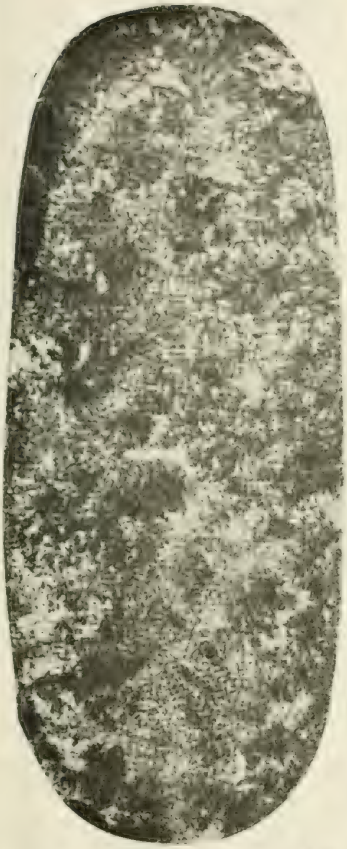


量目四十六匁七分

同上



量目三十八匁

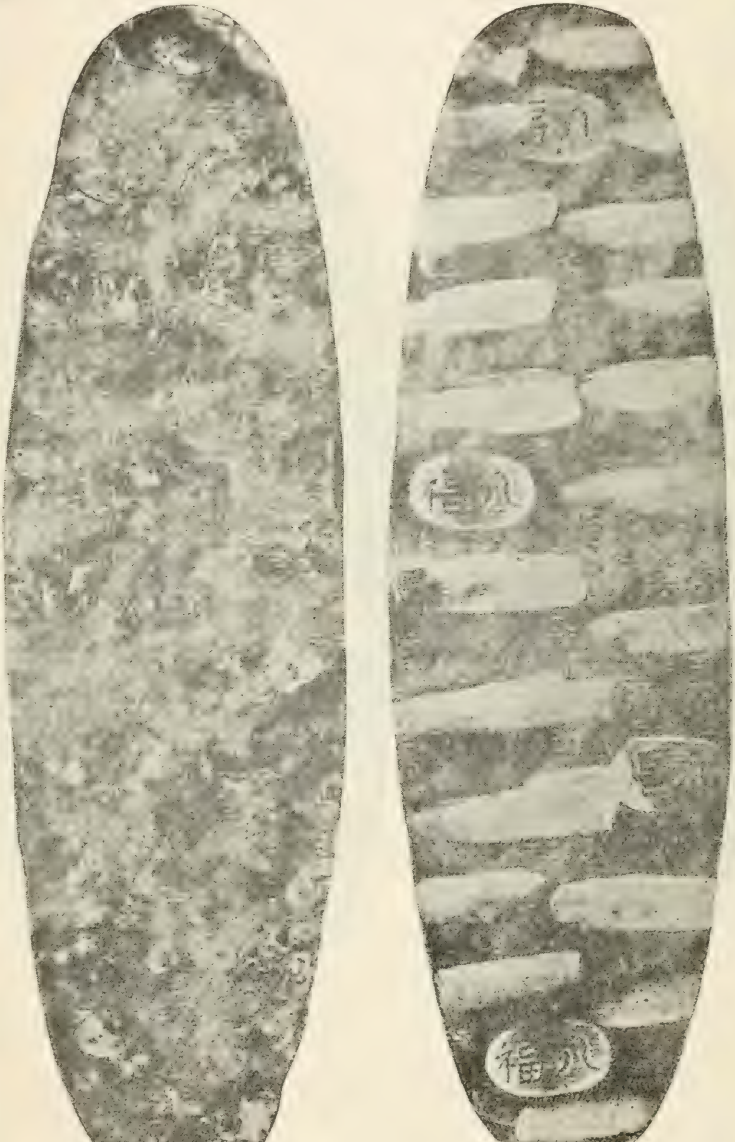


同切銀

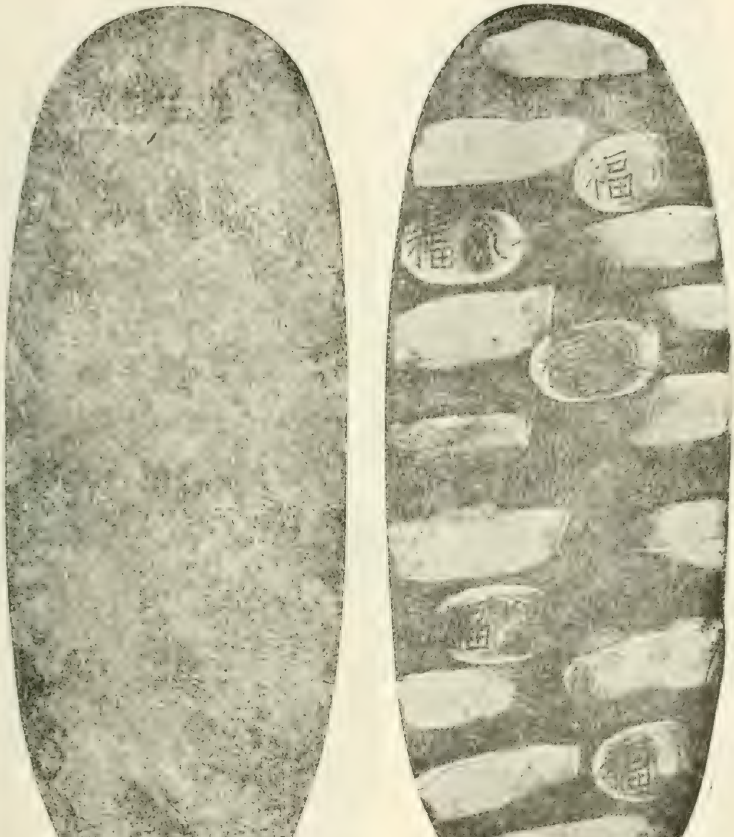


八福銀

量目五十目

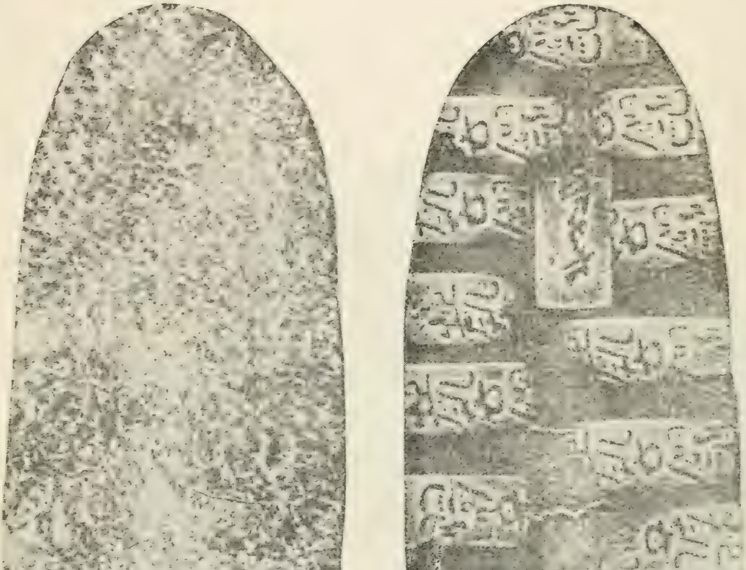


同上



量目四十三匁

筑州銀



量目四十六匁

後世ノ僞作ナリ

右ハ毛利秀秋、筑前名島ニテ鑄ルト云フ說アレドモ不レ詳、但シ慶長四年ノ極印ハ、後ニ打タルモノト云說アリ、然レドモ今世ニ右古銀多ク殘リアリ、余ガ見ル所ハ九鋌ナリ、何レモ慶長ノ極印アリ、後ニ打ツト云フ說アレバ、又極印ナキモ可レ有ニ不審ナリ

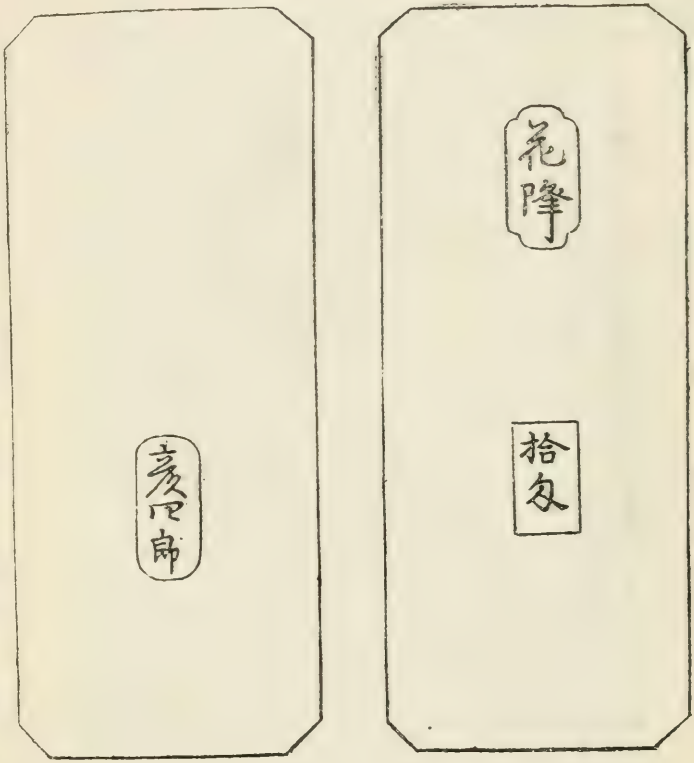
長門國、萩判銀



同切遣銀

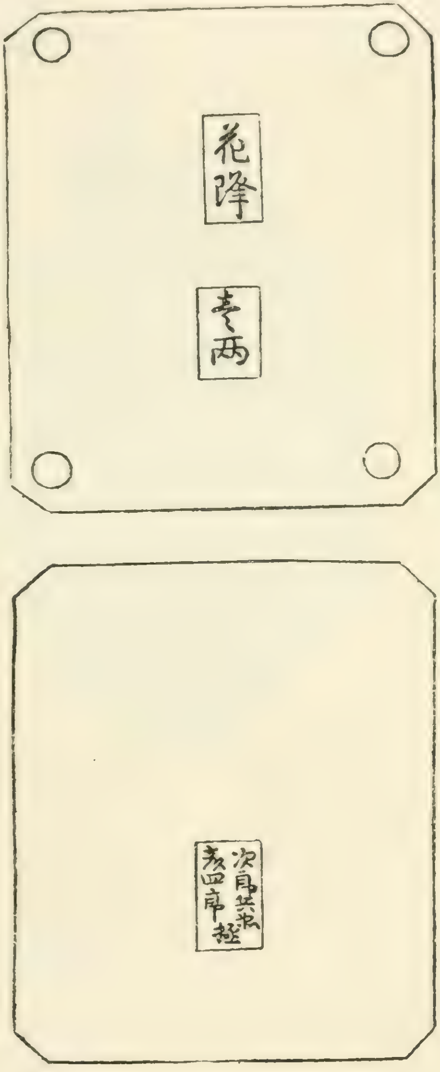


加州花降銀



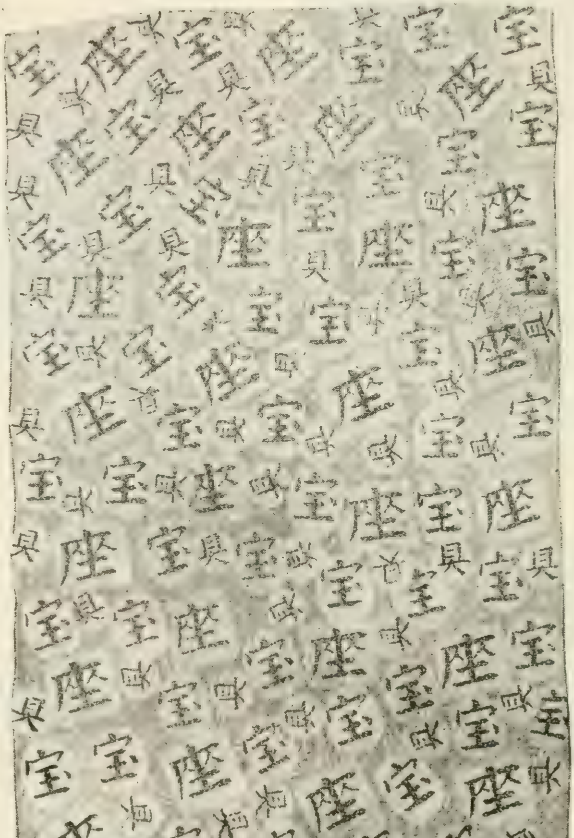
量目四十三匁、此外數品金ノ部ニ出シ、茲ニ略ス

同上



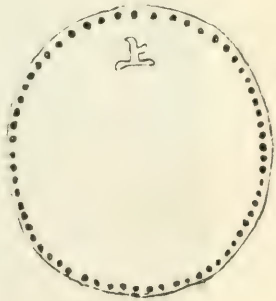
加州ノ人ニ尋ネシニ、花降十兩ハアリテ、一兩ハナシト云ヘリ、然ルニ圖錄ニ此一兩アリ、然レバ一兩モアリト見ユ、右十匁ノ花降モ百目ノ花降アレバ有シナルベシ、右二品トモ未レ見

加州切遺銀



同上、上字竿銀

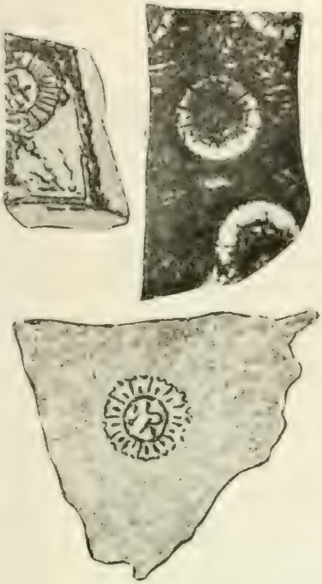




右上字、圖錄上ノ竿銀ト、同物ナリ

圖錄ニ云、右上字竿銀、何レノ時吹事ヲ知ラズ、或ハ云、花降銀ヲ吹トキ制スル處ト、丸ミ造リ、三面ニ小星アリ、今ノ南鐐二朱判ノ星ノ如シ、是加州一商ノ所藏ナリ

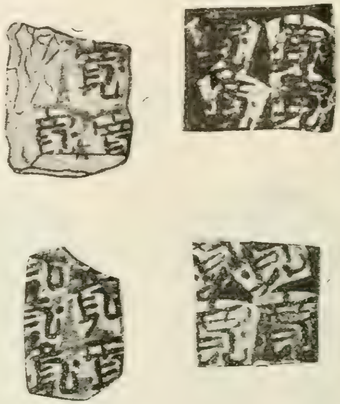
同上、古極印、切銀



同上、シブ銀

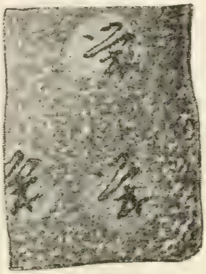


越後長岡、寛字切銀



圖錄ニ云、銀位四歩引カ、昆陽漫錄ニ云、越後老人云、越後ニテ先年通用セル銀ハ一ナラズ、長岡ニテハ寛ノ字ヲ打タル銀ヲ遣ヒ、新潟ニテハ榮ノ字ヲ打タル銀ヲツカフ、其外高田等ニテ使ヒタル銀ハ形象ヲ覺エズ、寛字銀榮字銀モ大抵厚サ二歩バカリニ、長ク吹、極印ヲ打置テ、通用ノトキニ望テ大小意ニ任セテ切テ通用セリ、故ニ里言ニ鉈切銀ト云、元祿九年秋、越後國諸ノ銀、通用停止セラレテ後ハ、今ニ至ル迄變ジテ越後國ハ金ツカヒトナレリ

同上新潟、榮字切銀



同云、位四歩引カ、漫錄ニ云、新潟庄屋吹ト云テ、銀ノ位上品也

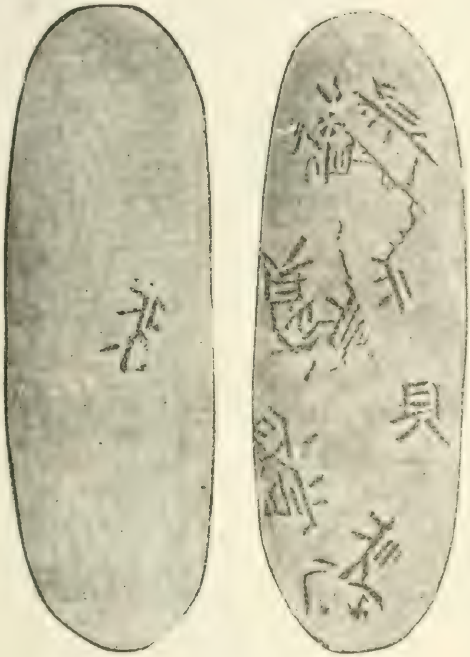
同上、村上永字銀



同上、寳字切銀



同上、切銀

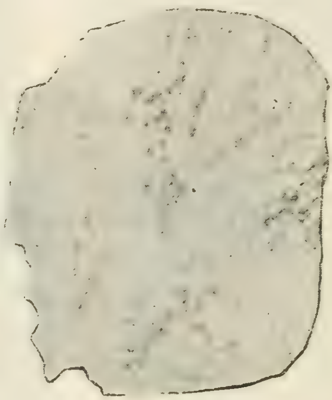


圖錄ニ云、銀色上、字文雅古、相傳フ、謙信ノトキ切遣ヒニスルモノナリト、未ダ是否チ知ラズ

同上、シカミ切銀



佐渡國、上銀



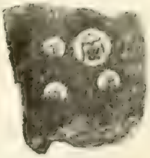
同上、元印銀





圖錄ニ云、元和五年、佐渡一國通用ノ爲メニ、初テ印銀ヲ吹ク、極印德・通・定・印ノ四字表裏ニアリ、布目・形・極印トモ、錺師三左衛門造レ之、上銀ニ八步引ナリ、元和ヨリ正德ニ至マデ、吹所ヲ元ト印銀ト云、元印銀一匁ハ、凡錢六七十文ナリ

佐渡古銀

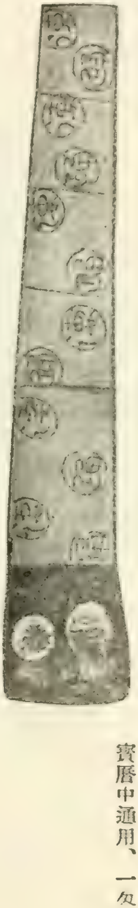




明和初年、止ニ行用ハ此極印銀始、寛永年、伊丹播磨守殿、御在役ノ節ヨリ元祿ノ比、銀一匁ニ付錢四十八文、享保年間四十文位、寛保ノ頃又四十八文、寶曆ノ始廿六文ニテ暫通用、同十辰年冬、不レ殘御買上ニ相成、通用停止

大掛目　二十二三匁位ヨリ
小　七八分位ヨリ一匁

佐渡印銀

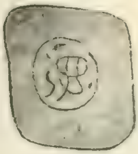


寶曆中通用、一匁ニ廿七文位

佐渡銀

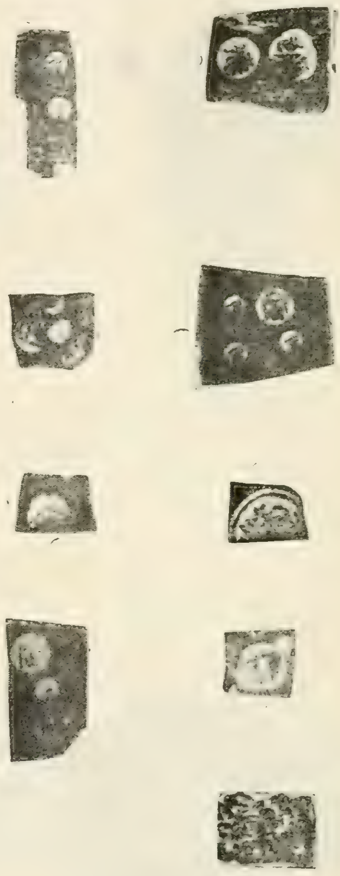


德通ノ字ナリ

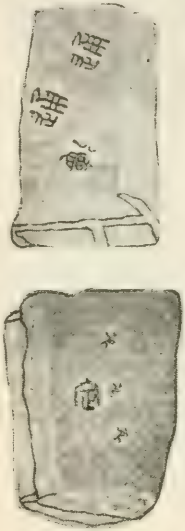


皆無文、重一匁

同切銀

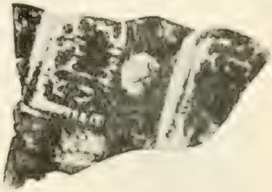


同上新印銀



圖錄ニ云、正德ニ吹キ直スモノナリ、寶曆ニ印銀通用一旦停止、其後又通用アリテ、寶曆十一年ヨリ通用停止トナル、印銀一匁ハ錢三十六文ニ通用ナリ

出羽、窪田切銀





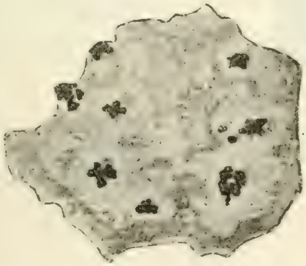
出羽、横手切銀



同上、角館切銀



同上、佐竹花降銀

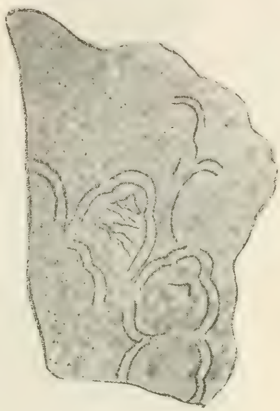


伯耆國、常是極印小玉銀





出雲國、木瓜判切銀



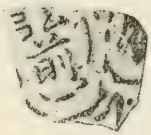
因幡國、甚兵衛極印切銀



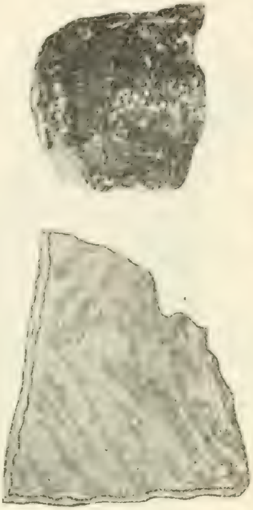
因幡國、一丁目切銀



因幡國、津輕弘前切銀



丹波國、鬼ヶ城、切銀



出羽、鮎川、切銀



山城、堀川銀小判



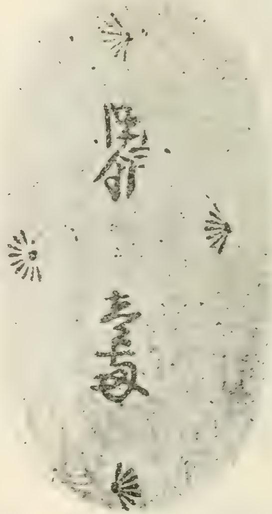
圖錄云、重サ二匁六分、
是亦模造ノモノナリ

山城、小判銀



重サ三匁七分

山城小判銀



同上、重サ三匁六分、此銀モト不レ知レ名、其同品ナルヲ以テ、此ニ列ス

和泉國、堺小判銀



相模國、北條小判銀　重サ廿四匁二分

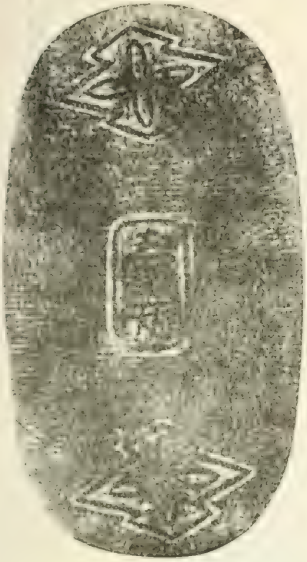


同菱小判銀　重サ廿四匁三分



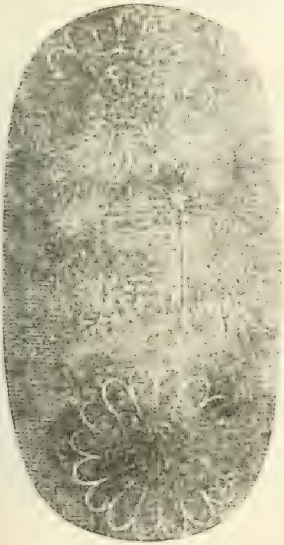
同上

圖彙云、重サ四匁三分、モト名テ小倉小判ト云、其同品ナルヲ以テ此ニ列ス



同上、菊小判銀

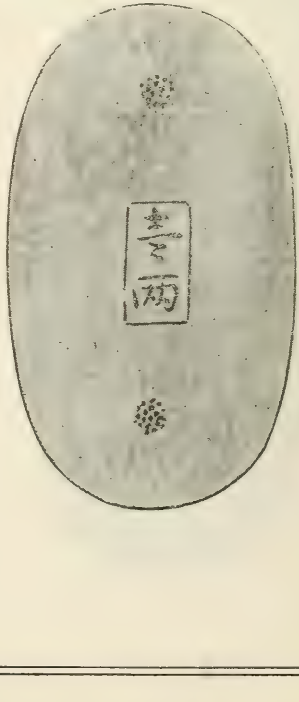
同云、重サ四匁、モト名テ十六葉菊小判ト云



同上



重サ三匁



重サ四匁

同上、菊小判銀

圖錄ニ云、重サ四匁三分、金銀圖錄ニ云、小田原北條家造レ之、關東行レ之以ニ此銀壹枚ノ準ニ永樂錢壹千貫文ノ此說何ノ據ヲ知ラズ、永一貫金壹兩ニ當ベキニ、縱令當時金銀乏トモ、永錢如レ此ノ賤シキニ至ルベカラズ、前ノ永四貫小判ヲ見テ、其無稽ヲ知ルベシ

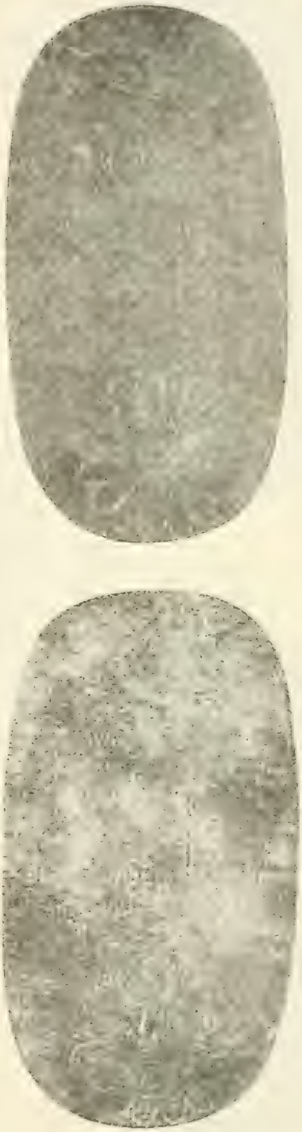


同上銀



重サ四匁二分

同上銀



重サ四匁

同上銀



同上銀



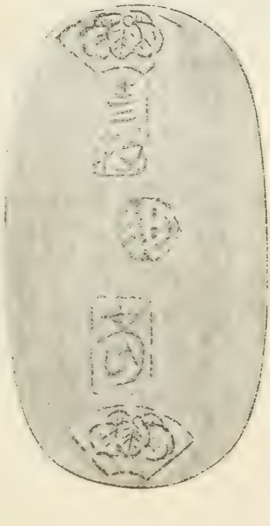
出羽國、秋田小判銀　重サ一匁



越前國、蔦小判銀　一說ニ云、重サ二匁壹分、銀色薄劣、見ルニ足ルモノナシ



同上銀　重サ二匁二分、薄劣恰モ蜈蚣小判ノ如シ



同上銀



同上重サ二匁二分薄劣
恰モ蜈蚣小判ノ如シ

加賀國、梅鉢小判銀



重サ三匁八分、又四匁
三分ノモノアリ

美作國、二菊小判銀



重サ三匁六分

圖錄ニ云、愚按、作州眞島郡神代(カウシロ)ニ、金炕ノ古蹟アリ

但馬國、銀小判

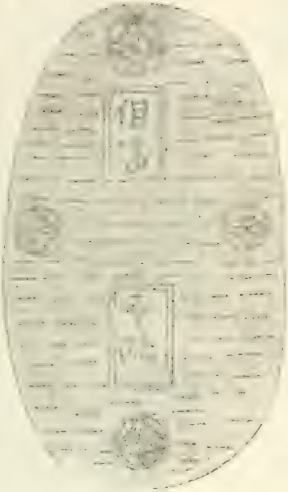


重サ四匁一分

同上小判銀



同上小玉





重サ三分七厘

圖録ニ云、昌披ニ、但馬考ニ、朝來郡生野銀山其始不レ詳、雜書ニ對馬島ノ銀ハ、百姓ノ私ニ採ニ任セ、但馬ノ國司ハ、此例ニ非トアレバ、當時已ニ貢上セシト見ニヨリ又按ニ、銀山舊記ニハ、天文十一年、山名兵ノ時始テ掘出、其後石見ノ時、石見ノ商人來テ鑛ナ買ヒ、國ニ歸テ銀ニ吹シヨリ盛ニナトシトゾ、太閤ノ時、伊藤氏奉行スト云々

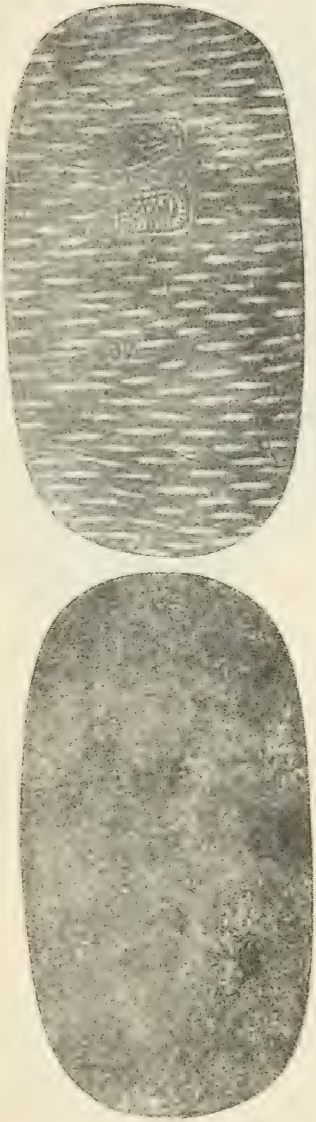
朙ノ平壤録ニ、但馬銀ナ出スト云、圖書編、日本ノ圖ニモ、但馬銀ナ出トアレバ、唐土ヘ聞リシモ久キコトナリ、然レドモ判トナシ、歩トナシテ通用セシコト考事ナシ、或ハ云歩判ハ銀山中ニテ通用セリト、今ハ絶テ通用ナシ

湊銀小判



重サ二匁五分

銀錠小判



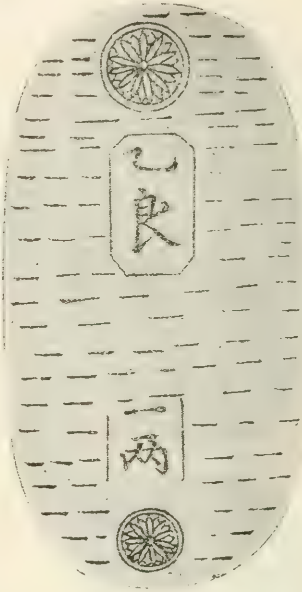
重サ四匁

尊氏小判銀



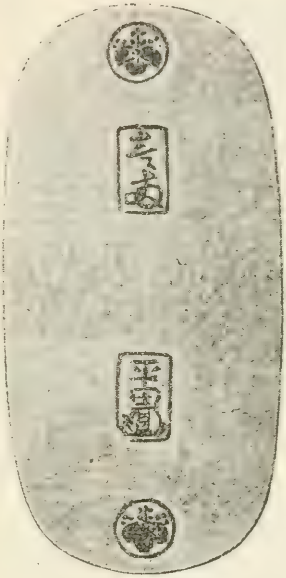
圖彙ニ云、重サ四匁三分、コレ正用品ニ藏ル、
秀吉小判ト全様ナリ、後人ノ擬作ナルベシ
同云、重サ四匁、此銀モト失名、然レドモ、尊氏
太閤二判ト同品ナルヲ以テ此ニ出ス、背ノ極
印最古雅、決シテ模造ニ非ズ

乙良判銀



金銀圖品ニ載ス

平田判銀



重サ四匁二分

鶴龜銀小判

此銀小判ノコトハ金ノ部ニ記ス、依テ爰ニ略ス



但シ此四品金ニモ銀ニモアリ

太閤軍用銀

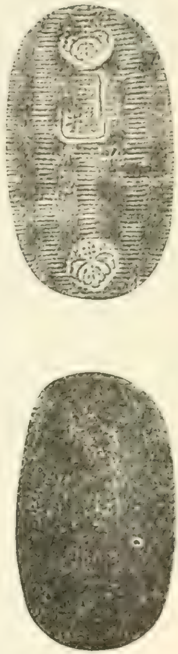
譲葉銀



品位ハ量目六分ヲ、事ニ石州銀ニ同シ、銀ニ略ヘ

量目四匁三分

桐雛小判銀



重サ七分五厘

雛小判銀



重サ四分

雛小判銀



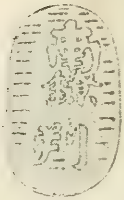
圖錄ニ云、重サ四分、是甲金品ニ載ル六角極印小判ト相似タリ、併セ見ルベシ

雛丁銀



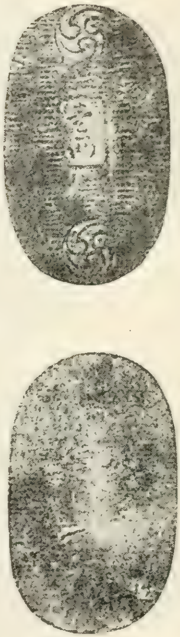
重サ四分

南鐐判



背、石目

銀小判



背、石日、重サ七分七厘

同上花成銀



金銀圖品ニ載ス

雛銀小判



量目一匁三分

同銀大判



井伊家ノ紋アルヲ以テ俗ニ万千代小判ト云ヘドモ寛永年鑄判也

量目一匁二分

同鷄小判



重サ一匁一分蓋模造

福寶雛判銀

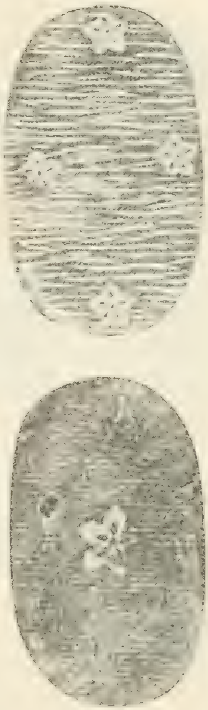


重サ三分四厘

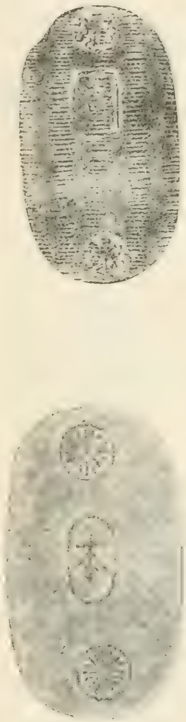
雛板銀



重サ四分



重サ二匁



朝鮮菊本小判金

掛目一匁一分五厘強シ

雛小判銀



重サ一匁二分

雛銀大判



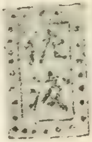
右雛小判ノ事ハ、金ノ部記、茲ニ略ス、其餘圖品巨細ナル事ハ金銀圖錄見ルベシ、茲ニハ其大率ヲ記スノミ、此以下皆同ジ

加州南鐐一分



圖錄ニ云、重サ一匁、俗ニ加賀南鐐ト呼ブ、相傳天正中、長氏吹レ之、能登ニテ通用スト、然ルヤ否ナ不レ知

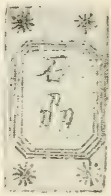
佐渡銀一分





重サ一匁

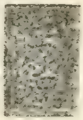
石州

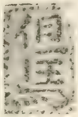


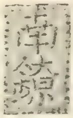
重サ一匁

但馬國南鐐

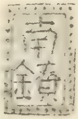




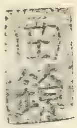






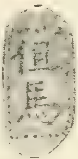












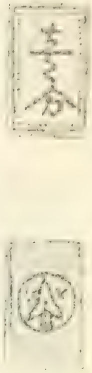
重サ七分

美作國一分銀

圖缺ク

重サ九分

澤潟一分銀



重サ一匁

南鐐一分



重サ一匁

袋一分銀



重サ七分

桐一分銀



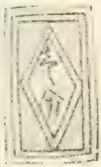
重サ九分、一匁

菊桐南鐐



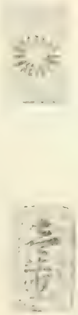
重サ一匁

銀一分



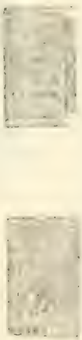
重サ一匁

菊一分銀



重サ六分

寶一分銀



重サ九分

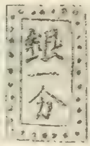
青字銀



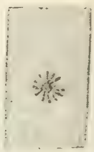
重サ一匁八分
一匁

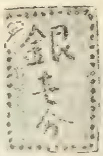
銀一分





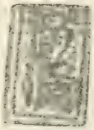
重サ一匁一分





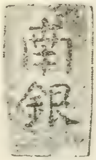


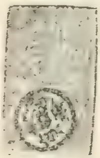
南鐐一分





重サ一匁





和同一分銀



梅村銀



重サ八分

銀一分





重サ九分、一匁





以下十五品金銀圖品ニ載ス
皆類シテ銀一分ト云フ
但シ重サ六分ヨリ一匁ニ
到ル、略レ之







花降一歩



重サ八分

重サ一匁

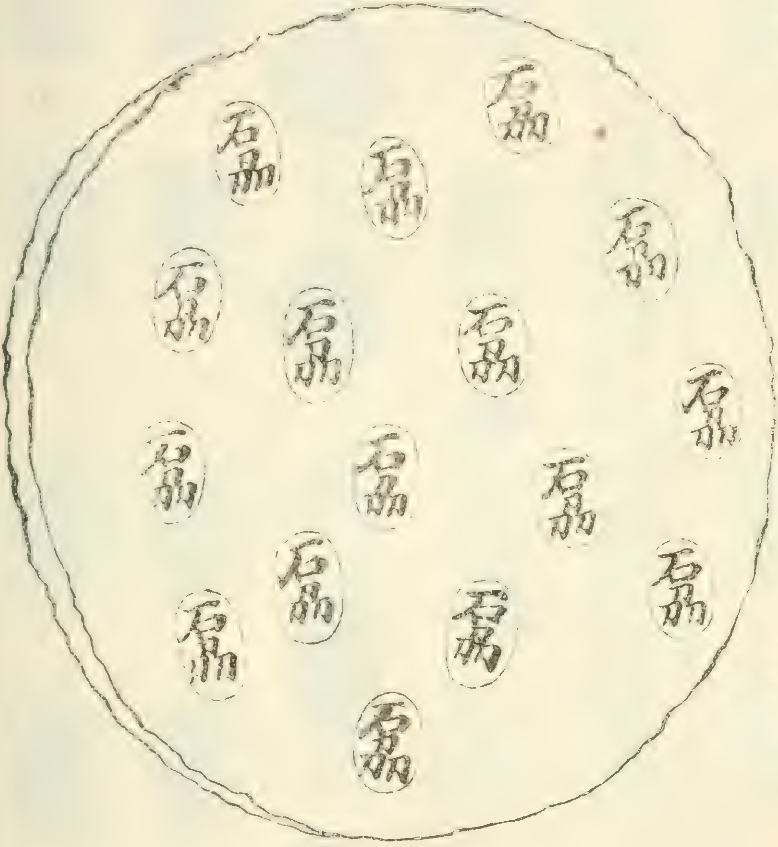
矮鷄銀



重サ四分五厘

昆陽漫錄云、某家交趾銀アリ、我國是ヲ鳥銀ト云、重サ四分五厘
結毦錄云、京師室町休齋ノ途子ニ養林庵ト云尼寺アリ、コノ矮鷄銀ヲ數百粒アリタル由、其後僅ニ十二三粒殘レリト、此寺加藤淸正朝鮮征伐ノ時ノ旗トテアリ、則淸正ノ菩提所ナル由ナリ
或書ニ云、此銀ハ朝鮮國ノ銀ナリ
將軍家御上洛ノトキ、京町人名主ヘ一ツ宛被レ下候ト云、否不レ知
此以下、黄白誌・金銀譜等ニ出ル、灰吹切遣ヒノ品目、古書ノ儘玆ニ出ス

石州御藏灰吹銀



重サ不定

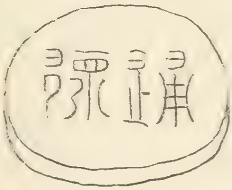
金銀圖錄ニ出

佐渡吹辛銀

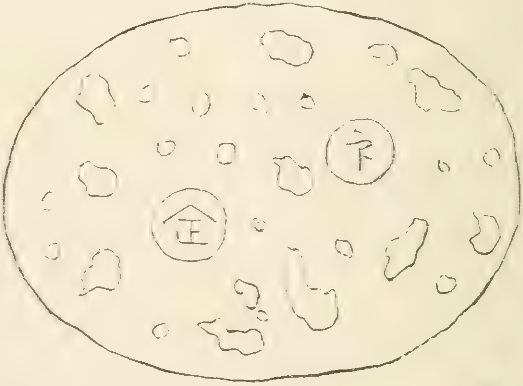
表



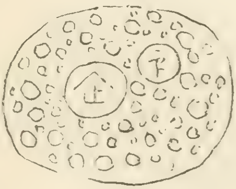
同 表



裏



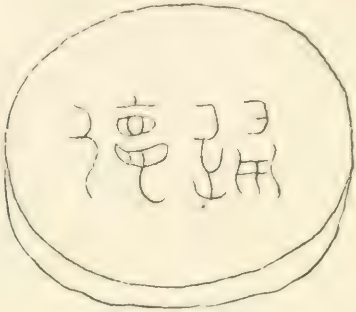
裏



重サ五百四十目

同

表

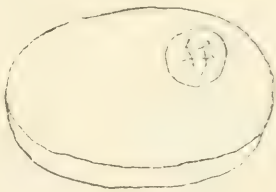


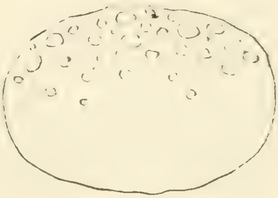
裏



重サ八十一匁

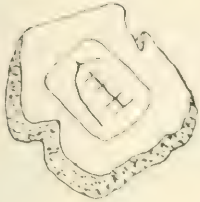
同古キ方





重サ十匁又廿匁

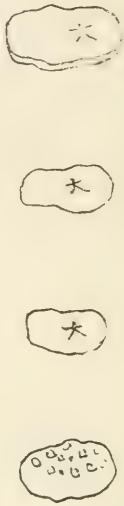
秋田銀



同上



秋田打豆銀 大豆ヲ打平メタル如シ、故ニ云



同佐竹銀

表



裏

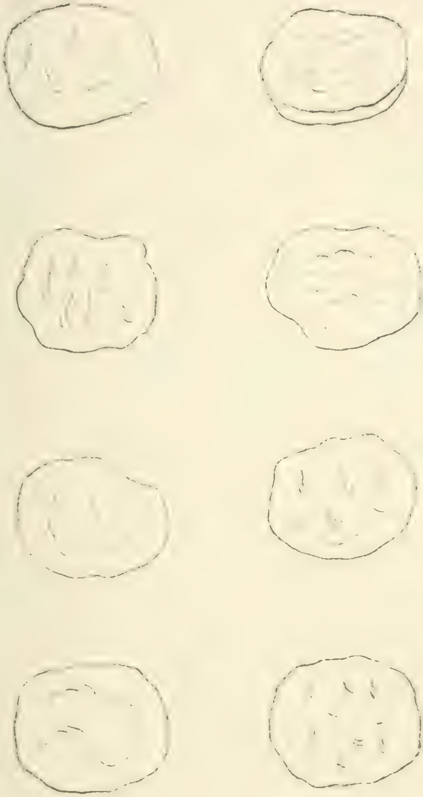


佐竹　竹吹ト云切遣



同小竹吹

表　裏



會津花降

表



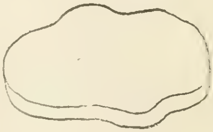
裏



火箸銀ト云、花降ノ如クニ、火箸ニテ花チ付タルヨリ火箸銀ト云

會津カフリ銀

表



裏



但外ヘソリ有故カフリ銀ト云

仙臺、芦尾銀

表



裏



重サ二百六十目

飛驒山銀

表



裏



坊主吹、又フスマ吹ト云

美濃山銀

表



裏

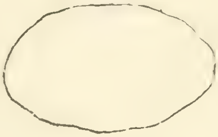


郡上銀

表



裏

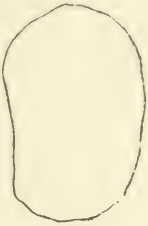


攝州、鬼城山

表



裏



同

表



裏

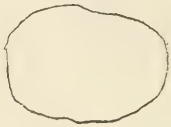


丹波 山野 江山

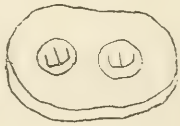
表



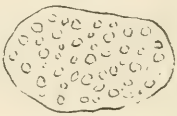
裏



表

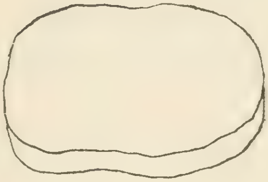


裏

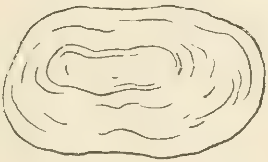


丹波、鯨浪

表

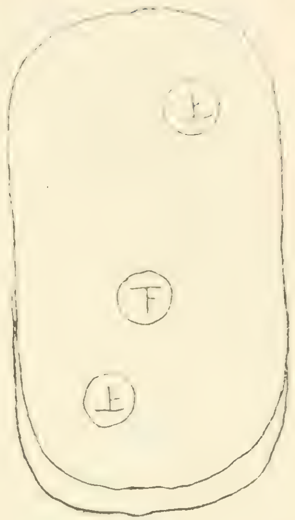


裏

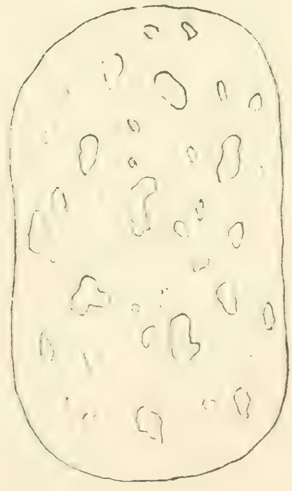


長州銀　御公用銀ト云、下銀ノ如クニテ少シ平メナリ

表



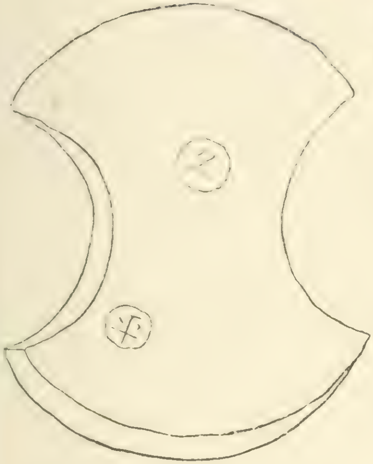
裏



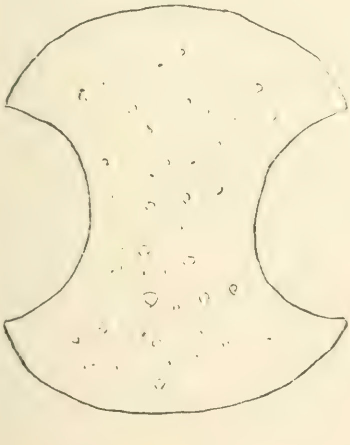
石目

筑前　博多銀委シク奥ニ記ス筈ナラン

表



裏

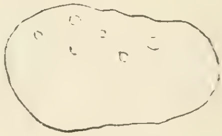


但馬　元但馬鬼ケ城ト云

表



裏



同　一町日ト云

表



裏



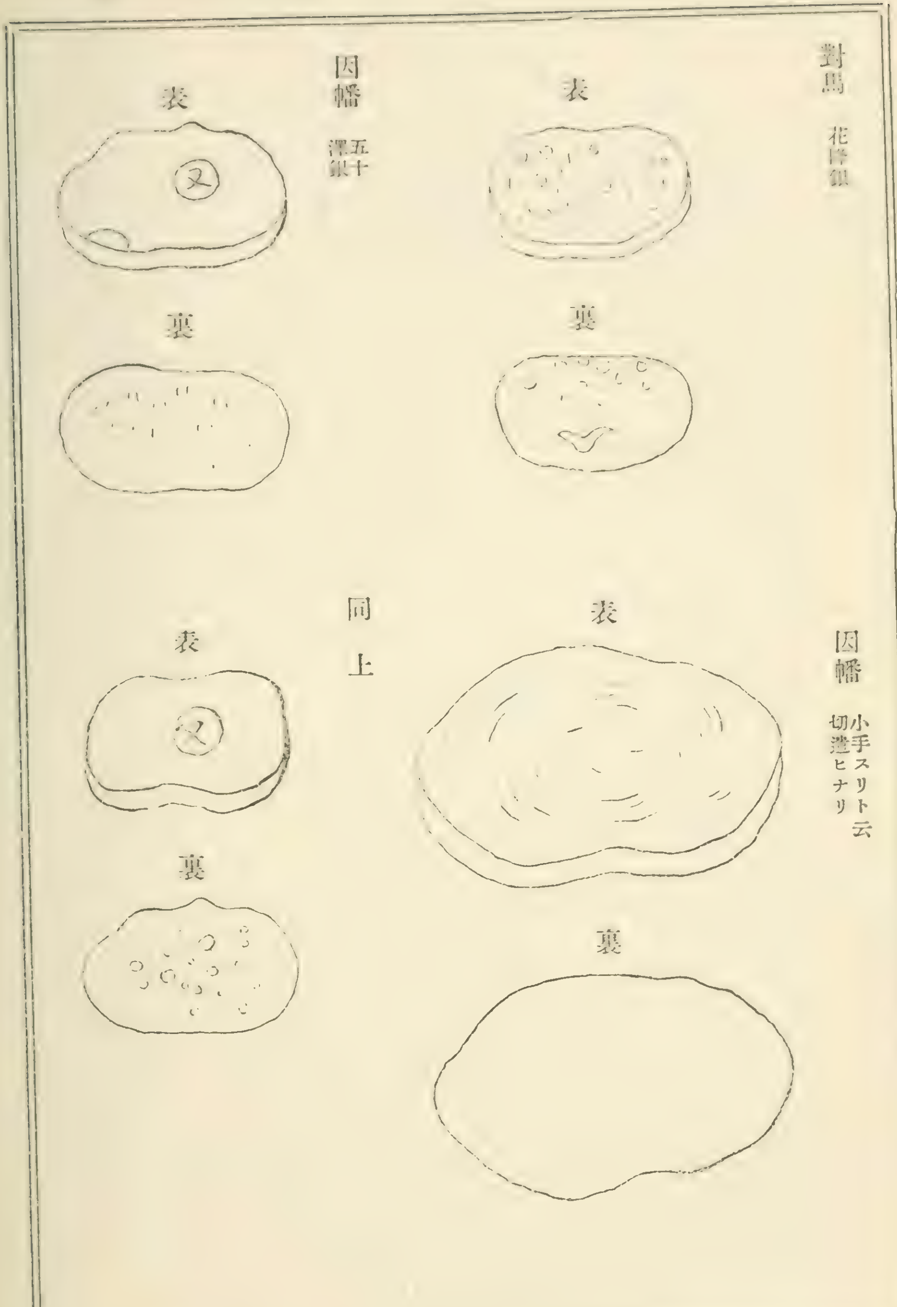
同　道伴吹ト云

表



裏




對馬 花降銀
表
裏
因幡 五十澤銀
表
裏
因幡 小手スリト云切遣ヒナリ
表
裏
同上
表
裏

同上

表



裏



南部

表



裏

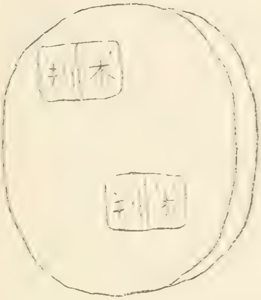


露銀



是陽漫錄ニ云、露銀ト云有ト聞ドモ、何國ニテ使ヒシヤ不レ知シニ或人云、元來津輕ニ花露銀(花銀トモ云ナリ)ト云有、位宜、形豆板銀ノ如クニシテ大小アリ、大ナルハ胡桃子ノ如クニシテ、上ハ圓、下ノ方平カナリ、上ノ圓キ中ニ罌粟子アルヒハ胡麻子ノ如クナルアルニヨリテ花露銀ト名ヅク、極印ノ有無ハ覺エズ、今モ通用スルヤ知ラズ、露銀ハ此コトナルベシ

米判銀 不知年



同裏

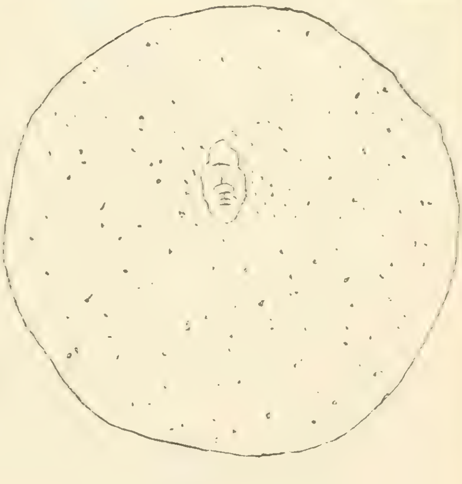


重サ十三匁六分

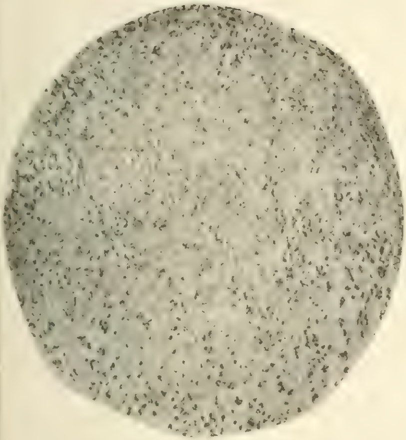
一寶



同裏

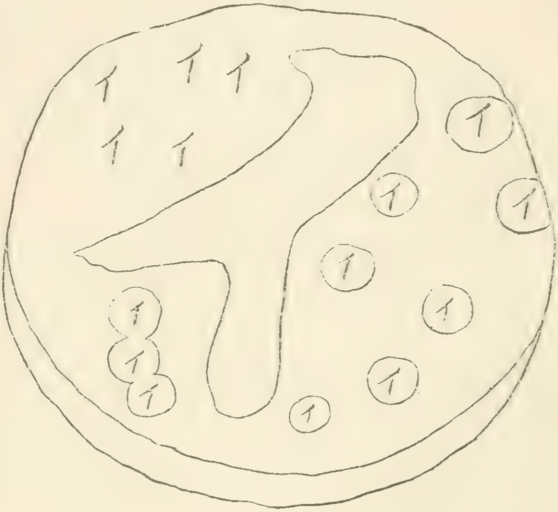


攝津國　多田銭銀　銀位四歩人



國不知

表



裏



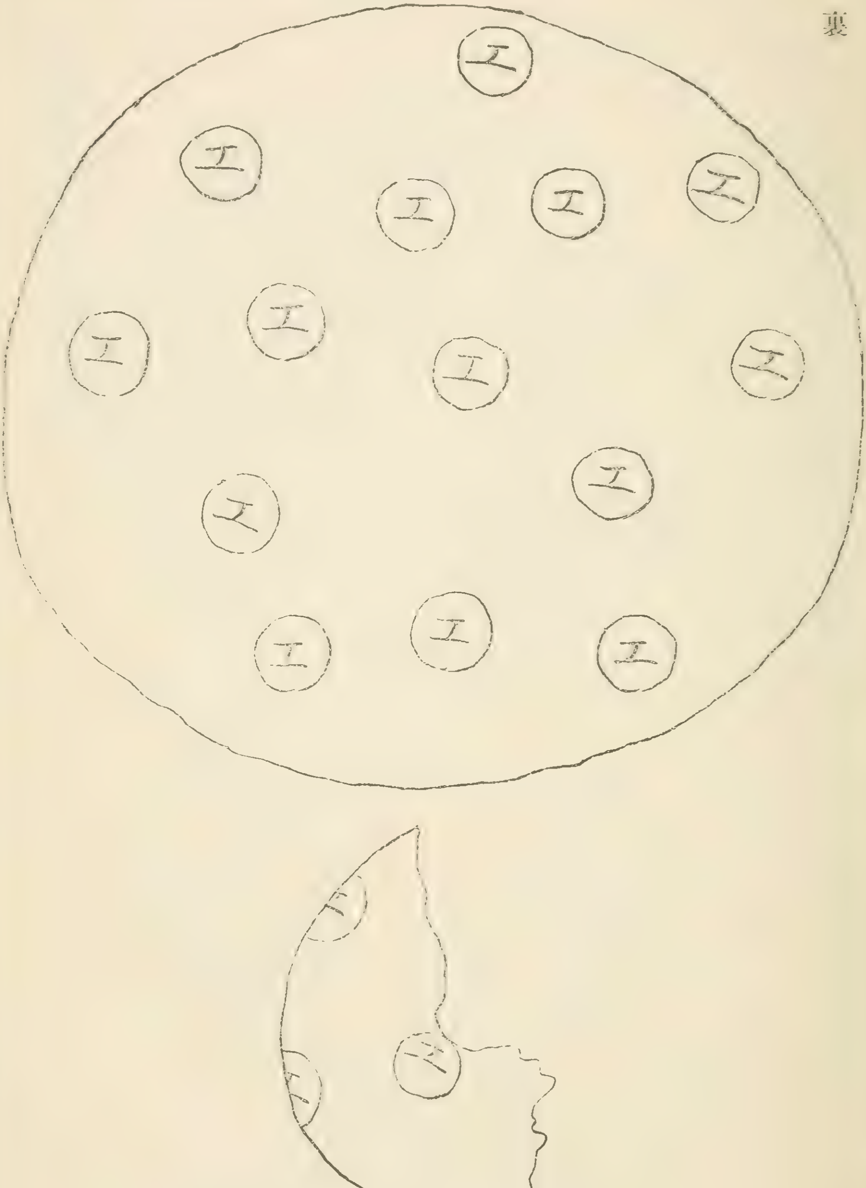
國不知

表



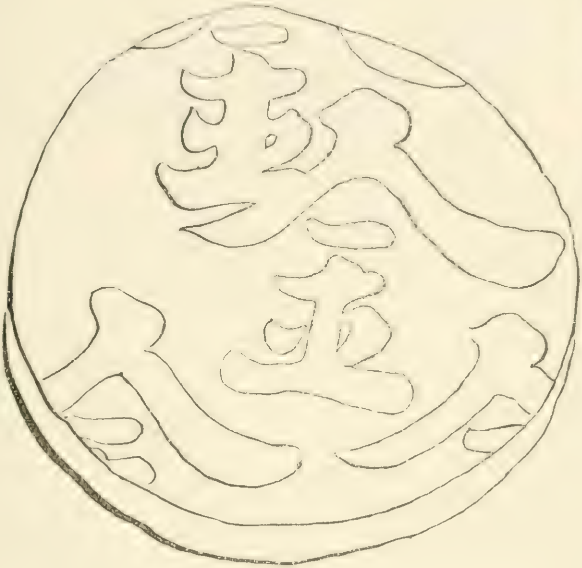
重サ二貫七八百目

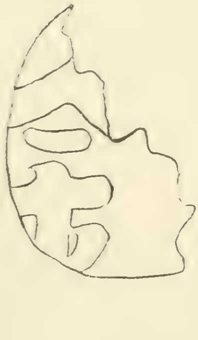
裏



太子銀泉州堺住人、太子屋彦治左衛門、切遣印今此家ニ所持 重サ四百六十目餘

表





裏





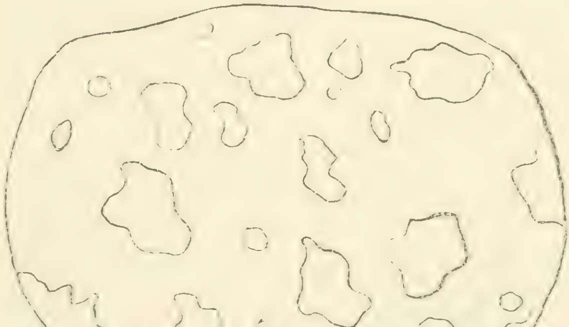
同

同所、太子屋重右衞門切遣極印

表



裏

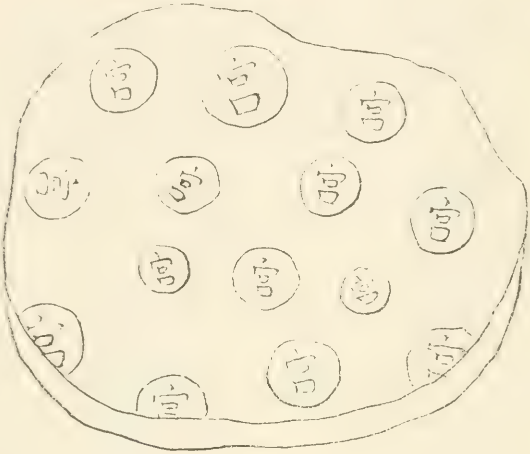


重サ四百六十目餘

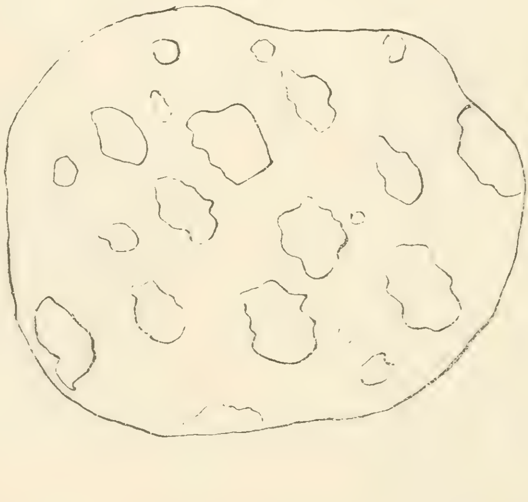
宮銀

同所ゝ宮崎三左衛門切遣極印

表

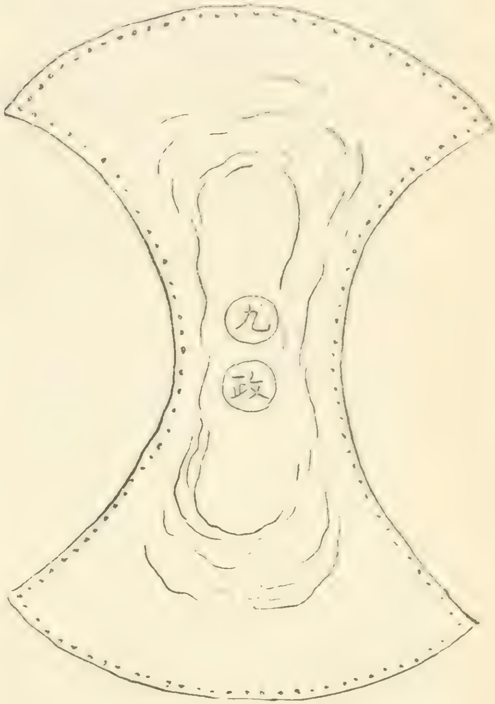


裏



重サ四百六十目餘

分銅銀



筑前福岡宗福寺ニアリシト云、重サ百二匁三分
昆陽漫錄ニ云、筑前銀又博多銀、形チ分銅ノ如ク、重サ百目ヨリ、三四百目迄有ト云フ銀ハ、是ナラン

舊記云、享保三戌年、筑前博多ニ一宇ノ寺アリ、或檀家一人ノ娘死ス則此寺ニ葬ル、其墓水邊ニ近ク、大雨ノ時ハ洪水墓ヲ浸ス故ニ、院主ニ乞テ改葬ス、依テ山上ヲ掘コト六七尺ニ至テ大石アリ、其石ノ下ニ大ナル壺アリ、内ニ金ニテ作タル鳳凰一ツ、其大サ卓ニスユル程ナリ、又金ニテ彫タル龍一ツ、其大サ貫目アリ、又金ノ環數三十餘、又金ノ分銅五百目以下大小其數十七、銀ノ分銅十六七アリ、依レ之其趣國主ヘ訴フ、然ル處評定ノ上墓地ヨリ出タルモノ故、其院主ヘ被レ下、則享保三年四月、右分銅ノ分京

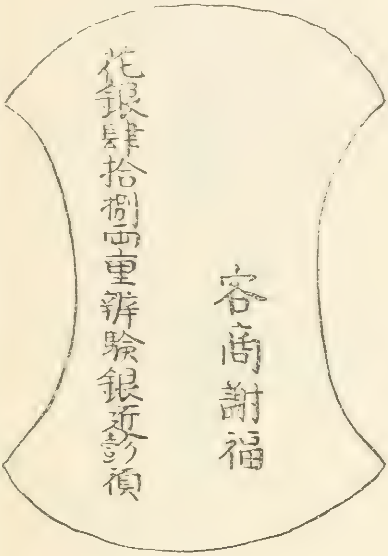
都へ持登リ、金銀座ニテ兩替ス

銀分銅



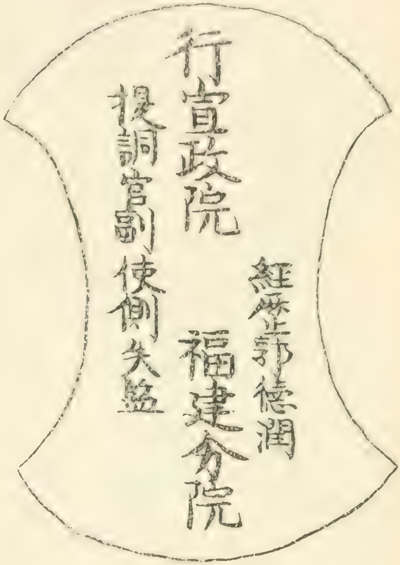
重サ百三十五匁二分
厚サ七歩ヨリ一寸位
長サ二寸五六七歩迄

同　大



重サ四百九十三匁位
厚サ九歩程
長サ四寸五六歩
右分銅皆正面凹ミアリ硯ノ如シ、全體ハスダチテ氷昆蒻ニ似タリ

金分銅

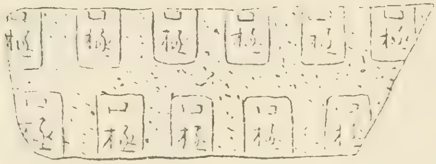


重サ四百九十八匁
厚サ
長サ

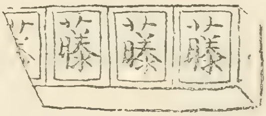
右銀、分銅貫八ツ、大ノ方三、小ノ方五、京都銀座ニテ見タリ、金ノ分銅ハ不レ見トアリ、又享保八卯年五月、博多或寺院ニテ、分銅灰吹銀二十六貫目、同金八十貫目掘出ス、此時モ右ノ例ニヨリテ、其寺僧ヘ被レ下

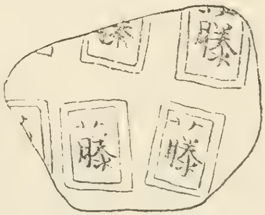
昆陽漫錄ニ云、博多銀ト云モ此類ニシテ、本邦ノ製ニテハ不レ可レ有歟、天正ヨリ慶長年マデニ、種々ノ形製ノ金銀數多アル故、後世ヤヽモスレバ臆說ヲ設ケ人ヲ惑ハス、ヨク鑑定スベシ、右金銀分銅ハ異國ノモノニテ、寶曆年舶來ノ元寶赤足ノ金銀ニ類セシモノナルベシ、今印子金トテ、玩賞スルモノ皆其類ナリ

切遣銀不知



藤枝切遣





宮崎幸麿
小西武治
校

大正五年八月十四日印刷
大正五年八月十七日發行

日本經濟叢書 卷二十七

非賣品

編者 瀧本誠一

發行者 佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者 中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事 高木範之丞
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the twenty-seventh volume

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXVII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1916.